山梨県埋蔵文化財センター調査報告第3集

石橋条里制遺構
蔵福遺跡
侭ノ下遺跡

山梨県中央自動車道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1984・3

山梨県教育委員会
日本道路公団

石橋条里制遺構・蔵福遺跡・侭ノ下遺跡正誤表

ページ、行	誤	正
凡　例　3	ＳＢ－住居址及び建物址	掘立柱建物址
挿図目次第２図	…蔵福遺跡侭ノ下遺跡付近図	…蔵福遺跡付近図
捜図目次第36図	柱穴間実測図	掘立柱建物址群実測図
図版目次 石橋条里第Ⅲ地点図版１	石橋条里制遺構第３地点発掘前全景 石橋条里制遺構第３地点発掘前全景	Ⅲ Ⅲ　後
同上図版２	１号住居址住居址内炭火物出土状況	１号住居址　住居址内炭化物出土状況
１Ｐ　１行目	436番地？442番地の１	436番地・442番地の１
14P	ページの数字16	14
17P 下から３行目	１形	円形
19P 第11図タイトル	２号掘立柱建物址柱根実測図	２号掘立柱建物址柱根間実測図
41P 第36図タイトル	柱穴間実測図	掘立柱建物址群実測図
88P 上から１行目	１号、２号溝状遺構	１号・２号溝状遺構
88P 第80図地層説明	Ⅱc 暗褐色土（粘土）＿＿＿	Ⅱc 暗褐色土（粘土）、溝掘込面
99P 上から１行目	石橋条里制遺構第Ⅱ点	石橋条里制遺構第Ⅱ地点
99P 下から６行目	石橋条里制遺構第Ⅰ点	石橋条里制遺構第Ⅰ地点
173P 下から10行目	縄文時代中期	縄文時代前期
蔵福 図版８の説明	番号はＰ27の資料№と同一	第３表
蔵福 図版９の説明	番号はＰ27の資料№と同一	第３表

石橋条里制遺構
蔵福遺跡
侭ノ下遺跡

山梨県中央自動車道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

1984・3

山梨県教育委員会
日本道路公団

序

山梨県内における中央自動車道建設に伴う事前発掘は、1966年度の富士吉田線大月市宮谷遺跡の発掘に始まり、1980・81両年度の西宮線一宮町・勝沼町地内釈迦堂遺跡の発掘をもって終了いたしました。1982年11月には中央道西宮線が全線にわたって開通いたしましたことは、なお記憶に新たなところであります。この間、発掘した遺跡数は43、出土遺物は無慮数10万点の多きに達しております。これらにつきましては、当埋蔵文化財センターにおいて総力を挙げて鋭意整理を加え、完了したものから逐次調査報告書を刊行して参っております。本年度は東八代郡八代町・境川村地内の石橋条里制遺構・蔵福遺跡・侭の下遺跡の3遺跡と、一宮町地内の豆塚・東新居の両遺跡とをそれぞれ一冊ずつに合本して刊行しようというもので、本書は前者の3遺跡を合冊したものであります。

石橋条里制遺構は3地点で調査され、平安時代中期・後期を中心に、住居址・掘立柱建物址・井戸址・堀状遺構・条里型地割線等の遺構、土師器・須恵器・多数の木製品等の遺物が検出され、条里制施行期の集落の状態を推定する資料等が得られました。次に蔵福遺跡は中世中期から後期にかけての遺跡で、寺院址とする伝誦があり、掘立柱建物址・配石・溝群等の遺構、土師質土器・陶磁器・仏具等の遺物が発見されました。また侭ノ下遺跡は古墳時代前期の遺跡で、住居址・溝・土壙等の遺構が発見され、土壙から木製品、溝からは投棄されたと思われる土師器が出土いたしました。以上3遺跡ともそれぞれに特色をもち、今後の研究に資する点が少なくないと信じます。

末筆ながら、終始いろいろとお世話いただいた関係機関各位、直接発掘調査に当たられた皆様方に改めて厚く御礼申し上げます。

1984年3月31日

山梨県埋蔵文化財センター

所長 磯　貝　正　義

例　　言

1．本書は中央自動車道西宮線建設工事に伴う、石橋条里制遺構第Ⅰ・第Ⅱ・第Ⅲ地点、蔵福遺跡、保ノ下遺跡の調査報告書である。

2．発掘調査は県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて実施したものである。

3．発掘調査は、森和敏、土橋久雄が担当し、折井忠義、渡辺礼一、雨宮正樹が調査員として行った。

4．本書の執筆は森和敏、雨宮正樹、渡辺礼一（保ノ下遺跡）が分担した。

5．本書の作成、資料整理は榎本勝、宮沢まさみ、竜沢みち子、山本真喜子、小林たつ子、古屋房子、相沢正子、池谷絹子、古川一也、横小路豊、山口富士男、小林高広、木之瀬久司、丸山哲也、丸山勉、写真撮影は森和敏、小島重人、丸山哲也が当った。

6．石橋条里制遺構第Ⅰ地点、蔵福遺跡、保ノ下遺跡出土材の樹種の識別鑑定は、山梨県林業試検場・主任研究員・渡辺利一氏と技師・藤平登留氏に、種核の識別鑑定は山梨県立女子短期大学教授・理学博士・市川三次氏に依頼した。記して謝意を表わす次第である。

凡　　例

1．本書における遺構番号は発掘調査時に付されたものを使用し、資料整理時に番号を欠番としたものもある。

2．地層図の斜線は未発掘部分である。

3．挿図の遺構平面図、実測図に使用している記号は次のとおりである。
ＳＧＳ―集石列、Ｓ―石、ＳＳＲ―列石、ＳＢ―住居址及び建物址、ＳＥ―井戸状遺構、ＳＲ―道、ＳＤ―溝（水路）、ＳＸ―不明遺構、土―土器、土器番号、土群―土器群、石―石器、木―木器、Po―柱根番号、Ｐ（pit）―柱穴番号、ＴＰ―トレンチ（試掘）列石実測図の実線は崩れた石、破線は積み直しを表わす。

4．遺物実測図の（　）内番号は遺構平面図の遺物番号である。

目　　次

Ⅰ　石橋条里制遺構

序　章

石橋条里制遺構第Ⅰ地点

第　1　章　遺跡の位置と環境……1

第　1　節　位　　置……1

第　2　節　環　　境……1

イ　自　然　環　境……1

ロ　歴　史　的　環　境……2

第　2　章　調　査　の　経　過……5

第　3　章　層　　序……6

第　4　章　遺　構　と　遺　物……12

第　1　節　奈良・平安時代の遺構と遺物……13

掘立柱建物址と遺物　竪穴式住居址と遺物

配石遺構と遺物　列石と遺物　井戸状遺構と遺物

土壙と遺物　杭列

第　2　節　中・近世の遺構と遺物……88

溝状遺構と遺物　列石と遺物　井戸状遺構　集石列

第　5　章　ま　と　め……97

石橋条里制遺構第Ⅱ地点

第　1　章　遺跡の位置と環境……99

第　1　節　位　　置……99

第　2　節　環　　境……99

イ　自　然　環　境……99

ロ　歴　史　的　環　境……99

第　2　章　調　査　の　経　過……99

第　3　章　層　　序……100

第　4　章　遺　構　と　遺　物……103

埋石堀状遺構と遺物　住居址と遺物　埋石遺構と遺物

配石遺構と遺物　列石と遺物　その他の遺構と遺物

第　5　章　ま　と　め……140

石橋条里制遺構第Ⅲ地点

第　1　章　遺跡の位置と環境……141

第　1　節　位　　置……141

第　2　節　環　　境……141

イ　自　然　環　境……141

ロ　歴史的環境……141
第　2　章　調査の経過……144
第　3　章　層　　序……145
第　1　節　リモート・センシングによる石橋条里制遺構に関する報告書……146
第　2　節　調査地区の層序……146
第　4　章　遺構と遺物……146
道と潅漑用水路　杭列　水田　住居址と遺物
列石　その他の遺構・遺物
第　5　章　石橋条里制遺構の坪割りについて……161
第　6　章　ま　と　め……165
II　蔵　福　遺　跡
第　1　章　遺跡の位置と環境……167
第　1　節　位　　置……167
第　2　節　環　　境……167
イ　自然環境……167
ロ　歴史的環境……168
第　2　章　調査の経過……169
第　3　章　層　　序……171
第　4　章　中・近世の遺構と遺物……174
掘立柱建物址と遺物
土壙　配石　列石　集石列　溝と遺物
第　5　章　増福山利最寺の関係資料について……190
第　6　章　ま　と　め……194
III　侭ノ下遺跡
第　1　章　遺跡の位置と環境……196
第　1　節　位　　置……196
第　2　節　環　　境……196
イ　自然環境……196
ロ　歴史的環境……197
第　2　章　調査の経過……198
第　3　章　層　　序……200
第　4　章　遺構と遺物……201
第　1　節　弥生時代の遺構と遺物……203
1号土壙　6号溝　その他
第　2　節　古墳時代の遺構と遺物……204
住居址と遺物　掘立柱建物址　溝と遺物　土壙と遺物　柱穴
第　3　節　中・近世の遺構と遺物……219
第　5　章　ま　と　め……220

挿 図 目 次

第１図　石橋条里制遺構（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地点）蔵福遺跡、保ノ下遺跡位置図

第２図　石橋条里制遺構（第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ地点）蔵福遺跡、保ノ下遺跡付近図

Ⅰ　石橋条里制遺構

石橋条里制遺構第Ⅰ地点

第３図　石橋条里第Ⅰ地点グリッド配置図…… 4
第４図　トレンチ地層図…… 8
第５図　トレンチ地層図…… 9
第６図　トレンチ地層図……10
第７図　トレンチ地層図……11
第８図　試掘地層図……12
第９図　石橋条里制遺構第Ⅰ地点全体図……15
第10図　２号掘立柱建物址実測図……18
第11図　２号掘立柱建物址柱根間実測図……19
第12図　２号掘立柱建物址出土遺物実測図……20
第13図　２号掘立柱建物址柱根実測図……21
第14図　２号掘立柱建物址柱根実測図……22
第15図　５号掘立柱建物址実測図……23
第16図　５号掘立柱建物址柱穴間実測図……24
第17図　９号掘立柱建物址実測図……25
第18図　９号掘立柱建物址柱穴間実測図……25
第19図　10号掘立柱建物址実測図……26
第20図　10号掘立柱建物址柱穴間実測図……26
第21図　11号掘立柱建物址実測図……27
第22図　11号掘立柱建物址柱穴間実測図……28
第23図　12号掘立柱建物址実測図……28
第24図　12号掘立柱建物址柱穴間実測図……30
第25図　４号掘立柱建物址実測図……30～31
第26図　４号掘立柱建物址柱間実測図……33
第27図　４号10号掘立柱建物址出土遺物実測図…34
第28図　４号掘立柱建物址出土木製品実測図…35
第29図　４号掘立柱建物址柱根実測図……36
第30図　４号掘立柱建物址柱根実測図……37
第31図　４号掘立柱建物址柱根実測図……38
第32図　13号掘立柱建物址実測図……38
第33図　13号掘立柱建物址柱穴間実測図……39
第34図　14号掘立柱建物址実測図……39
第35図　14号掘立柱建物址柱穴間実測図……40
第36図　柱穴間実測図……41
第37図　掘立柱建物址模式図……42
第38図　掘立柱建物址模式図……43
第39図　グリッド出土柱根実測図……43
第40図　グリッド出土柱根実測図……44
第41図　１号住居址実測図……46
第42図　１号住居址出土遺物実測図……47
第43図　１号住居址出土遺物実測図……48
第44図　１号住居址出土遺物実測図……49
第45図　３号住居址実測図……50
第46図　３号住居址出土遺物実測図……51
第47図　３号住居址出土遺物実測図……52
第48図　６号住居址実測図……53
第49図　６号住居址出土遺物実測図……53
第50図　７号住居址実測図……54
第51図　８号住居址実測図……54
第52図　７号住居址出土遺物実測図……55
第53図　８号住居址出土遺物実測図……56
第54図　２号配石実測図……56
第55図　３号配石実測図……57
第56図　４号配石実測図……57
第57図　５号配石実測図……57
第58図　５号配石出土遺物実測図……58
第59図　４号列石平面及び側面図……58
第60図　５号列石実測図……58
第61図　３号井戸状遺構実測図……59
第62図　３号井戸状遺構出土遺物実測図……60
第63図　３号井戸状遺構出土踏鋤実測図……60
第64図　３号井戸状遺構出土木製品実測図……61
第65図　４号井戸状遺構実測図……62
第66図　４号井戸状遺構出土木製品実測図……62

第67図　1号土壙実測図……63
第68図　1号土壙出土遺物実測図……63
第69図　3号土壙実測図……64
第70図　3号土壙出土遺物実測図……64
第71図　1・2号杭列実測図……64
第72図　杭 実 測 図……65
第73図　掘立柱建物付近出土遺物実測図……66
第74図　掘立柱建物付近出土遺物実測図……67
第75図　2号掘立柱建物付近出土遺物実測図…68
第76図　2号掘立柱建物付近出土遺物実測図…69
第77図　5号配石付近出土遺物実測図……70
第78図　5号配石付近出土遺物実測図……71
第79図　4号列石付近出土遺物実測図……72
第80図　1号溝状遺構実測図……88
第81図　2号溝状遺構実測図……89
第82図　1号井戸状遺構実測図……90
第83図　列石平面図及び側面図……91～92
第84図　列石平面図及び側面図……93～94
第85図　3号集石列実測図……95
第86図　4号集石列実測図……95
第87図　中・近世遺構出土遺物実測図……96
第88図　73グリッド出土銭貨拓影……96

石橋条里制遺構第Ⅱ地点

第1図　4号トレンチ地層図…… 100
第2図　6号トレンチ地層図…… 101
第3図　7号トレンチ地層図…… 102
第4図　3号トレンチ地層図…… 103
第5図　5号トレンチ地層図…… 103
第6図　石橋条里制遺構第Ⅱ地点全体図…… 105
第7図　9号埋石堀状遺構出土遺物実測図… 104
第8図　11号埋石堀状遺構出土遺物実測図… 104
第9図　1号・4号住居址実測図…… 107
第10図　1号住居址出土遺物実測図…… 108
第11図　2号住居址及び1号配石実測図…… 109
第12図　2号住居址かまど実測図…… 109
第13図　2号住居址出土遺物実測図…… 111
第14図　3・6号住居址実測図…… 112
第15図　3号住居址かまど実測図…… 112
第16図　3号住居址出土遺物実測図…… 112
第17図　3号住居址出土遺物実測図…… 113
第18図　5号住居址実測図…… 114
第19図　5号住居址かまど実測図…… 114
第20図　5号住居址出土遺物実測図…… 115
第21図　6号住居址出土遺物実測図…… 116
第22図　7号住居址実測図…… 117
第23図　7号住居址出土遺物実測図…… 118
第24図　8号かまど実測図…… 118
第25図　8号かまど出土遺物実測図…… 119
第26図　9・10号かまど実測図…… 126
第27図　9号かまど出土遺物実測図…… 120
第28図　10号かまど出土遺物実測図…… 121
第29図　11号かまど実測図…… 121
第30図　11号かまど出土遺物実測図…… 121
第31図　11号かまど出土遺物実測図…… 122
第32図　2号埋石遺構出土遺物実測図…… 122
第33図　1号配石出土遺物実測図…… 123
第34図　2号配石実測図…… 123
第35図　2号配石出土遺物実測図…… 124
第36図　5号配石実測図…… 124
第37図　7号配石実測図…… 125
第38図　7号配石出土遺物実測図…… 125
第39図　1号列石実測図…… 126
第40図　1号列石出土遺物実測図…… 126
第41図　2号列石実測図…… 126
第42図　3号列石実測図…… 127
第43図　4号列石実測図…… 127
第44図　4号列石出土遺物実測図…… 127
第45図　2・7号配石付近出土遺物実測図… 128
第46図　グリッド出土遺物実測図…… 129
第47図　1号列石付近出土遺物実測図…… 130
第48図　9号埋石堀状遺構出土遺物実測図… 131
第49図　磚状遺物実測図…… 131

石橋条里制遺構第Ⅲ地点

第1図　石橋条里制遺構第Ⅲ地点遺構実測図…別図
第2図　石橋条里制遺構第Ⅲ地点遺構実測図…別図
第3図　石橋条里制遺構第Ⅲ地点遺構全体図・147
第4図　分間図（古水田復元）……148
第5図　4号トレンチ平面図及び地層図……149
第6図　4号トレンチ付近実測図……149
第7図　7号トレンチ平面図及び地層図……150
第8図　8号トレンチ平面図及び地層図……151
第9図　9号トレンチ平面図及び地層図……152
第10図　2号トレンチ平面図及び地層図……152
第11図　1号トレンチ地層図……153
第12図　10号トレンチ平面図及び地層図……154
第13図　11号トレンチ平面図及び地層図……154
第14図　5号トレンチ平面図及び地層図……155
第15図　3号トレンチ地層図……155
第16図　6号トレンチ平面図及び地層図……156
第17図　出土遺物実測図……159
第18図　出土遺物実測図（近世）……160
第19図　出土遺物実測図（近世）……161
第20図　4号水路覆土出土銭貨拓影……161
第21図　石橋条里制遺構坪命名図……161
第22図　中央道中心杭No.463～No.465付近地層図・162
第23図　AA′横断平面等高線図及び土壌含水比分布図……164
第24図　AA′横断断面土壌堆積模式図……164
第25図　BB′CC′横断平面等高線図及び土壌含水比分布図……164
第26図　BB′CC′横断断面土壌堆積模式図・164

II　蔵　福　遺　跡

第1図　蔵福遺跡グリッド配置図……170
第2図　7号・8号・9号試掘地層図……171
第3図　1号・2号・3号・4号・6号試掘地層図…172
第4図　蔵福遺構全体図……175
第5図　柱根実測図……177
第6図　73グリッド出土遺物実測図……178
第7図　51グリッド出土遺物実測図……178
第8図　52グリッド出土遺物実測図……178
第9図　62グリッド出土遺物実測図……179
第10図　63グリッド出土遺物実測図……179
第11図　73グリッド出土遺物実測図……179
第12図　1号配石実測図……180
第13図　1号配石、61グリッド出土遺物実測図・180
第14図　1号列石出土遺物実測図……181
第15図　69号溝出土遺物実測図……182
第16図　64号溝出土遺物実測図……182
第17図　46溝出土遺物実測図……182
第18図　74グリッド出土遺物実測図……183
第19図　121グリッド出土遺物実測図……183
第20図　111グリッド出土遺物実測図……183
第21図　67号溝遺物出土状況図……184
第22図　67号溝出土遺物実測図……184
第23図　51グリッド出土遺物実測図……184
第24図　41号溝出土遺物実測図……184
第25図　59号溝出土遺物実測図……184
第26図　11号溝出土遺物実測図……185
第27図　12号溝出土遺物実測図……185
第28図　42グリッド出土遺物実測図……186
第29図　83グリッド出土遺物実測図……186
第30図　84グリッド出土遺物実測図……186
第31図　84グリッド出土遺物実測図……186
第32図　123グリッド出土遺物実測図……186
第33図　102グリッド出土遺物実測図……186
第34図　2号溝出土遺物実測図……187
第35図　67号溝出土遺物実測図……187
第36図　83グリッド出土遺物実測図……187
第37図　62グリッド出土遺物実測図……187
第38図　鉄製品実測図……187
第39図　砥石実測図……188
第40図　銭貨拓影……188
第41図　銭貨拓影……189
第42図　41・42グリッド平面図……別図

第43図　51・52グリッド平面図……別図
第44図　61・62グリッド平面図……別図
第45図　63・64グリッド平面図……別図
第46図　71・72グリッド平面図……別図
第47図　73・74グリッド平面図……別図
第48図　83・84グリッド平面図……別図

Ⅲ　侭ノ下遺跡

第１図　侭ノ下遺跡付近図……195
第２図　侭ノ下遺跡グリッド配置図……199
第３図　14号試掘坑地層図……200
第４図　18号試掘坑地層図……201
第５図　24号試掘坑地層図……201
第６図　侭ノ下遺跡遺構全体図……202
第７図　１号土壙発掘段階別実測図……203
第８図　１号土壙出土遺物実測図……203
第９図　６号溝出土遺物実測図……204
第10図　石鏃実測図……204
第11図　１号住居址出土遺物実測図……205
第12図　１号住居址出土遺物実測図……205
第13図　２号掘立柱建物址実測図……206
第14図　３号溝出土遺物実測図……207
第15図　４号溝出土遺物実測図……207
第16図　４号溝出土遺物実測図……207
第17図　６号溝出土遺物実測図……207
第18図　５号溝出土遺物実測図……208
第19図　１号土壙出土遺物実測図……209
第20図　１号土壙出土遺物実測図……210
第21図　１号土壙出土遺物実測図……211
第22図　２号土壙出土遺物実測図……212
第23図　３号土壙実測図……212
第24図　３号土壙出土遺物実測図……212
第25図　３号土壙出土木器実測図……213
第26図　４号土壙実測図……213
第27図　４号土壙出土遺物実測図……213
第28図　５号土壙出土遺物実測図……213
第29図　掘立柱建物址付近出土遺物実測図……214
第30図　１号井戸状遺構実測図……219
第31図　銭貨拓影……219
第32図　２Ａ・２Ｂグリッド平面図……別図
第33図　７Ａ・７Ｂグリッド平面図……別図
第34図　８Ａ・８Ｂグリッド平面図……別図
第35図　９Ａ・９Ｂグリッド平面図……別図

図 版 目 次

Ⅰ　石橋条里制遺構

石橋条里制遺構第Ⅰ地点

図版１　全景

図版２　63―４Ｃグリッド試掘セクション
発掘参加者

図版３　２号掘立柱建物址柱穴断面

図版４　４号掘立柱建物址　柱穴断面

図版５　４号掘立柱建物址柱穴断面

図版６　１号住居址　３号住居址

図版７　柱穴断面

図版８　柱穴断面　１号住居址かまど
２号配石　３号配石　４号配石

図版９　５号配石①②　周囲　４号列石
５号列石

図版10　３号井戸状遺構遺物出土状況

図版11　４号井戸状遺構遺物出土状況

図版12　１号土壙　１号土壙出土炭火米

図版13　１号・２号杭列　紡錘車と竹杭　竹杭
１号溝状遺構　２号溝状遺構　62グリッド土器群

図版14　１号列石　６号列石　７号列石　８号列石　９号列石　10号列石

図版15　４号集石列　１号井戸状遺構　２号井戸状遺構　２号井戸内側石積状況

図版16　２号・４号掘立柱建物址・１号住居址出土遺物

図版17　１号、３号、７号、８号住居址、５号配石出土遺物

図版18　３号井戸状遺構　その他出土遺物

図版19　２号掘立柱建物址柱根

図版20　２号掘立柱建物址柱根

図版21　４号掘立柱建物址柱根

図版22　４号掘立柱建物址柱根

図版23　柱根

図版24　柱根　グリッド出土木製品　１号杭列

図版25　２号杭列、柱、礎板

図版26　３号、４号井戸状遺構出土遺物

図版27　井戸状遺構内出土木製品

図版28　４号井戸状遺構出土遺物
グリッド出土銭貨・種核

図版29　植物質遺存体〔顕微鏡写真〕

図版30　植物質遺存体〔顕微鏡写真〕

石橋条里制遺構第Ⅱ地点

図版１　石橋条里制遺構第Ⅱ地点全景
８号堀状埋石遺構
９号堀状埋石遺構
11号堀状埋石遺構

図版２　１号・４号住居址　２号住居址

図版３　３号・６号住居址　５号住居址

図版４　２号埋石遺構　２号埋石遺構断面

図版５　７号住居址　２号列石　３号列石
４号列石

図版６　①２号住かまど　③５号住内８号かまど
②３号住かまど　④３号住内９号かまど
⑤３号住内11号かまど　⑥２号配石
⑦５号配石　⑧７号配石

図版７　住居址内出土遺物

図版８　住居址・その他出土遺物

石橋条里制遺構第Ⅲ地点

図版１　石橋条里制遺構第３地点発掘前全景
石橋条里制遺構第３地点発掘前全景

図版２　南方より１号溝を望む　１号住居址住居址内炭火物出土状況

図版３　１号溝にかかる暗渠　１号溝と杭列

図版４　４号溝附近　４号溝

図版５　２号列石付近　３号列石とＳＸ―１・２

図版６　出土遺物（中・近世の遺物）
紡錘車　４号溝出土古銭

II　蔵　福　遺　跡

図版１　蔵福遺跡全景　９号試掘セクション
図版２　全景西方より　全景東方より
図版３　51グリッド・62グリッド付近
　　63グリッド・73グリッド付近
図版４　１号集石列．２号集石列
　　１号列石　柱穴と柱　柱穴
図版５　１号配石　67号溝遺物出土状況
図版６　出土土器及び種核
図版７　出土木製品
図版８　植物質遺存体〔顕微鏡写真〕１
図版９　植物質遺存体〔顕微鏡写真〕２
図版10　出土銭貨

III　侭ノ下遺跡

図版１　儘ノ下遺跡全景　１号住居址
図版２　２号掘立柱建物址　６号溝
図版３　１号土壙土器出土状況(1)・(2)
図版４　１号土壙土器出土状況(3)　３号土壙遺物出土状況
図版５　１号溝　１号井戸状遺構
図版６　９ＡＧ炭化物をともなう焼土　出土銭貨と種核
図版７　出土遺物（土器）
図版８　出土遺物（土器）
図版９　出土遺物（石器）
図版10　１号土壙出土遺物（石器）
図版11　出土遺物（石器）
図版12　出土遺物（石器・木器）

表　目　次

I　石橋条里制遺構

石橋条里制遺構第Ｉ地点

第１表　２号掘立柱建物址柱穴・柱計測一覧表……19
第２表　５号掘立柱建物址　柱穴・柱計測一覧表……24
第３表　９号掘立柱建物址柱穴・柱計測一覧表…25
第４表　10号掘立柱建物址柱穴計測一覧表……26
第５表　11号掘立柱建物址柱穴計測一覧表……28
第６表　12号掘立柱建物址柱穴計測一覧表……29
第７表　４号掘立柱建物址柱穴計測一覧表……33
第８表　13号掘立柱建物址柱穴計測一覧表……39
第９表　14号掘立柱建物址柱穴計測一覧表……40
第10表　掘立柱建物址柱穴計測一覧表……45
第11表　出土遺物一覧表　……73
第12表　石橋条里制遺構第Ｉ地点出土の種核…85
第13表　石橋条里制遺構第Ｉ地点出土木材の識別結果　……97

石橋条里制遺構第II地点

第１表　出土遺物一覧表…… 133

石橋条里制遺構第III地点

第１表　出土遺物一覧表…… 159
第２表　リモート・センシングによる地層表… 163

II　蔵　福　遺　跡

第１表　掘立柱建物柱間距離表…… 174
第２表　蔵福遺跡出土の種核…… 192
第３表　蔵福遺跡出土木材の識別結果…… 193

III　侭ノ下遺跡

第１表　出土遺物一覧表……215
第２表　侭ノ下遺跡出土の種核……218

石橋条里制遺構

Ⅰ　石橋条里制遺構

序　　章

石橋条里制遺構は、本県の中央部で甲府盆地東南辺にあり、境川扇状地の扇央から扇端に広がっている。発掘地点は3ケ所に分かれ、それぞれその性格、内容は異なっている。

第Ⅰ地点は境川扇状地の扇央にあって、境川右岸の約150ｍの地点、すなわち三椚部落の西端に位置する。検出された遺構や遺物の時期は二時代にわたり性格、内容は、およそ次のとおりである。まず中・近世のものとして、溝群・石垣・列石・井戸などがあり、染付・黄瀬戸・天目などが出土した。溝群は細く浅いもので、その使用目的を明らかにする事は出来なかったが、水田の中に掘ったものであろうかと推測している。石垣・列石・井戸は屋敷の区域内にあったものかも知れない。次に奈良、平安時代のものとして、掘立柱建物址群、竪穴式住居址群、配石遺構群、集石列、列石、井戸状遺構、土壙、杭列などが検出された。これらからは日常雑器としての土師器、須恵器や祭祀関係遺物などが出土した。祭祀遺跡としての性格が強いと考えられる。また踏鋤をはじめ多数の木器や29本の柱根などが地下水位が高かったため腐らずに残っていた。これだけ多くの木製品が出土したのは本県では初めてである。

第Ⅱ地点は第Ⅰ地点より北150ｍに位置する。したがって地形や影観は同じである。ただ地下水位が第Ⅰ地点より低く1.2ｍくらいで浸透してくる事が異なる点である。ここからは平安時代後期の遺構と考えられる埋石堀状遺構に囲まれた中に、住居址群、配石群、埋石遺構などを検出した。

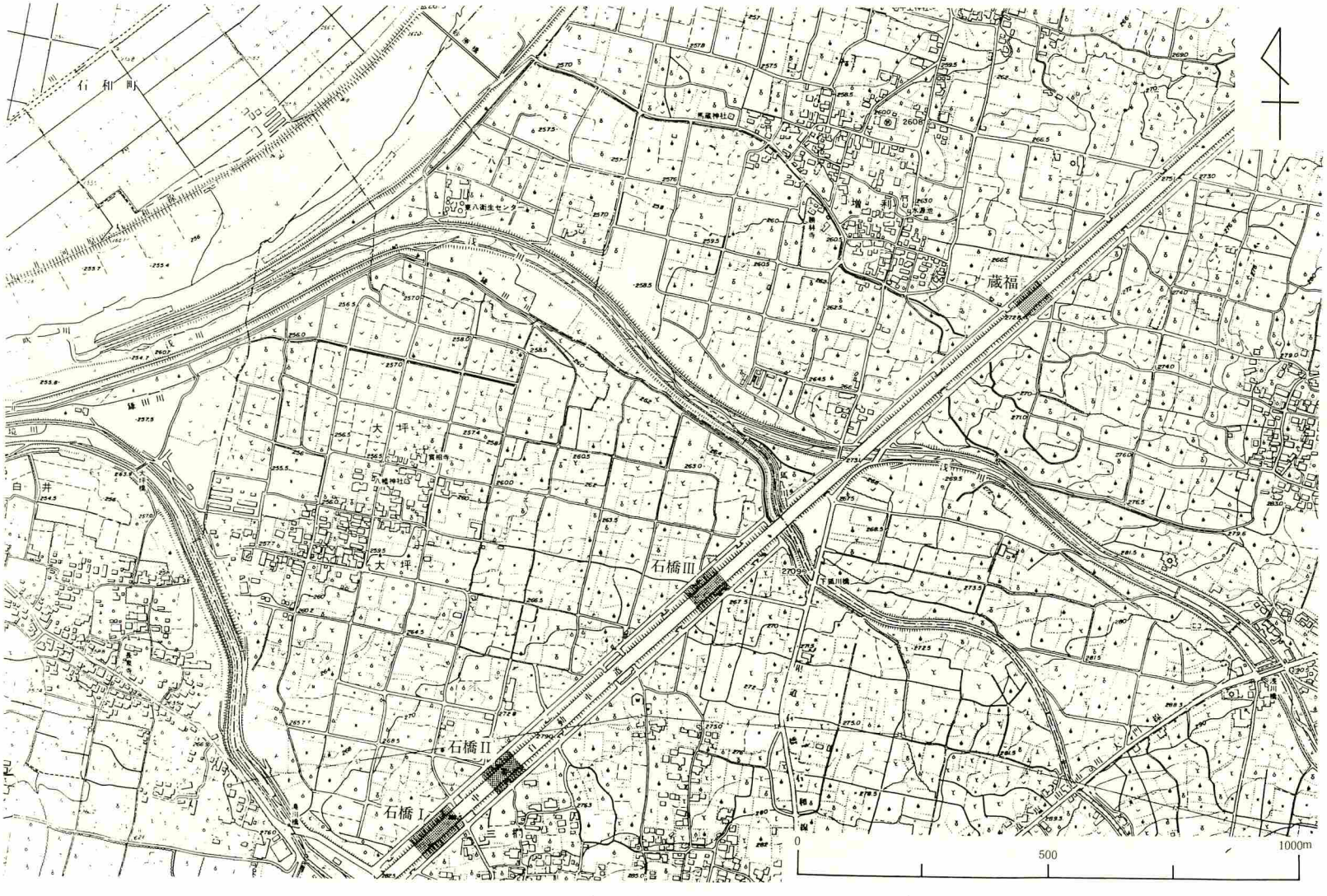
第Ⅲ地点は、境川と狐川の複合扇状地の扇端にあって、狐川左岸の約150ｍの位置にある。この地点は従来から言われてきた条里制遺構の中にあったので、その道路と水田址の検出に努めた。現在の路面より約40cm下に、条里制施行当時のものと思われる路面を検出し、道路の覆土では、これより現代に至る各時代の遺物が出土したので、引続いて道路は使用されていたとみられる。道路交差点では、道路を敷設するために破壊されたと考えられる平安時代後期の竪穴

式住居址１軒を検出した。

したがって、境川扇状地扇端で、条里制（この正否は別として）が施行されたのは、11世紀後半と考えられる。敷衍して考えると、甲府盆地にある条里制遺構と考えられている多くは、この時期に施行された可能性がないだろうか。

水田址では、現在のものより小さいと思われるものを検出したが、長直し（耕地の合併や整形をすること）のために破壊されていて、確実なものは得られなかった。

第１図　石橋条里制遺構（第Ⅰ．Ⅱ．Ⅲ．地点）．蔵福遺跡．尻ノ下遺跡位置図



第２図　石橋条里制遺構（第Ⅰ．Ⅱ．Ⅲ．地点）．蔵福遺跡付近図

Ⅰ 石橋条里制遺構

1．石橋条里制遺構第Ⅰ地点

第1章　遺跡の位置と環境

第1節　位　　置

石橋条里制遺構第Ⅰ地点の所在地は、東八代郡境川村三椚字西川町436番地？442番地の1とその周辺にあって、中央道中心杭S・T・A465の南と北にある。東経138度37分01秒、北緯35度36分30秒の位置である。

遺跡から東に三椚と石橋の部落が続いている。南100ｍに境川が西流し、西1,300ｍに笛吹川が南流し、北900ｍに浅川の支流である狐川が西流している。浅川は笛吹川に入り、さらに下流で釜無川と合流して、富士川となり太平洋に注いでいる。八ケ岳を北西に、南アルプスを西に眺望でき、手前に甲府盆地を一望することができる。甲府市までは車で約20分の位置にある。

なお詳しくは序章を参考にされたい。

第2節　環　　境

イ、自　然　環　境

甲府盆地東側は、御坂山脈が連なっている。本遺跡は、この山脈から流出する境川扇状地扇央に存する。

御坂山脈北西麓（盆地側）は、地形が、その中央で二区分される。すなわち、八代町南部から南西に約16㎞続く市川大門町まで曽根丘陵があり、境川村北部から北東に約13㎞の勝沼町まで、浅川、金川、京戸川、日川などによって形成された標式的な扇状地がある（序章第1図・境川村誌P37第7図P36第6図参照）。

境川扇状地は、この二区分する境界にあり、境川の名称も、これに拠って発生した地名のように思われる。この境川扇状地は標式的な曽根丘陵地形である坊ケ峰と小黒坂部落のある丘陵との間をぬって流出する境川によって形成された。言い替えれば、境川村と八代町が接するこの地域には、曽根丘陵の下に、境川、狐川などの小扇状地があるわけである。

遺跡付近の微地形は、勾配は1,000分の31.7（傾斜角1.8度）で北西に低くなっているフラットな場所である。発掘地点付近からこの傾斜角がややゆるやかになっていて、標高は273ｍから275ｍの間に入っている。

今はこの付近全体は果樹園が多いが、近年までほとんど水田であった。従って段々畑になっ

ていて、畑と畑との落差は50cmから1mくらいである。遺構は、中世のものは水田が開かれて後に構築されたので、比較的残りは悪く、また奈良・平安時代のものは現地表下1～1.2m位深い層にあったので、比較的残存率は良かったと言えるであろう。

地下水位は非常に高く50～100cmで浸透してくる。浸透水は、降水後は著しく多いが、3・4日晴天が続くと際立って少なくなる。湧泉も至る所にあって、発掘区内だけでも4～5ケ所あり数10m下ると潅漑用水路となる。湧泉があると、そこから私設堰が引かれて、公の堰へと流れ込んでいる。スプリングラインは第二地点の北側150mから第一地点の西側100m前後の所に弧を描くようにあって、標高は約269mである。そして、スプリングラインを境に西と北側には条里制遺構があり、この上方は湿地帯と現集落がある。

南に流れる境川は、この付近では40～50cm高い天井川となっている。

地質は『境川村誌』自然環境編（境川村編、西宮克彦、昭和53年）から、抜粋、要約すると次のとおりである（境川村誌P39第9図参照）。

この遺跡に近い4ケ所の深井戸、すなわち石橋（深度130mと140m）、三椚（60m）、大坪（50m）から採取したボーリングコアー資料と、これらの地域で行った電気探査の結果等で総合判断すると、境川の平地地区は、表土の厚さは約5m前後で有機物を比較的多く含む砂質泥からなり、その下位約22mは、砂礫層は石英閃緑岩や石英安山岩等の巨礫も含まれているが、ほとんど拳大程度の花崗岩、花崗閃緑岩、粘板岩、硬質砂岩、チャート・ホルンフェルス、安山岩等の遠来礫を多く含む砂から成り立っている。

表土並びに最上位の砂礫層は沖積層に、それ以下は洪積層であろうとしている。

この沖積層は、今から約1万年前に始まる最も新しい地質時代に、笛吹川や御坂山系から流れ出る渓流などが運んで来た粘土や、砂礫を堆積させて造られつつある地層である。また境川村の平地の発達は悪く、洪水時の浸水区となりやすい低地帯地域であるという。

ロ、歴史的環境

古墳時代とそれ以後における本県の政治、経済、文化の中心は、甲府盆地東部にあり、その置かれた場所は笛吹川下流域から上流域へと遡った。

中道町下曽根に巨大古墳甲斐銚子塚が古墳時代前期に築かれた後、後期には御坂町下成田に国造級の被葬者と考えられている巨大な石室をもつ姥塚古墳が築造され、さらにその上流春日居町には、甲斐国最初の国府が置かれ中心地が移動したといわれる。

中心地が移動したとは言え、この間、境川村には後期古墳が50基以上築造されており、南西に隣接する中道町にも多くの後期古墳がある。ただ、曽根丘陵地帯では後期古墳時代に比定される真間、鬼高期の遺物を出土する確かな集落址は、少ししか知られていない。

その後の奈良・平安時代の遺跡は、上流域の諸扇状地に著しく多く、濃厚になり多種多様な遺跡が形造られる。これに比べ曽根丘陵地帯では以前のままか、それより減少するようである。少なくとも広く濃密になる事はないようである。

石橋条里制遺構第Ⅰ地点が所在する境川扇状地でも、平安時代の集落は拡大していくようである。

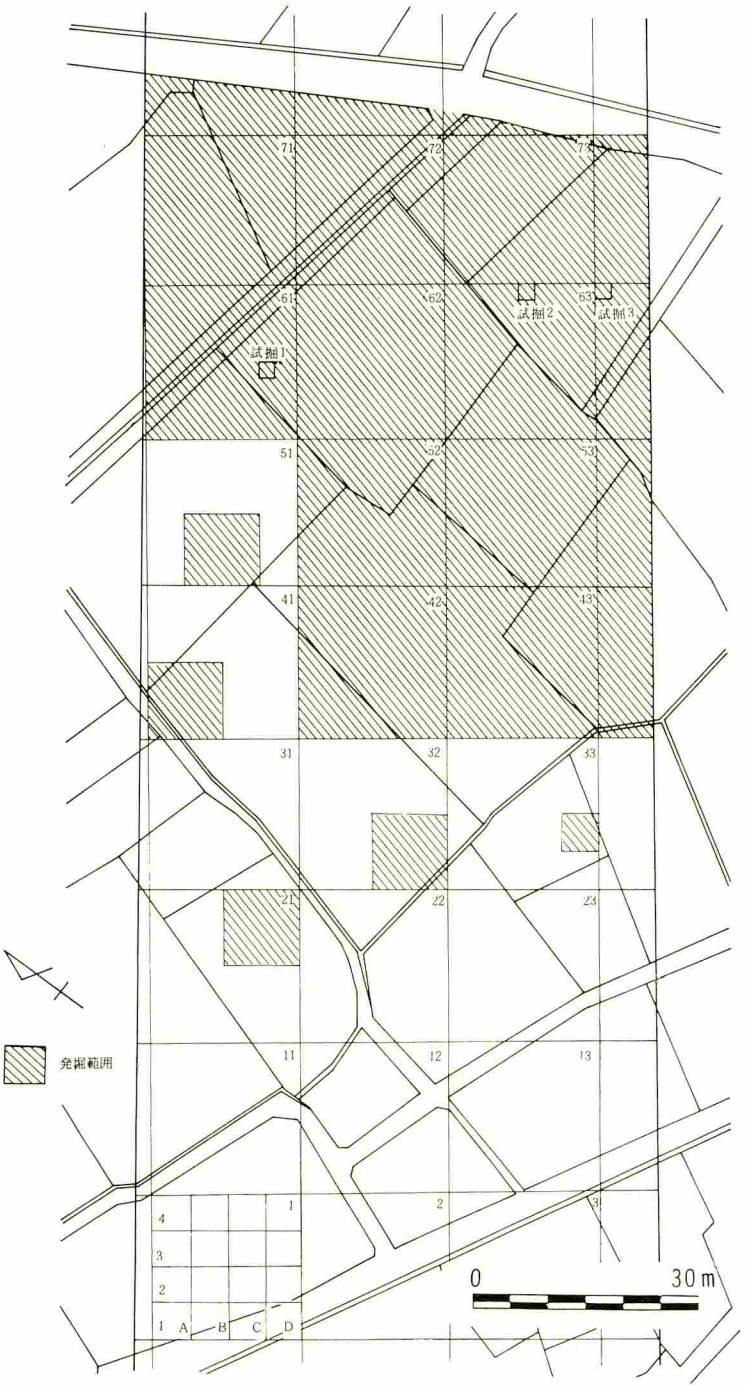
これについて遺物の分布状況を調査して、聚落のあり方等を明らかにした資料はない。一部を裏付けるものとして以下の事をあげておく。筆者が見たところによると、石橋や三椚の部落内やその周囲には、広く濃密な国分期の土師器散布地が見受けられる。また石橋条里制遺構第Ⅲ地点の発掘調査によって明らかになったように、この地点付近では条里制（条里制関連遺構と考えるのが適切かも知れない）は、平安時代後期の11世紀後半に施行されたものであろう。水田として開拓されたのは、文献史学によって明らかにされている事象を考えあわせてもこの頃と考えられ、ひいては、境川村から八代町に広がる一連の条里制遺構は、一般的にはかなり広い範囲が平安時代後半に開拓されたと考えられる。さらに、武田氏の親族衆に石橋八郎信継があり、『甲斐国志』によると石橋に住んでいたとあって、その活動期はおおよそ平安時代末期から、鎌倉時代初期にあたるようである 。『境川村誌』に掲載されている絵図（242ページ、元禄11年、大須賀宣方氏蔵）によると、石橋部落を囲むように（南部は外れているが）東西600m、南北490mの方形の縄張りと思われるものがある。中に方形に区画する道が通っており、鉤の手や筋違い、二又に分かれる道が見られる。また字名に大通路、仲町、先座敷、毘沙門、本光寺、万福寺、宮の前、天神、佃等も縄張りの中や付近にみられる。

以上のような状況を総合して考えると、境川扇状地は、平安時代後期にはかなり広い範囲に聚落があったと思われる。

本遺跡や石橋条里制遺構第Ⅱ地点から、重なったまま融着した須恵器の破片が4個出土した。これらは焼く際に失敗したものと思われる。本遺跡からは、失敗作に類似した須恵器破片が多量に出土しているので、近くにある登窯で焼かれたものと考えて差しつかえないであろう。

『境川村誌』村の歴史（前掲、上野晴朗）によると、登窯が藤垈～在家、牛居沢、小黒坂立石、大窪にある神社の敷地、手古松の北の台地（山田）、小黒坂の熊野神社境内の五ケ所を掲げている。この他に三椚の清水信吾氏等が、三椚のお墓（口明塚古墳所在地）で墓穴を掘った際、斜面で多量の焼土と須恵器破片を発見し、焼土は登窯のような形状をしていたという。以上のように聞くところによれば、その形状も登窯によく似ているし、その際発見した、重なって融着した須恵器の失敗作破片も見せて頂いた。また牛居沢の窯跡は筆者も実見している。幅50m、深さ40m位の沢にあり、北東に分かれる支谷の北斜面で、真赤な厚い焼土が幅１m、長さ約３m、傾斜角30度位ある場所を見ている。ここからは同村誌Ｐ170第11図の須恵器破片を小林藤吾氏が採集しているので、やはり窯に間違いないであろう。全て登窯跡は、曽根丘陵に入り込んでいる谷の斜面を利用して構築されている。原料である陶土は、牛居沢の場合には窯のある周囲の崖に露出している。

以上、石橋条里制遺構第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ地点に関係した点を略述した。



第3図　石橋条里遺構第Ⅰ地点グリッド配置図

第2章　調査の経過

石橋条里制遺構第Ⅰ地点の発掘は昭和55年4月2日に開始し、同年11月21日に終了した。日曜日と祭日を休み、延約8ケ月間にわたって行なった。

発掘予定面積は約9,800㎡であったが、このうち遺構を検出した範囲は約6,300㎡であった。

地区全域に中央道の中心杭を基準として、グリッドを設定した。20m×20mの大グリッドを作り、この中をさらに5m×5mの小グリッドに分割して、その名称を図のとおりに付した。

まず発掘予定地における遺構の分布状況を把握するために、大小グリッドを考慮しながら数グリッドおきに、千鳥に試掘を行なった。どのグリッドでも、表土の下は黒色土混りの礫層があり、数ケ所には50cm位の大きい転石も見られた。これは境川によって供給された氾濫層である。これは作業を著しく困難にし、発掘期間が大幅に遅れた原因となった。また結果的には、この遺跡の表土に散布していた土師器片は、氾濫によって上流から運搬されて来たものである事がわかった。

次に主要な遺物と遺構を検出した経過の概略を記す。

発掘区北方の80台グリッドから試掘を始めると同時に、40台～70台の各グリッドで小試掘ピットを設定した。

4月11日に71グリッドの3に幅20cm、深さ3～10cmの小さな数条の溝群を検出し、これを第一溝状遺構とした。溝の底にはシルト層が少し堆積していて、その中から志野系陶器破片や土師質土器破片が出土した。続いて4月19日には第二溝状遺構を検出した。溝は第一溝状遺構よりやや広く深いが、その性格は同じものと考えられる。

6月10日頃までに中世の遺構、1～4号列石、1、2号集石列、1号井戸状遺構や平安時代の竪穴式住居の1号住居址などを検出した。6月26日に2号掘立柱建物址の柱を氾濫層（砂礫層）の下から検出するに至った。30日にはこの2号掘立柱建物址の床面と思われる文化層から、土製勾玉と土製管玉が出土し氾濫層の下にも遺構が存在することが確認出来た。2号掘立柱建物址の北10mの位置で、7月23日に立石をもつ5号配石を国分式土器を伴って氾濫層の下から検出した。

一方8月下旬までに、中世の遺構である列石6・8・9号なども検出し、その後8月30日には3号住居址を一軒だけ検出し、これに続いて6、7号住居址を検出した。9月から11月には、竪穴式住居址群、掘立柱建物址群の精査を続け、この終了に近い11月11日と18日に3号井戸状遺構及び4号井戸状遺構を検出した。3号井戸状遺構からは踏鋤など多くの木製品が出土した。

この間、約8ケ月間は砂礫層と湧水と降雨による水没で発掘は非常に困難をきわめた。

なお発掘調査速報「石橋田圃条里遺跡」（第Ⅰ地点）を次のとおり発行した。

No.1	昭和55年5月9日	No.3	〃	7月9日	No.5	〃	12月23日
No.2	〃	6月13日	No.4	〃	9月2日		

第3章　層　　序

本遺跡付近の地形、地質については、第1章第2節の「自然環境」を参照されたい。

この遺跡では扇状地の扇央といってよい地層が形成されている。基準層序はグリッドの基準点を連結した線とし、それはその流れの方向に同一のものと、やや直角のものとになった。

なお層序番号はグリッド毎、遺構毎に付けてあるものもあるので、必ずしも統一していない。同一番号が同一地層とは限らない。

地層は扇状地の特有な層序で非常に乱れていて、基準層序とするような確かな地層を形成していない。しかし、大きくは表土（耕作土）、シルト層、礫を包む氾濫層（ローリングした土師器、骨片等も含む）、遺構包含層に分けることが出来る。

第6図に示したように61、62グリッドの中心にあるトレンチは、そのポイント61グリッドC—3から63グリッドA—3に至る30mの間に設定した。これは1号列石と2号掘立柱建物址を貫通している。

ここには表土とその下層（1・2・3層）は図に載っていない。1号列石は発見時は二段積であったが、上部を破壊されたと考えられる。高さは約20〜30cmで61グリッド側が低くなっている。このグリッドには、石垣は破壊されていたのでかかっていないが2号掘立柱建物址の柱穴の一部がかかっており、Ⅶc層№2である。Ⅶc層はⅥ a 層から掘り込まれている。Ⅵ a 層は拳大から人頭大の石を中心として、大は70cmから小礫までを多量に含む氾濫層である。表土からⅦ c 層の掘込面までの深さは約90cm位である。Ⅵ a 層はこのトレンチのほぼ全域に見られる。2号列石は第6図のⅥ a 層の上にあり、62グリッド3—Aと同3—C間では、Ⅴ層とⅣ層の間に石垣があったことを示す落ち込みがある。

52、62、72グリッドの中心を通るセクションは52グリッド3—C点から72グリッド3—C点までの約40mである。72グリッドにある5号配石はⅤ層で被覆されていて、この層の下が生活面である。62グリッド3—C点の南にある2号掘立柱建物址も、生活面は同じでⅥ層上にある。62グリッド3—Cと1—Cの間にある1号土塁は低く、その生活面はⅨ層の下にある。この面には50〜20cm位の石があり、人の手によって運ばれて来た様子もうかがわれた。地層では前記の建物との関連・前後関係は摑めなかったので出土遺物の項で述べることにする。

これら前述した2号配石、2号掘立柱建物址の遺構面は同一であり、その下に1号土塁はあるものと思われ、2号配石、2号掘立柱建物址のいずれも水平である。この上部に氾濫層であるⅥ（a）層がある。

53グリッド1—A点から63グリッド1—A点までの地層図は20mである。但し表土から第3層までは省略している。4号住居址などの掘立柱建物群の上層を横断し、3号井戸状遺構の横と1号柱から10号柱などの柱穴群を通る。建物群付近ではその生活面となる第25図Ⅰ層

よりⅡ層上は第５図Ⅴc 層（氾濫層） である。 この北東にあるⅥ層の礫層は、 建物群付近では柱根より下にあった。さらに、１号住居址付近まで南になると上に出て、その掘込面となっていたと見られた。建物群を建てる以前に低くなっていた所に氾濫で礫が堆積したものであると考えられる。３号井戸状遺構付近と柱穴群の地域では地層が著しく乱れている。この生活面は、掘立柱建物址群より下層にあり、乱れているために、その生活面を確定出来なかった。その高低差は約20㎝あり、生活面の標高は、４号掘立柱建物址で273ｍあり、柱穴群と３号井戸状遺構付近では273.05ｍ前後である。

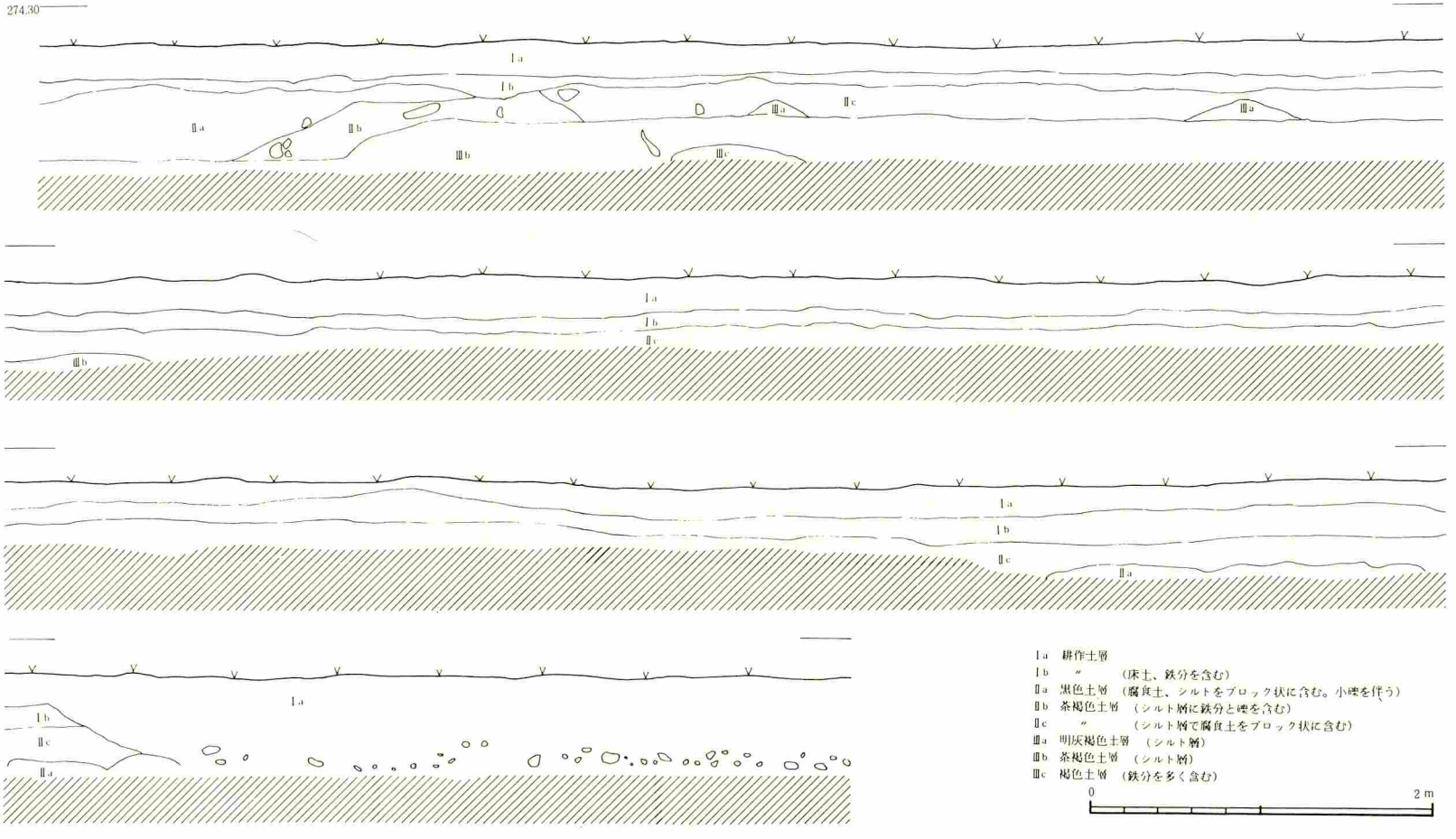
第５図は、53グリッド１―A点から53グリッド１―B点までである。これは２号掘立柱建物址の隅の上層図であるが、建物付近では地層が非常に乱れている。

71、81グリッドにある溝群にかかる地層は第80図である。６本の溝を横切る線は71グリッド２―D点から81グリッド２―D点までの20ｍである。ここの地層は上からⅠ層―表土（水田耕作土）、Ⅱ層―礫混入腐食土層、Ⅲ層―腐食土層、Ⅳ層―礫混入腐食土層となっている。溝は全て約４㎝の厚さのあるⅢ層下部からⅣ層を掘り込んでいる。住居址群付近との地層の対比は出来ないが、中世遺物を出土したのでこれより上層であるということは言える。溝の深さは３～４㎝であり、その底にはわずかにシルト層の堆積が認められた。これは水の運搬作用によって堆積したものと考えられる。この線と直交する地層図は、81グリッド１―C点から82グリッド１―A点までの15ｍである。これは二本の平行している溝を切っていて前述した状態と同じである。ただ、床面は82グリッド側が約20㎝高くなっていて、この遺構を性格づけていると考えられる。

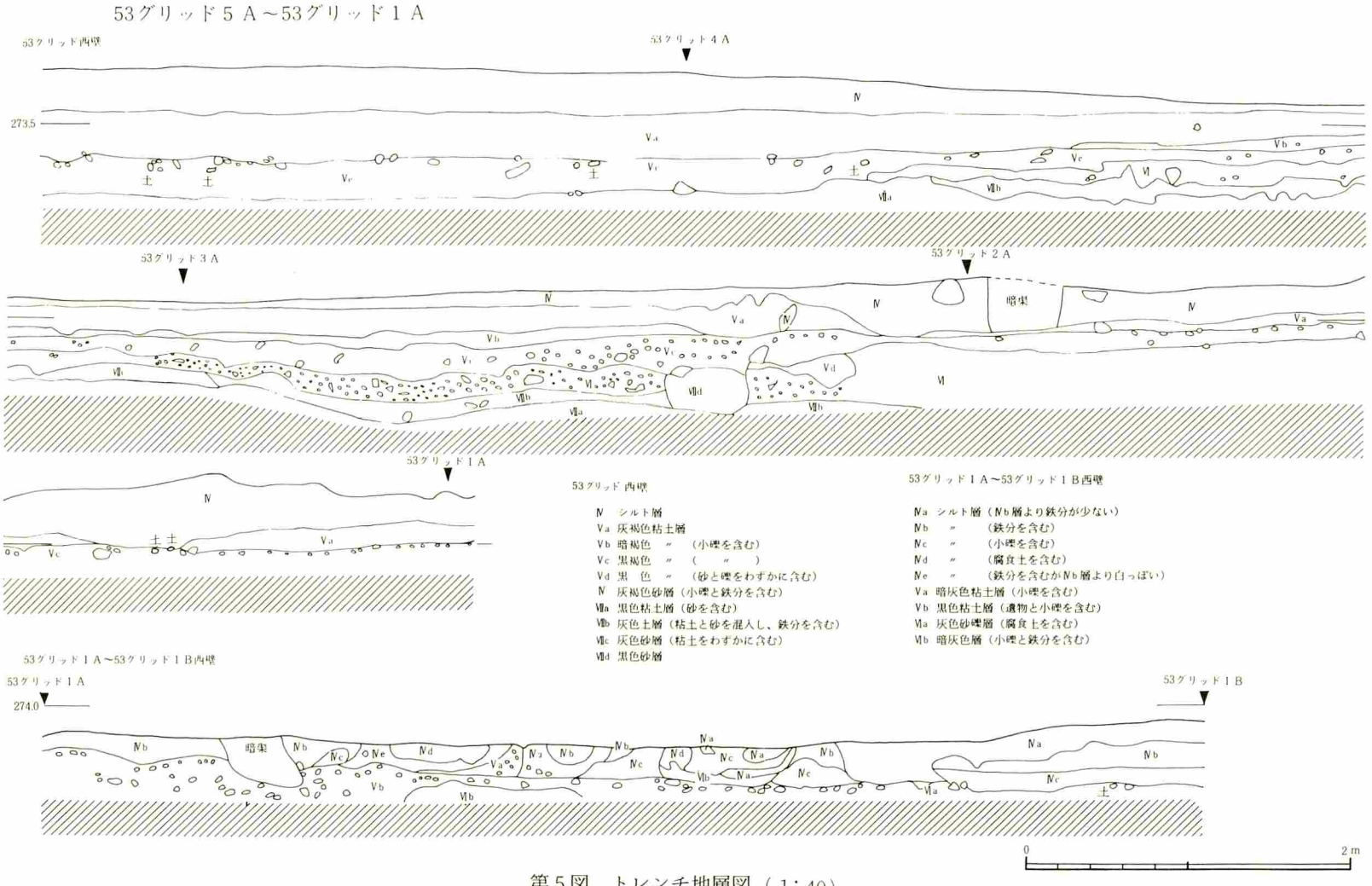
最後に63グリッドと64グリッドにあけた試掘の地層図第８図を説明する。前者は４号集石列の右側に、後者はその左側に位置する。前者には氾濫層であるⅣ層の下にあった配石の一部が下層に入っている。この配石は４号集石列と同一生活面上にあり、さらに３号住居址とほぼ同一生活面上にあるといってよい。後者はⅣ層が氾濫層で著しく礫が多く、大は人頭大から、極小礫に至るまでを含んでいる。

石橋条里制遺構第Ⅰ地点の地層は、境川扇状地の氾濫原であったため、遺構は礫層の中にあったといって過言ではない。従って地層も極めて見分けにくく、遺構を層序順に確実に時代決定することは困難であった。

52グリッド３Ｃ～42グリッド１Ｃ



第４図　トレンチ地層図（1：40）



53グリッド 西壁

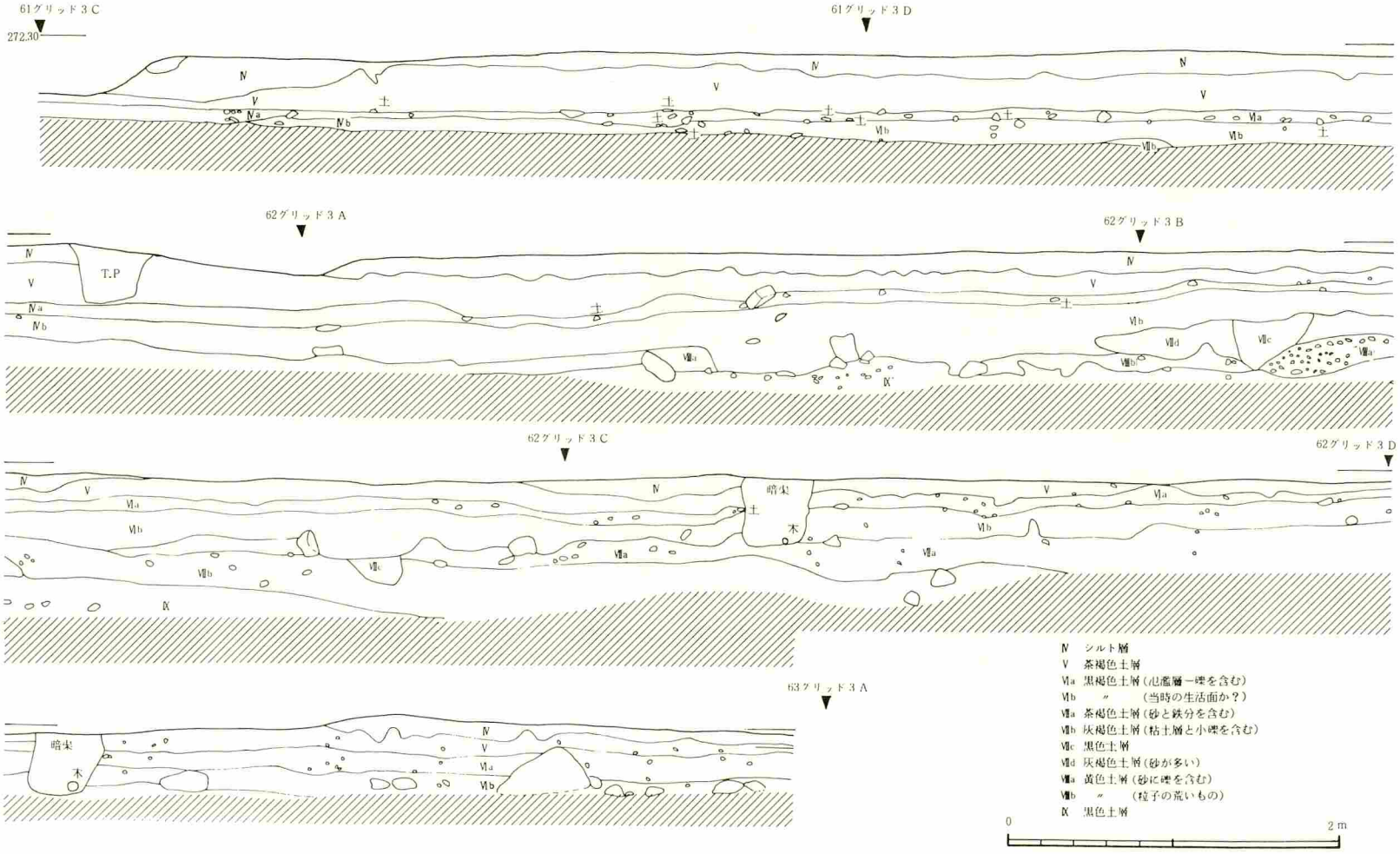
Ⅳ　シルト層
Ⅴa　灰褐色粘土層
Ⅴb　暗褐色　〃　（小礫を含む）
Ⅴc　黒褐色　〃　（　〃　）
Ⅴd　黒　色　〃　（砂と礫をわずかに含む）
Ⅵ　灰褐色砂層（小礫と鉄分を含む）
Ⅶa　黒色粘土層（砂を含む）
Ⅶb　灰色土層（粘土と砂を混入し、鉄分を含む）
Ⅶc　灰色砂層（粘土をわずかに含む）
Ⅶd　黒色砂層

53グリッド１Ａ～53グリッド１Ｂ西壁

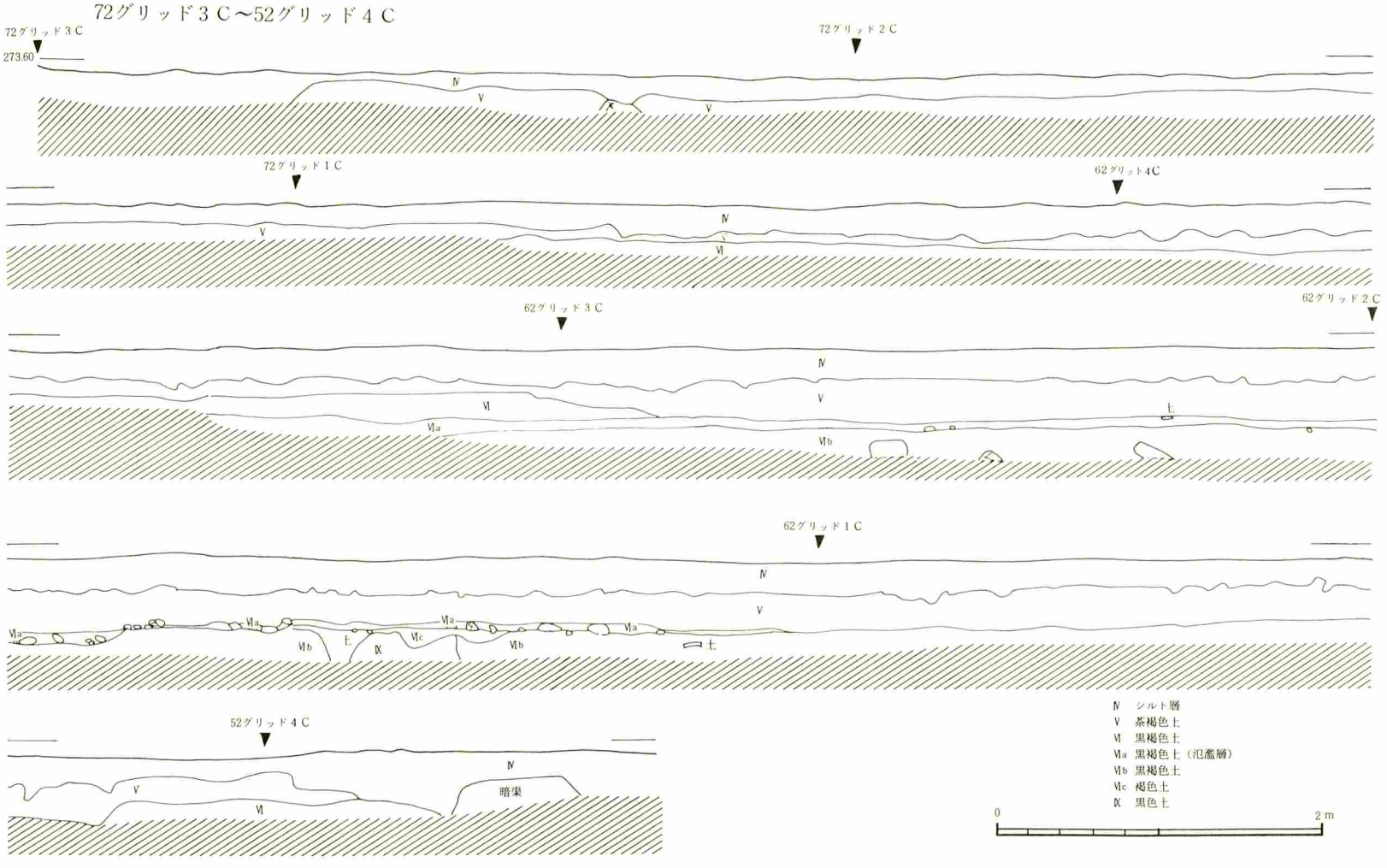
Ⅳa　シルト層（Ⅳb層より鉄分が少ない）
Ⅳb　〃　（鉄分を含む）
Ⅳc　〃　（小礫を含む）
Ⅳd　〃　（腐食土を含む）
Ⅳe　〃　（鉄分を含むがⅣb層より白っぽい）
Ⅴa　暗灰色粘土層（小礫を含む）
Ⅴb　黒色粘土層（遺物と小礫を含む）
Ⅵa　灰色砂礫層（腐食土を含む）
Ⅵb　暗灰色層（小礫と鉄分を含む）

第５図　トレンチ地層図（1:40）

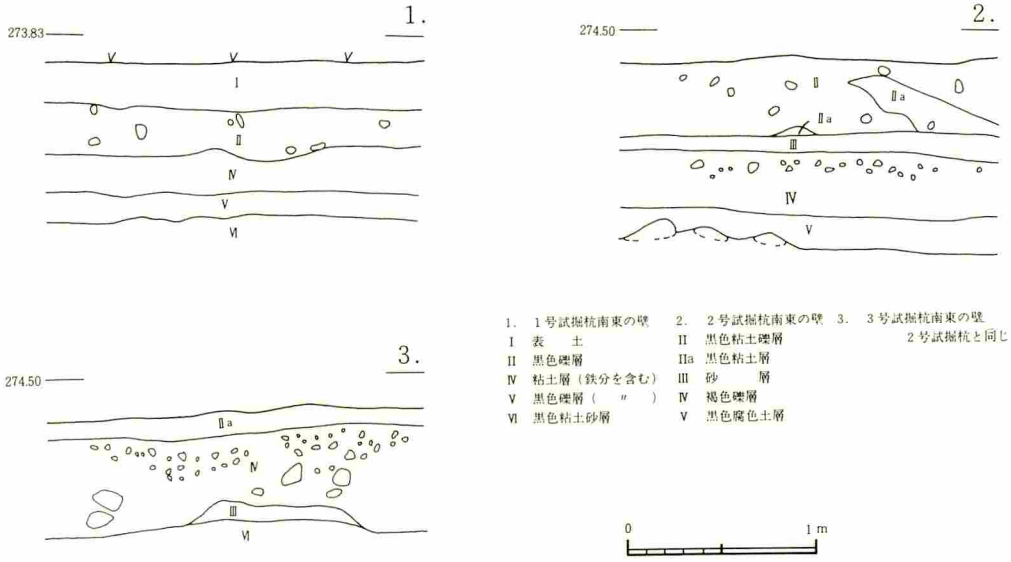
61グリッド３Ｃ～63グリッド３Ａ



第６図　トレンチ地層図（1:40）



第7図　トレンチ地層図（1:40）



第8図　試掘地層図

第4章　遺構と遺物

石橋条里制遺構第Ⅰ地点で検出した奈良・平安時代と中・近世の遺構の分布状況・遺物についてその概略を示しておく。

遺跡の範囲は微地形から考えると、発掘区の南側から東側・北東側にかけて広がっている可能性がある。発掘区域南方50ｍあたりで側溝の拡幅工事中、焼土と土師器を伴う住居址らしいものを断面で発見した。ただ1号住居址から約30ｍ南までは、今回の試掘では遺構はなかった。東側から北東側の路線外にかけて若干遺物が散布している。このような集落のあり方として散村的に広い範囲に分布していることも考えられる。

発掘地域内の遺構の分布状況は、平安時代のものは南の地域が中心をなすといってよい。最南端に竪穴住居址が4軒、この北にほぼ同生活面上に掘立柱建物址が7棟と4号井戸状遺構があり、続いてこの北側下層に3号井戸状遺構と柱穴群があり、柱穴群の中には9本の柱根も発見されている。柱穴は連結出来なかったが、建物址と考えざるを得ない状況である。1号畔、3号土壙も同一生活面上にある。これらより上層に6号列石（石垣）とこれを挟むように1号列石（石垣）と8号列石がある。1号畔の東にこれより上層に2号掘立柱建物址があり、さらに北にこれとほぼ同一生活面上に5号配石と3号住居址が、また南に4号列石（石垣）がある。最北端に中世か近世の2ケ所の溝群がある。

これらの遺構からは、平安時代の土師器、須恵器、灰釉陶器や中世末か近世初頭に生産されたと考えられる天目、黄瀬戸、染付などが出土した。

第１節　奈良・平安時代の遺構と遺物

掘立柱建物址と遺物

前述したように調査は２号掘立柱建物址付近を10月中、他は11月に行なった。この建築時期は大きく二時期に分けることが出来る。その一は52、53グリッドにまたがっていて、最下層に包含されていたものでA群とする。他のものは53グリッド１－A点付近と62グリッドにあったものでB群とする。さらにA群・B群とも建物が重複しているので、若干であるが、時期差があると思われる。これを一群・二群・三群のように分けることとする。（第36図）

柱穴の上場の平面と柱の断面形状を５形式に分けて説明する。Ⅰ式は隅丸方形、Ⅱ式は□＞○で丸味のある方形、Ⅲ式は○＞□で円に近い方形、Ⅳ式は円形、Ⅴ式は不整形とする。A群の柱穴の総数は21個である。建物として４個以上の柱穴が連結出来るものはないが、柱根の残存と考えられるものが柱穴№１、２、３、４、７、８、10、11、61、78の中に各１本ずつ合計10本あった。この中には№３、７、11のように腐食があまり進まず比較的残存のよいものや、柱穴№５のような礎石と思われる敷石があるので、掘立柱の建物であったことは確かであろう（図版７）。しいて連結するとすれば柱穴№１、３、８で柱の中心間距離は№１と№８の間で340㎝（１間５尺２寸）、№３と№８の間で155㎝（５尺１寸１分）である。

柱穴の形状は、上場でみると№３がⅡ式、№５と№６がⅢ式、他の№１、２、４、７、８、10、61はⅣ式である。その最大径は、それぞれ107㎝から30㎝の間にあり多様で、平均は58㎝である。深さは35㎝から17㎝の間にあり、平均は28㎝で、柱穴としては浅い。この柱穴は砂層の中に掘り込まれており、その上層に黒色腐食土層があったのであるが、生活面は確定出来なかった。しかし、８ｍ西にある４号井戸状遺構とほぼ同じレベルかやや下層になる。

柱根の底の標高は、最高272ｍ95㎝から最低272ｍ67㎝の間にあり、その平均は272ｍ80㎝である。

第10表は柱穴の平面形、深さ、最大径、柱根の断面形、最大径、残存している長さ、底の標高を掲げたものであるが、これらを勘案しても同一建物として柱穴を連結することは出来ない。

柱の断面形状は№10がⅠ式、№７がⅢ式であり、他の８本は全て円形である。これでみる限り全部の柱が円形か方形ではなく、一部のみが面取りをしたものであろう。

また、柱が残存した柱穴にも２基だけⅡ式とⅢ式があるが、必ずしも方形の柱穴に方形の柱が入っているとは限らない。

次に遺物としての柱根について説明する。柱根はほとんどのものが腐食が進んでいて、建築当時の現状を留めていない。さらに炭化も進んでおり木質の状態も悪くなっているが、一応現状での長さ、最大径、材質の種類等を別表に掲げておく。

１号柱は断面が円形で、丸太のまま使用したかのようである。底はやや平である。２号柱は腐食して僅かに中心部が残っているだけである。年輪からみると一本の木をそのまま使っ

ている。3号柱は比較的よく残っているが、表面は旧状を留めない。割材のようでもある。底は中心が平で周囲が丸味を帯びているので、11号柱にみられるように、底の回りを削り取ったものかもしれない。底より5㎝上が凹んでいるのは切り込みを入れたためであろうと考えられる。切り込みが入っているものは、A群では3号柱だけである。4号柱は周囲は腐食して、中心部と4本の節が残っていて旧状は留めないが、節だけは腐食しないで残ったものとすると、柱の太さがわかる唯一のものである。丸太柱とすると直径が約16㎝であり、1本の木をそのまま使用したものであろう。6号柱は割材であって断面円形状であるが、方形であった可能性もあろう。底部は平であるが、鋸で切ったものとは一概には言えない。底部には60～70本の年輪が見られ、これから推測すると直径50～60㎝の原材を4～5本に割ったものであろう。根本から上は腐食が著しく、現状は三角錐状になっている。7号柱は僅かに木片が残っていただけで、考察の余地がない。8号柱も節の部分だけが腐食をまぬがれて3個の木片が残っていただけである。10号柱は底面の形からみると方形の柱であったと思われる。現形、材質等が6号柱と近似しているので、同一原材ではなかろうか。11号柱はその一部分が最もよく保存されており、柱の形状や加工痕をみることが出来る。断面円形で一本の木をそのまま丸太柱として使用しており、最下端を四面から広く鉈状工具で削り取り加工しているが、他の部分に加工痕はない。年輪は60～70本を数えることが出来る。

以上各柱について説明したが、共通してみられる点をあげておこう。まずほとんどの柱が原形を留めていないことで、B群に比較して著しく保存が悪く充分な観察が出来ないことであった。また全ての柱は上端になる程細くなり、尖っていることである。これは地表に近い程腐食率が高かったためであろう。

建物の使用年代については、この遺構に伴う土器が出土しなかったので、隣接する3号井戸状遺構から出土した土師器によって判断すると、8世紀の国分期初頭に比定出来ると思われる。

B群はA群より後の時期の建物である。42、43、52、53の各グリッドにまたがっている8棟（4号、5号、9号、10号、11号、12号、13号、14号）と62グリッドにある2号掘立柱建物址の合計9棟である。前者は重複しており、後者はこれから北東に約20ｍ離れて1棟だけある。この中には9号掘立柱建物址のように柱穴の大きさや柱穴間の距離が長過ぎたりしている理由で、建物とするのに十分な条件を備えていないものもある。また14号建物のように3個の条件の良い柱穴とそれに伴う2本の柱根があるにもかかわらず、柱穴が1基足りないものもある。この他に明らかに柱穴であろうと考えられるものでも連結出来ないものもあったり、柱穴としては貧弱なものもある。

柱穴の平面形状、深さ、最大径や、柱の断面形状、最大径、現状の長さ、柱の底の標高は別表に、柱穴の形状は模式図に、柱間距離、方向、柱穴間距離は柱間実測図と柱穴間実測図に示した。なお柱間距離は柱の中心点間を、柱穴間距離は連結線の交点間を測定した。従って柱間は柱の位置がずれている場合で、一直線上にのらなくても正確な距離であるが、柱穴

第 9 図　石橋条里制遺構第 1 地点全図

間は柱の位置を柱穴の下場を勘案して定めたので、方向や距離等は必ずしも正確ではない。

柱穴の切合関係や建物の方向や遺物等から2号、5号、9号、10号、11号、12号掘立柱建物址が古いと考えられこれを一群とし、その他の4号、13号、14号掘立柱建物址は新しいと思われるのでこれを二群とする。ただし一群、二群ともその中での新旧の差はつけ難いものが多い。

方向別に建物を区別すると、北から東に7°～8°向くものに2号、10号、11号、12号建物があり、0°～3°の間に入るものに4号、5号、13号、14号の4棟があり、例外として9号建物が北から西に17°向いている。これは建物の新旧を区別する一要素ともなる。

また柱穴に柱根が残っていないものは、腐ってなくなったのではなく、その建物の後に新しく建物を建て替えるために柱を引き抜いたので、残っていなかったと考えてよいであろう。そうすると腐朽して使用出来なくなって建て替えたのではなく、伊勢神宮の遷宮のような定期的、祭祀的な意味で建て替えたことが考えられる。

なお、2号掘立柱建物址以外の建物から伴出した土器についてはこの項の最後に一括して説明する。

B群の建物について古いと思われる順に説明しておく。まず一群は次のとおりである。

2号掘立柱建物址　62グリッドで1棟だけ孤立して最初に発見された掘立柱建物址である（第10図）。 8本の柱根が残っていた。隅にある109号柱穴だけは残っていなかったので柱間距離は柱穴の下場の中心を測定点とした。

南北に長い建物で、北側の梁間口には柱があるが、これに対応する南側梁間口には柱がない。また北側の101号柱は明らかに外側に突き出ていて変則形をなす。建物全体は北側で狭くなっており、109号柱穴は極端に内側に入っていたと思われる。

第11図に示したように、1間の柱間距離は比較的不統一であるが、平均柱間距離は192cm（1間3寸4分）で1柱間が1間（181.8cm）を越える間が多いことが注目される。柱の断面はほぼ円形であって柱穴と同形であることは、この建物群の中でも古い時期に立てられ、4号掘立柱建物址と同時期まで使用され、同時に破壊されたことを示唆している。方向は北から東へ8°向き、古い建物の基準線となり得ると考えられる。

全ての柱根には切り込みがあり、立っていた時のその方位は、ばらばらで規則性はない。切り込みを入れた目的はわからないが、動く事を防ぐためにでもしたものであろうか。簪は穿孔して入れる例が多いようであるが、ここでは残存していなかった。

柱根は、106号柱を除いて、全て北西に傾いていた。4号掘立柱建物址と同様このことは後述するが、洪水によって傾いた可能性があり、洪水伝説を裏付けるものかも知れない。

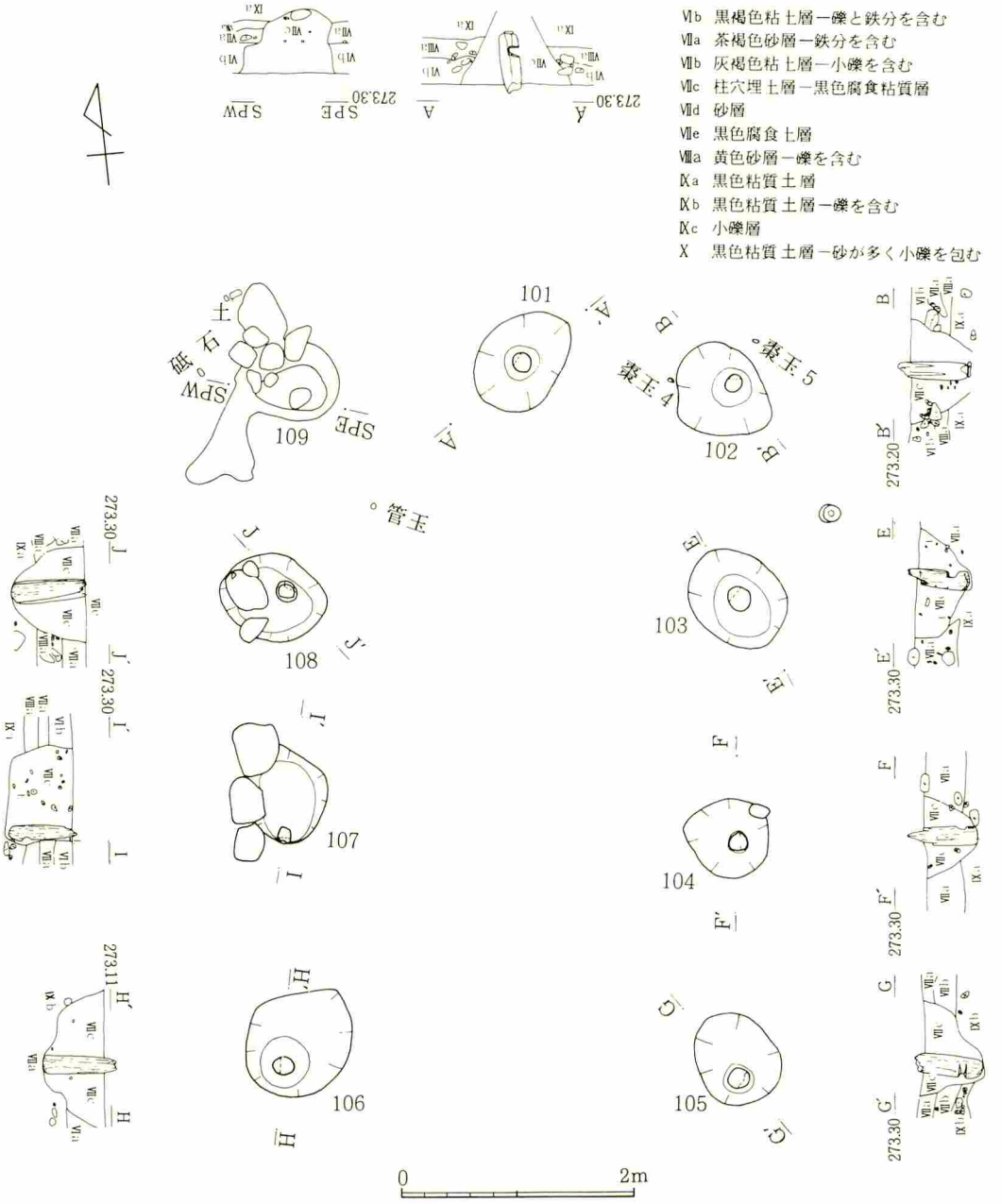
柱の傾きの平均は7°9′でその平均方位は北—53°49 —西である。仮に建物の高さが5 mとすれば、最上端で約62cmの傾きとなる。

柱穴の形状は不整形な102号柱穴を除いて全てU形である。柱は柱穴の最も低い所に立てられているが、101号柱だけは柱穴の底についていない。また102号柱の下には底に石を敷いて高さを調整している。柱穴の深さの平均は54cm、最大径の平均は91cmで全掘立柱建物址

の中で最も大きい。

ここからは土製管玉2個と土製棗玉1個が出土している。やはり祭祀的な遺構とみてよいであろう。

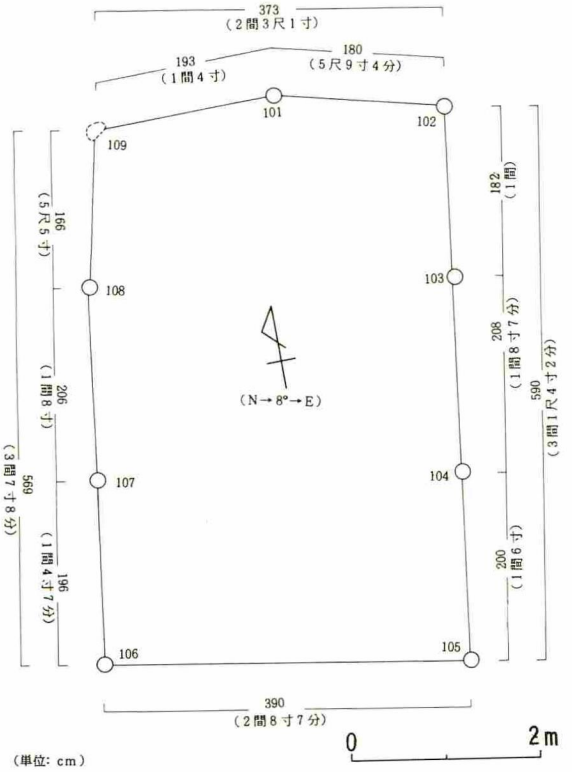
なお柱根の傾きを計る基準線は柾目に表われた年輪とした。実測及び計算は、古川、木之瀬、小林、横小路、河西が担当した。



第10図　2号掘立柱建物址実測図

２号掘立柱建物址内から出土した土師器は、№５、６、11、14のように10世紀前半頃の国分式がある。これらが掘立柱建物に伴うかどうかは疑問の余地があるが、生活面に伴う遺物と見做しておく。

柱　残存していた８本の柱の長さは530㎜から632㎜の間で、平均590㎜である。その太さは、最大径が150㎜から167㎜の間で平均160㎜である。４号掘立柱建物址より約40㎜細い。全てのものが立ったままで柱根は残っていた。上端は細く尖り、中心が凹んでいる。こうなったのは立ったまま腐ったためであろう。すべての柱は割材で作られ、その年輪から推定すると６つ割～８つ割位にして使用している。割材であるが、現状では断面がほぼ円形で、その腐朽状態を観察すると建築時の形状をそのまま残していると見られる。また全ての柱には下から15㎝位の高さに溝（切り込み）がある。溝は深いものも浅いものもあり、溝の断面は直角のものも斜めのものもあり、切断面は鈍器で掘ったもののごとくきれいではなく、その底は２～３㎜に段階的に掘った痕跡が残っている。柱の最下部の周囲は、底に向って斜めに鋭利な刃で削ってあり、切り込み溝の下だけは、102号柱を除いて全て特に大きく削っていることが特徴的である。底の切断面を見ると、段階的に切ったような痕跡が残り、鋸で一気に切ったものではない。柱の底の高さは標高272.641ｍを最高とし、最低は272.484ｍで、その差は157㎜であり、平均は272.568ｍである。

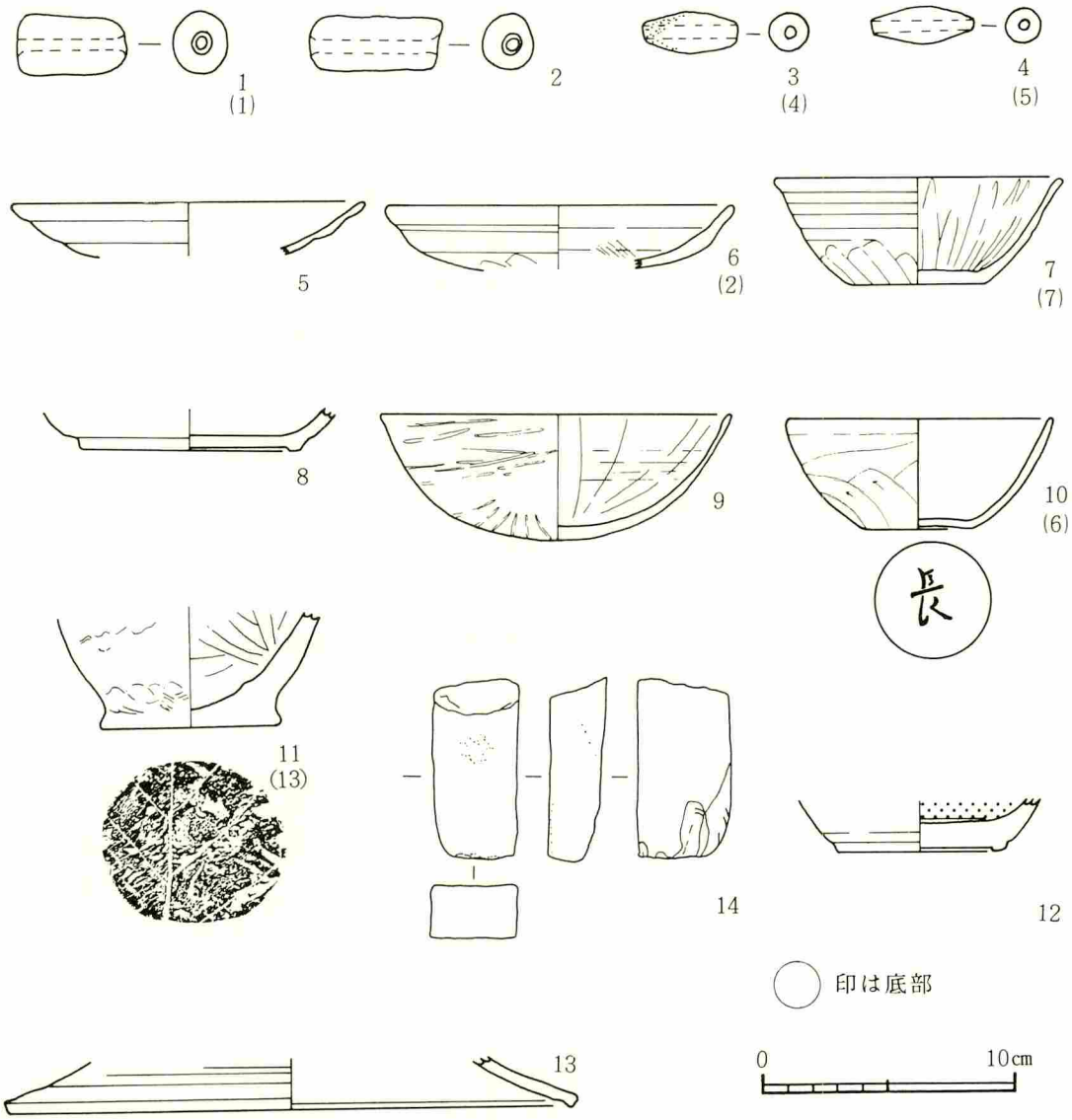


第11図　２号掘立柱建物址柱根実測図（1：80）

柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ（㎜）	柱穴の最大径（㎜）	柱の形状	柱の最大径（㎜）	柱の長さ（㎜）	柱の底の標高（ｍ）
101	④	630＋α	980	④	165	530	272.589
102	⑤	530＋α	920	④	153	625	272.549
103	④	460＋α	940	④	154	533	272.641
104	④	460＋α	760	④	167	610	272.594
105	④	500＋α	820	④	163	560	272.589
106	④	525＋α	1060	④	165	627	272.549
107	④	580＋α	880	④	161	583	272.549
108	④	630＋α	930	④	150	632	272.484
109	④	540	900				
平均		540＋α	910		160	590	272.568

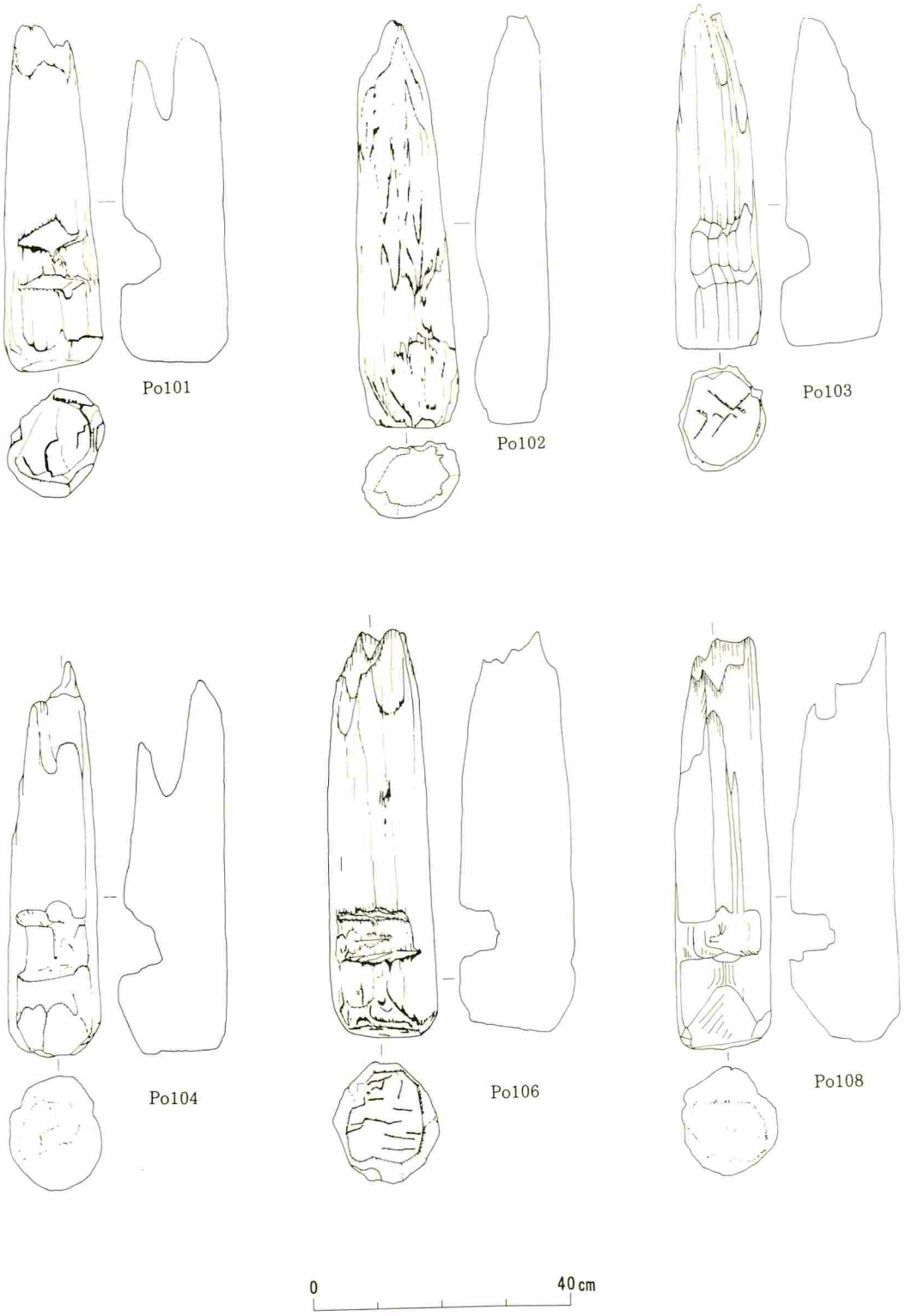
（註）１、柱穴と柱の形状
①　隅丸方形　④　円形
②　□>○　⑤　不整形
③　○>□
２、＋αは柱の底まで掘らなかったもの

第１表　２号掘立柱建物址
柱穴・計測一覧表

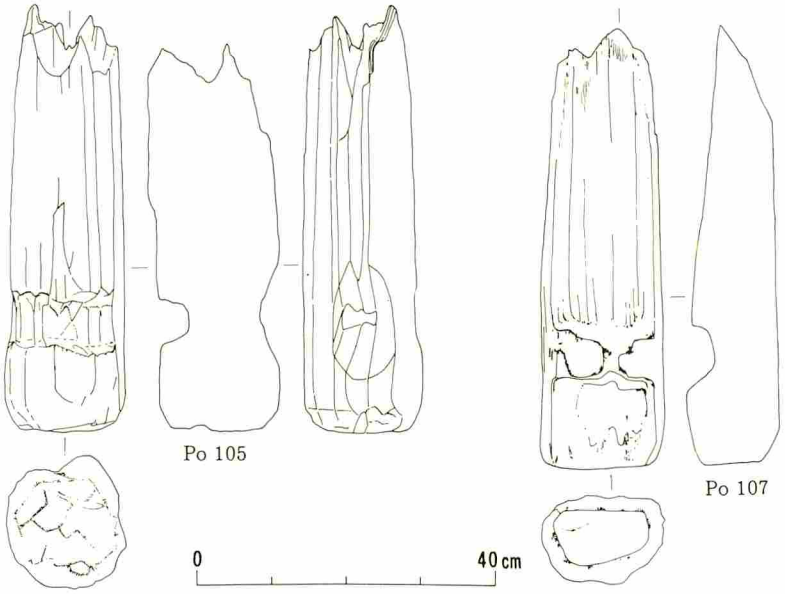


第12図　2号掘立柱建物址出土遺物実測図

出土木材の識別鑑定の結果と写真は第13表、図版29、30の通りである。



第13図　2号掘立柱建物址柱根実測図（1：10）

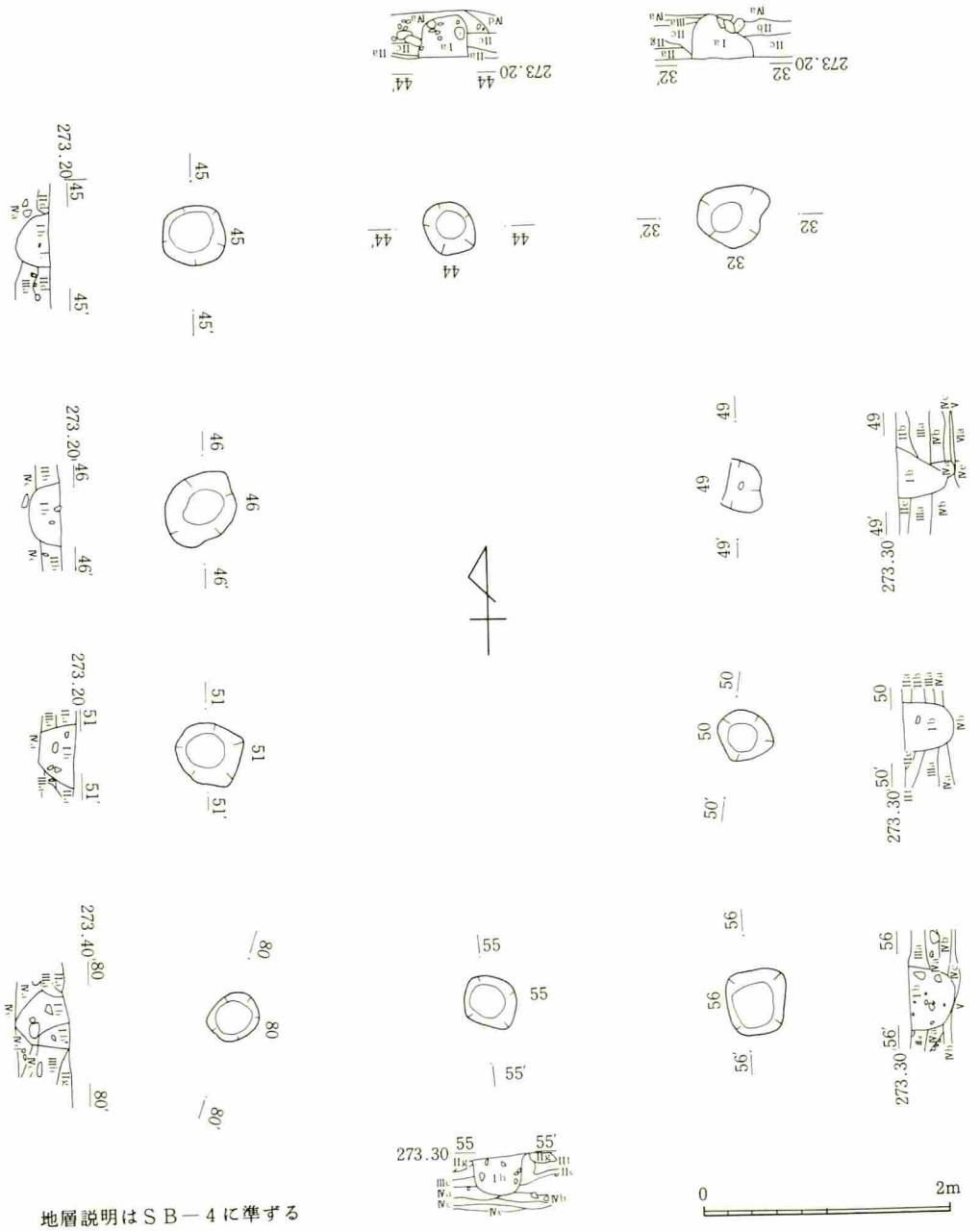


第14図　2号掘立柱建物址柱根実測図

5号掘立柱建物址（第15、16図）　柱根は残存していない。南北に長く、桁行は3柱間、梁間は2柱間で、桁行の方向は北―10°―西である。

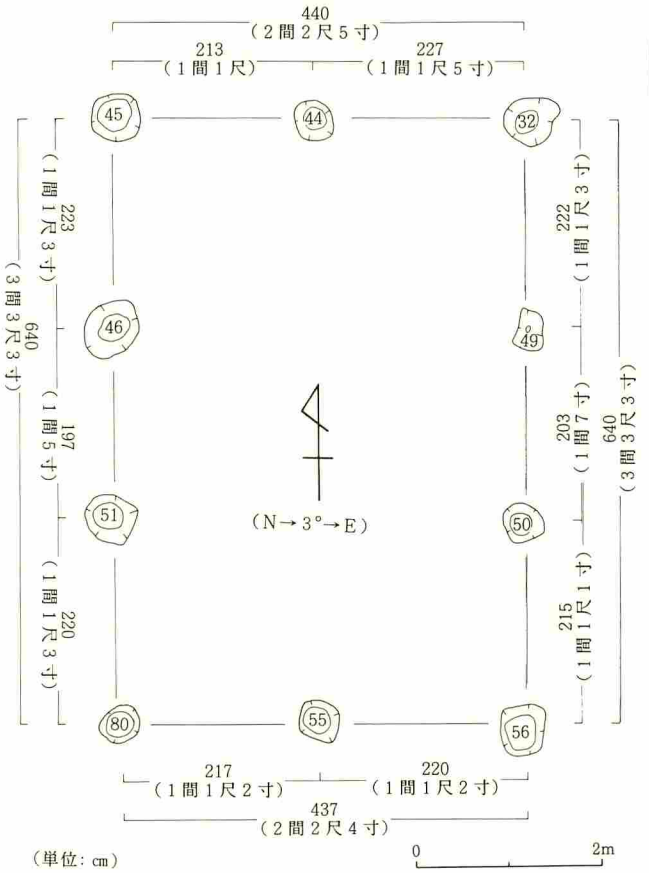
柱間距離の測定点は、柱穴の下場を勘案して、建物の平面形がゆがみのない方形になり、全ての柱穴が直線上に並ぶような点とした。この方法は柱根のない全ての建物に共通して使った。

桁行の長さは両側とも3間3尺3寸（640㎝）で、1柱間の平均は1間1尺1寸（213㎝）であるが、各間の長さは不統一である。梁行の長さは、南側は2間2尺4寸（437㎝）、北側は2間2尺5寸（440㎝）と両方ともほとんど同じ長さであるが各間の長さは不統一である。両方の桁行、梁行ともほとんど同じ長さであるから、建てる時は先ず4隅の柱を建て、その後で間柱を立てたものと考えられる。ただ両桁行の中間の柱間は平均より6寸と8寸短くなっているのは意図的に狭くしたものであろうか。柱穴の上場の形状は10基のうち、5基は隅丸方形、2基は円形に近い方形、3基は円形である。方形の柱穴の方向と建物の方向とは同じではないが、方形の柱穴があるので、柱の全てもしくは一部が面取りをしてあったものと考えてよいであろう。10基の柱穴の平均の深さは34㎝、最大径は54㎝である。49号柱穴は4号掘立柱建物址の23号柱穴で切られているので、4号掘立柱建物址の方が新しいと考えられる。



地層説明はＳＢ－４に準ずる

第15図　５号掘立柱建物址実測図



第16図　5号掘立柱建物址柱穴間実測図

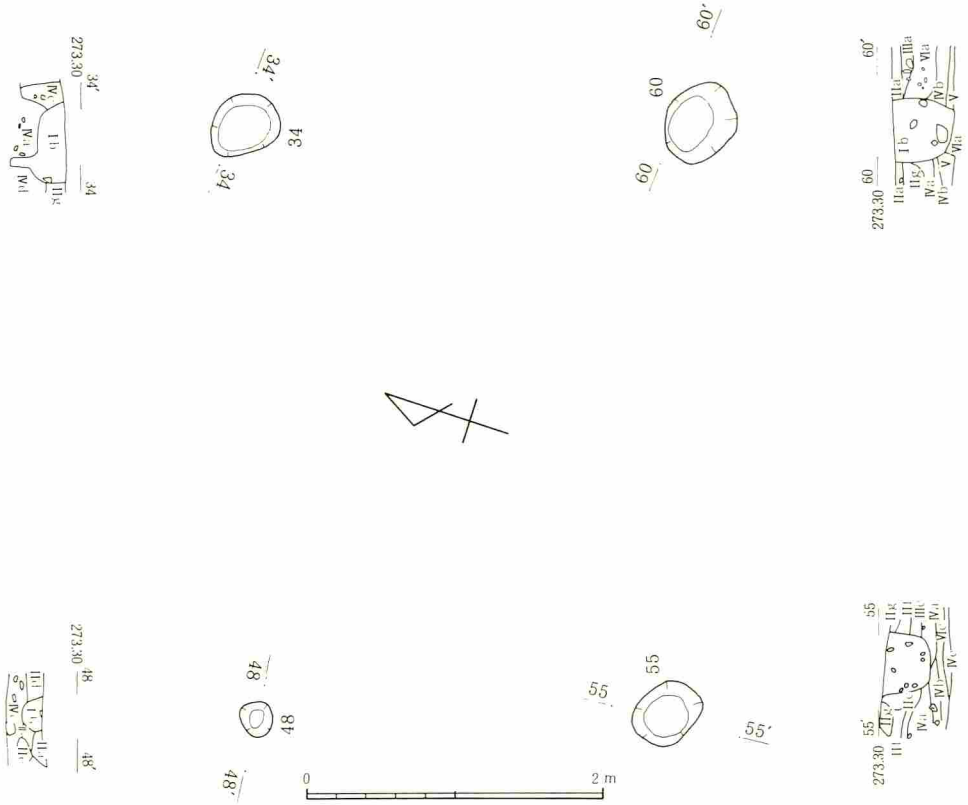
建物番号	柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ（mm）	柱穴の最大径（mm）	
5	32	③	360	640	
	44	①	358	500	
	45	④	270	500	
	46	③	262	700	
	49	①	410	500	ＳＢ４pit 23と切合
	50	④	403	480	
	51	①	292	590	
	55	①	308	520	ＳＢ９と共用
	56	①	360	620	
	80	④	437	430	
	平均		35cm	55cm	

（註）１、柱と柱穴の形状
① 隅丸方形　④ 円形
② □>○　⑤ 不整形
③ □<○

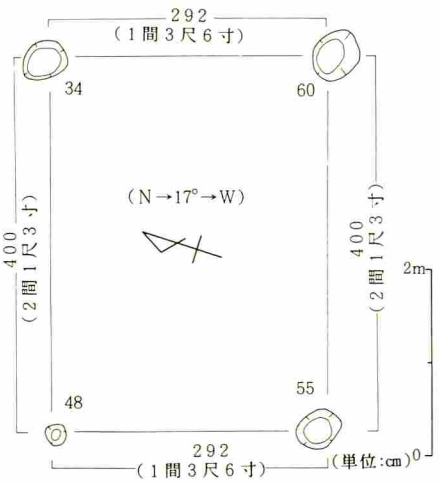
第２表　５号掘立柱建物址
柱穴・計測一覧表

９号掘立柱建物址（第17、18図）　桁行２間１尺３寸（400cm）、梁行１間３尺６寸（292cm）の長方形の建物である。桁行方向が北―17°―西 と他の建物と方向を異にし、48号柱穴が小さい点などから、建物とするのに若干の危惧がある。これには桁行が長いにもかかわらず、隅柱の柱穴しかないのであるが、11号、12号建物のように桁行が長くても、間柱がないものもある。

柱穴の形状は３基が円形、１基が円形に近い方形である。



第17図　9号掘立柱建物址実測図　　地層説明はＳＢ－４に準ずる



建物番号	柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ(mm)	柱穴の最大径(mm)	
9	34	④	378	490	ＳＢ４pitを切っている
	48	④	136	490	
	55	③	308	520	ＳＢ５と共通
	60	④	407	600	
	平均		31cm	47cm	

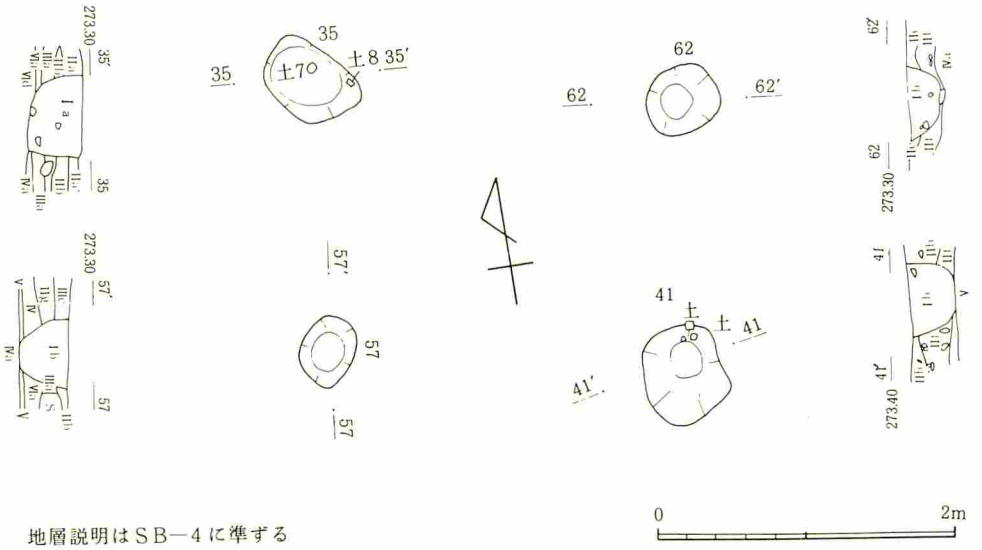
(註) 1、柱と柱穴の形状
① 隅丸方形　④ 円形
② □>○　⑤ 不整形
③ □<○

第３表　９号掘立柱建物址
柱穴・計測一覧表

第18図　９号掘立柱建物址柱穴間実測図

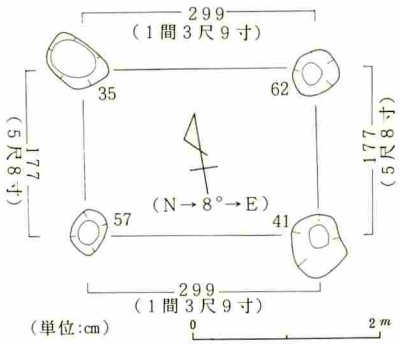
10号掘立柱建物址（第19、20図）この建物群の中で最も小さい４本柱の建物で、東西に長く、桁行方向は北―8°―東である。４本の柱を直角に連結するには若干の無理があるが、４号掘立柱建物址の内側にある柱穴群を連結するにはこれが最も妥当である。他の遺構にも例があるように、建物の平面形は歪んでいたと考えてもよいであろうが、ここでは柱穴の下場を勘案して隅は直角とした。

柱穴の平面形は２基が隅丸方形、１基が円形に近い方形、１基が円形である。方形の柱穴の線と桁行方向とは一致しないが、柱穴の形式は柱に似せて掘ったと考えられるので、柱は面取りをしてあったであろう。柱穴の深さの平均は31㎝、最大径の平均は56㎝である。



地層説明はＳＢ―４に準ずる

第19図　10号掘立柱建物址実測図



第20図　10号掘立柱建物址柱穴間実測図

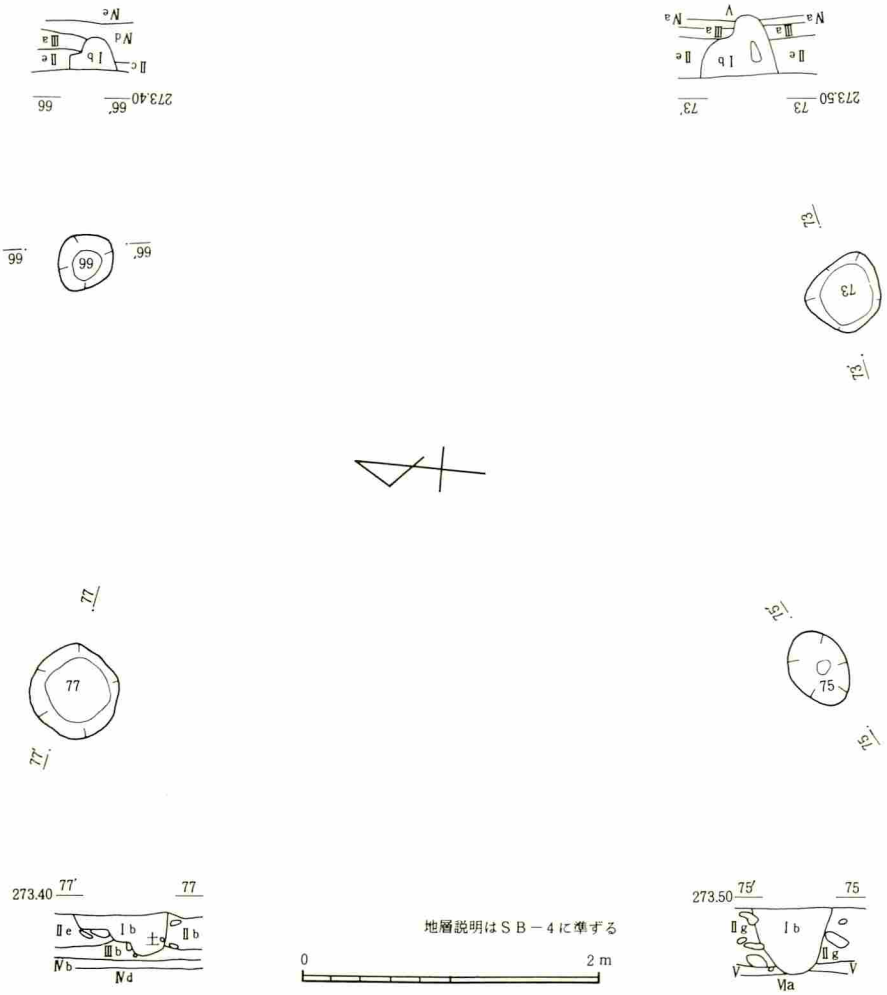
建物番号	柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ（㎜）	柱穴の最大径（㎜）	
10	35	②	370	380	
	41	①	313	670	
	57	④	328	480	
	62	①	216	490	
	平均		31㎝	56㎝	

（註）１、柱と柱穴の形状
① 隅丸方形　④ 円形
② □>○　⑤ 不整形
③ □<○

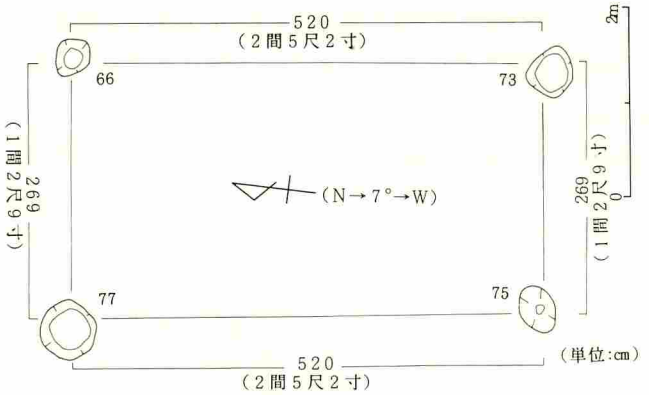
第４表　10号掘立柱建物址
柱穴・計測一覧表

11号掘立柱建物址（第21、22図）　この建物群の中で最も細長い４本柱の建物で、南北に長く桁行方向は北－7°－西である。桁行が２間５尺２寸（520*cm*）と長いにもかかわらず間柱がないのは、９号、12号掘立柱建物址と同じである。

柱穴の平面形とその方向、柱の断面形は10号掘立柱建物址と類似している。柱穴の平均の深さは34*cm*、最大径の平均は54*cm*である。



第21図　11号掘立柱建物址実測図



第22図　11号掘立柱建物址柱穴間実測図

建物番号	柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ（mm）	柱穴の最大径（mm）	
11	66	③	221	420	
	73	③	413	570	
	75	④	450	530	
	77	③	216	490	
	平均		34cm	54cm	

（註）1、柱と柱穴の形状

① 隅丸方形　④ 円形

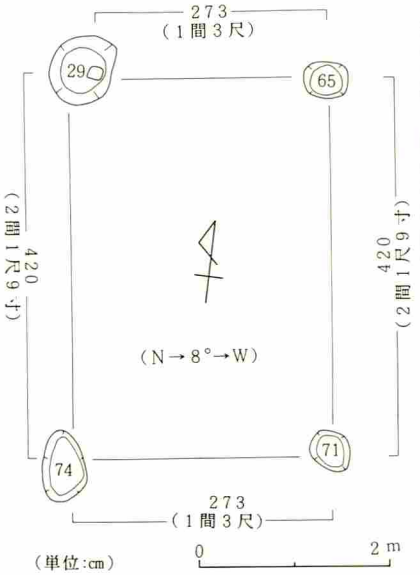
② □>○　⑤ 不整形

③ □<○

第５表　11号掘立柱建物址
柱穴・計測一覧表

地層説明はSB―４に準ずる

第23図　12号掘立柱建物址実測図



第24図　12号掘立柱建物址
柱穴間実測図

建物番号	柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ(mm)	柱穴の最大径(mm)	
12	29	④	548	830	SB4と共通
	65	③	372	490	
	71	③	360	500	
	74	⑤	260	740	
	平均		39cm	64cm	

(註) 1、柱と柱穴の形状
① 隅丸方形　④ 円形
② □>○　⑤ 不整形
③ □<○

第6表　12号掘立柱建物址
柱穴・計測一覧表

12号掘立柱建物址（第23、24図）　南北に長い4本柱の建物で、桁行方向は北—8°—西である。桁行が2間1尺9寸（420cm）と、長いにもかかわらず間柱がないのは9号、11号掘立柱建物址と同じである。

柱穴の平面形とその方向は10号、11号掘立柱建物址と似ているが、隅の65号、71号柱穴は正しく桁行、梁行方向と一致している。柱穴の深さの平均は32cm、最大径の平均は64cmである。

二群の建物は次のとおりである。

4号掘立柱建物址（第25、26図）　9本の柱根が残存していた。柱が残っていなかったのは25号柱穴とそれに対応する反対側の30号柱穴、及び22号柱穴である。柱間距離は柱の中心点と、柱根が残っていなかった柱穴の柱間距離測定点は、2号掘立柱建物址と同じように柱穴の下場の中心点とした。

建物は東西南北に正確に間口がとってあるが、意図的にこのように建てたものかどうかは判断が難しい。

建物の平面の大きさは南北が2間5尺4寸3分（528cm）と2間5尺4寸9分（530cm）、東西は2間5尺4寸3分（528cm）と2間5尺8寸2分（540cm）と非常に正確である。しし、各柱間距離は最長の間が1間2寸6分（188cm）、最短の間が5尺9寸4分（180cm）で、かなり不正確である。平均柱間距離は5尺8寸5分（177cm）で、1間（181.18cm）に満たないことが注目される。平均柱間距離を唐尺（1尺＝29.67cm）で換算すると、5尺9寸7分となり、3分（9mm）の違いであるので唐尺を使った可能性がある。この建物の柱を建てる方法も先ず隅柱を立ててから間柱を立てたものではないかと考えられる。

柱の断面は9本のうち8本は面取りがしてあり、第7表のように□>○が5本、○>□が3本で面取りした面は梁方向と平行しており、この点でも2号掘立柱建物址より丁寧な建築である。柱底から約5cm上部には2号掘立柱建物址と同じように、全ての柱に切り込み溝があり、立っていた時のその方位は特に規則性はない。又カンザシ（簪）も残存していなかっ

たので、これを嵌め込んだ溝とも思われない。

柱底の標高は最高が27号柱で272.897m、最低が23号柱で272.555mでその差34.2cmで、全柱底の標高の平均は272.670mである。23号柱の底には2枚の礎板が敷いてあり、これは柱の高さを調整したものかも知れない。

柱根は2号掘立柱建物址と同様に全てが北西方向に傾いていた。柱の傾きの平均は6°31'で、その平均方位は北—29°32′—西である。仮に建物の高さが5mとすれば、最上端で約57cmの傾となる。

柱穴は12基（第25図 ）で、この内半数は方形に意識して掘っている。柱根を面取りして方形にしようとしたものが全9本のうち8本であるから、柱穴より柱根の方が方形を意識していると考えてよいであろう。柱穴を結ぶ線は、桁行と平行しており、他の建物とは違い、規則正しく掘っている。

各柱穴の深さと最大径は別表のとおりである。その平均は深さ53cm、最大径85cmで2号掘立柱建物址に次いで大きい。この点でもしっかりした重要なものであった事がうかがえる。

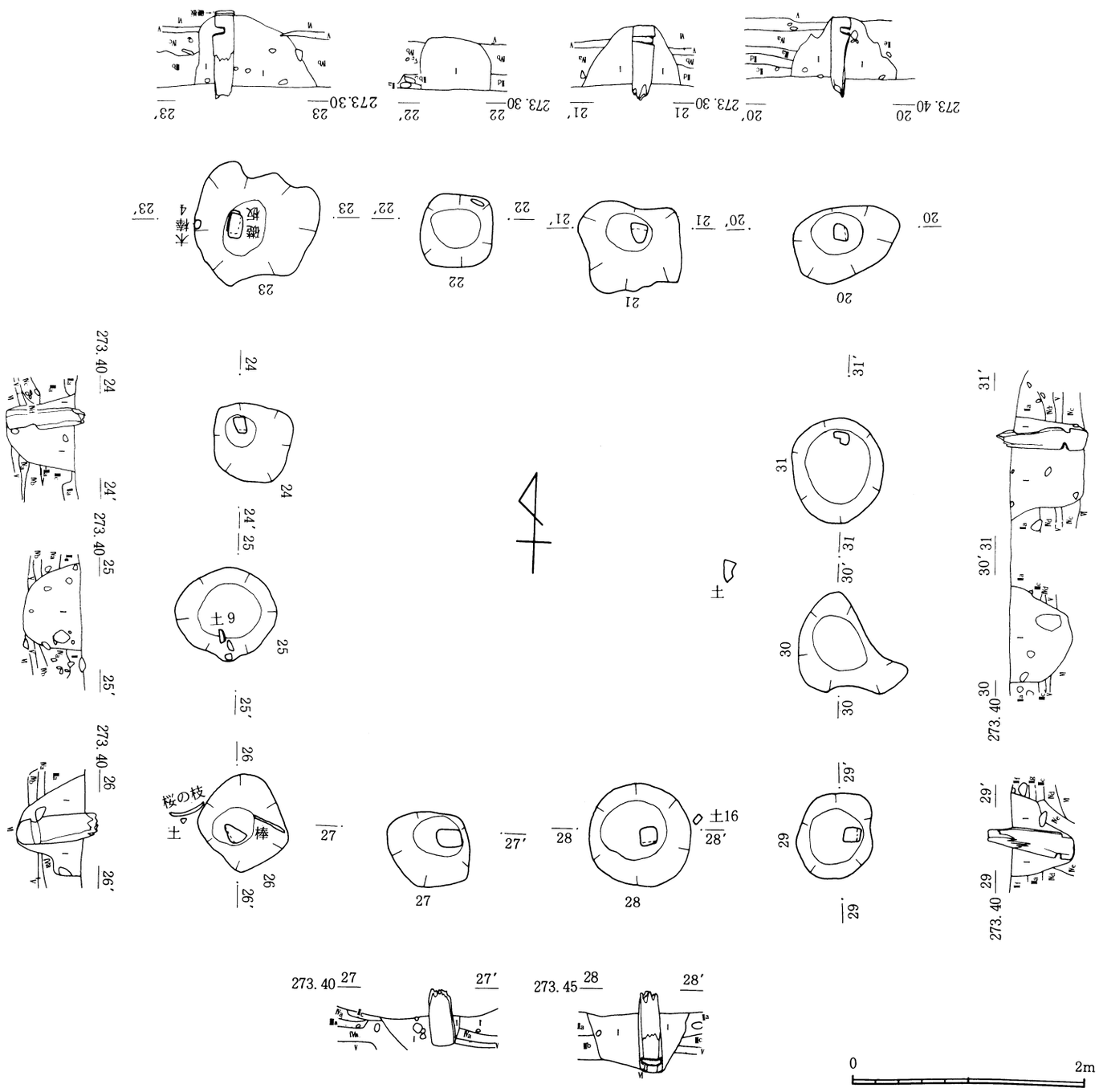
また、4号掘立柱建物址の23号柱穴は、5号掘立柱建物址の49号柱穴を切って掘られているので、4号掘立柱建物址の方が新しい。この事と4号掘立柱建物址には柱が残存している事から、最も新しく建築された建物と思われる。

4号掘立柱建物址の遺構については以上である。これら諸点から総合して考えると、特別な建物であったと思われる。後述するように祭祀的な遺物や遺構も検出されているので、神社のような祭祀遺構に伴う建物であった事が推察されるのである。

柱　礎板　残存していた9本の柱の長さは、788mmから520mmの間で、平均690mmである。その太さの最大径は、242mmから172mmの間にあり平均196mmで、2号掘立柱建物址より40mm太い。全てのものが立ったまま残っていた。すべての柱は上端が細くなり、凹部が一ケ所ないし数ケ所ある。全ての柱は割材で作られ、その年輪から推定すると六つ割～八つ割位にしたものを使っている。柱の断面形は、20、21、23、29、31号柱の5本はやや丸味を帯びた方形、24、26、27号柱の3本は円形に近い方形、28号柱は円形を呈する。また27号柱を除く8本には柱底より約10mm上に切り込み溝がある。ただし、29号柱だけはほとんど周囲にある。この4号掘立柱建物址の柱の溝は、2号掘立柱建物址のものより比較的深く、よく掘っている。

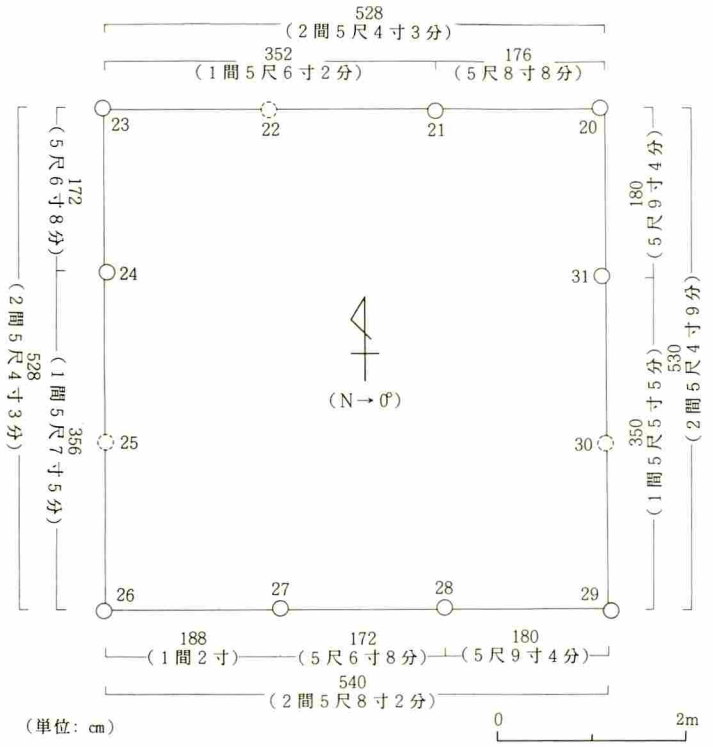
溝の切断面には鋭利な刃物で掘ったと思われる痕跡がある。中には鋸で切ったかと見られるものもあるが、用具を推定することは難しく、そのほとんどは斜めに2～3ケ所階段状に切り込んでいるので斧状の利器を使用したとも考えられる。柱底の切断面は段階的に切っていて、鋸で一気に切ったものではない。柱底の切断面は全て直角に切っていないことが注目され、切り込み溝の下が高くなっているものが21号、23号、24号、28号柱で、20号、26号はその反対に低くなっている。これは意識的にこう切ったもののように感じられる。

柱の底の高さは標高272.897mを最高とし、最低は272.555mで、その差34.2cmで、平均



Ⅰ　柱穴の埋め土、小礫と鉄分を含む
Ⅱa　黄褐色砂層
Ⅱb　黄青白色砂層、粗い砂粒に腐食土を含む
Ⅱc　黒褐色粘土層、礫、鉄分を含む
Ⅱd　灰褐色砂層　〃
Ⅱe　青灰褐色砂層　〃
Ⅱf　黄青白色砂層、礫を含む
Ⅱg　黄色砂層　〃
Ⅲa　暗緑色粘質層、粗い砂粒を含む
Ⅲb　青灰褐色砂層、粘土、鉄分を含む
Ⅲc　暗灰色粘土層
Ⅳa　青灰色砂層、小礫を含み、粒子が粗い
Ⅳb　〃　砂粒が細かい
Ⅳc　青灰白色砂層
Ⅳd　暗緑色粘質層、細かい砂粒を含む
Ⅳe　〃　細かい砂粒、小礫を含む
Ⅴ　黒色粘質層、泥炭層
Ⅵ　青灰色粘土層、細かい砂粒を含む

第 25 図　4 号 掘 立 柱 建 物 址 実 測 図



第26図　4号掘立柱建物址柱間実測図（1：80）

272,670mである。

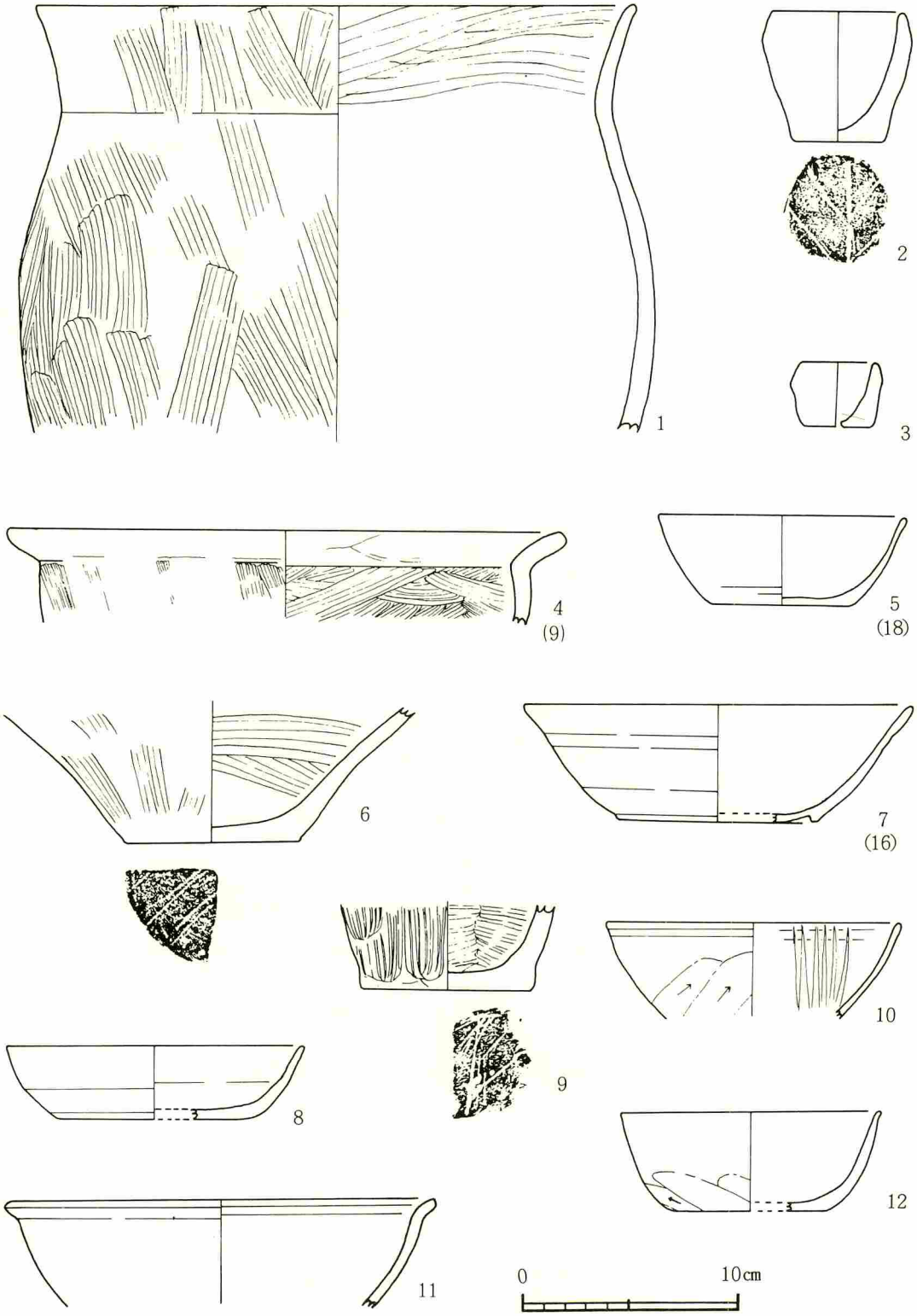
全体的にみると、柱の製作技法は基本的には2号掘立柱建物址と同じと考えられる。

また23号柱の下には、柱の高さを調整したと思われる礎板が2枚置かれていた。これは1枚の板を2枚に割ったものである。

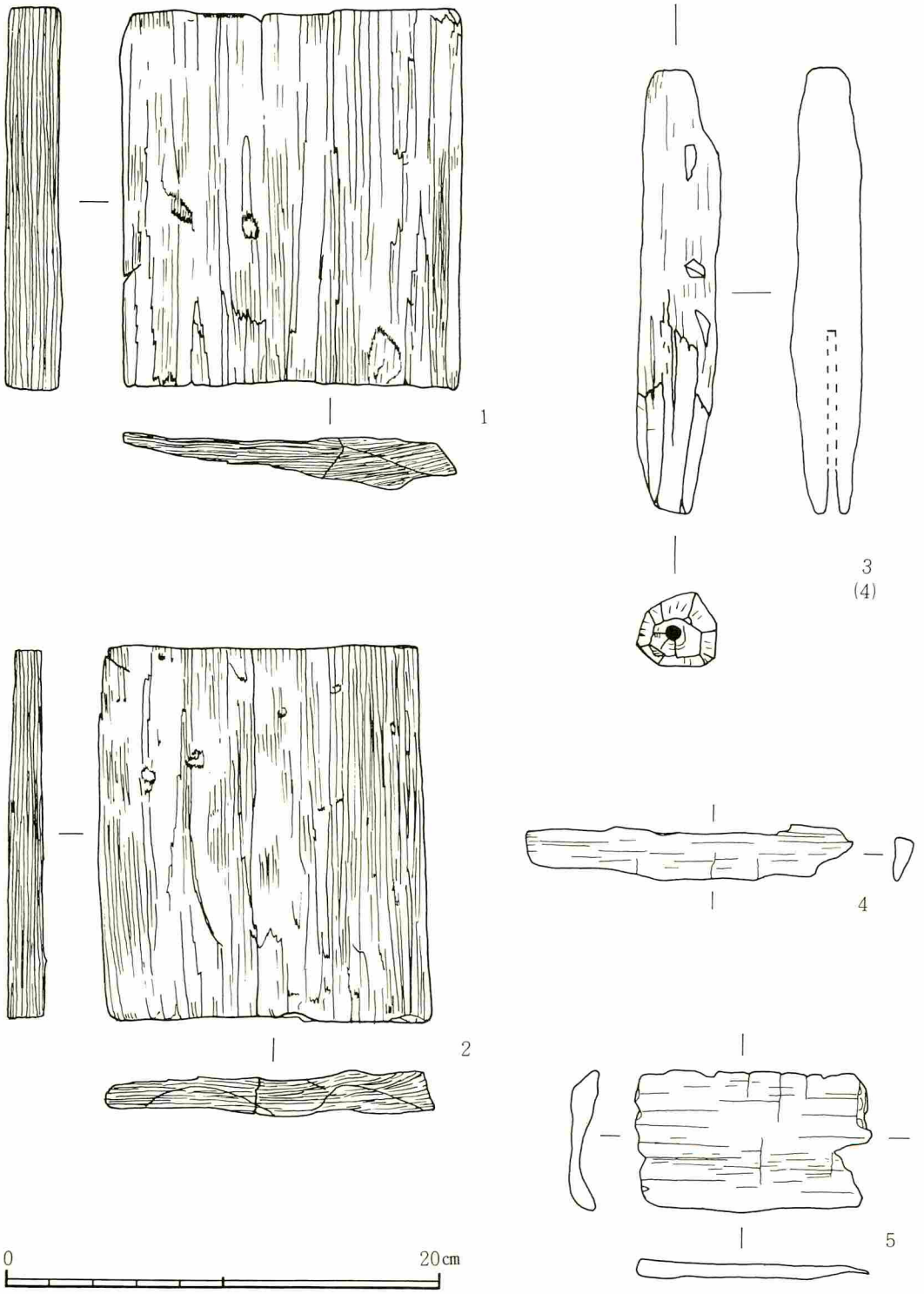
建物番号	柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ（mm）	柱穴最大径（mm）	備考	柱の番号	柱の形状	柱の最大径（mm）	柱の長さ（mm）	柱の底標高	備考
4	20	⑤	539	940		20	②	183	698	272.633	
	21	①	524	860		21	②	190	658	272.632	
	22	①	450	640	SB9 pit 55に切られている					pit	
	23	③	607	1080	SB5 49と切合	23	②	242	721	272.555	礎板あり
	24	①	581	680		24	③	183	630	272.584	
	25	④	500	880							
	26	②	583	840		26		208	698	22.680	
	27	③	285	800		27	③	189	52	272.897	
	28	④	512	900		28	③	186	705	272.722	
	29	④	548	830		29	②	172	788	272.720	
	30	⑤	557	880							
	31	④	612	920		31	②	212	764	272.610	
	平		53	85cm				19.6	69cm	m 272.670	

第7表　4号掘立柱建物址
柱穴・計測一覧表

（註）1、柱と柱穴の形状
① 隅丸方形　④ 円形
② □>○　⑤ 不整形
③ □<○

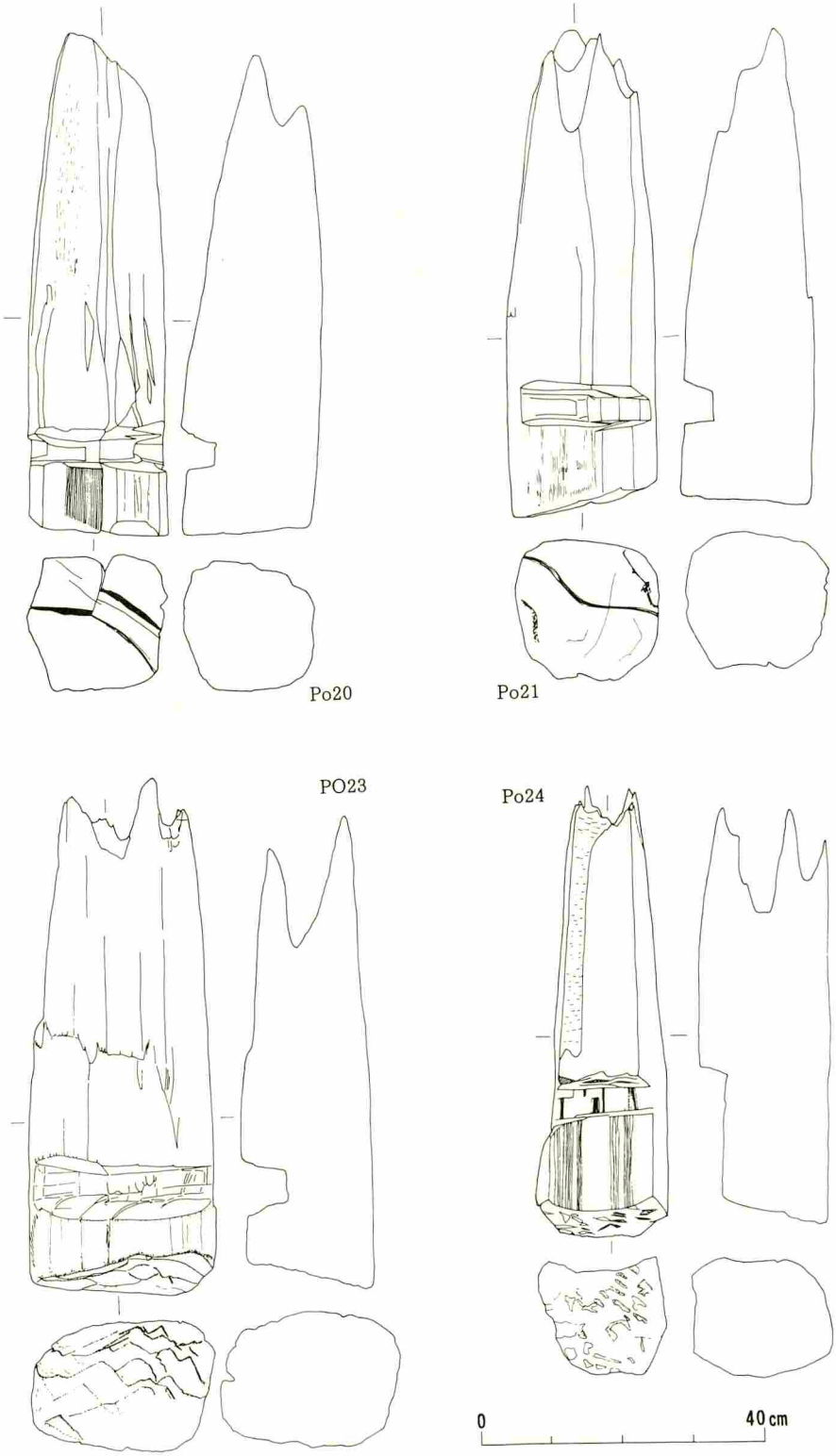


第27図　4号・10号掘立柱建物址出土遺物実測図

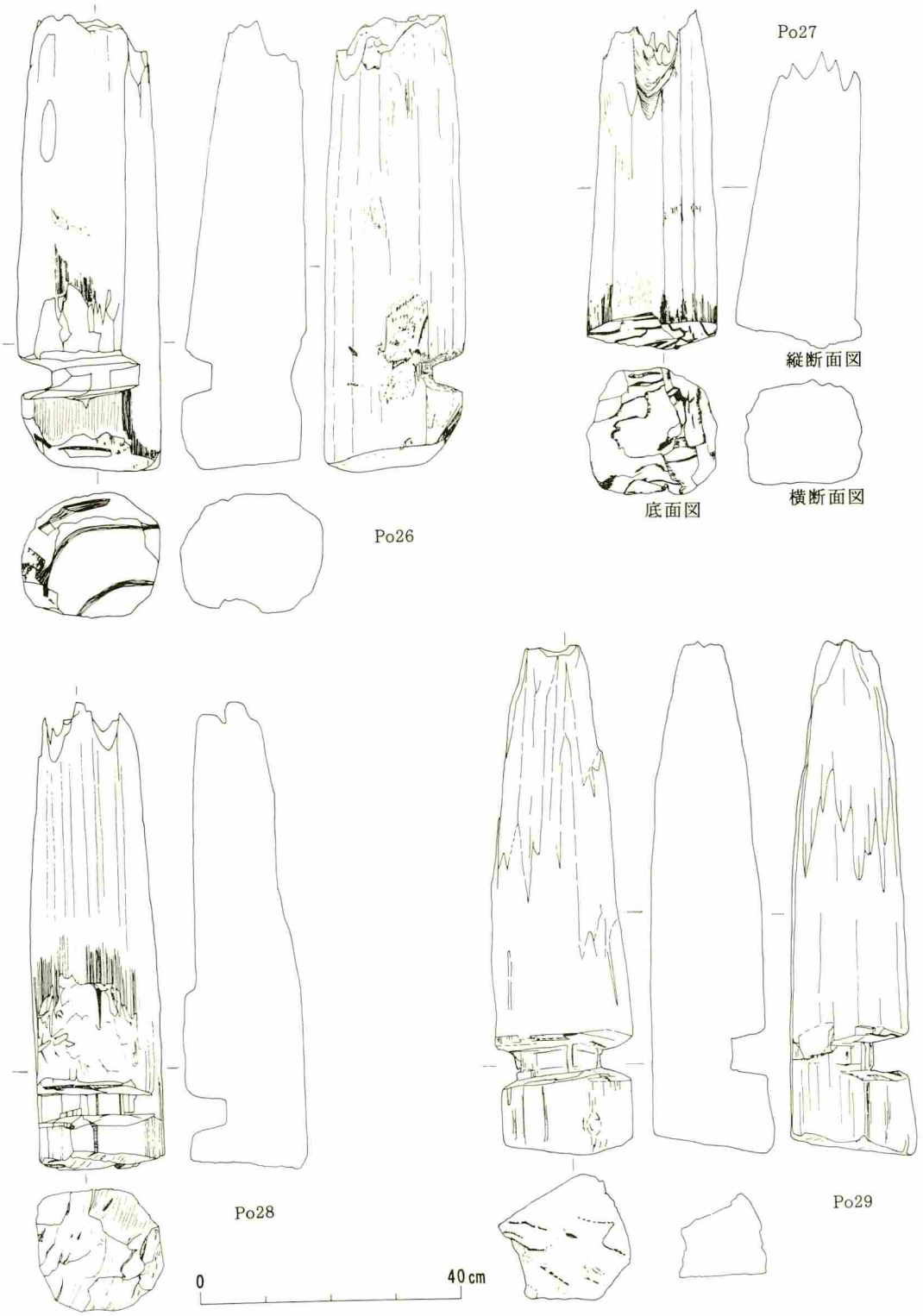


第28図　4号掘立柱建物址出土木製品実測図

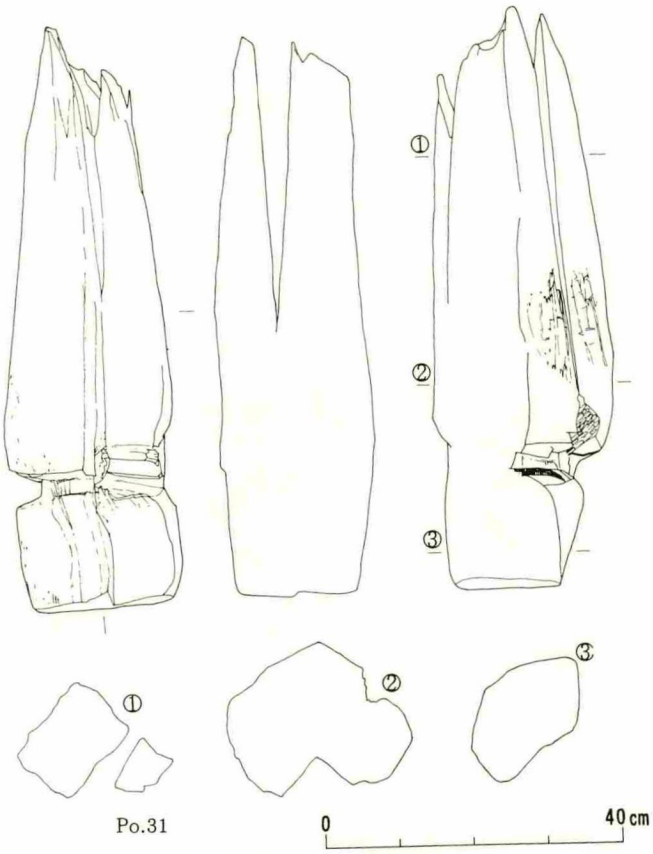
1・2　P O23の礎板
3　有孔棒状木製品　　4・5　板残欠



第29図　4号掘立柱建物址柱根実測図



第30図　4号掘立柱建物址柱根実測図



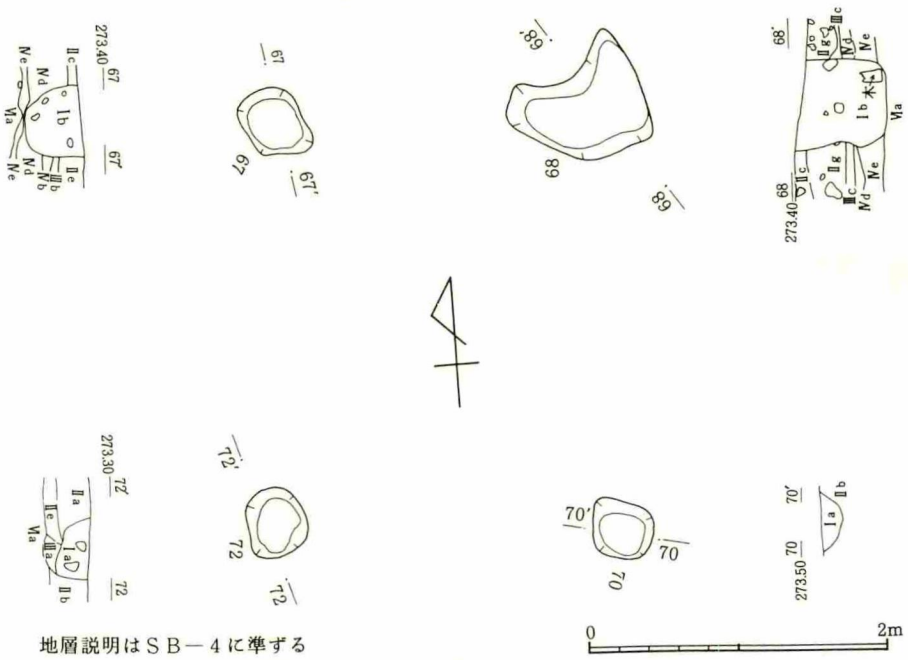
第31図　4号掘立柱建物址柱根実測図

13号掘立柱建物址

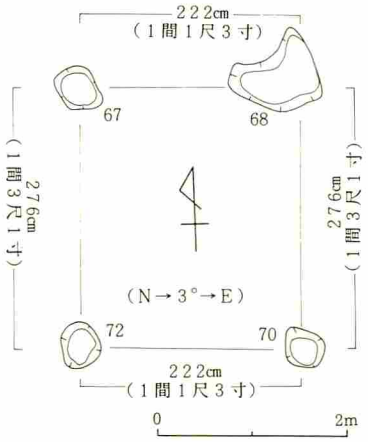
（第32、33図）

南北に長い4本柱の建物で、桁行方向は北―3°―東である。10号、14号掘立柱建物址とこの建物は最も狭い部類である。

柱穴の平面形は2基が隅丸方形であるから、4号掘立柱建物址の例のように柱も方形に近いものを立てたと考えられる。柱穴の深さの平均は32㎝、最大径の平均は64㎝である。



第32図　13号掘立柱建物址実測図



第33図　13号掘立柱建物址柱穴間実測図（1：80）

建物番号	柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ（㎜）	柱穴の最大径（㎜）	
13	67	①	340	540	
	68	⑤	578	1050	
	70	①	153	480	
	72	④	215	480	
	平均		32㎝	64㎝	

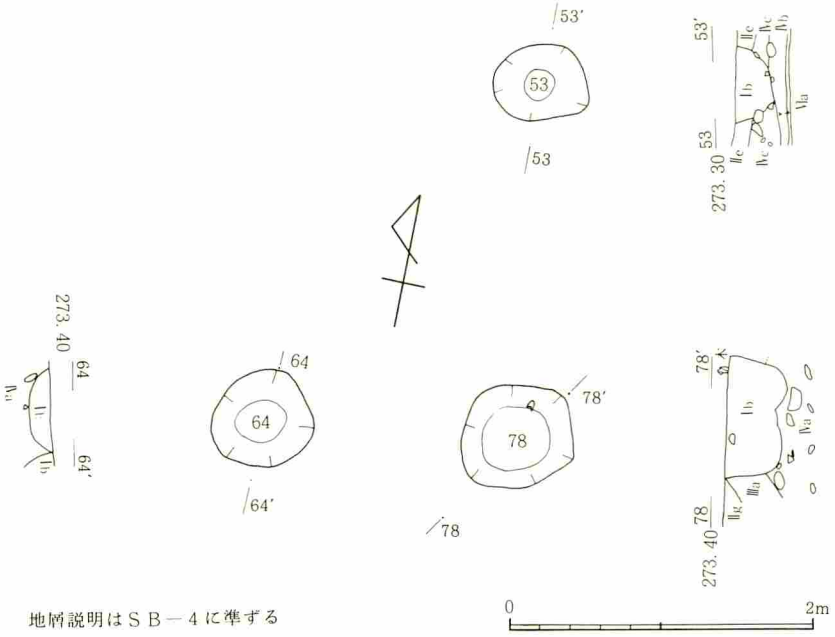
（註）1、柱と柱穴の形状
① 隅丸方形　④ 円形
② □>○　⑤ 不整形
③ □<○

第８表　13号掘立柱建物址柱穴・計測一覧表

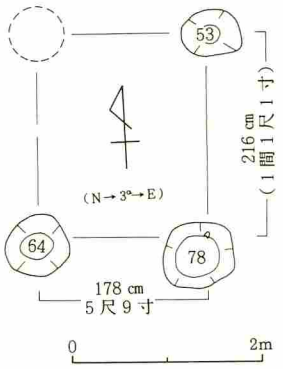
14号掘立柱建物址（第34、35図）南北に長い建物で、桁行方向は北―3°―東である。10号、13号掘立柱建物址とこの建物は最も狭い部類である。

78号柱穴には柱根の一部が残っていたが、他にはなかった。ただ柱穴が１基検出出来なかったのであるが、柱根と他の２基の柱穴があるので、一応１棟の建物とした。柱穴は２基が円形に近い方形であるから、方形状の柱であったことが推察出来る。柱穴の深さの平均は25.4㎝で最大径の平均は72㎝である。

柱根が僅かに残っていたが、そのほとんどは腐食してしまって、原型は留めていなかった。



第34図　14号掘立柱建物址実測図



第35図　14号掘立柱建物址
柱穴間実測図（1：80）

建物番号	柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ（mm）	柱穴の最大径（mm）	柱番号	柱の形状	柱の最大径（mm）	柱の長さ（mm）	柱の底の標高
14	53	②	240	670					
	64	④	143	660					
	78	②	380	830	78	④	45	65	
	平均		25.485cm	72cm					

（註）1、柱と柱穴の形状
① 隅丸方形　④ 円形
② □>○　⑤ 不整形
③ □<○

第9表　14号掘立柱建物址
柱穴・計測一覧表

その他の柱穴と柱根（第36図）　B群の中にもA群のように建物として連結出来ない柱穴が約10基あった。この中には大きいものもあるが、平均より小さいものが多い。また40号柱穴には柱根が残っていたにもかかわらず、他に連結出来るものがなかった。

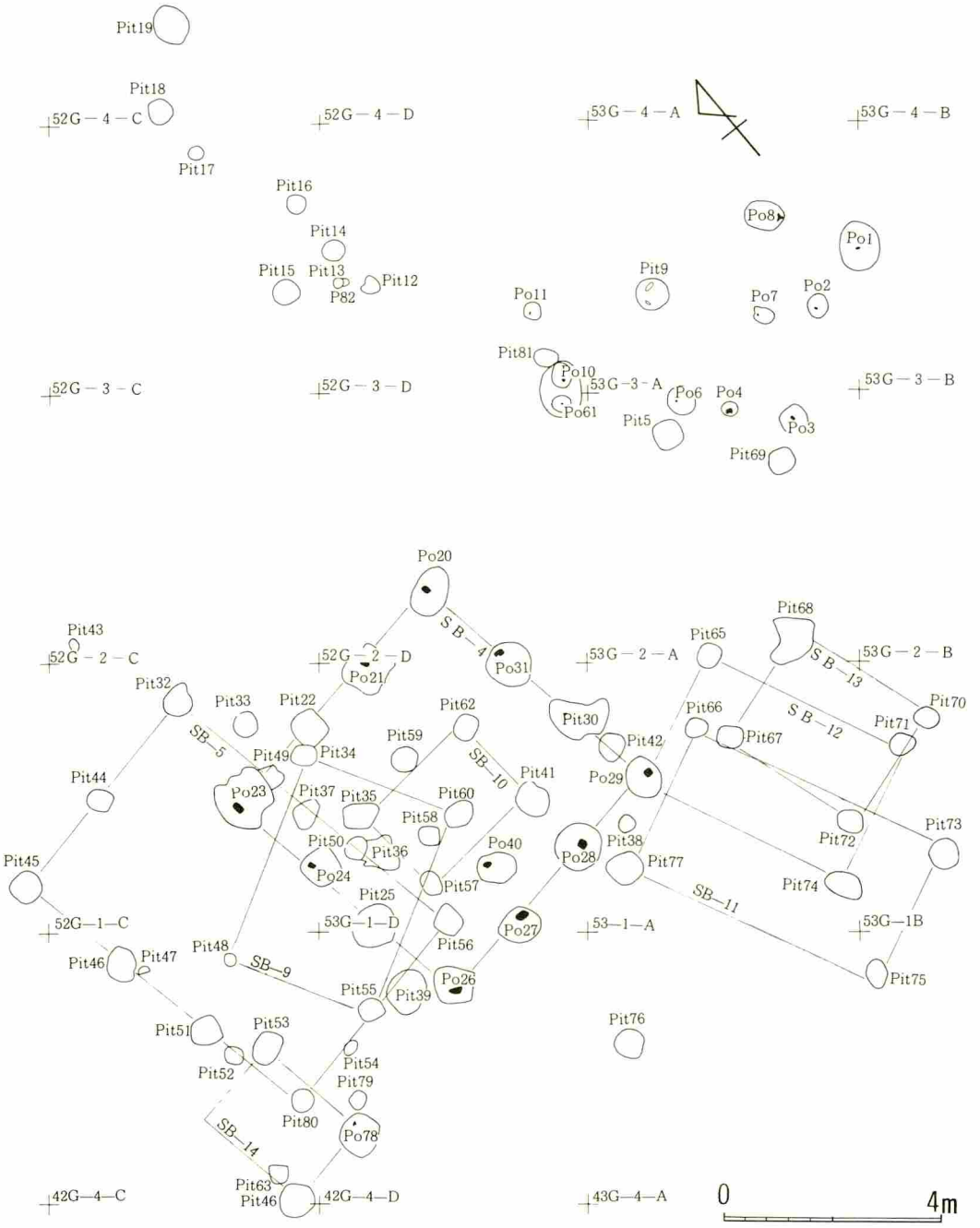
以上の結果に基づいて建物の前後関係等について若干説明を加えておく。

A群は明らかにB群より古く、貧弱な建物であったと思われる。

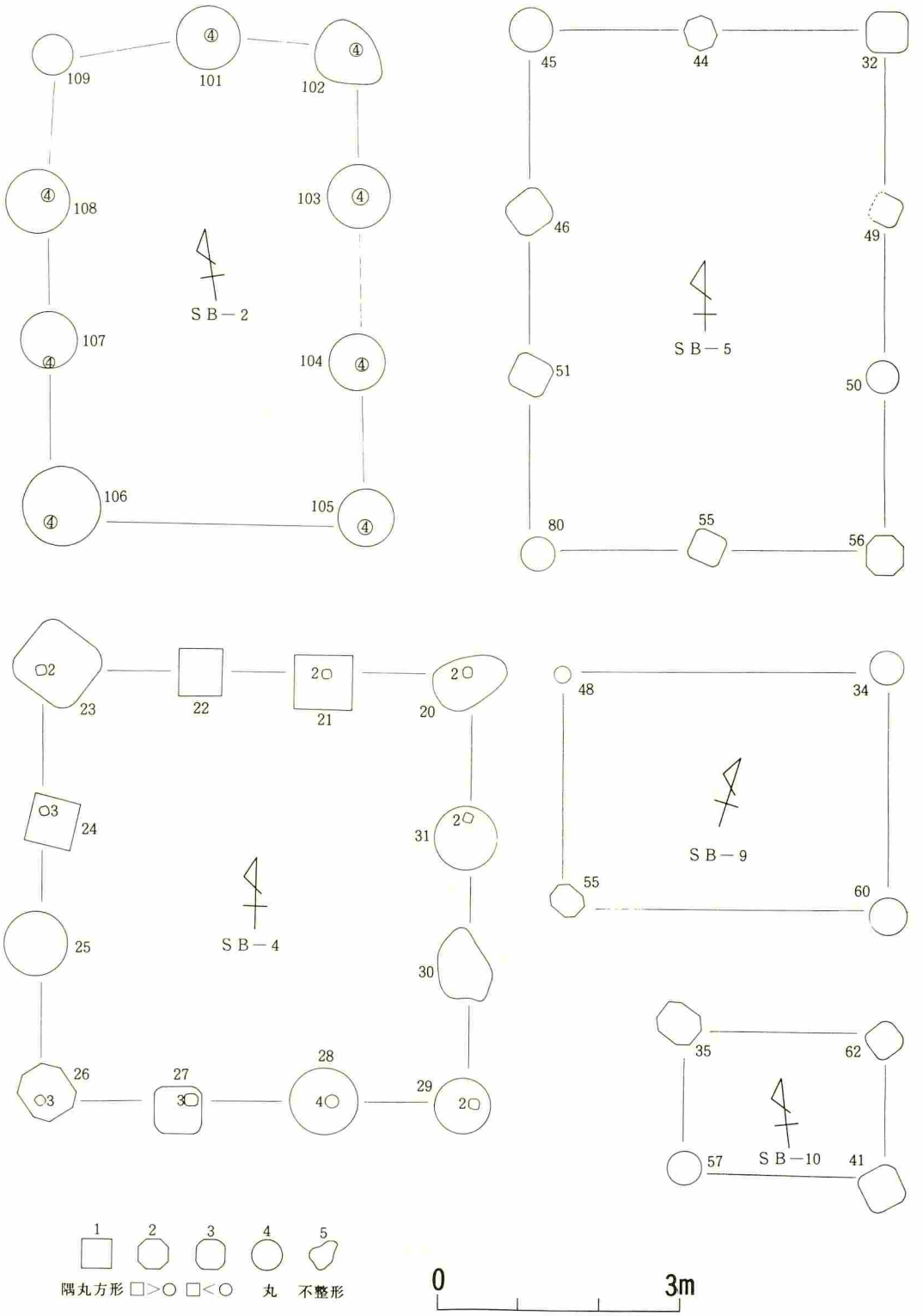
B群では2号掘立柱建物址は早い時期に建てられ、この遺跡が廃絶するまで使用され、2号掘立柱建物址と同じ頃かやや遅れて、10号、11号、12号掘立柱建物址が建てられ、さらに5号、13号掘立柱建物址となり、最後に4号、14号掘立柱建物址となって、廃絶時には2号、4号掘立柱建物があったように考えられる。

遺　　物　土師器、須恵器が出土した。4号、5号掘立柱建物址付近から出土した遺物について一括説明する。なお2号掘立柱建物址については前述したとおりであり、52、53グリッドにまたがる掘立柱柱穴群付近では遺物は出土しなかった。

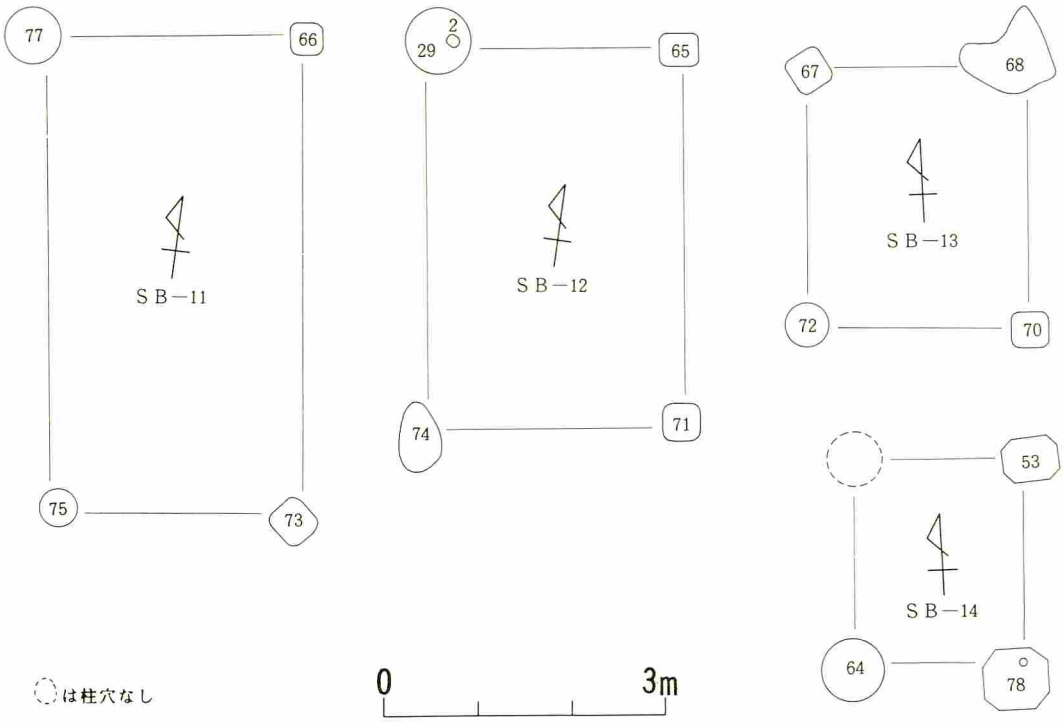
4号と5号掘立柱建物址付近では建物が重複しており、また高床式であるため、必ずしもこれらの建物に伴う遺物であるとは言えないが一応ここで取扱う。遺物の全体量は比較的少量であって、須恵器については、この中で占める量の割合は他の遺構に比べて高率であることが言える。須恵器の完形品はなく、土師器の手捏式土器2個と坏1個だけが完形で出土し、そのうちの1個は底部に焼成前の穿孔がある。時期は第27図№1の甕が7世紀後半の鬼高期から8世紀前半の真間期にあたり、№8の皿が真間期中葉頃と見られるから、古墳・奈良時代に比定出来る。他の土師器は9世紀から10世紀前半頃の国分式に比定出来よう。


Pit19
Pit18
52G－4－C
52G－4－D
53G－4－A
53G－4－B
Pit17
Pit16
Pit14
Pit15
Pit13
Pit12
P82
Po8
Po1
Pit9
Po11
Po7
Po2
Pit81
Po10
53G－3－A
Po6
Po4
53G－3－B
52G－3－C
52G－3－D
Po61
Pit5
Po3
Pit69
Po20
SB－4
Pit68
Pit43
52G－2－C
52G－2－D
Po21
Po31
53G－2－A
Pit65
SB－13
53G－2－B
Pit32
Pit33
Pit22
Pit62
Pit30
Pit66
SB－12
Pit70
Pit71
SB－5
Pit49
Pit34
Pit59
SB－10
Pit42
Pit67
Pit44
Pit41
Po29
Po23
Pit37
Pit35
Pit60
Pit58
Pit73
Pit72
Pit45
Pit50
Pit36
Po40
Pit38
Po28
Pit77
Po24
Pit57
Pit74
Pit25
SB－11
52G—1—C
53G—1—D
Po27
53—1—A
53G—1B
Pit46
Pit47
Pit48
SB－9
Pit56
Pit55
Pit39
Po26
Pit75
Pit51
Pit53
Pit76
Pit54
Pit52
Pit79
Pit80
SB－14
Po78
Pit63
Pit46
42G—4—C
42G—4—D
43G—4—A
0
4m

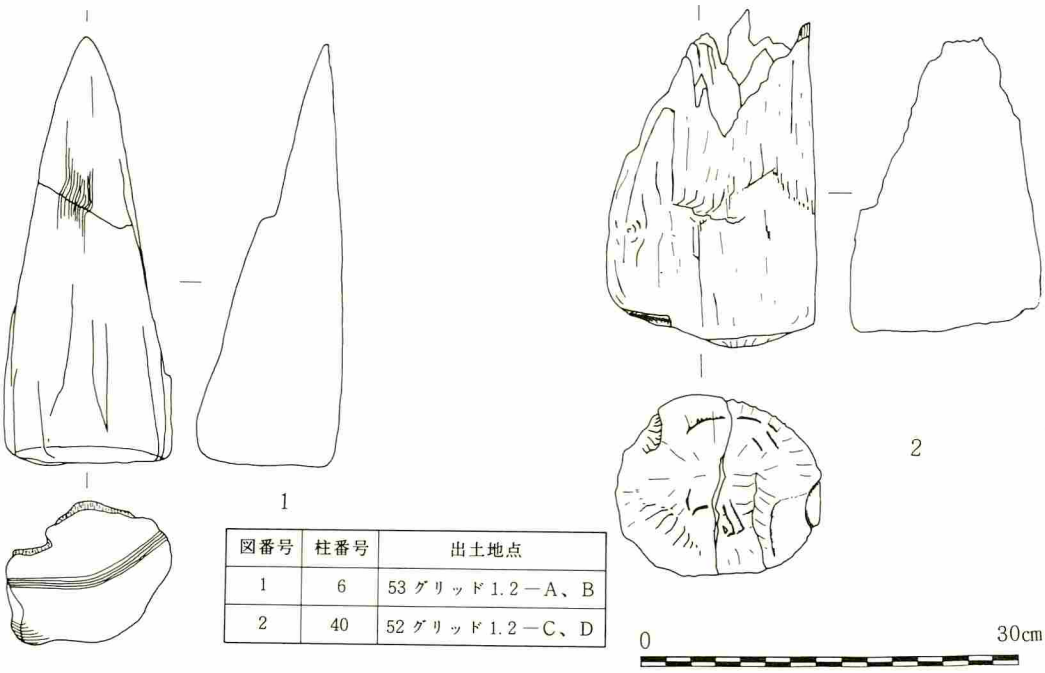
第36図　柱穴間実測図



第37図　掘立柱建物址模式図（1：80）

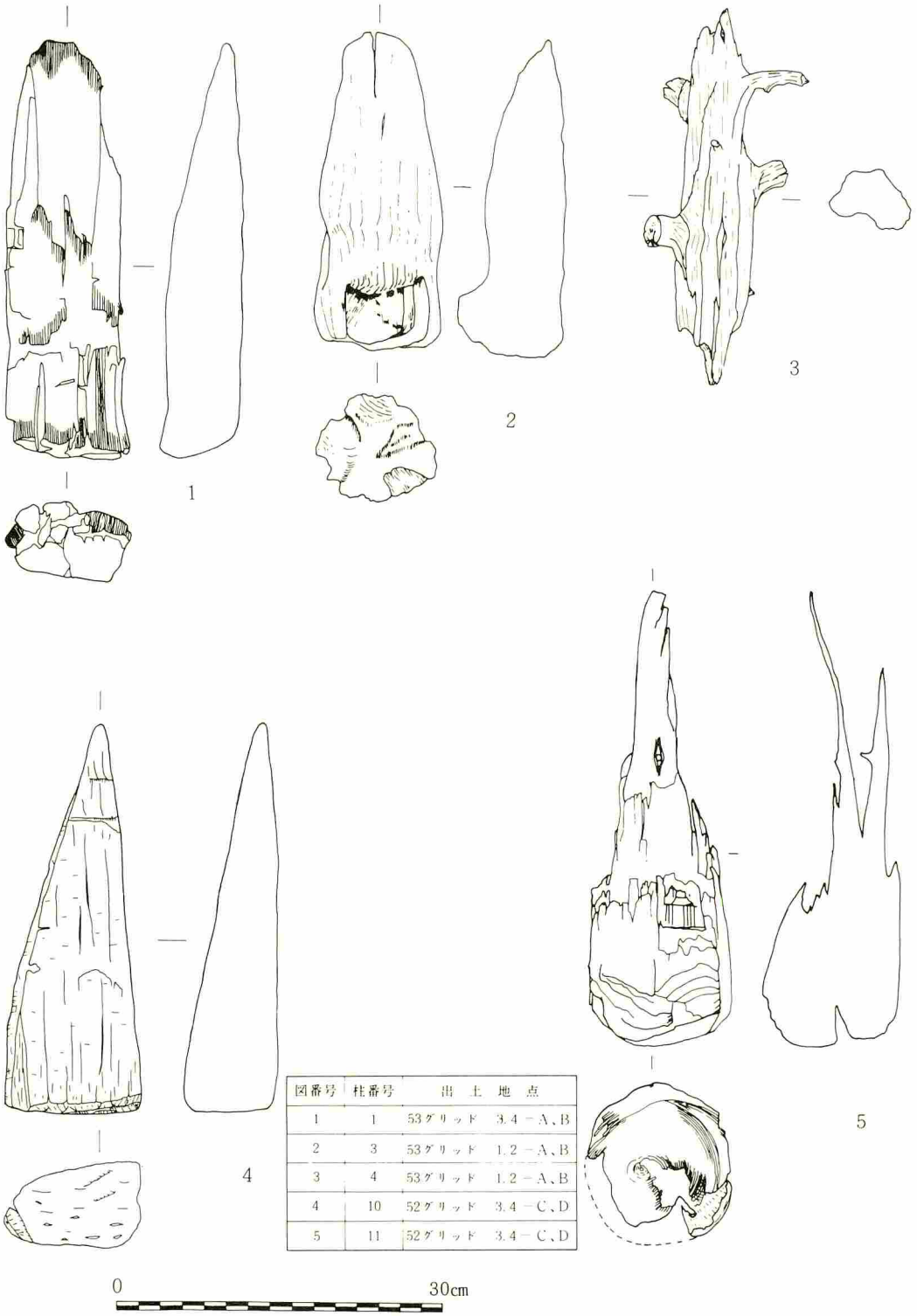


第38図　掘立柱建物址模式図（1：80）



図番号	柱番号	出土地点
1	6	53 グリッド 1.2 −A、B
2	40	52 グリッド 1.2 −C、D

第39図　グリッド出土柱根実測図（1：6）



図番号	柱番号	出土地点
1	1	53グリッド 3.4－A、B
2	3	53グリッド 1.2－A、B
3	4	53グリッド 1.2－A、B
4	10	52グリッド 3.4－C、D
5	11	52グリッド 3.4－C、D

第40図　グリッド出土柱根実測図（1：6）

グリットNo.	柱穴番号	柱穴の形状	柱穴の深さ(mm)	柱穴の最大径(mm)	柱番号	柱の形状	柱の最大径(mm)	柱の長さ(mm)	柱の底の標高	備考
53	1	④	378	900	1	④	102	378	272,672	
	2	④	317	510	2		38	96	272,950	
	3	②	190	500	3	④	98	281	272,832	
	4	④	197	300	4	④	68	344	272,900	
	5	③	238	600						
	6	③	288	580	6	④	117	330	272,772	
	7	④	170	400	7	③	38	80	272,857	
	8	④	172	750	8		30	115	272,895	
	9	④	152	640						
52	10	④	281	480	10	①	121	346	272,741	
	11	④	350	340	11	④	131	414	272,697	
	12	⑤	223	340						
	13	④	110	190						
	14	④	330	440						
	15	④	234	510						
	16	④	306	370						
	17	④	163	280						
	18	④	270	480						
	19	④	468	740						
	33	②	340	520						
	37	③	393	580						
	39	③	427	880						
53	42	④	439	520						
52	43	②	162	260						
	47	③	284	220						
	54	④	283	310						
	58	③	220	450						
	61	④	327	1070	61	④	—	—	(272,736)	(　)内推定
42	63	④	167	400						
53	69	③	60	560						
43	76	④	182	580						
42	79	④	375	340						
52	81	④	280	430						
	40	④	233	740	40	④	153	260	273,080	
	56	①	362	620						
	59	④	426	520						

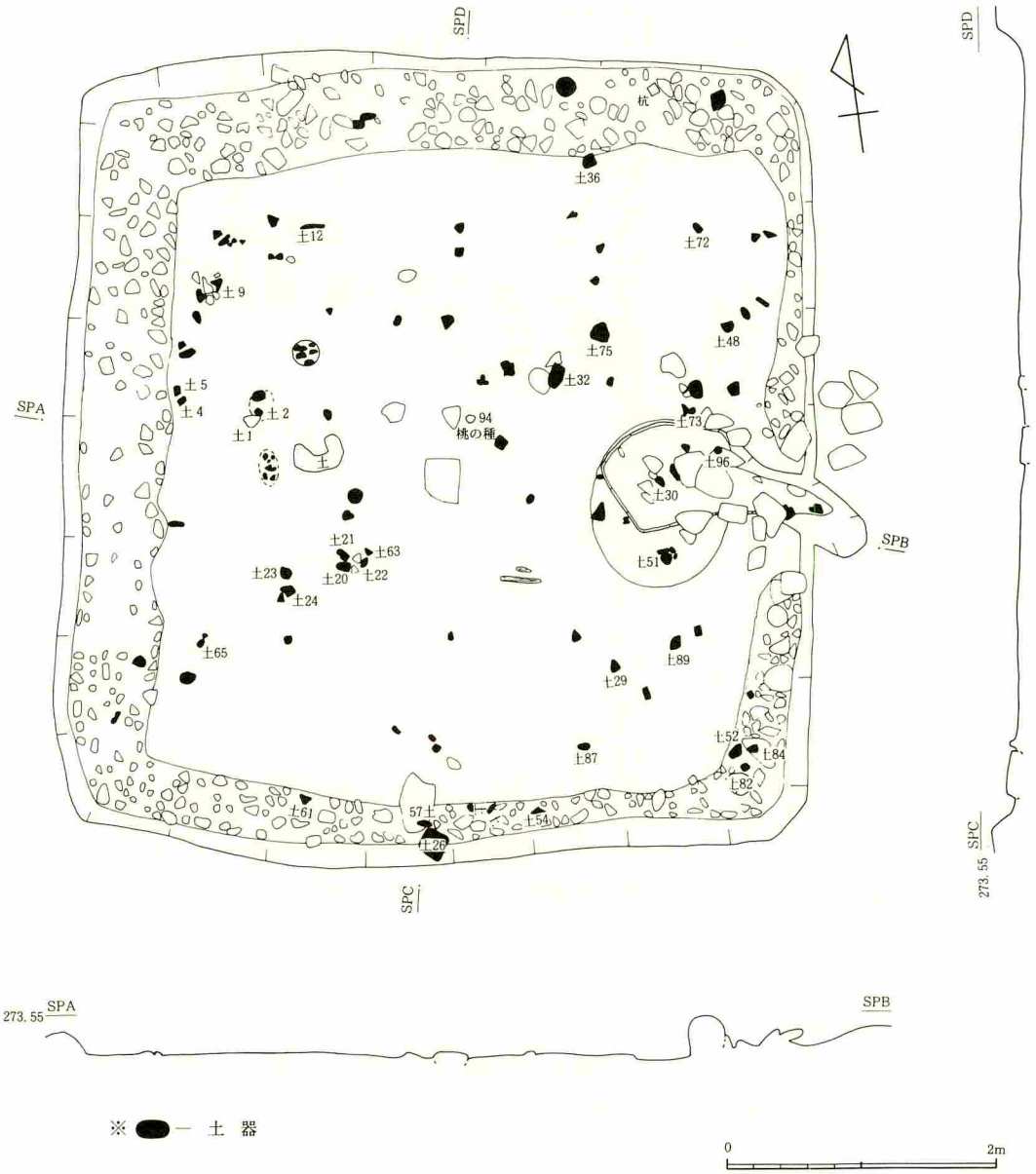
第10表　掘立柱建物址柱穴・計測一覧表

竪穴式住居址と遺物

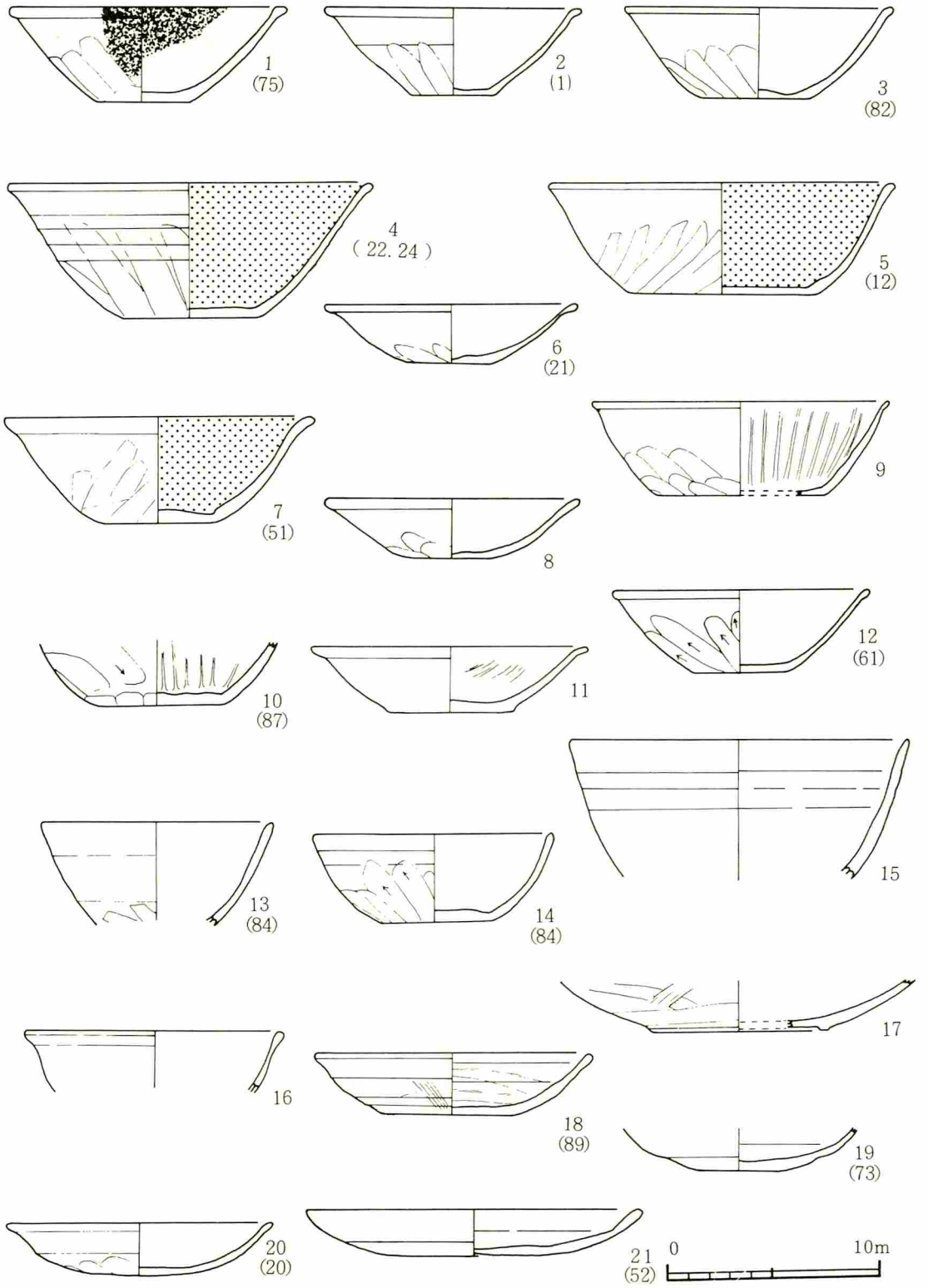
1号住居址付近では、土師器の出土状態等から判断すると他にも何軒かの住居址があったと思われるが、切合や氾濫によって破壊されたのであろう。

1号住居址　規模は最大であって、住居址床面の内周を掘って小礫を埋めた特殊な施設をもつ。この施設は住居内を乾燥させるためのものと考えられる。

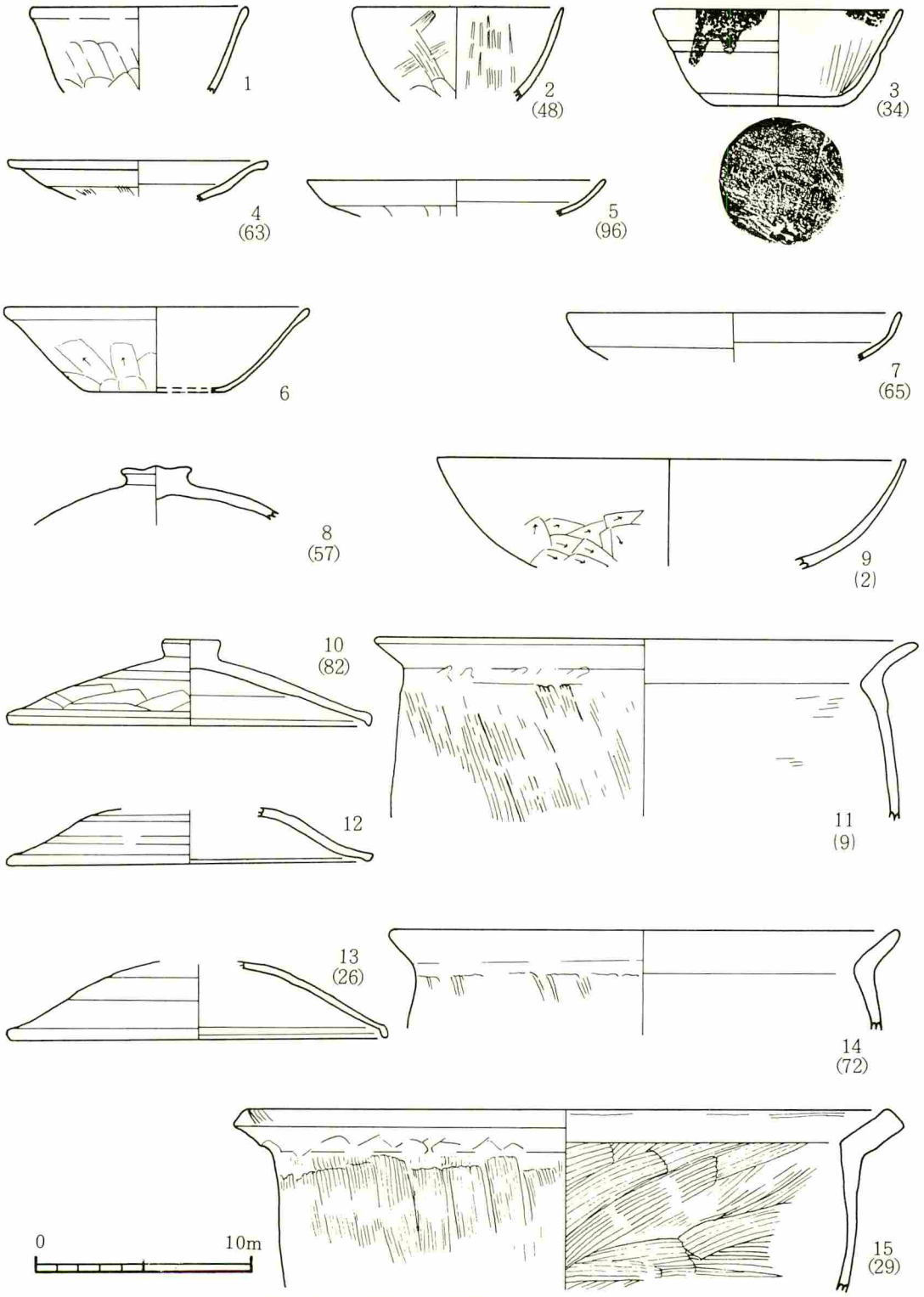
遺物の出土量は、6号、7号、8号住居址に比較して著しく多量で器種も豊富である。中には内面黒色土器や灯明皿、坏の蓋や須恵器等を含む。時期は第42図No.9が9世紀中葉であろうか。他はかまど内出土のNo.6の皿や、No.8等が国分式期の10世紀中葉、No.4、15などが10世紀後半であろう。



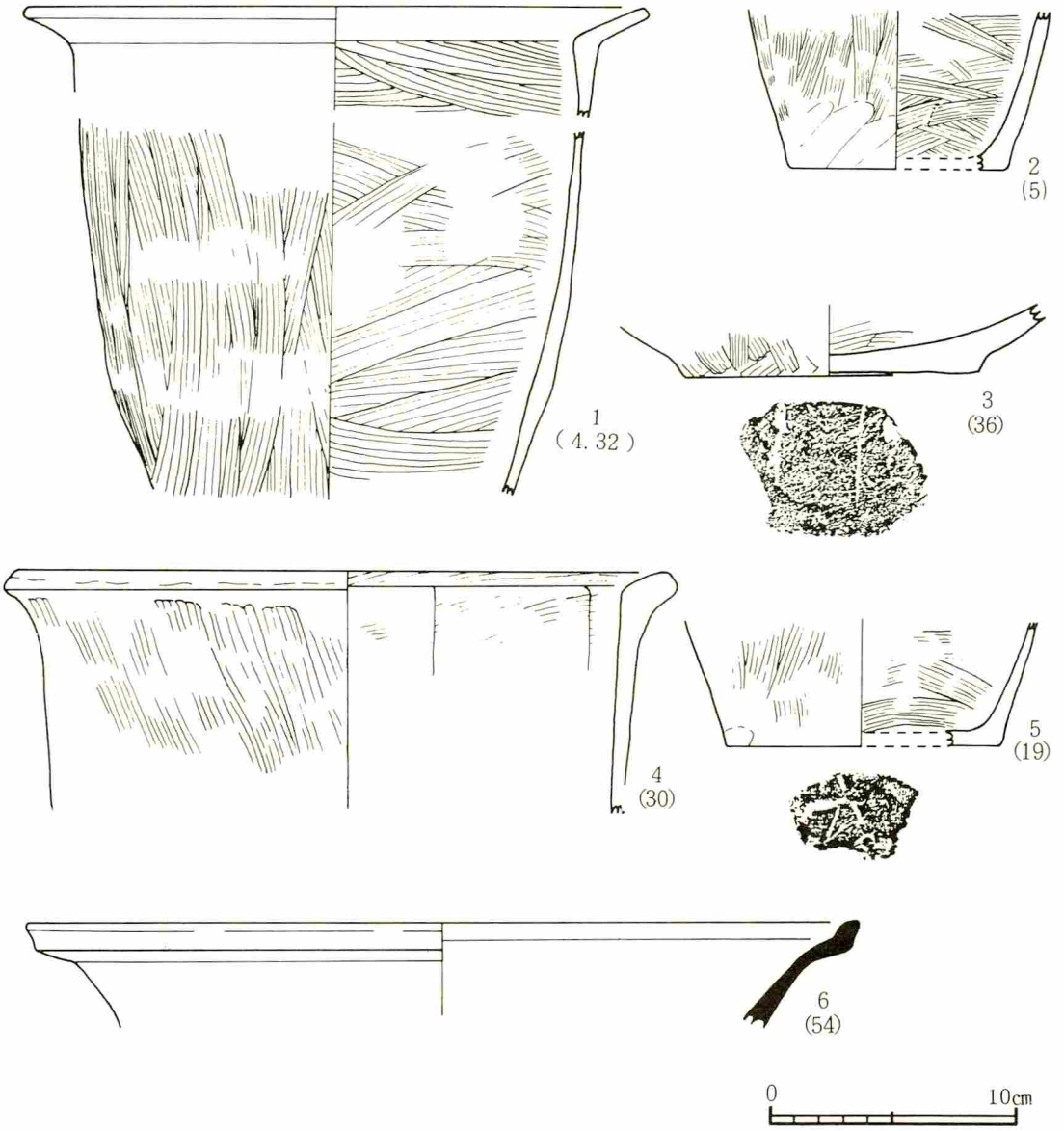
第41図　1号住居址実測図



第42図　1号住居址出土遺物実測図



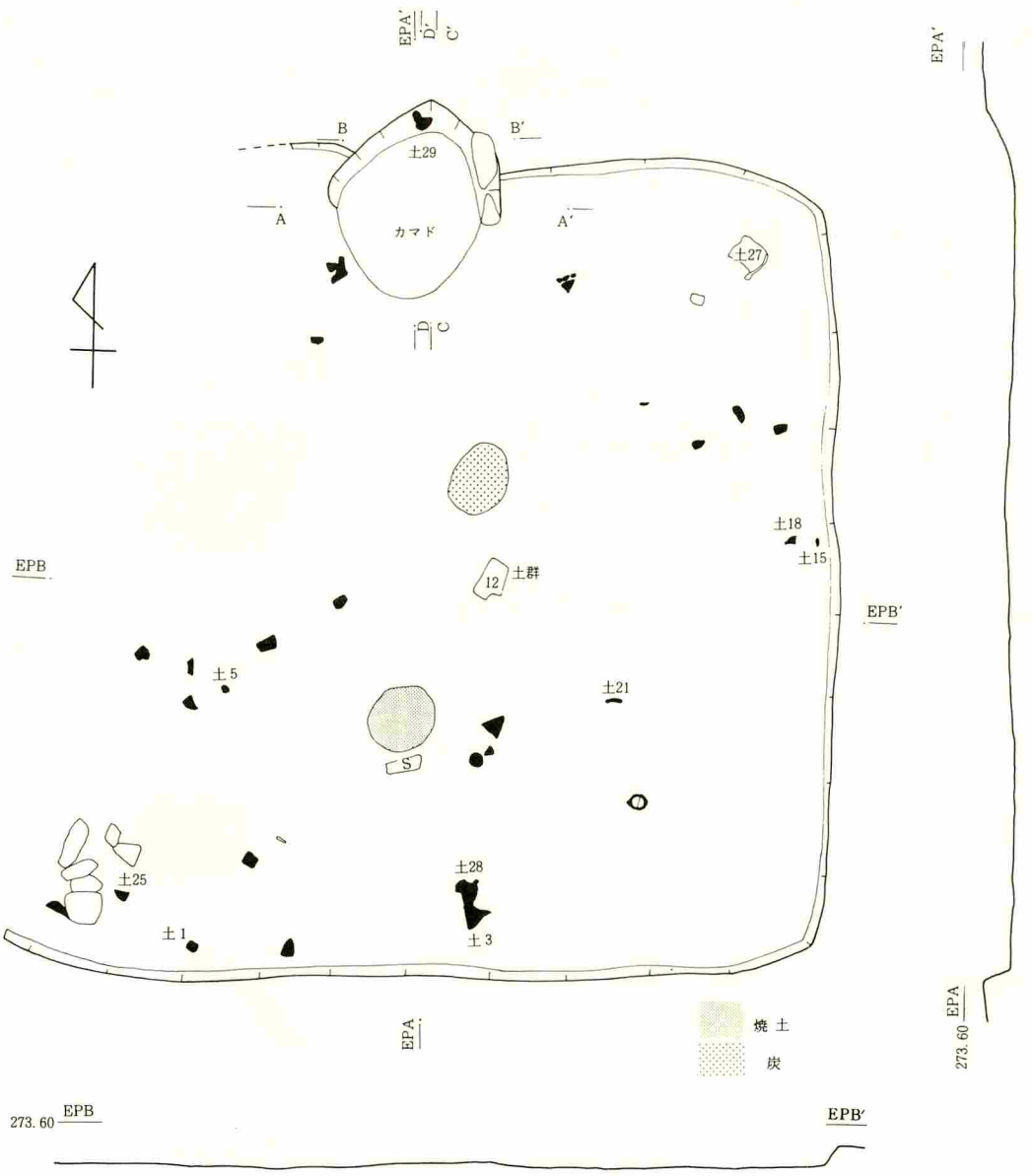
第43図　1号住居址出土遺物実測図



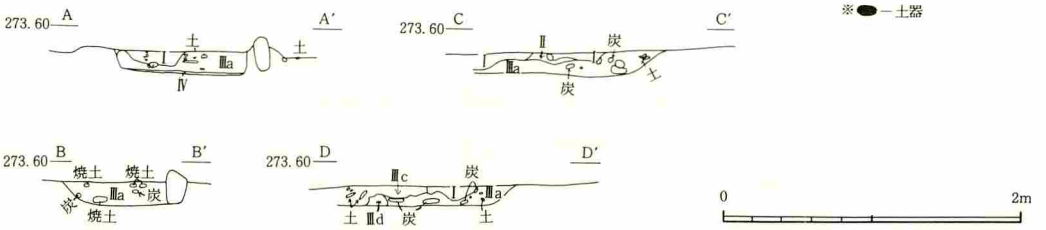
第44図　1号住居址出土遺物実測図

3号住居址　1軒だけ離れて検出されたが、西側が水路で破壊されていた。かまどの周囲には広く焼土が残存し、中央よりやや南寄りにも焼土があって、その近くに25cmの長方形の石が据えてあり、北西隅にも配石らしいものがある。

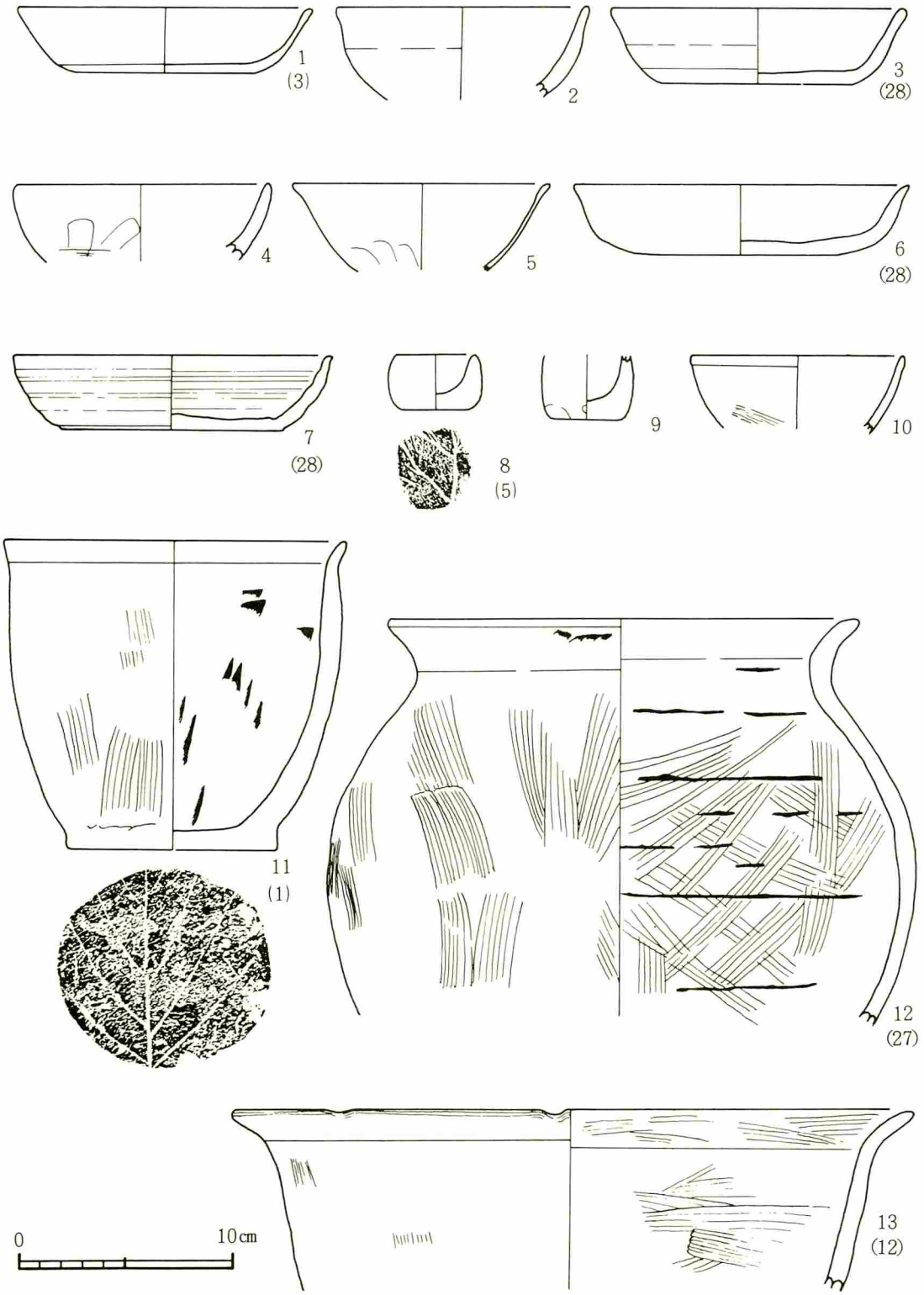
遺物はやや多く、器種も多様で、手捏式土器や片口のある甕などが出土した。時期は鬼高式期後半（古墳時代後葉）から真間式期（奈良時代）のものであろう。



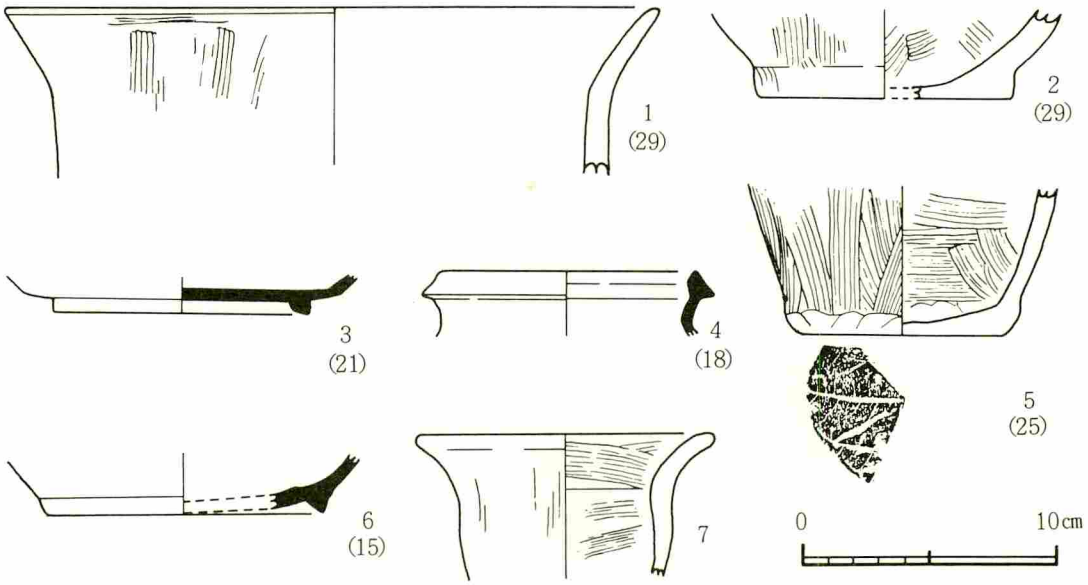
3号住居址カマドセクション



第45図　3号住居址実測図（1：50）



第46図　3号住居址出土遺物実測図



第47図　3号住居址出土遺物実測図

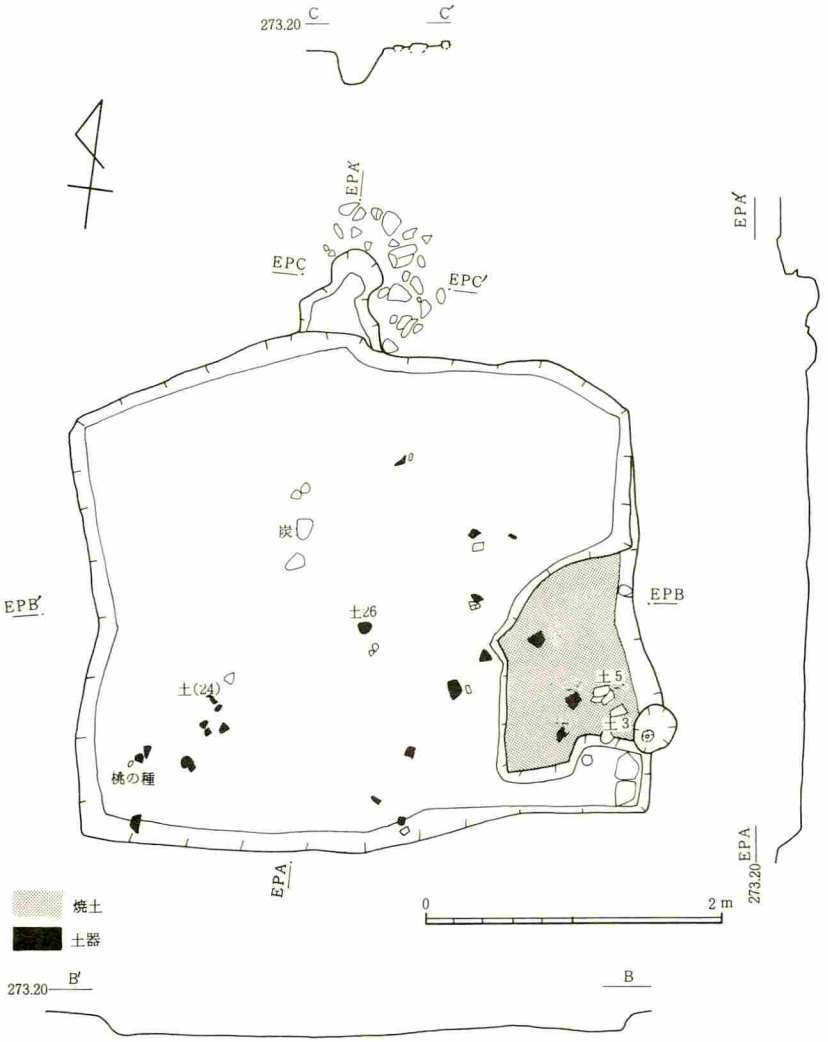
6号住居址　北側中央にかまどがあり、東側には焼土を伴うやや高い所がある。全体の形が不整形なのは礫層があったためであろうか。遺物は比較的少なく、鬼高式から真間式期の土師器、須恵器や桃の種子等が出土した。

7号住居址　一部は削平されて、破壊されていた。北側中央にかまどがあり、焼土だけが残存していた。遺物は国分式期の10世紀後半から11世紀にかけてのものであろう。

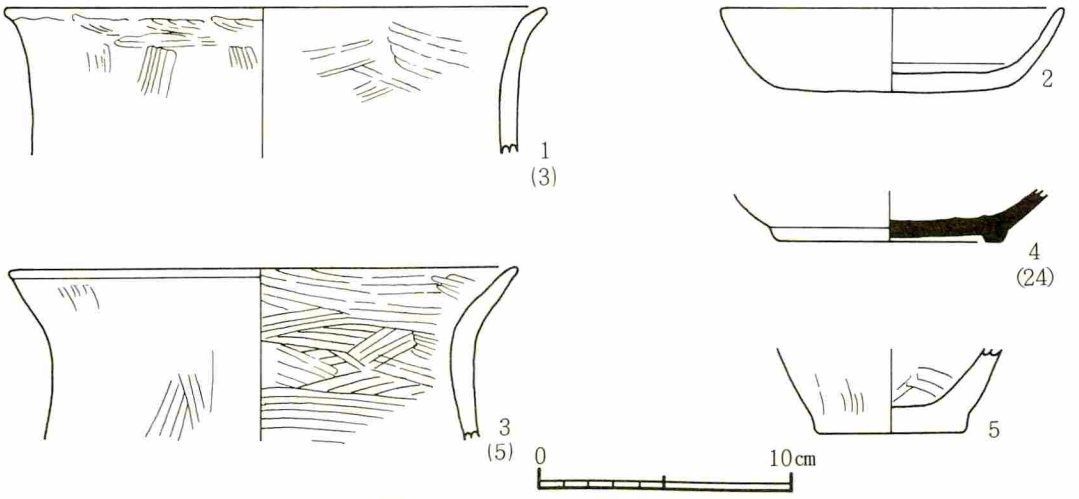
8号住居址　一部は削平され、破壊されていた。遺物は国分式9世紀後半から10世紀前半のものであろう。

以上のうち集中している1号、6号、7号、8号住居址の時代推移をみると、6号住居址が8世紀代で最も古く、8号が9世紀後半に構築され、これが廃絶される頃7号が建てられ、11世紀まで続いている。1号は8号よりやや遅れて構築され、後は7号、8号とほぼ平行して存続したと考えられる。

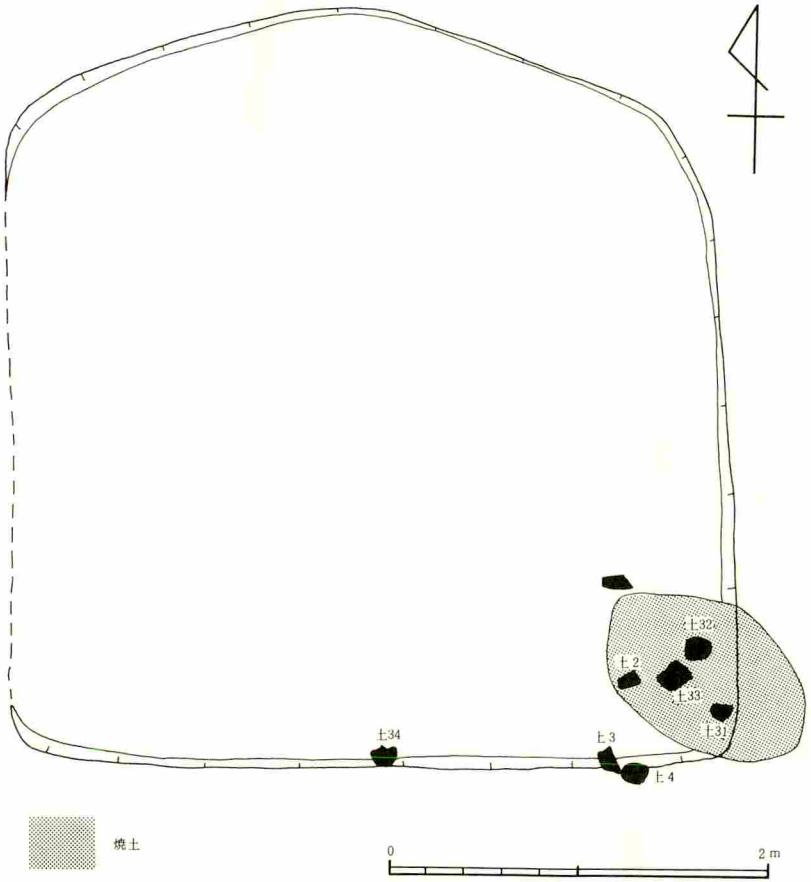
掘立柱建物址と住居址から出土した遺物は、それぞれ古墳時代の鬼高式期から、平安時代の国分式期までのものであるから、建替えをしながらも並行して存続したと思われる。



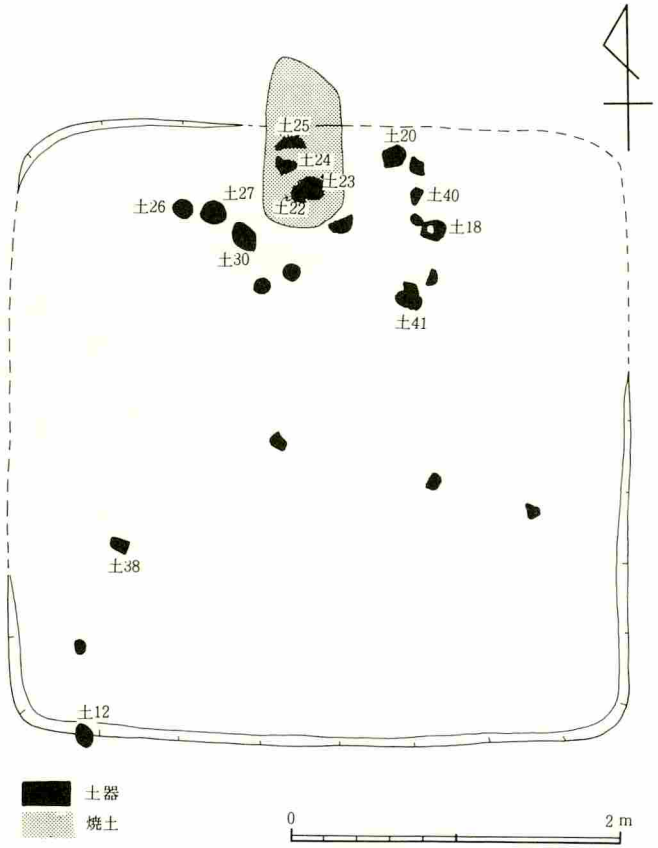
第48図　6号住居址実測図（1：50）



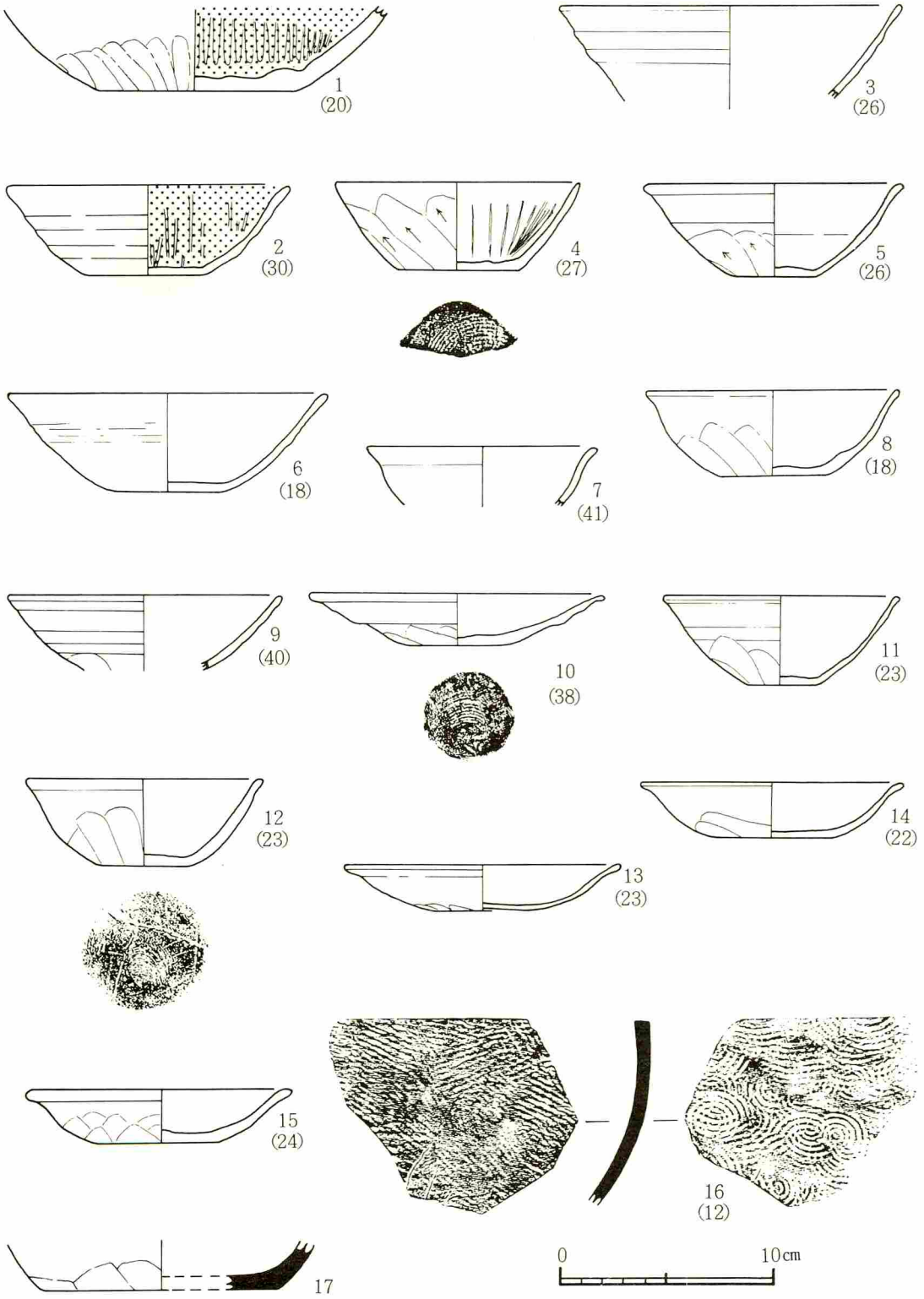
第49図　6号住居址出土遺物実測図



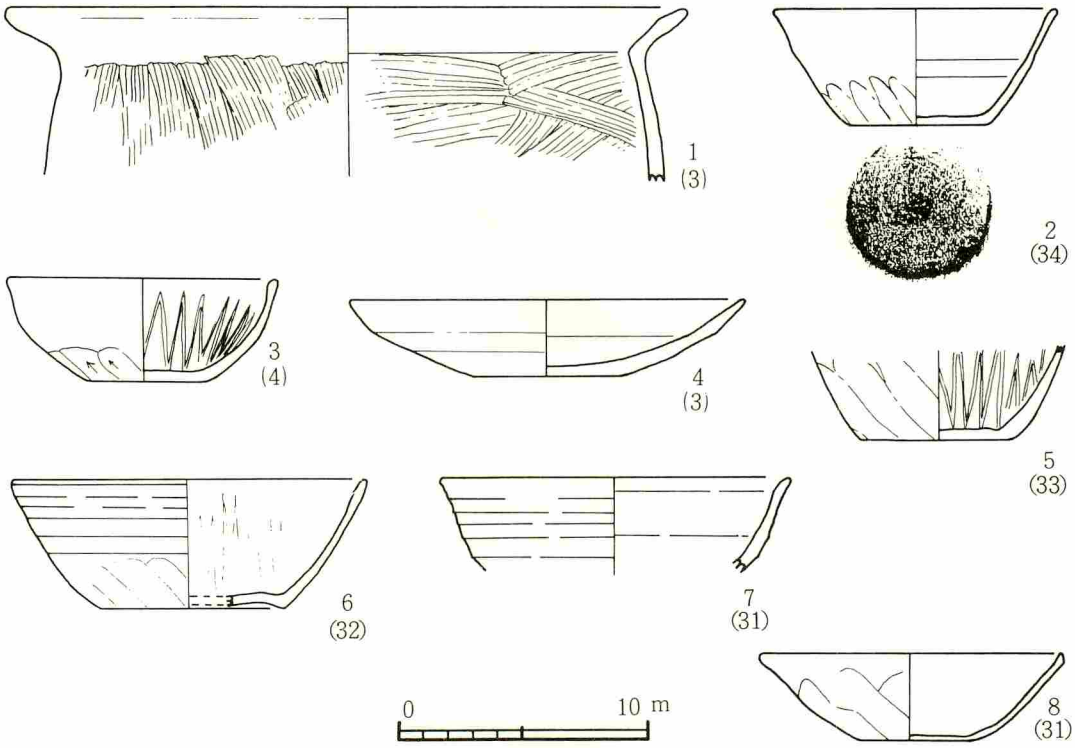
第51図　8号住居址実測図



第50図　7号住居址実測図

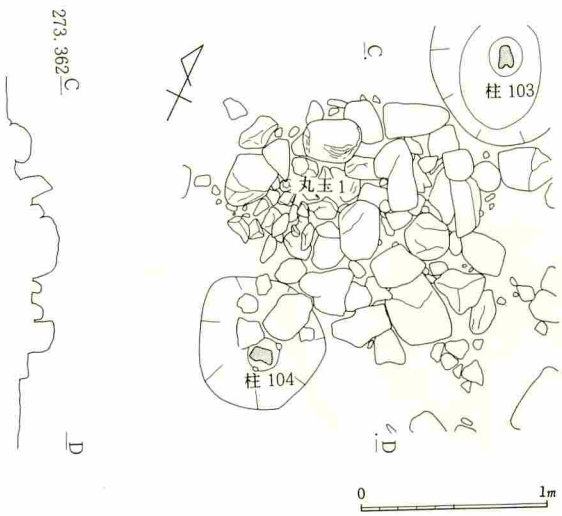


第52図　7号住居址出土遺物実測図



第53図　8号住居址出土遺物実測図

配石遺構と遺物



第54図　2号配石実測図

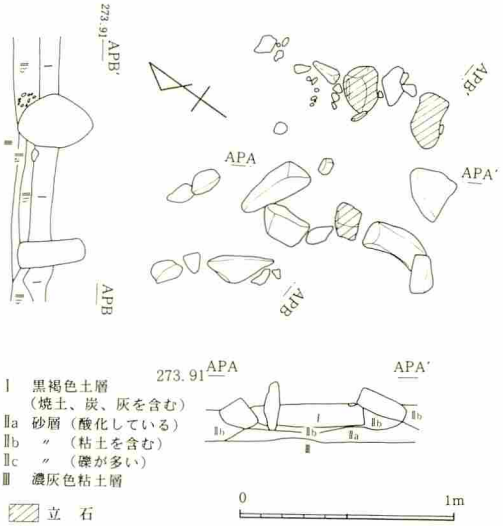
2号配石　2号掘立柱建物址の東側一部が重複している。30〜40㎝の石が累積しており、一部の104号柱穴の上に重なっているものを除去したところ、炉状に石組されていた。建物より後に構築したと考えられる。遺物は出土しなかった。

3号配石　73グリッドにあって、2号溝状遺構群より約80㎝下層にある。立石のある組石で、焼土炭、灰、を伴うのでかまどであろう。遺物は出土しなかった。

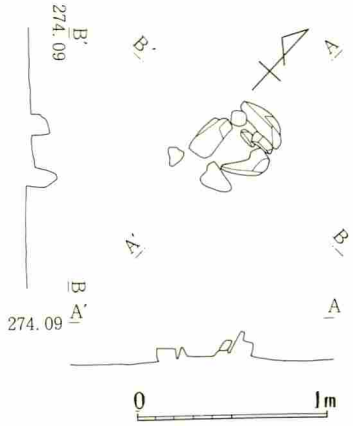
4号配石　54グリッドにあり、8、9号列石よりやや下層にあった。西と北側の石は横に立っていて、南に飛石状に配石らしいものがあるのは5号配石に似ている。遺物は出土しなかった。

5号配石　72グリッドにあり、南北約80㎝の配石である。石を敷いて二隅に立石があり、他の二隅の石は倒れていた。敷石の下には焼土、炭化物、灰と土師器があった。西側に向って飛石状に配石らしいものがほぼ左右対称に五対あり、東にも一対あったが、周囲には礫が多く、配石かどうかは確定出来なかった。遺物は土師器片や、須恵器の底部が出土した。土師器は国分式期前期の10世紀前葉であろうか。

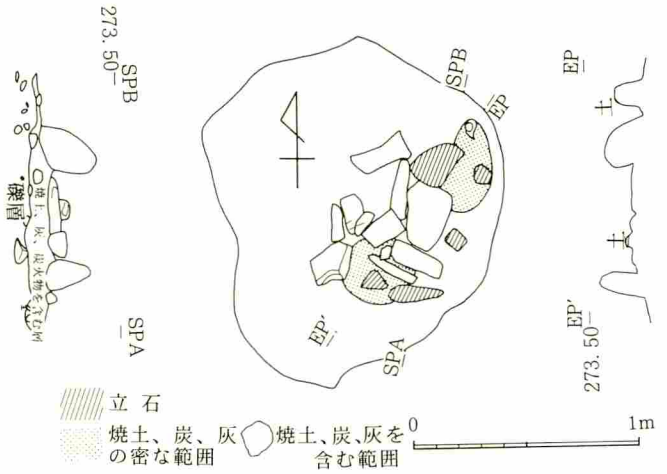
以上の点から祭祀遺構の可能性が考えられる。



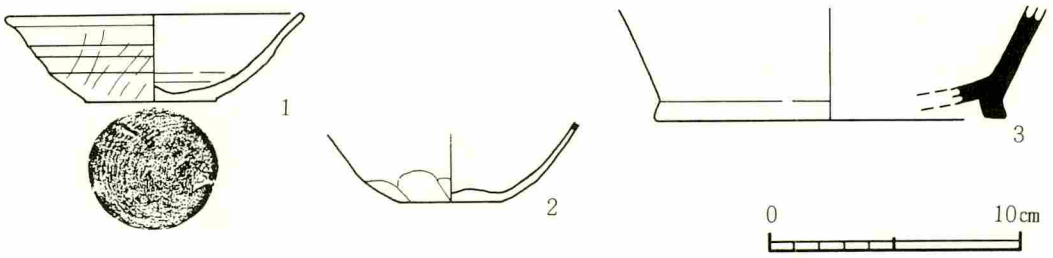
第55図　3号配石実測図



第56図　4号配石実測図



第57図　5号配石実測図

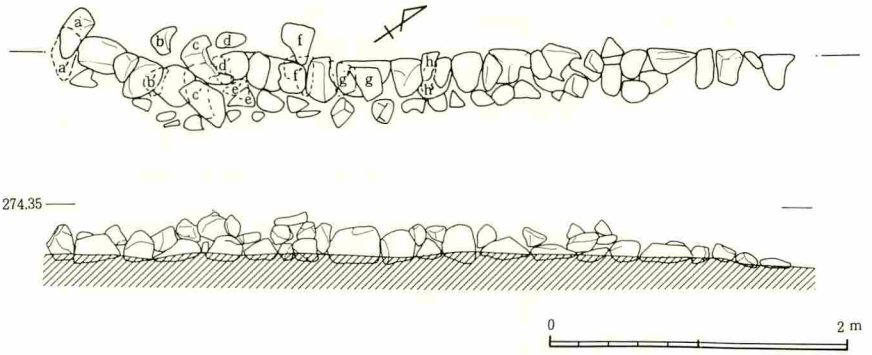


第58図　5号配石出土遺物実測図

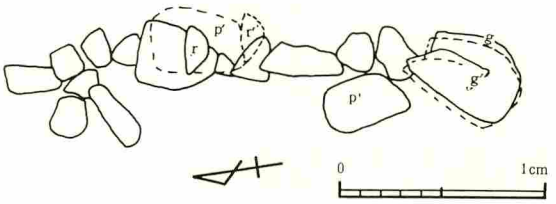
列 石 と 遺 物

奈良・平安時代のものと考えられる4号、5号列石について説明する。この2基からは遺物が出土しなかったので、その底部、又は上面が他の奈良・平安時代の遺構と一致することを基準とした。

4号列石　63、73グリッドにあり、石垣の基部が二段くらい残存しており、その1.5m西にこの続きと考えられるものが、1m程残存していた。上部は破壊されており、その積み方等はわからない。2基とも西に面をもっており、その底部は3号住居址とほぼ生活面が一致している。



第59図　4号列石平面及び側面図（1：50）



第60図　5号列石実測図

5号列石　3号住居址と重複して、その上部にあった。基部が住居址床面の5cm程上にあり、破壊された石が南に散乱していた。面が南にあるので落下したものであろう。

井戸状遺構と遺物

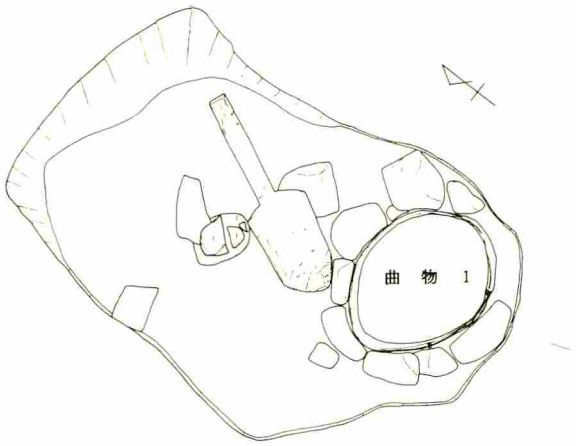
1、2号井戸状遺構は中・近世に、3、4号井戸状遺構は奈良・平安時代に使用されたと思われる。3、4号は1号と同じように湧水を利用して井戸としたものであろうか。発掘した時点では水は湧いていなかった。県外でも『所謂「曲物埋設遺構について」』（南博史昭58古代学叢論）によると、曲物を利用した井戸と考えられる遺構がいくつか発見されており、この例にならって本遺跡でも井戸址とせず井戸状遺構とした。

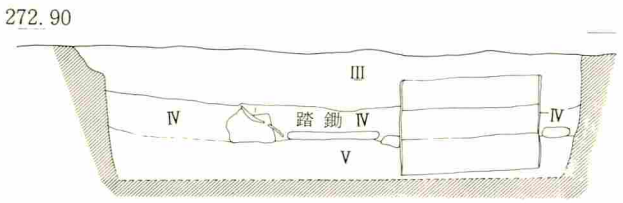
3号井戸状遺構　13号掘立柱建物址と柱穴群との間にあるが、その生活面は柱穴群とほぼ同一である。

長さ2.8m、深さ35cmの長円形の土壙の中にあり、直径約35cm、高さ8cmの曲物を三段に重ね、周囲を石で一段囲っている。この構築方法は、4号井戸状遺構と酷似している。

遺物は土師器、須恵器と木器・石器とが出土した。覆土下層から出土したNo.3の坏の底部破片は8世紀末頃とみられ、「黒」と書かれた墨書土器は9世紀の初頭、No.2の口縁部はこれより少し後に位置付けられようか。石器は一部研磨されたらしい部分がある。曲物はヒノキ、又はサワラ類の材質の板を2枚重ねて円形にし、サクラの樹皮で3ケ所を縫って固定している。最上段と最下段の曲物には帯を回している。

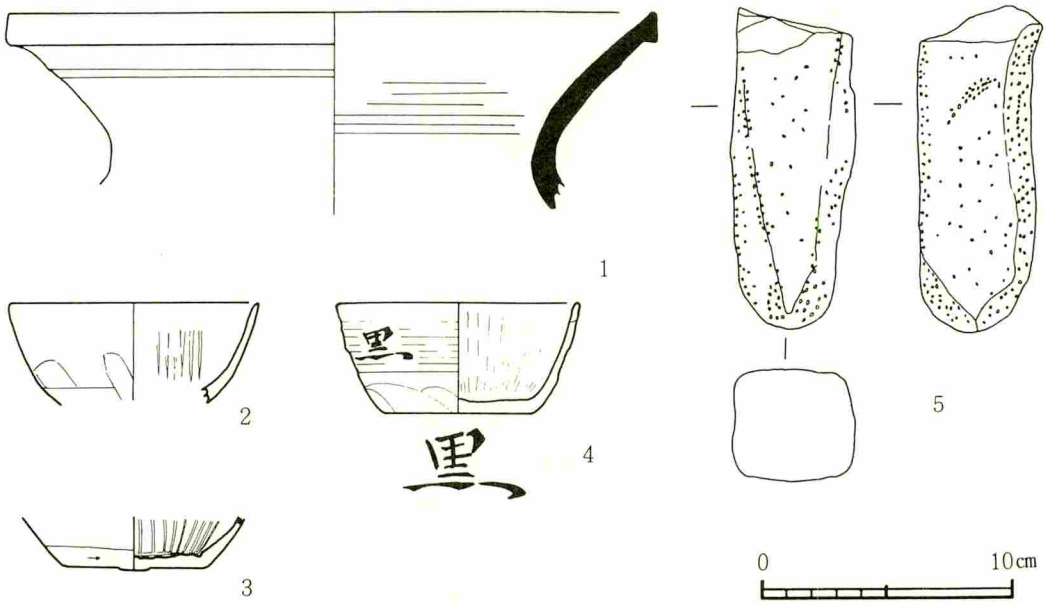
木器は踏鋤の柄を初め、くの字形木器、串状木器や板など10数点が出土した。いずれも鋭利な刃物で一部、又は全部が加工されている。踏鋤の柄は完形で（実測中1ケ所折損）、斜め横の状態で出土した。長さは62.5cm、最大幅20cm最大厚3.3cmで、肩は斜めに削り落している。両面に蛤刃状工具で削った痕跡があり、発見当初には、その先に半月状に鋤先を付けた跡があった。その他の木器は多くは完形品であるが、用途は不明である。なお曲物、踏鋤の柄、くの字形木器等数点を、奈良市元興寺文化財研究所で樹脂含浸による保存処理を行なった。



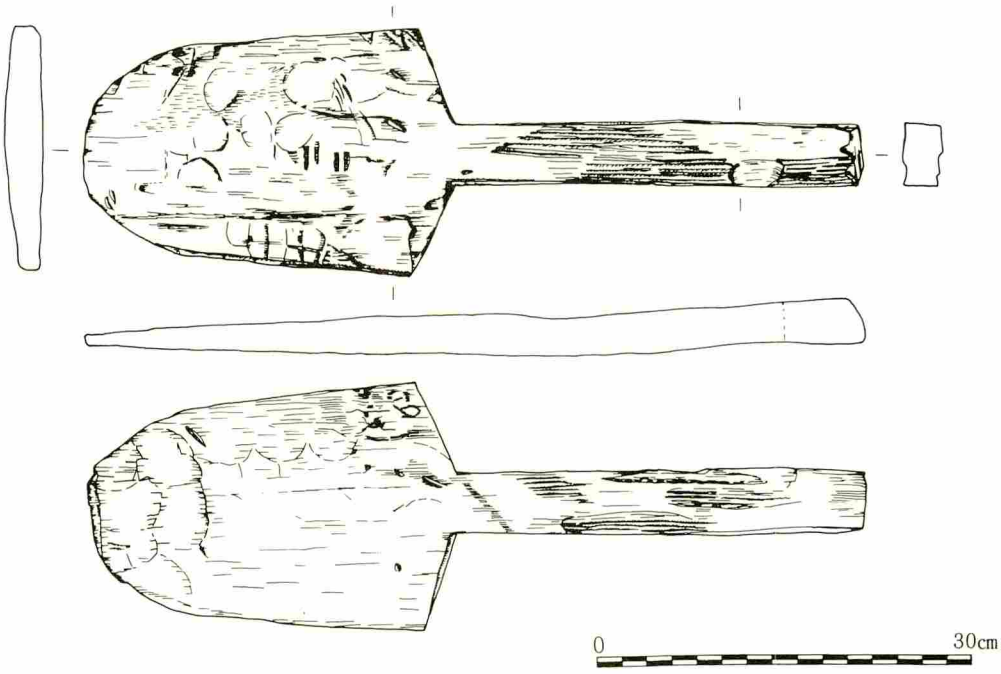


Ⅲ　灰褐色砂層
Ⅳ　砂　　層　　小礫、鉄分を含む
Ⅴ　黒色粘質砂層

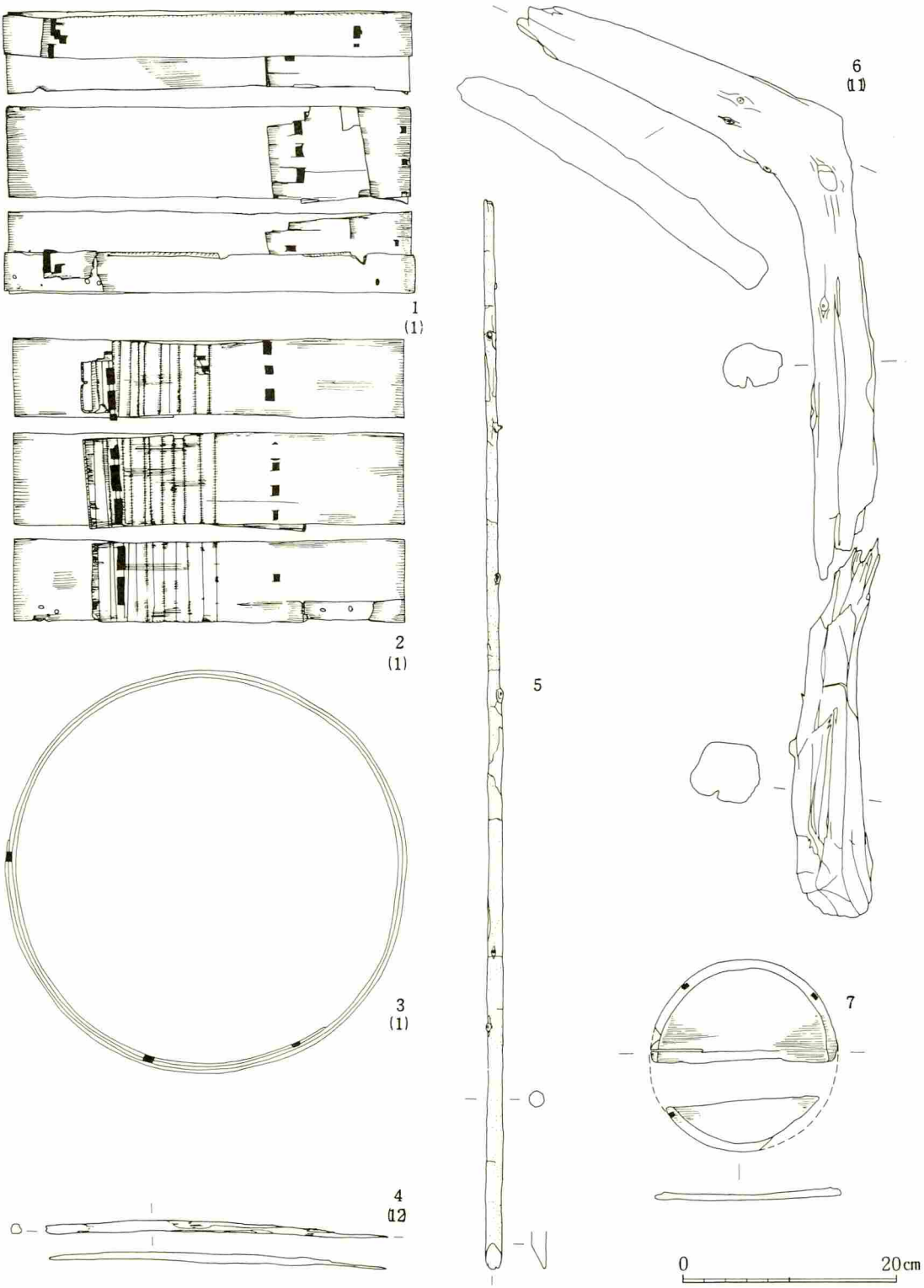
第61図　3号井戸状遺構実測図（1：20）



第62図　3号井戸状遺構出土遺物実測図



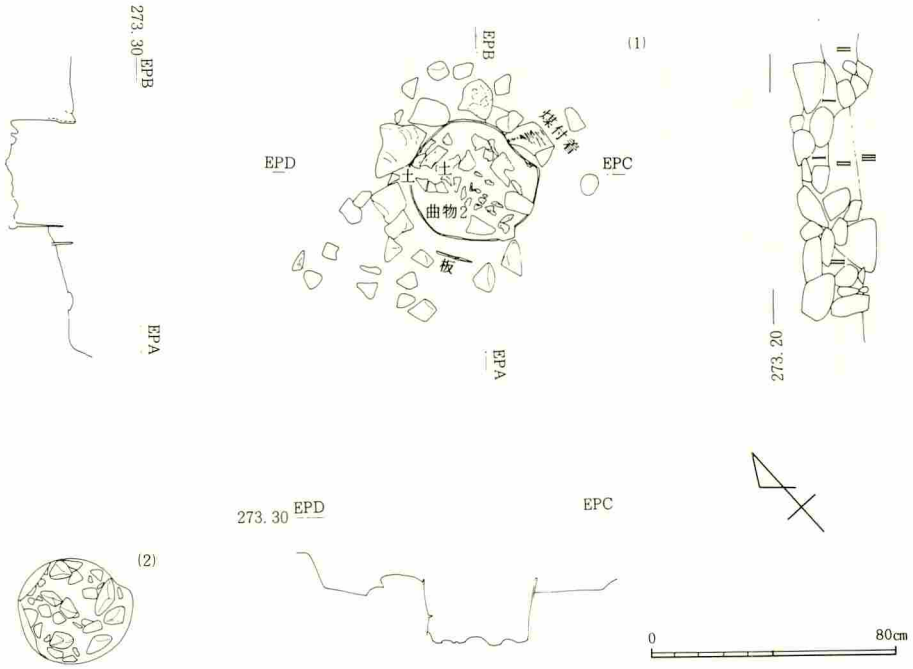
第63図　3号井戸状遺構出土踏鋤実測図



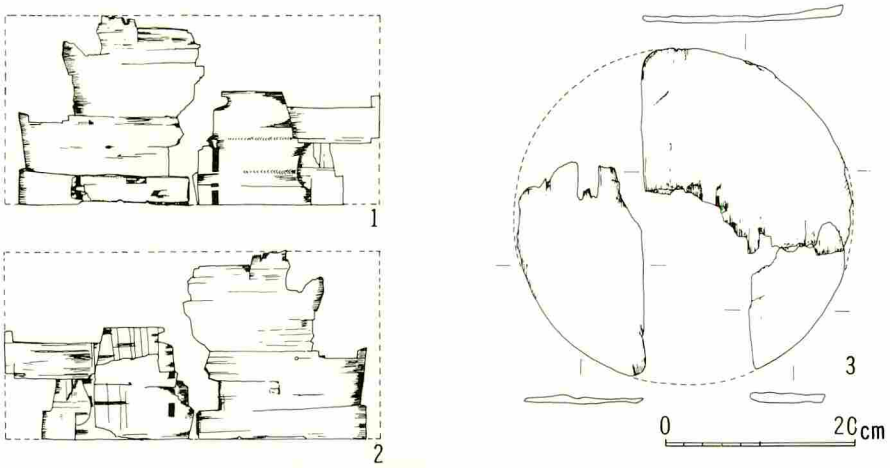
第64図　3号井戸状遺構出土木製品実測図

1 曲物外面、 2 内面、 3 上面、 4 串状木製品、 5 棒状木製品、 6 くの字形木製品、 7 円形蓋状木製品

4号井戸状遺構　5号掘立柱建物址と6号住居址の間にあり、掘り込み面はこの2建物と同一面上にある。約80㎝の土壙の中心に曲物を据え、周囲を石垣で囲んでいる。石垣はいわゆる重箱積みである。内部には円形蓋状の板と板片が入っていたが、他の遺物は出土しなかった。曲物は直径40㎝、高さ20㎝の一段で、基底部に帯をまわしている。材質、技法は3号曲物と同じであったが保存状態が悪く、ほとんど現場で崩壊してしまった。時期は前述したように掘込面や構築方法から推定して、平安時代か或いは奈良時代であろう。



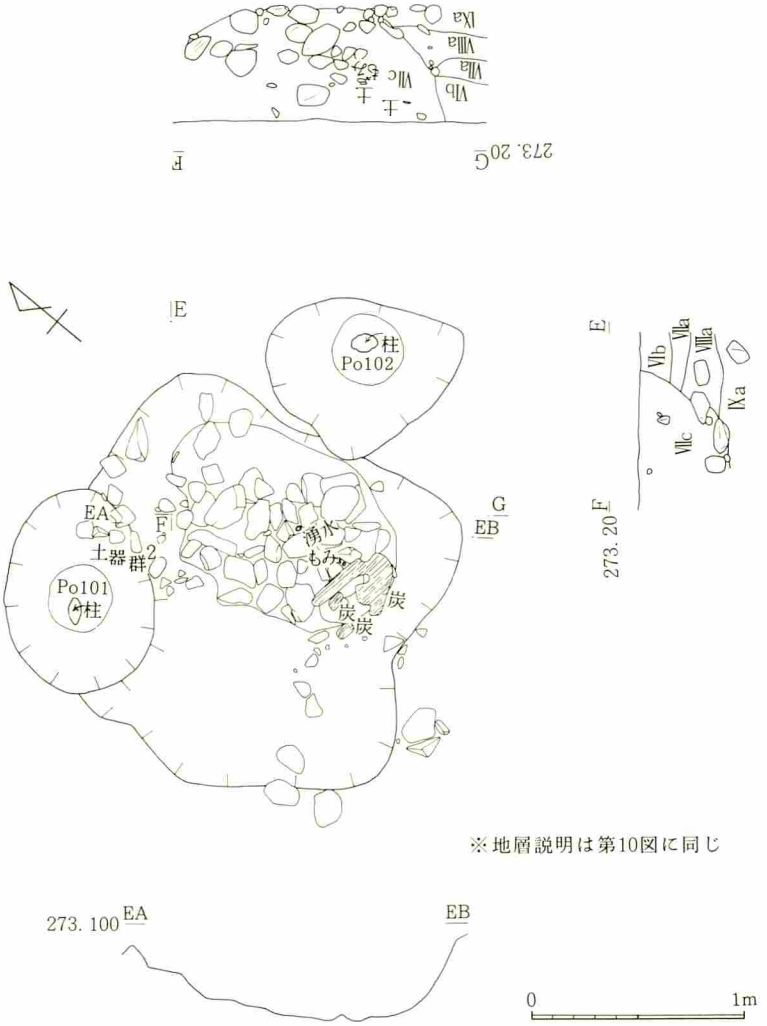
第65図　4号井戸状遺構実測図



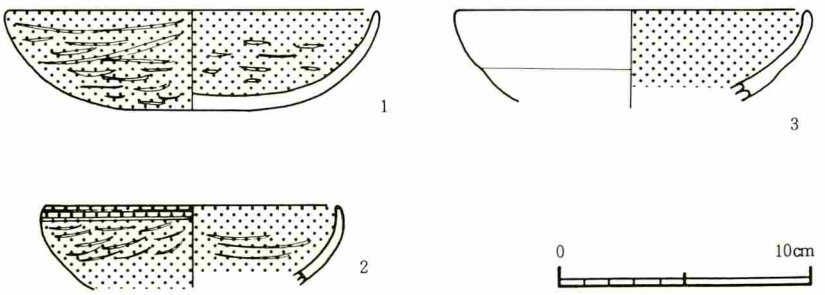
第66図　4号井戸状遺構出土木製品実測図

土 壙 と 遺 物

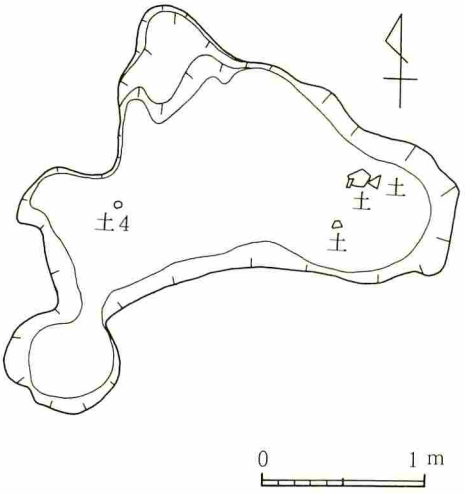
1号土壙　2号掘立柱建物址と重複していて、101号柱穴が土拡を掘り込んでいる。一辺約180㎝の不整方形を呈し、深さは約45㎝である。下層には10㎝～30㎝の石が投げ込んだような状態で入っていた。遺物は上層と中層から古墳時代鬼高式期の黒色の碗が出土している。



第67図　1号土壙実測図（1：40）

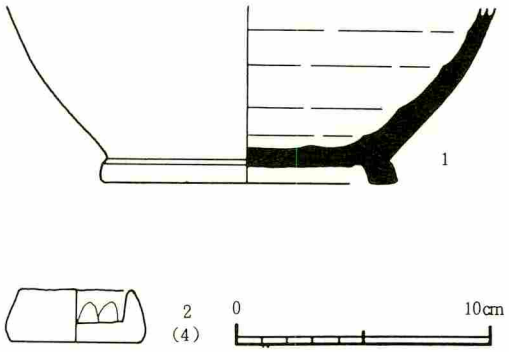


第68図　1号土壙出土遺物実測図

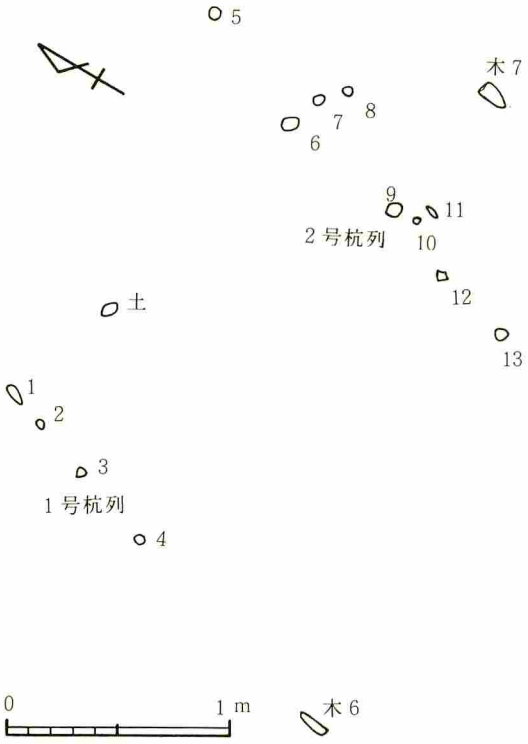


第69図　3号土壙実測図

3号土壙　2号掘立柱建物址の西にあって、長径約2mである。手捏式土器及び須恵器が出土した。



第70図　3号土壙出土遺物実測図

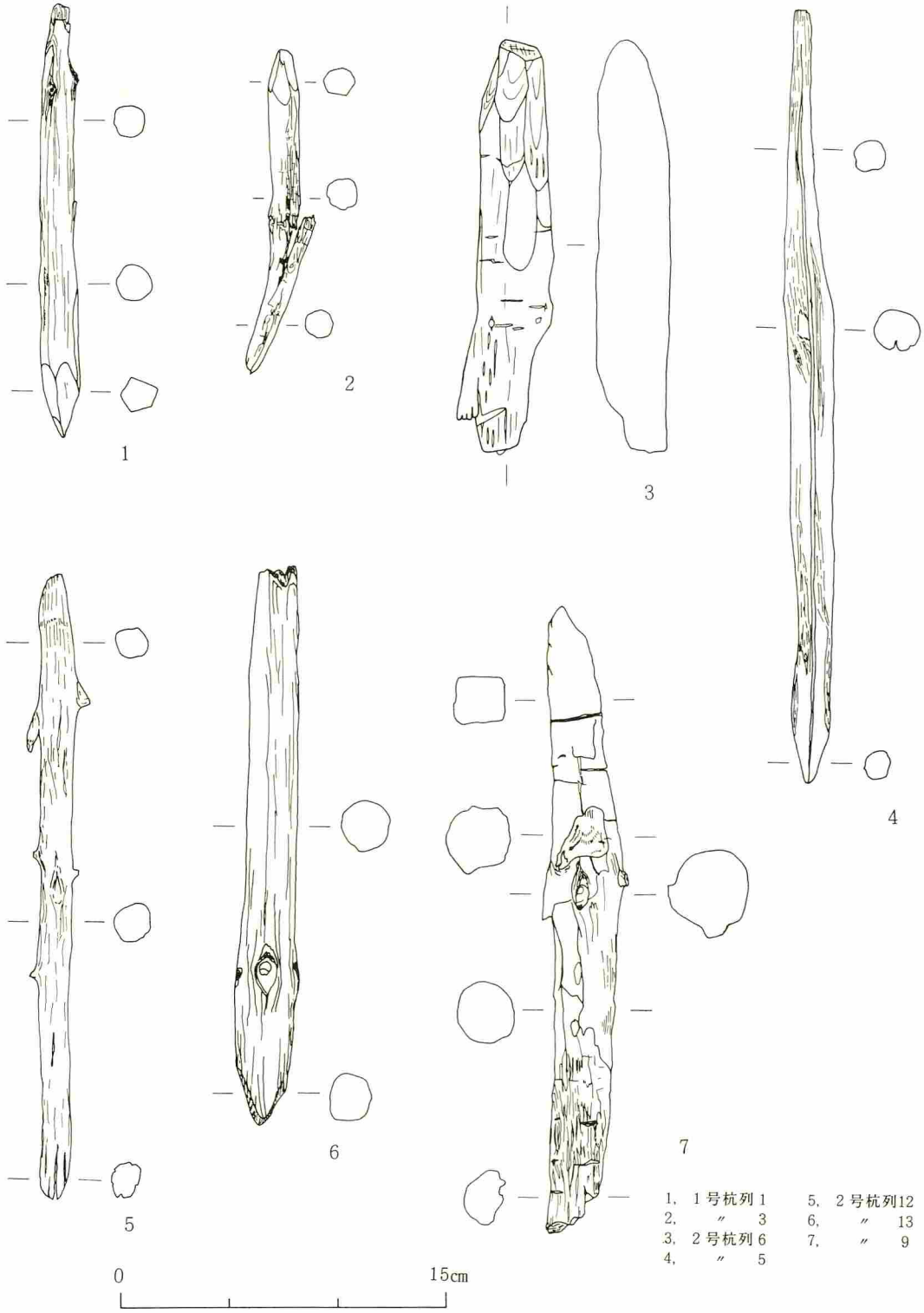


第71図　1・2号杭列実測図（1:40）

杭　　列

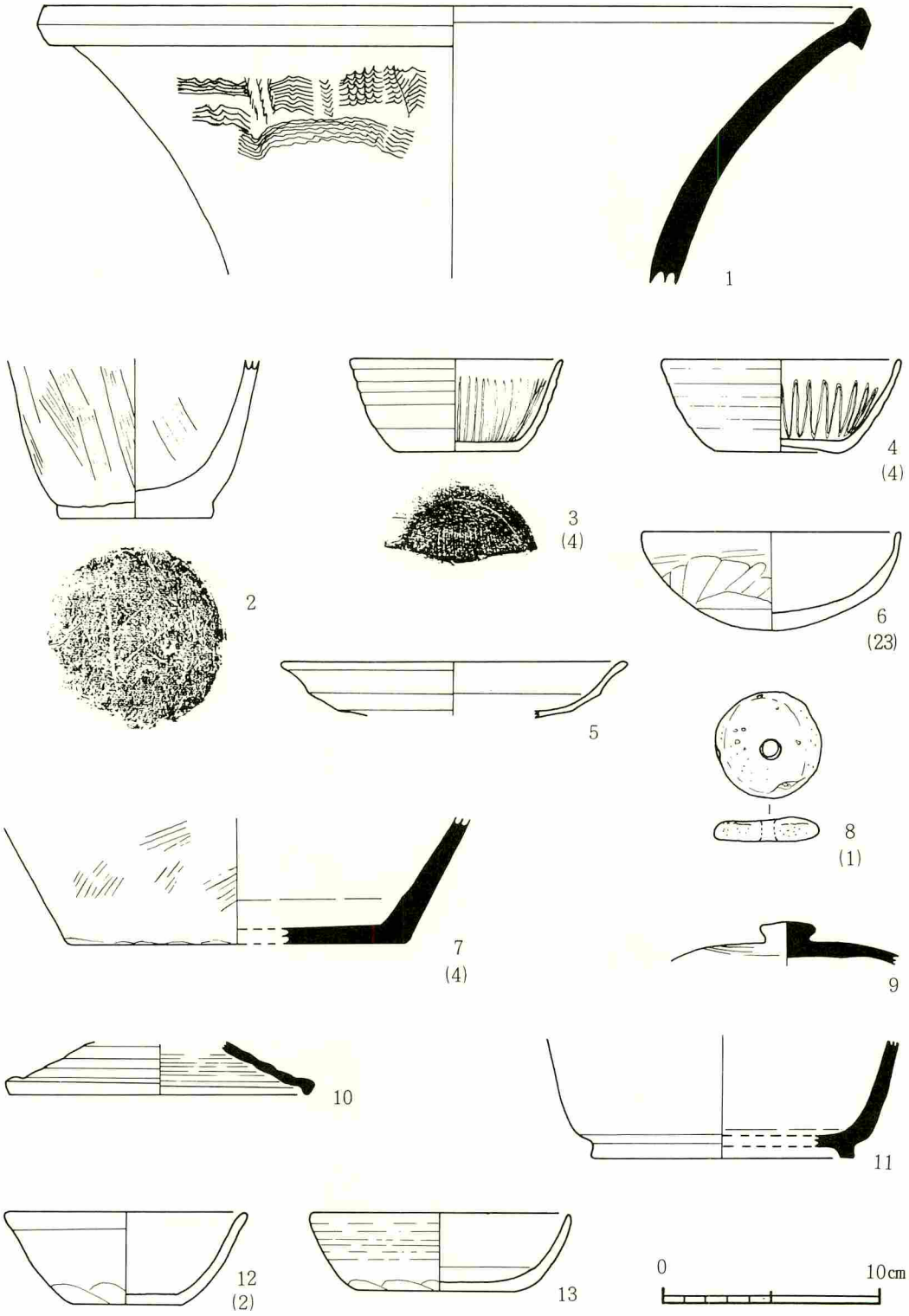
11号掘立柱建物址と一部が重複している。2列の杭が対になっていると考えられ、4号掘立柱建物址と同一生活面上にあって、これに向いあっている。1号杭列は4本からなり、長さは90cm、2号杭列は9本からなり長さは1.4mであるが、列外にはみ出しているものもある。杭の太さはいずれも1.5cmから3cmの間で、長さは現状で25cm内外であるが、上部は腐朽していた。先は鋭利な刃物で一刀で切られている。材質はイチイ、カヤなどである。

以上の古墳～平安時代の遺構を時期区分すると、古墳時代に1号土壙、奈良時代に3号、6号住居址、3号井戸状遺構、柱穴群と掘立柱建物群の一部があり、平安時代になって、1号、7号、8号住居址、配石、4号井戸状遺構、掘立柱建物群の一部や列石などがある。

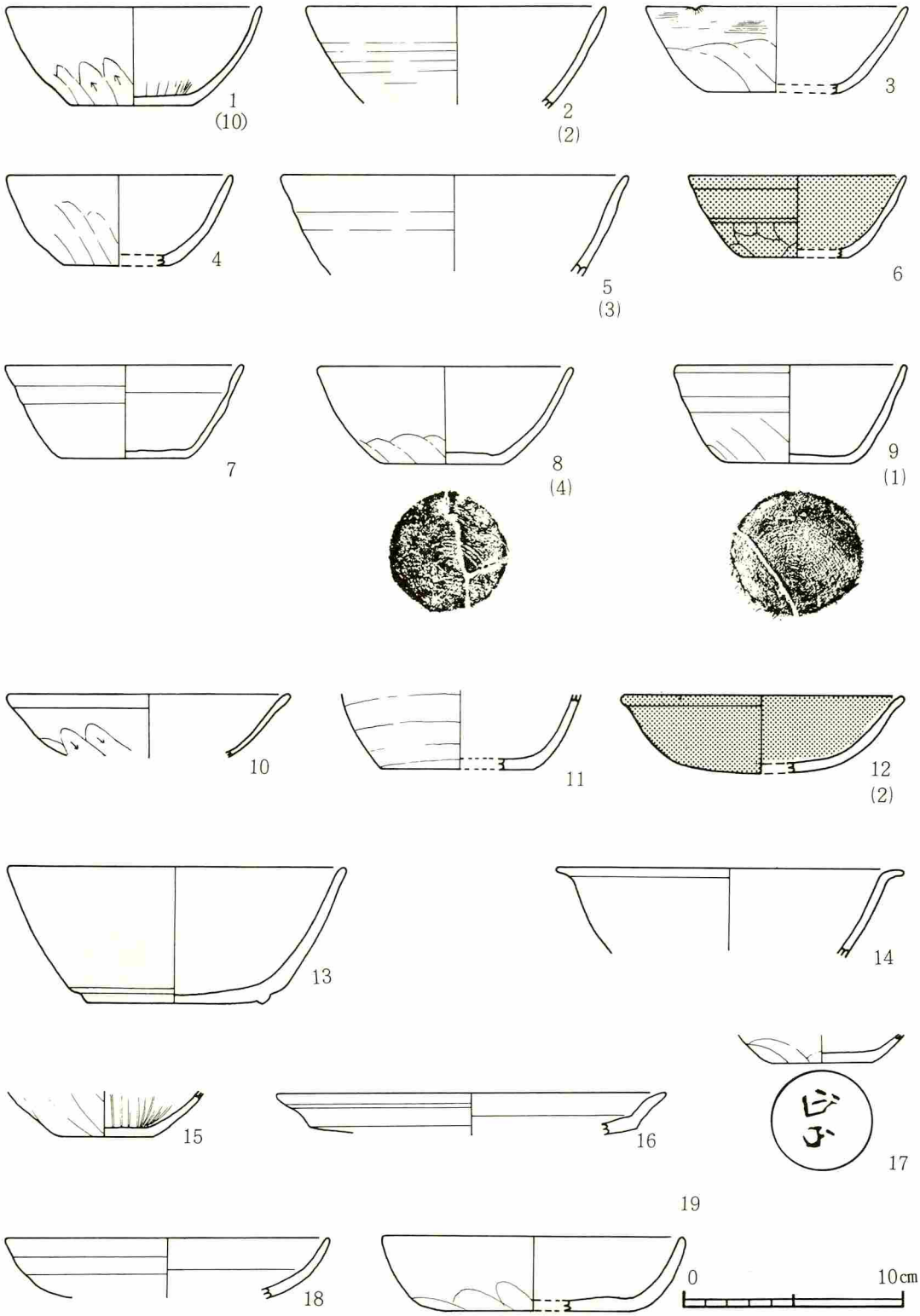


1, 1号杭列1
2, 〃 3
3, 2号杭列6
4, 〃 5
5, 2号杭列12
6, 〃 13
7, 〃 9

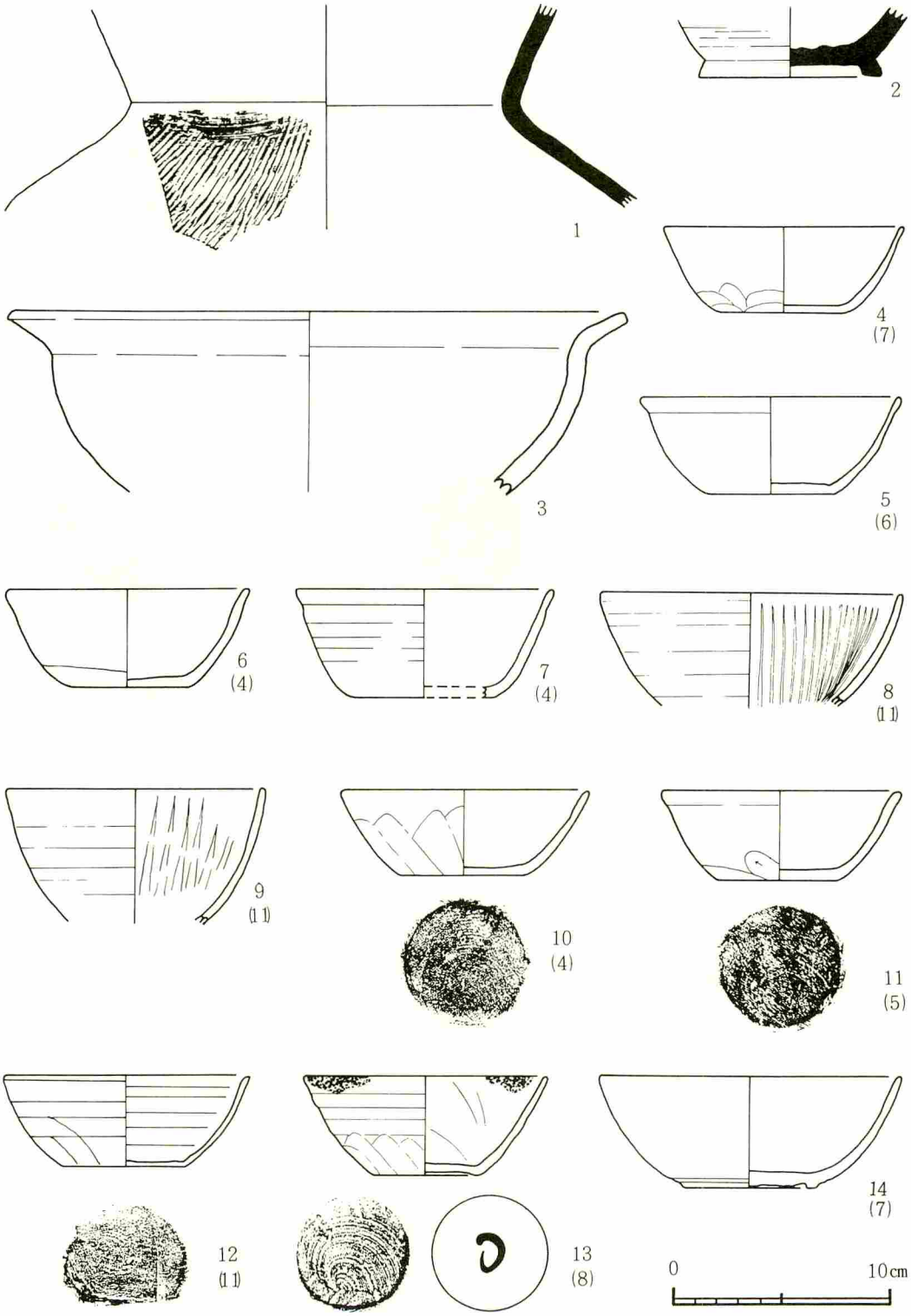
第72図 杭 実 測 図（1：6）



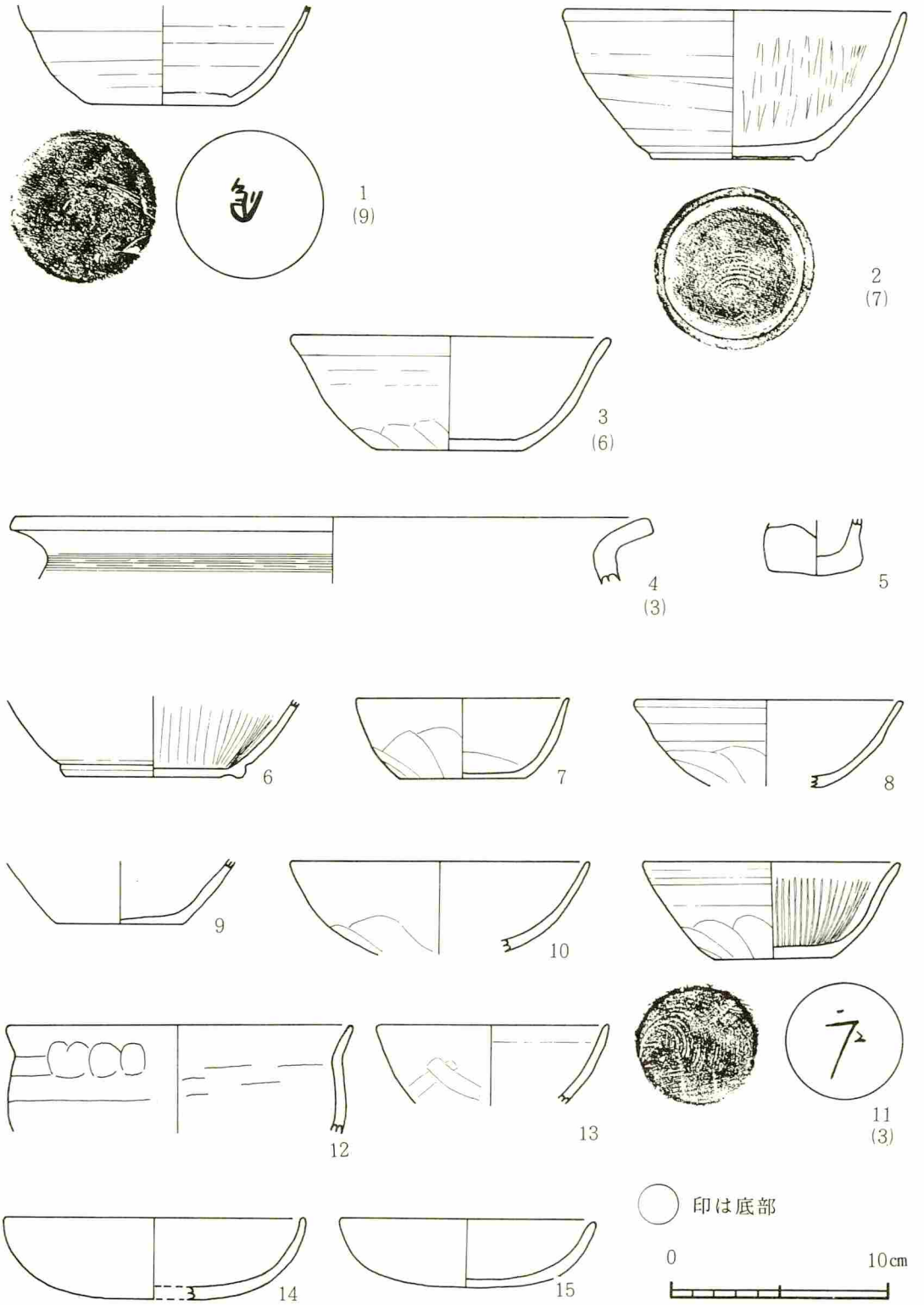
第73図　掘立柱建物址付近出土遺物実測図



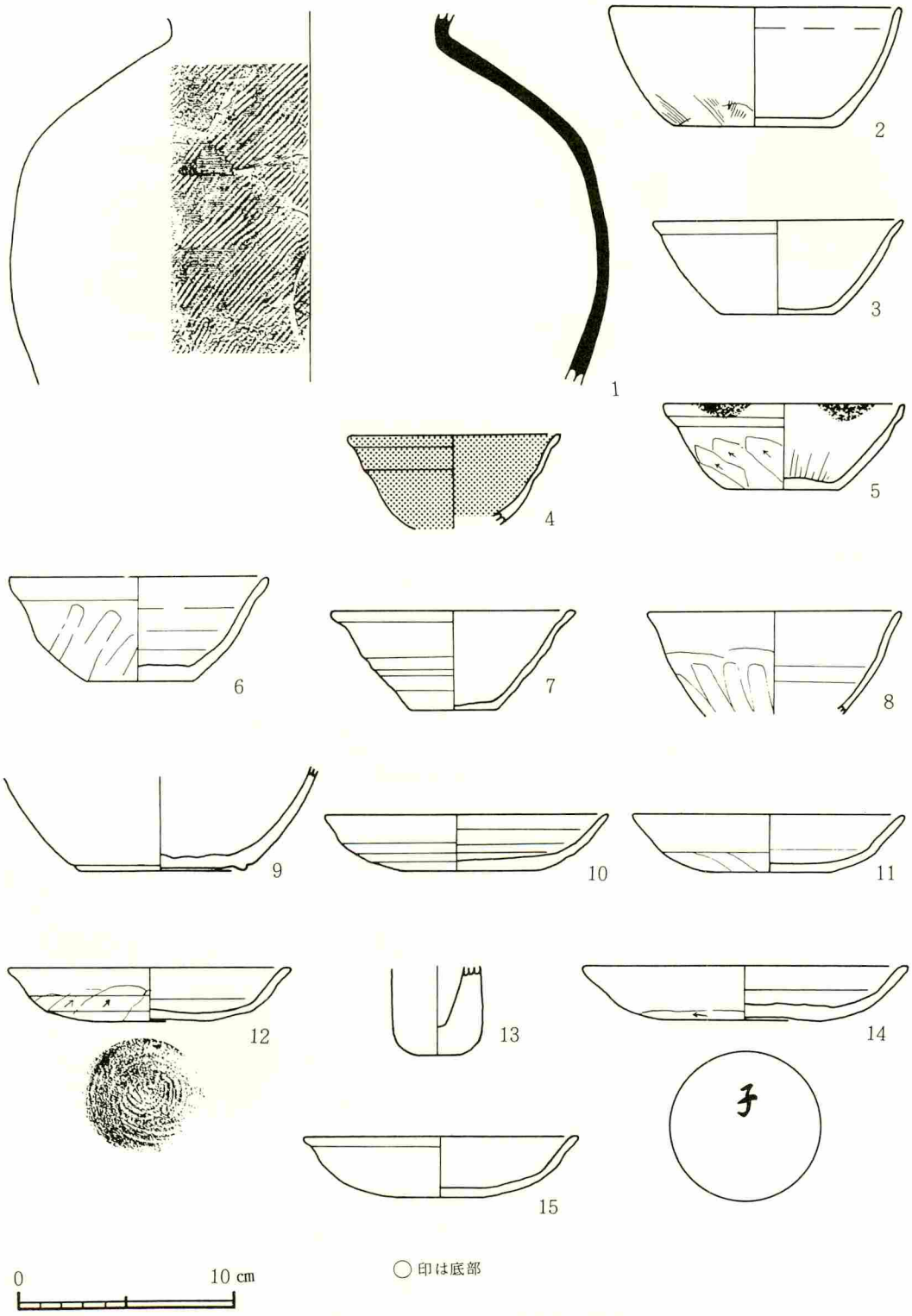
第74図　掘立柱建物址付近出土遺物実測図



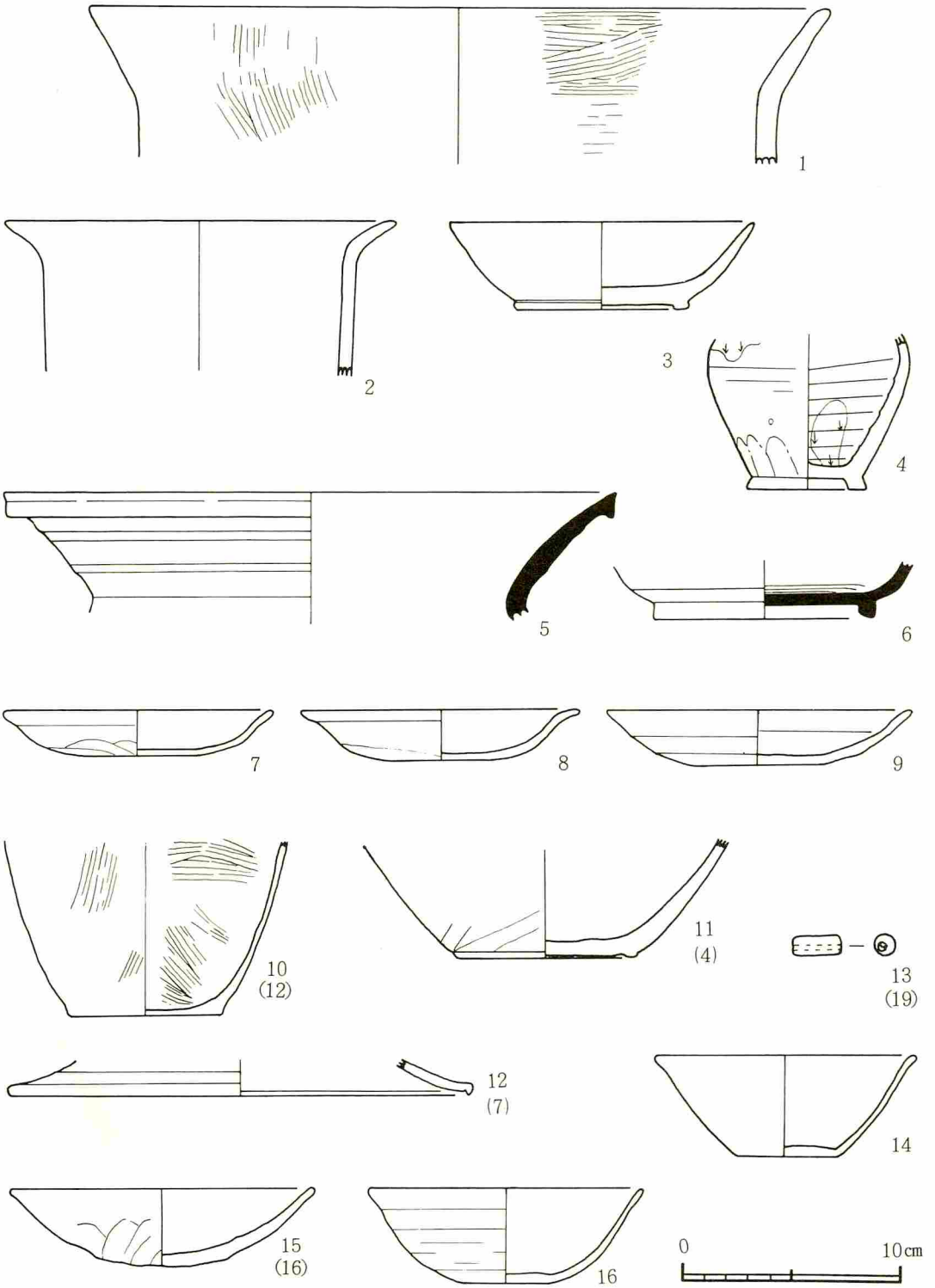
第75図　2号掘立柱建物址付近出土遺物実測図



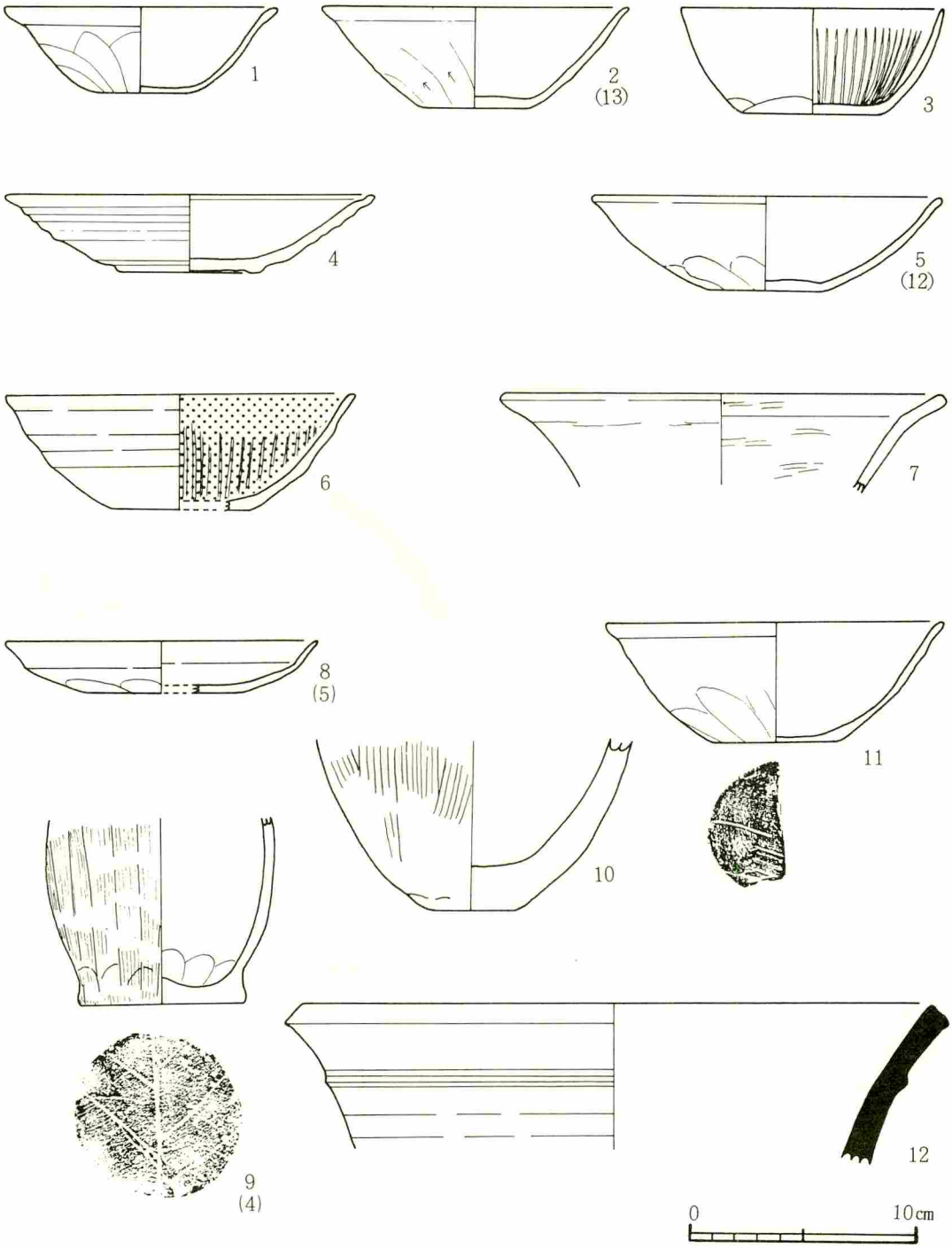
第76図　2号掘立柱建物址付近出土遺物実測図



第77図　5号配石付近出土遺物実測図



第78図　5号配石付近出土遺物実測図



第79図　4号列石付近出土遺物実測図

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm)(口径/器高/底径)	調整 口縁	調整 外面	調整 内面	調整 底	胎土 色調 焼成	備考
第121図	SB 一 2 床面直上	土製	管玉							
〃2	〃	〃	〃							
〃3	〃	〃	棗玉							
〃4	〃	〃	〃							
〃5	SB 一 2 (P8より)	土師	皿	14.0 — —	隆玉縁	ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 褐色 良好	
〃6	〃	〃	皿	14.0 — —	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引 篦磨		緻密 茶褐色 良好	
〃7	S B 一 2 床面直上	〃	坏	11.4 4.3 5.0	〃	〃	ロクロ水引 花弁状暗文 底部回転篦削		緻密 白褐色 良好	
〃8	SB—2	〃	高台付	— — 8.6		ナデ	ナデ	削り出し 高台	緻密 白褐色 良好	
〃9	〃	〃	坏	14.2 5.0 —	尖形		放射状暗文 横ナデ		緻密 灰褐色 良好	
〃10	S B 一 2 床面直上	〃	〃	11.0 4.0 4.6	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	口縁部ロクロ水引 ナデ	回転糸切 篦削	緻密 白褐色 良好	墨書「長」
〃11	SB 一 2	〃	壺	— — 7.2		横刷毛 篦押え	篦削	木葉痕	砂粒を含む 褐色 良好	
〃12	SB 一 2 床面直上	〃	高台付坏	— — 6.0		回転ナデ	ナデ 放射状暗文？		緻密 褐色 良好	内黒
〃13	SB 一 2	〃	蓋	23.0 — —		ロクロ水引	ロクロ水引		砂粒を含む 暗褐色 良好	
〃14	〃		砥石							
第271図	SB 一 4 掘立柱建物内	土師	甕	28.0 — —	薄長	縦刷毛	横刷毛		砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃2	〃 〃 付近	〃	小型壺	6.0 6.8 4.0				木葉痕	砂粒を多く含む 茶褐色 良好	
〃3	〃	〃	手捏	3.8 3.0 3.0			指頭押圧	中央に穴あり	砂粒を含む 赤褐色 良好	
〃4	SB 一 4	〃	甕	2.6 — —	薄長	口縁部横ナデ 胴部縦刷毛	口縁部横ナデ 胴部交互の刷毛		砂粒を含む 灰褐色 良好	
〃5	SB 一 10	〃	坏	11.4 4.1 6.4	玉縁	口縁部ロクロ水引 横ナデ	ロクロ水引		緻密 白褐色 良好	
〃6	掘立柱建物付近	〃		— — 8.0		縦刷毛	横刷毛	木葉痕	砂粒を含む 赤褐色 良好	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm)(口径/器高/底径)	調整 口縁	調整 外面	調整 内面	調整 底	胎土 色調 焼成	備考
第277図	SB 一 4	〃	台付坏	18.0 5.4 9.0	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転篦削	ロクロ水引	削り出し	緻密 灰褐色 良好	
〃 8	掘立柱建物覆土	〃	坏	15.8 3.5 8.6	丸型	〃	〃		緻密 白褐色 良好	
〃 9	〃	〃	甕	— — 8.1		縦刷毛	横刷毛	木葉痕	砂粒を含む 暗褐色 良好	
〃 10	〃	〃	坏	13.6 — —	丸型	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転篦削	ロクロ水引 花弁状暗文		緻密 白褐色 良好	
〃 11	〃	〃	鉢	20.0 — —	玉縁	ロクロ水引	ロクロ水引			
〃 12	〃	〃	坏	12.0 4.0 4.0	〃	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 茶褐色 良好	
第421図	SB 一 1 床面直上	〃	〃	11.2 4.4 5.2	隆玉縁	〃	〃		緻密 褐色 良好	灯明皿
〃 2	〃	〃	〃	12.0 4.2 4.0	〃	〃	〃	回転糸切 ↓ 篦削	細かい砂粒を含む 赤褐色 良好	剥落あり
〃 3	〃	〃	〃	11.6 4.3 5.0	〃 〃	〃 〃	〃 〃		緻密 褐色 良好	
〃 4	SB 一 1 床面直上	土師	坏	17.0 6.4 6.4	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引	回転糸切 ↓ 篦削	わずかに砂粒を含む 白褐色 良好	内黒
〃 5	〃	〃	〃	16.0 5.4 8.4	〃	〃	〃	篦削	緻密 褐色 良好	内黒
〃 6	SB 一 1	〃	〃	12.0 2.8 4.8	隆玉縁	〃	〃	回転糸切 ↓ 篦削	砂粒を含む 赤褐色 良好	
〃 7	〃	〃	〃	14.4 5.0 5.0	〃	〃	〃	〃	緻密 褐色 良好	内黒
〃 8	SB 一 1 床面直上	〃	〃	12.0 2.8 4.0	〃	〃	〃	〃	砂粒をわずかに含む 暗褐色 良好	
〃 9	〃	〃	〃	14.0 4.5 8.0	玉縁	〃	ロクロ水引 放射状暗文	糸切 ↓ 篦削	緻密 良好	
〃 10	SB 一 1	〃	〃	— — 6.0		斜位篦削	放射状暗文		緻密 黒褐色 良好	
〃 11	〃	〃	〃	13.2 3.2 6.9	隆玉縁	ロクロ水引	篦ナデ	回転糸切 ↓ 篦削	砂粒を含む 白褐色 良好	
〃 12	〃	〃	〃	12.0 4.0 4.4	〃	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 茶褐色 良好	
〃 13	SB 一 1 床面直上		〃	11.0 — —	丸型	〃	〃		緻密 茶褐色 良好	
〃 14	〃	〃	〃	11.4 4.4 5.2	〃	〃	〃		〃	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm) 口径 器高 底径	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
第4215図	SB—1 床面直上	土師	坏	16.0 — —	玉縁	口縁部ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 褐色 良好	
〃16	〃	〃	坏	12.0 — —	玉縁	〃	ロクロ水引		〃	
〃17	SB—1	〃	坏	— — 8.0		斜位刷毛 横位篦削		削り出し 高台	〃	
〃18	SB—1	〃	〃	13.0 3.0 6.0	玉縁	斜位刷毛 器体下半横位 回転篦削	ロクロ水引 回転篦磨	回転篦削	緻密 褐色 良好	
〃19	SB—1 床面直上	〃	〃	— — 4.0		回転横ナデ	回転横ナデ		緻密 灰褐色 良好	
〃20	SB—1	〃	〃	12.5 2.4 4.5	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		砂粒を含む 褐色 良好	
〃21	〃	〃	皿	16.0 2.2 7.0	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半横位 回転篦削	〃		緻密 白褐色 良好	
第431図	SB—1 カマド	土師	坏	10.0 — —	〃	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃		緻密 茶褐色 良好	
〃2	SB—1	〃	〃	10.0 — —	尖形	交互の刷毛 器体下部篦削	花弁状暗文 篦磨き		緻密 赤褐色 良好	
〃3	〃	〃	〃	11.6 4.5 5.8	玉縁	ロクロ水引	ロクロ水引 放射状暗文	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 褐色 良好	
〃4	〃	〃	皿	12.0 — —	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		〃	
〃5	〃	〃	〃	14.0 — —	丸型	〃	〃		緻密 灰褐色 良好	
〃6	〃	〃	〃	14.0 4.0 6.4	隆玉縁	〃	〃		緻密 白褐色 良好	
〃7	〃	〃	〃	15.6 — —	玉縁	ロクロ水引	〃		〃	
〃8	〃	〃	蓋	— — —		〃	〃		緻密 白褐色 良好	
〃9	〃	〃	坏	22.0 — —	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃		わずかに小石を含む 褐色 良好	
〃10	SB—1 床面直上	〃	蓋	17.0 4.0 —		ロクロ水引 斜位篦削	〃			
〃11	SB—1	〃	甕	25.0 — —	薄長	口頸部横ナデ 胴部縦刷毛	ナデ 横刷毛		石英・黒雲母を多く含む 暗褐色 良好	
〃12	SB—1 覆土	土師	蓋	— — 17.0		ロクロ水引 上半ロクロ回転篦削	ロクロ水引		緻密 褐色 良好	
〃13	SB—1	〃	〃	— — 17.5		〃	〃		〃	赤色顔料？

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm) 口径 器高 底径	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
第4314図	SB—1 床面直上	土師	甕	24.0 — —	薄長	口頸部横ナデ 胴部縦刷毛	横ナデ		黒褐色 良好	
〃15	SB—1	〃	〃	30.0 — —	肥厚	口頸部横ナデ 頸部篦押え 縦刷毛	横ナデ 斜位刷毛		小石と砂粒を含む 茶褐色 良好	
第441図	〃	〃	〃	26.6 — —		口頸部横ナデ 胴部縦刷毛	〃		砂粒が多い 暗褐色 良好	
〃2	〃	〃	〃	— — 9.0		縦刷毛 斜位篦削	斜位刷毛		黒雲母・白雲母・石英を多く含む 褐色 茶色も	
〃3	〃	〃	壺	— — 12.0		縦刷毛	横刷毛	木葉痕 ↓ 篦削	砂粒を含む 褐色 良好	
〃4	〃	〃	甕	27.0 — —	隆肥厚	口縁横ナデ 胴部縦刷毛	横刷毛		茶褐色 良好	
〃5	〃	〃	〃	— — 11.0		縦刷毛	横刷毛	木葉痕	黒雲母・白雲母を含む 暗褐色 良好	
〃6	〃	須恵	甕	34.0 — —		ロクロ水引	ロクロ水引		わずかに砂粒を含む 灰色 良好	
第461図	SB—3	土師	坏	13.8 3.1 8.2	玉縁	〃	〃	篦削	緻密 褐色 良好	
〃2	〃	〃	〃	12.0 — —	〃	〃	〃		わずかに砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃3	〃	〃	〃	13.8 3.5 9.0	〃	口縁部ロクロ水引 器体下半横位 回転篦削	〃		緻密 褐色 良好	
〃4	〃	〃	〃	12.0 — —	丸型	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削 横ナデ	〃		緻密 黄白色 良好	
〃5	〃	〃	〃	12.2 — —	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃		緻密 白褐色 良好	
〃6	SB—3	土師	坏	15.6 3.3 12.8	尖形	ロクロ水引	ロクロ水引	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 褐色 良好	剥落多
〃7	〃	〃	〃	15.0 3.5 12.5	玉縁	口縁部ロクロ水引 横位回転篦削	ロクロ水引 横位回転篦削	逆回転	緻密 茶褐色 良好	
〃8	〃	〃	〃	3.8 2.6 3.8	手捏		指頭押圧痕	木葉痕	砂粒を含む 赤褐色 良好	
〃9	〃	〃	〃	— — 3.4		指頭押圧痕			〃	
〃10	〃	〃	坏	10.0 — —	丸型	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 赤褐色 良好	
〃11	SB—3	〃	甕	16.0 14.5 10.0	薄長	口頸部横ナデ 胴部縦刷毛	横ナデ 篦磨	木葉痕	砂粒を含む 褐色 良好	
〃12	〃	〃		22.0 — —		〃 〃	横ナデ 交互の刷毛 輪積の痕あり		わずかに砂粒を含む 褐色 良好	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm) 口径 器高 底径	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
第4613図	S B — 3	土師	甕	32.0 — —	薄長	口頸部横ナデ 胴部縦刷毛	横ナデ 横刷毛	赤褐色	小礫を含む 良好	口縁整形が粗雑
第471図	SB — 3 カマド	〃	〃	26.0 — —	〃	口縁部横ナデ 縦刷毛	ナデ		小礫を含む 褐色 良好	
〃2	SB — 3 床面直上	〃	〃	— — 10.0		縦刷毛	斜位刷毛	木葉痕 ↓ 篦削	砂粒を含む 褐色 良好	
〃3	〃	須恵		— — 10.0		ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 灰色 良好	
〃4	〃	〃	壺	10.2 — —		〃	〃		〃	
〃5	〃	土師	甕	— — 8.0		縦刷毛	横刷毛 底部指圧痕	木葉痕	砂粒を含む 赤褐色 もろい	
〃6	SB — 3	須恵	壺	— —		ロクロ水引	ロクロ水引	削り出し 高台	緻密 灰色 良好	
〃7	SB — 3 カマド一括	土師	甕	12.0 — —	薄長	口縁部横ナデ 縦刷毛	横刷毛		砂粒を含む 褐色 良好	
第491図	SB — 6	土師	甕	20.0 — —	薄長	横ナデ 縦刷毛	斜位刷毛		砂粒を含む 黄褐色 良好	
〃2	〃	〃	〃	13.6 3.4 7.0	丸形	ロクロ水引	ロクロ水引		わずかに砂粒を含む 赤褐色 良好	
〃3	〃	〃	〃	20.0 — —	薄長	口縁部横ナデ 縦刷毛	交互の刷毛		緻密 黄褐色 良好	
〃4	〃	須恵	壺	— — 9.0		ロクロ水引	ロクロ水引	削り出し 高台	緻密 暗灰色 良好	
〃5	〃	土師	甕	— — 5.6		縦刷毛	斜位刷毛	木葉痕	砂粒を含む 褐色 良好	
第521図	SB — 7	〃	坏	— — 9.2		器体下半斜位篦削	放射状暗文 底部回転ナデ		緻密 白褐色 良好	内黒
〃2	〃	〃	〃	13.4 4.2 5.4	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半横位 回転篦削	ロクロ水引 放射状暗文	糸切 ↓ 篦削	緻密 褐色 良好	
〃3	〃	〃	〃	16.0 — —	〃	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 赤褐色 良好	
〃4	〃	〃	〃	11.6 4.2 6.6	尖形	〃	ロクロ水引 放射状暗文	糸切	緻密 茶褐色 良好	
〃5	〃	〃	〃	12.0 4.4 4.0	隆玉縁	〃	ロクロ水引	糸切 ↓ 篦削	砂粒をわずかに含む 褐色 良好	
〃6	〃	〃	〃	15.0 4.6 2.5	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半横位 回転篦削	〃		緻密 褐色 良好	
〃7	〃	〃	〃	10.8 — —	玉縁	ロクロ水引	〃		緻密 白褐色 良好	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm)(口径/器高/底径)	調整 口縁	外面	内面	底	胎土/色調/焼成	備考
第528図	SB—7	土師	坏	11.7 4.0 4.7	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		砂粒を含む 赤褐色 良好	
〃9	〃	〃	〃	13.0 — —	玉縁	〃	〃		〃	
〃10	〃	〃	皿	13.9 2.4 3.8	隆玉縁	〃	〃	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 白褐色 良好	
〃11	SB—7 焼土内	土師	坏	11.0 4.2 3.0	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引	篦削	緻密 褐色 良好	
〃12	〃	〃	〃	11.0 4.1 4.0	玉縁	〃	〃	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 赤褐色 良好	
〃13	〃	〃	皿	12.5 2.2 5.0	隆玉縁	〃	〃	〃	緻密 褐色 良好	
〃14	〃	〃	〃	12.2 2.6 5.4	〃	〃	〃	〃	緻密 灰褐色 良好	
〃15	〃	〃	〃	12.5 2.5 5.5	〃	〃	〃	〃	緻密 茶褐色 良好	
〃16	SB—7	須恵	甕	— — —		平手叩き	同心円叩き 半スリケシ		緻密 灰色 良好	
〃17	〃	〃	坏	— — 11.0		斜位篦削			緻密 灰色 良好	
第531図	SB—8	土師	甕	24.0 — —	薄長	口頸部横ナデ 胴部縦刷毛	横ナデ 横刷毛		雲母・砂粒を含む 褐色 良好	
〃2	〃	〃	坏	11.0 4.5 5.5	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 褐色 良好	
〃3	〃	〃	〃	10.8 4.1 4.7	丸型	〃	ロクロ水引 花弁状暗文	糸切 ↓ 篦削	〃	
〃4	〃	〃	皿	15.6 3.0 6.0	〃	口縁部ロクロ水引 器体下半横位 回転篦削	ロクロ水引	回転糸切 ↓ 篦削	〃	
〃5	SB—8 焼土内	〃	坏	— — 6.0		〃	花弁状暗文		〃	
〃6	〃	〃	〃	14.0 5.1 7.0	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引 花弁状暗文	糸切	緻密 茶褐色 良好	
〃7	〃	〃	〃	14.0 — —	玉縁	〃	ロクロ水引		緻密 白褐色 良好	
〃8	〃	〃	〃	12.0 3.5 4.0	〃	〃	〃	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 茶褐色 良好	
第581図	5号配石	土師	坏	11.8 3.7 5.0	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 褐色 良好	
〃2	〃	〃	坏	— — 4.2		斜位篦削		〃	緻密 暗褐色 良好	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm)(口径/器高/底径)	調整 口縁	外面	内面	底	胎土/色調/焼成	備考
第583図	5号配石	須恵	甕	— — 14.0		ロクロ横ナデ	ナデ		砂粒を含む 白灰色 良好	
第621図	3号井戸状遺構	〃	〃	26.0 — —	折り返し	ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 灰色 良好	
〃2	〃	土師	坏	11.0 — —	尖形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引 花弁状暗文		緻密 赤褐色 もろい	
〃3	〃	〃	〃	— — 7.6		横位篦削	放射状暗文		緻密 白褐色 良好	
〃4	〃	〃	〃	10.0 4.5 6.0	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引 花弁状暗文		〃	墨書「黒」
〃5	〃	砥石								
第681図	1号土拡	土師	碗	15.0 4.0 6.0	丸形	篦削 ↓ ナデ	篦削 ↓ ナデ		砂粒を含む 良好	内、外黒色
〃2	〃	〃	〃	11.6 — —	〃	〃	〃		〃	〃
〃3	〃	〃	〃	14.0 — —	〃	〃	〃		砂粒を含む 白褐色(外) 良好	内黒
第701図	3号土拡	須恵	甕	— — 12.0		ロクロ水引	ロクロ水引		砂粒を含む 暗灰色 良好	内面底部に自然釉
〃2	〃	土師	手捏	5.2 2.0 4.8			指頭押圧痕		砂粒を含む 白褐色 良好	
第731図	52G 1.2—C.D 2層	〃	甕	38.0 — —	折り返し	口頸部に波状文あり ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 灰黒色 良好	
〃2	53G 1.2—A.B	土師	甕	— — 7.0		縦刷毛	斜位刷毛 底部篦削	木葉痕	砂粒を含む 褐色	
〃3	53G 1.2—A.B 3層	〃	坏	10.0 4.2 6.0	尖形	ロクロ水引	ロクロ水引 ↓ 放射状暗文	静止糸切 ↓ 篦削	緻密 白褐色 良好	
〃4	53G 1.2—A.B	〃	〃	11.0 4.2 6.0	丸形	ロクロ水引	ロクロ水引 ↓ 花弁状暗文	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 褐色 良好	
〃5	53G 1.2—A.B	〃	〃	16.0 — —	隆玉縁	ロクロ水引	ロクロ水引	篦削	緻密 白褐色 良好	
〃6	53G 1.2—A.B	〃	碗	12.0 4.4 1.0		口縁部横ナデ 篦削	横ナデ		砂粒を含む 灰褐色	
〃7	53G 1.2—A.B 3層	須恵	甕	— — 16.0		平行叩き 平スリケシ	みこみ部から 器体部に刷毛		緻密 灰黒色 良好	
〃8	52G 3.4—C.D 6層	滑石	紡錘車							
〃9	61G 3.4—C.D	須恵	蓋	— — —		同心円状に回転ナデ	ナデ		緻密 淡灰色 もろい	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm)(口径/器高/底径)	調整 口縁	調整 外面	調整 内面	調整 底	胎土 色調 焼成	備考
第7310図	61G 3.4—C.D	須恵	蓋	14.0 — —		ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 暗灰色 良好	
〃11	61G 3.4—C.D 4層	〃		— — 12.0		〃	〃		砂粒を含む 暗灰色 良好	
〃12	61G 1.2—A.B 6層	土師	坏	11.2 4.4 5.2	丸形	口縁部ロクロ水引 下半位篦削	ロクロ水引		茶褐色 良好	剥落あり
〃13	62G 1.2—A.B 2層	〃	〃	12.3 3.7 8.0	尖形	口縁部ロクロ水引 下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 白褐色 良好	剥落あり
第741図	62G 1.2—C.D 6層	〃	〃	11.4 4.1 5.4	丸形	下半斜位篦削	ロクロ水引 ↓ 放射状暗文		白褐色 良好	
〃2	62G 1.2—A.B 6層	土師	坏	14.0 — —	丸形	ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 褐色 良好	
〃3	62G 1.2—C.D 5層	〃	〃	12.0 4.0 6.2	〃	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃		黒褐色 良好	
〃4	62G 1.2—A.B 2層	〃	〃	10.4 4.1 5.0	〃	〃	〃	回転糸切 ↓ 篦削	砂粒を含む 白褐色 良好	
〃5	62G 3.4—C.D	〃	〃	16.0 — —	玉縁	ロクロ水引	〃		緻密 褐色 良好	
〃6	62G 1.2—C.D 4層	〃	〃	10.0 3.8 4.8	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃		緻密 赤褐色 良好	赤色顔料
〃7	62G 1.2—A.B 2層	〃	〃	11.0 4.4 5.6	玉縁	ロクロ水引	〃	静止糸切	緻密 白褐色 良好	
〃8	62G 1.2—A.B	〃	〃	11.3 4.5 5.5	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 白褐色 良好	
〃9	62G 1.2—A.B 6層	〃	〃	10.5 4.5 6.0	丸形	〃	〃	〃	緻密 褐色 良好	
〃10	62G 1.2—C.D	〃	〃	13.0 — —	玉縁	〃	〃		緻密 褐色 良好	
〃11	62G 1.2—A.B 2層	〃	〃	— — 7.0		横位回転篦削	〃		砂粒を含む 白褐色 良好	
〃12	62G 3.4—A.B	〃	〃	13.0 3.4 5.0	玉縁	ロクロ水引	〃		緻密 赤褐色 良好	赤色顔料
〃13	62G 1.2—A.B 2層	〃	〃	15.6 6.4 8.0	丸形	ロクロ水引	〃		緻密 白褐色 良好	
〃14	62G 1.2—C.D 3層	〃	〃	16.0 — —	隆玉縁	〃	〃		砂粒を含む 褐色 良好	
〃15	62G 1.2—C.D 4層	〃	〃	— — 4.6		器体下半斜位篦削	放射状暗文		緻密 白褐色 良好	
〃16	62G 3.4—A.B	〃	皿	18.0 — —	丸形	口縁部ロクロ水引	ロクロ水引		赤褐色 良好	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm) 口径 器高 底径	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
第741 7図	62G 1.2—C.D 4層	土師	坏	— — 4.6		器体下半斜位篦削			緻密 白褐色 良好	墨書
〃18	62G 1.2—C.D 4層	〃	〃	15.0 — —	尖形	口縁部ロクロ水引	ロクロ水引		褐色 良好	
〃19	62G 1.2—C.D	〃	〃	14.0 3.4 9.5	丸形	横ナデ 器体下部篦削	横ナデ		緻密 褐色 良好	
第751 図	62G 1.2—C.D 4層	須恵	甕	— — —		ロクロ水引 平行叩き	ロクロ水引 円弧叩き 半スリケシ		緻密 灰白色 良好	
〃2	62G 4層 1.2—C.D 63G 5層 1.2—C.D	〃	甕	— — 8.4		ロクロ水引	ロクロ水引		砂粒を含む 灰色 良好	内面底部に自然釉
〃3	62G 1.2—C.D 3層	瓦質	鉢	28.0 — —		横ナデ	横ナデ		粉っぽい 灰白色 もろい	
〃4	62G 土器群	土師	坏	11.0 4.0 6.0	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引	篦削	緻密 白褐色 良好	
〃5	〃	〃	〃	12.0 4.5 5.8	〃	〃	〃		緻密 褐色 良好	剥落多し
〃6	〃	〃	〃	11.2 4.5 5.6	〃	〃	〃	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 白褐色 良好	
〃7	〃	〃	〃	12.0 5.0 6.4	〃	ロクロ水引	〃		緻密 褐色 良好	
〃8	〃	〃	〃	7.0 — —	丸形	〃	放射状暗文		緻密 赤褐色 良好	
〃9	〃	〃	〃	12.0 — —	〃	〃	花弁状暗文		緻密 褐色 良好	
〃10	〃	〃	〃	11.7 4.0 5.8	〃	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 灰褐色 良好	
〃11	〃	〃	〃	11.0 4.2 3.4	玉縁	〃	〃	〃	緻密 褐色 良好	一部剥落
〃12	〃	〃	〃	11.4 4.2 5.4	〃	〃	〃	〃	緻密 灰褐色 良好	
〃13	〃	〃	〃	11.4 4.7 5.0	〃	〃	ロクロ水引 篦ナデ	〃	緻密 褐色 良好	灯明皿 墨書
〃14	62G 土器群	土師	高台付坏	14.0 5.2 6.0	丸形	ロクロ水引	ロクロ水引	削出高台	緻密 褐色 良好	
第761 図	〃	〃	坏	— — 6.9		〃	〃	逆回転篦削	緻密 赤褐色 良好	墨書
〃2	〃	〃	高台付坏	16.0 7.0	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転篦削	ロクロ水引 花弁状暗文	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 褐色 良好	
〃3	〃	〃	坏	15.0 5.3 7.0	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 褐色 良好	口縁部内面煤付着

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm)(口径/器高/底径)	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
第764図	62G 土器群	土師	甕	30.0 — —	肥厚	横ナデ	横ナデ		砂粒を含む 褐色 良好	
〃5	63G 1.2—A.B 6層	〃	手捏	— — 4.4		篦ナデ	指頭押圧痕		砂粒を含む 褐色	
〃6	〃	〃	高台付坏	— — 8.6		ロクロ水引	放射状暗文	削出高台	緻密 淡褐色 良好	
〃7	63G 1.2—A.B 2層	〃	坏	10.0 3.7 6.0	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		褐色 良好	
〃8	63G 3.4—A.B	〃	〃	12.4 — —	玉縁	〃	〃		緻密 褐色 良好	
〃9	63G 3.4—A.B	〃	〃	— — 6.0				篦削	褐色 褐色 良好	
〃10	63G 1.2—A.B	〃	〃	14.0 — —	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 白褐色 良好	内面煤付着
〃11	〃	〃	〃	12.0 4.4 5.4	〃	〃	ロクロ水引 放射状暗文	回転糸切	〃	墨書
〃12	63G 1.2—A.B 6層	〃	甕	16.0 — —	薄長	横ナデ 口頸部篦ナデ	横ナデ		粗く砂粒を含む 暗褐色 良好	
〃13	〃	〃	〃	11.0 — —	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 褐色 良好	
〃14	63G 1.2—A.B 2層	〃	坏	14.0 3.9 —	〃	篦磨	篦磨		粗く砂粒を含む 褐色 良好	
〃15	63G 1.2—A.B 2層	〃	坏	11.0 3.2 4.0	〃	篦磨	篦磨		砂粒を含む 白褐色 良好	
第771図	72G 1.2—C.D	須恵	甕	— — —		平行叩き	布目をスリケシ		やや密 灰黒色 良好	
〃2	72G 1.2—C.D 6層	土師	坏	13.6 7.6 5.5	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引	回転糸切	緻密 褐色 良好	
〃3	72G 1.2—C.D 6層	〃	〃	11.6 4.4 5.2	〃	ロクロ水引	〃		赤褐色 良好	剥落多し
〃4	72G 1.2—C.D 4層	〃	〃	10.0 — —	玉縁	〃	〃		砂粒を含む 赤褐色 良好	赤色顔料
〃5	72G 1.2—C.D	〃	〃	11.2 4.0 5.0	〃	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引 放射状暗文		緻密 褐色 良好	灯明皿
〃6	72G 1.2—C.D	〃	〃	12.0 4.8 4.8	〃	〃	ロクロ水引		緻密 黄褐色 良好	
〃7	72G 1.2—A.B 6層	〃	〃	11.5 4.6 4.2	隆玉縁	ロクロ水引	〃		緻密 赤褐色 良好	剥落多し
〃8	72G 1.2—A.B 6層	土師	坏	11.8 — —	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 褐色 良好	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(mm)(口径/器高/底径)	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
第779図	72G 1.2—A.B	土師	高台付坏	— — 8.0				回転糸切 削り出し 高台	砂粒を含む 褐色 良好	
〃10	72G 1.2—C.D 6層	〃	坏	14.4 3.2 6.6	丸形	ロクロ水引	ロクロ水引	回転糸切	緻密 褐色 良好	
〃11	72G 1.2—C.D	〃	〃	12.6 2.7 5.4	〃	ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃		粗い 茶褐色 良好	
〃12	72G 1.2—C.D 6層	〃	〃	13.1 2.5 2.6	玉縁	〃	〃	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 褐色 良好	
〃13	〃	〃	手捏	— — 2.2		指頭押圧痕	指頭押圧痕	篦削	粗い 褐色 良好	
〃14	72G 1.2—C.D	〃	皿	14.6 2.4 7.4	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下部斜位篦削	ロクロ水引	糸切 ↓ 篦削	緻密 褐色 良好	墨書 「子」
〃15	〃	〃	坏	12.8 2.8 4.2	玉縁	ロクロ水引	〃		〃	
第781図	72G 1.2—C.D	〃	甕	17.0 — —	薄長	縦刷毛	横刷毛		小石を含む 黄褐色 良好	
〃2	72G 6層	土師	甕	18.0 — —	〃				小石を含む 赤褐色 良好	
〃3	〃	灰釉陶器	高台付坏	13.6 3.9 7.8	丸形				緻密 灰白色 良好	
〃4	72G 1.2—C.D	〃	甕	— — 5.4		ロクロ水引 器体下部斜位篦削	回転ナデ		〃	
〃5	72G 6層	須恵	〃	28.0 — —	折り返し	ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 灰色 良好	
〃6	72G 1.2—C.D 2層	〃	高台付坏	— — 11.0		〃	回転ナデ		〃	
〃7	72G 1.2—C.D 生活面直上	土師	皿	12.4 2.1 5.0	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引	回転糸切 ↓ 回転篦削	砂粒を含む 褐色 良好	
〃8	72G 1.2—C.D 生活面	土師	〃	12.4 2.1 5.0	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		砂粒を含む 褐色 良好	
〃9	〃	〃	〃	14. 2.4 6.0	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半横位 回転篦削	〃		緻密 褐色 良好	
〃10	〃	〃	甕	— — 7.0		縦刷毛	横刷毛	木葉痕	粗く砂粒を含む 暗褐色 良好	
〃11	〃	〃	台付坏	— — 8.2		斜位篦削	底部うずまき暗文	削り出し 高台	粗く砂粒を含む 褐色 良好	
〃12	〃	〃	蓋	11.3 — —		ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 暗褐色 良好	
〃13	〃	滑石	管玉							

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm)(口径/器高/底径)	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
第7814図	73G 2層	土師	坏	12.0 4.7 4.7	隆玉縁	ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 褐色 良好	剥落多し
〃15	73G 3.4—A.B 5層	土師	〃	14.0 3.6 6.0	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃	篦削	砂粒 暗褐色 良好	
〃16	73G 3.4—A.B 6層	〃	〃	12.8 4.4 5.2	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半横位 回転篦削	〃	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 暗褐色 良好	
第791図	73G 3.4—A.B 2層	〃	〃	12.1 3.8 4.2	〃	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃		緻密 暗褐色 良好	
〃2	73G 3.4—A.B 5層	土師	坏	13.9 4.5 5.0	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ引水		砂粒を含む 褐色 良好	
〃3	73G 1.2—A.B 6層	〃	〃	13.9 4.7 6.4	尖形	〃	ロクロ水引 花弁状暗文		砂粒を含む 褐色 良好	
〃4	73G 3.4—A.B	〃	高台付坏	16.4 3.4 6.4	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半横位	ロクロ水引	削り出し高台	〃	
〃5	73G 3.4—A.B 5層	〃	坏	15.6 4.2 4.5	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃		〃	
〃6	73G 3.4—A.B 6層	〃	〃	15.5 5.2 6.2	〃	ロクロ水引	ロクロ水引 放射状暗文		緻密 褐色 良好	内黒
〃7	73G 3.4—C.D	土師	甕	19.8 — —	薄長	横ナデ	横ナデ		粗く砂粒を含む 褐色 良好	
〃8	73G 1.2—A.B 6層	〃	皿	14.0 2.4 6.6	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 褐色 良好	
〃9	〃	〃	甕	— — 7.4		縦刷毛	底部指頭押圧痕	木葉痕	砂粒を多く含む 暗褐色	
〃10	73G 4層	〃	〃	— — 4.5		〃			砂粒を含む 赤褐色 良好	
〃11	73G 6層	〃	坏	15.0 5.3 5.6	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引	篦による陰刻がある。	緻密 白褐色 良好	
〃12	73G 1.2—C.D 6層	須恵	甕	28.0 — —		ロクロ水引	〃		砂粒を含む 灰色 良好	

第12表　石橋条里制遺構第Ⅰ地点出土の種核

番号	種核名	遺物出土遺構またはグリッド	巾 (Wide)	長 (Long)	厚 (Thik)	L／W	備考
1	モモ	SB—1　№94	1.735	2.325	1.425	1.34	16、自生、尖端、欠損
2	オニグルミ	53G　SE—3	2.04	2.575	1.99	1.26	3、
3	オニグルミ	53G　SE—3	2.095	3.065	1.09	1.46	4、半分
4	オニグルミ	53G　SE—3	2.535	3.23	1.28	1.27	4、底部と側面が欠損
5	オニグルミ	53G　SE—3	2.165		1.16		1、◎欠損
6	オニグルミ	53G　SE—3	2.90	3.22	1.20	1.11	7、半分
7	モモ	53G　SE—3	1.67	2.03	1.53	1.22	
8	クルミ	53G　SE—3	2.36	3.065	1.145	1.30	20、半分、尖部が少し欠損
9	クルミ	53G　SE—3	2.51	3.075	1.265	1.23	20、半分、尖部が少し欠損
10	クルミ	53G　SE—3	2.07	2.74	1.22	1.32	20、半分
11	クルミ	53G　SE—3	2.61		1.26		20、半分、炭化、尖部と底部が欠損
12	モモ	53G　SE—3	2.00	2.525	1.67	1.26	
13	モモ	53G　SE—3	2.45	3.11	1.85	1.27	尖部と底部が少し欠損
14	モモ	53G　SE—3	1.835	2.20	0.81	1.20	半分尖部が欠損
15	クルミ	53G　SE—3	2.43	3.22	1.14	1.33	半分尖部と底部が欠損
16	クルミ	53G　SE—3	2.40	2.71	1.12	1.12	上半分が欠損

（注）1～6　市河三次山梨県立女子短期大学教授鑑定　備考の数字は遺物番号

出土木材の同定検査について

1　識　別　方　法

①出土木材の大部分は、材の老化が進み軟化しているためポリエチレングリコール（カーボワックス）で包埋し、ミクロトームで厚さ5～10ミクロン程度のプレパラートを作り、卵白・グリセリンでスライドグラスに載せ、写真撮影した。

②しかし、材が著しく少さく薄いため、プレパラートの作成が困難な材と、炭化や腐朽が進み、木材組織が変化して識別困難な材は除外した。

③プレパラートは主に材の横断面（木口面）と、接線面（板目面）から採取した。又半径方向の面（柾目面）からプレパラートを作っても、老化や腐朽により材組織内部の微細を作っても構造部が破壊又は変形しており、材の識別拠点として期待できないものは除外した。

2　識　別　結　果

①プレパラートによる木材組織の写真と材の識別結果を表に示す。

②ほとんどの材が、樹種判定の根拠となる組織内部の微細構造が老化、腐朽、炭化等によ

り変形又は破壊されており、針葉樹、広葉樹とも材の構成要素と各細胞の形状、配列などの特徴から検討するに止まった。したがって、どの樹種であるかは確認できず、表に示す程度の結果となった。

同定検査者　山梨県林業試験場

主任研究員　渡　辺　利　一

技　　師　藤　平　登　留

第13表　石橋条里制遺構第Ⅰ地点出土木材の識別結果

出土遺構	遺物No.	試料No.	遺物名	材の構成要素 放射組織	軸方向柔細胞	木繊維	道管	水平樹脂細胞	垂直樹脂道	放射組織	樹脂細胞	仮道管	針広葉樹名	組織の主な特徴	樹種
SB—2	Po—7	23	柱	○									針	樹脂胞は認められないが、仮道管、径形、早・晩材の移行形態からみて	スギ、ヒノキ、サクラ類
SB—4	No.2	50	棒							○	○	○	広	散孔材道管孔は単独、径小、分布密、方射組織1～3列	カツラ、ホオノキ
SB—4	No.4	6	木棒(有孔棒)							○	○	○	広	散孔材道管は単独～房状で径やや小、分布は密、放射状組織幅は中	カツラ、ミズキ
SB—4	No.8	7	板	○				○	○				針	早・晩材の移行緩、樹脂細胞らしきものが認められるが、不明確	スギまたは、モミ、シラベ
SB—4	No.9	51	板							○	○	○	広	環孔材、径大～小、配列やや放射状、放射組織単列	クリ、シイノキ
SB—4	No.10	1	板	○	○	○							針	仮道管内壁にらせん肥厚が認められない。細胞高およそ10以下	スギ、ヒノキ、ネズコ、イヌマ
SB—4		56	板	○		○							針	らせん肥厚なし、年輪の移行緩まん仮道管径小	キモミ、シラベ類
SB—5		46								○	○	○	広	散孔材、道管孔単独、径やや小、分布密、放射組織1～3列	カツラ、ホオノキ
SB—14	Po—78	44	柱							○	○	○	広	環孔材、やや放射状配列、放射組織幅大	クヌギ、ナラ類
SE—3	上層	52	柱	○		○	○						針	らせん肥厚なし、年輪の移行緩、仮道管径中	ヒノキ、サクラ、スギ
SE—3		24								○	○	○	広	環孔材、道管径中、分布配列やや不明瞭、放射組織の幅大	コナラ、クヌギ類
SE—3		25		○		○	○						針	仮道管径、早・晩材の移行、放射細胞高からみて	スギ、ヒノキ、サクラ類
SE—3		27								○	○		広	道管単独～房状、径はやや中、やや放射状孔材的な特徴を示す	樹種不明
SE—3		28								○	○	○	広	環孔材道管孔単独～一部房状、径は中、放射組織の幅中	ノグルミ、ヤマウルシ

出土遺構	遺物No.	試料No.	遺物名	材の構成要素 放射組織	軸方向柔細組織	木繊維	道管	水平樹脂	垂直樹脂	放射組織	樹脂細胞	仮道管	針広葉樹名	組織の主な特徴	樹種
SE—3		29						○	○	○	○		広	No.28に近似	ノグルミ、ヤマウルシ
SE—3		30				○	○	○					針	仮道管内壁らせん肥厚なし、放射組織単列で10細胞高以下	ヒノキ、スギ
SE—3		47						○	○	○	○		広	散孔材、道管孔単独、径中、分布やや粗、放射組織1～2列	ホオノキ
SE—3		48						○	○	○	○		広	散孔材、道管孔単独、径中、分布やや粗、放射組織1～5列、低い	イタヤカエデ、カエデ
SE—3		49						○	○	○	○		広	散孔材、道管孔単独～房状、径やや小、分布粗	イタヤカエデ、カエデ類
SE—3		9		○	○									樹脂細胞が確められない。仮道管断面が再型、他はNo.8と同じ	モミ、シラベ類
SE—3	中層	10						○	○	○	○		広	樹心部の材、環孔材、道管径中柔細胞は連合翼状、放射組織の幅中	エンジュ、ノグルミ
SE—3		11						○	○	○	○		広	No.10に近似	エンジュ、ノグルミ
SE—3		12						○	○	○	○		広	環孔材、道管径やや大、道管孔単独、放射組織の幅大	ミズナラ、コナラ類
SE—3		13						○	○	○	○		広	環孔材、道管径やや小、放射組織幅やや小、道管の分布粗	フジキ？
SE—3		3						○	○	○	○		広	環孔材、道管は単独、火炎状配列、径大、放射組織幅大、仮道管？	コナラ、ミズナラ、クヌギ
SE—3	下層	4						○	○	○	○		広	散孔材道管は房状、径は中、分布密度中、放射組織の幅中	カンバ、ミズメ、サクラ類
SE—3		5						○	○	○	○		広	散孔材道管は房状、径は中、分布密度中、放射組織の幅中	カンバ、ミズメ、サクラ類
SE—3		8		○	○								針	樹脂細胞が認められない。放射細胞高が高い	モミ、シラベ類
SE—3		18		○	○								針	樹脂細胞が認められない。放射細胞高が高い。らせん肥厚なし	モミ類
S-SGR1		43		○		○	○	○					針	年輪幅の移行緩、仮道管径小、らせん肥厚なし	マツ、トウヒ類
52G	Po—11	21	柱	○									針	ホロ面の写真のみでやや不明瞭、仮道管配列からNo.18に近似	モミ類
53G	Po—1	22	柱					○	○	○	○		広	環孔材道管径大、環状配列密、放射組織幅小（単列）分布は粗	シオジ、タモ、クリ
53G	Po—7	45	柱					○	○	○	○		広	環孔材、道管径大、放射組織単列～複列	クリ、タモ
53G	No.—6	53	杭	○	○								針	らせん肥厚が認められる。晩材部仮道管壁が厚い	イチイ、カヤ

第２節　中・近世の遺構と遺物

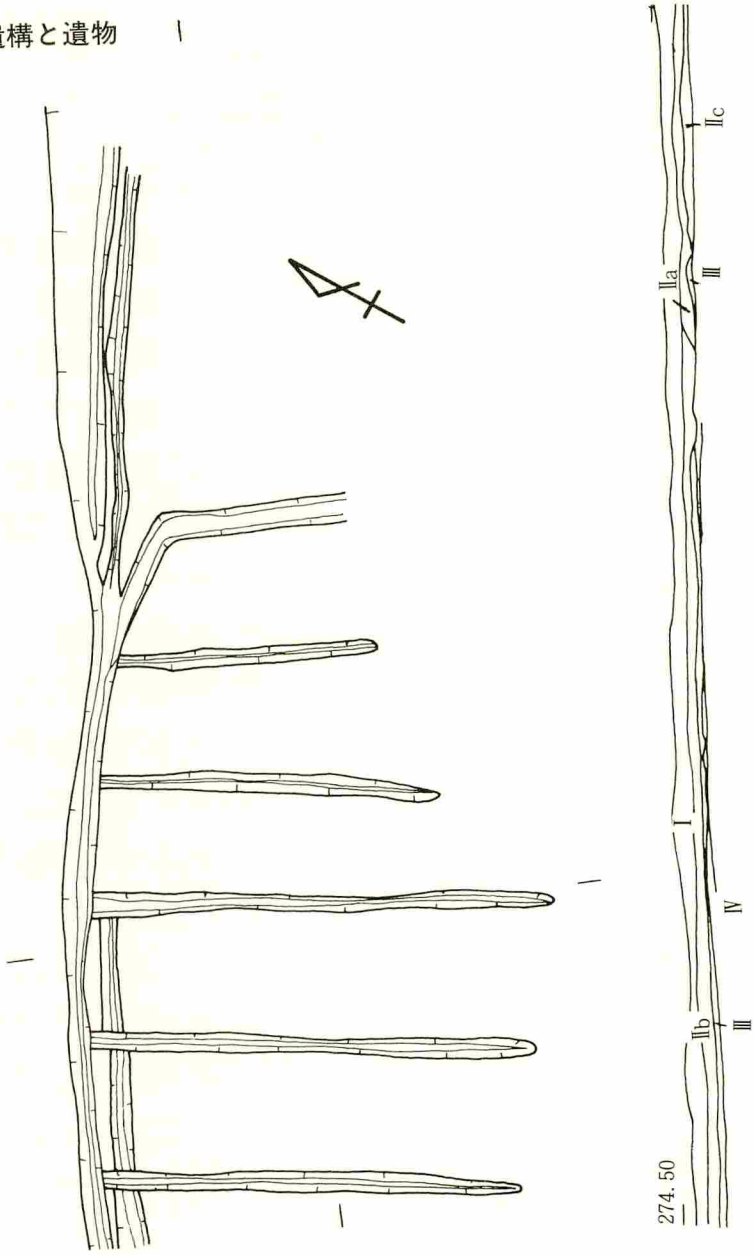
１号、２号溝状遺構

１号・２号・３号・６号・８号・９号・10号・11号・12号列石、１号・２号井戸状遺構、３号・４号集石列等がある。

この中で遺物を伴出しない遺構は、層序と生活面でその時期を決定した。

溝状遺構と遺物

１号溝状遺構　この遺跡の北端で、現水田床面下約30㎝の層で検出した。溝の幅は20〜30㎝、深さは５〜10㎝である。短い溝は全て北西で止まり、これにつながる長い溝は北東と南西に延長し、一部は２本が並行する。長い溝の南東部は平面になっていて溝はなく、北西より約21㎝高く、ほぼ水平である。溝の底の比高は、長い溝では南西端より北東端が約5.3㎝高い。短い溝を北東のものから、１〜６とすると、その底は南東が北西端より、１が1.2㎝、２が1.7㎝、３が3.7㎝、４が8.2㎝、５が８㎝、６が1.5㎝高い。短い溝は全て北西端が低くなっている。

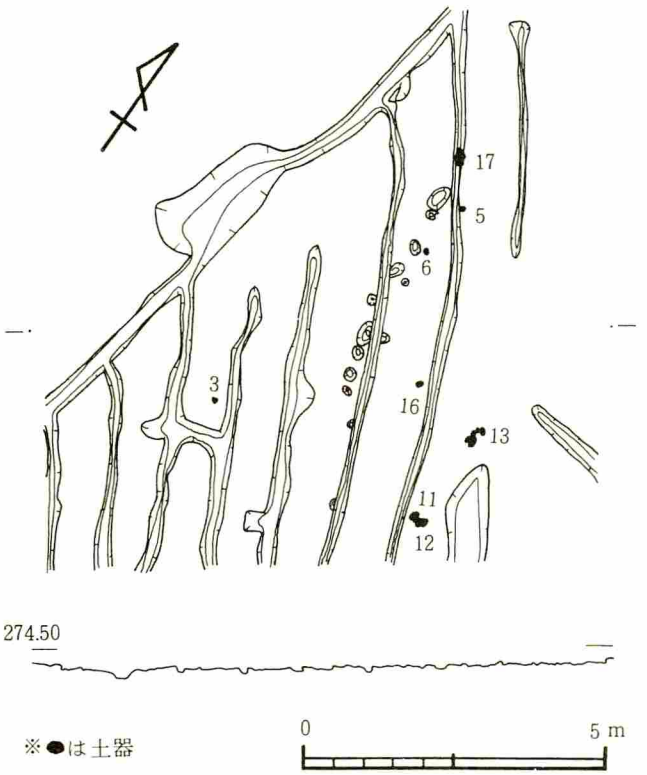


Ⅰ　表　土
Ⅱa　褐色土（小礫）
Ⅱb　〃　（大礫）
Ⅱc　暗褐色土（粘土）
Ⅲ　〃　（〃）
Ⅳ　〃　（礫）

第80図　１号溝状遺構実測図

水を流した溝であろうか。仮に水田に関係する遺構であるとしても、この溝の掘られている地層は小礫層で水田の床土にはならないであろう。ただ溝の掘込面が上層にあったとすれば別であるが、確認は出来なかった。また現水田とはその方向や、占めるスペースは一致しない。

遺物は土師質土器少量とともに、貫入のある志野系陶器の碗の破片が出土した。



第81図　2号溝状遺構実測図（1:120）

2号溝状遺構

形態は1号と似ていて、幅・深さとも同様であるので、同一目的で設置したのであろうか。現水田の床土面からの深さは約30cmで、溝が礫層を掘り込んでいる点でも酷似している。

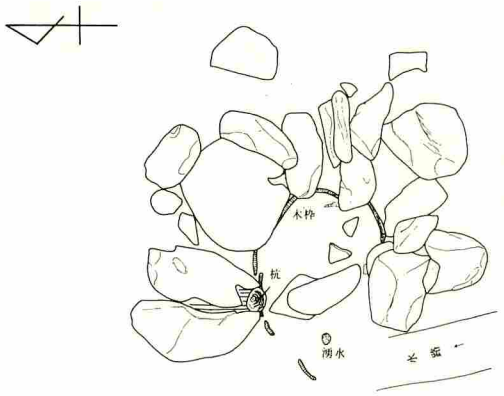
列石と遺物

1号列石　北西端で、水田床土面より約40cm下層から検出した石垣である。全体的に円弧を描き、現水田区画線とは全く一致しない。南東に面があるのは、現在の地形とは逆で下方が高くなっている。発見時には1～2段積になっていたが、崩れ落ちている石を積み直すと3段くらいになる。一部は重箱積になっているので、甲斐地方での石積方法を考慮すると、江戸中期以前に構築されたのであろう。第87図№6、8、11、12の天目茶碗、黄瀬戸、青磁等が上部（北西側）生活面から出土している。

2号・3号列石　現灌漑用水路の東に2列に並行している石垣である。現在の水路には石垣はないが、西側に面があるのでかつては石垣のある水路であったと考えられ、3号が使われた後、西側に水路が移ったため、さらに2号を積んだと考えられる。いずれも一部が重箱積になっているので江戸中期以前に積まれたと思われる。したがって1号井戸もこの時期と考えられよう。

6号・10号列石　遺跡の中央部に2列に並行する短い石垣である。面は2列とも北にあって、2段積になっている。遺物は第87図No.1、4、10の陶磁器が出土した。

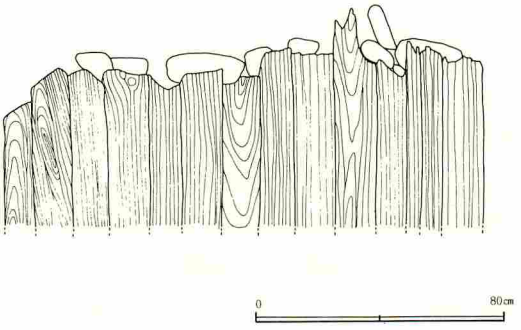
8号・9号・12号列石　現在の畑の区画線に沿って検出した石垣と飛石状列石である。8号は復元して2～3段の北に面をもつ石垣となり、全体的に重箱積である。9号、12号は石の間隔が1.5mから3mあり、径20cm～30cmの上が平な石を使用しているところから、塀のようなものの礎石と考えられよう。遺物は少なくNo.5の黄瀬戸の碗が出土したのみである。



井戸状遺構

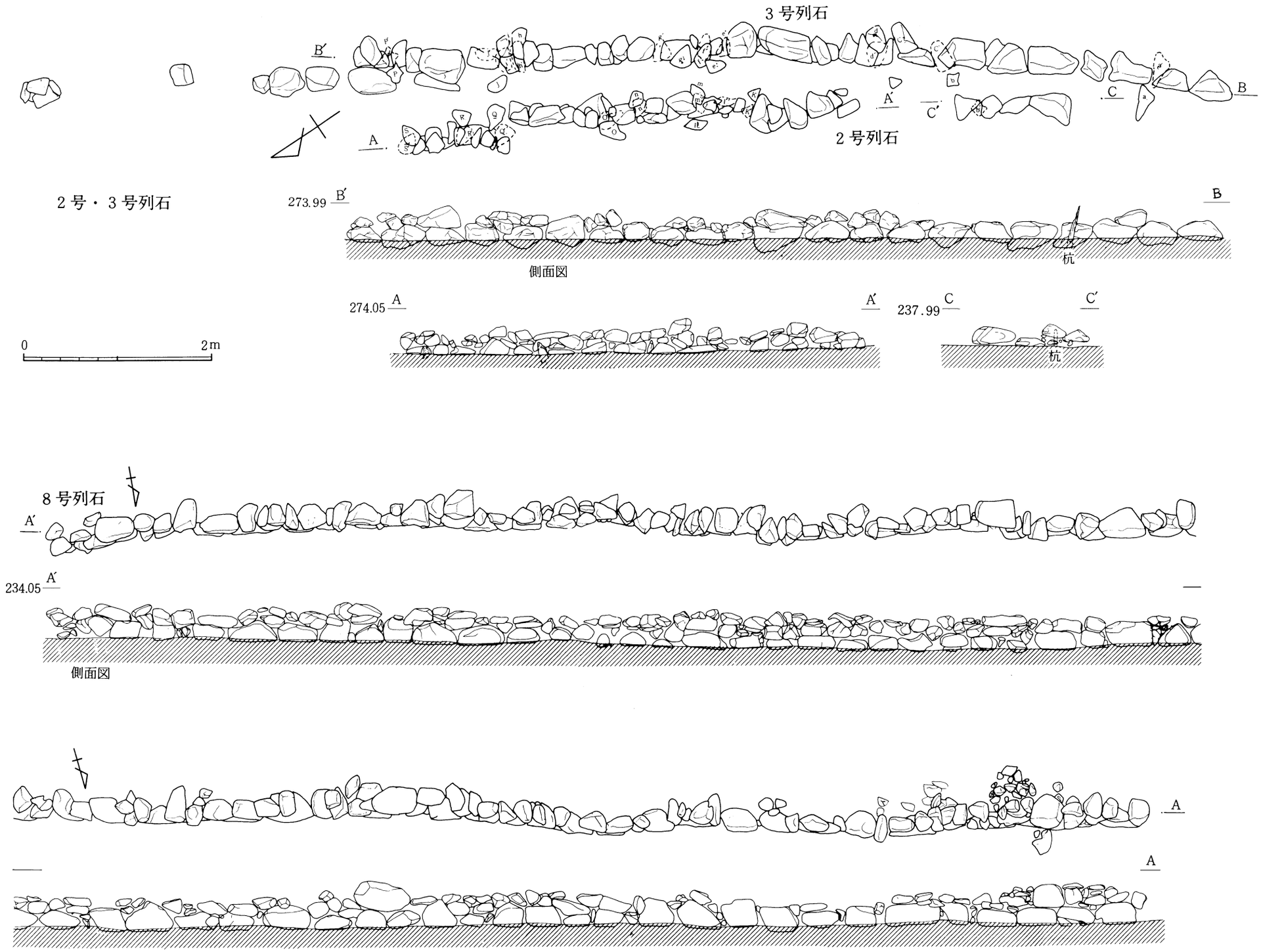
1号井戸状遺構　遺跡中央南端にあり、昭和の初期まで使用されていたという。現在も湧水があり使用出来る状態であった。木の板で囲み、周囲には石垣を積んであり、深さは1m以上である。遺物は出土しなかった。

2号井戸状遺構　遺跡の中央南端にあり、ここから水路が南に延長している。井戸は一辺約30cmで方形に石が2段積んであり、上には石の蓋が載せてあった。遺物は出土しなかったが、層位は中世にほぼ同じである。



第82図　1号井戸状遺構実測図（1：20）

第83図　列石平面図及び側面図

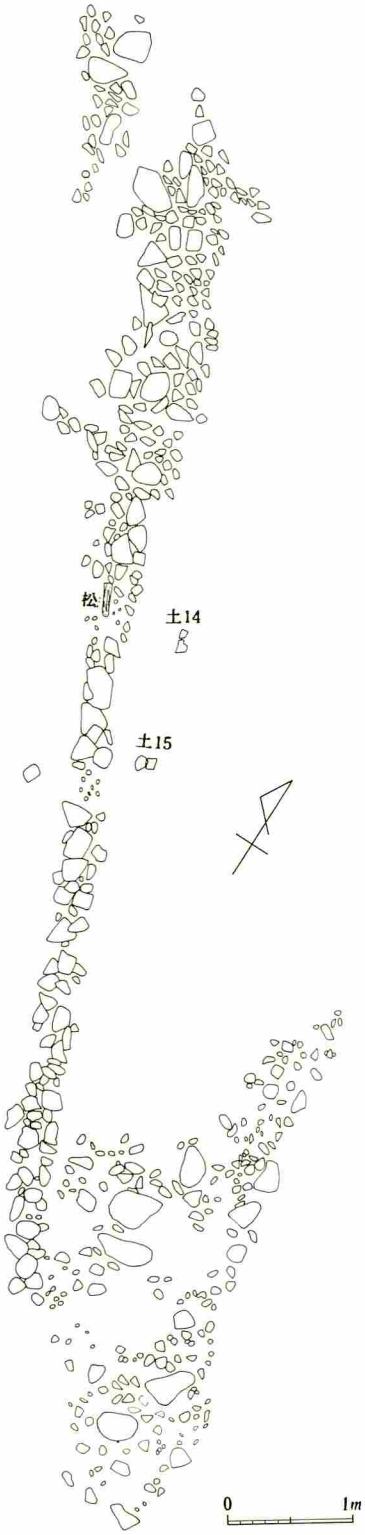


第84図　列石平面図及び側面図

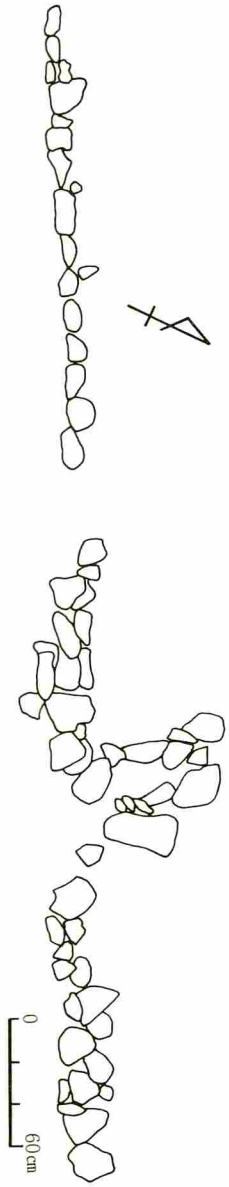
集　石　列

3号、4号集石列　73グリッドにあり、3号は礫の列で、4号は石垣の破壊されたもののようである。

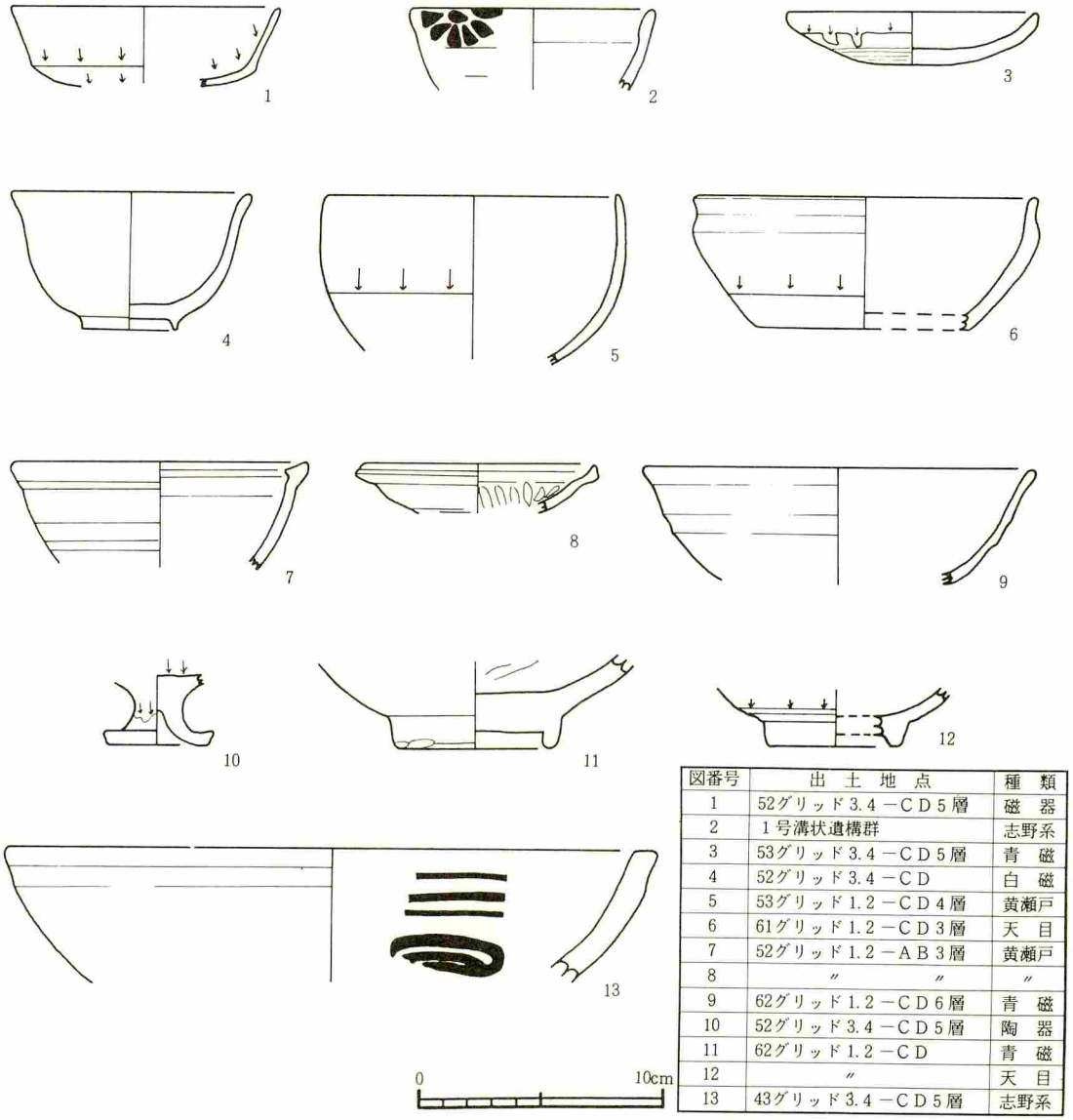
以上のように中・近世の遺構は石垣が多く、他の遺構は少ないが、井戸状遺構や礎石状列石があり、遺物も陶磁器等が出土した。



第85図　3号集石列実測図

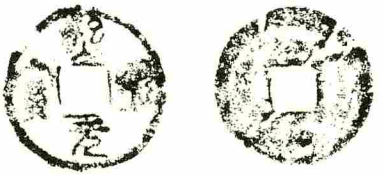


第86図　4号集石列実測図



図番号	出土地点	種類
1	52グリッド3.4－CD5層	磁器
2	1号溝状遺構群	志野系
3	53グリッド3.4－CD5層	青磁
4	52グリッド3.4－CD	白磁
5	53グリッド1.2－CD4層	黄瀬戸
6	61グリッド1.2－CD3層	天目
7	52グリッド1.2－AB3層	黄瀬戸
8	〃　〃	〃
9	62グリッド1.2－CD6層	青磁
10	52グリッド3.4－CD5層	陶器
11	62グリッド1.2－CD	青磁
12	〃	天目
13	43グリッド3.4－CD5層	志野系

第87図　中・近世遺構出土遺物実測図



第88図　73グリッド出土銭貨拓影

第5章　ま　と　め

石橋条里制遺構第Ⅰ地点は甲府盆地南東部に広がる境川扇状地扇端にあって、主に奈良時代末から平安時代中期にかけての集落の一部及び中世の石垣、溝群や井戸などを検出した遺跡である。主な遺構は平安時代の竪穴住居址5軒、祭祀的な性格をもつと思われる掘立柱建物址9棟と配石遺構4基、井戸状遺構2基があり、ここから主に国分期土師器や木製品が出土した。この集落は石橋条里制遺構の南端に接してあってこれと不可分の関係にあると考えられ、今後の本県条里制遺構の研究に資することが出来れば幸である。

図　　版

図版1　全景

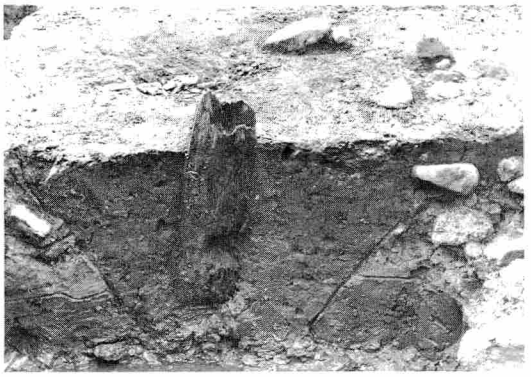
東より西を望む

東より南西を望む

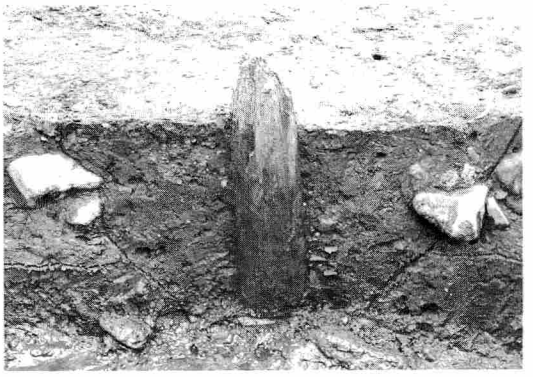
63－4Ｃグリッド試掘セクション

発掘参加者

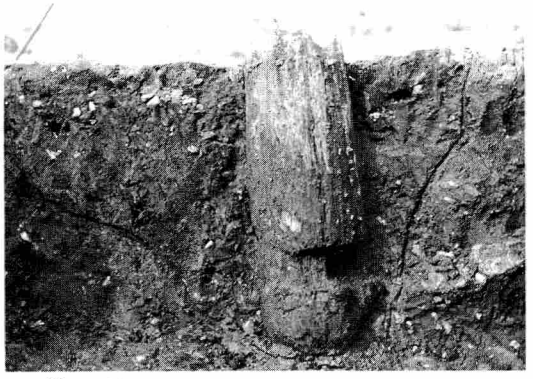
図版3　2号掘立柱建物址柱穴断面



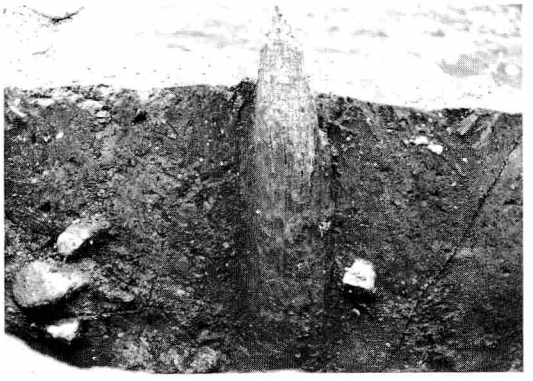
Po 101



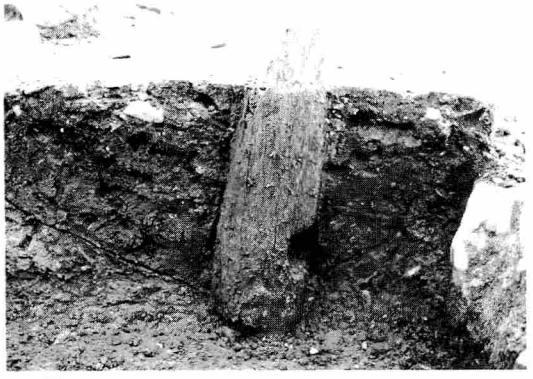
Po 102



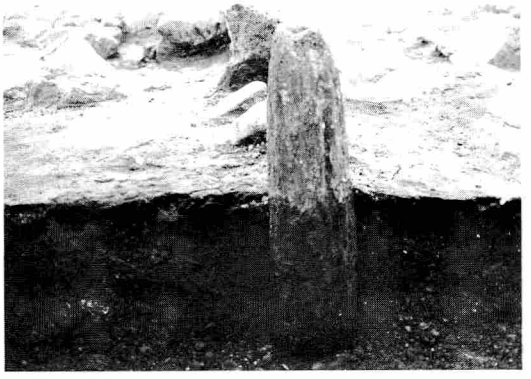
Po 103



Po 104



Po 105



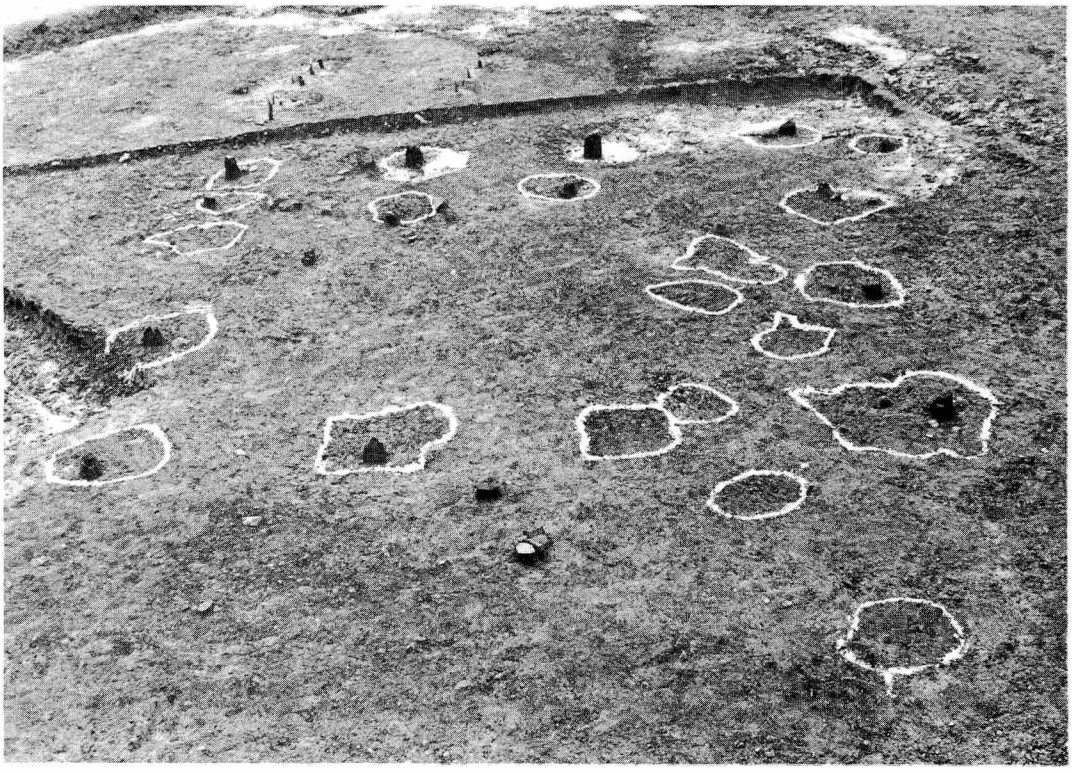
Po 106

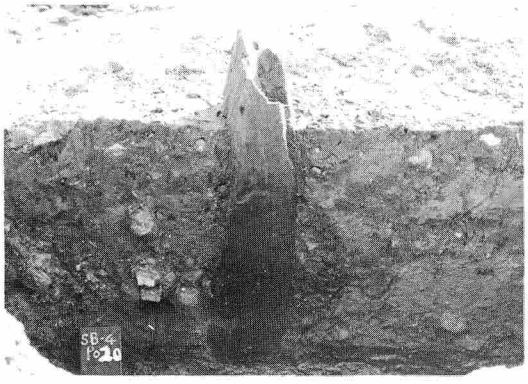
Po 108

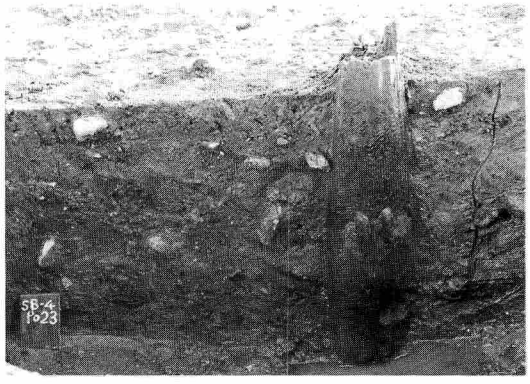
Pit 109

図版4

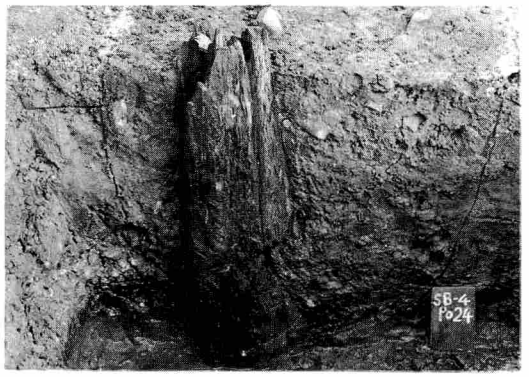
4号掘立柱建物址柱穴断面

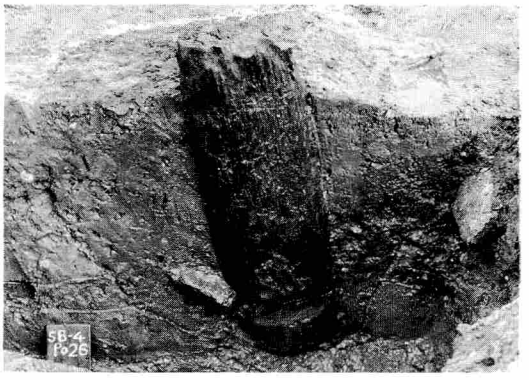


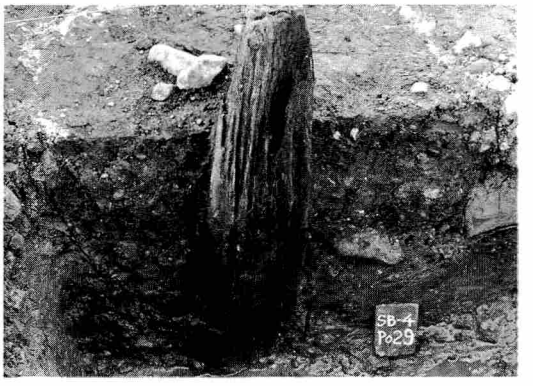


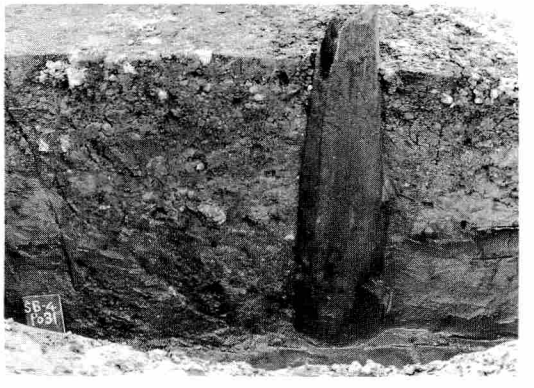


図版5　4号掘立柱建物址柱穴断面

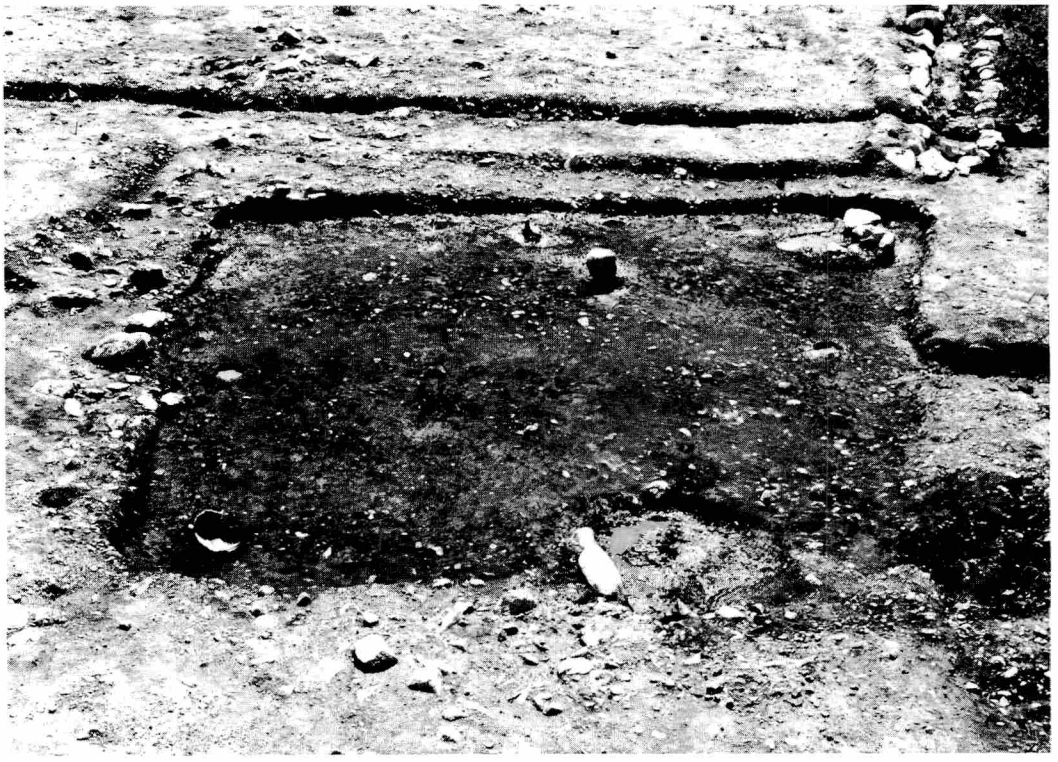






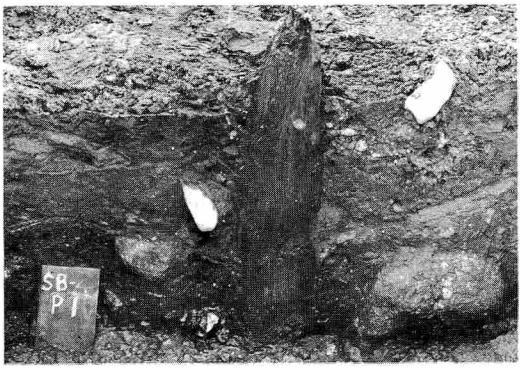


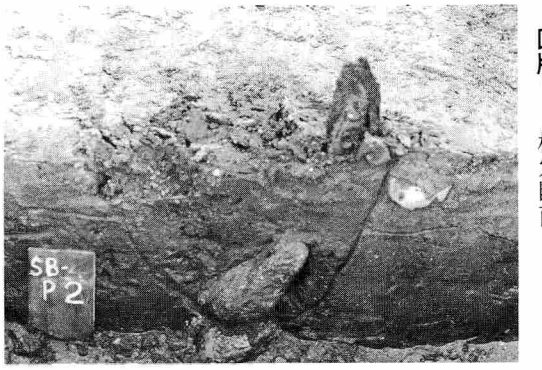
1 号 住 居 址

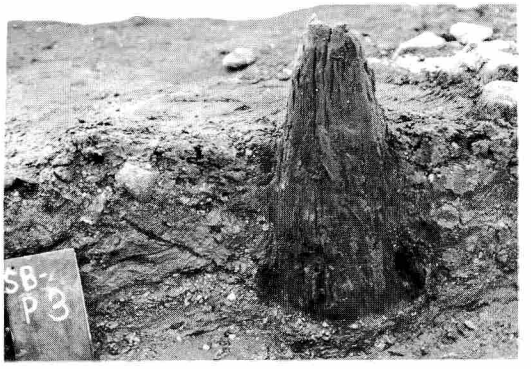


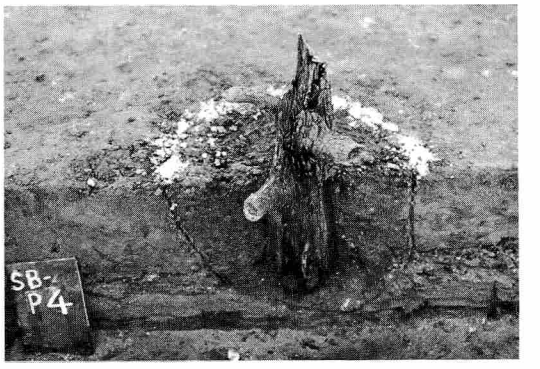
3 号 住 居 址

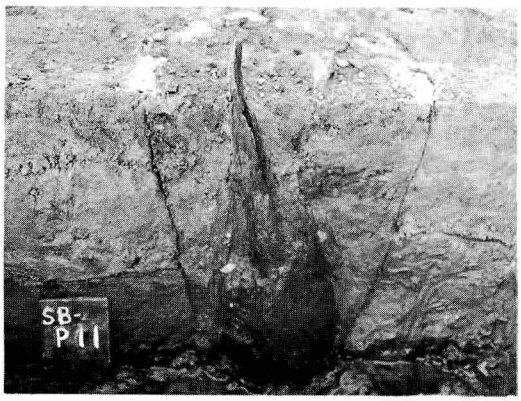
図版7　柱穴断面

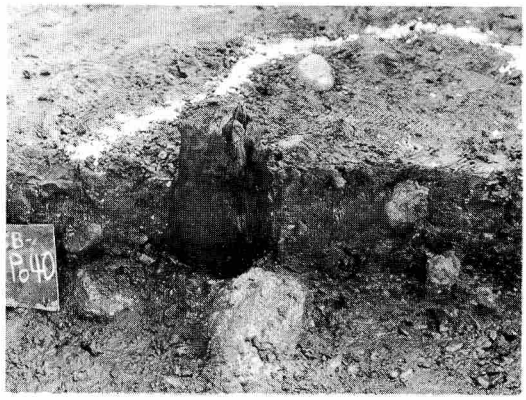


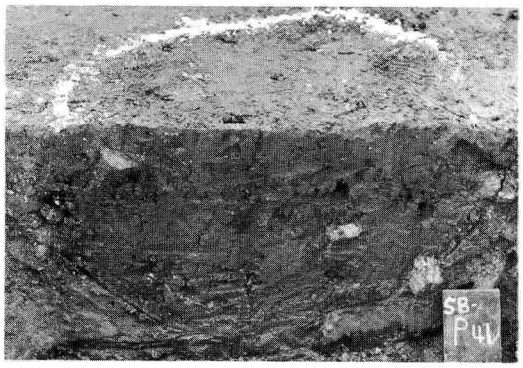


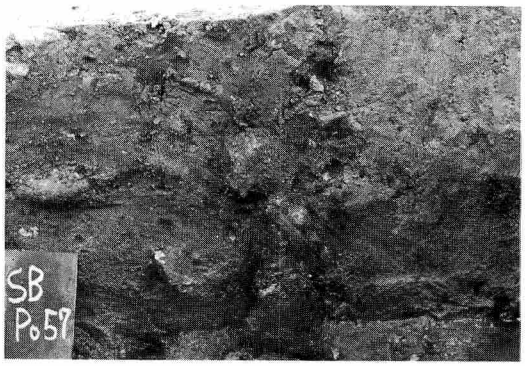


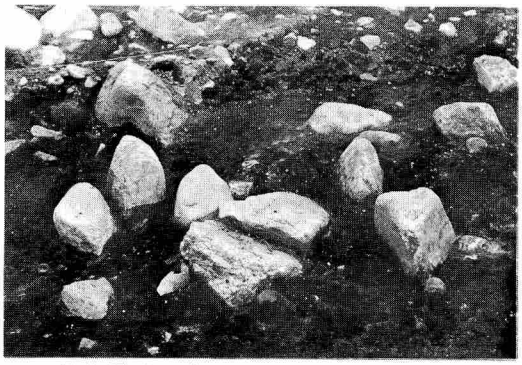




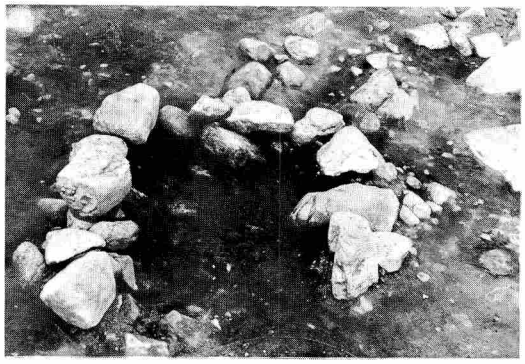








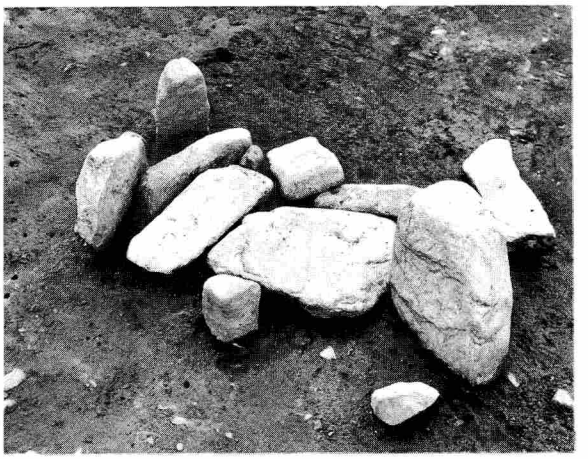
1号住居址かまど



2 号 配 石

3 号 配 石

4 号 配 石

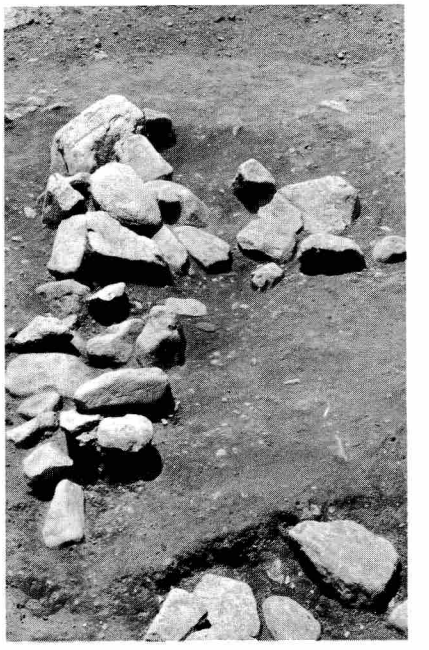


5 号 配 石 ①

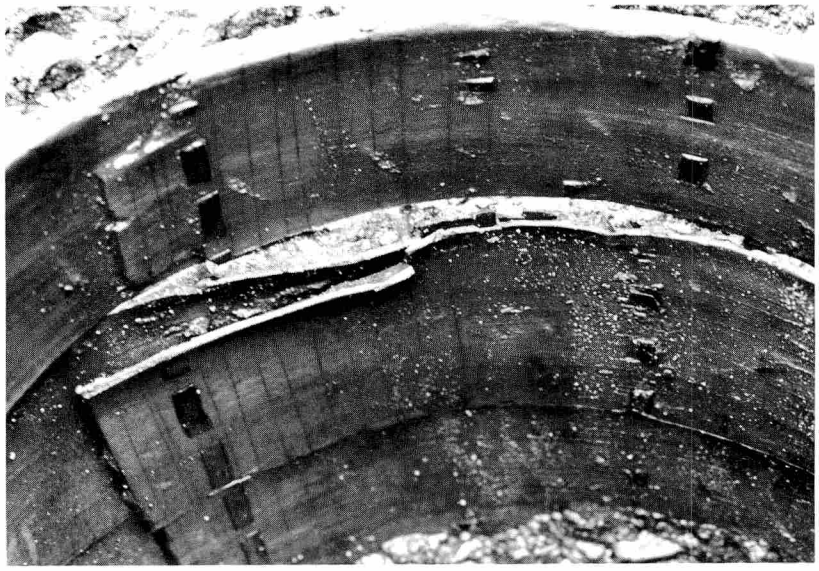
5号配石周囲

5号配石②（復元後）

4 号 列 石

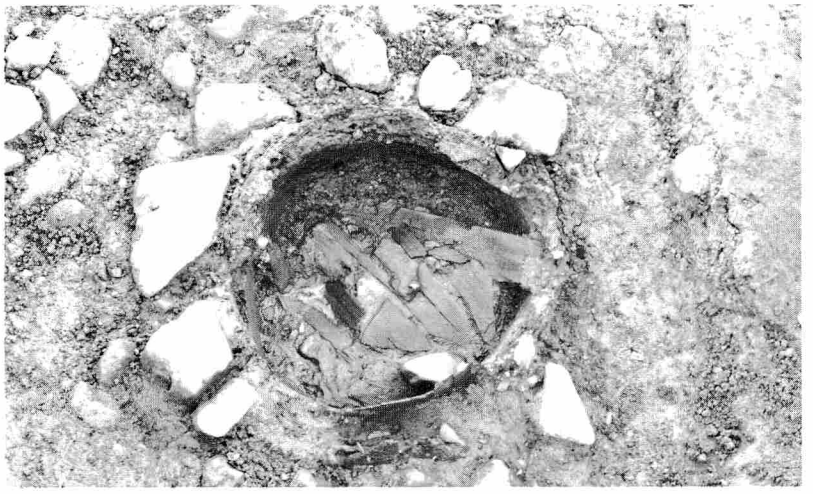


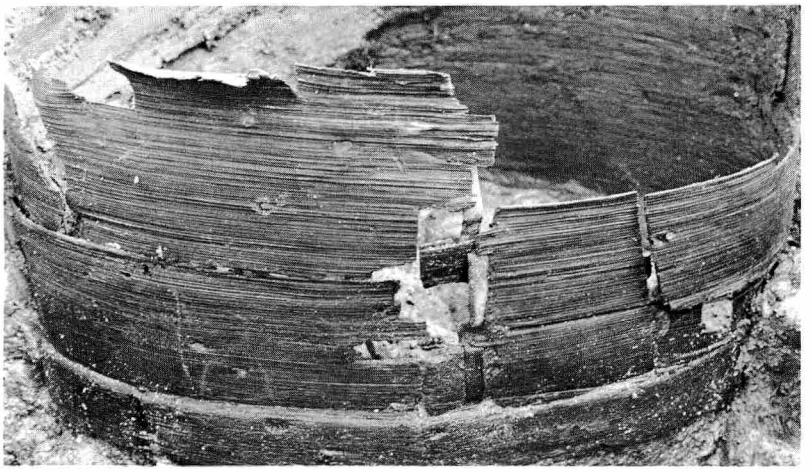
5 号 列 石



図版10

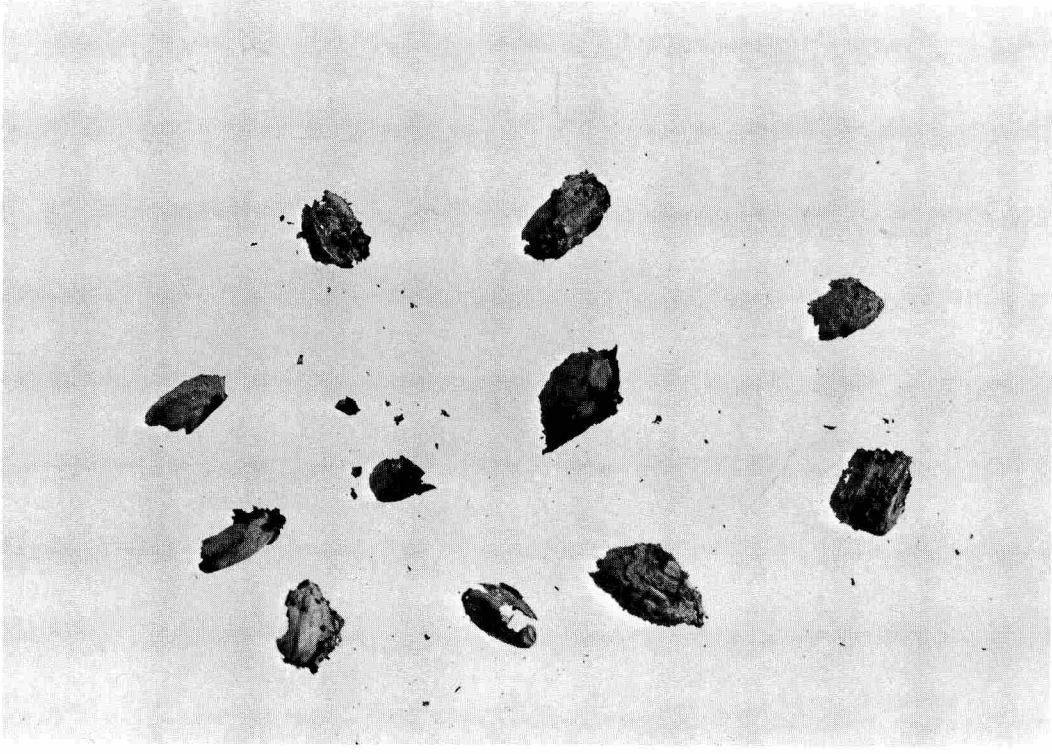
3号井戸状遺構出土遺物状況　上層よりくの字形木器出土状況　曲物と踏鋤出土状況　曲物）





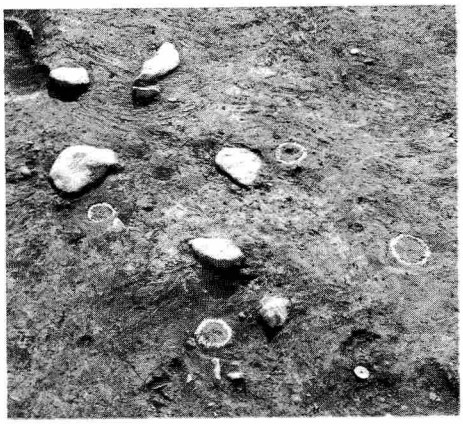
図版11　4号井戸状遺構遺物出土状況（曲物を囲む組石、曲物出土状況　曲物）

1 号 土 坑



1号土坑出土炭化籾

1号・2号杭列



紡錘車と竹杭

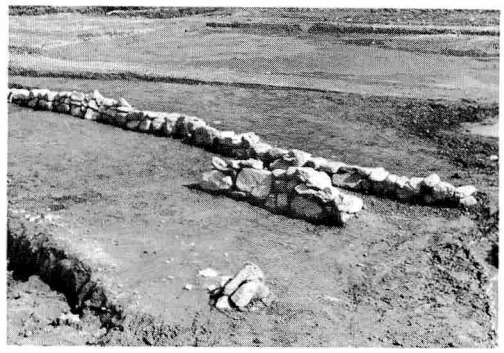
1号溝状遺構

竹　　杭

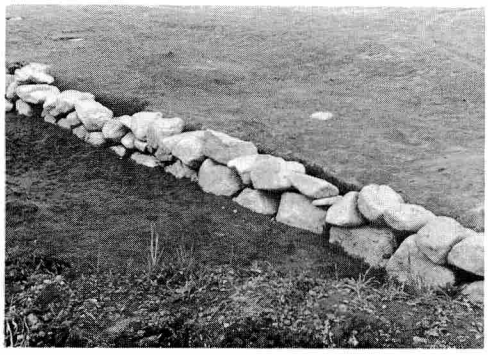
2号溝状遺構

62グリッド土器群

1 号 列 石



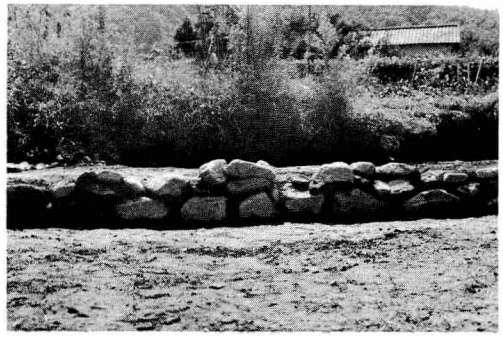
6 号 列 石



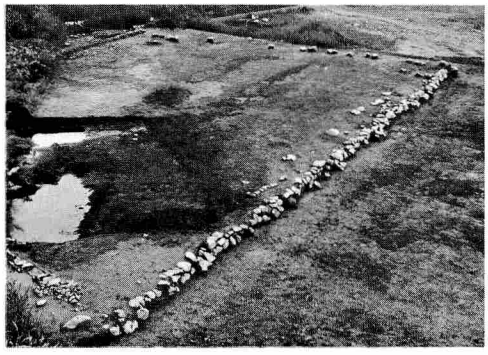
1 号 列 石

6 号 列 石

7 号 列 石

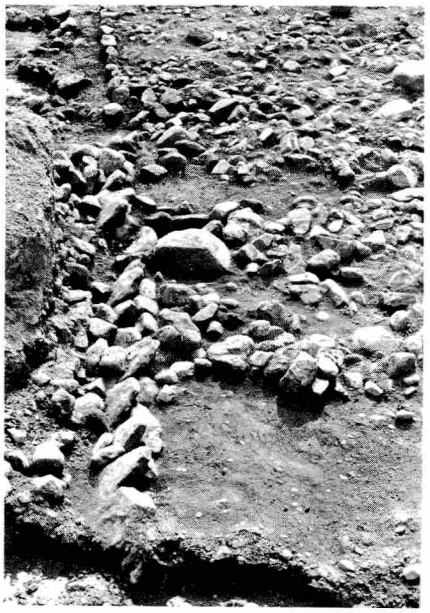


8 号 列 石



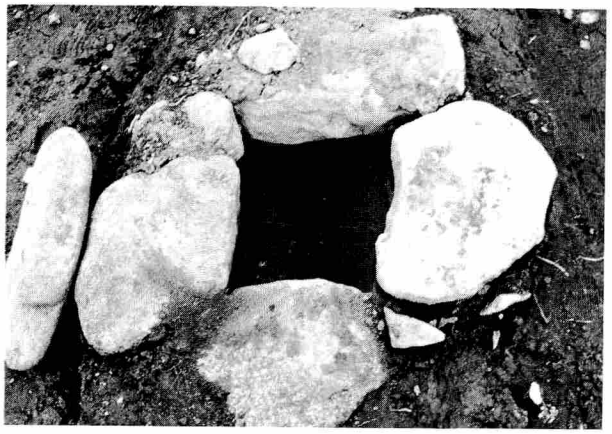
8号・9号・12号列石

10号列石



4 号 集 石 列

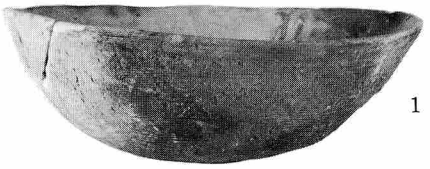
1 号井戸状遺構



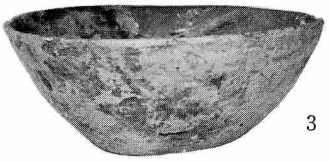
2 号井戸状遺構

2 号井戸状遺構　内側石積状況

図版16　2号・4号掘立柱建物址、1号住居址出土遺物


1

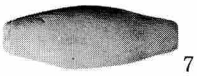
2


3

4

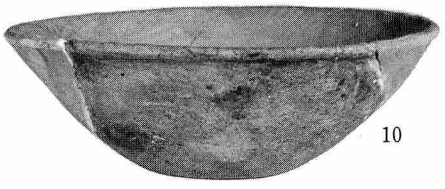
5

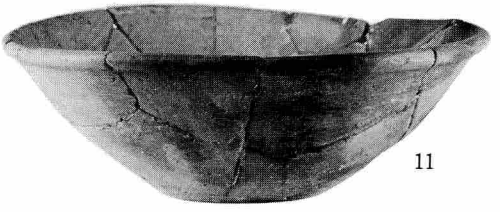
6

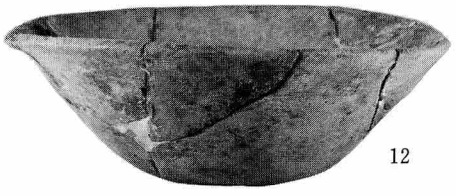

7

8

9


10

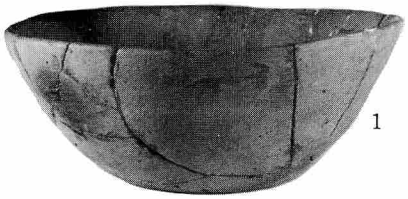

11

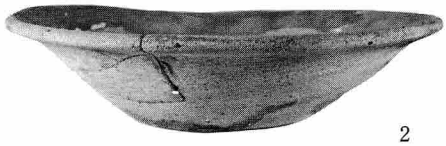

12

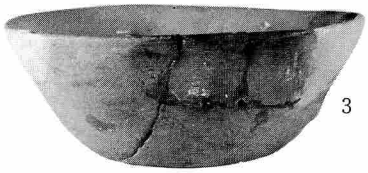
13

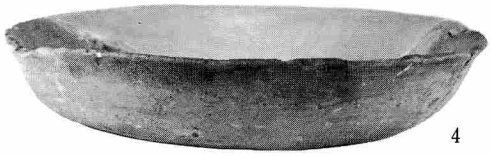
2号（1～7）　4号（8）　1号（9～13）

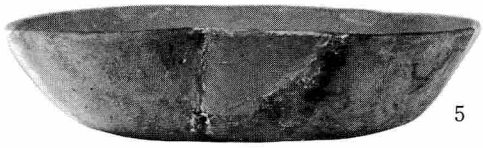
図版17　1号・3号・7号・8号・住居址、5号配石出土遺物


1

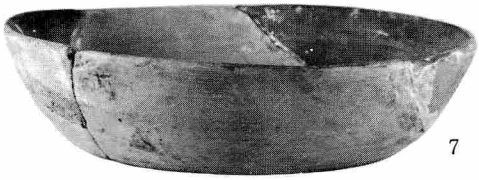

2

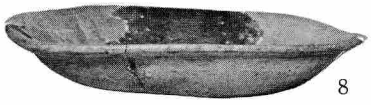

3


4


5

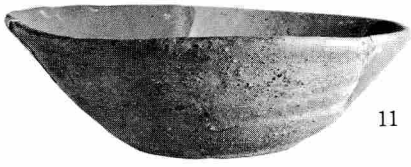
6


7

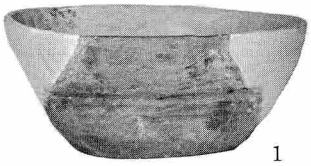

8

9

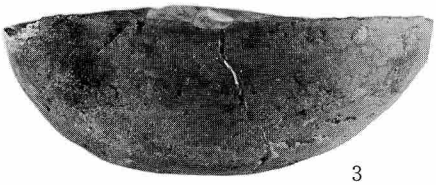
10

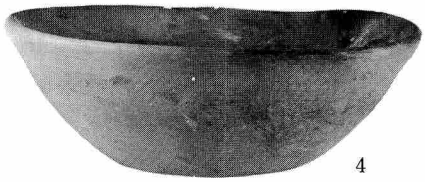

11

1号（1～3）　3号（4～7）　8号（10）　5号配石（11）

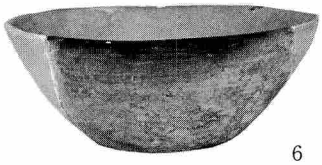

1

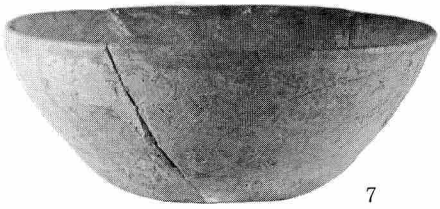
2

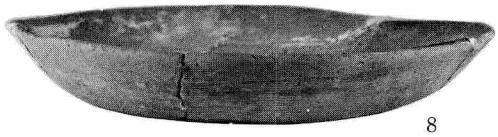

3

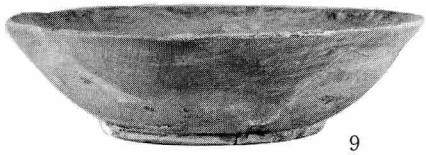

4

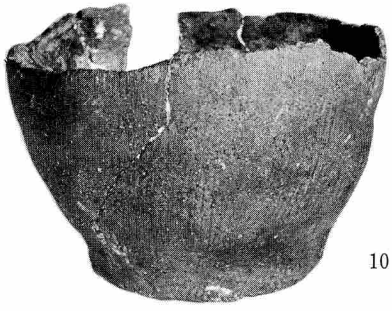
5


6


7


8


9

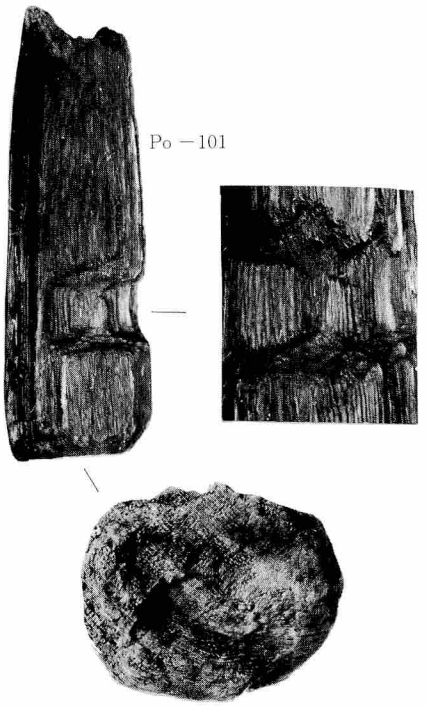

10

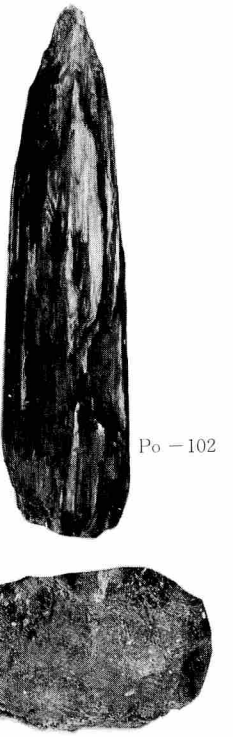
11

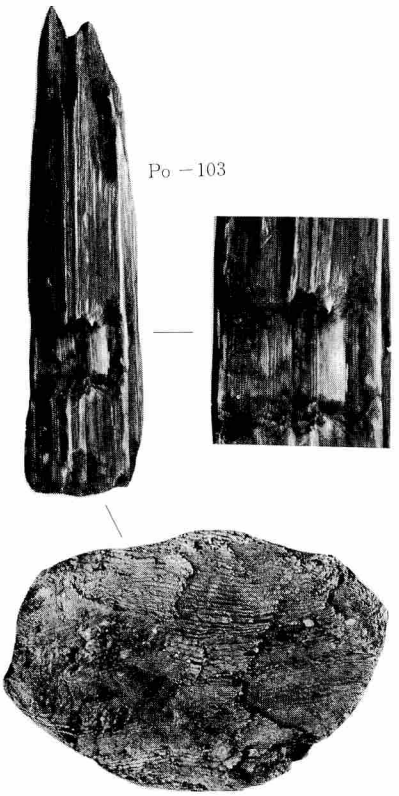
1（3号井戸）、2（52G）、3

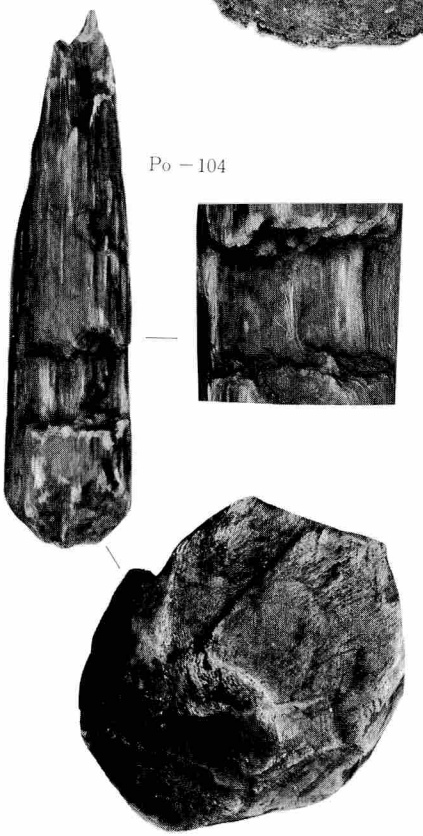
11（53G.中・近世）

図版19　2号掘立柱建物址柱根



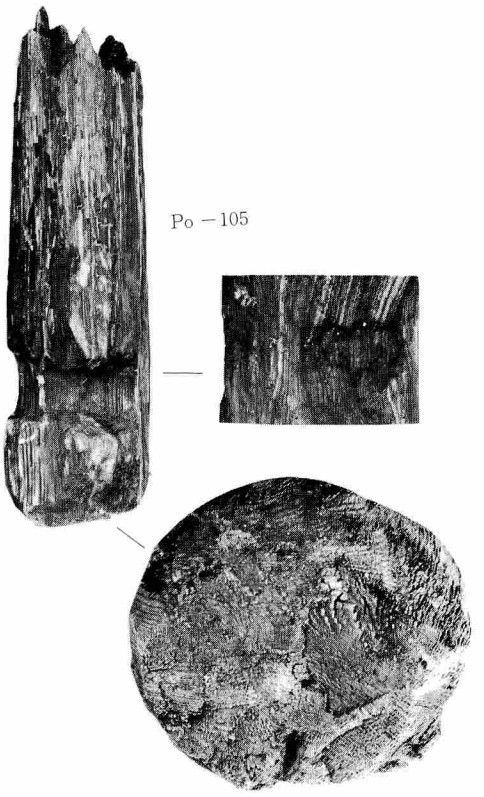




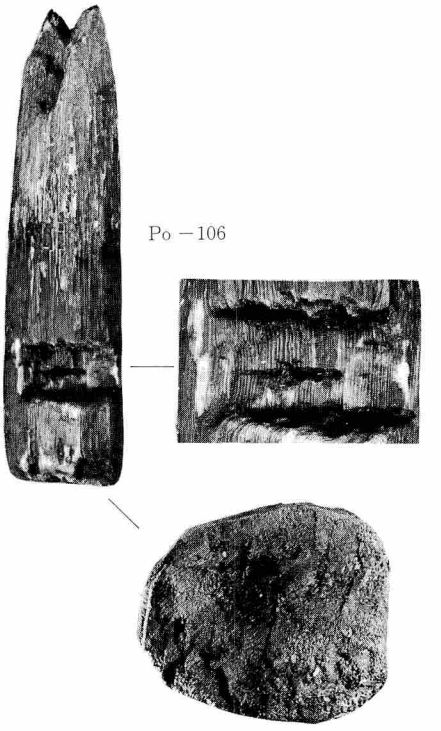


図版20

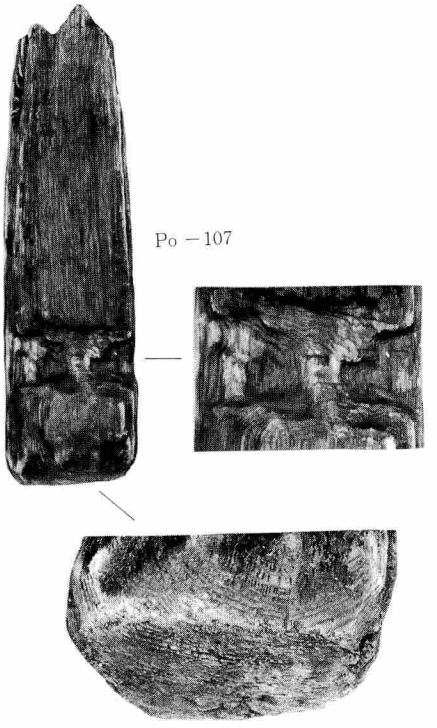
2号掘立柱建物址柱根



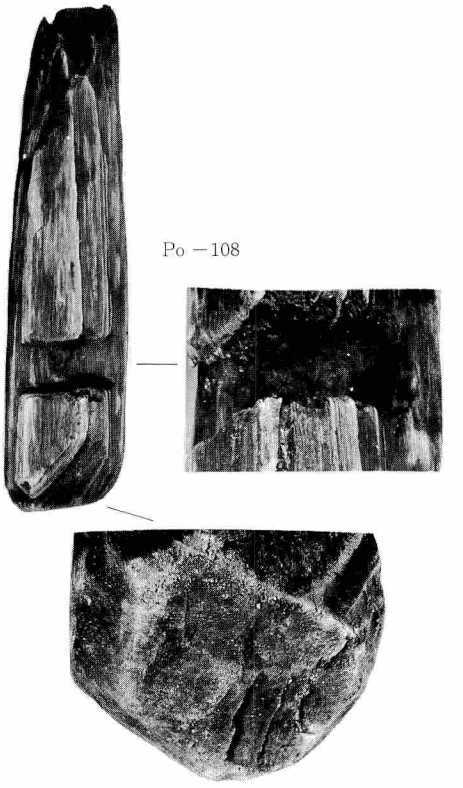
Po －105



Po －106



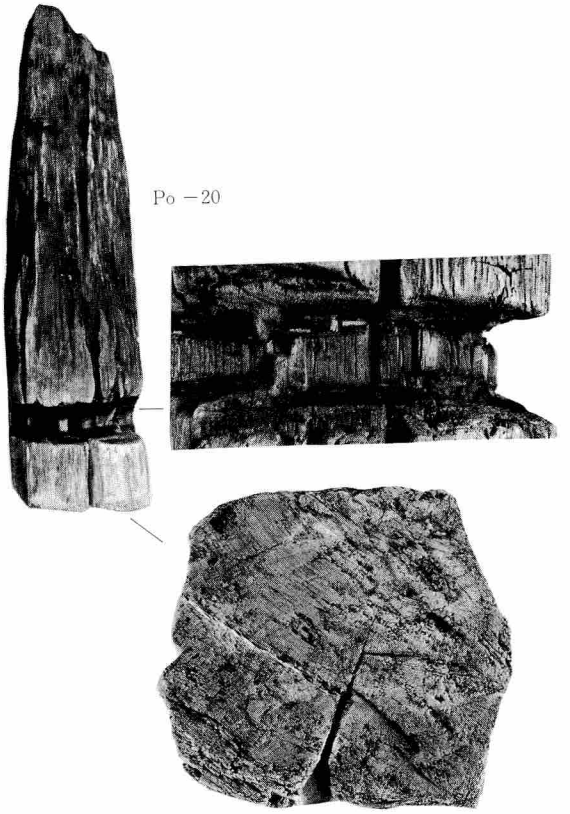
Po －107

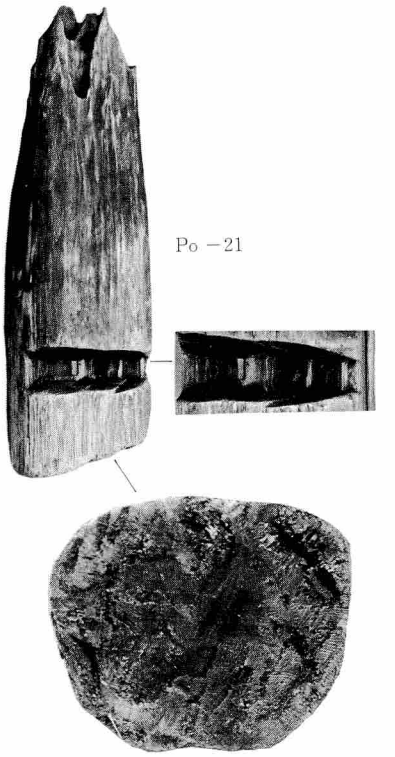


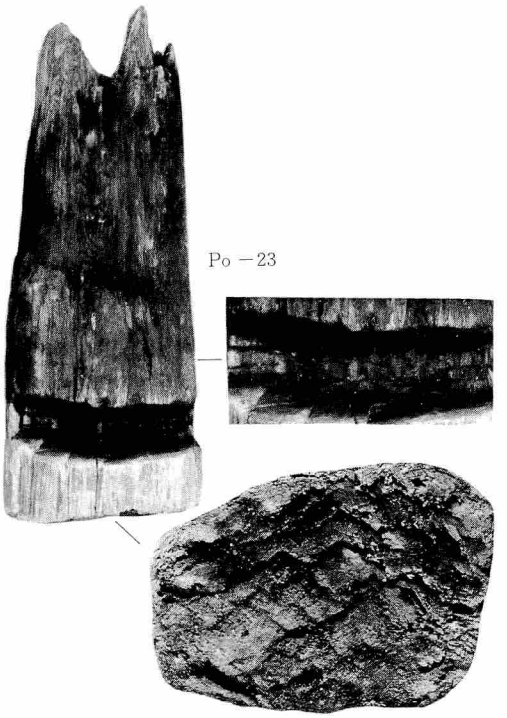
Po －108

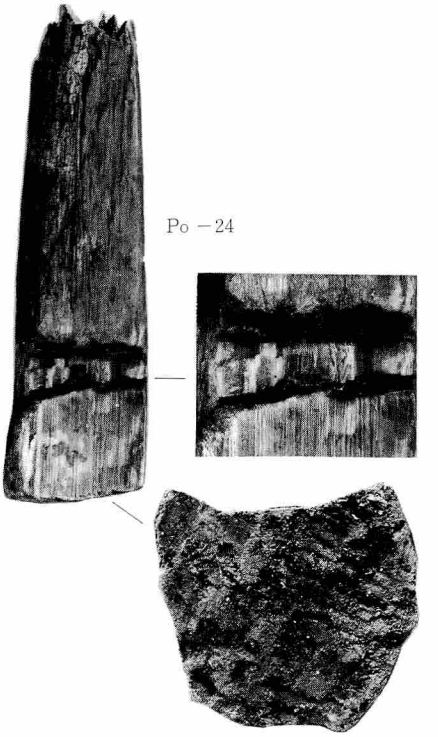
図版21

4号掘立柱建物址柱根



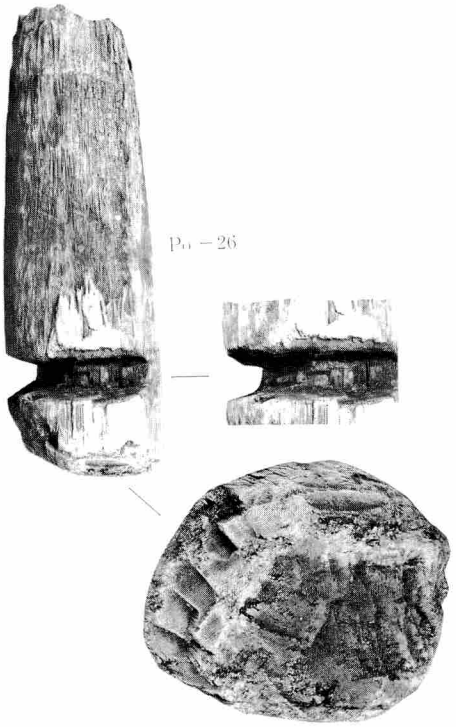




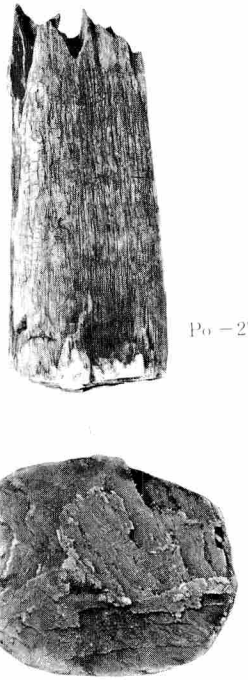


図版22

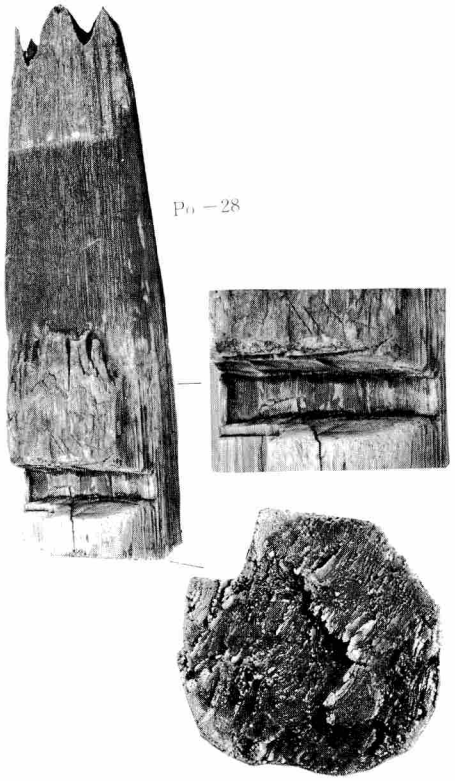
4号掘立柱建物址柱根



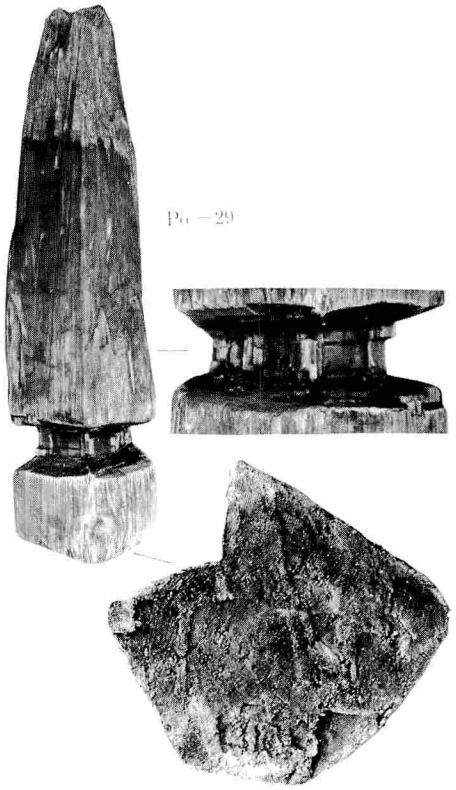
Po－26



Po－27

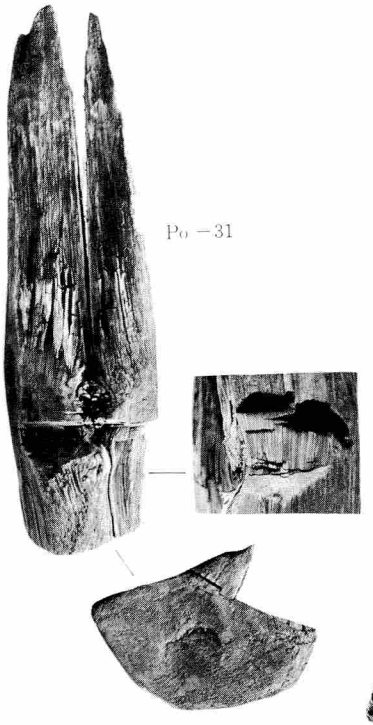


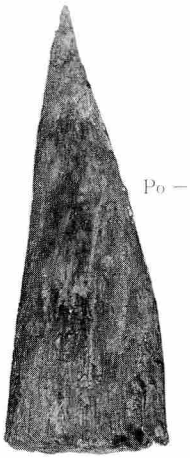
Po－28

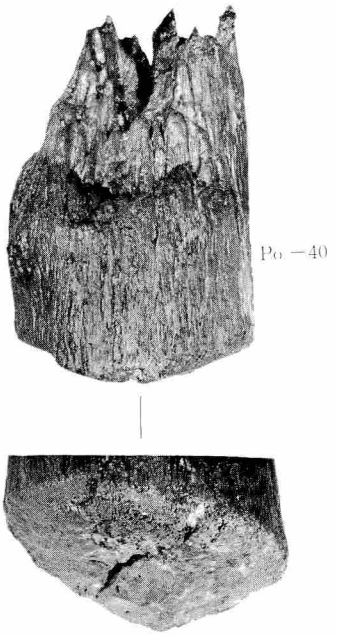


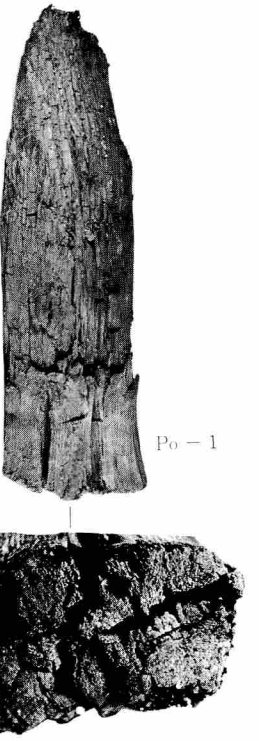
Po－29

図版23 柱根

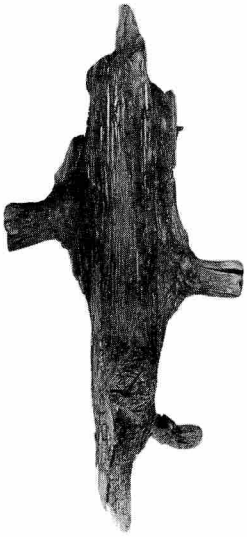








図版24　柱根　グリッド出土木製品　1号杭列

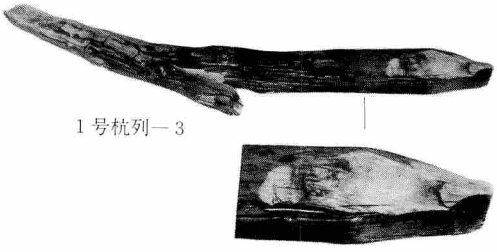


Po－4

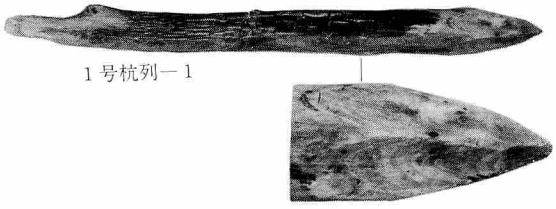
Po－6

52グリッド出土

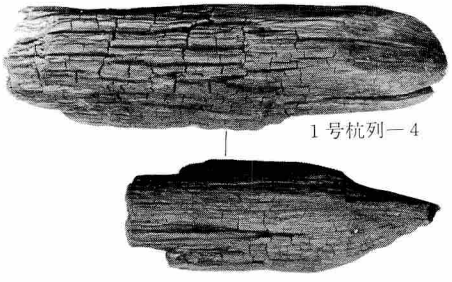
53グリッド出土



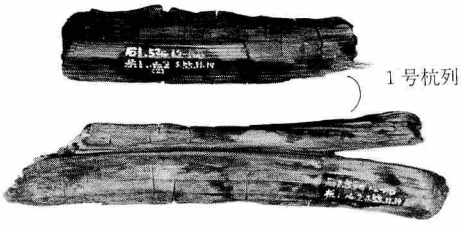
1号杭列－3



1号杭列－1



1号杭列－4



1号杭列－1

図版25　2号杭列　柱の礎板

2号杭列—5

2号杭列—6

2号杭列—7

2号杭列—8

2号杭列—9

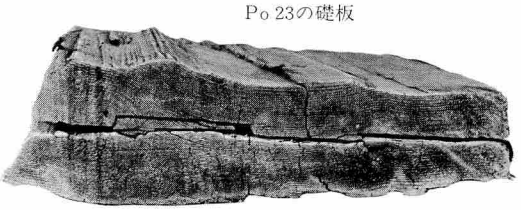
2号杭列—10

2号杭列—11

2号杭列—12

2号杭列—13

Po 23の礎板



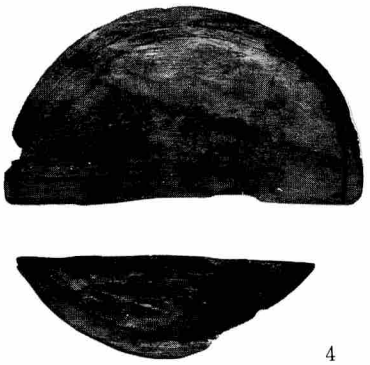
図版26

3号・4号井戸状遺構内出土遺物

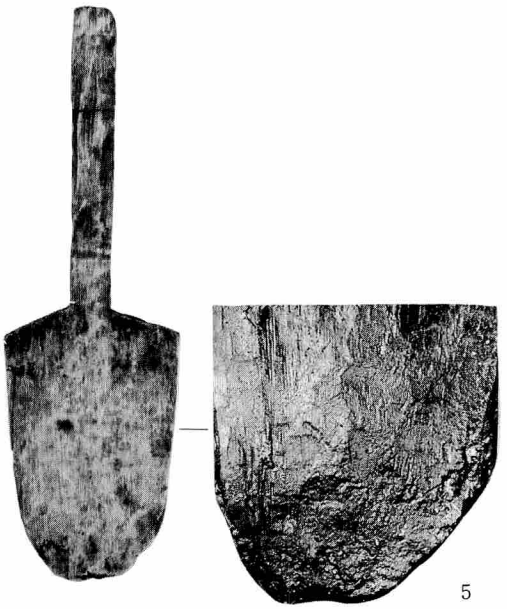
1

2

3



4



5

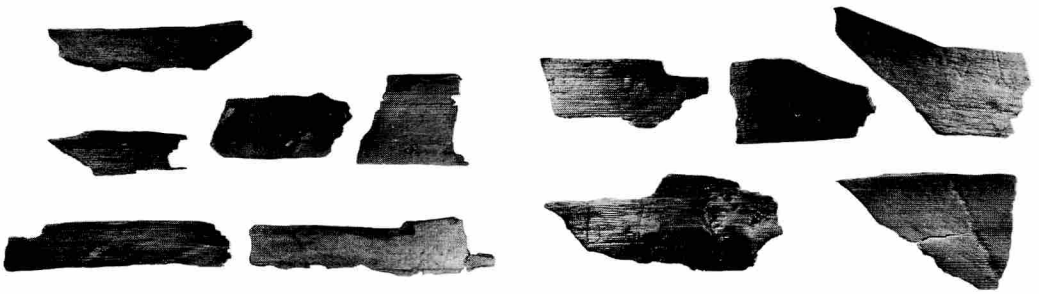
6

1(3号井戸)、2(52G)、3(53G)、4～8(62G)、9(72G)、10(73G)、11(53G.中・近世)

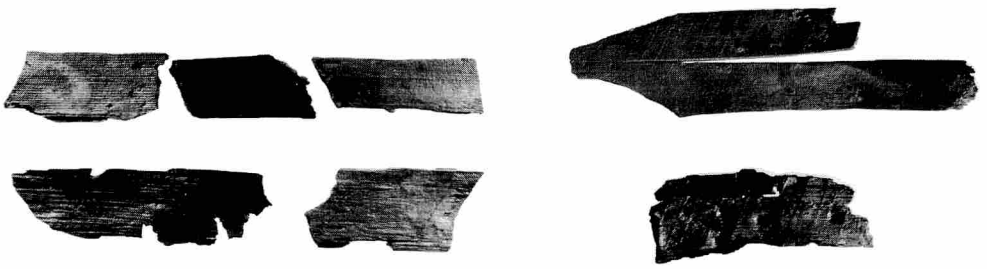
図版27　井戸状遺構内出土木片

SE－3　上層出土木片

SE－3
下層出土木片

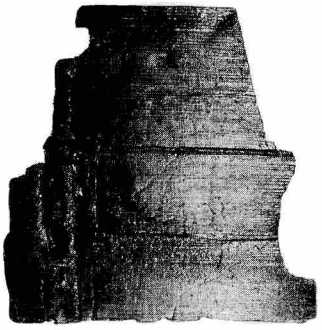


SE－4　内出土木片

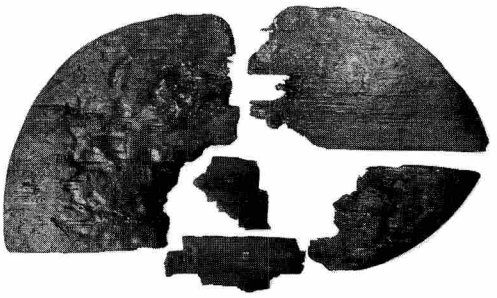


図版28

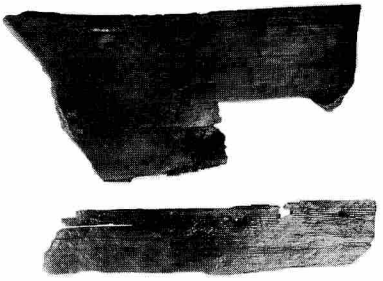
4号井戸状遺構内出土遺物　グリッド出土銭貨　種核（No.は第12表の資料番号）

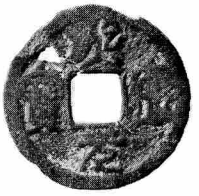


SE－4　曲物2

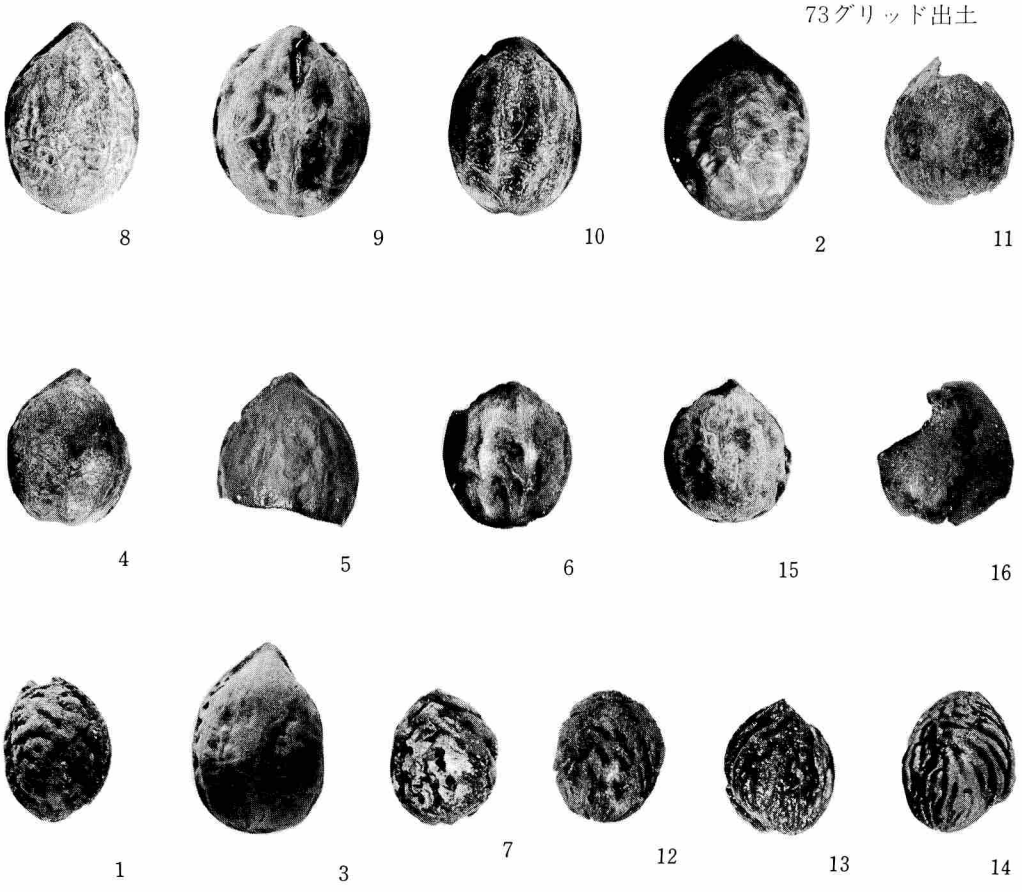


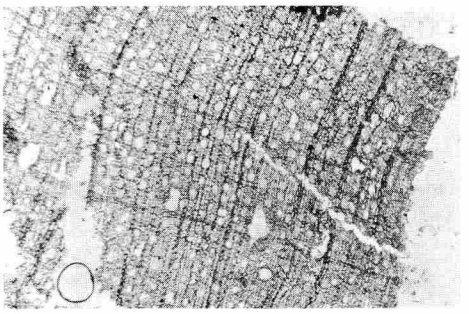
SE－4　内部出土木片



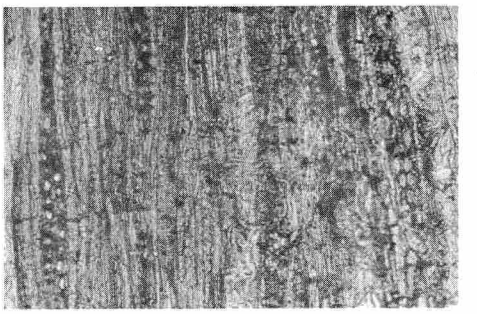


73グリッド出土

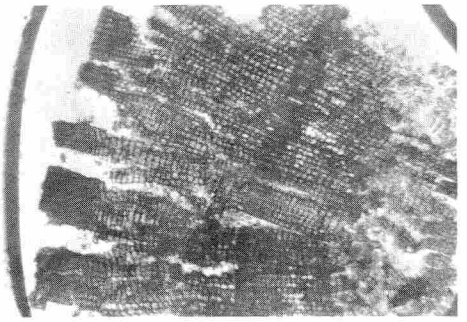




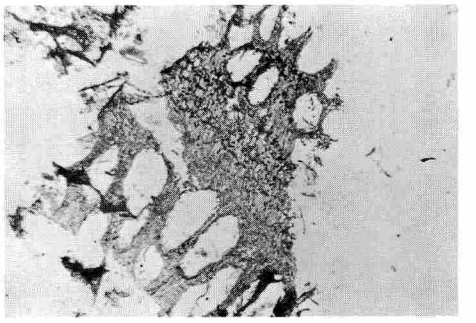
6 木口 32×



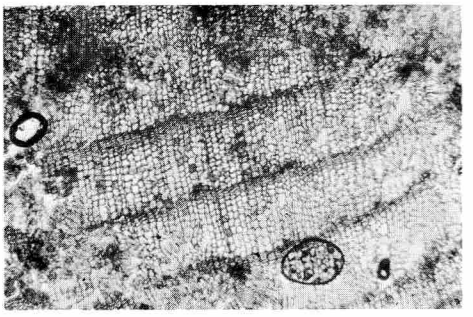
板目 115×



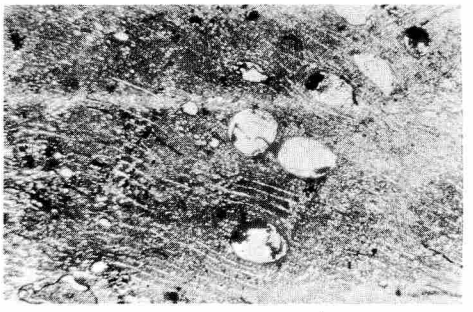
21 木口 32×



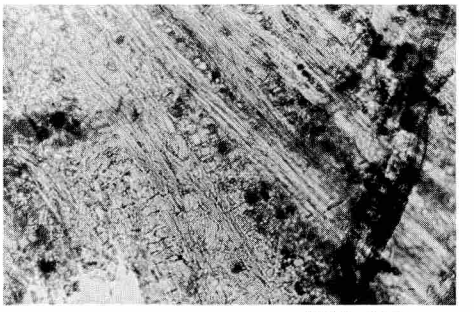
22 木口 32×



23 木口 32×

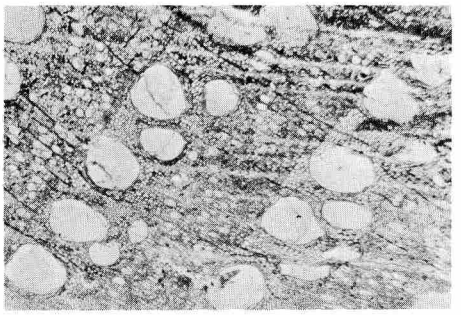


44 木口 32×



板目 115×

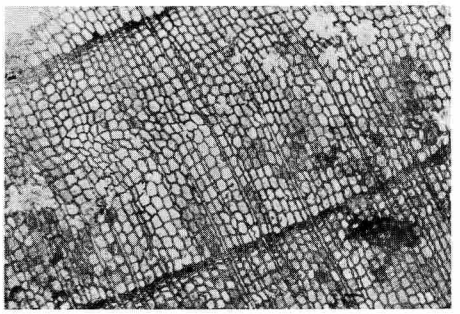
番号は第13表資料番号



木口　32×

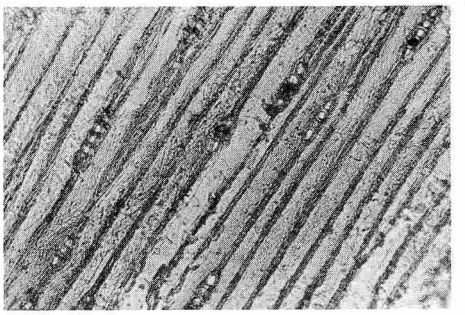
45

板目　115×

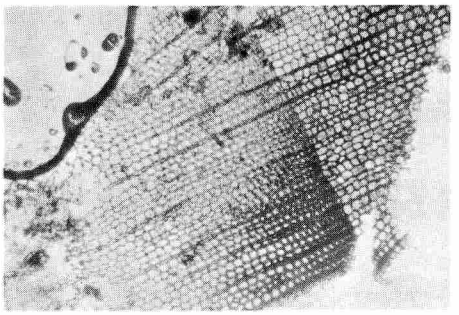


木口　32×

52

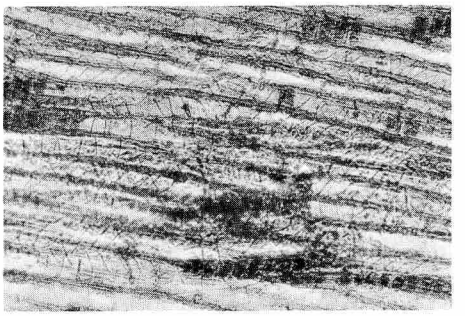


板目　115×

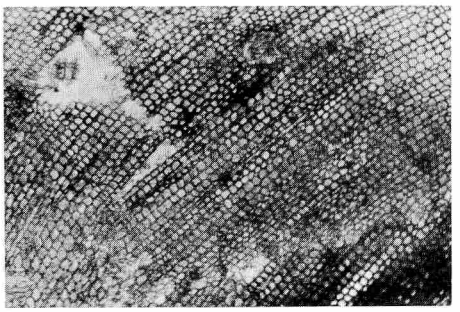


木口　32×

53

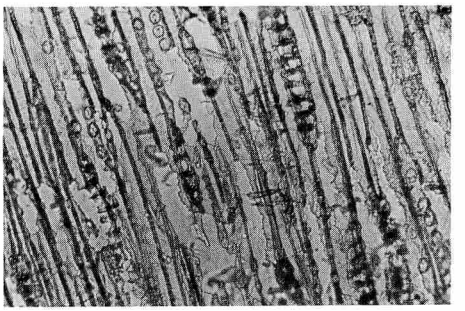


板目　115×



木口　32×

56



板目　115×

番号は第13表資料番号

2．石橋条里制遺構第II地点

第1章　遺跡の位置と環境

第1節　位　　置

石橋条里制遺構第Ⅱ点の所在地は、東八代郡境川村三椚字東畑町184番地の2、及び同183番地とその付近にあって、中央道中心杭S・T・A№466＋60の両側に広がっている。東経138度36分52秒、北緯35度35分35秒の位置にある。

相対的な位置は、石橋条里制遺構第Ⅰ地点の所在地から約150m北にあり、同第Ⅲ地点はここより約300m北にある。

詳細については、石橋条里制遺構第Ⅰ地点の第1章第1節位置の項を参照されたい。

第2節　環　　境

イ、自　然　環　境

遺跡は、甲府盆地東部にある境川扇状地扇央に存在する。扇状地及びその付近の自然環境については、石橋条里制遺構第Ⅰ地点第1章第2節イ自然環境の項に記した通りである。

遺跡付近の微地形は次のようである。

発掘した畑は、長さ約50m、幅約30mの舌状に張り出した地形になっていて、西と東は50cm位低い水田になっており、北はなだらかに低くなっている。東はほぼ平坦で三椚の部落に続いている。

表土から150cmより下まで拳大以下の小礫が多い地層になっていて、土より礫が多いという感じである。

水位は地表下120cm位の高さにあって、よく乾燥する土地である。

このことは、この遺跡の性格を表わす埋石遺構・埋石堀状遺構と密接な関係があるものと考えられる。

ロ、歴　史　的　環　境

石橋条里制遺構第Ⅰ点と150mしか離れていないので、歴史的環境についてはこれと同じといってよい。石橋条里制遺構第Ⅰ地点の第1章第2節ロ歴史的環境を参照されたい。

第2章　調　査　の　経　過

石橋条里制遺構第Ⅱ地点の発掘は昭和56年5月15日に開始し、同年7月4日に終了した。日曜日と祭日を休み、延約1ケ月半にわたって行なった。

発掘予定面積330㎡を発掘し、ほぼ全面で遺構を検出した。

発掘地区全域に、中央道の中心杭を基準としてグリッドを設定した。

まず、発掘予定地における遺構の分布状況を把握するためにグリッド設定基準線の４ラインとＣラインを十文字にトレンチを掘り、遺構の包含層を確認した。これによって、耕作土の下層が包含層であることがわかったので、20cm～40cmの耕作土をバックホーとダンプクローラーを使って除去した。これを除去しながら、遺構の構築面を出し、プランを全面的に検出した。５月下旬に埋石遺構№２のプランを検出した。６月８日には全面の耕作土を除去し終った。この時点で、遺跡の周囲に堀状の掘り込みがある事がわかった。３―Ａグリッドをトレンチ（５号トレンチ）で試掘したところ、国分期の完形坏が出土した。

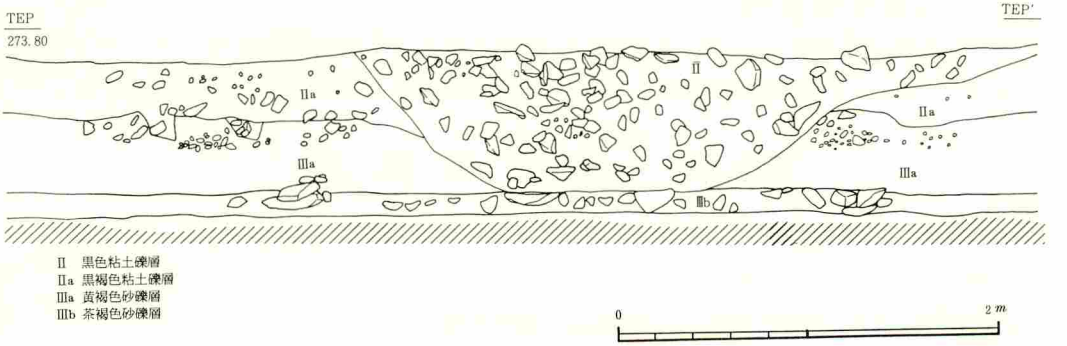
６月中旬から多数の竪穴式住居址や配石遺構が検出され始めた。５―Ａ・Ｂグリッド、４―Ｃグリッドでは住居址が破壊されていて、かまどだけが残っていたものも数基あった。住居址は少しの黒色腐食土が混入する小礫層に構築されていて、住居址の覆土も包含層に似ているため、プランもその切合い（前後）関係も判定し難い。かまどだけのものについては、周囲の遺構との前後関係はほとんど決め難い。数基の配石遺構には、すべて国分式土師器を伴っていたので、その時期を決定出来た。数ケ所検出された集石は、人工のものか自然のものか迷ったが、最終結論として、遺跡の周囲にあった堀状の埋石遺構と２号埋石遺構及び北西隅にあった11号埋石堀状遺構を人工のものと判断した。これらはすべて国分期住居址とほぼ同一の掘込面にあるので同一時期のものと考えられる。但し切合関係にある埋石堀状遺構と５号住居址の前後関係は５号住居址を前とした。２号埋石遺構の下にあった住居址は特殊な性格を帯びるものであるかも知れない。

この遺跡における地下水位は地表下120cm位で周囲に比較し、著しく低いことが特徴である。この地理的条件を生かして、遺構を構築したことも考えられる。そのために特殊な遺構があり、性格不明で使用目的のわからないものが多いのかも知れない。

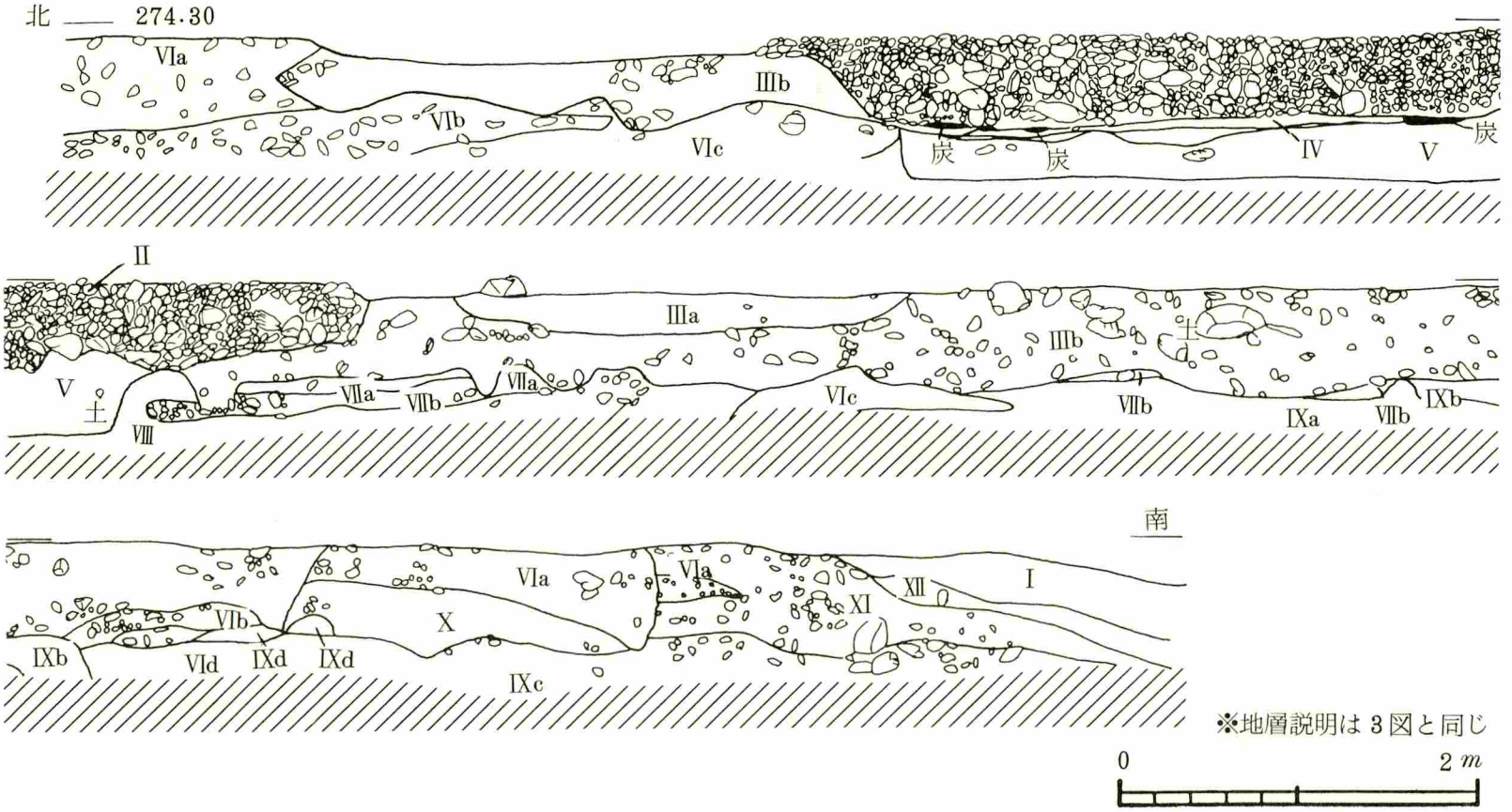
なお発掘調査速報「石橋田圃条里―第Ⅱ地点」№１を昭和56年11月17日に発行した。

第３章　　層　　序

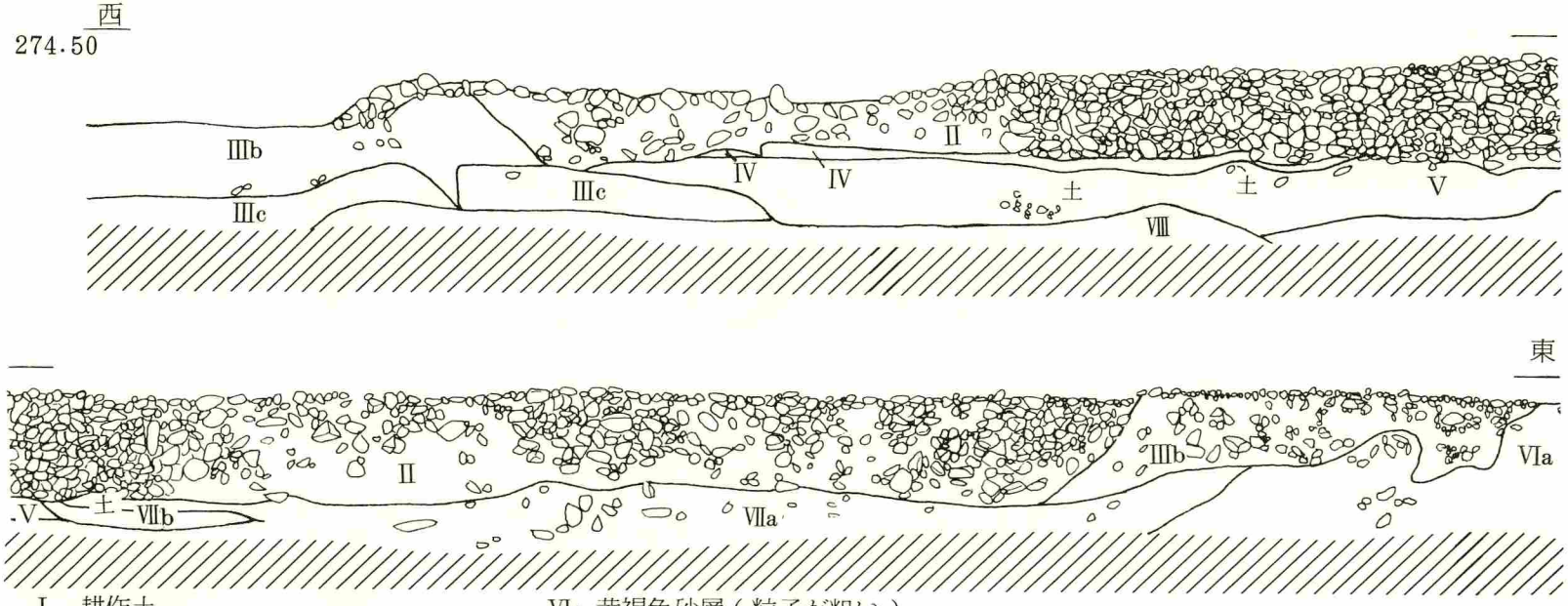
標準層序を定めるために、発掘調査地域内に十文字にトレンチを設定した。他に遺構の層序



第１図　　４号トレンチ地層図（1：40）



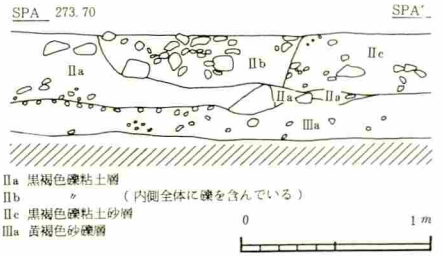
第2図　6 号 ト レ ン チ 地 層 図（1:40）



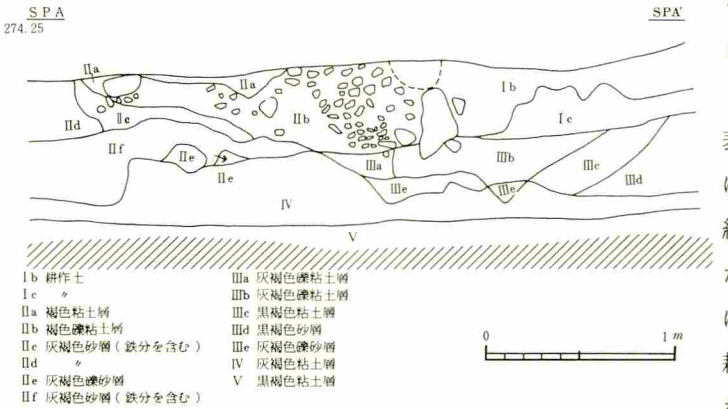
I　耕作土
II　円礫層
IIIa　黒褐色粘土層（SB2の覆土）
IIIb　〃　（礫を含む）
IIIc　黒褐色砂層
IV　粘土層（炭，焼土，灰を含む）
V　灰色粘土砂層（遺物包含層）
VIa　黒褐色砂礫層
VIb　赤褐色砂礫層
VIc　黄褐色砂層（粒子が粗い）
VIa　黒褐色砂礫層
VIIa　暗褐色砂層
VIIb　〃
VIII　黄灰色砂礫層
IXa　黄褐色細砂層
IXb　〃　（小礫を含む）
IXc　〃　（砂礫層）
IXd　〃　（砂層）
X　暗褐色砂層（粘土を含む）
XI　黒色砂礫層
XII　灰色細砂層

0　2 m

第3図　7号トレンチ地層図（1:40）



第４図　３号トレンチ地層図（1：40）



第５図　５号トレンチ地層図（1：40）

を記録したがそれは各遺構毎の項で説明する。

層序は極めて単純であって、表土と遺構包含層の２層だけである。耕作土は直径１*cm*位から10*cm*位の小礫が非常に多くて、礫層といった方が適当である。その下の第Ⅱ層は表土より礫が多く、人頭大の石も混在している。このような状態であったので、前項に記したように、水はけがよく、水位も低かった。

１号トレンチの東半分は表土が約30*cm*と薄く東端では７*cm*位となり、西半分は約55*cm*から60*cm*とやゝ厚かった。東半分に遺構がないのは表土が薄かったために、耕耘によって遺構が破壊されたためかも知れない。１号と２号トレンチの交点から50*cm*西に１号と４号の住居址がかかり、西端では埋石堀状遺構の断面となる。

２号トレンチは等高線に平行しているので、表土の深浅はあまりなく、その厚さは約30*cm*である。

第４章　遺構と遺物

石橋条里制遺構第Ⅱ地点は、条里制に関する遺構はない。その概略は埋石堀状遺構に囲まれた中に住居址、配石遺構や埋石遺構などがある平安時代後期の遺跡である。

埋石堀状遺構と遺物

６号埋石堀状遺構　この遺跡の南端にあり、その西端を小川で切られているために広さは不明であるが、深さは約１*m*である。埋石は人頭大から拳大のものがあり、比較的大きめの石が多い。

８号埋石堀状遺構　西側を石垣で切られているため広さは不明であるが、その深さは約50*cm*であった。埋石は比較的小さかった。北端は120*cm*位の幅で埋石がない所があり、その北側に３号列石があって、あたかも入口のようであった。ここから11号埋石堀状遺構が延長している。

９号埋石堀状遺構　北側を区切り、やはり少し石垣で切られていたが、他より幅が広く約37

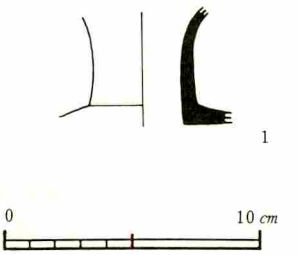
0cm、深さ75cmである。埋石の状態は4号トレンチ地層図に示した。このⅡ層とⅡ層の下層から須恵器の頸部破片がそれぞれ出土している。

10号埋石堀状遺構　東側を区切るが、水路掘削工事のために片側を破壊されていた。埋石状態は5号トレンチ地層図に示した通り比較的小さい石である。ほぼ中央に南北に畑の境界用列石がある。ここから国分式土師器の坏の破片が出土し、11世紀に比定されるものであった。

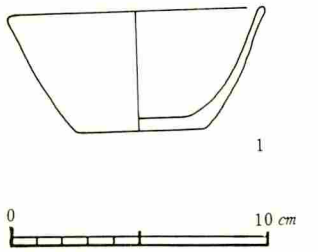
11号埋石堀状遺構　他と性格を異にするものと思われる。幅は約1m、深さ30cmで埋石も小さい。8号へ続いている。

埋石堀状遺構の性格は結論づけられないが、堀ではないかと考えられる。石が埋められているのは、廃絶後ここに多い氾濫原の石を投げこんだようにも考えられる。

その時期は遺物が少ないため、正確にはわからないが、11世紀後半頃に比定される。



第7図　9号埋石堀状遺構出土遺物実測図



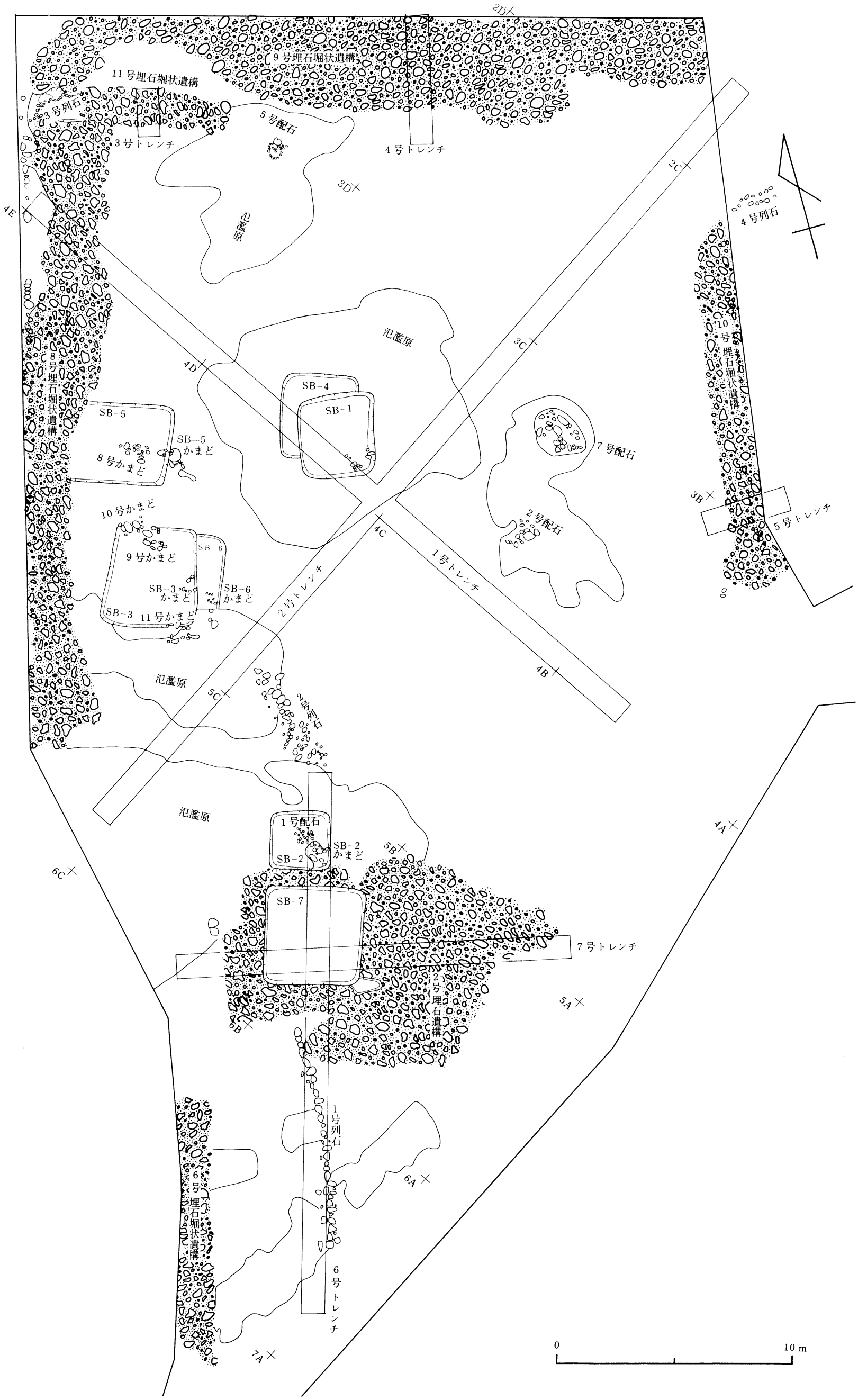
第8図　11号埋石堀状遺構出土遺物実測図

住居址と遺物

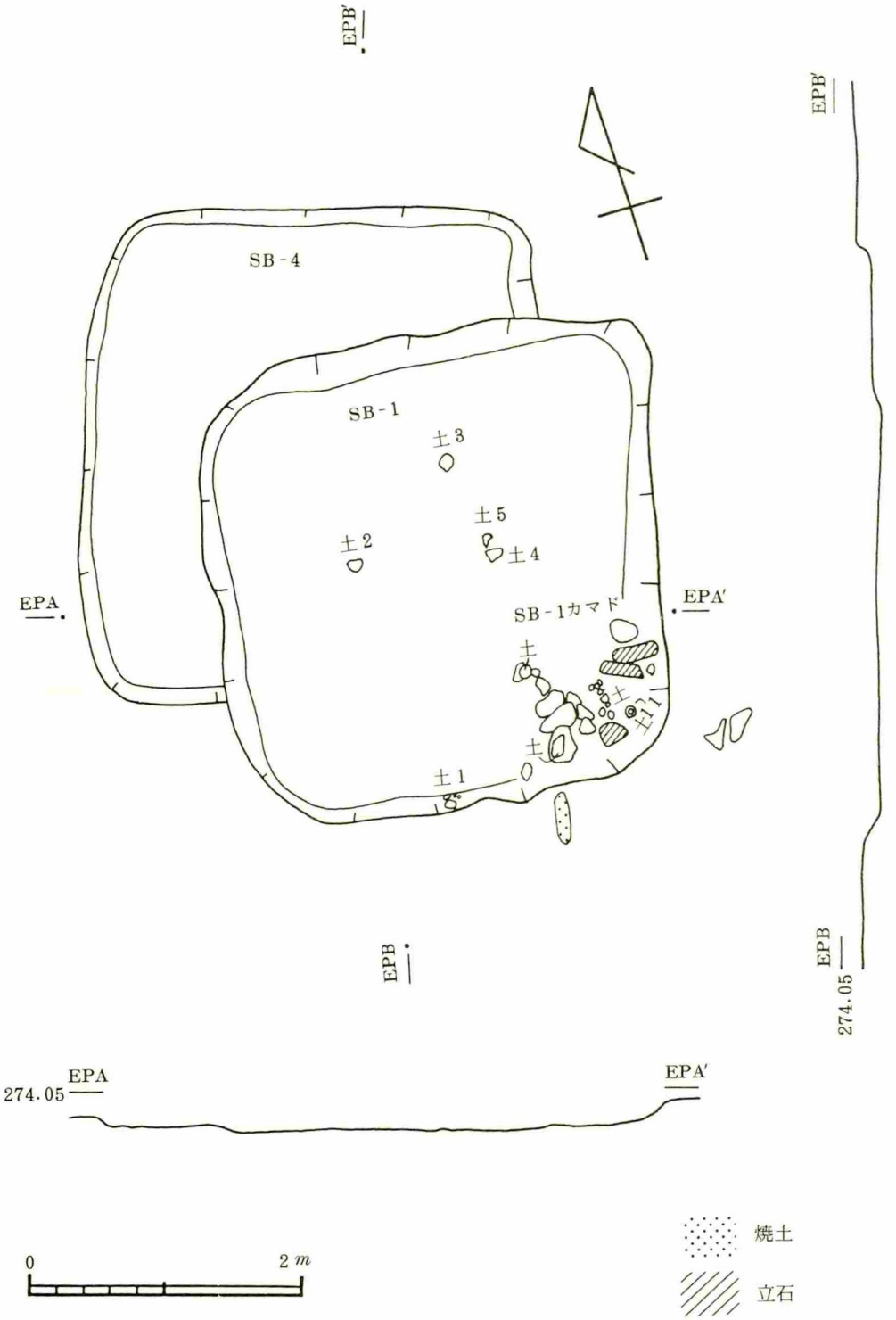
発掘地域内の西側半分から7基の竪穴式住居址が発見され、その他にかまど用芯石が数基検出された。東側半分になかったのは、西側を埋めて平にするための土を削り取る際に破壊されたのではないだろうか。

1号住居址　遺跡の中央部にあって、4号住居址の上に構築されている。氾濫した礫層で囲まれている。形状は隅丸方形で、やゝ南北に長い。規模は東西3.3m、南北の中心が4m、深さ30cmで床面の標高273.45mである。主軸方向はN—12°—Eである。かまどは南東の隅にあり、構造は石を立てて袖の芯とし、中央に細長い石を立てている。このように細長い石を中央よりやゝ外側に立てる構造のかまどが多くある。

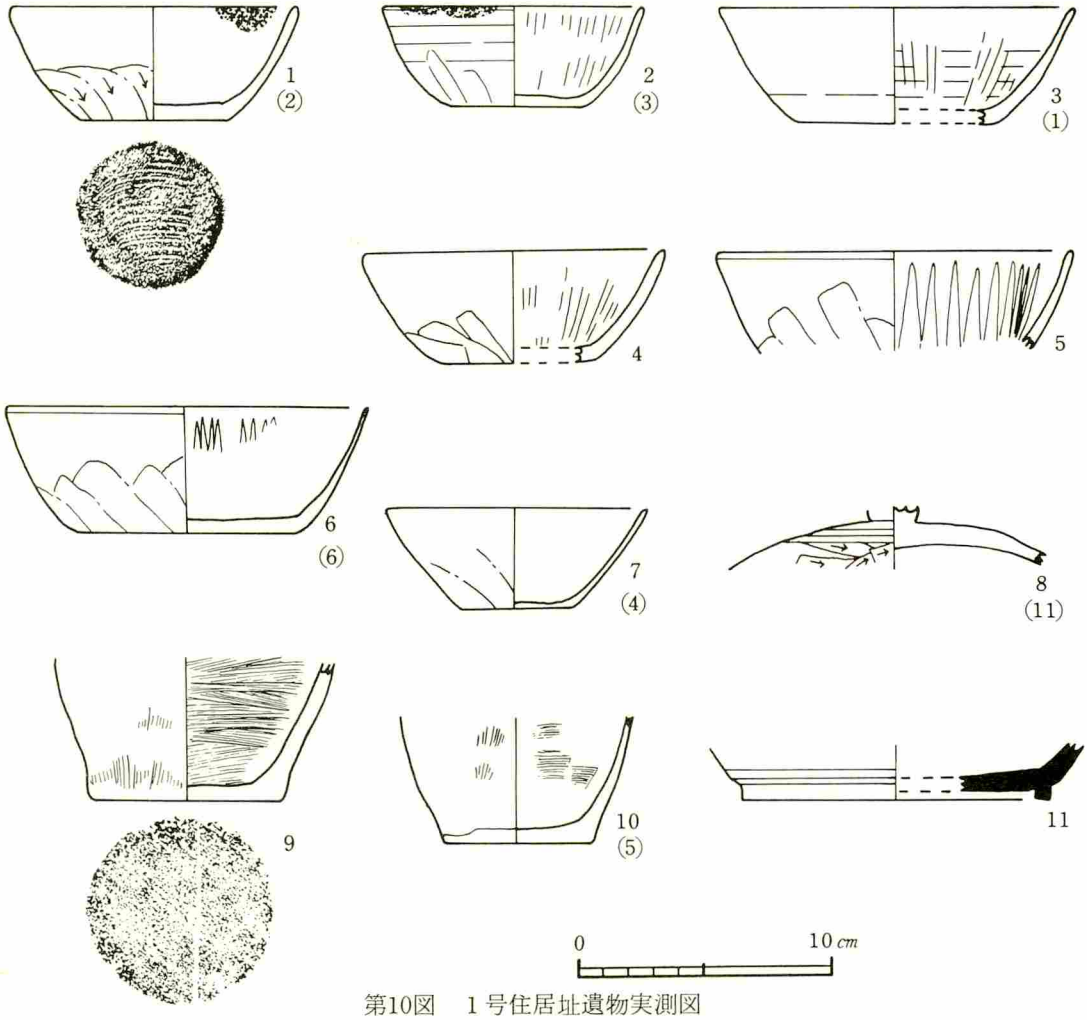
遺物　初期の国分式土師器の坏が多く、第10図No.1、No.2のように灯明皿もある。またNo.6の坏は真間期頃と思われ、かまど内より出土した。



第 6 図　石橋条里制遺構第II地点全体図



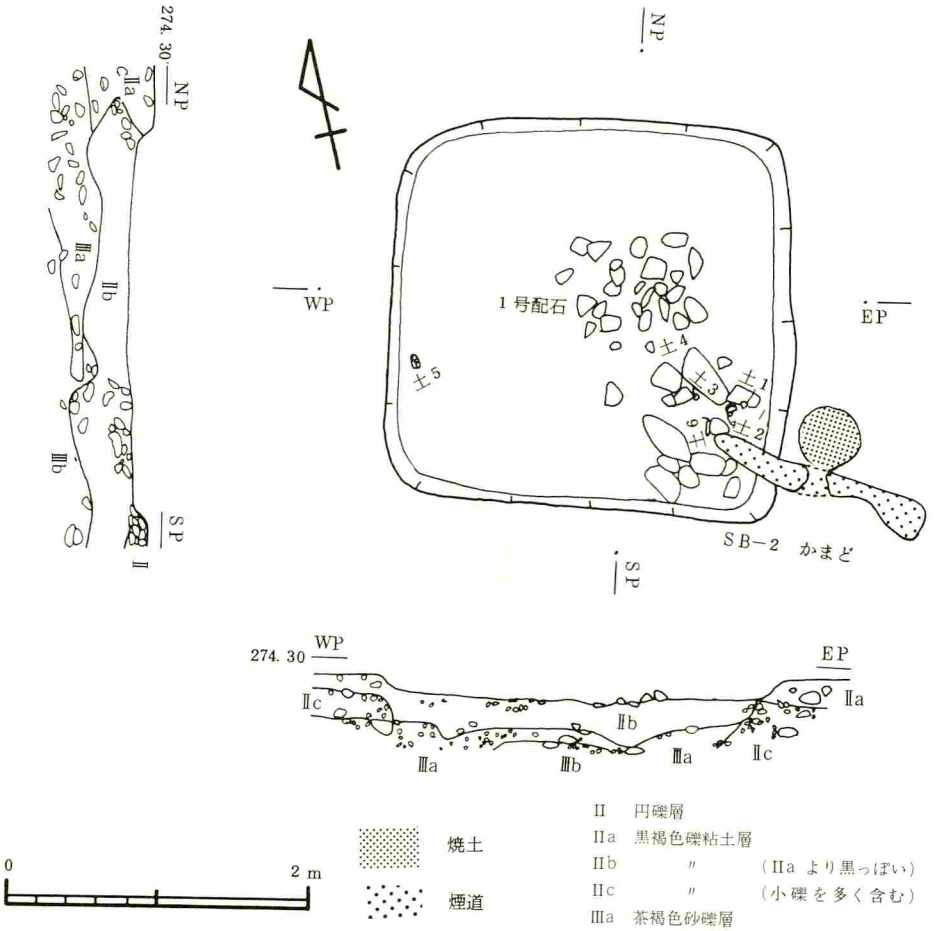
第9図　1号・4号住居址実測図（1:50）



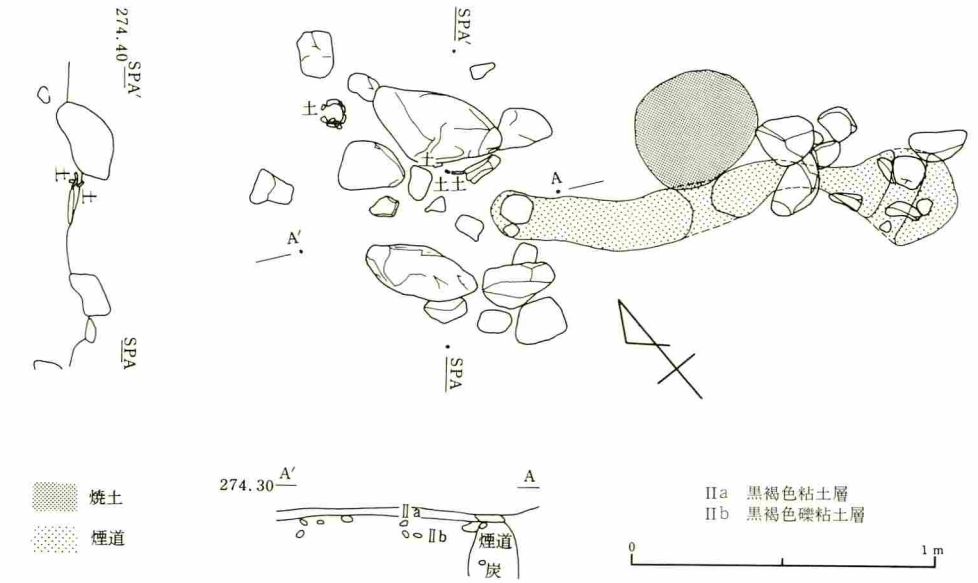
第10図　1号住居址遺物実測図

2号住居址　遺跡の南部にあって、最小のものである。氾濫した礫層に囲まれ（礫層を掘って）、南の2号埋石遺構をわずかに切っている。形状は隅丸方形で、規模は東西2.55m、南北2.70m、深さ20cmで床面の標高273.85mである。主軸の方向はN—16°—Eである。かまどは南東の隅にあり、構造は石を立てて袖の芯とし、中央に低い石を埋めて立ててある。炊き口の芯石は特に大きい。住居址の中央に1号配石があるが、住居址との関係は不明である。

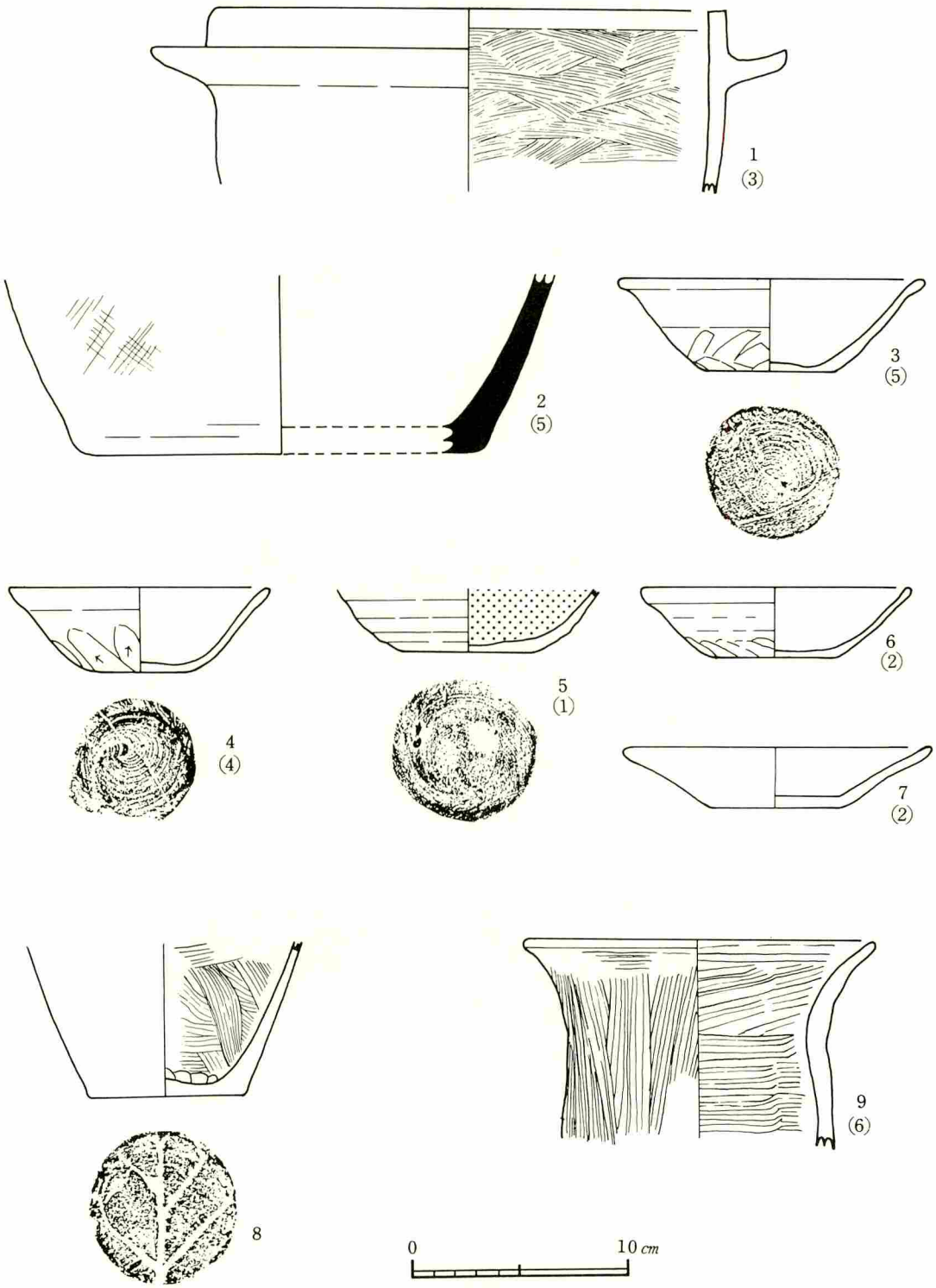
遺物　国分式中葉の皿・坏・甕の底部・羽釜口縁部破片が、又かまどから鬼高期の甕の口縁部破片が出土している。坏の内、1個は内面黒色土器である。全部の坏は床面直上から出土しているので、これが住居址廃絶の時期を示すと考えられる。



第11図　2号住居址及び1号配石実測図（1：50）

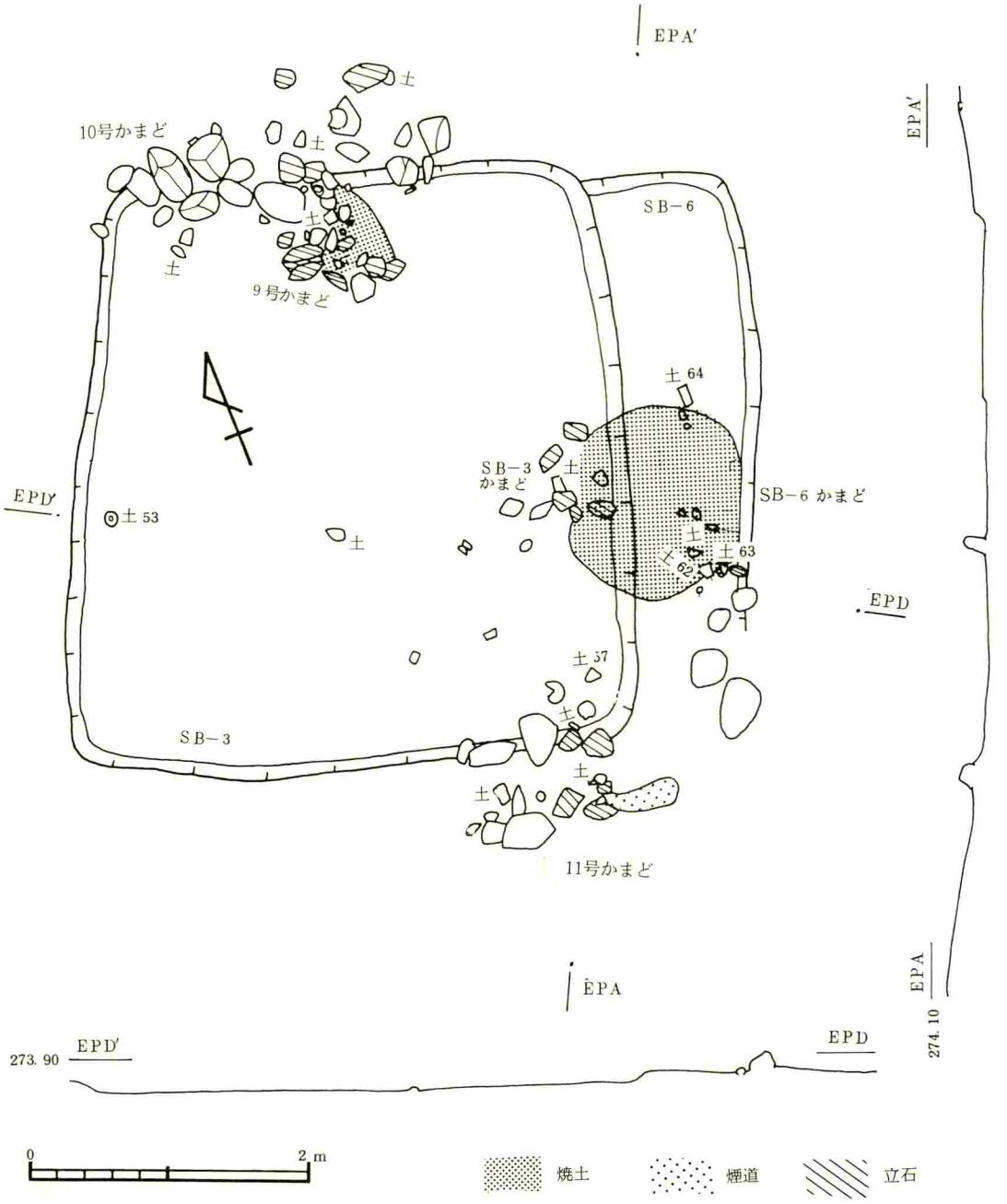


第12図　2号住居址かまど実測図（1：40）



第13図　2号住居址出土遺物実測図

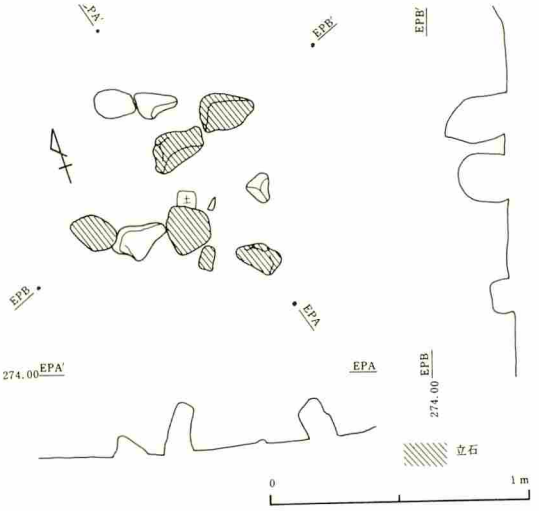
3号住居址　6号住居址の上にある。形状は隅丸方形であるが、北側がやゝ狭くなっていて、歪んでいる。規模はその中心点で東西3.9m、南北4.2m、深さ21cmで、主軸の方向はN—21°—Eである。床面の標高273.30mである。かまどは東側にあり、構造は石を立てて袖の芯としている。この外にも南側の壁に接する所と、北西の隅に他の住居址のかまどがあるが、



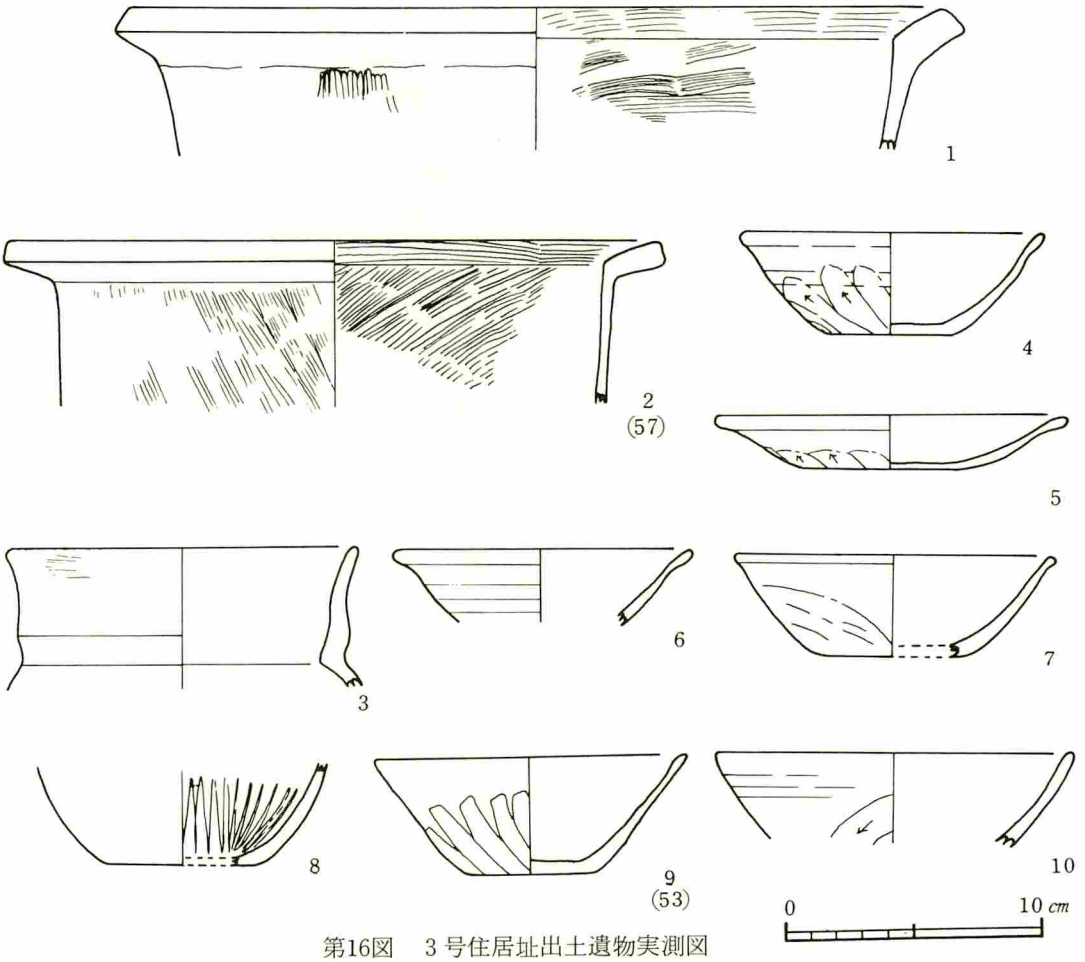
第14図　3・6号住居址実測図

その住居址のプランは検出できなかった。このいずれのかまども石を立てて袖の芯とし、中央に石を立てている。

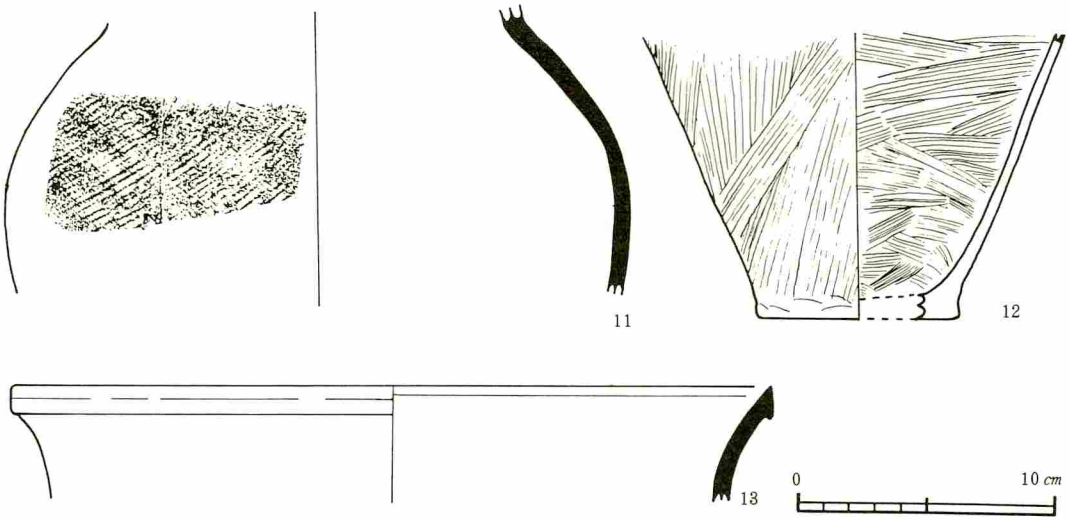
遺物　床面直上から出土したものをあげる。土師器の皿、坏、甕の口縁部等があり、遺物量は多いが、いずれも山梨県土師編年（48年・坂本）の国分Ⅱ式後半に属するものであろう。須恵器の甕の破片も出土した。



第15図　3号住居址かまど実測図（1：30）



第16図　3号住居址出土遺物実測図

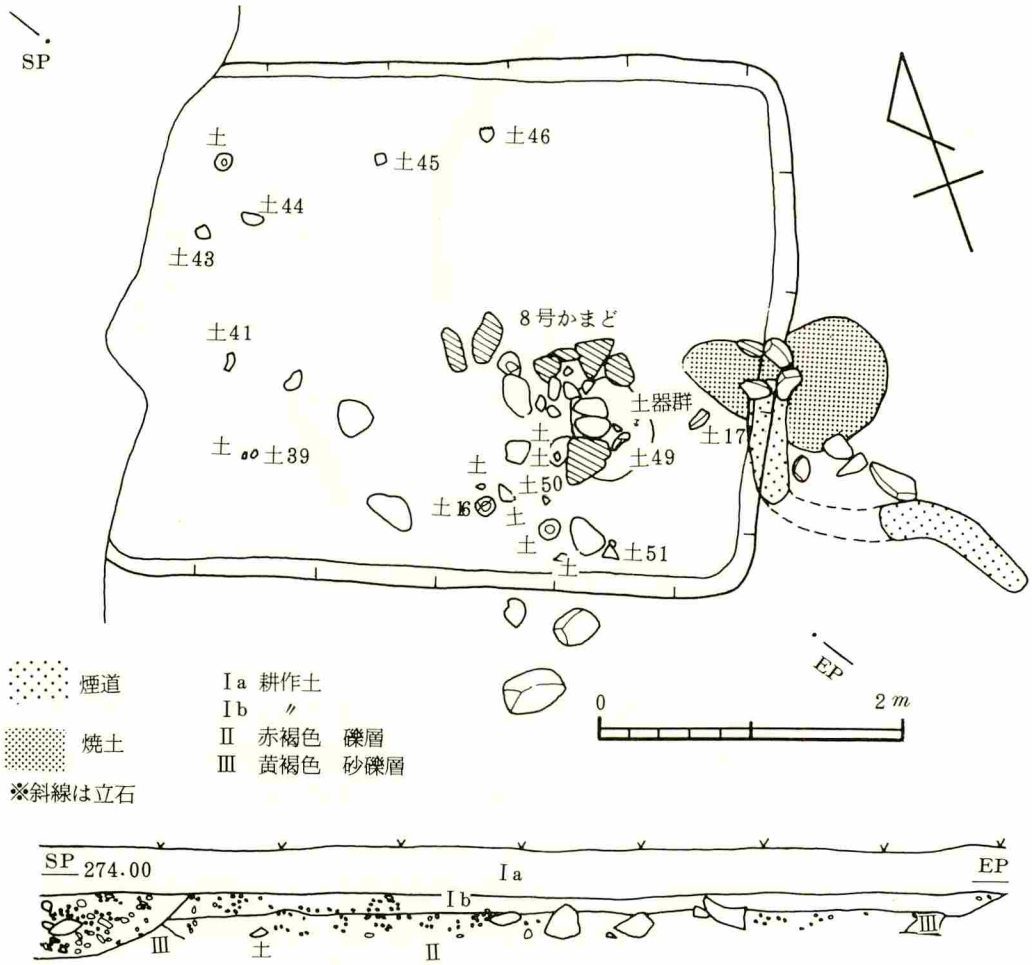


第17図　3号住居址出土遺物実測図

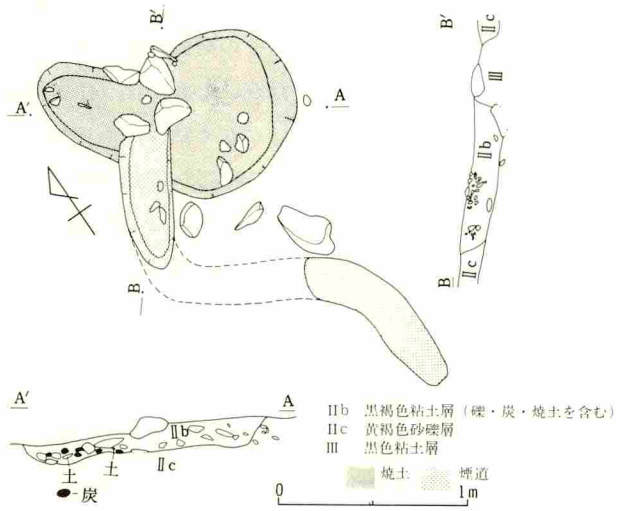
4号住居址　この遺跡の中央部に位置し、1号住居址の下にあって、その一部は4号住居址によって切られている。形状は隅丸方形である。規模は推計であるが、南北3.6m、東西3.3m、深さ25cmで、主軸の方向はN—20°—Eである。床面の標高273.55mである。かまどは1号住居址によって破壊されたものと思われ、住居址の東側にあったと考えられる。遺物は全く発見されなかった。

5号住居址　この遺跡の西端に位置し、8号埋石堀状遺構によって、住居址の西側をわずかに切られている。形状は隅丸方形であるが、やゝ東西に長い。規模は東西が推計4.5m、南北3.4m、深さ15cmで、主軸はE—19°—Sである。床面の標高は273.60mである。かまどは東側中央にあるが、破壊されていて、わずかに袖の芯の石が4個残っていただけである。袖石に続く外側に焼土があり、その南側を回るように煙道が半分検出された。住居の中央部にもかまどの袖の芯石があったが、これに伴う住居址は耕耘によって破壊されたものと思われ、検出できなかった。周囲はかたく踏み固められていた。

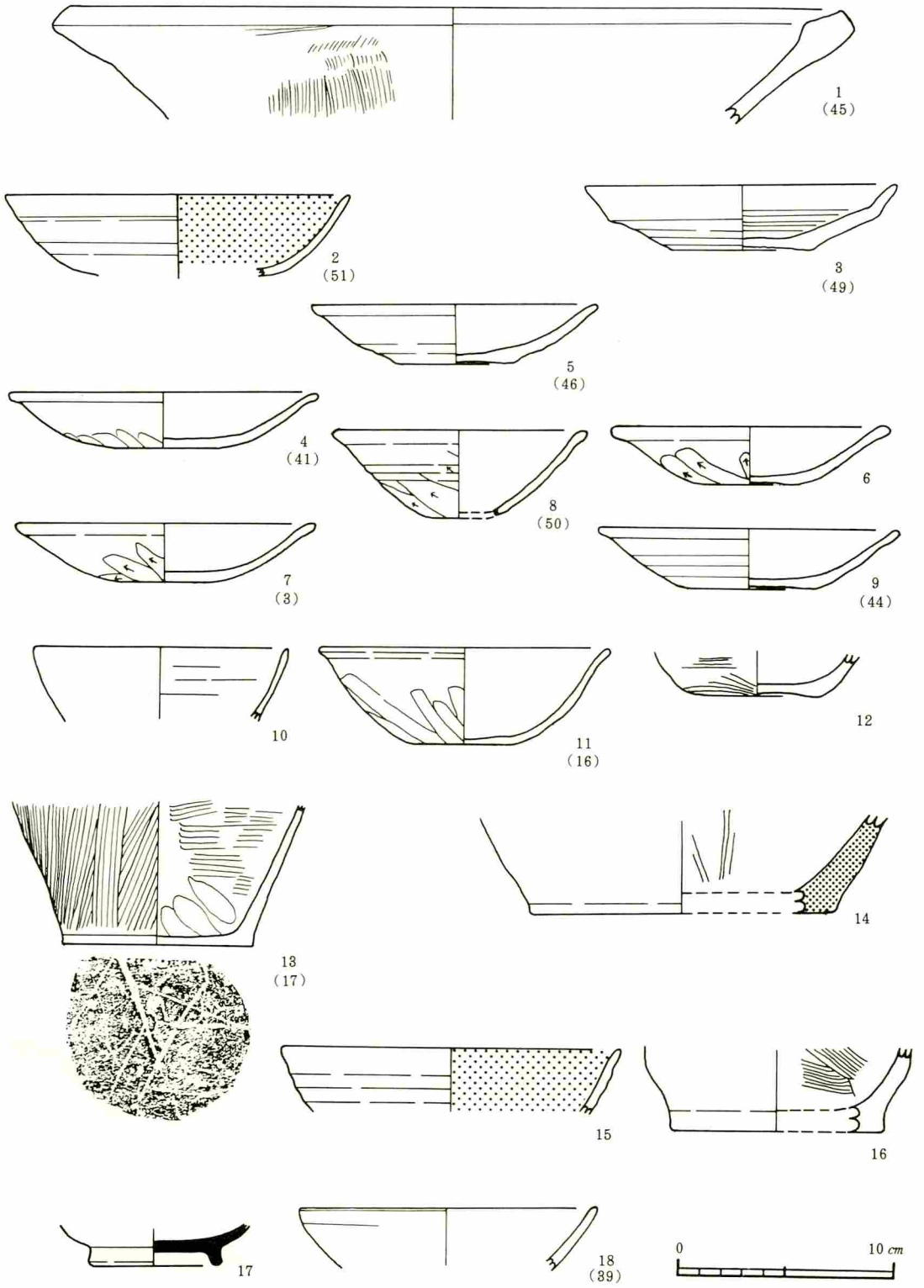
遺物　土師器の皿、坏、甕の口縁部や底部の破片、羽釜の口縁部の破片、瓦器質の擂鉢等が出土した。坏の中には、わずかに高台をもつ内面黒色土器や、灯明皿の破片が1片ずつあった。これらは国分Ⅱ式後半からそれ以後のものと思われ、又甕の口縁部はそれより後のものであろう。瓦器質の擂鉢片は、沈線が2本単位で2個所入っているもので、床面直上から出土した。瓦器質土器は他の遺構からも数点出土しているので、この遺構の時期に使用されていたと考えてよいのであろうか。川越俊一氏による「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」（『文化財論叢』昭和58年・国立奈良文化財研究所）によれば、近畿地方では瓦器質碗は11世紀、瓦器質羽釜は12世紀末から13世紀初頭にかけて出現したようである。他に変形な皿も1個出土している。



第18図　5号住居址実測図（1：50）



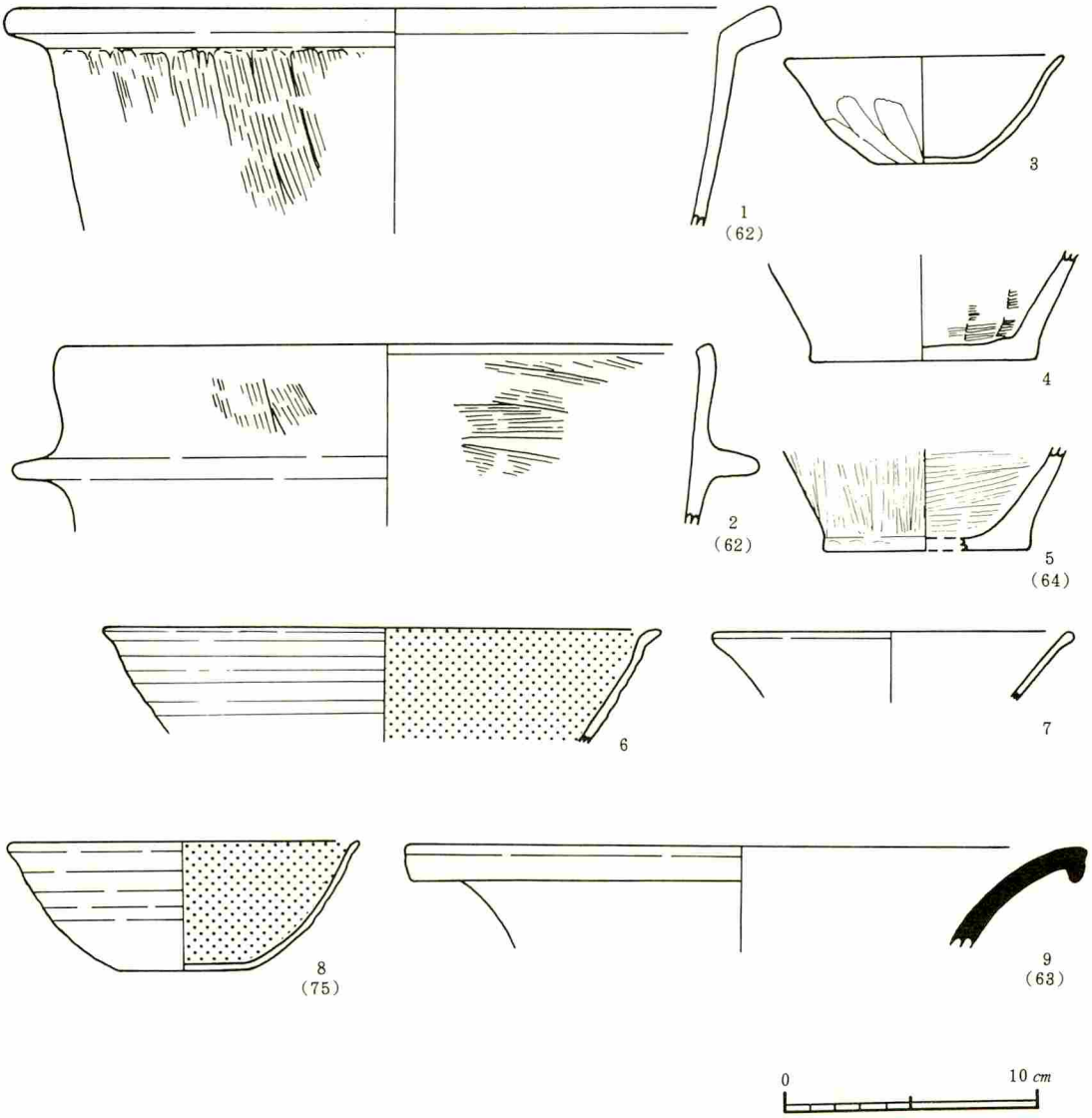
第19図　5号住居址かまど実測図（1：40）



第20図　5号住居址出土遺物実測図

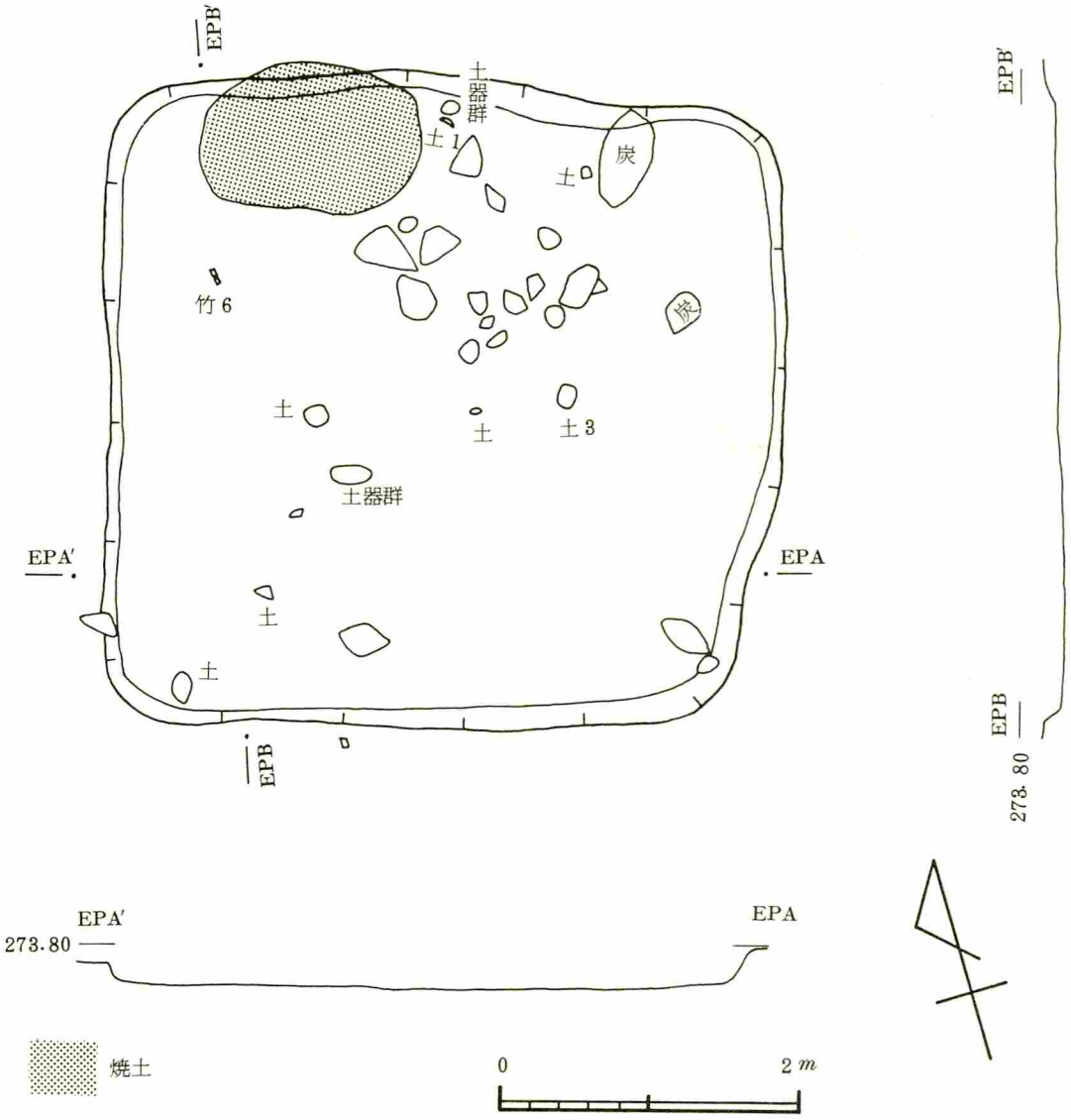
6号住居址　3号住居址によって、そのほとんどが破壊されているために、規模は不明であるが、深さは15cm、形状は隅丸方形のようである。床面の標高は273.35mである。かまどは南東隅よりやゝ北にあるが、破壊されて袖の芯石が残っているにすぎない。焼土がかまどの前部に径1m位の範囲に広がっている。

遺物　かまどとその付近から土師器片と須恵器片が出土している。土師器は坏、甕、羽釜があり、坏の内2個は内面黒色土器である。いずれも11世紀のもので、国分Ⅱ式とそれ以後に比定されよう。



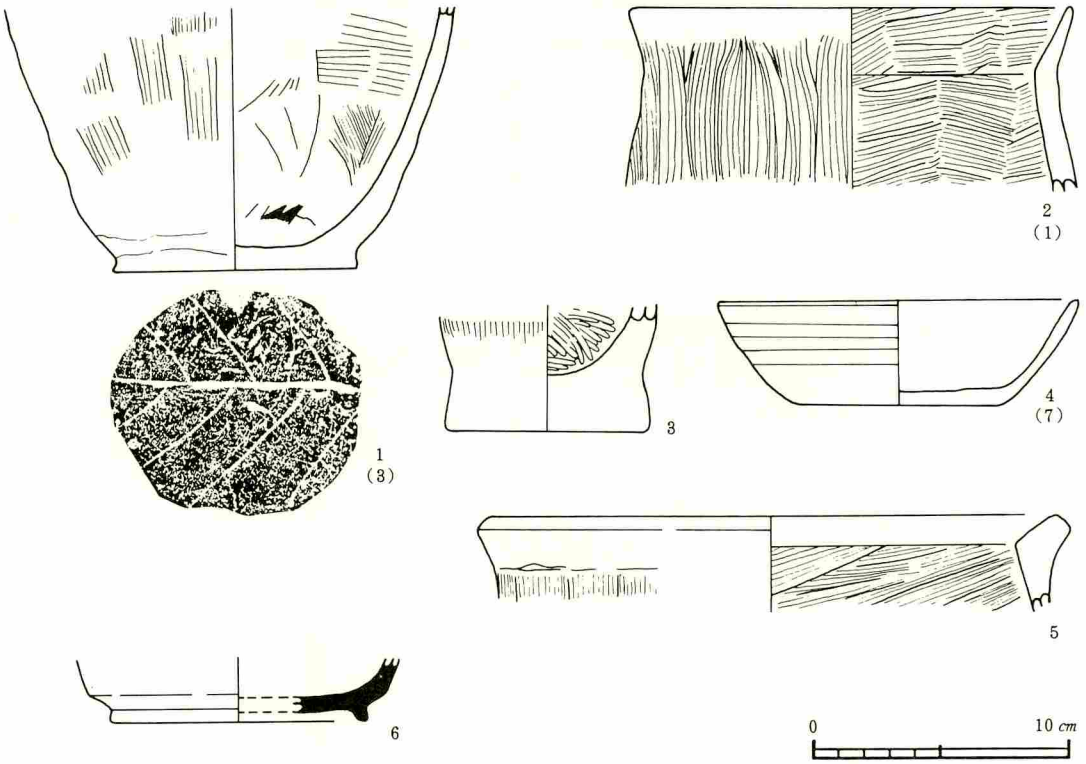
第21図　6号住居址出土遺物実測図

7号住居址　2号埋石遺構の下から検出されたもので、他の住居址より一時期古い土師器が出土している。埋石遺構の下にあったのは偶然であろうと考えられる。形状は隅丸方形であり、規模は東西4.45m、南北4.3m、深さ20cmである。主軸の方向はE—17°—Sである。床面の標高273.3mである。かまどは南東の隅にあったと考えられ、袖の芯石らしい石が3個と、黄白色の砂が落込みの中に堆積していたが焼土はみられなかった。住居址内には焼土と炭の層があり、自然石が床面に散乱しており、覆土はほとんど単1層で、レンズ状堆積がないことから、住居は人工的に埋められたことも考えられる。



第22図　7号住居址実測図（1：50）

遺物　土師器の坏、甕の口縁部、底部破片などが出土し、いずれも８世紀から９世紀の真間期から国分期にかけてのものであろう。

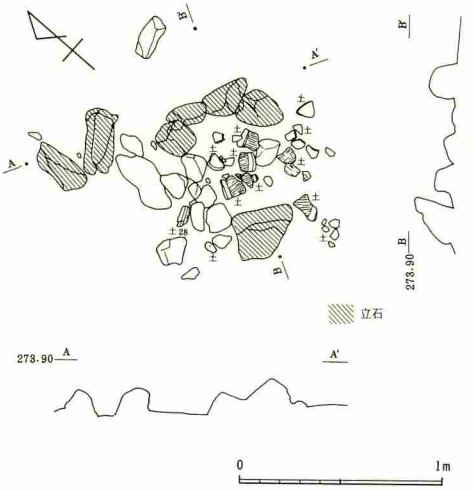


第23図　７号住居址出土遺物実測図

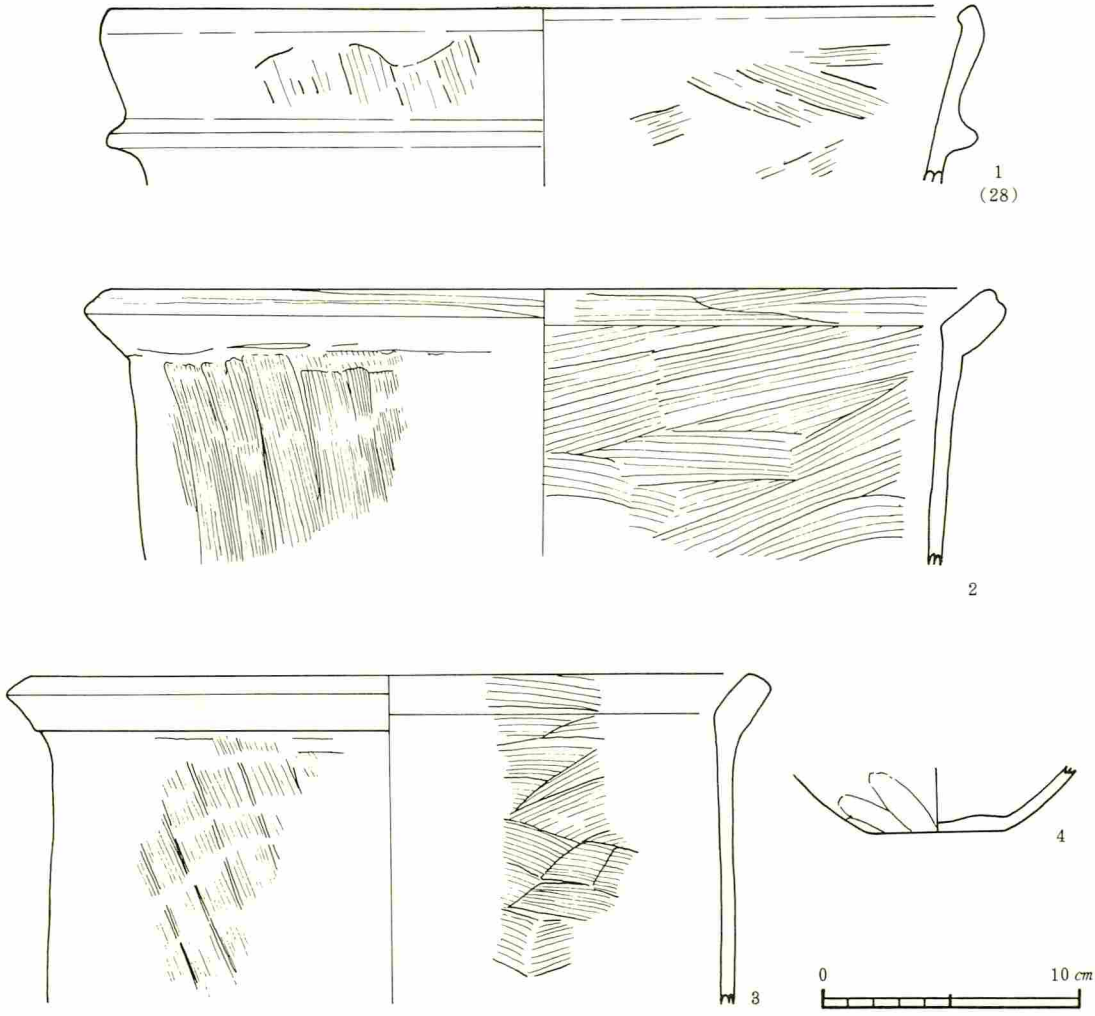
かまどと遺物

８号かまど　５号住居址の中にあって、片袖の芯石は立石として残存していたが、そのプランの検出は出来なかった。

遺物　かまど内で出土した遺物は国分式期後葉の10世紀後半のものであろう。



第24図　８号かまど実測図（1：40）



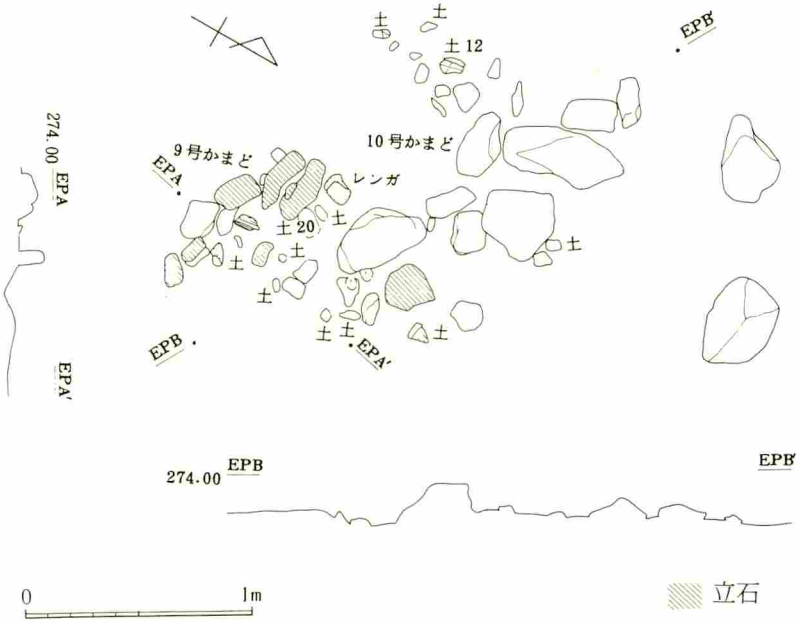
第25図　8号かまど出土遺物実測図

9号かまど　3号住居址の中にあって、片袖の芯石は立石として残存していたが、他の片袖は全くない。プランは検出できなかった。

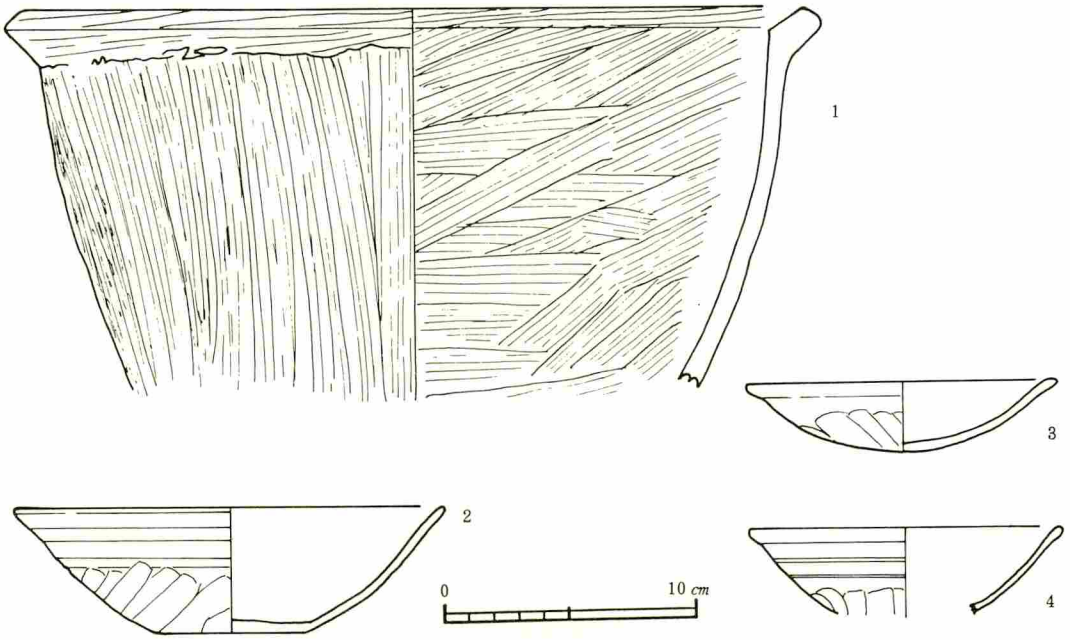
遺物　かまど内での出土遺物は、国分式期後葉のものであろう。

10号かまど　9号かまどに隣接していて、ほとんど破壊されている。プランは確認出来なかった。

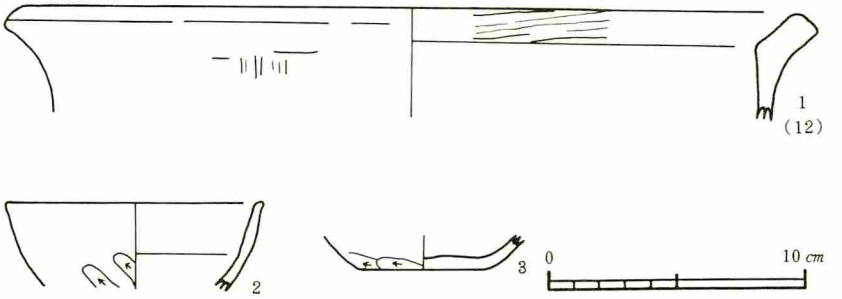
遺物　かまど内で出土した遺物は国分式期後葉のものであろう。



第26図　9・10号かまど実測図（1：40）



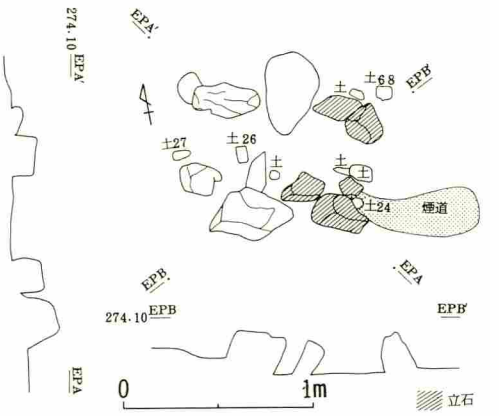
第27図　9号かまど出土遺物実測図



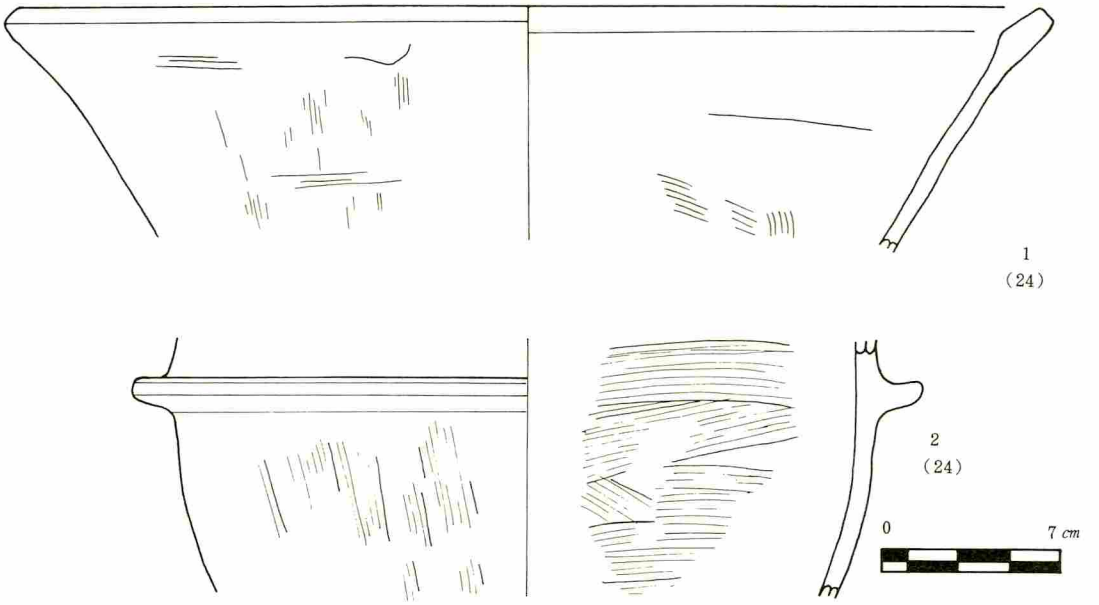
第28図　10号かまど出土遺物実測図

11号かまど　3号住居址内にあって、両袖に使用された立石と煙道の1部を検出したがプランは確認出来なかった。

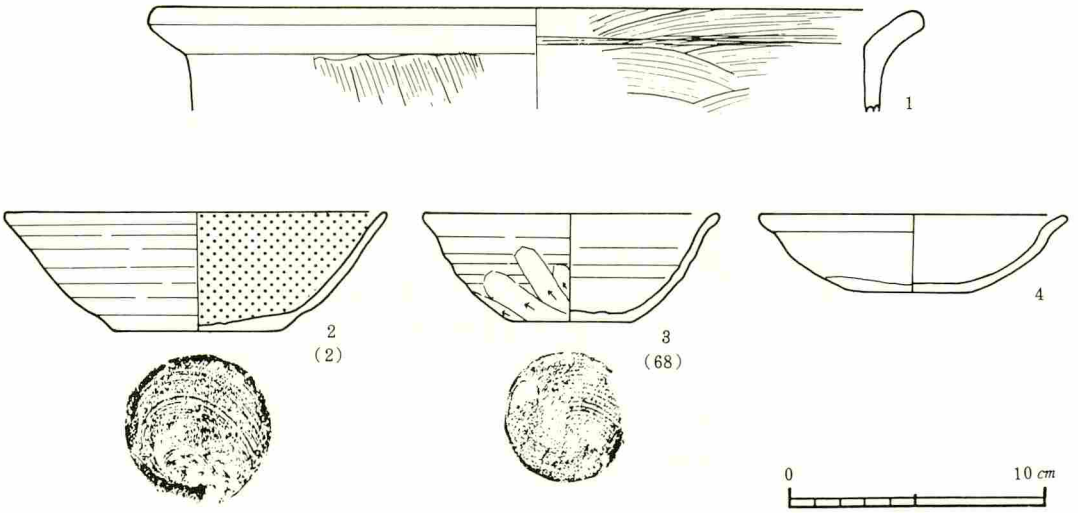
遺物　かまど内での出土遺物は国分式期中葉から11世紀初頭くらいのものであろう。



第29図　11号かまど実測図（1：40）



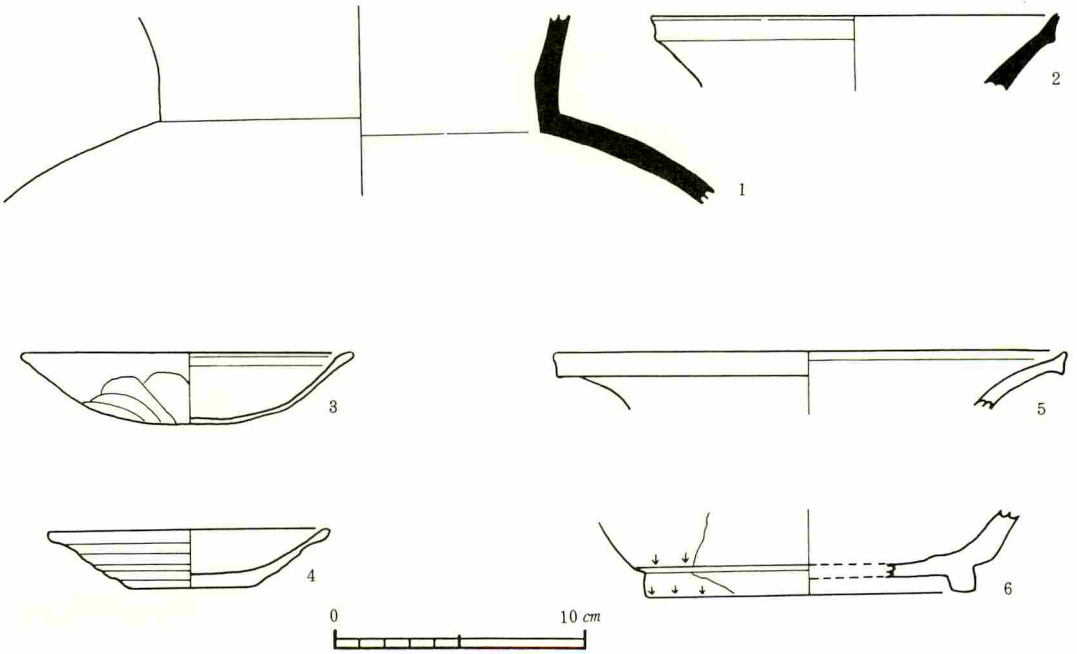
第30図　11号かまど出土遺物実測図



第31図　11号かまど出土遺物実測図

埋石遺構と遺物

2号埋石遺構　（1号は欠番）　7号住居址の中にある。石を密に埋めた部分はやゝ方形を呈しており、東西約9.5m、南北約6mである。埋められた石が少ない部分は東で約2.5m、西で2.1mで、ここの上には自然石が1段並べられていて、深さは約50cmである。埋められている石は拳大から30cm位の石で小礫はほとんど混入していないから明らかに人工的に埋めたものである。埋石の底には5cm位の焼土や炭化物・灰の層が所々にある。



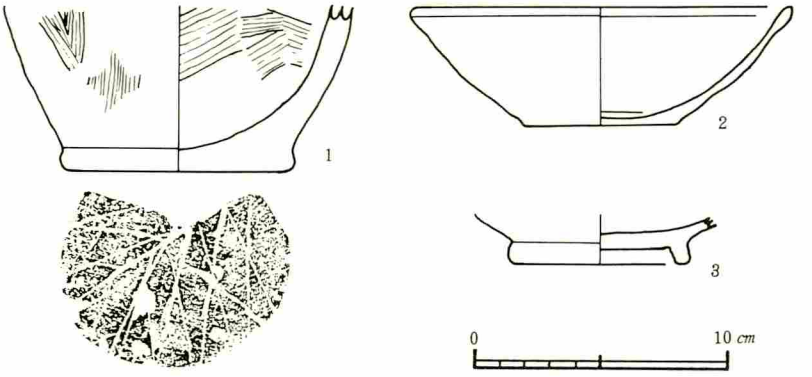
第32図　2号埋石遺構出土遺物実測図

遺物　埋石の中から土師器の坏、皿、甕や須恵器の甕、壺や灰釉陶器の破片などが出土した。坏、皿は11世紀の国分Ⅱ式位に比定出来る。その他、土師質の磚状遺物が３個出土した。その最も大きいものは長さ24cm以上、厚さ約10cmである。

使用目的は全く判明しない。

配石遺構と遺物

３基の配石遺構を検出したが、５号配石遺構以外は１部が破壊されていて、完全な形ではなく、原型の推測は出来ない。これらはほぼ同一生活面上に構築されており、その出土遺物も時期が近いものである。いずれもその機能を判定し難く、性格が不明な遺構である。

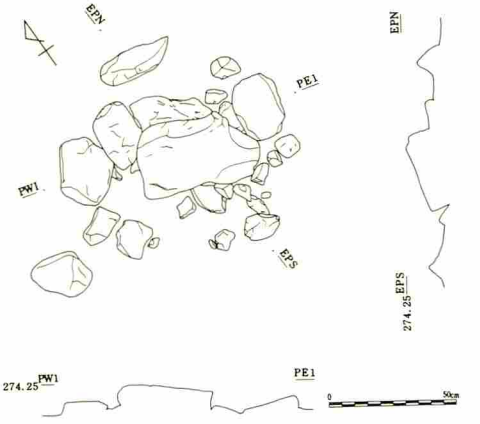


第33図　１号配石出土遺物実測図

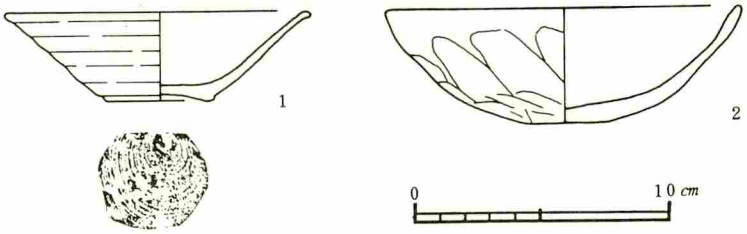
２号配石遺構　７号配石遺構の約３ｍ南西にある。石で炉状に囲ってあり、その上に長さ47cmの石を載せてある。

規模は東の１部は破壊され、石がなかったのでわからないが、南北の長さは約120cmである。セクションでみるとわずかに掘り込んで埋めた石と、そのまま配置したとみられる石があり、内はやゝ掘り凹めていて焼土等はなかった。

遺物　土師器の坏が２個出土した。時期は国分式初期のものであろう。



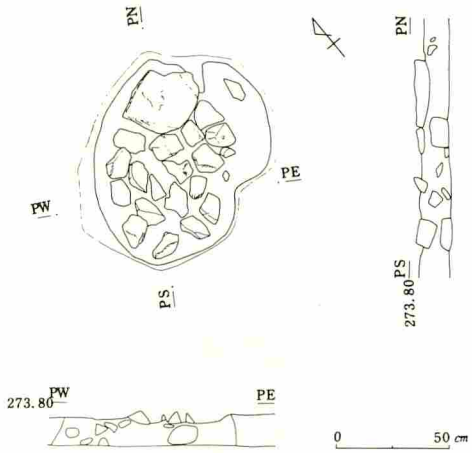
第34図　２号配石実測図（1：30）



第35図　2号配石出土遺物実測図

5号配石遺構　直径約30cmの偏平な石の平な部分を上にして置き、その前に14cmくらいの比較的大きさの揃った石を並べて、長径約90cm、短径約60cmの長円形の遺構を形作っている。小石は必ずしも上が平ではなく、凹凸しているが、原形は上面が平であったことが、その状況から考えられる。掘込みは浅く覆土には炭化物や灰が混入して、黒色となっているが焼土は見られない。この黒色土の範囲は配石の中と周囲5cm位の所まで広がっている。

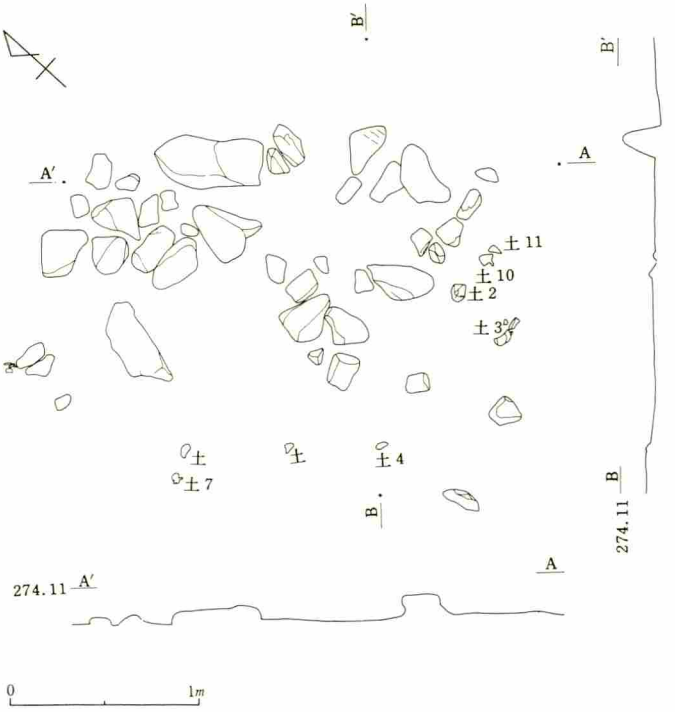
遺物　出土しなかった。



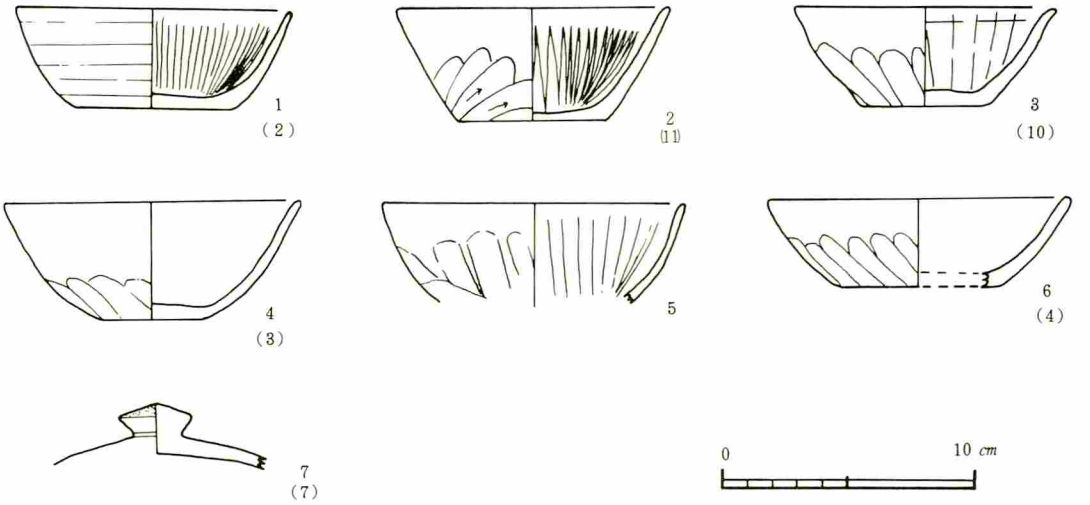
第36図　5号配石実測図（1：30）

7号配石遺構　2号配石遺構の北東3mの地点にある。配石の全体は不整円形を呈するが、半数以上の石が取り去られたと思われ、原型を残していない。北側中間には列石があり、これを囲むように配石されている。約20cm掘込んで、その上部に石を埋め込んでいて、覆土は炭火物を含んだ黒色土であるが焼土はない。

遺物　土師器の坏、皿、蓋などが出土し、いずれも平安時代前期にあたるものである。1枚の皿は外面に煤が付着している。



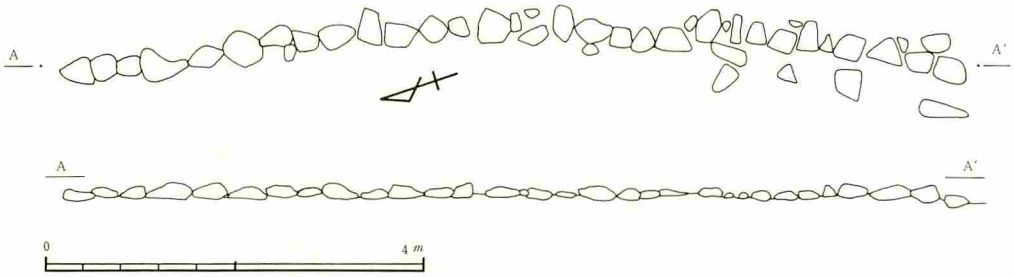
第37図　7号配石実測図（1：40）



第38図　7号配石出土遺物実測図

列石と遺物

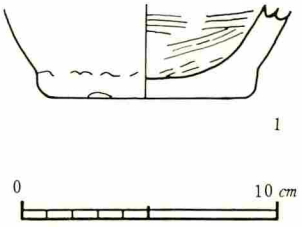
2列の列石と用途不明の3基の配石と思われる遺構とがある。いずれもレベルは前述した各種の遺構とほぼ同じであるが、構築や使用時期は確定出来ない。



第39図　1　号　列　石　実　測　図

1号列石　遺跡の南端にあり、列石の北端は2号埋石遺構に接している。構造は1段構築で、その面は西側にあり、東は石の上面に生活面、西は下面が生活面となっている。東側には道状に踏み固められた場所があり、これは2号埋石遺構の上面とほぼレベルは一致する。列石の長さは約9.5mである。

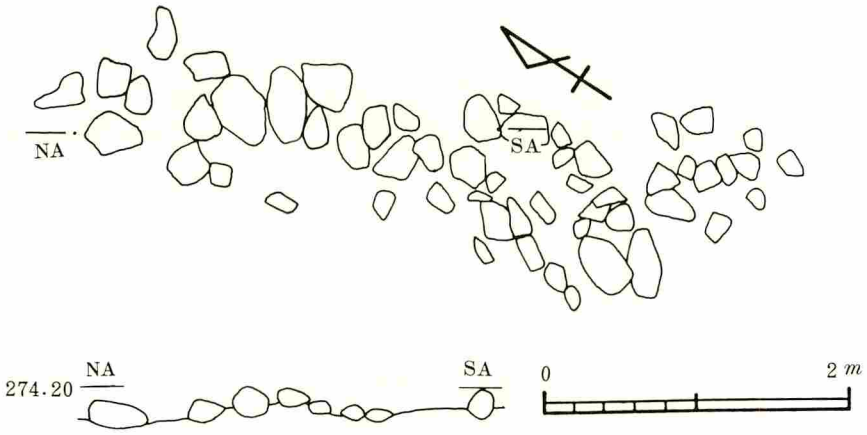
遺物　列石の南側生活面から瓦器質の擂鉢、羽釜と鉢の破片が出土した。この製作時期については、確定出来ない。この他に土師器甕の底部が出土している。



第40図　1号列石出土遺物実測図

2号列石　2号住居址の北側にあり、これとレベルはほぼ同じである。ほとんど破壊されていたが、約3mあり、一段構築で列石と認められる程度に並んでいた。周囲には破壊されたと考えられる石が散乱していた。

遺物　遺物はなかった。



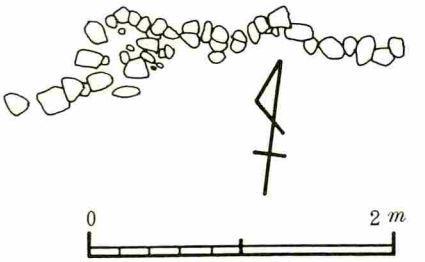
第41図　2号列石実測図（1：50）

3号列石　北西の隅にあって、埋石堀状遺構が入口状に切られている北側辺に沿って、2段積になっている。乱雑な積み方で、しかも屈曲しているが、面は南側になっている。西端は破壊されていて、石が散乱している。構築状況から判断すると埋石堀状遺構と同時期のものではないかと考えられる。

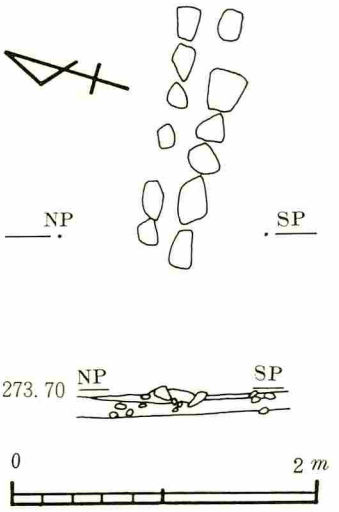
遺物　伴出遺物はない。

4号列石　東側にあって、中央道の路線外へと延長していたと思われるが、水路工事で破壊されていた。水路状に2列に並行しており、1段構築である。

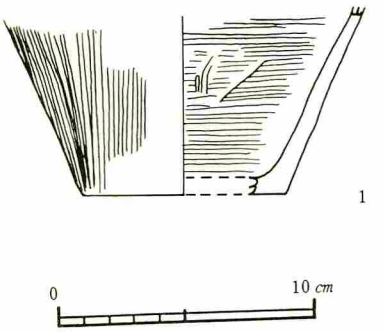
遺物　甕の底部が出土した。



第42図　3号列石実測図



第43図　4号列石実測図

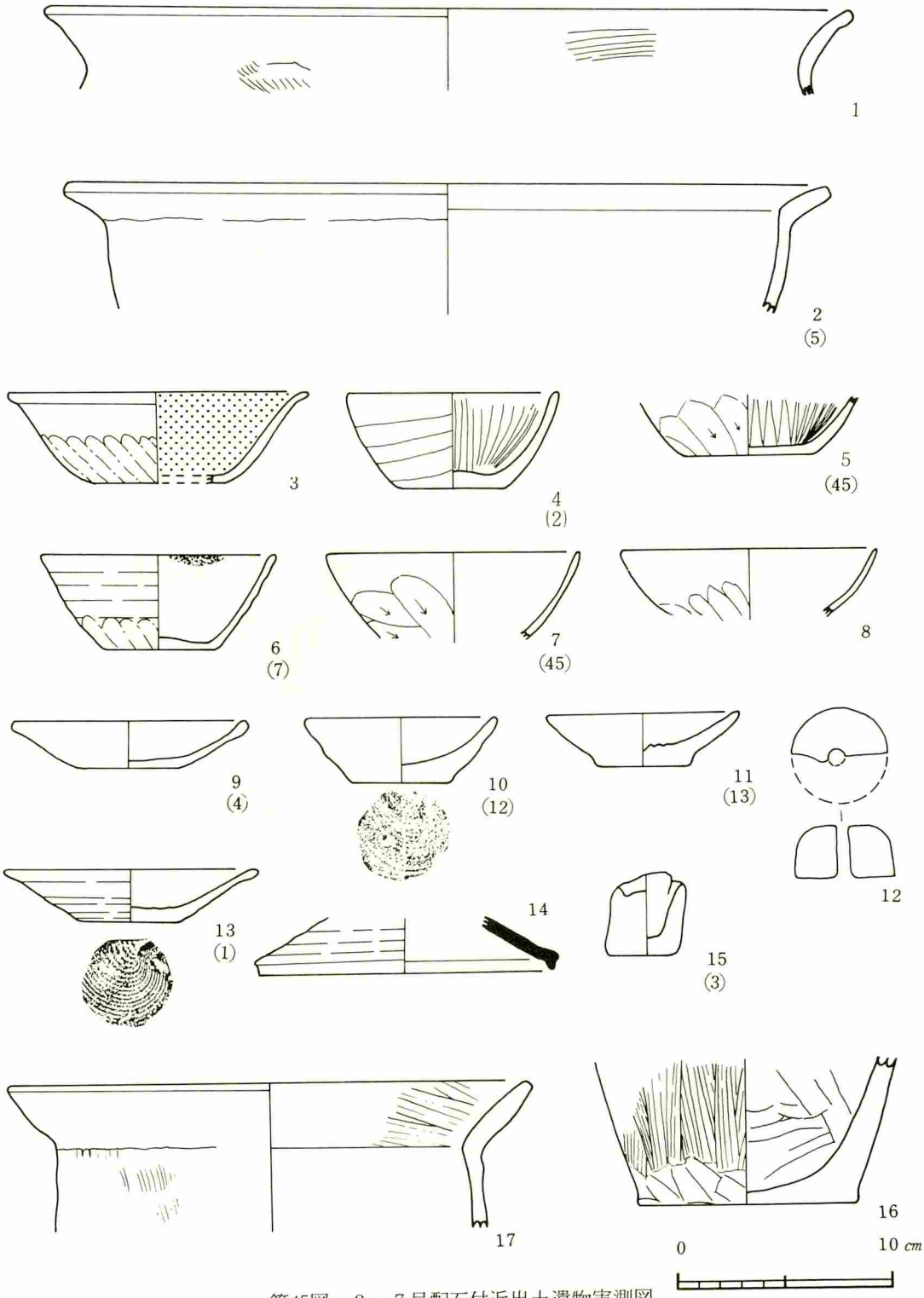


第44図　4号列石出土遺物実測図

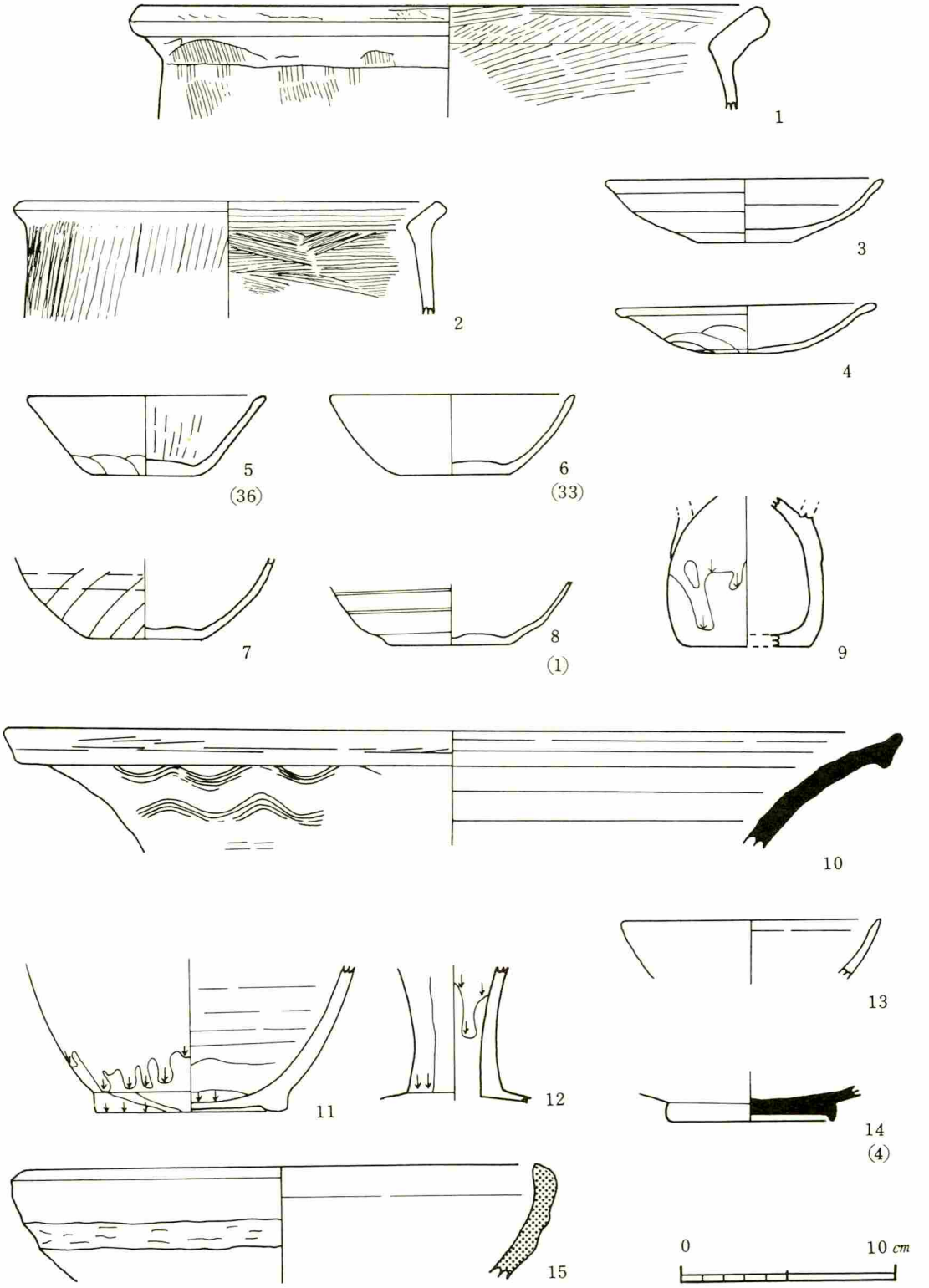
その他の遺構と遺物

8号及び10号埋石堀状遺構の上に、南北の列石が2列あり、約16mと14mを計ることが出来る。古い時期の畑の境界用のものかも知れない。

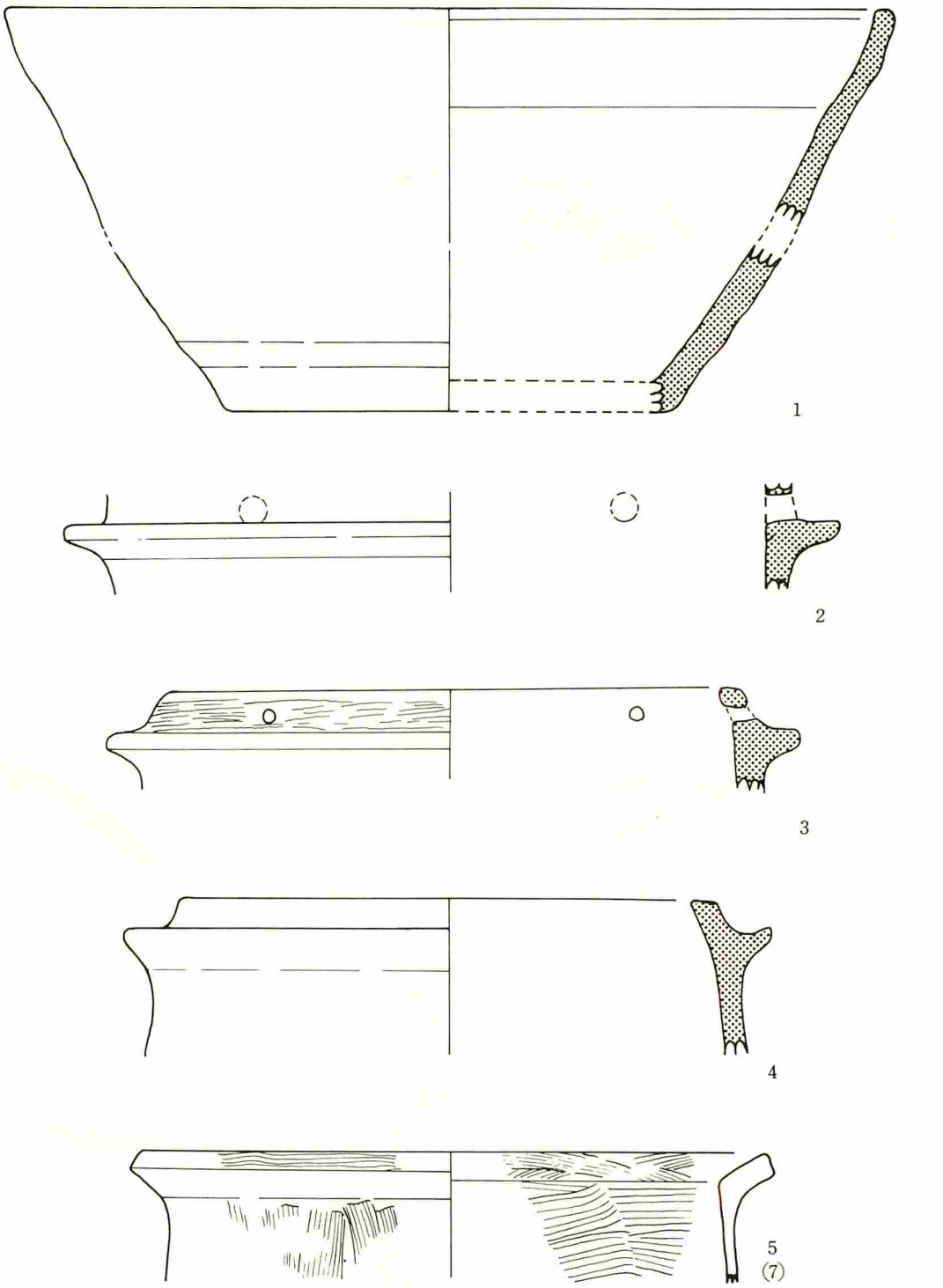
遺物　土師器の甕の底部が出土している。



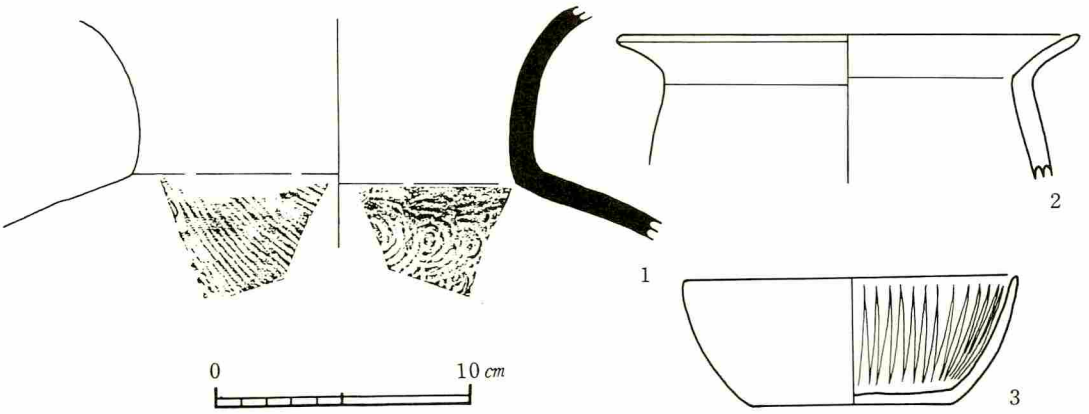
第45図　2・7号配石付近出土遺物実測図



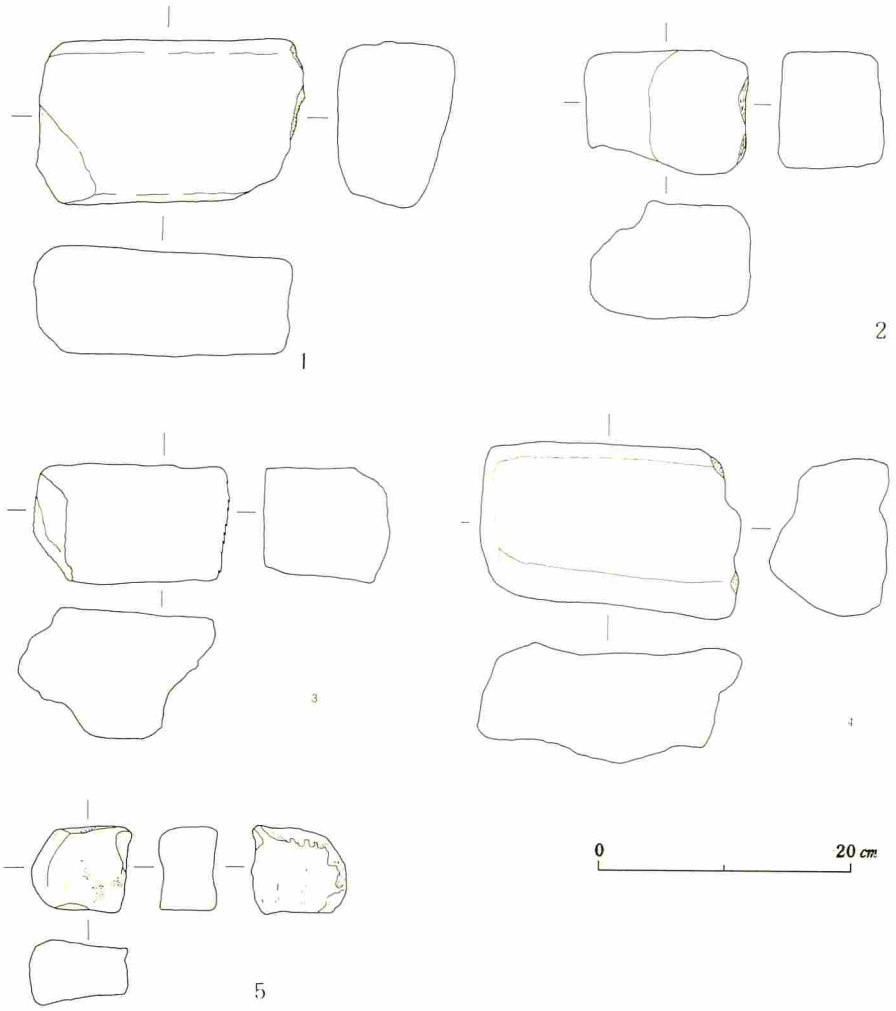
第46図　グリッド出土遺物実測図



第47図　1号列石付近出土遺物実測図



第48図　9号埋石堀状遺構出土遺物実測図



第49図　磚状遺物実測図（1：6）

最後に瓦器質土器、土師質土器と青磁、灰釉陶器について説明しておく。瓦器質土器については「5号住居址」の項で若干説明したように、擂鉢や羽釜の破片が数片出土している。器の内外面に灰色の化粧粘土を1～2㎜貼り付け、芯は白色の粗い胎土であるものが多い。出土地点は遺跡の南側に集中している。他からも瓦器質土器は数10片出土していて、中には須恵器と瓦器の中間的なものもかなり多い。これらは出土状況などからも確かにこの遺跡の終末期のものと考えてよいであろう。土師質土器は極めて少量で、ほぼ完形のものが3—Bグリッドの生活面直上から2枚重なって出土した。第45図№10と№11であるが、2枚とも器肉が厚く、糸切り底で内面に回転指ナデ調整痕がある。青磁は2号埋石遺構の覆土から出土した底部である。内外面に施釉した優品であって、中国製のもののようである。灰釉陶器も若干出土している。

第1表　出土・遺物一覧表

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm) 口径/器高/底径	調整 口縁	調整 外面	調整 内面	調整 底	胎土 色調 焼成	備考
第71図	9号埋石堀状遺構	須恵	長頸壺	— — —		ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 白褐色 良好	
第81図	11号埋石堀状遺構	土師	坏	10.0 4.7 5.5	丸形	〃	〃		緻密 白褐色 良好	
第101図	SB—1床面直上	〃	〃	12.0 4.4 6.0	〃	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃	静止糸切 ↓ 篦削	緻密 茶褐色 良好	灯明皿
〃2	〃	〃	〃	10.4 4.0 5.6	〃	〃	ロクロ水引 放射状暗文	糸切 ↓ 篦削	緻密 褐色 良好	〃
〃3	〃	〃	〃	13.8 4.8 7.0	〃	口縁部ロクロ水引 器体下半回転横ナデ	放射状暗文		緻密 褐色 良好	
〃4	SB—1床面直上一括	〃	〃	12.0 4.4 6.0	〃	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃		緻密 褐色 良好	
〃5	SB—1床面直上カマド	〃	〃	14.0 — —	〃	〃	〃 花弁状暗文		〃	
〃6	〃	〃	〃	14.0 5.0 8.6	尖形	〃	〃		緻密 白褐色 良好	
〃7	SB—1床面直上	〃	〃	10.4 4.0 4.8	丸形	〃	ロクロ水引		緻密 茶褐色 良好	
〃8	SB—1カマド覆土	〃	蓋	— — —		ロクロ回転篦削 斜位篦削	ナデ		緻密 褐色 良好	
〃9	SB—1カマド	〃	甕	— — 7.4		縦刷毛	横刷毛	木葉痕	砂粒を含む 暗茶褐色 良好	
〃10	〃	〃	〃	— — 6.0		〃	〃	〃	砂粒を含む 暗褐色 良好	
〃11	SB—1カマド上床面直上一括	須恵	〃	— — 12.0		ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		緻密 灰黒色 良好	
第131図	SB—2床面直上	土師	羽釜	23.4 — —		口縁横ナデ	横ナデ 横刷毛		砂粒を含む 茶褐色 良好	外面羽下部煤付着
〃2	〃	須恵	鉢	— — 17.6		格子叩き スリケシ			砂粒を含む 暗灰色 良好	
〃3	SB—2床面直上	土師	坏	14.0 6.0	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引	糸切 ↓ 篦削	緻密 赤褐色 良好	
〃4	SB—2床面直上	〃	坏	12.0 3.9 4.5	〃	〃	〃	回転糸切	砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃5	〃	〃	〃	— — 6.0		回転横ナデ	〃	糸切 ↓ 篦削	砂粒を含む 白褐色 良好	内黒
〃6	〃	〃	〃	12.2 3.2 6.0		口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃	〃	砂粒を含む 赤褐色 良好	
〃7	カマド	〃	〃	14.0 2.8 6.8		ロクロ水引	〃	〃	砂粒を含む 暗褐色 良好	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm)(口径/器高/底径)	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
第138図	SB－2	〃	甕	— — 7.0			交互の刷毛 底部篦押え	木葉痕	砂粒を多く含む 暗褐色	
〃9	SB－2 カマド	〃	〃	16.0 — —	薄長	口頸部横ナデ 縦刷毛	口頸部横ナデ 横刷毛		砂粒を含む 暗褐色 良好	
第161図	SB－3 床面直上	〃	〃	32.0 — —	肥厚	〃	〃		砂粒を含む 赤褐色 良好	
〃3	〃	〃	壺	14.0 — —	薄長	横ナデ	横ナデ		砂粒を含む 赤褐色	
〃4	〃		坏		隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 赤褐色 良好	
〃5	〃	〃	〃	14.0 2.0 6.0	〃	〃	ロクロ水引 底部回転ナデ		緻密 茶褐色 良好	
〃6	〃	〃	〃	12.0 — —	〃	〃	ロクロ水引		緻密 赤褐色 良好	
〃7	〃	〃	〃	12.6 4.0 6.0	〃	〃	〃		〃	
〃8	〃	〃	〃	— — 6.0		横位回転篦削	〃 花弁状暗文		〃	
9	〃	土師	坏	12.5 4.7 5.7	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引	糸切 ↓ 篦削	砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃10	〃	〃	〃	14.0 — —	丸形	〃	〃		緻密 赤褐色 良好	
第1711図	〃	須恵	甕	— — —		格子叩き、スリケシ	篦押え		暗褐色 良好	〃
〃12	SB－3 カマド	土師	〃	— — 8.0		斜位刷毛	横刷毛		砂粒を含む 茶褐色 良好	内面煤付着
〃13	SB－3 床面直上	須恵	〃	30.0 — —	折り返し	ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 暗灰色 良好	
第201図	SB－5 床面直上	土師	〃	36.0 — —	隆肥厚	口縁部横ナデ 胴部縦刷毛	口縁部横ナデ		砂粒を含む 赤褐色 良好	
〃2	〃	〃	皿	16.0 — —	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転篦削	ロクロ水引		〃	内黒
〃3	〃	〃	〃	14.4 3.1 6.6	尖形	〃	〃		緻密 褐色 良好	
〃4	〃	〃	〃	14.4 3.6 7.2	隆玉縁	〃	〃		粗い 赤褐色 良好	
〃5	〃	〃	〃	14.0 2.7 5.0	丸形	〃	〃		緻密 褐色 良好	
〃6	〃	〃	坏	13.0 2.7 4.3	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃		砂粒を含む 赤褐色 良好	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm) 口径 器高 底径	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
第207図	SB—5 床面直上	土師	坏	14.0 2.8 4.5	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		砂粒を含む 褐色 良好	
〃8	〃	〃	〃	12.0 4.0 3.2	〃	〃	〃		砂粒を含む 褐色 良好	
〃9	〃	〃	〃	14.0 3.0 5.5	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下横斜位回転篦削	〃		砂粒を含む 褐色 良好	
〃10	〃 一括	〃	〃	12.0 — —	尖形	ロクロ水引	〃		砂粒を含む 褐色 良好	
〃11	SB—5	土師	坏	14.0 4.5 5.0	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削		糸切 ↓ 篦削	砂粒を含む 赤褐色 良好	
〃12	SB—5 床面直上 一括	〃	〃	— — 6.0		横ナデ 斜位篦削			砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃13	SB—5	〃	甕	— — 9.0		縦刷毛	横刷毛 底部篦削	木葉痕	〃 赤褐色 〃	
〃14	SB—5 床面直上 一括	瓦質	擂り鉢	— — 14.0				条線が3本	緻密、外白褐色、内灰色、良好	
〃15	SB—5 覆土	土師	坏	16.0 — —	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転篦削	ロクロ水引		わずかに砂粒を含む 外褐色 良好	
〃16	SB—5	〃	甕	— — 10.0			斜位刷毛		砂粒を多く含む 外褐色内黒 良好	
〃17	SB—5 覆土	須恵	高台付坏	— — 6.0		ナデ	ナデ		緻密 灰色 良好	
〃18	SB—5 床面直上	灰釉陶器	坏	14.0 — —		黄灰色	黄灰色		緻密 白灰色 良好	
第211図	SB—6 床面直上	土師	甕	30.0 — —	肥厚	口頸部横ナデ 縦刷毛			砂粒を含む 暗褐色 良好	
〃2	〃	〃	羽釜	27.0 — —		縦刷毛 ↓ 横ナデ	ナデ 横刷毛		砂粒を含む 暗褐色 良好	
〃3	〃	〃	坏	11.0 4.2 4.0	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 白褐色 良好	
〃4	SB—6	〃	甕	— — 9.0			横刷毛	木葉痕	暗褐色 良好	
〃5	SB—6 床面直上	〃	〃	— — 8.0		縦刷毛	〃	〃	砂粒を含む 赤褐色 良好	
〃6	SB—6 床面一括	〃	坏	22.0 — —	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転篦削	ロクロ水引		緻密 外白褐色 良好	
〃7	〃	〃	〃	14.0 — —	玉縁	〃	〃		緻密 赤褐色 良好	
〃8	SB—6	土師	坏	14.0 5.1 5.0		口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転篦削	ロクロ水引		わずかに砂粒混 外褐色 良好	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm)(口径/器高/底径)	調整 口縁	調整 外面	調整 内面	調整 底	胎土 色調 焼成	備考
第219図	SB—6	須恵	坏	27.0 — —	折り返し	ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 赤灰色 良好	
第231図	SB—7 床面直上	土師	甕	— —		縦刷毛	横刷毛 篦削	木葉痕	砂粒を多く含む 赤褐色 良好	
〃2	SB—7 床面直上	〃	〃	17.0 — —	肥厚	口縁部ナデ 胴部縦刷毛	横刷毛		砂粒を含む 褐色 良好	
〃3	SB—7 覆土	〃	〃	— — 8.0		縦刷毛	斜位篦削		砂粒を多く含む 赤褐色 良好	
〃4	SB—7 床面直上	土師	坏	14.0 4.2 8.0	尖形	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転篦削	ロクロ水引	糸切 ↓ 篦削	砂粒を含む 褐色 良好	
〃5	SB—7 覆土	〃	甕	22.0 — —	肥厚	口頸部横ナデ 縦刷毛	口頸部横ナデ 斜位刷毛		砂粒を多く含む 暗褐色 良好	
〃6	〃	須恵	〃	— — 10.0		ロクロ横ナデ	ロクロ横ナデ		緻密 灰白色 良好	
第251図	8号カマド	土師	羽釜	34.0 — —		縦刷毛 横ナデ	ナデ 斜位刷毛		小石を含む 赤褐色 良好	
〃2	〃	〃	甕	34.6 — —	隆肥厚	〃	〃		暗褐色 良好	
〃3	〃	〃	〃	30.0 — —	肥厚	口頸部横ナデ 胴部斜位刷毛	横刷毛		金雲母・砂粒を含む 暗褐色 良好	
〃4	9 〃	〃	坏	— — 5.0		器体下半斜位篦削		糸切 ↓ 篦削	砂粒を含む 褐色 良好	
第271図	9号カマド	〃	甕	30.6 — —	肥厚	口頸部横刷毛 胴部縦刷毛	口頸部横ハケ 斜位刷毛		わずかに砂粒を含む 赤褐色 良好	
〃2	〃	〃	坏	17.0 5.0 6.0	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引	糸切 ↓ 篦削	緻密 褐色 良好	
〃3	〃	〃	皿	12.0 2.8 —	隆玉縁	〃	〃		緻密 茶褐色 良好	
〃4	9号カマド 一括	土師	坏	12.0 — —	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 褐色 良好	
第281図	10号カマド	〃	甕	30.0 — —	肥厚	口縁部横ナデ 胴部縦刷毛	横刷毛		砂粒を含む 赤褐色 良好	
〃2	〃	〃	坏	10.0 — —	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 褐色 良好	
〃3	〃	〃	〃	— — 5.0		口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃	糸切 ↓ 篦削	緻密 赤褐色 良好	
第301図	11号カマド	〃	鉢	41.0 — —	肥厚	篦磨き	横刷毛 ↓ 篦磨き		粗い 黒褐色 良好	
〃2	〃	〃	羽釜	— — —		横ナデ 縦刷毛	横刷毛		小石を含む 褐色 良好	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm)(口径/器高/底径)	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
第31図1	11号カマド	土師	甕	30.6 — —	肥厚	口頸部横ナデ 縦刷毛	横刷毛		砂粒を含む 褐色 良好	
〃2	〃	〃	坏	15.0 4.7 7.0	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転 篦削	ロクロ水引	回転糸切	緻密 褐色 良好	内黒
〃3	〃	〃	〃	12.0 4.3 5.0	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 赤褐色 良好	
〃4	〃	〃	〃	12.0 3.1 4.5	〃	〃	〃	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 白褐色 良好	
第32図1	2号埋石遺構覆土	須恵	壺	— — —		ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 灰色 良好	
〃2	〃	〃	甕	16.0 — —		〃	〃		緻密 白褐色 良好	
〃3	〃	土師	坏	13.0 2.8 4.2	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃		緻密 茶褐色 良好	
〃4	〃	〃	皿	11.0 2.3 4.6	〃	〃 器体下半横位回転 篦削	〃	糸切 ↓ 篦削	緻密 赤褐色 良好	
〃5	〃	〃	甕	20.0 — —		横ナデ	横ナデ		緻密 赤褐色 良好	
〃6	2号埋石遺構	灰釉陶器	甕	— — 13.0		灰緑色の釉			緻密 灰白色 良好	
第33図1	1号配石	土師	〃	— — 9.2		縦刷毛	斜位刷毛	木葉痕	砂粒を含む 暗褐色 良好	
〃2	1号配石一括	〃	坏	15.0 4.7 6.0	隆玉縁	ロクロ水引	ロクロ水引	篦削	緻密 赤褐色 良好	
〃3	〃	〃	高台付坏	— — 7.0		回転横ナデ	横ナデ		砂粒を含む 赤褐色 良好	
第35図1	2号配石	〃	坏	12 3.5 4.0	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転 篦削	ロクロ水引 底部回転ナデ	回転糸切	粗い 灰褐色 良好	
〃2	〃	〃	〃	14.0 4.5 5.0	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引	篦削	砂粒を含む 赤褐色 良好	
第38図1	7号配石	〃	〃	11.0 4.0 6.0	〃	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転 篦削	ロクロ水引 放射状暗文	糸切 ↓ 篦削	緻密 茶褐色 良好	
〃2	〃	〃	〃	11.0 4.5 6.0	〃	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引 花弁状暗文	糸切 ↓ 篦削	緻密 茶褐色 良好	
〃3	〃	〃	〃	11.0 4.8 5.0	〃	〃	花弁状暗文 放射状暗文	糸切 ↓ 篦削	緻密 褐色 良好	
〃4	〃	〃	〃	12 4.7 4.0	〃	〃	ロクロ水引	糸切 ↓ 篦削	緻密 灰褐色 良好	
〃5	〃	〃	〃	12.0 — —	〃	〃	ロクロ水引 放射状暗文		緻密 褐色 良好	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm)(口径/器高/底径)	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
第386図	7号配石	土師	坏	12.0 3.5 6.4	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 茶褐色 良好	
〃7	〃	〃	蓋	— — —		ナデ	ナデ		緻密 白褐色 良好	つまみ部に煤付着
第401図	1号列石	〃	甕	— — 8.0			横刷毛	木葉痕	砂粒を含む 褐色 良好	
第441図	4号列石	〃	〃	— — 8.0		縦刷毛	〃	〃	砂粒を含む 暗茶褐色 良好	
第451図	2・7号配石付近	〃	甕	38.0 — —	薄長	横ナデ 縦刷毛	横刷毛		砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃2	〃	〃	〃	32.0 — —	〃	横ナデ	横ナデ		〃 赤褐色 良好	
〃3	〃	〃	坏	14.0 4.3 6.3	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 白褐色 良好	内黒
〃4	〃	〃	〃	10.0 4.5 5.0	丸形	ロクロ水引 回転篦削	〃 放射状暗文	篦削	〃 褐色 良好	
〃5	〃	〃	〃	— — 6.0		器体下半斜位篦削	花弁状暗文	糸切 ↓ 篦削	緻密 赤褐色 良好	
〃6	〃	〃	〃	11.0 4.5 5.4	丸形	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引	糸切 ↓ 篦削	緻密 白褐色 良好	灯明皿
〃7	〃	〃	〃	12.0 — —	〃	〃	〃		緻密 白褐色 良好	
〃8	2・7号配石付近一括	〃	〃	12.0 — —	〃	〃	〃		緻密 白褐色 良好	
〃9	2・7号配石付近	〃	皿	11.0 2.2 5.0	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転篦削	〃		緻密 茶褐色 良好	
〃10	〃	〃	坏	9.0 3.0 5.0	丸形	篦削		糸切 ↓ 篦削	砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃11	〃	〃	〃	9.0 2.5 4.0	〃	〃	回転ナデ	糸切 ↓ 篦削	砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃12	〃	〃	紡錘車							
〃13	〃	〃	皿	12.0 2.5 4.4	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転篦削	ロクロ水引 回転篦削	糸切 ↓ 篦削	緻密 赤褐色 良好	
〃14	〃	須恵	蓋	— — 14.0		ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 白灰色 良好	
〃15	〃	土師	手捏	3.2 3.8 3.2		篦削			砂粒を含む 赤褐色 良好	
〃16	〃	〃	甕	— — 10.0		縦刷毛 篦削	篦削	木葉痕	砂粒を含む 赤褐色 良好	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm) 口径/器高/底径	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
第4517図	2、7号配石付近	土師	甕	24.0 — —	薄長	口縁部横ナデ 縦刷毛	横刷毛 ナデ		砂粒を含む 赤褐色 良好	
第461図	4 C グリッド	〃	〃	30.0 — —	肥厚	口縁部ナデ 縦刷毛 篦押え	口縁部ナデ 斜位刷毛		砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃2	〃	〃	〃	20.0 — —	〃	口縁部ナデ 縦刷毛	〃		粗い 暗褐色 良好	
〃3	〃	〃	坏	12.8 — —	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半横位回転篦削	ロクロ水引		緻密 褐色 良好	
〃4	〃	〃	〃	12.0 2.2 2.4	隆玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	〃		緻密 褐色 良好	
〃5	〃	〃	〃	11.0 4.8 5.0	玉縁	〃	ロクロ水引 放射状暗文		砂粒を含む 褐色 良好	
〃6	〃	〃	〃	12.0 4.0 5.3	尖形	ロクロ水引	ロクロ水引	糸切 ↓ 篦削	緻密 白褐色 良好	
〃7	4 Cグリッド 2 層		〃	— — 5.0		ロクロ水引 斜位篦削	ロクロ水引 回転ナデ	〃	緻密 暗褐色 良好	
〃8	〃	〃	〃	— — 56		横位回転篦削	〃	糸切 ↓ 篦削	緻密 白褐色 良好	
〃9	4 Cグリッド 一括	灰釉陶器	〃	— — 6.0		茶緑色釉			緻密 灰色 良好	
〃10	4 C グリッド	須恵	甕	42.0 — —	折り返し	ロクロ水引 口縁部に2条の波状文あり	ロクロ水引		砂粒を含む 暗灰色 良好	
〃11	4 C グリッド ド 2 層	灰釉陶器	〃	— — 9.0		淡緑色釉	淡緑色釉		緻密 灰白色 良好	
〃12	4 C グリッド 1 層	灰釉陶器	長頸壺	— —		淡緑色釉	淡緑色釉		緻密 灰白色 良好	
〃13	5 B グリッド	土師	坏	12.0 — —	尖形	ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 茶褐色 良好	
〃14	6 A グリッド	須恵		— — 8.0		回転ナデ	回転ナデ		緻密 灰色 良好	
〃15	1号列石南	瓦質	鉢	24.0 — —		胴部に沈線あり			粉っぽい 白褐色 良好	
第471図	1号 列石付近	〃	すり鉢	40.0 — 20.0					砂粒を含む 黄褐色 良好	
〃2	〃	〃	羽釜	— — —					砂粒を含む 白褐色 良好	
〃3	〃	〃	〃	26.0 — —		横ナデ			粉っぽい 白褐色 良好	
〃4	6 A グリッド	〃	〃	29.0 —		回転ナデ	回転ナデ		粉っぽい 灰褐色 良好	

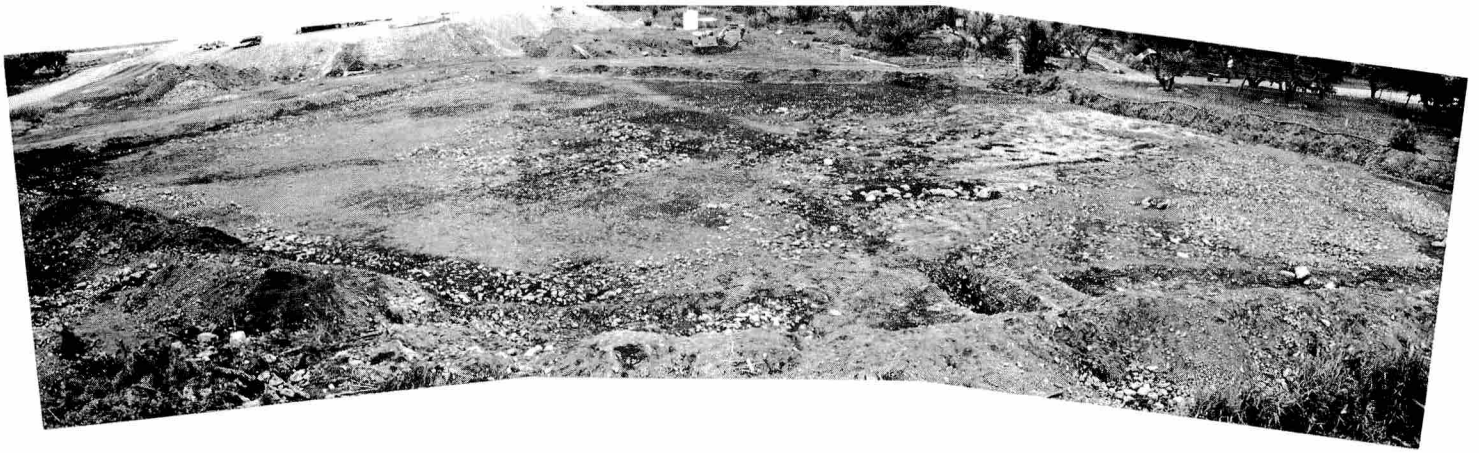
挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm)(口径/器高/底径)	調整 口縁	調整 外面	調整 内面	調整 底	胎土 色調 焼成	備考
第475図	6B グリッド	土師	甕	28.0 — —	肥厚	横ナデ 縦刷毛	横ナデ 横刷毛		砂粒を含む 暗褐色 良好	
第481図	9号埋石堀状遺構	須恵	甕	— — —		ロクロ水引 平手叩き	ロクロ水引 円弧叩き		緻密 暗灰色 良好	
〃2	〃	土師	〃	18.0 — —	薄長	横ナデ	横ナデ		砂粒を含む 赤褐色 良好	
〃3	〃	〃	坏	13.0 05.0 8.0	丸形	ロクロ水引	ロクロ水引 花弁状暗文		緻密 褐色 良好	

第5章　まとめ

石橋条里制遺構第Ⅱ地点には、東西約90m、南北約180mの埋石堀状遺構に囲まれた範囲に住居址7基をはじめ、数基の配石遺構や特殊な埋石遺構などがある。遺物は国分期終末の土師器とこれに時期的に続く土師質土器が若干あり、本県では未だ編年が試みられていない瓦質土器もある。また土師器と瓦質土器の中間的な質を有する土器や須恵器と瓦質土器の中間的な質を有するものもある。これらは土師器の編年では11世紀前半にあたるが、今後瓦質土器の編年がなされ、解決されるべき問題も内包している。

この遺跡は埋石堀状遺構で囲まれたまとまりのある特殊な小地域社会的な生活空間であったように考えられる。

図　　版



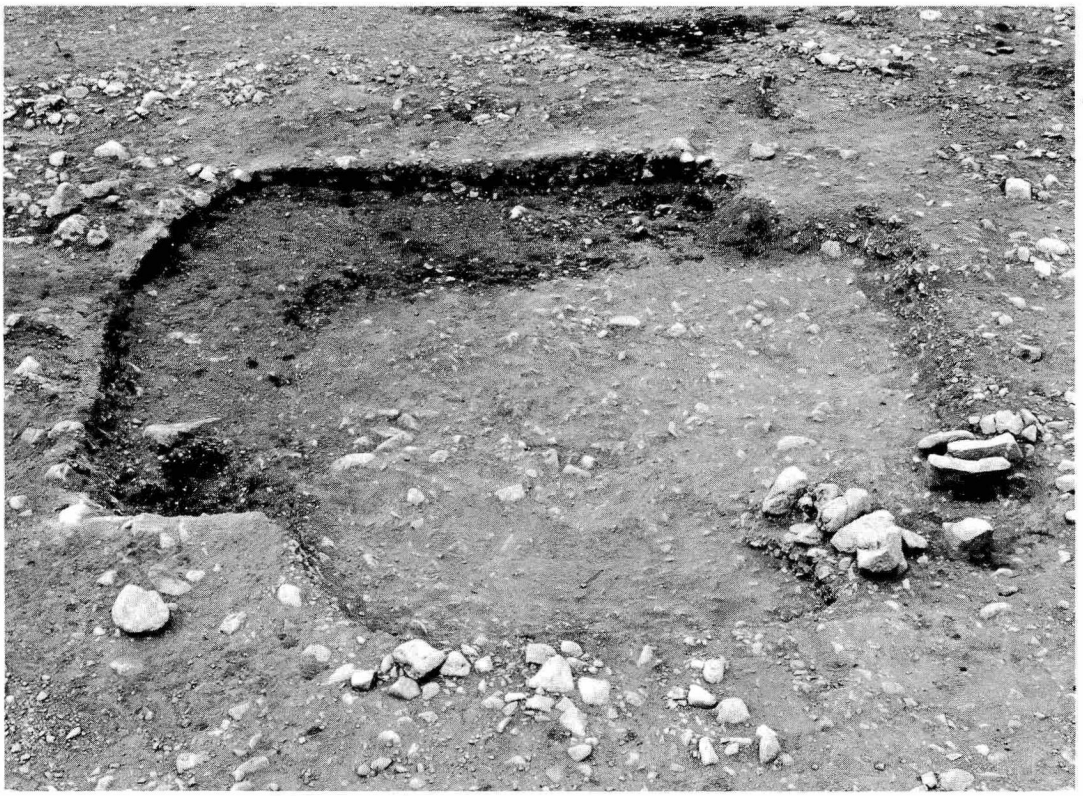
石橋条里制遺構第Ⅱ地点全景

8号堀状埋石遺構

9号堀状埋石遺構

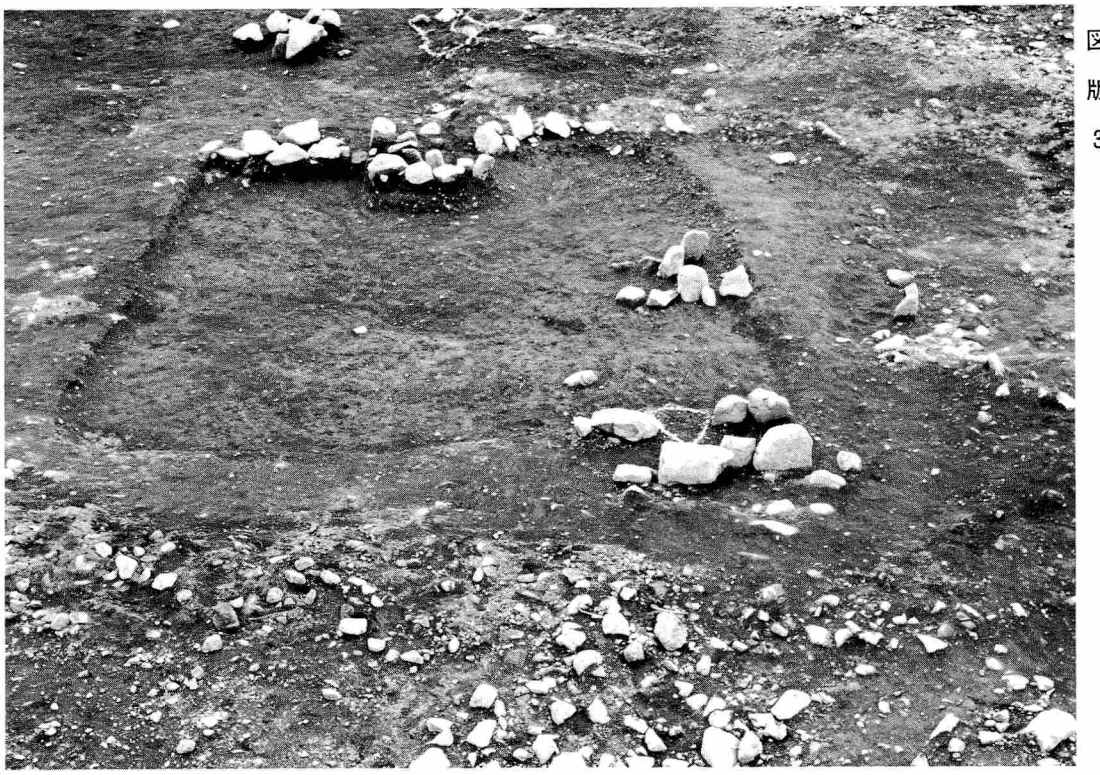
11号堀状埋石遺構

図版2



1号、4号住居址

2 号 住 居 址



3号、6号住居址

5号住居址

2号埋石遺構

2号埋石遺構断面

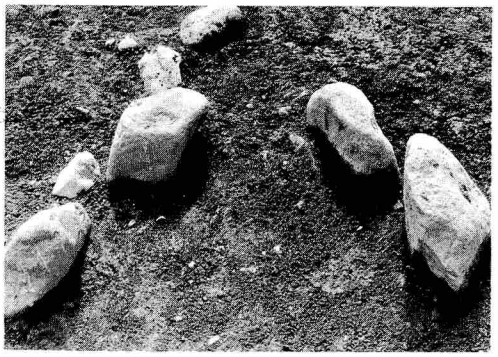
7 号 住 居 址

2 号 列 石

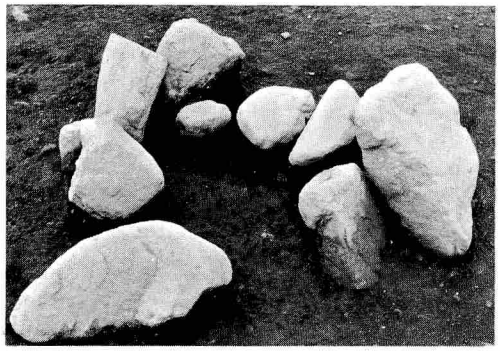
3 号 列 石

4 号 列 石

2号住　かまど



3号住　かまど



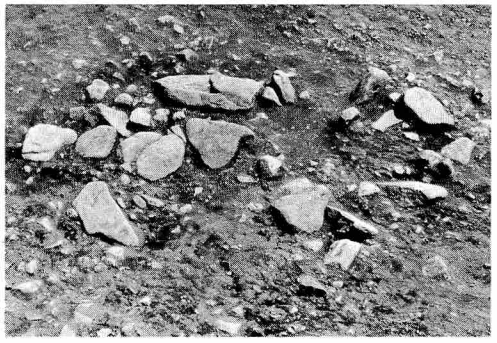
5号住内　8号かまど

3号住内　9号かまど

3号住内　11号かまど

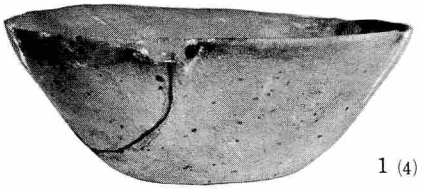
2　号　配　石

5　号　配　石

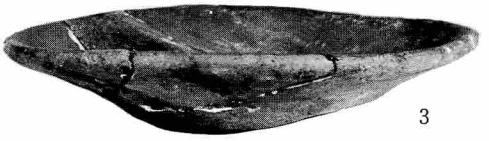


7　号　配　石

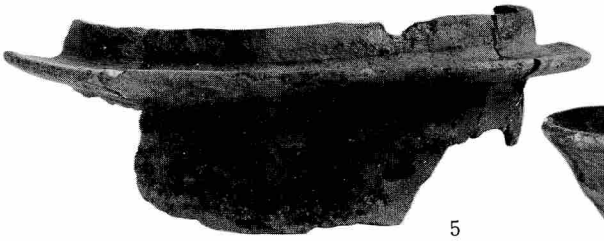
図版7　住居址内出土遺物

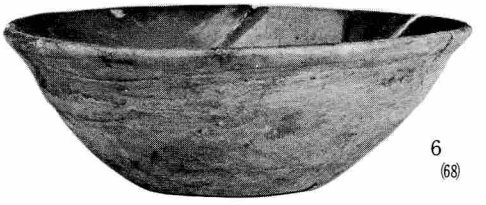

1 (4)

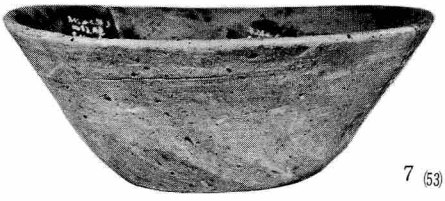
2 (3)

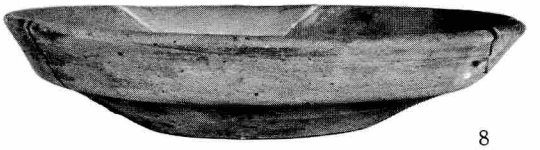

3

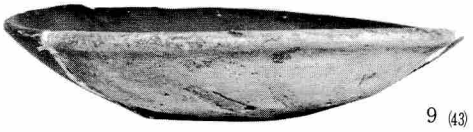
4 (4)

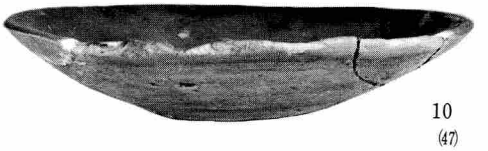

5


6 (68)


7 (53)


8 (49)

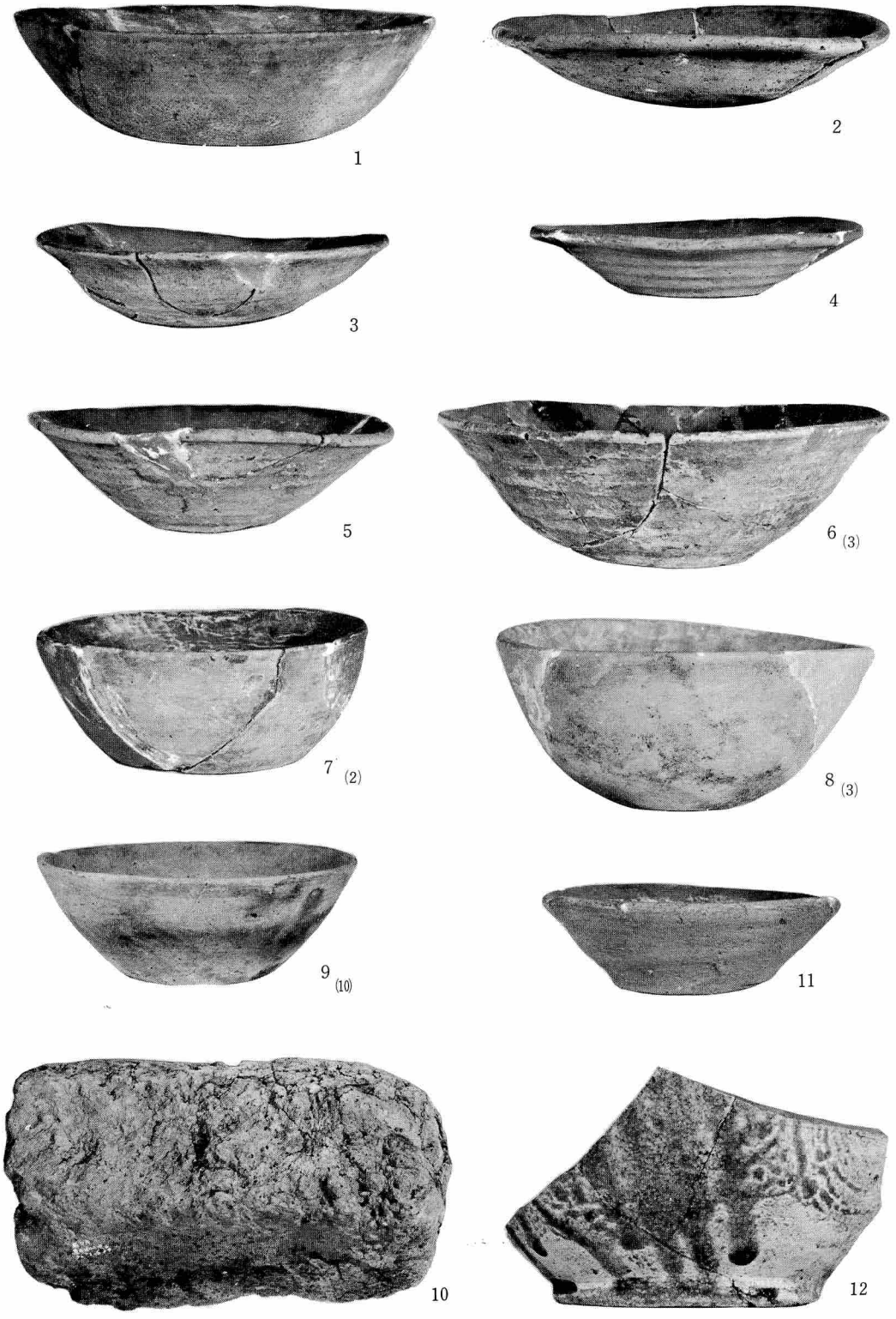

9 (43)


10 (47)

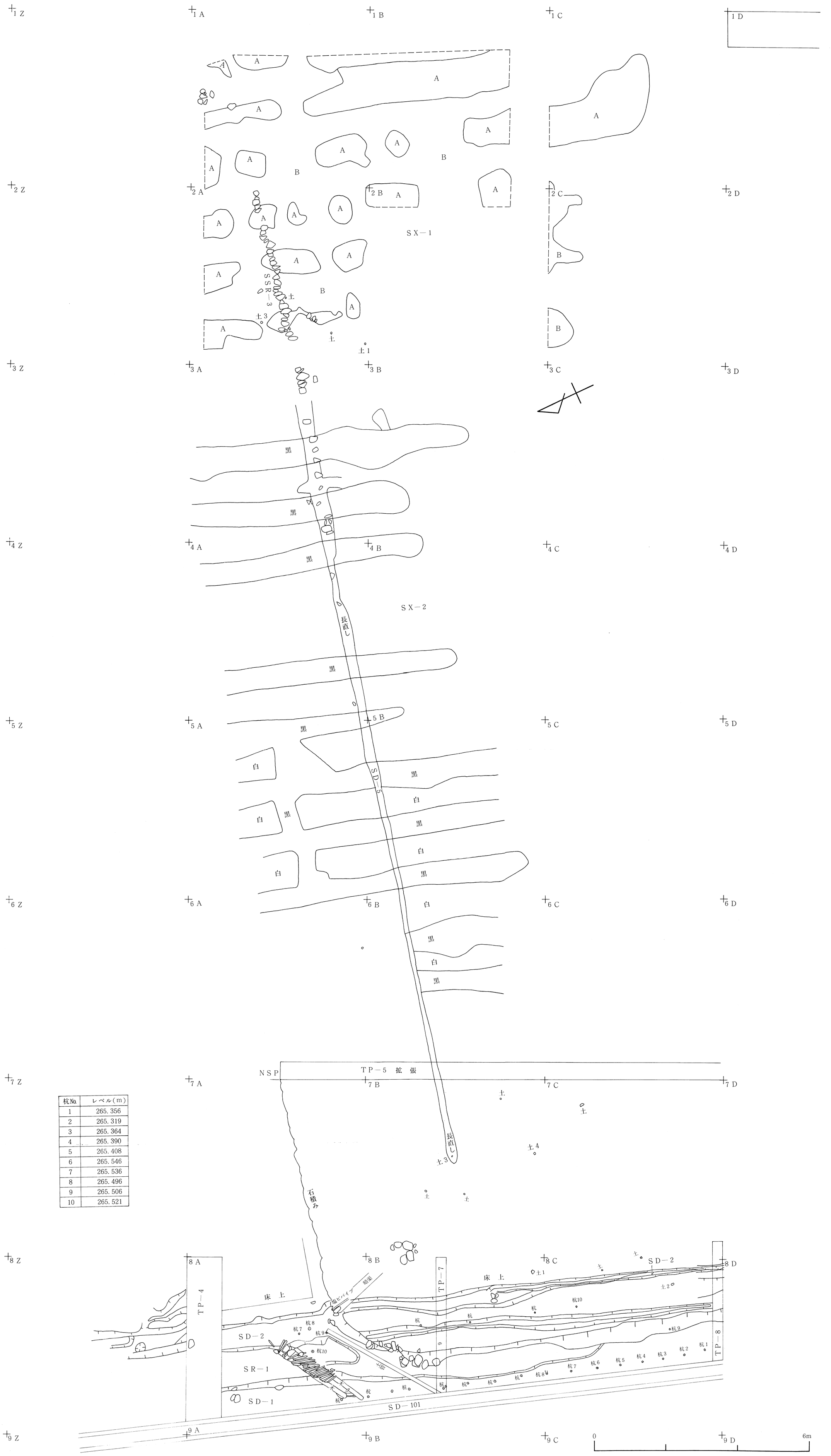
11 (42)

12 (16)

1号（1～2）・2号（3～5）・3号（6～7）・5号（8～12）

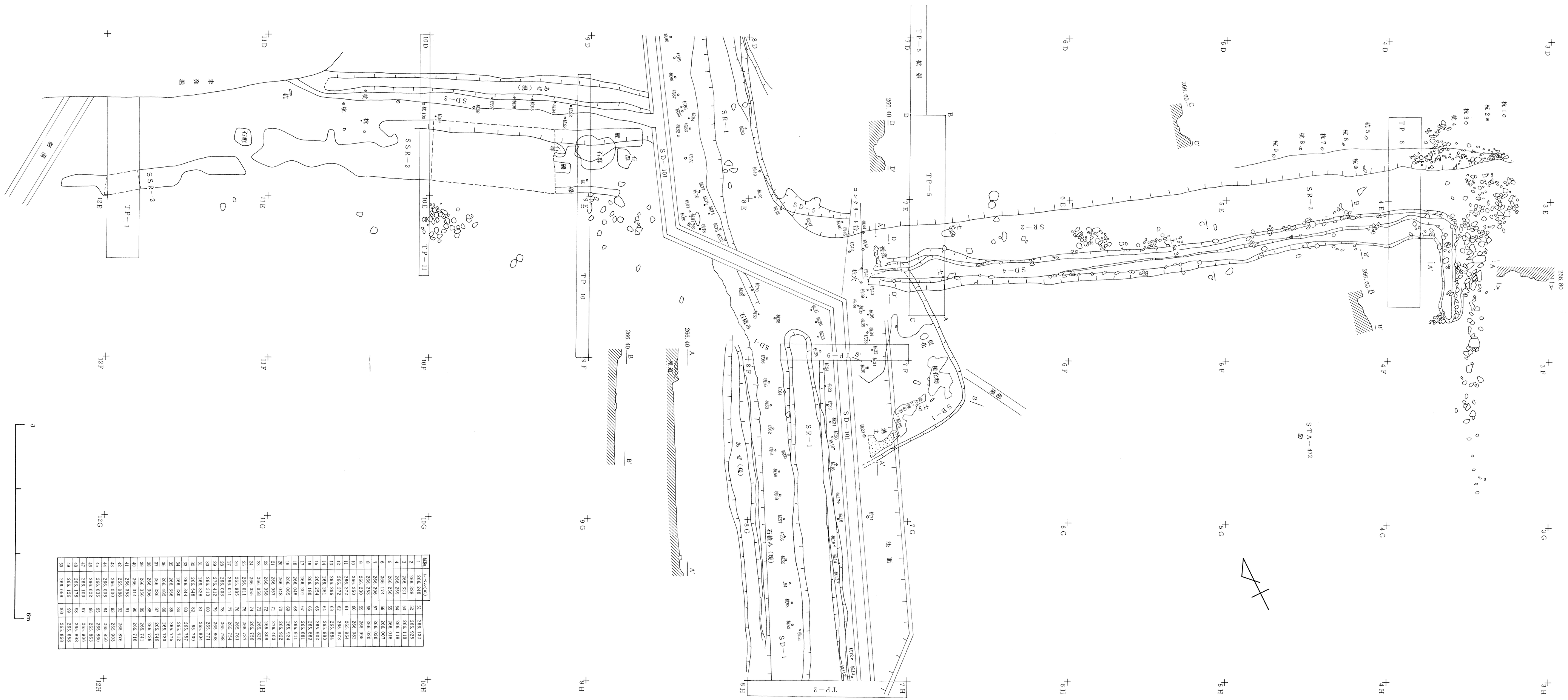


7号住居址（1）・9号カマド（2）・11号カマド（3）・2号埋石（4・10）・2号配石（5）・7号配石（6～9）・3Bグリッド（11）・4Cグリッド（12）



杭No.	レベル(m)
1	265.356
2	265.319
3	265.364
4	265.390
5	265.408
6	265.546
7	265.536
8	265.496
9	265.506
10	265.521

第1図　石橋条里制遺構第3地点遺構実測図



No.	X=−60,000	Y=−60,000	No.	X=−60,000	Y=−60,000
1	266.248	265.132	51	266.132	265.935
2	266.328	265.935	52	265.935	266.118
3	266.321	265.935	53	266.118	266.118
4	266.255	265.935	54	266.118	266.118
5	266.248	265.935	55	266.118	266.118
6	266.174	266.007	56	266.007	266.030
7	266.296	266.030	57	266.030	266.030
8	266.230	266.030	58	266.030	266.030
9	266.230	266.030	59	266.030	266.030
10	266.230	266.030	60	266.083	266.083
11	266.272	266.083	61	266.984	266.973
12	266.272	266.973	62	266.973	266.973
13	266.255	266.984	63	266.984	266.984
14	266.255	266.984	64	266.984	266.984
15	266.234	266.902	65	266.902	266.902
16	266.189	266.902	66	266.902	266.902
17	266.203	266.881	67	266.881	266.881
18	266.065	266.874	68	266.874	266.874
19	266.065	266.874	69	266.874	266.874
20	266.048	266.927	70	266.927	266.927
21	266.037	266.403	71	276.403	266.403
22	266.037	266.403	72	266.403	266.403
23	266.058	266.809	73	266.809	266.809
24	266.055	266.756	74	266.756	266.756
25	266.011	266.337	75	266.337	266.337
26	265.985	266.741	76	266.741	266.741
27	266.101	266.741	77	266.741	266.741
28	266.003	266.798	78	266.798	266.798
29	276.412	266.808	79	266.808	266.808
30	266.313	266.771	80	266.771	266.771
31	266.328	266.804	81	266.804	266.804
32	266.348	266.757	82	266.757	266.757
33	266.344	266.757	83	266.757	266.757
34	266.289	266.712	84	266.712	266.712
35	266.356	266.775	85	266.775	266.775
36	266.485	266.740	86	266.740	266.740
37	266.485	266.740	87	266.740	266.740
38	266.396	266.730	88	266.730	266.730
39	266.356	266.741	89	266.741	266.741
40	266.314	266.718	90	266.718	266.718
41	266.983	266.876	91	266.876	266.876
42	266.000	266.903	92	266.903	266.903
43	266.000	266.903	93	266.903	266.903
44	266.006	266.859	94	266.859	266.859
45	266.036	266.869	95	266.869	266.869
46	266.100	266.906	96	266.906	266.906
47	266.100	266.906	97	266.906	266.906
48	266.178	266.898	98	266.898	266.898
49	266.196	266.898	99	266.898	266.898
50	266.059	266.898	100	266.898	266.898

第２図　石橋条里制遺構第３地点遺構実測図

3．石橋条里制遺構第Ⅲ地点

第1章　遺跡の位置と環境

第1節　位　　置

石橋条里制遺構第Ⅲ地点の所在地は、東八代郡境川村石橋字尺田1012番地と久保田950番地にあって、中央道中心杭S・T・A　№472にある。東経138度37分09秒、北緯35度35分52秒の位置である。

相対的な位置は、甲府盆地東部にある。境川扇状地扇端にあって、狐川が北150ｍに西流している。ここから南400ｍに石橋条里制遺構第Ⅱ地点がある。

西550ｍに条里制遺構名に起源があるといわれる境川村大坪部落があり、南300ｍに石橋部落がある。

なお詳しくは序章及び石橋条里制遺構第Ⅰ地点第1章第1節位置を参照されたい。

第2節　環　　境

イ、自　然　環　境

第Ⅲ地点は甲府盆地東部にあるが、東部については、石橋条里制遺構第Ⅰ地点第1章第2節イ自然環境の項に記した通りである。

発掘地点付近の微地形は次の通りである。発掘地点は境川扇状地の扇端にあって、扇頂に向って中央より左に位置する。勾配は1,000分の22.5（傾斜角1.3度）で、土地は北西に傾斜していて、標高は267ｍである。

条里制遺構の調査報告であるので、特に水利について解説を加えておくこととする。

傾斜方向を言いかえると、直角方向の道路（条線＝東西線）を、等高線は扇頂に対して、右側が上るように斜めに横切るわけである（序章第1図参照）。斜めに横切る角度は約15度である。水流は必然的に左扇端に向って流れることになり、堰（潅漑用水路）の水利大系もこの方向になっている。

また湧泉は至る所にあり、地下水も高い。地域の人達は序章第2図に示した、中央道路線下にある溜池と、その南側一帯は、旱魃で湧水が涸渇することはないという。

第Ⅲ地点の北には狐川が150ｍの所を、さらに北200ｍの所を浅川が流れ、北西300ｍで合流している。現地形では、発掘地点は境川、狐川、浅川各扇状地の逢合線に近い場所にある。地表面では境川の供給物であろうが、深い層では、狐川や浅川の供給物であろうとも言える。

ロ、歴　史　的　環　境

大宝元年（702）大宝律令を施行し、律令を諸国に頒布、度量衡を定め籍帳を整備して、班田収授法は確立されたと一般的に考えられている。

条里制遺構とは班田収授法によって、水田（口分田）を、一町四方に区画整理し、一筆毎

に面積を定めた遺構をいうことは周知の通りであるが、本県の場合、畿内と同じような方法で行なわれたかどうか、またその時期についても、今まで明らかにされたものはなかったといってよい。

長野県更埴市で行なわれた調査で明らかにされたように、9世紀から11世紀に整備された条里制遺構が、鎌倉時代以後に施かれた条里制的遺構の下に埋没していた例もある。（『更埴市条里遺構の研究』長野県教育委員会・昭43）

このような例もあって、甲府盆地でも、条里制遺構の分布を、確実に線引きすることは現状ではまず不可能といってよい。

しかし、今まで先学諸氏が研究されてきた成果を土台として、峡東地方（甲府盆地東部）における市町村の地図10,000分の1等や航空写真によって、おおよその分布を調べてみた。

これを、南西の方向から、個所数と面積だけ順次掲げると次のようである。

中道町2、境川村1、境川村・八代町にまたがって1、御坂町1、一宮町4、山梨市2、の合計11ケ所である。この総面積は約10,799.800㎡（10,909反）である。

甲斐国の国府所在地は、二転し3ケ所にあったことが通説になっている。すなわち、第1は甲府盆地北東の春日居町国府、第2は盆地東部の一宮町国分付近、第3は同じく東部の御坂町国衙といわれている。ここに見られる条坊線の南北線は、真北から2°西に偏向しているという。（『史蹟名勝天然記念物調査報告』第8輯、山梨県、昭10）

条里線が敷かれていない地域には、前述した国府推定地と、条里制施行時に既に集落があったと考えられる地域とがある。例を上げて少し詳しく説明して、甲府盆地における条里制遺構が成立した過程を理解するための資料として提供しておきたい。

まず、第二移転地といわれる一宮町国分付近である。ここは金川と御手洗川に挟まれた扇状地である。国分寺があった国分集落、国分尼寺があった東原集落、国学址があったといわれる鷺堂集落など遺構が残っているものを含む多くの遺跡がある。これらを中心として北東約2,000m、北東約3,500mにわたって、条里制遺構がほとんど見られないのである。時期的に考えても、ここにはこれらの遺構と集落があったので、条里制が敷けなかったのではないかと考えられるのである。

平安時代の土師器の分布圏は著しく大きく、しかも濃密になってくる。昭和56年までには、この地域で平安時代遺跡の発掘が数ケ所行なわれていて、多くの成果を上げ、これらの事を裏づけている。

次に、既に集落があったため、条里制が施行されなかった地域の例として、八代町増田集落をあげてみよう。

増田集落は、境川村と八代町に続いている条里制遺構の中にある。この集落の中を通る道は不規則になっていて、周囲にある条里制の道に続いている。集落の中には弥生時代終末の遺物出土地や散布地が4～5ケ所あり、古墳時代のものとしては八幡さん古墳がある（『八代町誌』、八代町、昭50）。奈良・平安時代の遺跡、遺物散布地はまだ発見されていないが、

後の集落の歴史を考えると、奈良・平安時代にも引続いて集落があったものと思われる。また集落がある地帯は自然堤防状に周囲より、比高２～３ｍ位高くなっているので、集落が引続いてあったことは確かであろう。

集落の中の道が不規則になっているのは、条里制の道が敷けなかったため、既に使用されていた道が、そのまま残ったためかもしれない。

増田集落の南側に広がる条里制遺構の中を、東から西に向って、浅川とその支流である狐川が流れている。この両岸地域では、条里制の道が乱れている。その河道変遷史（前掲『八代町誌』）をみると、現在の河床は、条里制施行以後に移ったと考えられるので、その氾濫の影響によるものと考えられる。

このように、八代町と境川村に広がる条里制遺構は、現状では、地図や航空写真でみると、断絶しているように見えるが、開発当時は、連なっていたものと思われる。

最後に第Ⅲ地点にしぼって、その歴史的環境を見てみよう。

石橋条里制遺構で、道路の交差点（四ツ角）の多くは、互にずれていて、筋違いになっている。その理由として、道路に沿って、流れる用水堰（潅漑用水路）の水を、交差点で分流する際、その配分をスムーズにするためであろうか。扇状地では、その地形によって、水は放射状に流れることになるのであるが、水源が偏っていれば、水流の方向を変えて、水源のない地域へ水を流さなければならないからである。そのためには、用水堰の交点をずらし（筋違いとして）堰の壁にぶっつけて水勢を変え、水源のない地域へ水を送りやすくする。またこうすれば、交点では、三方向に流れる水は比較的平等に配分しやすいわけである。

また、境川扇状地の水田は水口（入水口）は扇頂方向に開き、尻水口（出水口）は扇端方向につけている。

発掘計画は、道路の交差点をそのポイントとして、道路、水路のあり方、水田の配置を把握しようとした。

水田の明治以後の合筆（長直し）の歴史についてみると、例えば交差点の南東（字尺田）では、明治26年の分間図作製以前に、３筆に分かれている（１筆平均183坪）。交差点の南東（字道光）の１坪（条×里）では、合筆が、明治26年以後今日までに、数か所みられる。この内で最も小さい水田は、その面積が3,4坪である。このように合筆は、恐らく水田が開かれた当時からなされ、順次合併されながら、小面積の水田から大面積の水田へと変ってきたものと考えられる。従って、開田当時の１枚の水田面積は、現在の水田より小さかったことは確かである。

これを分間図によってみると、次のことが観察される。水田の横の区画線（畦畔）は、縦の区画線が屈曲している点から出ているので、横線が出ていない屈曲点から横線を引くと、長直しされて広げられた水田を図上復元出来る。また、扇状地の傾斜に対して、水田は直角方向に長くなっている通りが２～３通りおきにあり、その間に狭い通りがあることである。

これによって、開発当時における１筆ごとの水田の広さがある程度推定出来る。

第2章　調査の経過

石橋条里制遺構第Ⅲ地点の発掘は昭和56年3月11日に開始し、同年5月13日に終了した。日曜日と祭日を休み、延2か月間にわたって行なった。

発掘予定面積は2,300㎡であったが、このうち遺構を検出した範囲は約1,600㎡であった。発掘しなかったグリッド9・10・11・12～Z・A・B・Cの400㎡は発掘区内の道路交差点北西にある深い湿地帯で、湧泉があったため、発掘できなかったものである。

グリッドは条里の方向に合わせて、5m正方形の方眼とし、東から1・2・3～12まで、北からZ（拡張部）・A・B～Hまでとした。中央道の中心杭（STA・472前後）は基準にはしなかった。

条里制遺構と考えられている現在の道路を、その施行された当時から引続いて現在まで使用されているものと想定して、順次全面を掘り下げた。また道路に接する耕作地は、過去の水田の状況を調査するために、やはり全面を徐々に掘りさげた。なお耕作地は、道路交差点の南東の区域は畑であったが、昭和20年代までは水田であり、北東と南西および北西の区域は現在まで水田であった。

道路と耕作地に、その推移を断面で知るために、トレンチを掘った。

東西の2号道路には、交差点の西に、西から、1号トレンチ、10号トレンチの2か所を、その東に、西から、5号トレンチ、6号トレンチ、3号トレンチを、南北の1号道路には、交差点の南に、南から2号トレンチ、9号トレンチを、その北には、南から8号トレンチ、7号トレンチ、4号トレンチを設定した。

耕作地には5号トレンチを北に延長した。この南は現在の耕作土を除去したところ、自然堆積層になったので延長しなかった。

主要な遺構と遺物の検出を日を追ってみてみると次のようである。

まず道は、各トレンチに表われた地層のうち、同層序と見られるものを上から掘り進みながらつなげようと試みた。1号道の4号トレンチ各最下層の路面はほぼ同一時期のものと判定出来た。しかしその上層から現在に至るまでの層位では、4号トレンチを除いて、ほとんど、明確な路面はなく層序も不一致であった。この間の層は堅く踏み固められていたので、道路敷設時から引続いて、現在まで交通があったものと推定出来る。したがって平面上から道路を追っても、路面・路側は時代順に確定出来るものではなかった。図面上に線で表わした路側は、やゝそれらしく平面上と断面に表われたものである。これによると古くなる程道は狭くなっている。遺物は昭和・大正・明治・江戸時代・中世の陶磁器等や下層ではわずかであるが、国分式土師器も出土した。

つぎに道路に沿って掘られた潅漑用水路は道路の発掘と併行して進めた。結局、道路の場

合と同じように、昭和40年代に造られたコンクリート側溝と４号溝以外の水路の、その掘られた年代を明らかにすることは困難であった。４号溝は４月９日頃、現在は水路のない２号道路の南に沿って検出された。これは４月15日に出土した銭貨（熙寧元寶）により、また１号住居址との切合関係から、鎌倉時代か平安時代後期にその掘られた時期が遡るものと考えられる。

１号住居址は４月24日に、道の交差点で発見された。後代につくられた水路や道路で著しく破壊されていたが、明らかに竪穴式住居址であった。水田と重複している部分が比較的よく残されていて、その掘込面は最下層の水田床土と道路面より下にあった。遺物は11世紀後半から12世紀前半に比定出来る土師器破片が１片出土しただけであるが、これによって、この場所での条里制道路施行の時期を決定出来た。この石橋条里制遺構の条里型地割は水田開発が行なわれるに従って出来たとも考えられ、１号住居址は道の延長上に偶然にもあったために、立ち退きをされたものと推定出来る。

その他に、５月に入ってから、A～１・２・３グリッドで中世頃のものと思われる性格不明の列石を１条検出した。これに重複して、A・B・C～１・２・３・４・５・６グリッドで、降雨の後に島状と筋状に乾くのが遅い部分があることがわかったが、その性格、時期も明らかに出来なかった。

第３章　層　　序

層序については第１節と第２節とに分けて説明する。

第１節は境川扇状地における地層の堆積状況と土地の含水比とをリモートセンシングによって調査した結果である。これは日本道路公団が東日本航空株式会社に委託して調査されたものである。内容に若干推定の域を出ない所もあるが、そのまま掲載した。

なお、この調査箇所は、当該発掘調査箇所より南西約200ｍ（中央道中心杭№470）から400ｍ（同№468）付近までの間のもので、現状では条里制の道路はなく、乱れている場所のものである。

第２節は発掘箇所の層序であって、条里制遺構が中央道敷地内では最もよく現われている場所であった。遺構包含層は扇状地特有な不整合な地層である上に、道が敷設された当時から現在まで引続いて交通に供されてきたので、層序的に分けること自体に無理があるが、遺構に包含された遺物は少量であったが、平安時代中期の国分期の土師器から中世・近世を経て現在までの陶磁器類が下層から上層まで出土した。

条里制遺構の場合は特に、遺構と層序とは切離すことが出来ないので、第４章で道・潅漑用水路（堰）・水田・住居址・列石などの遺構と、土器・陶磁器・杭などの遺物とともに説明する。

第1節　リモート・センシングによる石橋条里制遺構に関する報告書

当該発掘箇所より200m～400mの間で行った調査報告である。石橋条里制遺構には直接的な資料ではないが、参考として載せておく。（第22図～第26図）

第2節　調査地区の層序

トレンチを道路に対して直角に11本入れその層序によって使用の変遷を明らかにしようと試みた。また5号トレンチは水田の中に延長し、その構築状況や長直し等が行なわれたかどうかをつかもうとした。

道路に設定したトレンチで判明した概略は次の通りである。

遺構の包含層では、すべてのトレンチに共通する基準地層はないが、道の交差点で東西南北に別れた四方の道（4本）には、それぞれⅠ層、又はⅡ層の類似した地層があった。このような状況であったので、地層番号は共通番号とせず、各トレンチ毎に付した。

遺構包含層より下層はすべて氾濫層で、主に砂礫層となっていた。その状態は深く掘った1号と2号トレンチ地層図に示した通りである。

以下詳細については第4章遺構と遺物の項で併せて説明することとする。

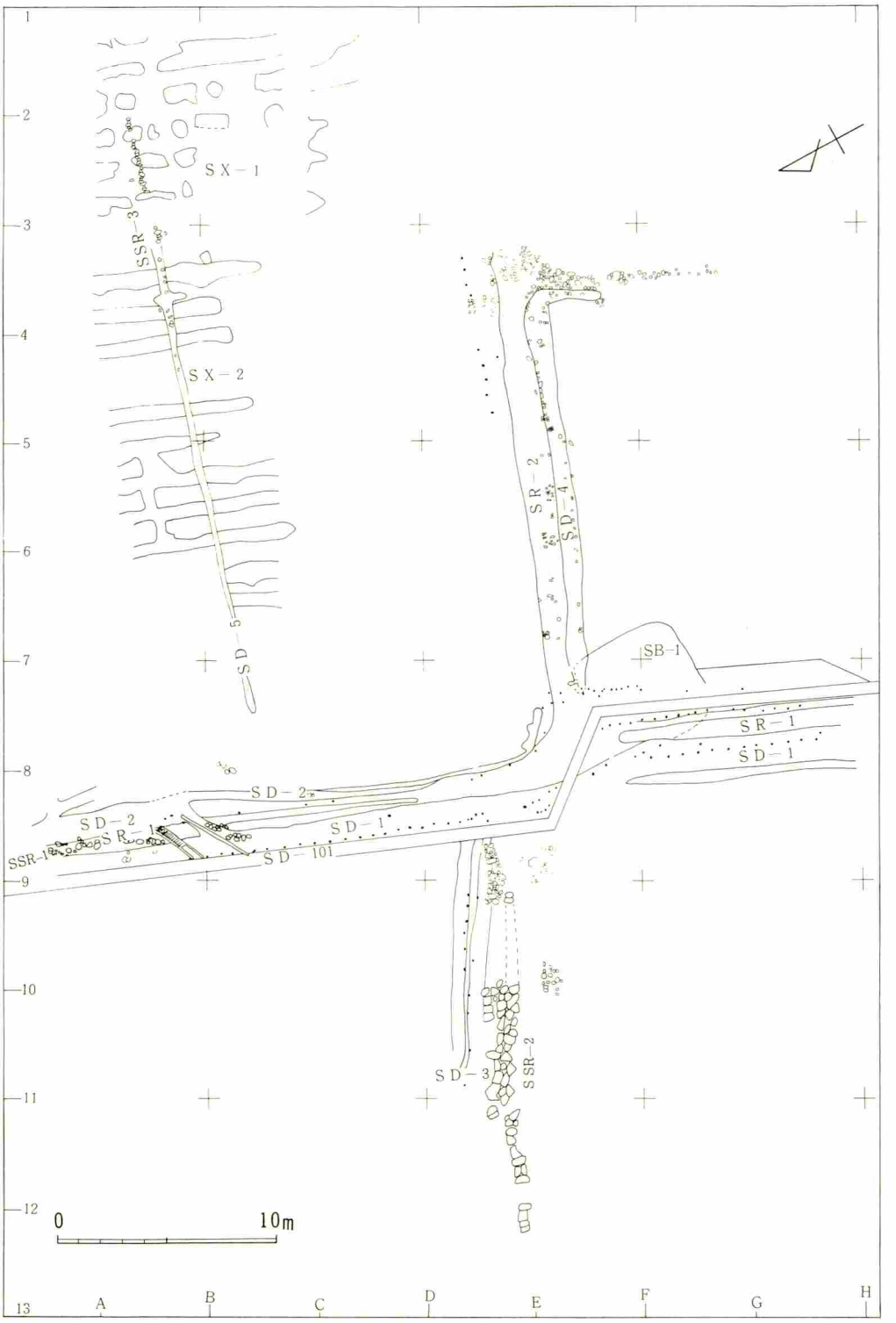
第4章　遺構と遺物

先ず、発掘する前、及び明治26年12月に作製された分間図に現われた道、潅漑用水路・耕地等について説明しておこう（第3図全体測量図・第4図分間図参照。）

石橋条里制遺構第Ⅲ地点の道は北―13.4°―西で、本県で条里制遺構の道といわれているもの北―10°―西（『史蹟名勝天然記念物調査報告』第8輯、昭和10年山梨県、広瀬無声）と方位はやゝ違っている。道の交差点において、南北の道、東西の道はそれぞれ筋違いとなっていることも、本県でよくみられるものと同じである。分間図でも、この状態は同じである。

道に添って敷設されたこの付近の潅漑用水路の水系は南を上流としている。所々で分流させて水田に引込んでいるが、発掘前の地目は小字蕨田1172番地の水田を除いては、桑園であり、さらにこの周囲も畑となっていたので、潅漑用水はあまり必要でなくなっていた。分間図では条里制遺構のある地域内はほとんどすべてが水田である。この時点から潅漑用水路はほとんど変更されていない。分間図では水路の多くは道に沿ってあり、分水路を設けていない。1筆毎の水田に潅漑するには順次上方の水田から水を落したものであり（オサビキ）、この方法は現在でも行なわれており、伝統的方法であろう。

耕地は明治26年（1893）から昭和56年（1981）の88年間に小字尺田1,073と1,083が、小字道光1,129と1,132と1,131とが合筆されている。水田を合わせて大きくするために長直しをしたものである。

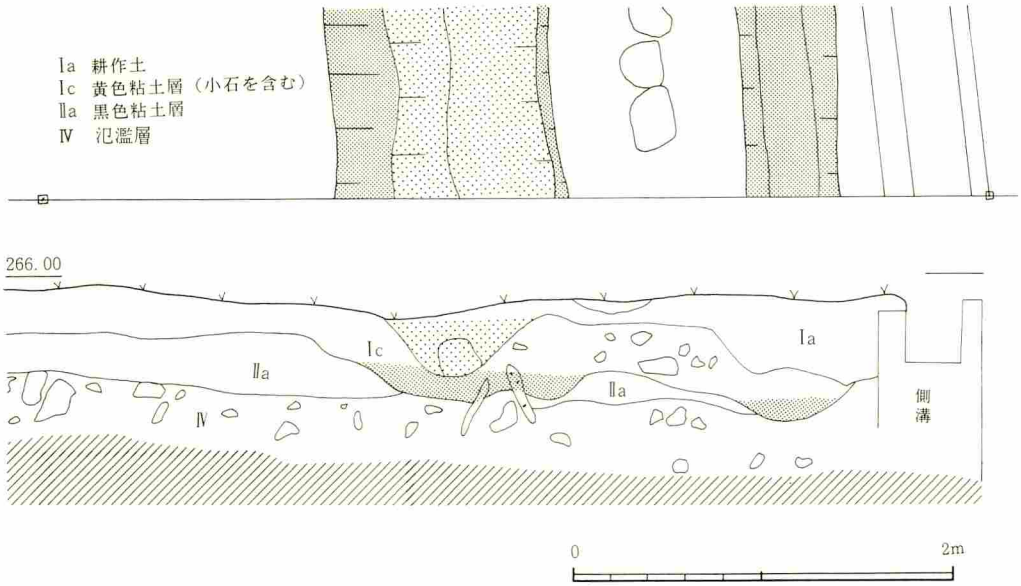


第３図　石橋条里遺構第Ⅲ地点遺構全体図（1：300）

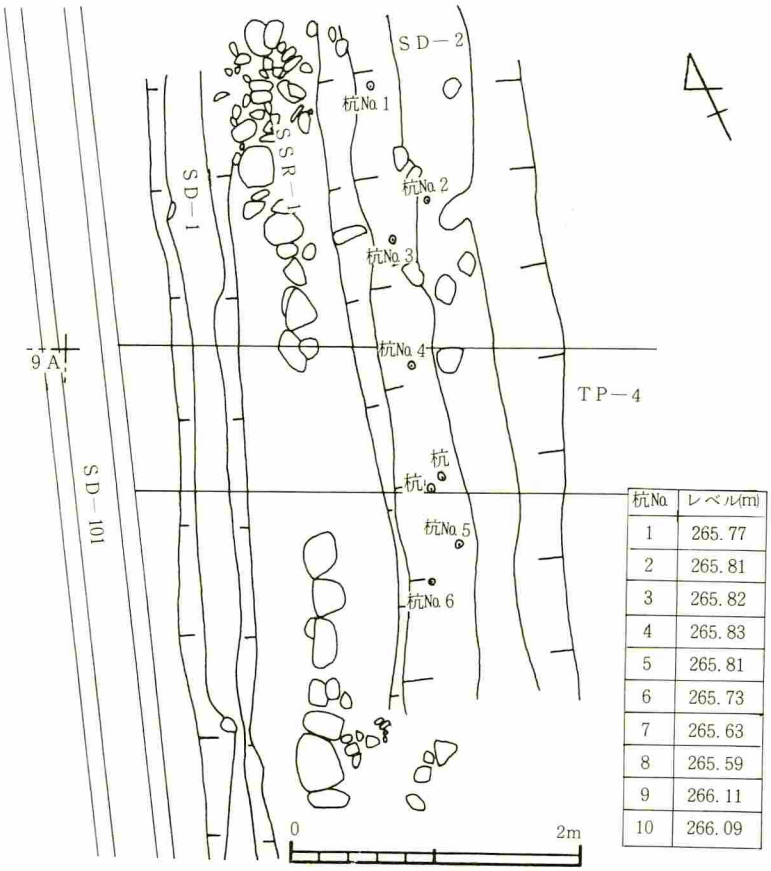
第4図　分　間　図（古水田復元）

道と潅漑用水路・杭列

1号道（南北）、北から4・7・8・9・2の5本のトレンチを道に直交して設定し、平面とセクションを合せながら道を使用した経過をみた。しかし前述したように、路面や路側等を明確に判別し難く、各トレンチを連続することはかなり困難であった。



第5図　4号トレンチ平面図及び地層図（1：40）

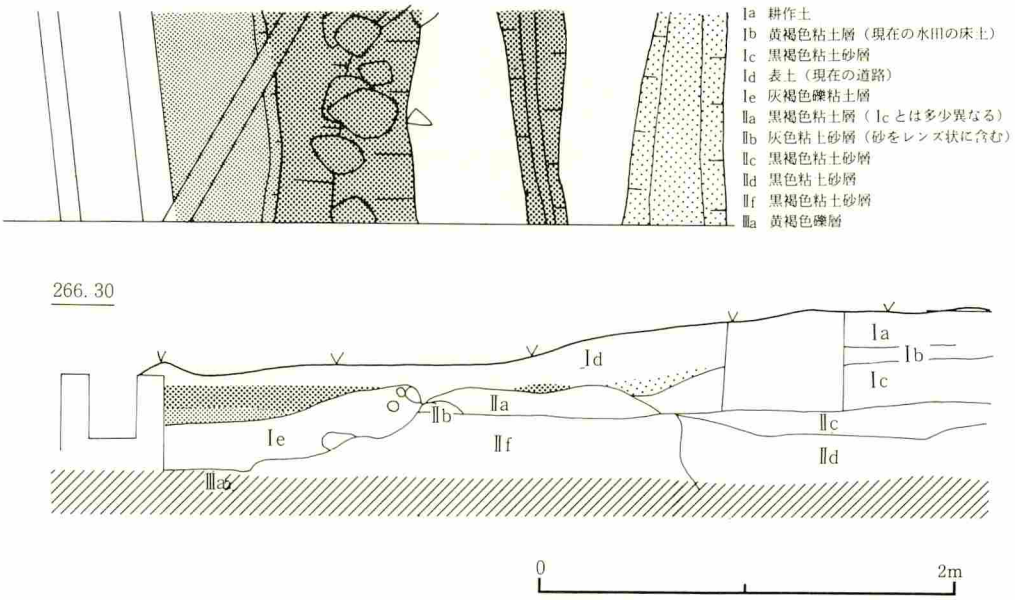


杭No.	レベル(m)
1	265.77
2	265.81
3	265.82
4	265.83
5	265.81
6	265.73
7	265.63
8	265.59
9	266.11
10	266.09

第6図　4号トレンチ付近実測図（1：50）

スクリーントーンを使用した図は、平面と地層の関係を示したものである。

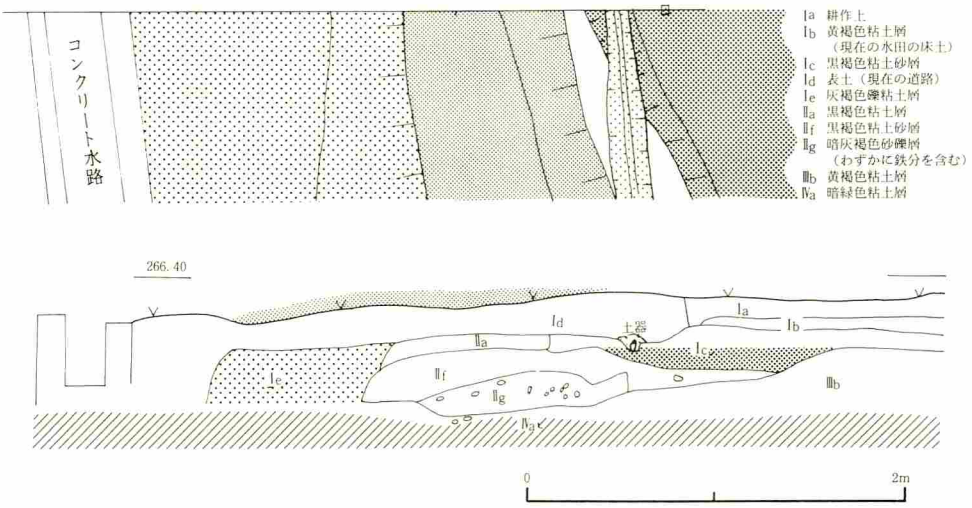
4号トレンチ　両側の壁の地層がほぼ合っていて、最下層のⅣ層は礫を含む氾濫層であった。その上層のⅡa層（現在の道の下）の上が最古の道となっていて、西側には土留用の列石があった。列石の長さは約8.5mあるが、1部は後世に敷設された暗渠によって破壊され、トレンチの部分は不用意に取り除いてしまった。道の幅はトレンチの南面では約50cmと狭く、北面では約1mである。Ⅱa層の両側は潅漑用水路があり、低くなっていて、底にはわずかに砂の堆積層があった。東側の水路は約1mと広いが、西側の水路は約60cmである。東側の水路の中には9本の丸太杭が残っていて、偶然に4号トレンチの南面で検出した。これは水路の中にあり、最古の路面よりやゝ上に出ているので、その後に打ち込んだものであろうが、それ程新しくもないと考えられる。この杭は道の土留用に打ち込んだものであると思われるが、これに対応する路側は検出出来なかった。道の西側で検出された最古の水路の西側には現代のコンクリート堰が構築されていた。東側では水路は完全に埋没して、その形跡はほとんどなかった。Ⅱa層の上部には礫を含むⅠc層があり、その上が路面となっていて、幅は南側面で約60cm、北側面では約1mである。この時点でも両側には水路があり、その幅も前者と同様東側が広くなっている。さらにこの上が現在の道となっており、幅2.2mである。ここでみられた最古の道の直上からは11世紀頃の国分式土師器片が出土している。上部の路面を使用した時期は明確に出来なかったが、中世から近世、近代までの染付等が出土しており、水路からもこれらが出土している。



第7図　7号トレンチ平面図及び地層図（1：40）

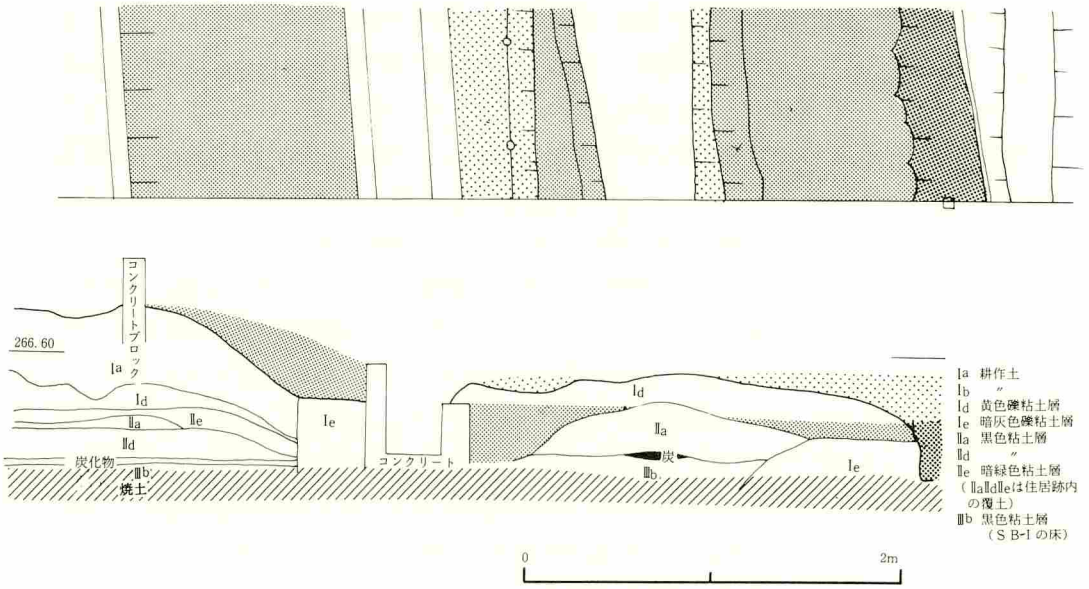
7号トレンチ　Ⅱa層の上が最古の路面と考えられ、幅が約80cmである。4号トレンチの地層のⅡa層に続いていて、西側の路側はこの北にある列石と直線でつながる。西の水路も現在のコンクリート堰との間にあり、続いている。コンクリート堰の東には約6本の杭が交差点まで直線に打込んであり、水路の西側の土留めとなっている。この杭列の時期は判定の基準となるものがないので不明である。道の東側には浅い水路（Ⅱc層）があり、4号トレンチの東側に続いている。Ⅱa層の上はⅠd層でこの上が現在の路面である。

8号トレンチ　地層図のⅡg層は氾濫層であるから、遺構はこれより下層にはないと考えられる。この上のⅡf層は西側の落込んでいる点から5号溝までの幅約130cmが最古の道の路面とみられる。その上部のⅡa層とⅠc層に掘られた溝までは中、近世の道と考えられ、その後西に80cm位広げてⅠe層の部分を道にしたものであろう。Ⅱf層及びⅡa層が路面となっていた時期にはⅠe層の下が水路となっていた。この水路は北にある列石とほぼ一直線となって続く。Ⅱa層及びⅠc層の1部が道になつていた時点にはその東に幅10cm位の狭い5号溝が南北に走っている。この路面から西に延長するとⅠb層となり、この下面が水田の床土となっていた。

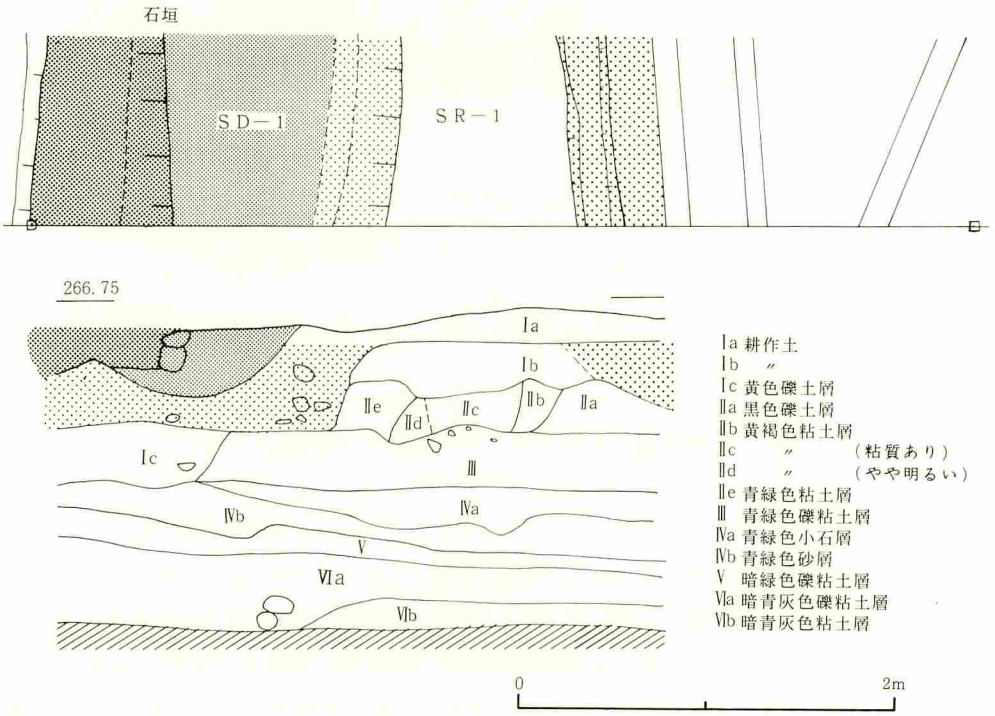


第8図　8号トレンチ平面図及び地層図（1：40）

9号トレンチ　1号住居址の中央部にかかっていた。1号住居址は最下層の遺構で、床面は1号道とその東の水田下で検出された。住居址の覆土であるⅡa層の上面が最古の道であって、2号トレンチの方向（南）に続いている。従って条里制遺構の道と考えられるこの道は1号住居址より新しいものである。この付近では道の上面の幅は約60cmで南方では80cmになっている。その両側は水路となっていて、杭列があり、これは土留用として打込んだものと考えられるが、その時期は確定出来なかった。最古の道との間隔が狭いので比較的古いと考えられる。さらに杭列の外側が現在の水路となっている。



第９図　９号トレンチ平面図及び地層図（１：40）



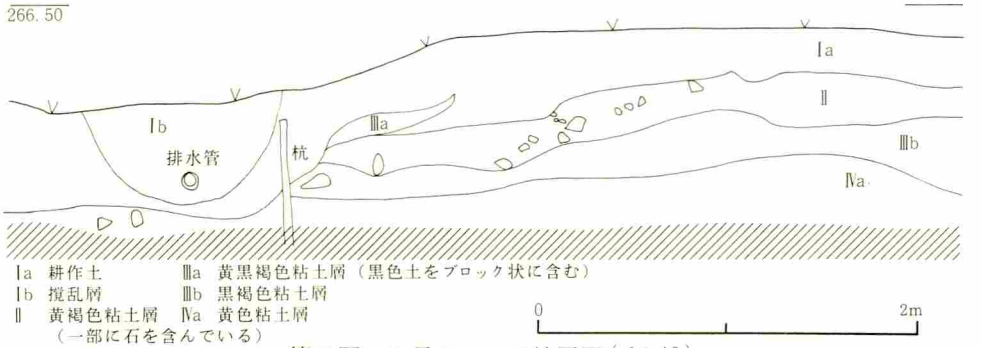
第10図　２号トレンチ平面図及び地層図（１：40）

2号トレンチ　下部の地層を知るためと、遺構の有無を確認するために165cmと他のトレンチより深く掘った。Ⅲ層からⅥa層までは砂層や礫層であるから境川の氾濫層であろう。この間には遺構は認められなかった。

Ⅱ層は粘土層で、土師器破片が検出される遺物包含層である。この上面はやゝ平になり踏み固められた状態で、9号トレンチに検出されたⅡa層から続いている最古の路面である。この路面から両端は落ち込んでおり、その底には砂の堆積層があるので水路と思われる。この上層のⅠb層上面も路面となっていて、この面では路面は西に広くなっている。最上層のⅠa層は現在の路面で、路幅は更に広くなり、3.2m位となっている。

次に東西に走る道2号道に設定したトレンチ1・11・10・5・6・3について説明する。これらに現われた道の部分の地層は単純で、路面は現在のものを含めて、Ⅱ層或いはⅢ層である。交差点から西に延長する道の北側には当初から水路があったと思われる。

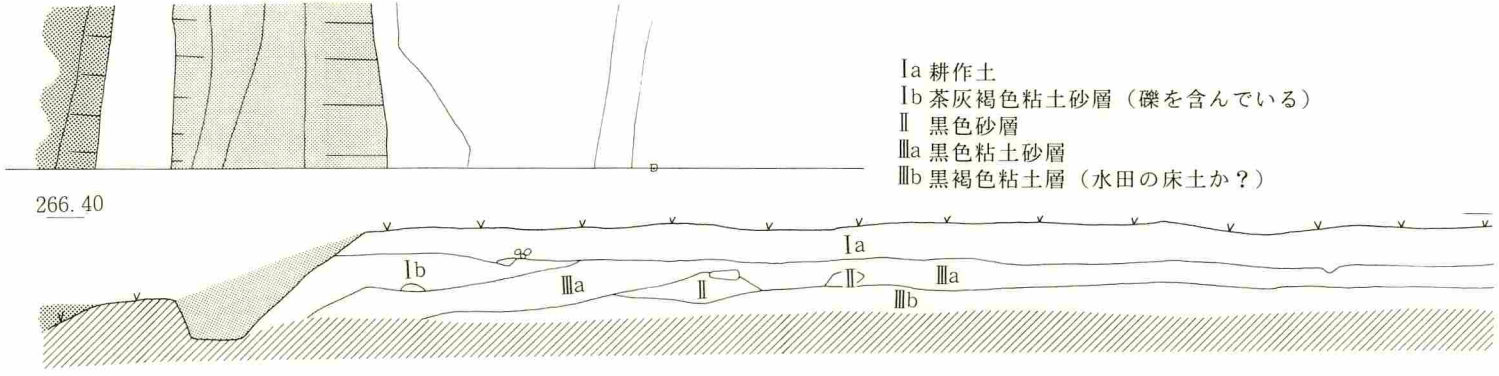
1・11・10号トレンチ　現在の道は水路の法面が緩傾斜のため、かなり南に寄っている。その下の道、すなわちⅡ層の上面の路面は確定し難かったが、水路から南へ、150cm～300cmの間にあったような形跡があった。しかし地層からみたところでは次のようである。1号トレンチⅡ層・Ⅲb層・11号トレンチⅠb層・10号トレンチⅢa層の水路寄りに共通して50cmから100cmのやゝ平らな場所があり、続いている。ここは発掘した時点では踏み固められた状態ではなかったが、地層では道状である。これらの面から南はほぼ平であるから水田の床土面とみることも出来るのである。



第11図　1号トレンチ地層図（1：40）

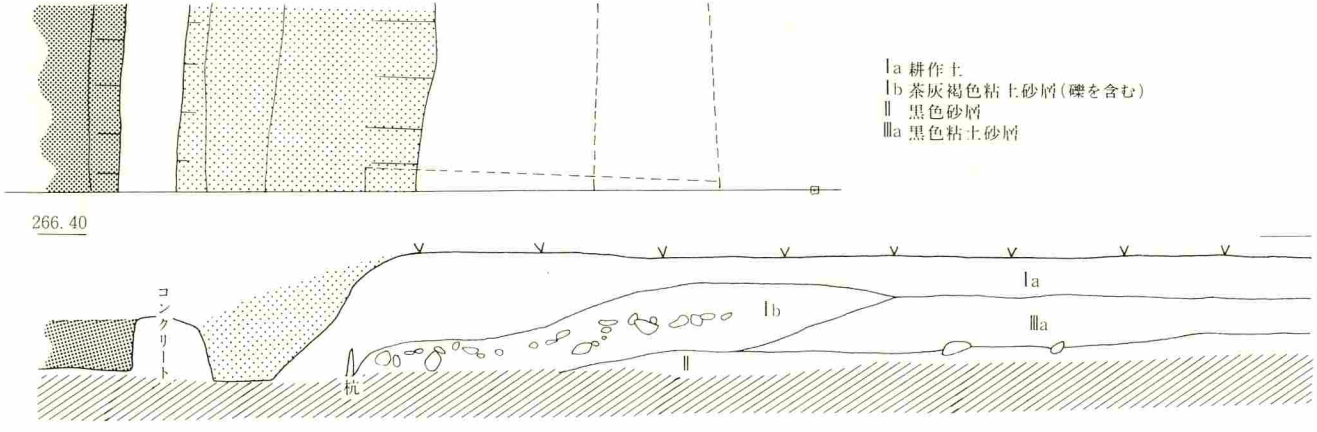
道の交差点から東のトレンチでは次のようである。

5号トレンチ　Ⅵ層は氾濫層であり、その上部のⅢb層は粘土層（腐食土）であるが道はみられなかった。ⅢcとⅢa層の上面に幅約100cmの路面があったがその時期は確定出来なかった。路面は凹凸が激しく、これは後世の攪乱によるものと思われた。その上部20cmの面が現在の道となる。道に接して南側が埋没した水路となっており、2時期に分けることが出来る。初期の4号溝の底から熙寧元寶（北宋）が出土したから1068年より遡るものではないと考



0 2m

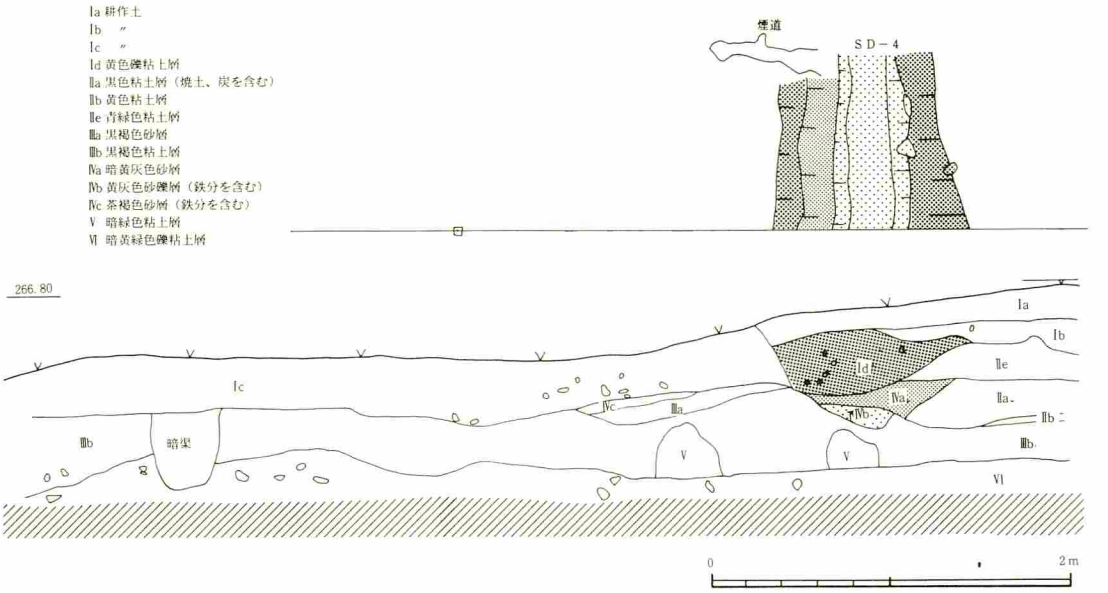
第12図　10号トレンチ平面図及び地層図（1：40）



0 2m

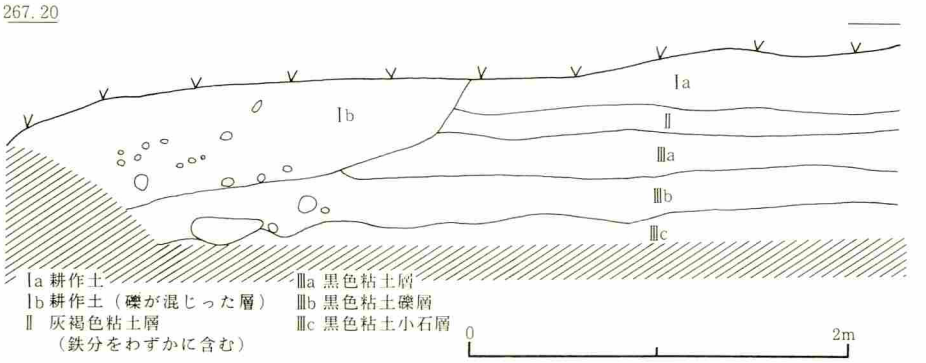
第13図　11号トレンチ平面図及び地層図（1：40）

えられる。水路は３Ｅグリッドから南に曲り、ここでは幅10cm、深さ５cm位となり、下流で幅180cm、深さ20cm位となる。５号トレンチにかかった１号住居址と４号溝の関係を地層でみると、４号溝がやゝ上にあり、若干後期のものである。４号溝の南は立上っていて、それが水田の床土となっているから、平安時代後期頃のものと推定出来る。



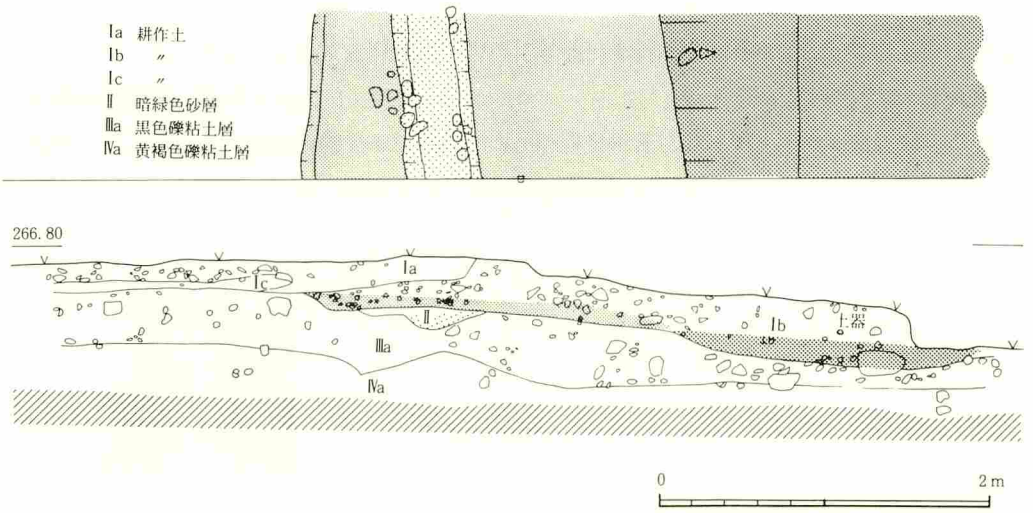
第14図　５号トレンチ平面図及び地層図（1：40）

３号トレンチ　Ⅰb層からⅠa層にかけて幅約270cmの現在の道がある。その下層ではⅡ層、Ⅲa層、Ⅲb層の上面が路面と考えられるから、Ⅰa層の交点から南となり、現在の道より南に寄っていたと考えられる。この線はそのまま水田の床土と続いている。



第15図　３号トレンチ地層図（1：40）

以上であるが、最古の道は現道より20～50cm位下層にあり、南北道はほとんど動いていないが、東西道は徐々に下方（北西）に動いていることがわかる。



6図　6号トレンチ平面図及び地層図（1:40）

水　田

発掘区内の水田の全容を、経過を追って明らかにする事は出来なかった。発掘区内の水田はこの周囲のものより比較的広いから、長直し（2枚以上の水田を平にして1枚にし、作業効率をはかる工事）を数か所行なったことは考えられる。少なくとも道の交差点の南東の水田では1回は長直しをしている。

面で水田の状況がとらえられなかったので、道に設定したトレンチの地層で、その状況をみてみることとする。

東西道では、1号、11号、10号トレンチで道の南側において現在の水田面を含めて3層を数えることが出来る。最も古い面が1号トレンチⅢb層上面の標高265.92m、11号トレンチⅡ層上面の265.9m、10号トレンチⅢb層の265.93mがある。その上の水田面は1号トレンチⅡ層の標高266.08m、11号トレンチⅢa層の266.1m、10号トレンチ266.07mがある。現水田面は平均266.3mとなっている。

交差点の東では、5号・6号・3号トレンチで、道の南側において、現在の水田面を含めてⅢ～Ⅳ層あるが、共通する面は5号、6号トレンチの現水田面標高平均266.7mの他にない。5号トレンチではその最下層Ⅲb上面標高266.5m、Ⅰc層上面266.58m、Ⅰa層上面267.7mがそれぞれ高くなっているので、この水田はかつては東西に2枚以上になっていたことが推定出来る。さらに3号トレンチではⅢa層上面標高266.64m、Ⅱa層上面266.78mがあり、やはり6号トレンチより高くなっている。

南北道では4号トレンチでⅡa層上面標高265.67mと現水田面265.88mがある。ここは7号トレンチのある水田より一段低くなった水田になる。

7号、8号トレンチでは現水田面は標高平均266.29mである。その下に7号トレンチⅠc

層上面標高266.19mと8号トレンチⅠb層266.18mが共通している水田面と考えられる。8号トレンチではその下部にⅠc層上面266.18mとⅢb層上面266mがあり、それぞれ水田面と考えられる状況であった。7号トレンチではその下にⅡc層上面265.86mとⅡa層上面265.77mがあり、やはりそれぞれ水田面とみられた。7号トレンチの下層が8号トレンチの下層より低くなっているのは、3号列石から西へ延長した線が古い長直しの線となっているとみられるので、ここから低くなっているためである。

交差点から南では、9号、2号トレンチの東で現水田面標高266.72mだけが共通した水田面である。9号トレンチでは1号住居址の上にⅡd層上面266.2m、Ⅱa層上面266.24m、Ⅱe層上面266.3mであろう。

2号トレンチではⅠb層上面266.55mとその下層のⅡa層266.23mが水田面であろう。これらはいずれも9号トレンチの下層水田面より高くなっている。

住居址と遺物

1号住居址　道の交差点で1基だけ検出された。9号トレンチでみられる最下層の水田床土と考えられるⅡa層の下層にあり、地表面から約76cmの下、標高266.04mが床面となる。推定プランは南北530cmの隅丸方形の竪穴であるが、道や水路工事のためにその約3分の2は破壊されていた。竪穴の深さは約15cmで、北側の東寄りに煙道があるが柱穴等は検出出来なかった。北側と南東隅に稲藁と思われる敷物が約7㎡検出され、南側には焼土と小礫を敷いたと思われる場所がある。遺物は1片検出されただけなので、この住居を廃棄する時点で持ち去ったのであろう。外的な条件によって廃棄したことが考えられるが、もしそうであれば、条里制の道を敷設する際に立退きをさせられたものとも考えられるのである。

遺物　甕の口縁部1片だけが出土し、上平出5号（国分Ⅴ期）の遺物位に比定出来る。11世紀後半か12世紀になろうか。

列　石

1号列石　1号道の北端下層で検出された。最古の道の西路肩に並べられており、土留用と考えられるものである。道の項を参照されたい。

2号列石　2号道の南側にあり、30〜50cmの集石列となっている。一部分の石は破壊されてなくなっているが、東端は道の交差点近くまで連なっていて、石は小さくなっている。列石は、10号トレンチではⅠa層（表土）の下部にあり、11号トレンチではⅠb層上部に傾斜して並べられている。構築時期は伴出遺物がないのでわからない。

3号列石　A・B—2〜7グリッドにある。人頭大のやゝ細長い石が一列に並べられており、長さは12mある。西側の3分の1は破壊されたのか、飛石状に並んでいるだけである。列石は普通土留の用途で構築されるので、低い方に石の面が揃うのであるが、この場合は面がどちらにもない。飛石状の部分は5号溝に続いている。

その他の遺構（SX—1・2）

その形状によって1号・2号に分類した。いずれも発掘区の北東部水田のⅡ層（現耕作土の下層）に現われたもので、その状態は同じようであった。降雨の後で2層上面が、乾き始める際にやゝ遅れて乾くところがあることを偶然に発見した。SX—1は島状に南北の列をなし、SX—2は帯状になり、規則的に並ぶ。しかし乾くと全く区別がつかなくなるものである。一般的には腐食土は保水力が高いので、このようになる事が考えられるのであるが、注意深く発掘しても、土壌の差が全くなかった。

用途は不明で今後類例調査が増加して、解明されることを期待する。

遺物 出土した遺物は少量で、遺構に伴出したものは4～5点にすぎないので、一括して説明する事とする。その時期は古墳時代前期の五領式土器を始めとし、現代に至るまでのものが検出されているので、水田が引続いて現代に至るまで使用されたことを証するものであろう。

なお近世、現代に属する遺物、磁器やガラスが多量に道や水路で発見されたが、ここでは掲載しない。

1号道では第17図に示した次の数点の遺物が出土した。8Cグリッドで第17図4に示した古墳時代初頭の五領式期の小型丸底壺が出土したが、道とは時期的に違うものであろう。第17図3は同グリットの道の直上（標高265.918m）Ⅲb層上面から出土した坏で、国分Ⅱ式に比定される11世紀のものであろうから、ほぼ初期の道と同時期となる。第17図2の坏もほぼ同時期と考えられる。

2号道からは第18図7は3EグリッドⅠ層から出土した。外国製品とみられる染付の茶碗である。中世末か近世に比定出来ると思われる。

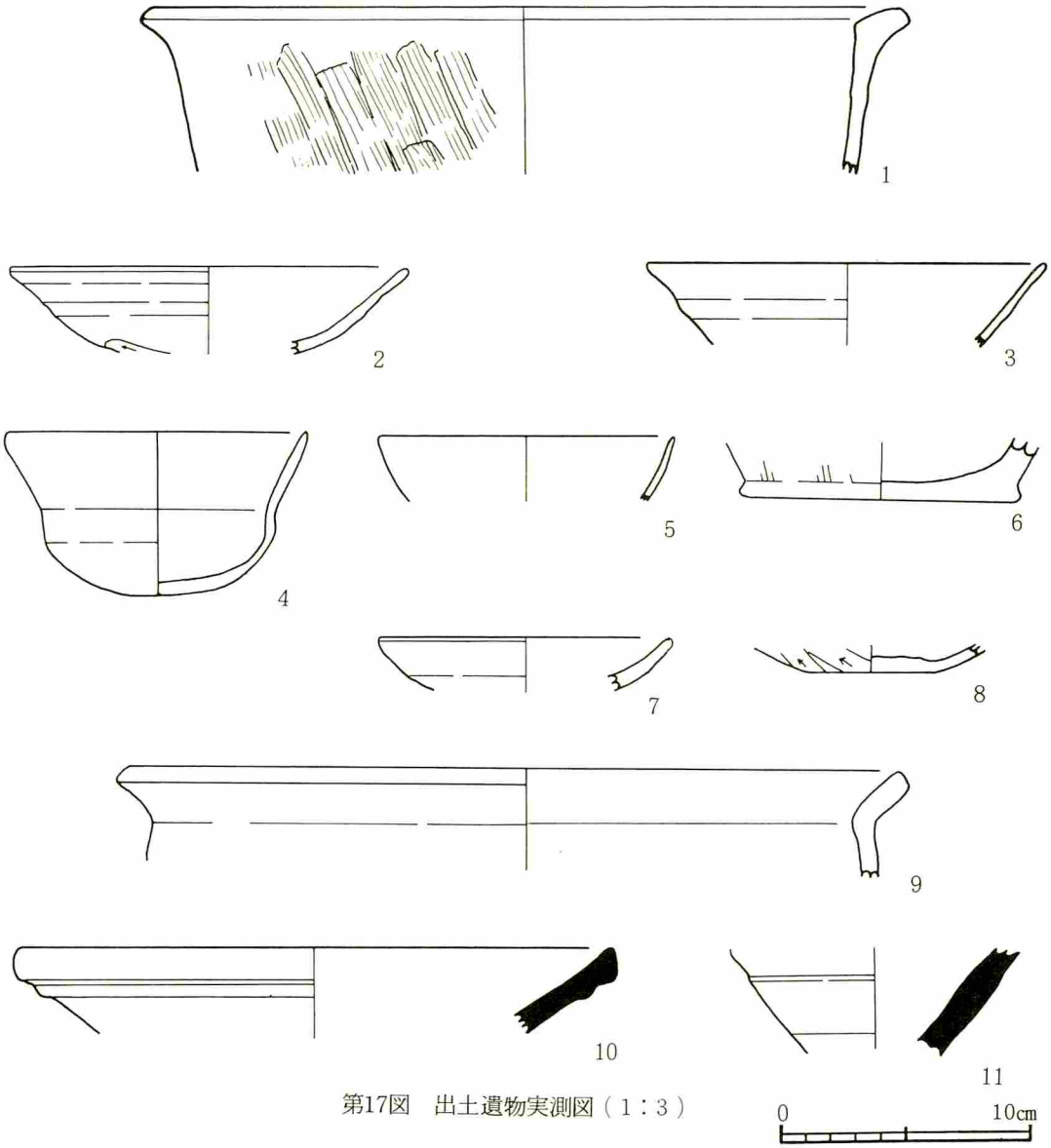
1号水路から出土した次の3点を掲載する。Ⅲ層からは先が尖った断面方形の鉄製品が出土した。Ⅱ層からはキセルの銅製金具が検出された。また外国製品とみられる染付の茶碗がⅠ層から出土したが、これも中・近世のものであろう。

4号水路からは2点の遺物が出土した。3Eグリッドで水路の底に堆積した砂層から第20図の熙寧元寶一個が出土した。これは中国北宋時代の神宗熙寧時代（1068～1077年）のものであろうから、この水路が使用された時期は11世紀以後となろう。良質である。5Eグリッドの覆土から外国製品の染付の深皿が出土したから、中世か近世まで4号水路は使用されていたと考えられる。

3号列石からは江戸時代のものと思われる第19図3の施釉された陶器が検出された。

1号住居址からは第17図1に示す甕の口縁部破片が1個だけ床面直上（標高266.06m）から出土した。11世紀後半か12世紀に比定出来る。

その他石鏃1個、土製紡錘車1個や平安時代後期以後の土師器破片、天目釉陶器片、志野系陶器片や磁器等が出土したが、直接遺構との関係を明らかに出来るものは少なかった。

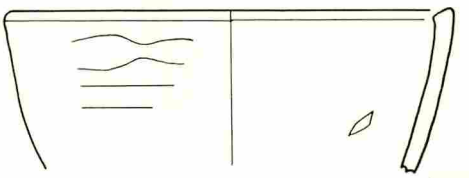


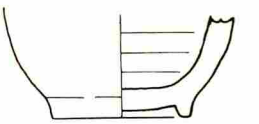
第17図　出土遺物実測図（1：3）

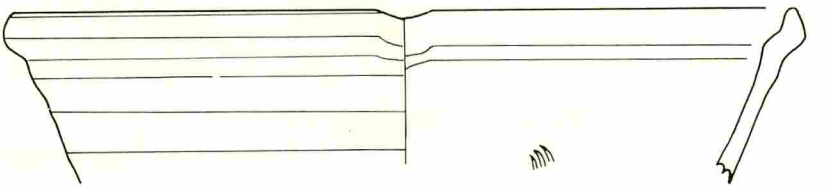
第1表　出土遺物一覧表

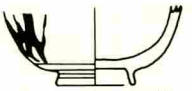
挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm) 口径/器高/底径	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
1	SB－1 床面直上	土師	甕	33.6 — —	肥厚	横ナデ 斜位刷毛	横ナデ		砂粒を含む 暗灰色 良好	
2	SR－1 2層	〃		16.0 — —	玉縁	口縁部ロクロ水引 器体下半斜位篦削	ロクロ水引		緻密 赤褐色 良好	
3	SR－1	〃	〃	16.0 — —	〃	ロクロ水引	〃		砂粒を含む 赤褐色 良好	

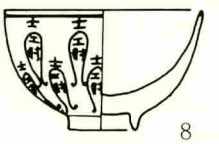
挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm)(口径/器高/底径)	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
4	SR－1	土師	壺(小型底)	12.0 6.6 —	尖形	ロクロ水引	ロクロ水引		砂粒を含む 茶褐色 良好	
5	7 B G	〃	坏	12.0 — —	〃	ロクロ水引	〃		緻密 白褐色 良好	
6	2 A G	〃	甕	— — 11.0		縦刷毛		木葉痕	砂粒を多く含む 茶褐色 良好	
7	〃	〃	皿	12.0 — —	丸形	ロクロ水引	〃 ロクロ水引		緻密 茶褐色 良好	
8	8 B G	〃		— — 5.0		斜位篦削	回転ナデ	回転糸切 ↓ 篦削	緻密 赤褐色 良好	
9	2 F G	〃	甕	30.8 — —	肥厚	横ナデ	横ナデ		砂粒が多い 茶褐色 良好	
10	SD－3 2層	須恵	甕	24.0 — —		ロクロ水引	ロクロ水引		緻密 暗灰色 良好	
11	2 F G	〃		— — —		〃	ナデ 〃		砂粒を多く含む 暗青灰色 良好	

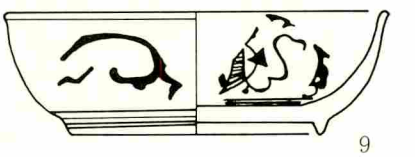

4


5

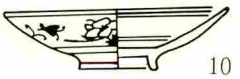

6


7


8

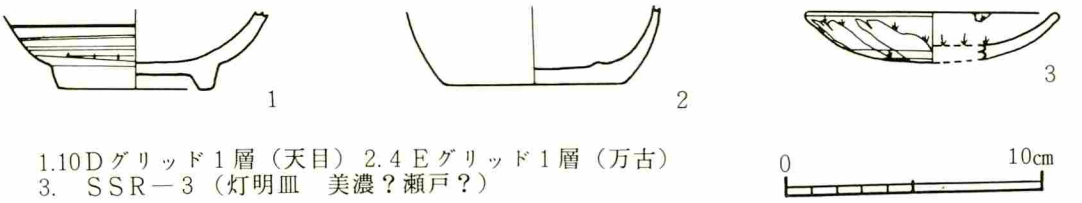

9

4.6 Eグリッド（美濃黄瀬戸）
5.9 Eグリッド1層（白磁）
6.6 Bグリッド2層（瀬戸天目釉擂鉢）
7.SR－2　1層（染付）
8.SD－1　1層（染付）
9.SD－4　覆土（染付）
10.4 Fグリッド Ia層（染付）


10

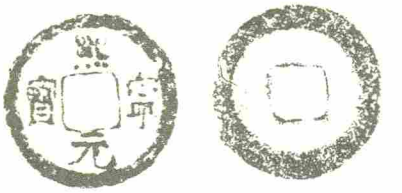
0　10m

第18図　出土遺物実測図（近世）（1：3）



1.10Dグリッド1層（天目）2.4Eグリッド1層（万古）
3.　SSR－3（灯明皿　美濃？瀬戸？）

第19図　出　土　遺　物　実　測　図（近世）



第20図　4号水路覆土出土銭貨拓影

第5章　　石橋条里遺構の坪割について

条里を形成したと思われる主要な道路は、名称、地図や航空写真によって考えると、図の二重線のようになり、ほぼ中央で東西に大きく分割することが出来る。南北の二重線は現在の県道塩山―市川大門線である。南北に延長する道路は3町あるいは2町の間隔を置いている。これらの道路による区画を図のように、それぞれ第1区画、第2区画……第12区画と呼ぶことにする。各区画における坪数は6坪～14坪と不規則なものとなる。坪の数え方は、図のように現在の小字に数詞を冠したものが、当初の数え方と関連をもつものとして考察することにする。

第21図　石橋条里制遺構坪命名図

第1区画では、北東隅に「壱町田」なる小字があり、南に向って数えると5番目に「六反田」があるが、南北に分けられているので「六反田」一つで第5、第6坪とする。小字「七反田」が西側に隣接しているので千鳥式で数えるものと思われる。

第2区画では「四反田」を第4坪とするために、北端の「東沢向」を第1坪「えぼし切」

を第２坪として千鳥式が適用できる。別の考え方として、第２区画を南北６坪ずつに分ける方法も考えられ、「朔月田」を第１坪、「しま田」を第４坪と考えて、千鳥式で南北に進むような方法である。しかし他の区画において第２区画を二つに分ける分割線を延長して設けることは不自然であるから、前述の分割は妥当なものではない。

第３・４・５・８区画も同じように千鳥式で数えられる。

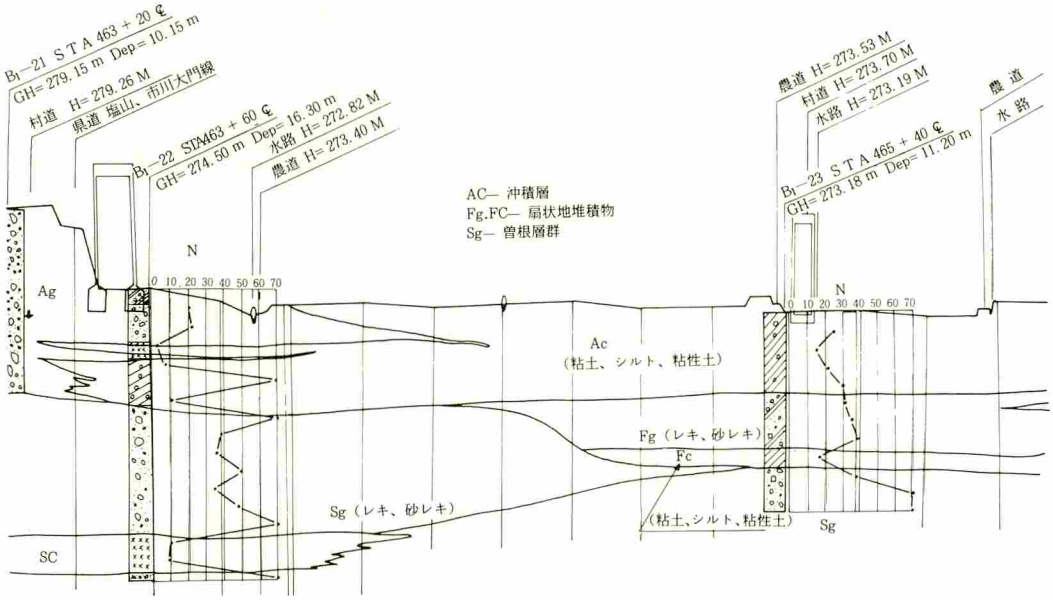
第４区画には「七反田」があるので、これを第７坪とするには、図のように北西隅から始めて千鳥式にて、東西の向きに数えなければならない。

第９、10、11区画では、境川の氾濫のため、坪の区画は見当らない。

第11、12区画では、南側の一部をカットすれば「五反田」あるいは「一町田」を生かすことが出来そうである。

なお、第９画には「八反田丁」「八溝田」があるが、それぞれ第８坪とするには無理がある。第６、７区画には数詞を冠した小字がないため数える事は不可能と思われる。

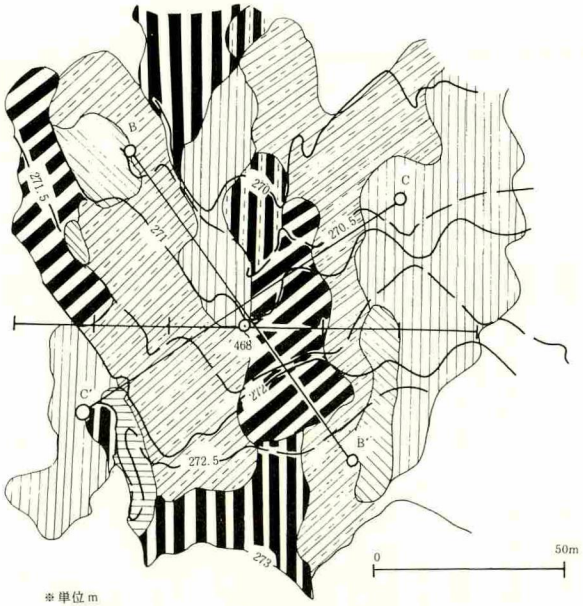
以上のように石橋条里制遺構では、千鳥式数え方を基本としているようであり、下流から上流に向って、坪名を命名した可能性がある。中央の道路を境として、上流より下流の方が数字が小さい傾向があるのは、水田を下流から上流に向って開拓していったために、後になった上流が数字が大きいとも考えられる。これによって推測すると、潅漑用水が豊富な地域から水田化されていった。境川扇状地は11世紀後半には、そのほとんどが水田となっていたのではないであろうか。



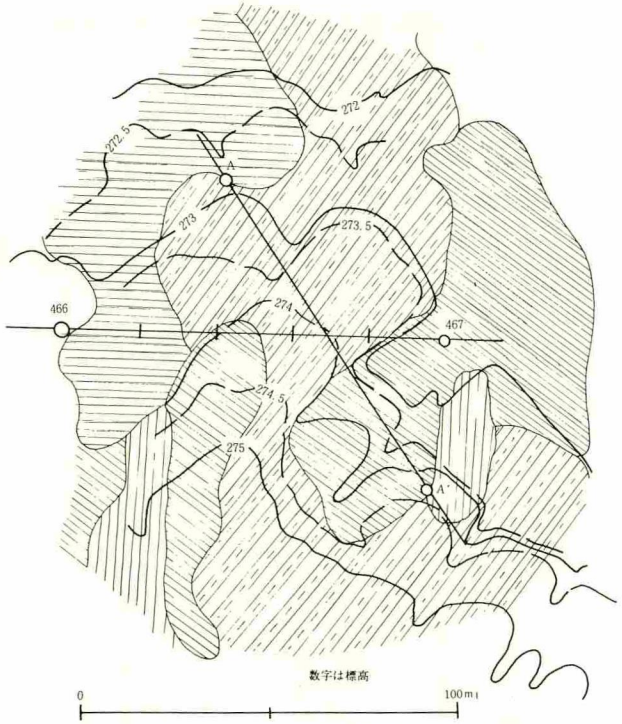
第22図　中央道中心杭№463～465付近地層図

第2表　リモート・センシングによる地層表

		柱状図	土質分類 現場視察による分類	土質分類 KODANによる分類	土質分類 日本統一分類法	色調	観察事項	試料採取 採取深度(m)	試料採取 試料番号
			レキ混り粘性土			暗茶褐色 ～ 茶褐色 ～ 暗灰色	0.00～0.20m間 暗茶褐色呈した粘性土 0.20～0.50m砂レキ（ 20㎜～80㎜） 0.50m～1.40m間 5㎜～40㎜のレキである。 1.40m以深より暗灰色に変わる。 1.40～2.30m間レキ少量含む。	1.00 1.30 2.00 2.30 3.00 3.30 4.00 4.30	SR－1 SR－2 SR－3 SR－4
			粘性土混り砂レキ			茶褐色	所々に砂レキの部分有り 45㎜～40㎜位最大70㎜のレキである。	5.00 5.30 6.00 6.30 7.00 7.30	SR－5 SR－6 SR－7
			粘性土			暗灰色	0.5～20㎜のレキ若干混る。	8.00 8.30	SR－8
			砂レキ			暗青灰色	8.70～9.20m間レキ混り粘性土である。 5～40㎜（最大80㎜のレキである） 10.40～10.60m砂質。 10.60～10.90m粘性土質を挟む。	9.00 9.30 10.00 10.24 11.00 11.20	SR－9 SR－10 SR－11
			粘性土混り砂レキ			茶褐色	50～100㎜のレキとロームの混合である。		
			砂レキ			灰褐色	5～40㎜の円レキで上部微細砂混りロームを含む。 下部粗砂ローム、有機物を層状に含む。	1.00 1.30 2.00 2.30	SR－1 SR－2
			シルト			暗灰褐色	有機物、浮石多量に混入。	3.00 3.30	SR－3
			砂レキ			暗緑色	石英の風化されたレキを多量に混入レキ50～10㎜		
			レキ混り粘性土			灰褐色	石英の風化されたレキを多量に混入、レキ50～100㎜が点在する。 細砂混り有機物、浮石混入する。 砂分も含んだ有機物、浮石が層状にある。 50～100㎜のレキが点在する。	4.00 4.30 5.00 5.30 6.00 6.30	SR－4 SR－5 SR－6
			砂レキ			暗緑色	5～40㎜の角レキでシルト分挟み柔い。 レキ50～100㎜が点在する。 下部処々に5～20㎜程度の粘土を挟む。 粘土層が層状に薄くあるためN値が非常に不規則である。 5～40㎜のレキ（最大レキ100㎜程度）である。 処々粘土層を薄く挟む。	7.00 7.30 8.00 8.30 9.00 9.30 10.00 10.30 11.00 11.30 12.00 12.30 13.00 13.30	SR－7 SR－8 SR－9 SR－10 SR－11 SR－12 SR－13
			シルト			黒灰色	火山灰質で浮石多量に混入する。5～10㎜のレキが10～30cmの層状に挟む。 粘着性がある。	14.00 14.30 15.00 15.30	SR－14 SR－15
			砂レキ			青灰色	5～40㎜の風化岩レキで石英、安山岩、花崗岩等である。	16.00 16.20	SR－16

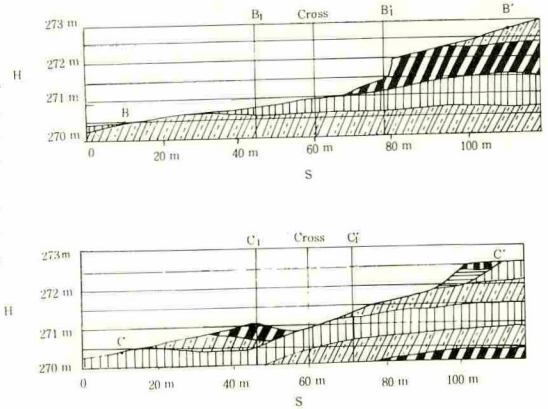


第25図　BB′ CC′ 横断平面等高線図及び土壌含水比分布図

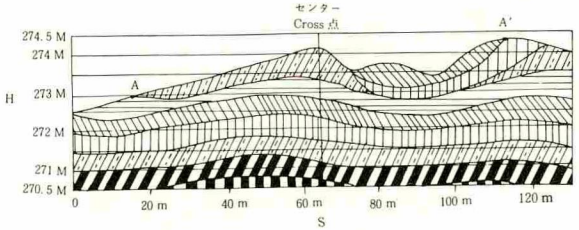


第23図　AA′横断平面等高線図及び土壌含水比分布図

	含水比	土性
	0.40～0.59	砂土
	0.60～0.79	砂壌土
	0.80～0.99	〃
	1.00～1.19	壌土
	1.20～1.29	〃
	1.30～1.39	植壌土



第26図　BB′ CC′ 横断断面土壌堆積模式図



第24図　AA′ 横断断面土壌堆積模式図

第6章　ま　と　め

本県において、班田収授法による条里制施行についての研究は、昭和10年に広瀬広一氏が発表した「条里遺跡」（『山梨県史蹟名勝天然記念物調査報告』第8輯）によって開かれたといわれている。その後の研究の成果はあるものの、その全体像はとらえられていないし、また発掘による調査でも、その具体的内容が判るまでに至っていない。

石橋条里第Ⅲ地点の発掘では、道路、潅漑用水路のあり方や歴史はある程度解明出来たが、施行時の水田の状態や発展経過は判らなかったに等しい。

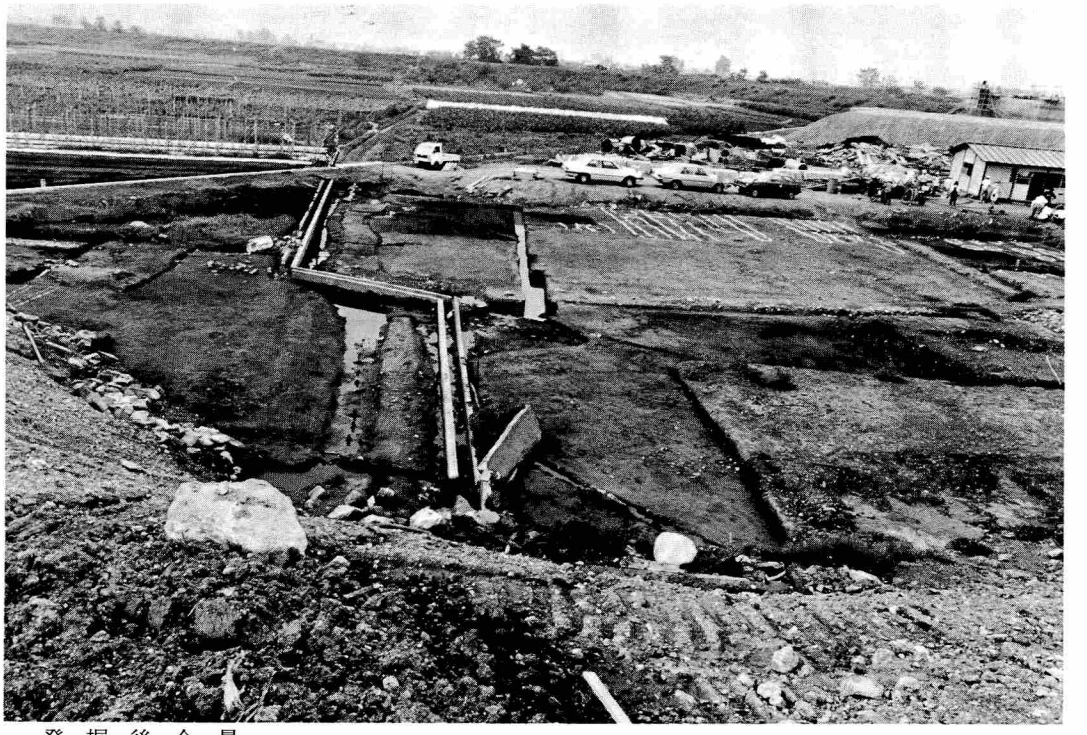
道路は現在から遡って、引続いて施行時まで、同一場所の下層で確認出来た。道幅は古くなる程狭くなり、当初は3尺（90㎝）位であったと考えられる。水路は改良、廃止を繰り返されているが、当初から道路に沿って敷設されていたもののようである。

遺物は、現代・中世・古代のものがある。最も古い遺物として、一片だけ五領式期の小型丸底壺があるが、これだけでは考察の充分な資料とならない。

特に1号住居址直上、1号道直上から出土した土師器、4号溝から出土した銭貨はほぼ時期が一致する。1号住居址が条里制の道路を新設するために廃棄されたものとすると、ここから出土した甕形土器の口縁部破片の時期と、条里制の施行時期とが一致すると考えられる。これによると11世紀後半から12世紀までの間であろう。

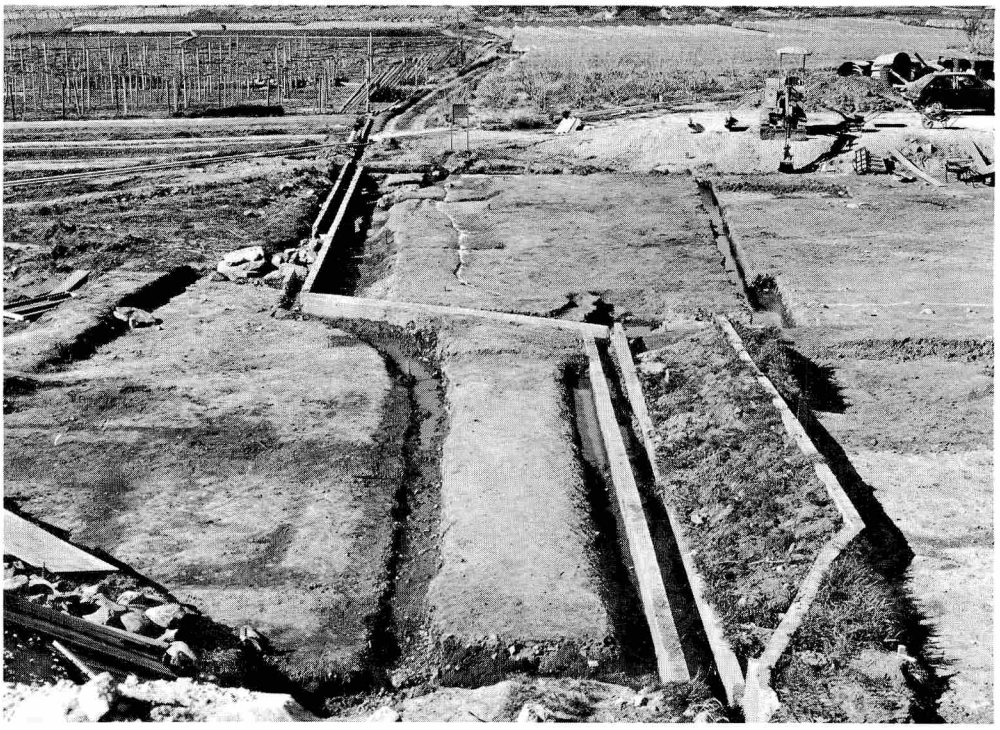
図　　版

石橋条里制遺構第Ⅲ地点発掘前全景



発 掘 後 全 景

図版2

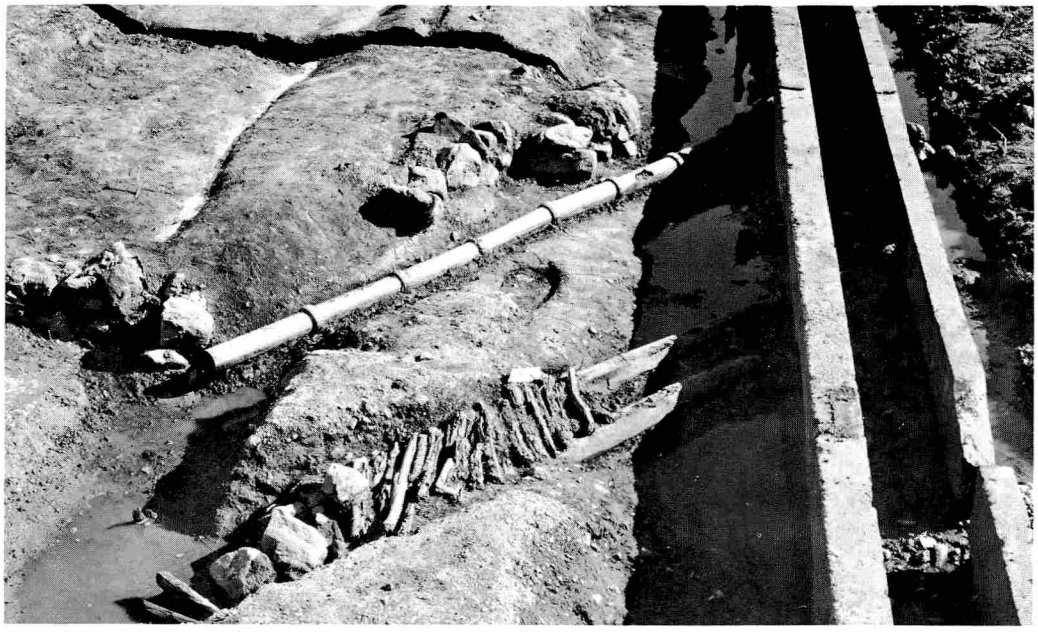


南方より1号溝を望む

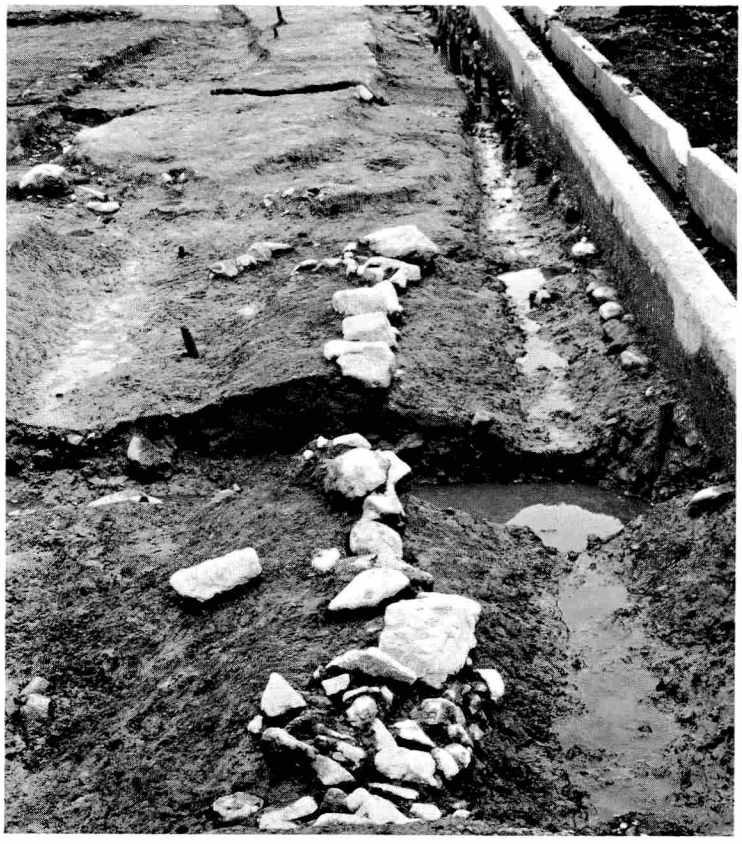
住居址内炭化物出土状況

1 号 住 居 址

図版3



一号溝にかかる暗渠



一号溝と杭列

4 号 溝 付 近

4 号 溝

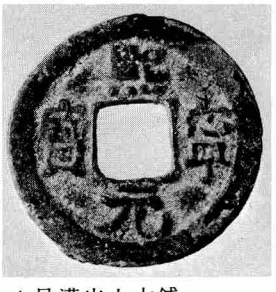
3号列石とＳＸ－1.2

2 号 列 石 付 近

図版5

出土遺物（中近世）

紡垂車　５Ｂグリッド出土



４号溝出土古銭

蔵　福　遺　跡

II　蔵　福　遺　跡

第1章　遺跡の位置と環境

第1節　位　　置

蔵福遺跡の所在地は、東八代郡八代町永井字蔵福536番地、535番地の1とその周辺にあって、中央道中心杭S・T・A480の付近にあたる。東経138度37分44秒、北緯35度36分41秒の位置で、浅川扇状地の末端にある。

次に相対的な位置を示す。

甲府市から南東約8㎞にあり、西約130ｍから増田部落に、東550ｍから永井部落になる。増田部落を越して1,000ｍに笛吹川が南流し、南340ｍに浅川が西流し、さらに南の狐川と接して境川村となっている。

町道16号線に接して、北側に広がる遺跡である。

なお、保ノ下遺跡第1章第1節を参照されたい。保ノ下遺跡はここから北1,200ｍの地点に存する。

第2節　環　　境

イ　自　然　環　境

蔵福遺跡は、甲府盆地南部にある浅川扇状地の末端にある。

浅川扇状地は、甲府盆地を東から南にかけて連なる御坂山脈から流出している浅川で形成されている。浅川扇状地は甲府盆地南東部にある諸扇状地のうちでも、よく発達し、標式的なものの一つである。甲府盆地内東部における広域的な地形、地質については、石橋条里制遺構第Ⅰ地点、及び保ノ下遺跡の第1章第2節、イ自然環境で詳述したので、ここでは省略する。

次に遺跡付近の微地形についてふれておく。

遺跡が存する扇端の勾配は1000分の17.5（傾斜角1度）である。ここは、幅約100ｍのかまぼこ型自然堤防になっていて、南は町道16号線を挟んで比高約1.3ｍの浅い谷となっており、北も比高80㎝くらい低い、幅100ｍくらいの浅い谷に開折されている。

この自然堤防は、150ｍくらいの長さがあり、発掘地点はその末端にある。発掘地点から下は、その幅が広くなり、微高地状地形となっている。遺跡のすぐ西（下）は落差約1ｍの急勾配があるので新しい浅川の氾濫原の末端になるのであろうか。遺跡の標高は268ｍである。

現在は、付近一帯はわずかの水田を除いて、20年ほど前から農作目転換がなされ、ぶどう桃などの果樹園や蔬菜畑となっているが、それ以前は、すべて水田であったので、比高30㎝から1ｍくらいの段々畑になっている。

自然堤防に占める遺構の位置は、中・近世のものは中心よりやや北寄りの斜面に、また水田址は北側にある浅い谷で検出した。

ロ　歴史的環境

蔵福遺跡で検出した遺物と遺構は、２時代に分けることが出来る。

その一つは、中・近世の陶磁器、土師質土器と木器などを伴う掘立柱建物群、溝群、集石遺構などで寺院に関係する遺構と思われるものである。

他の一つは、土師器を伴う水田址と考えられるものである。

ここでは主に、この二者に関係する歴史的環境について説明することとする。

最初に前者について説明する。

この遺跡付近に増福山利最寺があり、浅川の洪水で流されたので、その地名が残ったという伝説がある。

現在利最寺は、遺跡の西（下）に続く自然堤防状微高地に展開する増利の集落の北西にあり、ここからの距離は約600ｍである。増利の集落は現在地に弥生時代から引き続いて営まれたと考えられ（石橋条里第Ⅲ地点調査報告書、第１章第２節　ロ、歴史的環境を参照）、この間に水害を受けた利最寺が、現在地に移転した可能性はあろう。

この遺跡がある土地の字名が「蔵福」であるのは、ここにこの寺があったことを充分示唆するであろう。

また、『八代町誌』（下巻）第12編の伝説に、ここはかつて増利村の領分であったとの言い伝えがあるという。歴史地理的な環境は、あまり詳しいことがわからないが、増福山利最寺の関係資料は別項で示す。

次に、水田址と考えられる遺構の歴史的環境について説明する。

境川村にある条里制遺構が八代町まで続いていて、序章第２図に見られるように蔵福遺跡は、八代町にみられる条里制遺構の中でも、最もよく整備された地域の真中にある。ここは１坪（１里×１条）ごとによく区画整理されていて、すべて、１坪ごとに字名が付けられているのは境川村と同様である。蔵福の周囲だけでも条里制に関係すると思われる字名に、１丁田、角田、福田、１丁五反、五反田、反田、桜坪などがある。蛇足であるが、この地域の北は、字名が４坪（２里×２条）を１単位として命名されている。このことは条里制遺構を研究する上で、重要なことのように思われる。

以上のような環境の中にあるこの水田址も古い歴史をもつものと考えられる。

境川村の場合と同じように、ここの条里制遺構の道路の交差点が少しずれて筋違いになっている。また、古くから水田が合併され、大きい水田へと広げられてきた。例えば、字蔵福地内（１坪＝１条×１里）では、明治25年10月に調整された分間図では29筆（枚）の水田が、昭和54年に作成された中央道の図面では、17筆（枚）に合併されている。地域では、この合併することを長直しと言っている。水田を長直しするということは、床土を切り盛りすることになるので、現状が変更され、以前の水田址は破壊されてしまうことになる。ここでも、このような経過をたどってきたために、水田址としての確証を得られなかった。しかし、検出した状況から水田址と判断したものである。

第2章　調査の経過

蔵福遺跡の発掘期間は、昭和54年11月26日から翌年3月20日までの約4ケ月間であった。休日は日曜日、祭日と年末、年始の約15日間を当てた。

発掘予定面積は約7,800㎡であったが、このうち、遺構を検出した範囲は1,100㎡で、内訳は中・近世のものが約1,000㎡、水田状遺構が約100㎡であった。

地区全域を、グリッド方式によって発掘することとし、その名称は図のようである。

グリッドの設定は中央道の中心杭を基準として、東西にそれぞれ一辺を10m×10mとして72区画をつくる。その1区画にさらに2m×2mの小グリッドを25つくり全部で、1800グリッドを設定した。グリッドの名称は南から北に10、20、30……台とし、東西を11、12、13……グリッドとした。小グリッドは南北を1～5まで、東西をA～Eまでに分け、1A、1Bのように標示する。

まず、発掘予定地における遺構の分布状況を把握するために、大・小グリッドとも、1つおきに千鳥に試掘を行った。その結果、1月下旬に120台のグリッドに水田状遺構が、2月の初旬に、50台、60台、70台、80台のグリッドに土師質土器や、染付、天目茶碗等の陶磁器を伴う中世末か、近世初頭と考えられる遺構を検出した。

土師器を伴う水田状遺構は、攪乱が多く、少範囲にとどまった。

中・近世の遺構は掘立柱建物群、溝群や配石遺構であった。73グリッド付近で、多量に前記の遺物が出土しはじめたのが2月2日頃からであった。慎重に掘り進めていったが、遺構らしきものは、黒色土の中からは検出出来ず、7日頃になって、砂層上で始めて柱穴群と溝群がほとんど同時に検出出来るようになった。2月中旬に84グリッドで配石1号や、62グリッドから3足碗形土器（線香立て）等の仏具も多く出土した。

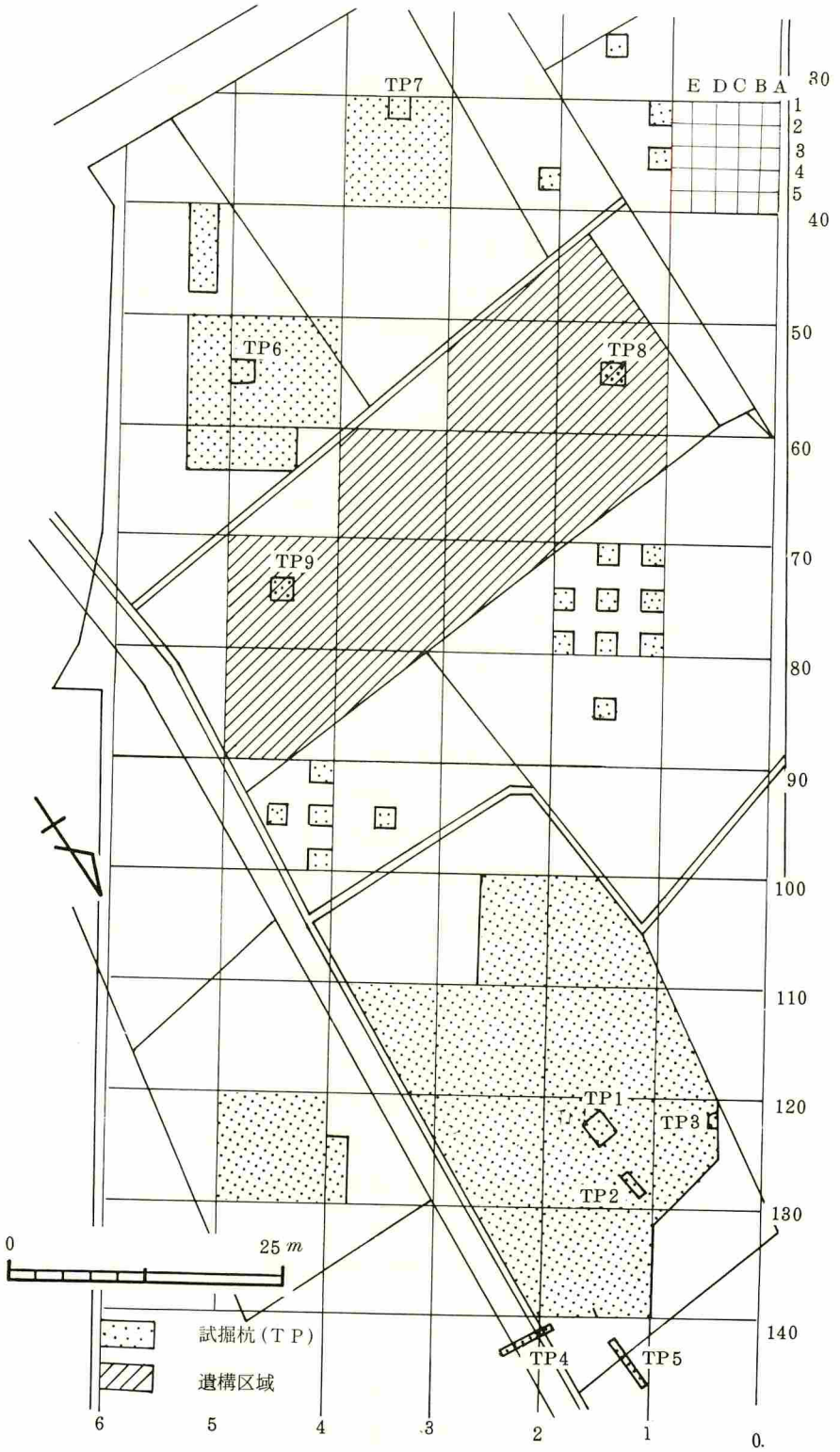
3月18日の終りに近い頃、67号溝から、碗2、銭貨3、板片など、埋葬行事に使用されたと考えられるものや、やや離れた所から下駄などを検出した。

また近世初頭頃作られたと思われる多くの暗渠（地域では「冷抜き」という）も発見した。

自然科学的分析資料として、^{14}Cによる年代測定資料を54E—3第13層（地表下約150㎝）から茎状植物を、また花粉分析資料を74C—3第5層から泥炭層を採取した。結果は前者ではBC3400±330年となり、後者では、ほぼ14種の植物が抽出され、最も多いものは、picea（トウモ、バラモミ）の20、5%であった。

以上のように3分の1の前半期は試掘に費し、1月中旬で試掘面積は全体の約20%であった。その後は、掘立柱群、溝群を集中的に発掘調査し、終了した。

なお、この概略について、中央道発掘調査速報「蔵福遺跡」№1（1月18日発行）と同№2（3月7日発行）に発表した。



第１図　蔵福遺跡グリッド配置図（1：500）

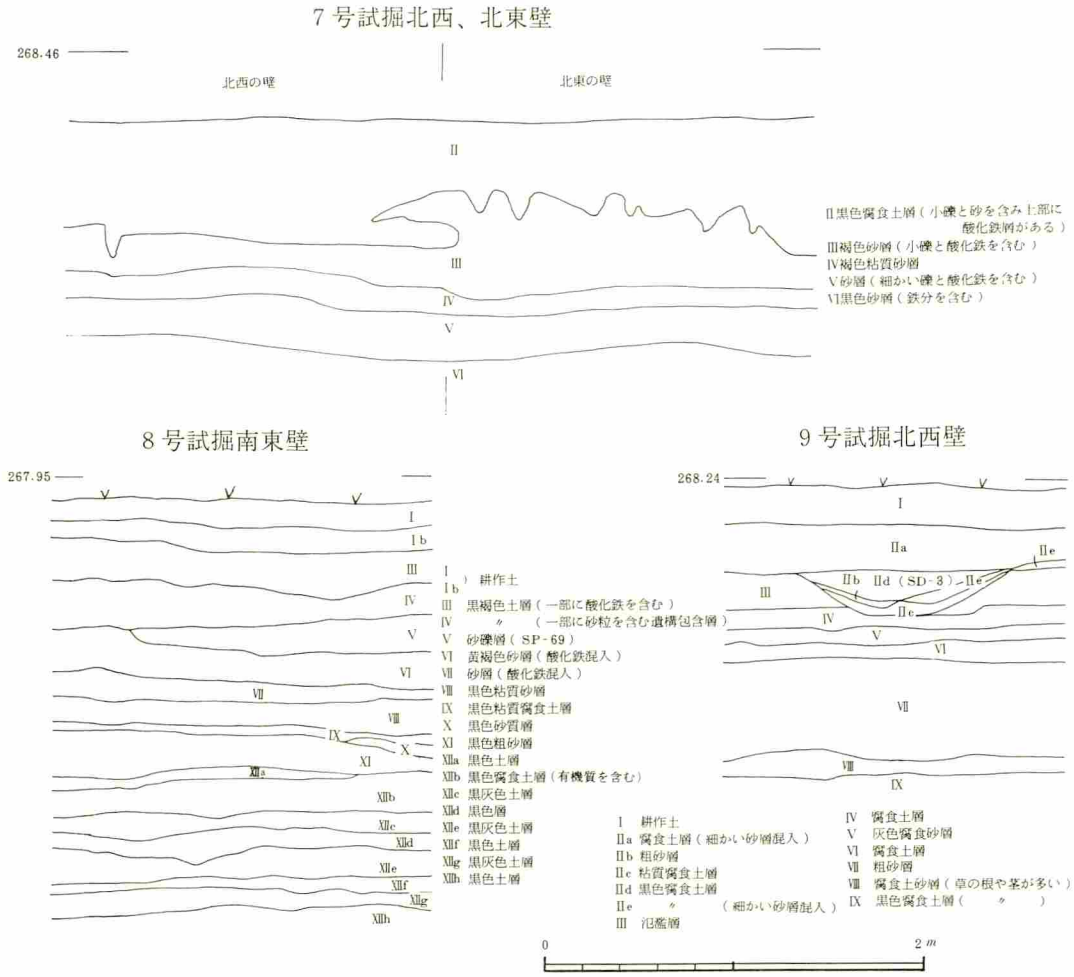
発掘前の予想として、この下（西）方に弥生時代後期の遺跡が広がっているので、その関連遺構があるものと考えていたが、全く検出出来なかった。

この遺跡の発掘は、終始寒風吹きすさぶ中で行なわれた。降雨、降雪の後は、発掘区は水に浸り、それが朝零下７～８度になって凍結したことは、遺構、遺物の検出に非常な支障をきたしたことを付け加えておきたい。

第３章　　層　　序

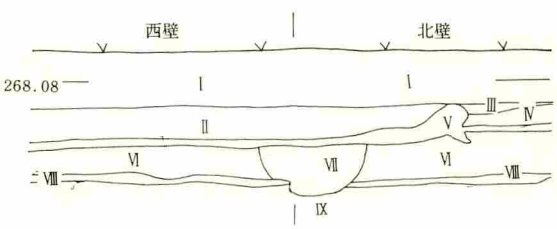
扇状地特有の地層の乱れがあるため、基準層序は定められないが、深く掘った試掘坑６、７、８、９では共通する地層もある。なお各試掘坑の地層番号は必ずしも共通ではない。

試掘坑16では、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ層は腐食土層で水平面がある。これはかつては水田の床土であった可能性があり、試掘坑９のⅢ、Ⅳ、Ⅴ層などが、ほぼこれに比定出来そうである。



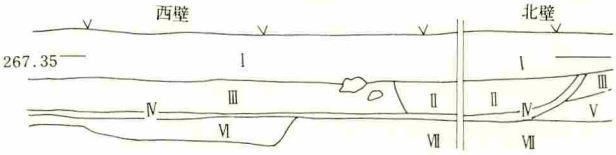
第２図　７号・８号・９号試掘地層図（1：40）

1）　1号試掘、西壁、北壁



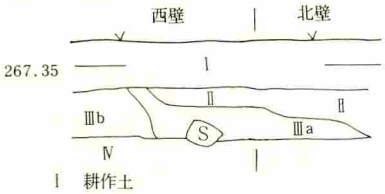
Ⅰ耕作土
Ⅱ黒色土層（有機質腐植土，砂粒混入）
Ⅲ黒色粘質土層
Ⅳ粗砂層
Ⅴ黒色砂質腐食土層
Ⅵ砂層（粒子が細かい）
Ⅶ黒色土層（砂粒混入）
Ⅷ砂質腐食土層
Ⅸ砂層（粒子が細かい）

2）　2号試掘、西壁、北壁



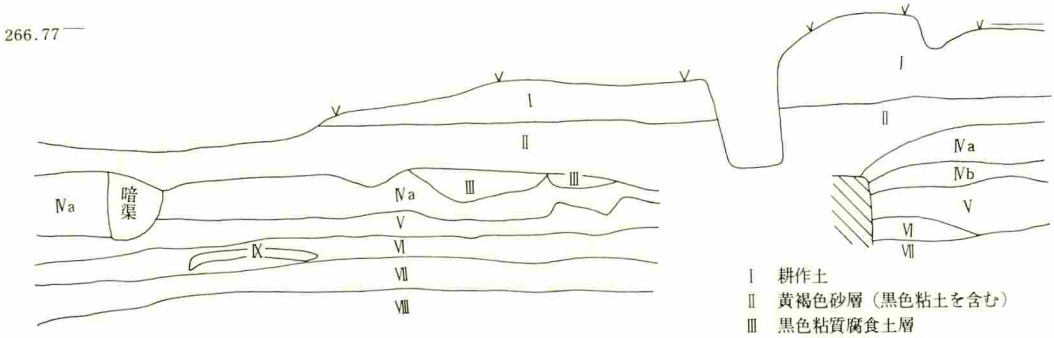
Ⅰ耕作土
Ⅱ黒色粘質土層（上層に酸化鉄層あり）
Ⅲ黒褐色土層
Ⅳ細砂層
Ⅴ砂層（攪乱）
Ⅵ砂礫層（氾濫層）
Ⅶ細砂層

3）　3号試掘、西壁、北壁



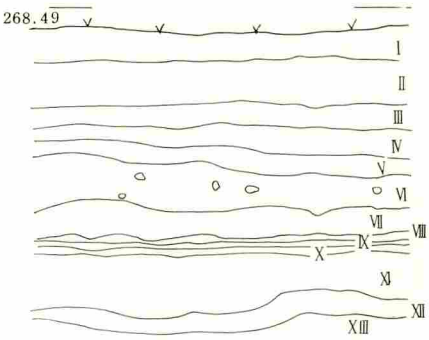
Ⅰ　耕作土
Ⅱ　黒褐色粘質土層（上部に酸化鉄層あり）
Ⅲa　黒色粘質土層
Ⅲb　黒褐色粘質土層
Ⅳ　褐色土層（上部に酸化鉄の推積層あり）

4）　4号試掘、東壁



Ⅰ　耕作土
Ⅱ　黄褐色砂層（黒色粘土を含む）
Ⅲ　黒色粘質腐食土層
Ⅳa　砂層（酸化鉄を含む）
Ⅳb　黒褐色砂層
Ⅴ　黒色砂層
Ⅵ　黒褐色粘質腐食土層
Ⅶ　粗砂層
Ⅷ　砂礫層
Ⅸ　砂層（酸化鉄を含む）

5）　6号試掘、南東壁



Ⅰ　耕作土
Ⅱ　〃　（酸化鉄を含む）
Ⅲ　黒褐色土層（礫を含む）
Ⅳ　黒褐色粘質腐食土層（酸化鉄を含む）
Ⅴ　黒褐色砂層
Ⅵ　砂礫層
Ⅶ　砂質層（鉄分を含む）
Ⅷ　黒色腐食土層
Ⅸ　黒色砂質層
Ⅹ　黒色腐食土層
Ⅺ　灰白色砂質土層
Ⅻ　灰黒色砂質土層
XIII　黒色腐食土層

0　2m

第3図　1号・2号・3号・4号・6号試掘地層図（1：40）

条里制遺構の中にある蔵福遺跡のこの水田面と考えられるものは、試掘坑４で示す道路の地層と合わせ考えると、その施行当時まで遡ることもあり得る。この腐食土層の下層Ⅵ、Ⅶ層は砂層となっていて、後述する中、近世遺構の掘込層と考えられるのであるが、試掘坑６、９では、現地表面の高さ（水田面）が約40㎝くらい後者が低いので、正確な比較は出来ない。さらにこの下層は黒色粘質腐食土層となり、試掘坑６のⅩⅢ層、８のⅩⅡb層や、９のⅧ、Ⅸ層のように禾本科系統の植物が多量に残存している層となる。試掘６では表土から約150㎝下の第ⅩⅢ層黒色粘質腐食土層から採取した茎状の草で放射性炭素による年代測定を学習院大学木越邦彦研究室に依頼して、次のような結果を得た。

学習院大学放射性炭素年代測定結果報告書

山梨県教育委員会教育庁文化課　　1981年４月２日

1980年４月９日受領致しました試料についての ^{14}C年代測定の結果を下記の通り御報告致します。

なお年代値の算出には ^{14}Cの半減期として Libby の半減期5570年を使用しています。また付記した誤差はβ線計数値の標準偏差σにもとずいて算出した年数で、標準偏差（one sigma）に相当する年代です。試料のβ線計数率と自然計数率の差が2σ以下のときは、3σに相当する年代を下限とする年代値（B.P.）のみを表示してあります。また試料の、β線計数値と現在の標準炭素について計数率との差が2σ以下のときには、Modern と表示し、δ ^{14}C%を付記してあります。

記

CodeNo.	試　料	B.P.年代（1950年よりの年数）
Gak—9112。	Plant remains from zofuku Site.Yamanashi Pref。	5350±330 3400 B.C。

以上

木　越　邦　彦

これによると、この付近では約150㎝下の地層が縄文時代中期に形成されたことになる。この時代には浅川扇状地では、前述したように茎状植物包含層が広くあり、草原となっていた地域が広くあったことが推定出来るのである。森林相というより草原相といってよいかも知れない。

中・近世の遺構は試掘坑９のⅢ層と、試掘坑８のⅣ層の砂層直上から掘り込んでおり、その上に所によって薄い砂層が載っているので、この遺構の上層で水害にあっていることも考えられるが、伝説のように、建物が流された程の洪水によって廃絶したものでもないであろう。

次に、発掘地区の北に掘った試掘坑１、２、３の地層についてみると、１の西と北壁では、表土下約46㎝のⅤ層と、約68㎝のⅧa 層が水田の床土と思われ、Ⅴ層は北壁でその上層（表土）まで上っている。これは長直しをする以前の水田の区画線であろう。試掘坑２、３でも１

と同じ現象がみられる。古い水田面からは遺物が検出されなかったので、その時代は不明であるが、水田開発当時にまで遡れる可能性はあろう。

最後に道路を切ったトレンチの地層をみると、ここでも現路面より約48cm下に水路のⅢ層が検出された。Ⅲ層が二筋あるのは、水路の付け替えによるものと考えられる。その東側にはⅣa、Ⅳb、Ⅴ、Ⅵ層に道らしい盛り上った幅約80cmの所がある。石橋条里制遺構第Ⅲ地点にみられる最古の道幅とほぼ同じ広さをもっている。

以上のようにこの地域では、巨視的には砂層と粘質腐食土との互層になっているので小さい氾濫が繰返され、徐々に地層が推積したものと考えられる。

第4章　中・近世の遺構と遺物

遺構は第1図の斜線で示した1枚の水田から集中的に検出された。ここは遺構群の南端で、北側に遺構が広がっていたと考えられるが、北側は水田にする際、削平したために破壊されたと思われる。この遺構群が廃絶した後は、再び水田となり現在に至ったのであろう。

遺構は掘立柱建物址、溝、配石、列石などがあり、相互に重複している。このうち掘立柱建物址の棟数は非常に多くあったと思われ、連結できた13棟の他にも柱穴と思われる穴は数百に及び、柱穴以外の掘り込みも含めると400基以上となる。これらの多くは重複していて特に東域は著しい。多数の溝も大小のものが互いに切合っているので、埋め戻したり、新設したのであろう。また列石が破壊されて溝の中に廃棄された状況のところもあるが、これらの遺構の前後関係は、平面上でも層序でも、一部を除いて判断する資料が得られなかった。

掘立柱建物址と遺物

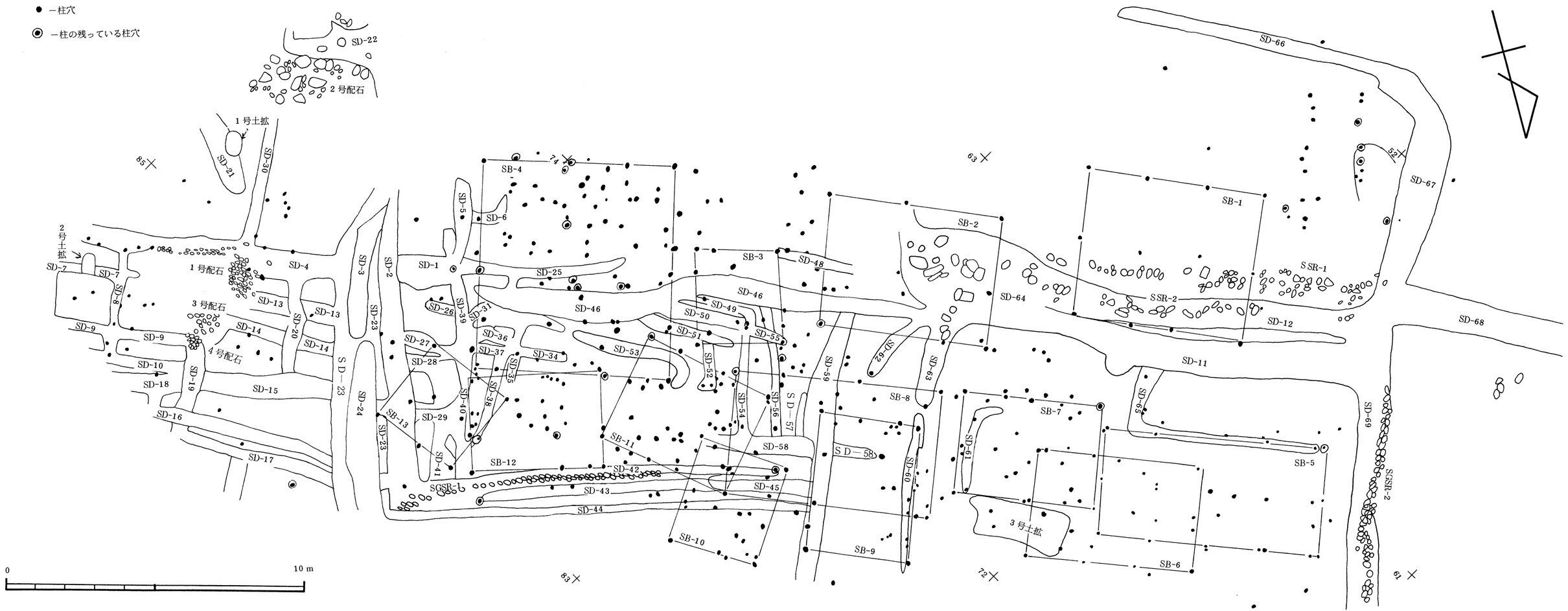
掘立柱建物址の場合は、その遺構内にある遺物でも伴出遺物として確定出来ない要素があるが、ここでは一応建物址の項で取扱い、溝の項ではその覆土から出土したものだけを取り上げることとする。

建物址は13棟確認できたが、柱穴の数から推測すれば、少なくとも数十棟になるはずである。ただ柱穴が濃密に分布しているために、建物として確実に連結出来なかったものは除外した。

この中で最大の4号掘立柱建物址は東西6.5m（約3間3尺）、南北7.1m（約4間）であって、ほぼ正方形を呈する。その

第1表　掘立柱建物柱間距離表

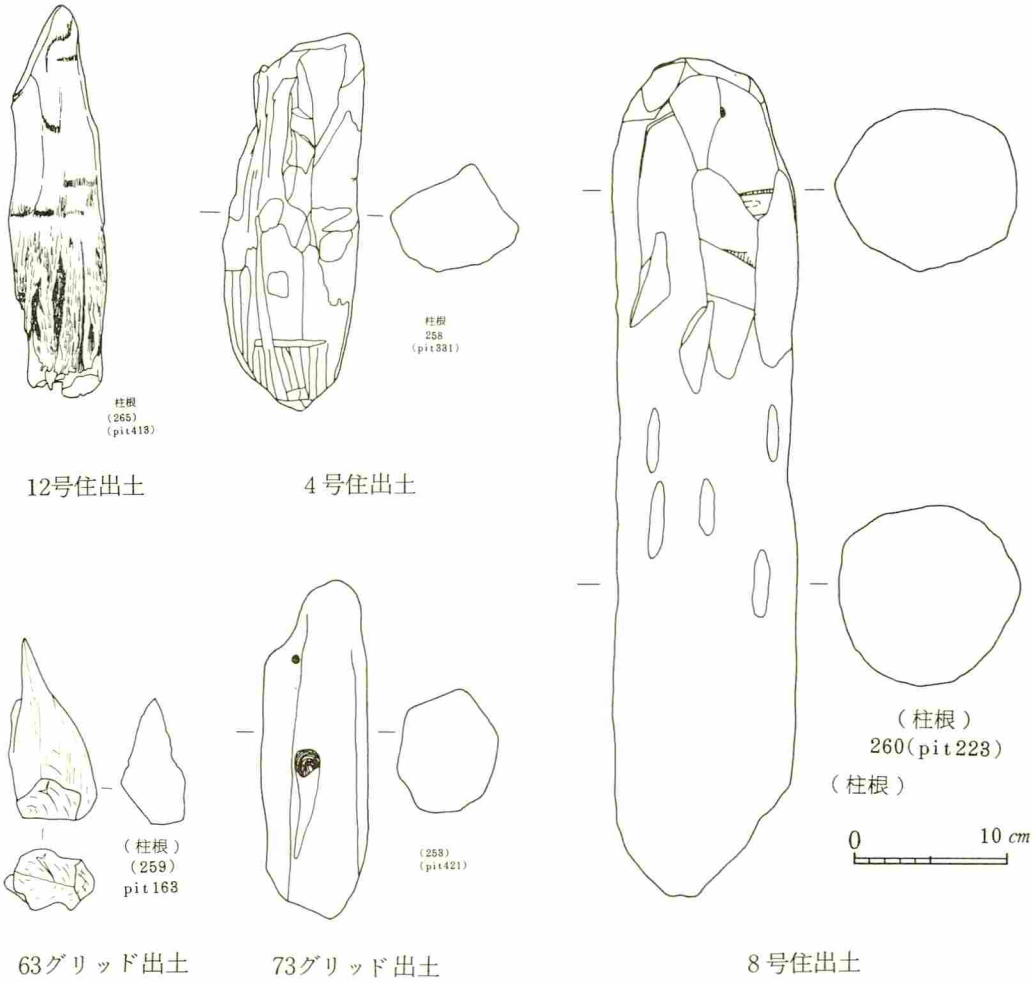
建物番号	東西間 m	東西間 尺	南北間 m	南北間 尺	方向
1	5.9	19.7	4.9	16.3	N→18°→E
2	5.8	19.3	4.4	14.7	N→16°→E
3	2.8	9.33	3.1	10.3	N→8°→E
4	6.5	21.7	7.1	23.7	N→12°→E
5	7.5	25.0	3.6	12.0	N→15°→E
6	5.6	18.7	3.6	12.0	N→17°→E
7	4.2	14.0	3.4	11.3	N→16°→E
8	7.0	23.3	4.2	14.0	N→16°→E
9	3.4	11.3	4.6	15.3	N→16°→E
10	3.0	10.0	3.5	11.7	N→28°→E
11	4.5	15.0	3.7	12.3	N→35°→E
12	3.4	11.3	3.2	10.7	N→8°→E
13	3.1	10.3	3.0	10.0	N→5°→E



第 4 図　蔵福遺跡遺構全体図（1:100）

他の正方形のものは、10号、13号建物址だけで、他は東西に長い長方形を呈する。建物の間口、奥行とも、6尺（1間）を単位としていない端数がある。また柱間距離も非常に不統一であり、、柱も正しく一直線上に並ぶものが少ない。このような建物に類するものに4号、5号、6号、7号、8号、11号、12号、13号建物址がある。

遺物は、柱根と土師質土器、瓦質土器、陶磁器類とがある。

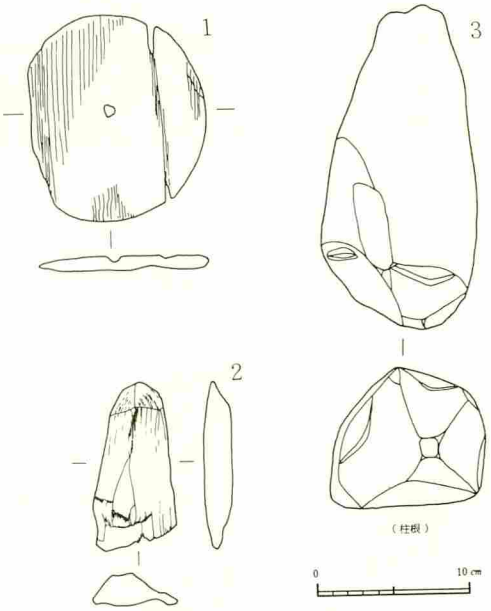


第5図　柱根実測図

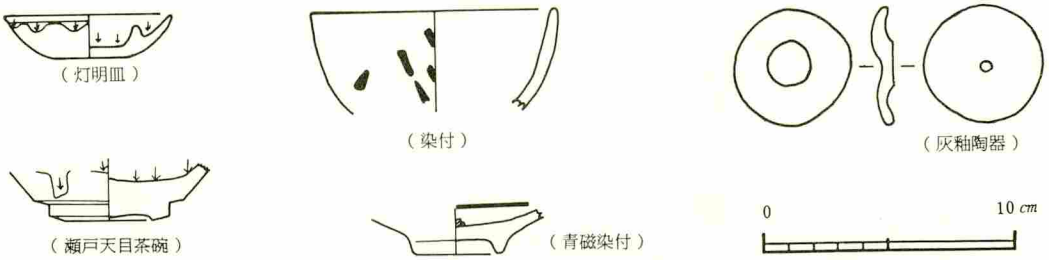
柱根は8本あり、そのうち3本は4号建物址の№331、8号建物址の№223、12号建物址の№265で、他の4本は建物にならない。柱根の断面形状は円形で、丸太をそのまま使用していることがわかる。ただ1本を除いて、すべてが鋭利な刃物で根本を切って尖らせてい

ることが特徴である。樹種は別表に示したとおり、広葉樹を利用していることが注目される。

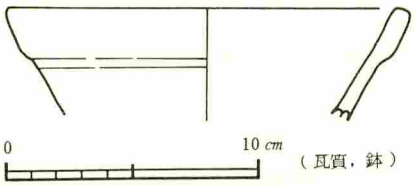
次に土器類を各グリッド毎に上げると、51グリッドでは磁器、陶器が出土し、この内1片は16世紀の青磁染付の底部で、その内面には白釉の地にコバルトの絵画があるものである。また陶器では瀬戸系の、14〜15世紀の瀬戸天目茶碗の底部があり、52グリッドからは、同時期の常滑系の鉢破片が出土した。62グリッドから出土した土師質土器のうち、その一つは口縁部がやや外反し、他の一つは器外胴部が有段状になっている。瓦質の擂鉢の底部破片も2個出土しており、内面の条線が8本のものとないものとがある。63グリッドからは染付破片と高台付き土師質皿が出土している。73グリッドからは土師質皿の破片が6個、土師質の小型手捏土器と中国製染付破片が出土している。土師質皿は外面胴部が有段のものとそうでないものとがあり、口唇部が尖りぎみのものと、丸味のあるもの



第6図　73グリッド出土遺物実測図

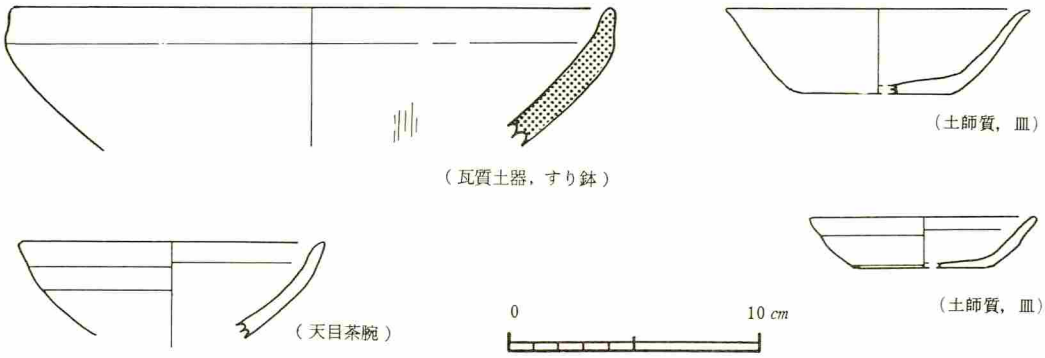


第7図　51グリッド出土遺物実測図

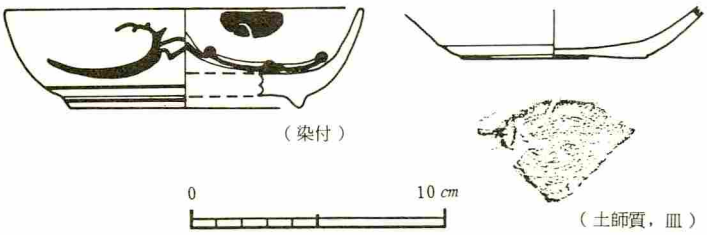


第8図　52グリッド出土遺物実測図

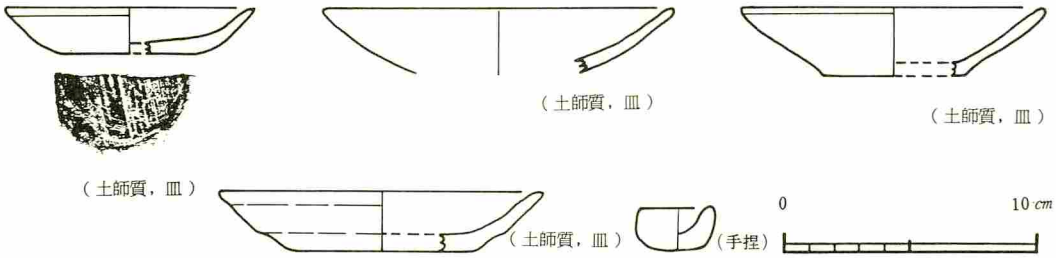
とがある。74グリッドからは土師質土器、7本・5本・3本の条線のある瓦質擂鉢と3本条線の瓦質擂鉢破片、瓦質火鉢様の底部、中国製染付破片2個、鉄釉を施した小壺形陶器、土師質の3足碗形土器と砥石破片3個が出土している。



第9図　62グリッド出土遺物実測図



第10図　63グリッド出土遺物実測図



第11図　73グリッド出土遺物実測図

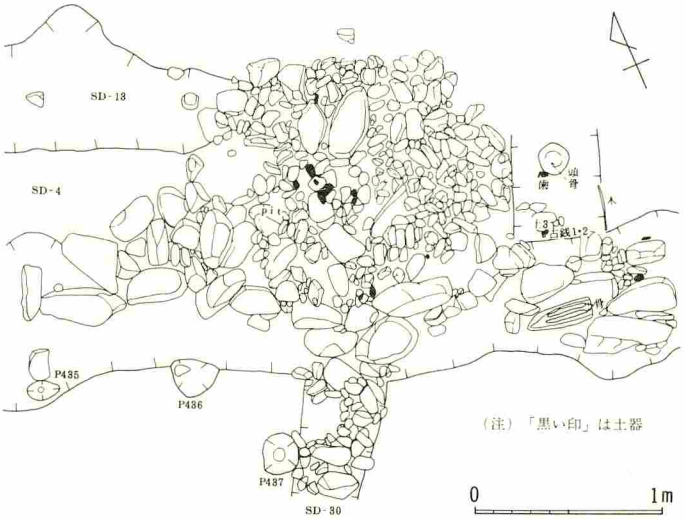
土　　壙

3基あり、その内2基は径約1 mの円形、他の1基は縦約3.4m、横約1.2mの方形である。出土遺物もなく性格も不明である。

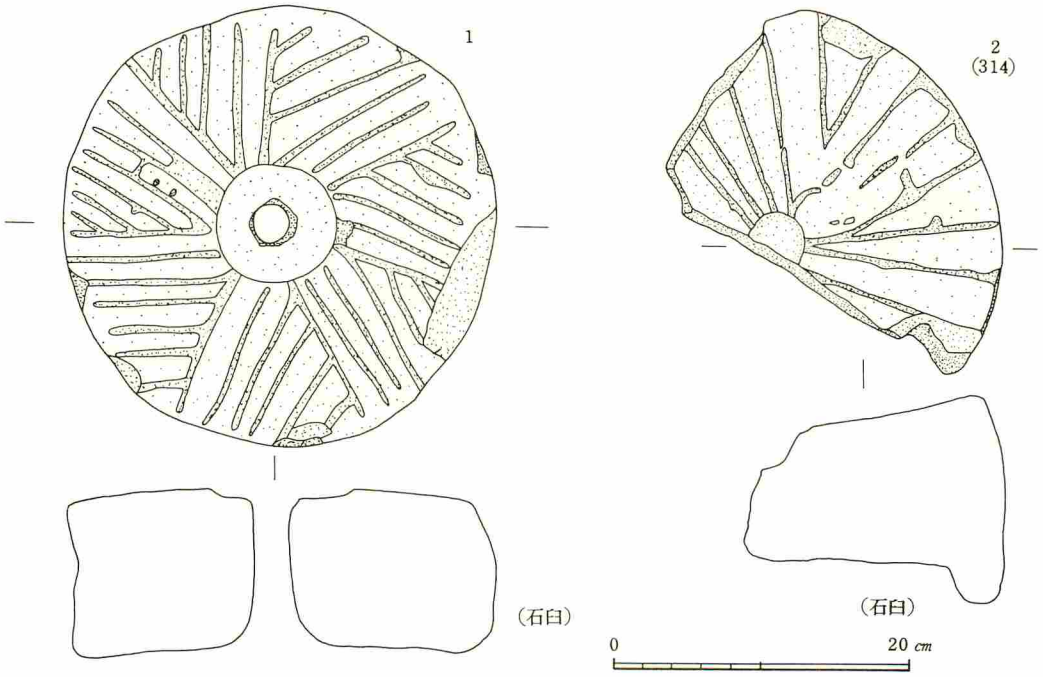
配　　石

1号配石 84グリッドにあって、直径約1 m、深さ約40 cmの土拡を石で埋めてある。石の大きさは約40cmから拳大である。ここから4号溝と30号溝が、また東に集石列が続いている。

配石の中から石臼が1個出土した。



第12図　1号配石実測図（1：40）



第13図　1号配石・61グリッド出土遺物実測図（1：5）

2号配石　建物や溝等の遺構群から離れて74グリッドで検出した。規則性がないので、備畜しておいたものか捨てたものかも知れない。

3号配石　1号配石の北にあり、意図的に並べたものかどうか若干疑問がある。

遺物は出土しなかった。

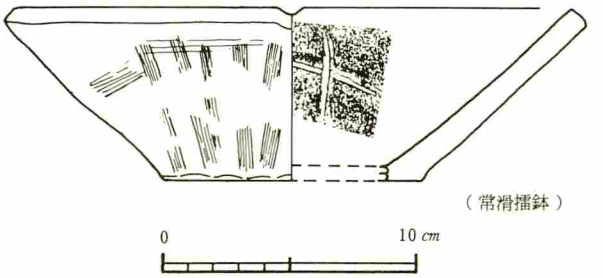
4号配石　3号配石の更に北にあって、その状態は3号配石に似ている。

遺物は出土しなかった。

列　石

1号列石　遺跡の南西隅にあり、長さは約17mである。旧状を留める部分は少ないが残された部分で判断すると列石の面は南にあったようである。

擂鉢の破片が1片出土した。



第14図　1号列石出土遺物実測図

2号列石　1号列石の北にある12号溝の底にある。これは1号列石が崩れ落ちたのかも知れない。遺物は出土しない。

集　石　列

1号集石列　中央北側にある約9mの暗渠排水施設（冷抜き、水道）である。直径5cmくらいの丸太に石を立てかけて、さらにその上に拳大の礫をのせている。この種の暗渠排水施設や若干形態の異なるものも他にあったが、代表的な1号集石列だけ掲載した。

遺物は出土しなかったが、時期は江戸時代か、それ以前になろうか。

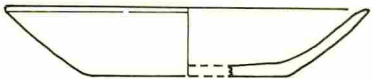
2号集石列　北西隅にある69号溝の中とその西端にあって、幅50～60cm、長さ約6.3mで大小の石によって構成される。石垣が崩落したもののようで、12号列石と同時期であったかも知れない。遺物は出土しなかった。

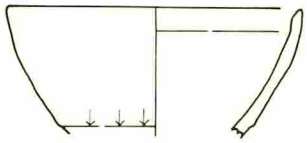
溝と遺物

掘立柱建物址と重複している。複雑に枝があり、溝幅も広い所は3m近くあり、狭い所は

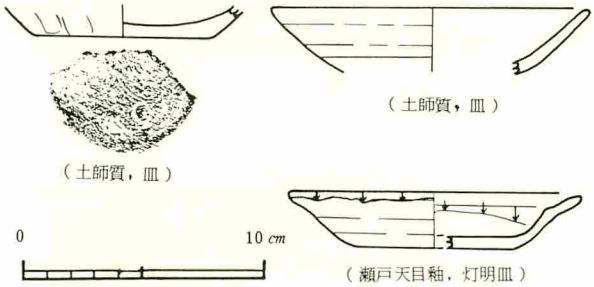
20〜30㎝であり、深さも一定していない。しかし自然に掘られた溝とは考えられない。

遺物は陶器、土師質土器、瓦質土器などが出土した。陶器は69号溝から天目茶碗破片が、64号溝から14〜15世紀の瀬戸天目釉を施釉した灯明皿が出土した。土師質土器は46、64、69号溝等から破片が出土した。これらは他に比較してやや器肉が薄く、口唇部が尖っている。中にはわずかに有段状のものや底の中央部が凹んでいるものもあり、この遺跡から出土した土師質土器に共通している点を有している。瓦質土器は火鉢と思われるものの底部、口縁部破片と擂鉢の底部破片が出土している。





第15図　69号溝出土遺物実測図

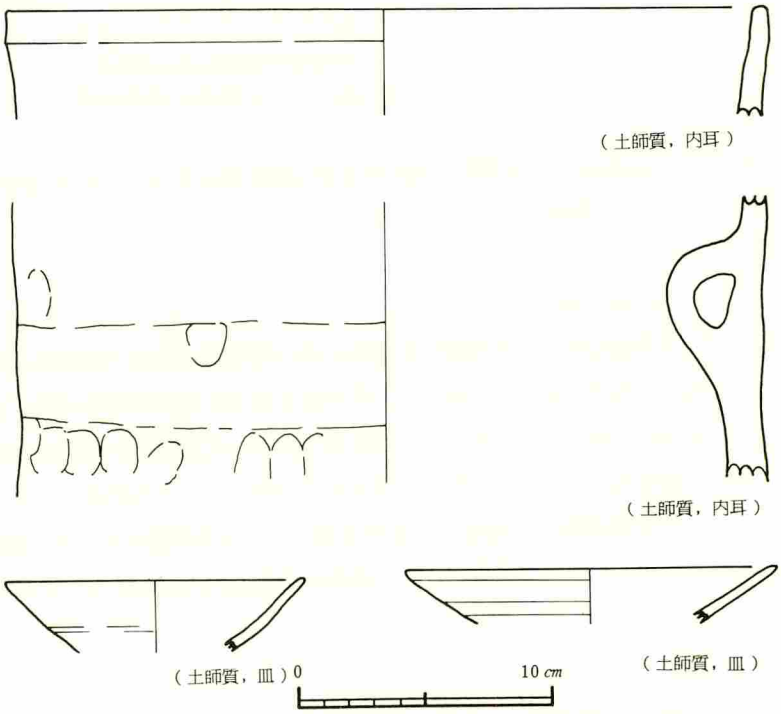


第16図　64号溝出土遺物実測図

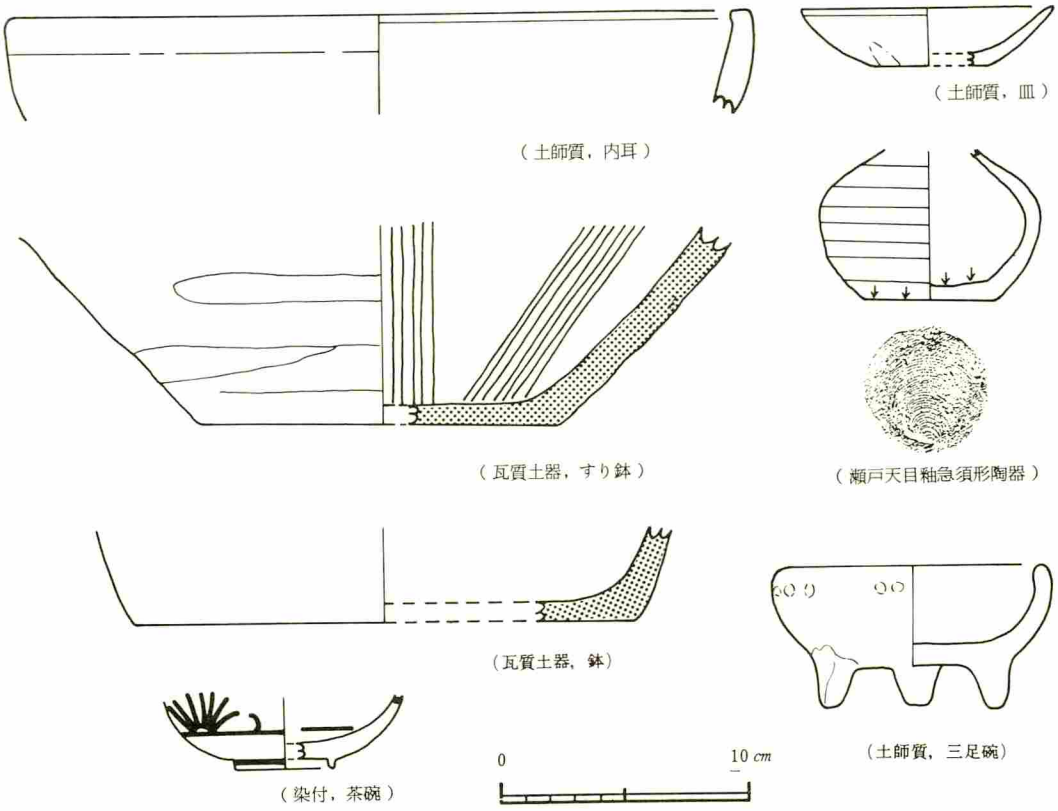
擂鉢は内部の条線が擦り減っていない。

他に瓦質の内耳土器の内耳部分が出土している。

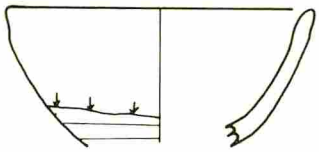
その他に74グリッドから瀬戸天目釉の急須形陶器胴部があるが、15〜16世紀になろう。また121グリッドから16世紀の瀬戸天目茶碗の半分が、また111グリッドからも同時期の瀬戸天目茶碗の底部が出土している。51グリッドからは、江戸時代末期の灯明皿の破片も出土している。



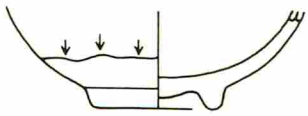
第17図　46号溝出土遺物実測図



第18図　74グリッド出土遺物実測図



第19図　121グリッド
出土遺物実測図



第20図　111グリッド
出土遺物実測図

遺物からみた蔵福遺跡について若干考察を加えておこう。

土師質土器の皿類は、勝沼町の岩崎氏館跡（13世紀頃と推定されている）と同町勝沼氏館跡上層（16世紀中葉）出土の皿類の間の形態に比定出来ると考えられる。ただ器肉の厚さ、口縁部胴部が有段状になっている点などは、岩崎氏館跡出土の皿によく似ている。陶器類は瀬戸、美濃系と考えられるので、14世紀以前には遡らず、14世紀から16世紀末までであろう。また磁器類は染付がそのほとんどを占め、これらは中国の明（1368～1615年）代製作品であるという。

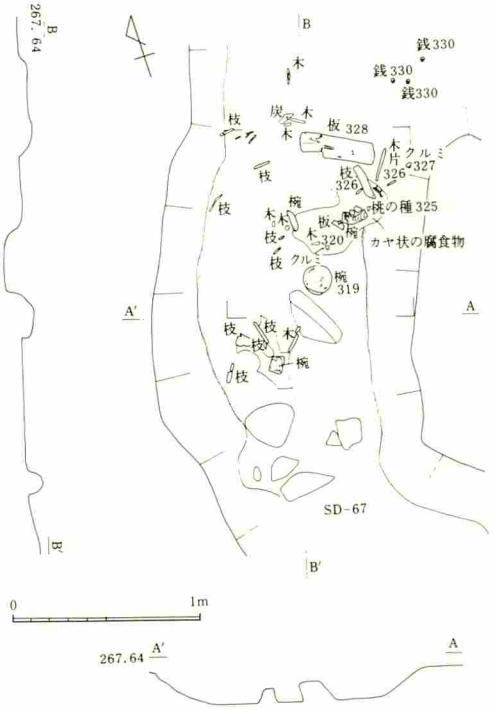
以上から考えると蔵福遺跡は、出土した早期の土師質土器に与えられる年代（13～15世紀）から、美濃黄瀬戸の終る14世紀から16世紀初頭の間と思われるが、15世紀的要素の方が多いと言える。

この他特殊遺物に木製品、青銅製品等がある。主なものをあげると次のとおりである。

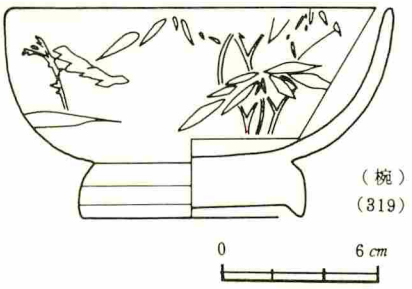
42グリッドから人骨らしい物を伴出した。67号溝からは、

漆塗り椀が２個出土し、材質はナラ、クヌギ類で、２個とも内面は黒塗り、外面は黒地に朱で山を遠景とし、近景に広葉樹を配している。51グリッドで出土した下駄は材質はノグルミで、鼻緒の穴はやや内側に片寄り、横緒の穴間は狭い。女性用であろうか。41号溝から出土した、有孔方形板は長辺が15㎝あり、孔は７㎜である。品名は不明であるが、民俗例としては、これに棒をつけて、醤油や味噌を造る際に桶の中をかき廻す用具に似ている。

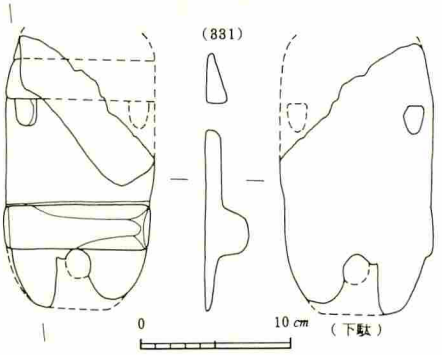
これに似る円形板も73グリッドから出土している、直径13㎝で中央に凹みがあり、材質はオニグルミか、サワグルミ類である。



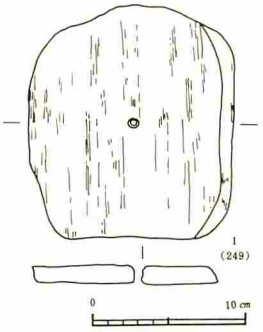
第21図　67号溝遺物出土状況（1：40）



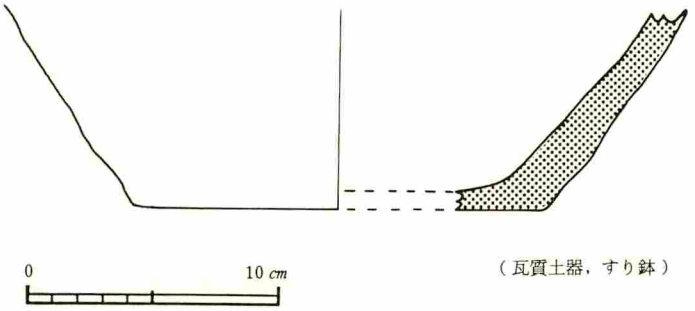
第22図　67号溝出土遺物実測図



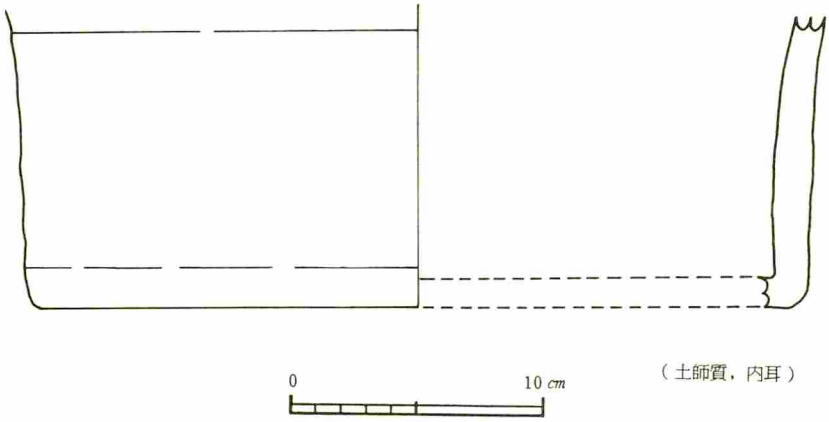
第23図　51グリッド出土遺物実測図（１：５）



第24図　41号溝出土遺物
実測図（１：５）

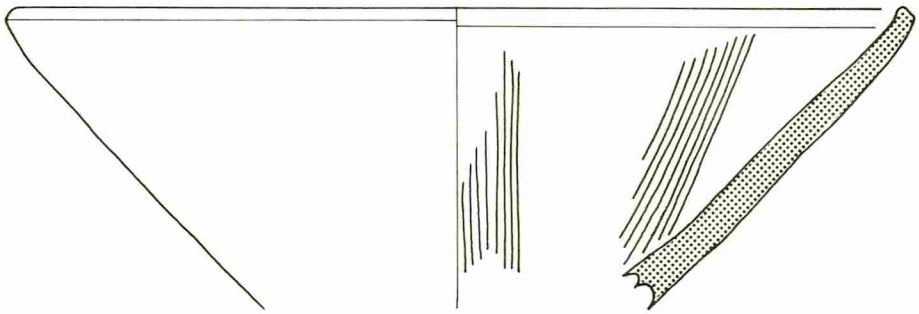


第25図　59号溝出土遺物実測図

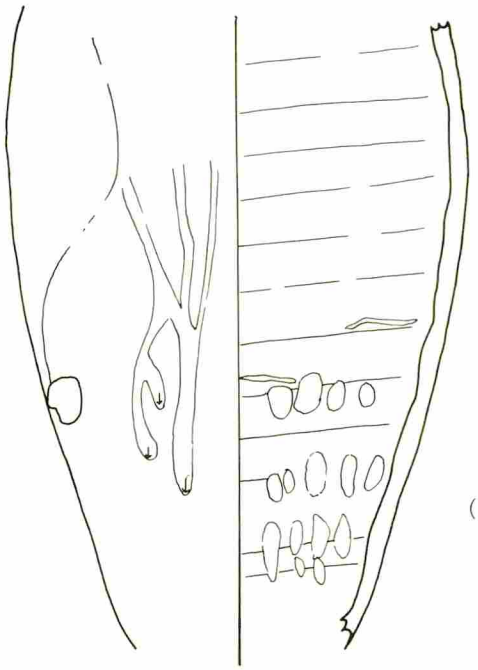


（土師質，内耳）

第26図　11号溝出土遺物実測図

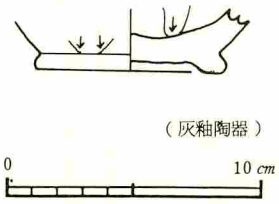


（瓦質土器，すり鉢）

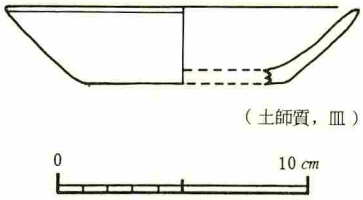


（灰釉陶器，長頸壺）

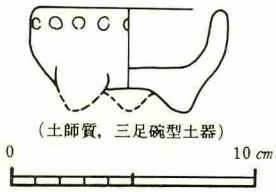
第27図　12号溝出土遺物実測図



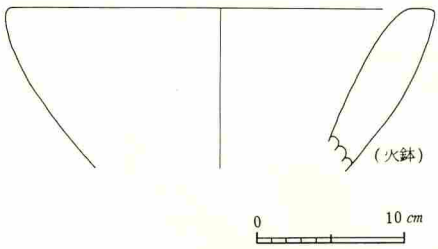
第28図　42グリッド出土遺物実測図



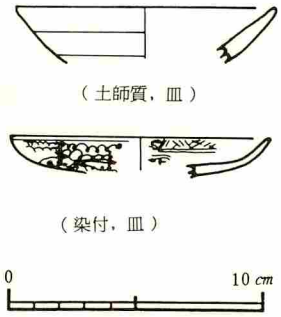
第29図　83グリッド出土遺物実測図



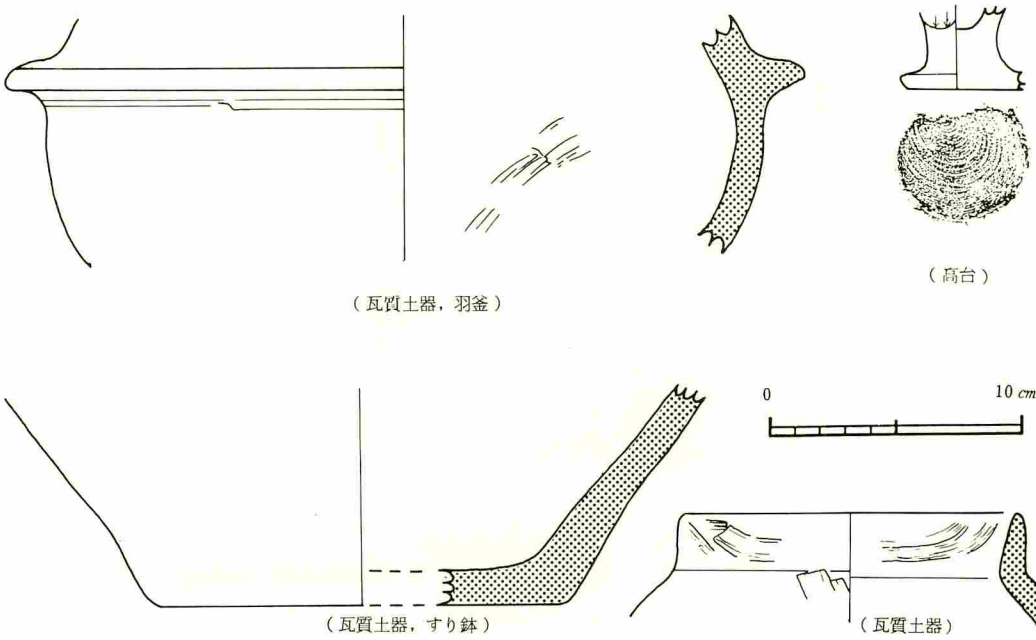
第30図　84グリッド出土遺物実測図



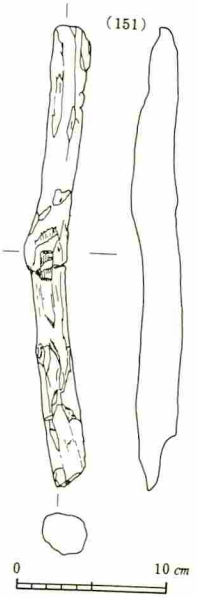
第31図　84グリッド出土遺物実測図



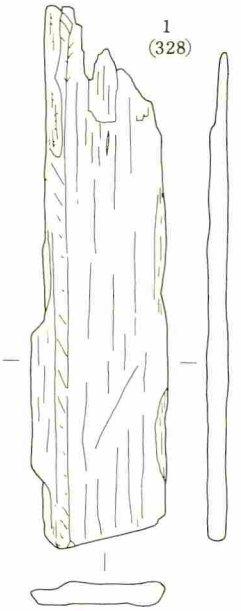
第32図　123グリッド出土遺物実測図

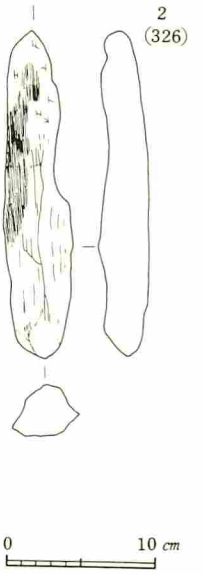


第33図　102グリッド出土遺物実測図

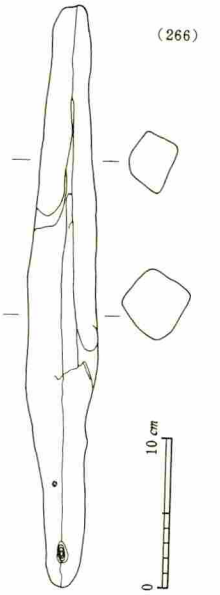


第34図　2号溝出土遺物実測図

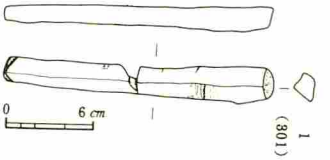




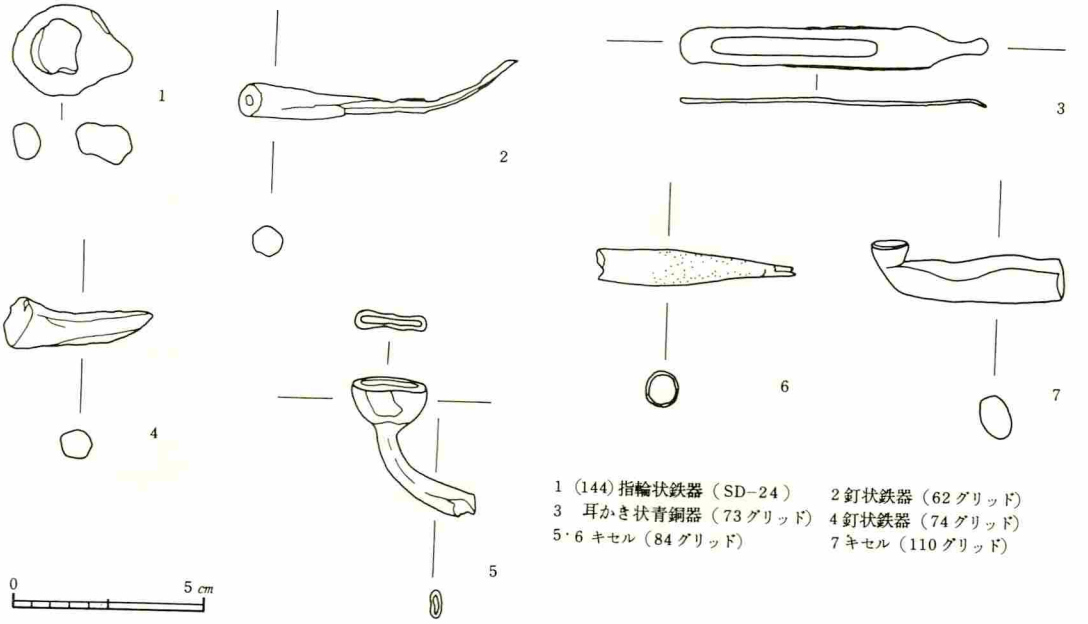
第35図　67号溝出土遺物実測図



第36図　83グリッド出土遺物実測図（1：5）

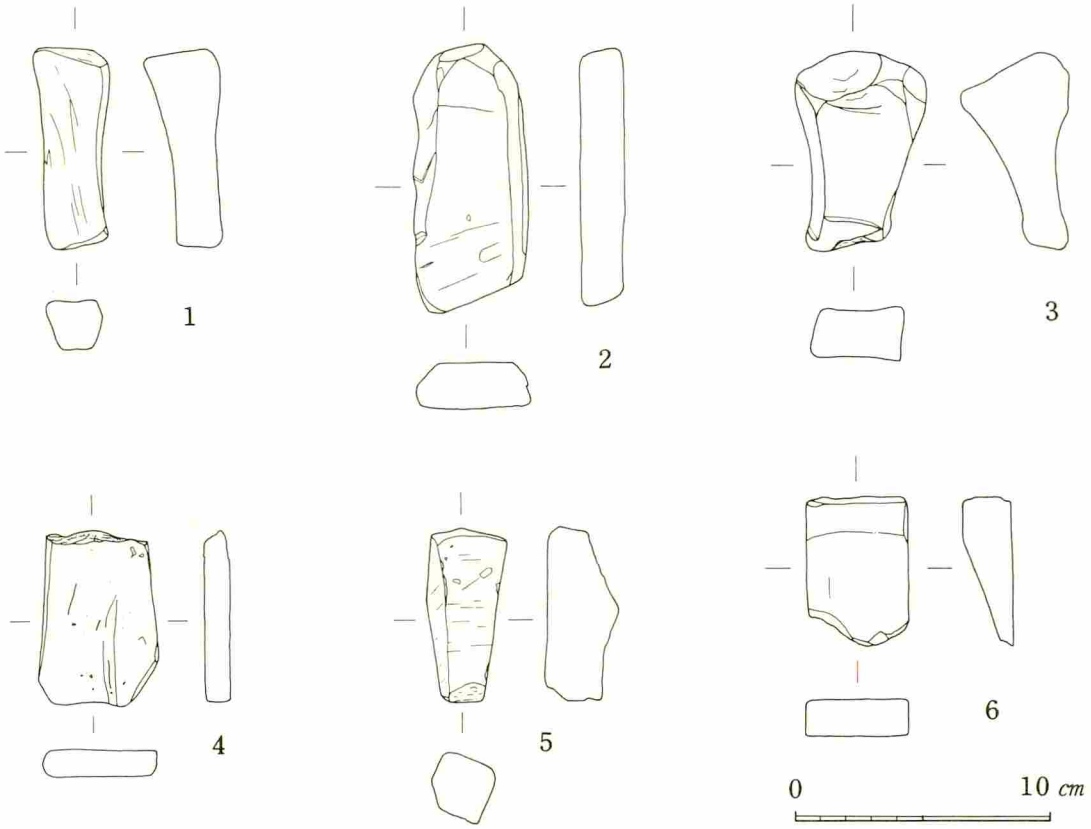


第37図　62グリッド出土遺物実測図



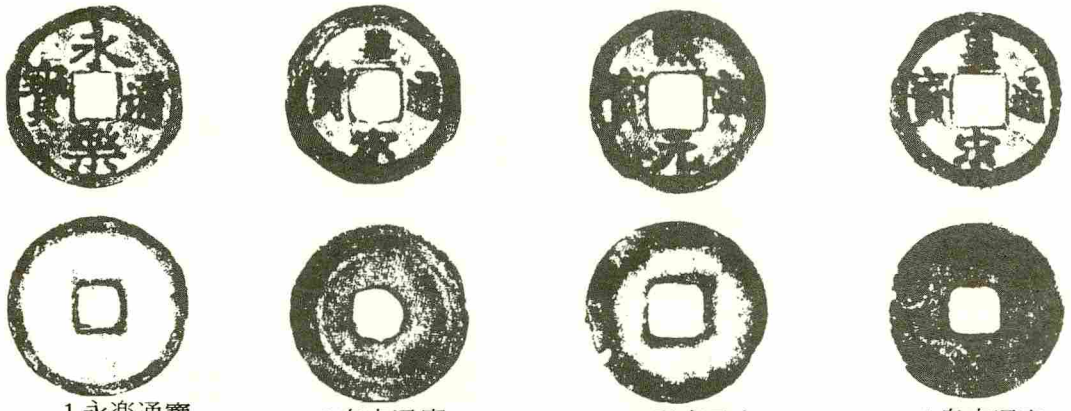
1（144）指輪状鉄器（SD−24）　2釘状鉄器（62グリッド）
3　耳かき状青銅器（73グリッド）　4釘状鉄器（74グリッド）
5・6 キセル（84グリッド）　7キセル（110グリッド）

第38図　鉄製品実測図（1：2）



第39図　砥　石　実　測　図（1：3）

1. ＳＤ－１（154）、　2. ＳＤ－64（302）、　3. 72グリッド（268）
4. 73グリッド（212）、　5. 74グリッド　6. 74グリッド



1 永楽通寶
41GSD－67 №330

2 皇宗通寶
41GSD－67 №330

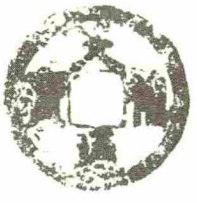
3 熙寧元寶
41GSD－67 №330

4 皇宗通寶
51G 4 層№353

第40図　銭　貨　拓　影

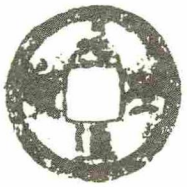
5 景徳元寶
61G 5 層 №316

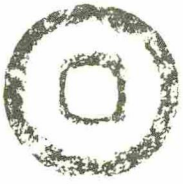
6 元□通寶
62G 2 層



7 文□通寶
73G 3 層

8 元豊通寶
73G 3 層 SD-46
№208

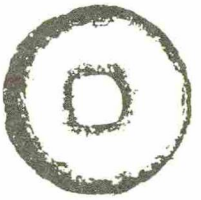




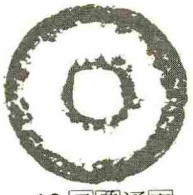
9 □□通寶
73G №262

10 開元通寶
74G 3 層

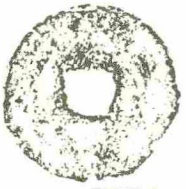
11 永楽□寶
84G 人骨の上（1号集石）①



12 元豊通寶
84G 人骨の上
（1号集石）②



13 元豊通寶
84G 人骨の上
（1号集石）③



14 元□□寶
102G

15 永楽通寶

第41図　銭　貨　拓　影

第5章　増福山利最寺の関係資料について

一般的に知られる資料を掲載しておく。

1、『甲斐国志』巻77、仏寺部第5、八代郡小石和筋では次のとおりである。

増福山利最寺（増利村）同宗同末黒印三百廿四坪、本尊ハ釈迦、創造未タ審ナラ、旧牌一基増生院利山浄運居士元暦二（乙巳）年六月十五日　伝ヘ云　田谷大納言ト云フ人本村ニ来リ住セリト、其ノ旨趣ヲ知ラズ世ノ乱ヲ避ケシ人ナルベシ、文禄中真言ノ規ヲ改メテ当宗トナルト云フ

注「同宗同末」は「曹洞宗竜安寺末」の意である。

2、『甲斐国社記・寺記』第3巻では次のとおりである。

上　八代町増利村曹洞宗　利最寺

覚

一、本　堂　　竪七間　横五間
一、廊　下　　竪弐間　横壱間
一、庫　裡　　竪七間　横四間
一、雪　隠　　竪弐間　横壱間
一、境内黒印　　三百廿四坪
一、開　闢　　開闢之儀記録無之ニ付相分リ不申候事
一、開山宗印和尚　寛永三丙寅年四月二十八日入寂仕
　　当暦迄弐百四拾三年ニ相成申候事

四奉行黒印証文之写

御寺内覚

三百廿四坪　　増利村之内

右御寄進候国家之御祈念寺中御造営肝要候重而御朱印申調可進之候以上

桜井安芸守信忠　書判

慶長八癸卯　　石原四郎右衛門尉昌明　書判

三月朔日　　小田切大隅守茂富　書判

跡部九郎右衛門尉昌忠　書判

理西寺

右之通相違無御座候以上

慶応四戊辰年　八代郡米倉村竜安寺末

七月　同郡増利村

曹洞宗　利　最　寺㊞

寺社御役所

3、『八代町誌』（昭和50年、八代町役場）では次のとおりである。

1、所在地　八代町増利門ノ内1,762番地

1、宗　派　曹洞宗竜安寺末

1、本　尊　釈迦牟尼仏

　脇　士　文殊及普賢菩薩

1、鎮　守　白山権現

1、開　基　内藤資料に「増生院殿利山浄運大居士　是ハ往古五内人ニも候外田谷大納言と申伝へ当所ニ住居被致候より当村元祖之人也と申伝候得共当寺ハ勿論村内ニテも書記等一向相見へ不申然共当村元祖之人成と申伝へ候元暦二巳年6月15日逝去」とある。

1、開　山　鉄山宗印。寛永3年（1626）4月28日遷化。ただし内藤資料は六月とあり。

1、開　闢　享禄元戊子年…当山の記録　一に云永禄2未年創立…東八代郡誌　創造ハ年暦相知不申候……（内藤資料・甲斐国志）

1、境　内　163坪

1、旧寺領　境内324坪　黒印地

　甲斐志料集成は302坪

檀徒戸数　19戸

利最寺檀徒に末木氏を名乗る1戸があり、その墓地に次の1基がある。

正面

田多信濃守之奥	
紋　理西寺殿法雲常慶大禅定尼	末木
祖先累代諸精霊位高顕	

紋は丸にタカの羽ちがい

（筆者註・墓誌名「田多」は「田谷」のことであろう）

右面　元暦元年辰6月

左面　大正14年3月　末木強蔵建之

また末木氏の屋敷付近を田谷屋敷と言い伝え、豪族の屋敷であるという。

以上のように増生院殿、理西寺殿の没年や伝説からも、開山の時期は12世紀後半と考えることが出来そうであるが、この遺跡と現利最寺と関係あるとしても、遺物の上では年代がかけ離れていると考えざるを得ない。

また文禄時代の改宗が現在地に移転した時期だとすれば、遺物の年代決定が出来る資料ともなる。

第2表　蔵福遺跡出土の種核

番号		遺物出土遺構またはグリッド	巾 Wide	長 Long	厚 Thick	L/W	備　　考
1	オニグルミ	41GSD—67No.320			1.20		5.欠損、炭化
2	モ　　モ	41GSD—67No.325	1.95	2.835	1.45	1.45	14.自　生
3	オニグルミ	41GSD—67No.327					2.半分以下に欠損
4	モ　　モ	52G　表土	1.455	2.18		1.50	11.自生、内側　欠損
5	モ　　モ	52G　表土	1.98	2.30	1.56	1.16	11.自生
6	モ　　モ	83G　2層	1.70	2.20	1.40	1.29	10.自生
7	モ　　モ	83G　2層	2.00	2.62	1.43	1.31	10.自性、尖端が少し欠損
8	モ　　モ	84G　3層	1.68	2.20	1.33	1.31	18.自生、炭化　欠損
9	モ　　モ		1.80	1.97	1.06	1.09	12.自生
10	モ　　モ		1.36	1.925	1.20	1.42	12.自生
11	モ　　モ	51G	1.77	2.05	0.74	1.16	半分、側部欠損
12	モ　　モ	51G	1.53	2.20	1.00	1.44	欠損
13	モ　　モ	51G	1.52	2.15	1.27	1.41	
14	モ　　モ	51G	1.56	2.24	0.77	1.44	半分
15	モ　　モ	51G			0.66		半分、ひどく欠損
16	モ　　モ	51G					周辺炭化、ひどく欠損
17	モ　　モ	51G	1.70	2.49	0.65	1.46	半分
18	モ　　モ	51G	1.86	2.57	0.73	1.38	半分
19	モ　　モ	51G		2.07	0.67		半分、側面欠損
20	ク　ル　ミ	51G	2.64	3.50	1.29	1.33	半分
21	モ　　モ	52G	1.83	2.68	1.29	1.46	欠損
22		52G	1.56	1.33	0.78	0.85	種核名不明
23	モ　　モ	73G溝の中	1.35	1.91	1.22	1.41	
24	モ　　モ	73G溝の中	1.81	2.03	1.06	1.12	少し欠損
25	モ　　モ	73G　3層	1.93	2.27	1.39	1.18	
26	モ　　モ	73G　3層	2.00	2.56	1.52	1.28	
27	モ　　モ	73G　3層	1.42	2.26	1.01	1.59	
28	ク　ル　ミ	73G　3層	2.62	3.05	1.20	1.16	半分
29	ヒメグルミ	73G　3層		2.19	0.70		欠損
30	モ　　モ	74G　3層			0.79		欠損、炭化
31	ヒメグルミ	74GSD—23②			0.89		欠損
32	ヒメグルミ	74GSD—23②	2.39	3.28	1.20	1.37	半分

番号		遺物出土遺構またはグリッド	巾 Wide	長 Long	厚 Thick	L/W	備考
33	モ　モ	84G溝中E 5	1.66	2.10	1.23	1.27	
34	モ　モ	84G溝の中E 5	1.84	2.50	1.30	1.36	
35	モ　モ	84G溝の中E 5	1.98	2.46	1.45	1.24	
36	モ　モ	84G溝の中E 5	2.27	2.785	1.66	1.23	
37	モ　モ	84G　2層	1.59	2.21	1.23	1.39	24.
38	マツカサ	74GSD—23②		3.28	1.35		炭化

（註）　1～10　市河三次教授鑑定

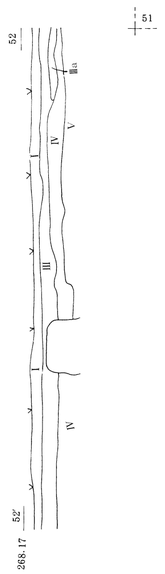
第3表　蔵福遺跡出土木材の識別結果

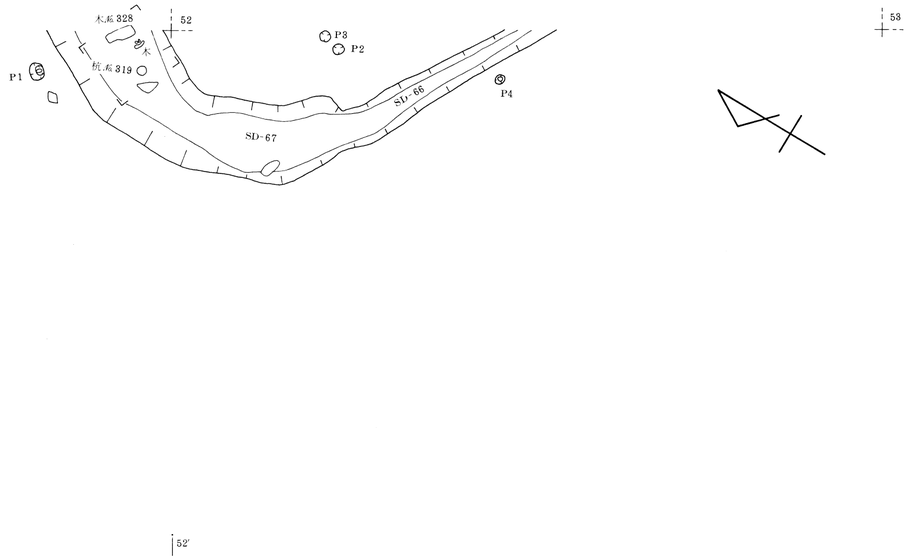
出土遺構	遺物No.	試料No.	遺物名	材の構成要素 放射組織	軸方向柔細胞	木繊維	道管	水平樹脂	垂直樹脂	放射組織	樹脂細胞	仮道管	針広葉樹名	組織の主な特徴	樹種
D—3	No.145	31	木片					○	○	○	○		広	散孔材、道管孔単独一房状、径中、分布密、放射組職細胞複列	カツラ、ホオノキ
SD—67	No.319	17	椀					○	○	○	○		広	環孔材、道管径大、やや火炎状、放射組織の幅は大	ナラ、クヌギ類
SD—4	No.328	42	板	○	○								針	らせん肥厚なし、放射組織細胞高低い	モミ、シラベ類
73G	No.260	41	柱					○	○	○	○		針	道管配列やや放射状、径大～小、放射組織単列細胞高が高い	シイノキ但し、ナラクヌギの可能性あり
SD—12	No.352	39	杭	○	○								針	仮道管径小、年輪移行緩、放射組織細胞高やや高い、らせん肥厚なし	モミ、シラベ類
52G		69	木片					○	○	○	○		広	散孔材道管孔房状、径中～小、分布中木織維径小、放射組織単列	オニグルミ、トチノキ
73G	No.258	34	柱	○									針	木口面のみ、樹脂細胞が認められない仮道管径小、年輪移行緩	モミ、シラベ類
73G	No.253	36	柱	○	○								針	No.34に近似するも樹脂細胞垂直樹脂道らしきものが認められる	マツ類又はモミ類
83G	No.266	40	杭					○	○	○	○		広	環孔材、道管径大～小、火炎状配列、放射組織単列	クリ、シイノキ但しナラクヌギの可能性あり
83G	No.264	32	木の根					○	○	○	○		広	散孔材道管孔単独～一部房状、径中、分布密、放射組織細胞複列	カツラ、ホオノキ
51G	No.331	14	げた				○		○	○	○		広	環孔材、道管径大、道管孔単独へ房状柔細胞接線状、放射組織幅中	ノグルミ
73G		15	杭					○	○	○	○		広	散孔材、道管径小、単独～房状、放射組織幅小、単列～複列	マユミ、ヤナギ、トチノキ、ホオノキ
73G3	No.240	16	丸い板					○	○	○	○		広	散孔材道管径小、単独～房状、分布やや粗で放射状、放射状組織単列	オニグルミ、ササワグルルミ類

第6章　ま　と　め

蔵福遺跡は中世後半の寺院址と考えられる。遺構は中央道路線外の下（西）か上（東）に広がっていると考えられ、今回の発掘した範囲は極く限られた部分で、しかも遺物の編年も、一般化されていないため充分な考察は出来なかった。主な遺構は掘立柱建物、配石、集石列、溝群や墓壙があり、遺物は土師質土器、陶器、磁器や木製品があり、この中には仏具も含まれている。現増福山利最寺に関する洪水伝説もある遺跡である。

第42図　蔵福遺跡41・42グリッド平面図
（1：60）



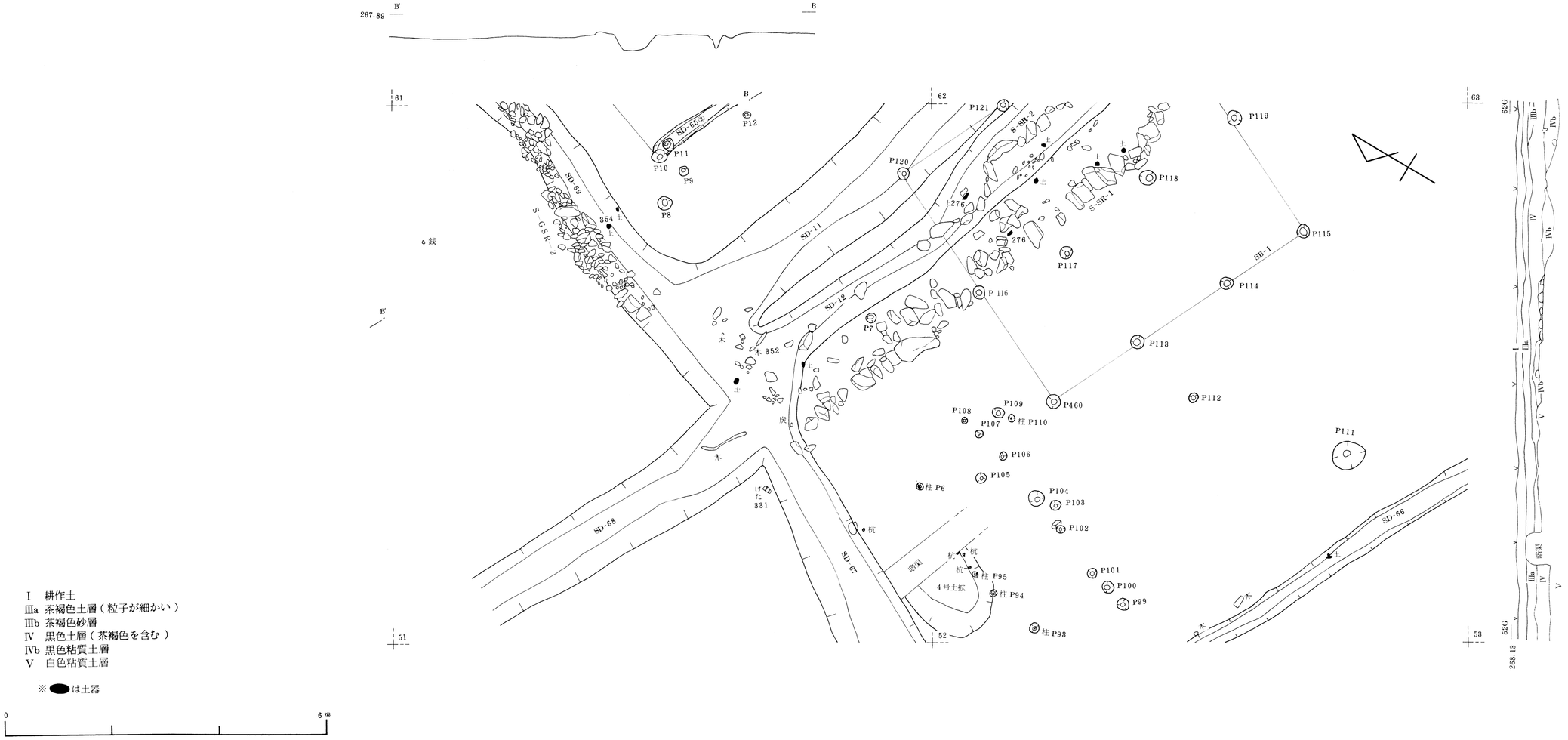


I　耕作土
III　茶褐色土層（粒子が細かい）
IIIa　茶褐色砂層
IV　黒色土層（茶褐色を含む）
V　白色粘質土層

0　6 m

第43図　蔵福遺跡51・52グリッド平面図

（1:60）

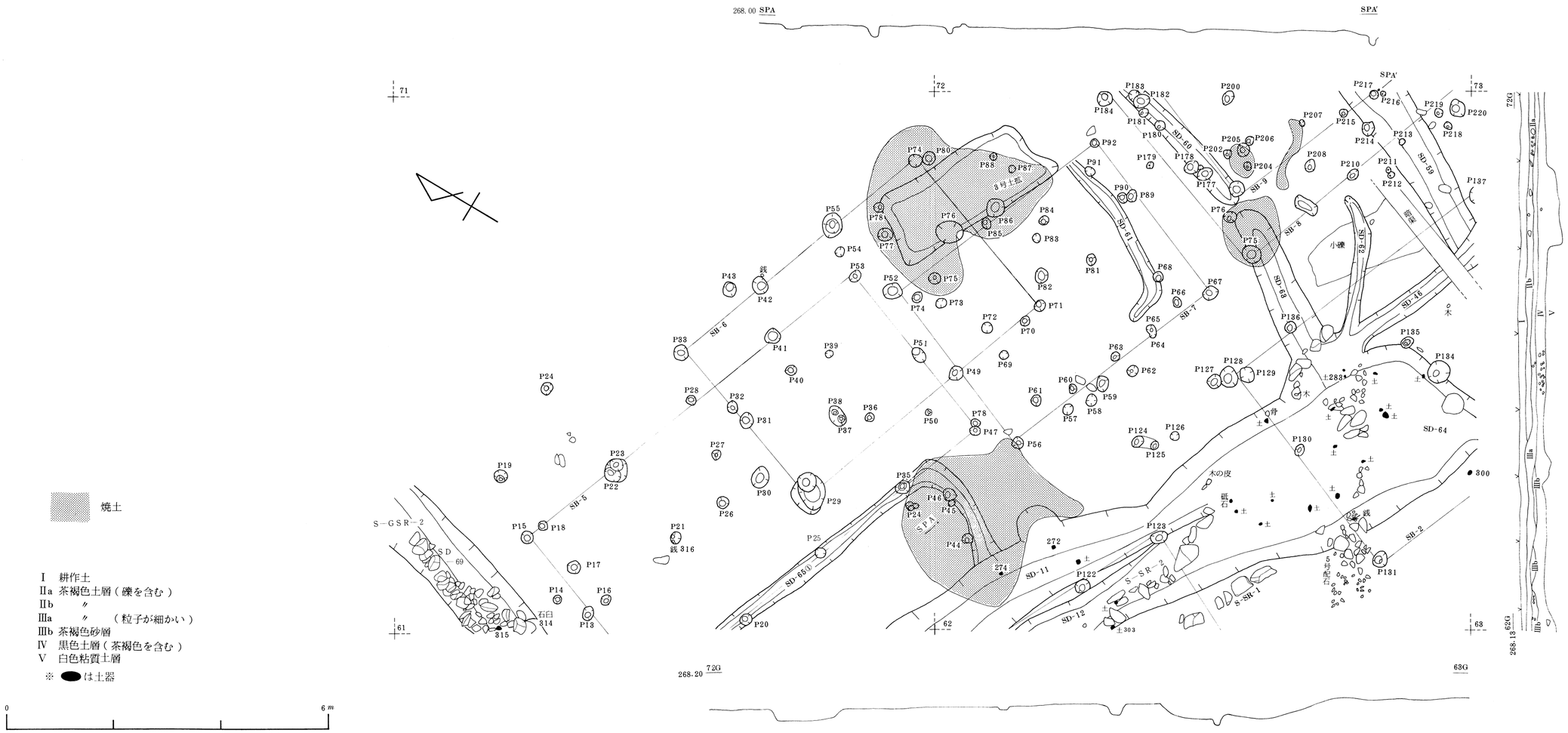


Ⅰ　耕作土
Ⅲa　茶褐色土層（粒子が細かい）
Ⅲb　茶褐色砂層
Ⅳ　黒色土層（茶褐色を含む）
Ⅳb　黒色粘質土層
Ⅴ　白色粘質土層

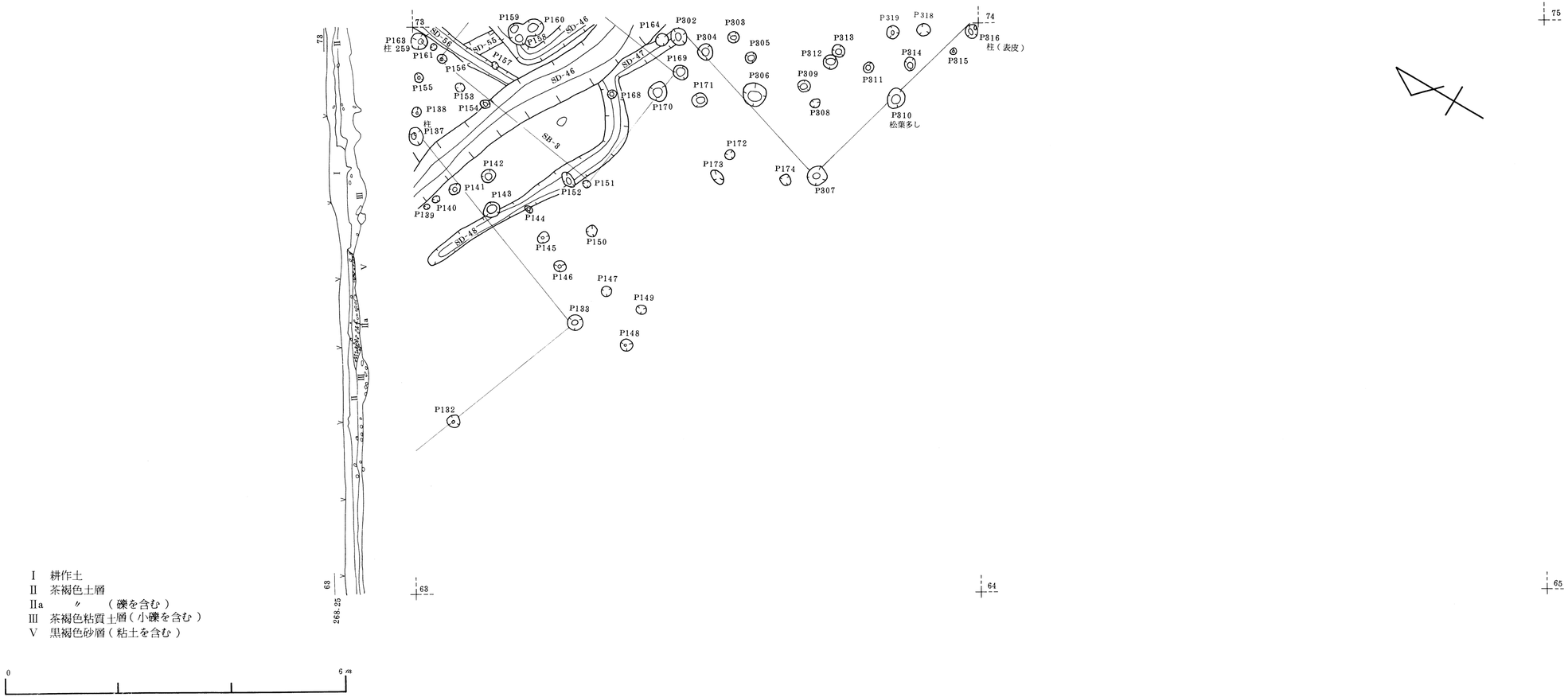
※●は土器

0　6m

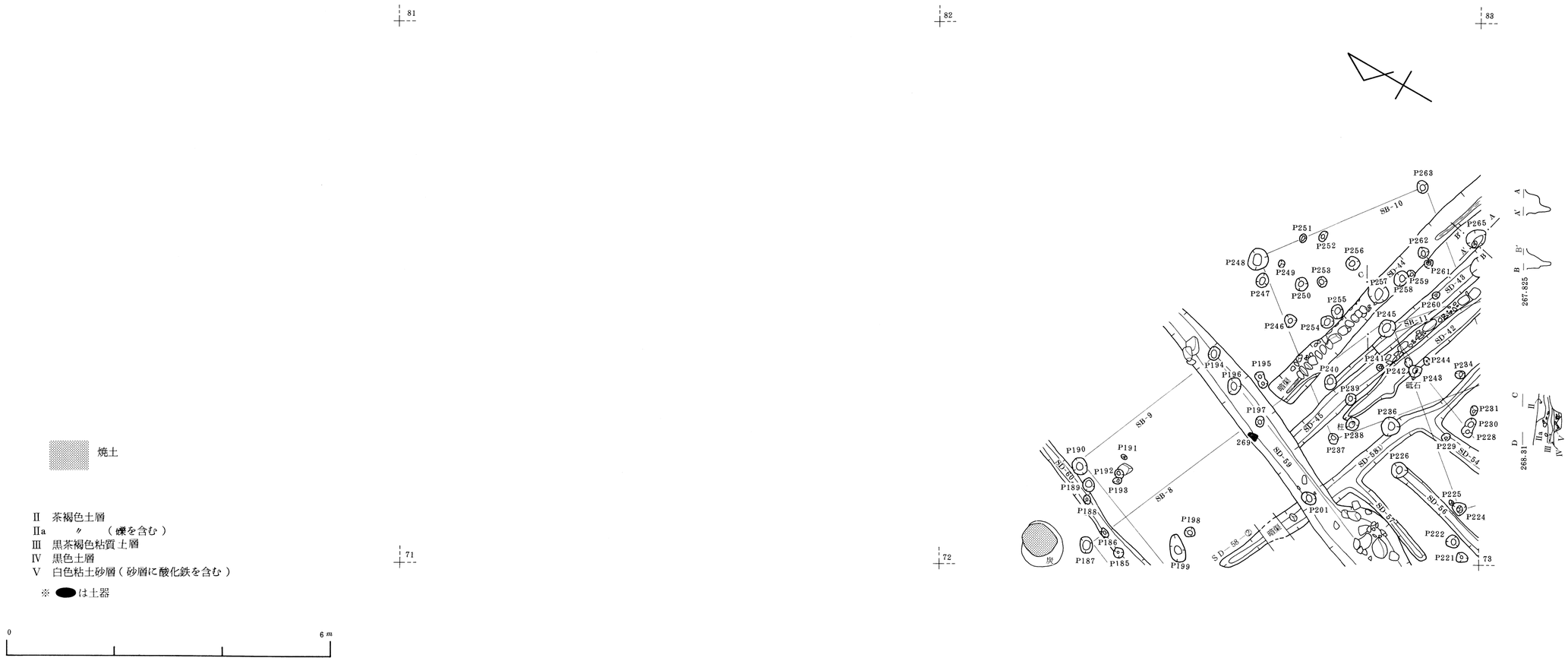
第44図　蔵福遺跡61・62グリッド平面図
（1:60）



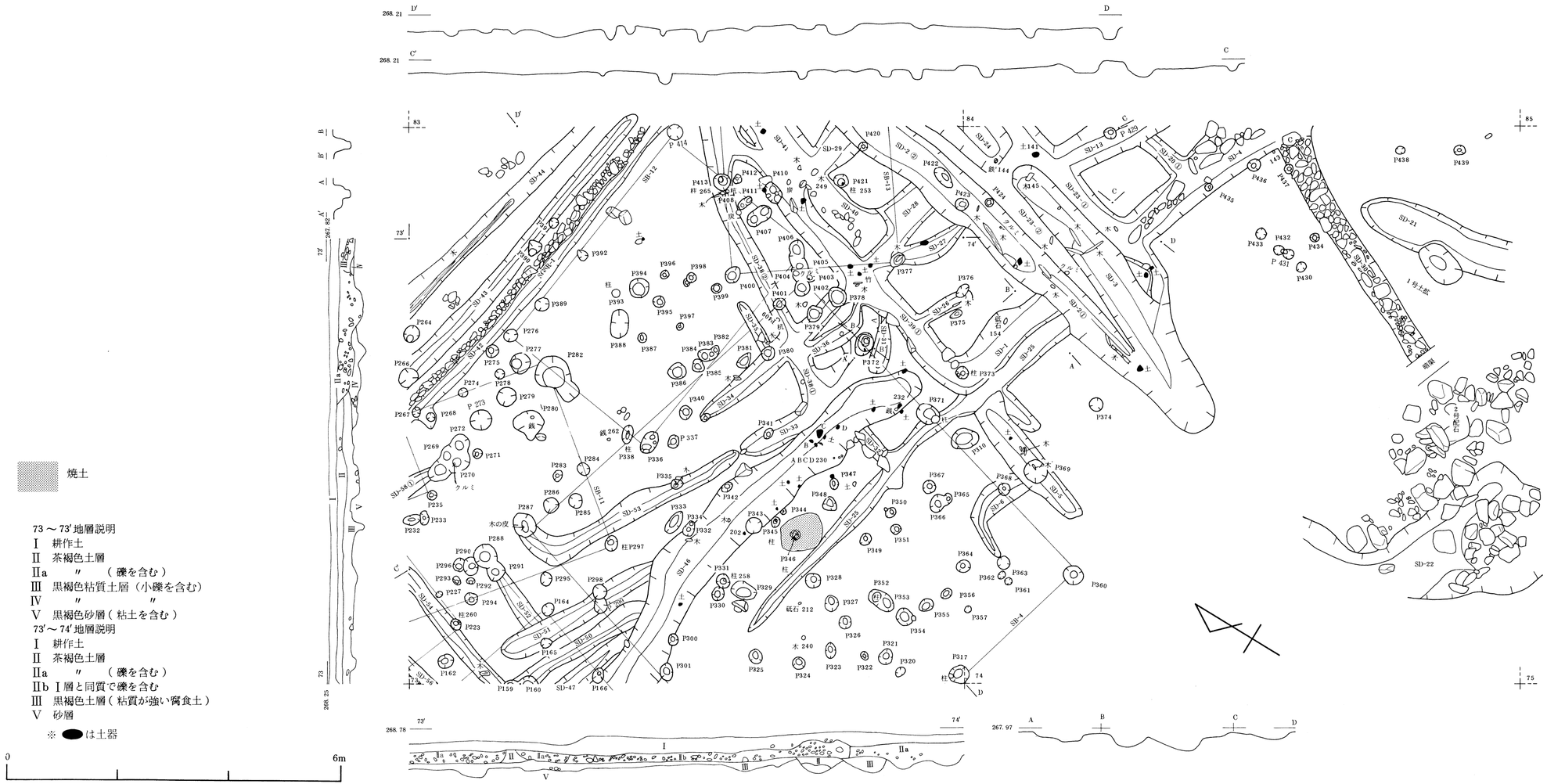
第45図　蔵福遺跡63・64グリッド平面図（1:60）



Ⅰ　耕作土
Ⅱ　茶褐色土層
Ⅱa　〃　（礫を含む）
Ⅲ　茶褐色粘質土層（小礫を含む）
Ⅴ　黒褐色砂層（粘土を含む）

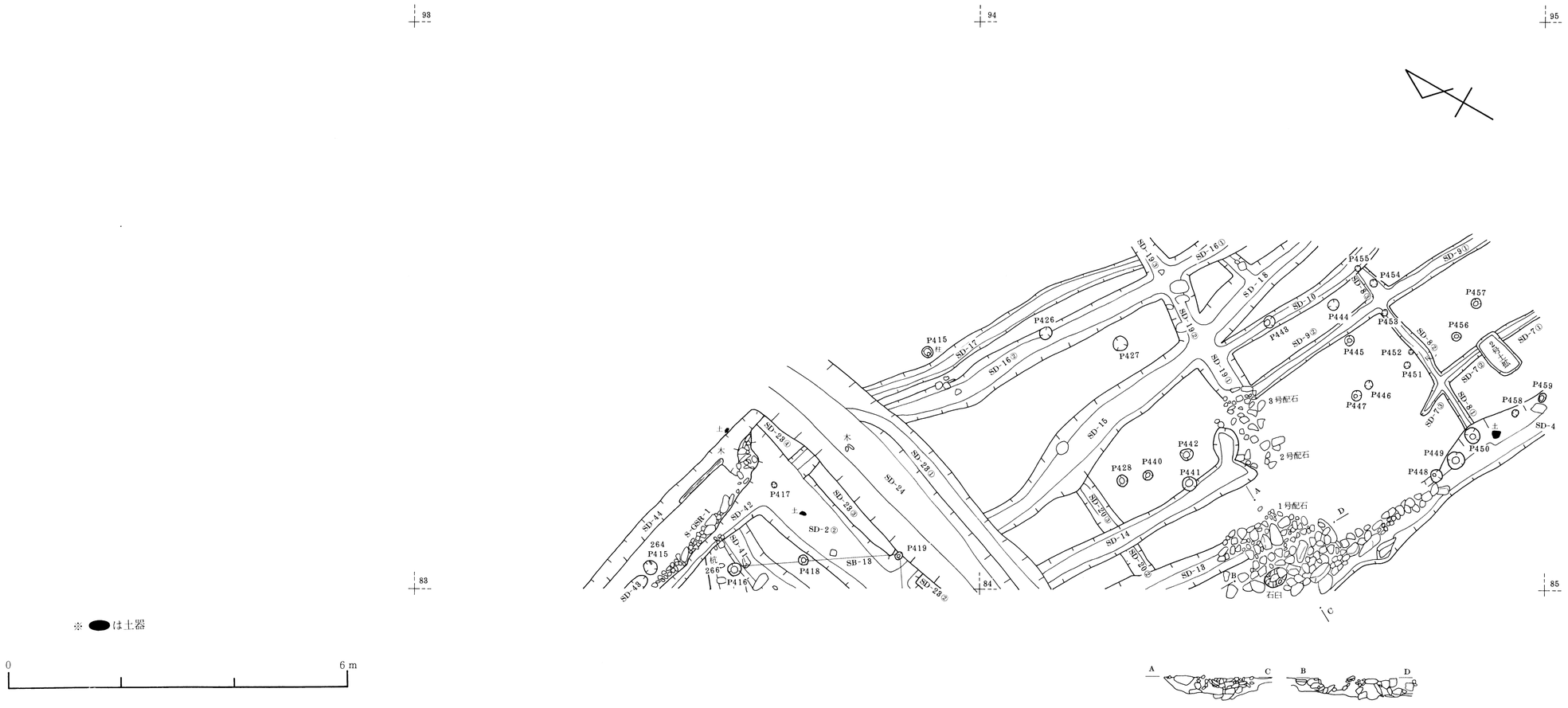


第46図　蔵福遺跡71・72グリッド平面図
（1：60）



第47図　蔵福遺跡73・74グリッド平面図（1：60）

第48図　蔵福遺跡83・84グリッド平面図
（1:60）



※ ●は土器

0　6 m

図　　版

図版1

蔵福遺跡全景

9号試堀セクション

全　景　西方より

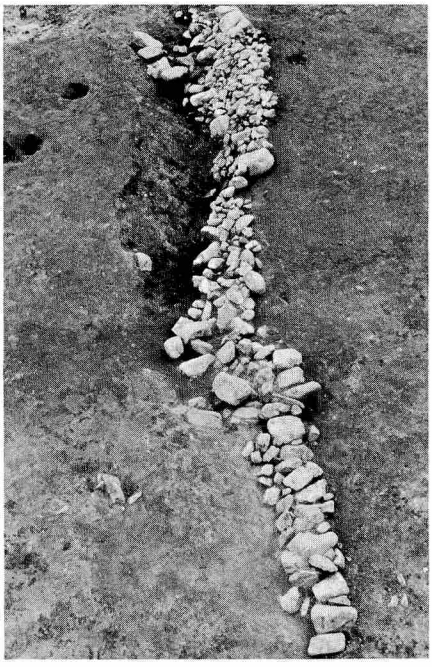
全　景　東方より

51グリッド　62グリッド付近

63グリッド　73グリッド付近

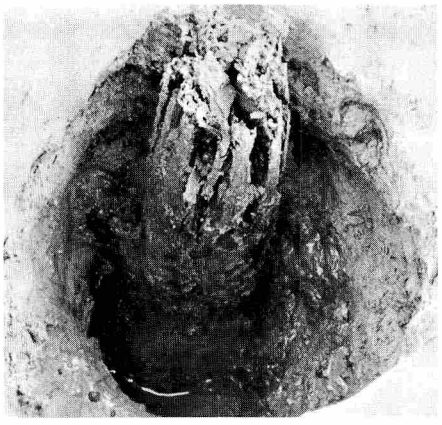
図版4

一号集石列

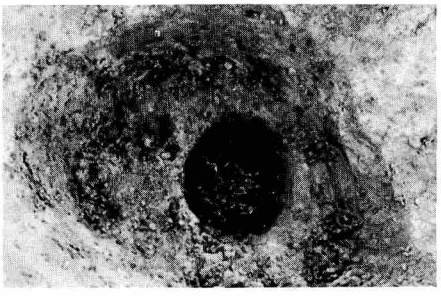


二号集石列

一号列石



柱穴と柱

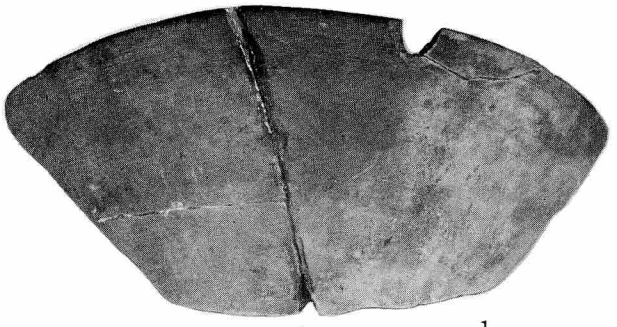


柱穴

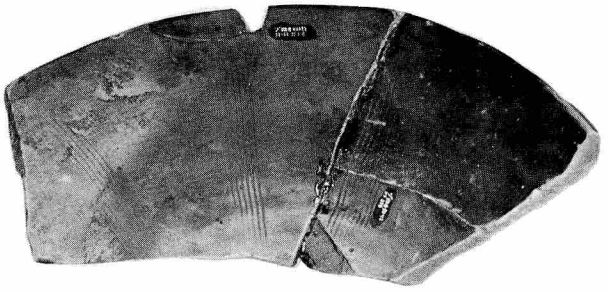
1　号　配　石

67号溝　遺物出土状況

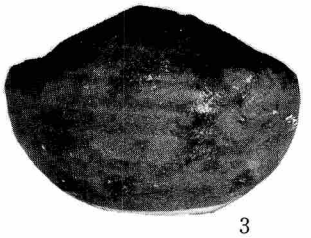
図版6 出土土器及び種核



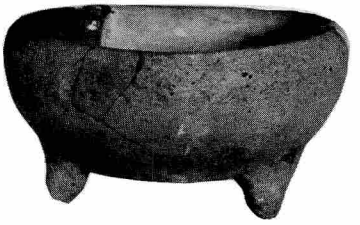
1



2

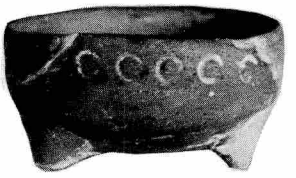


3



4

5



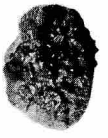
6

64号溝
12号溝 (1)　46号溝(2)　74グリッド（3～4）　121グリッド(5)　84グリッド(6)

32

31

1



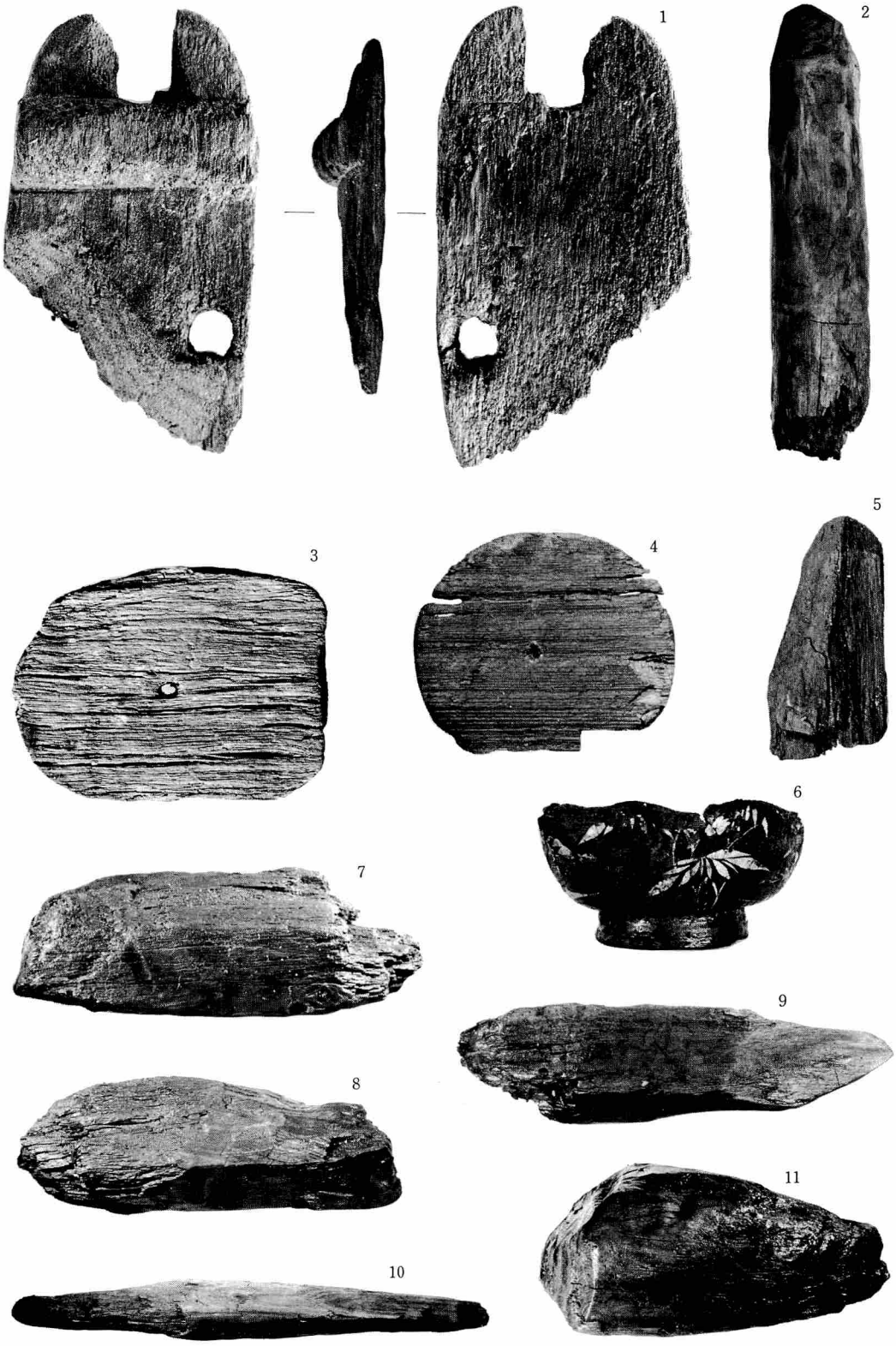
3

2

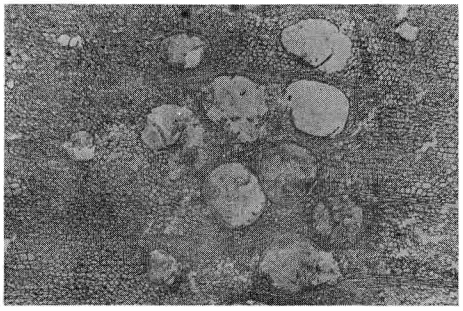
38

67号溝(1～3)　23号溝(31)　2号溝(32)　23号溝(38)

図版7 出土木製品

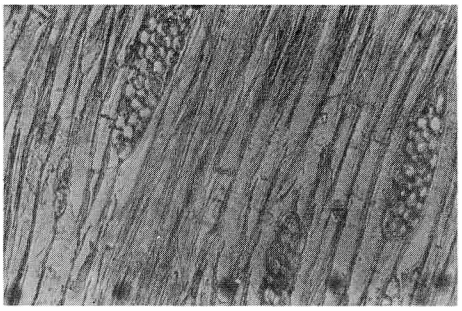


51グリッド(1)　71グリッド(2)　41号溝(3)　73グリッド（4.5.7.8）　67号溝(6)　12号住(9)　83グリッド(10)
42グリッド(11)



木口　32×

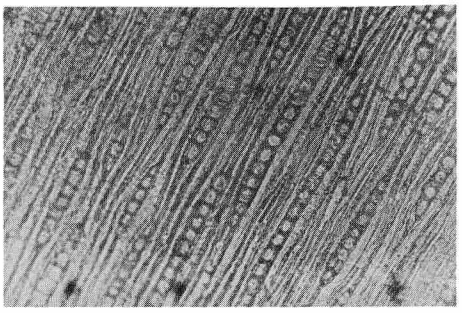
14



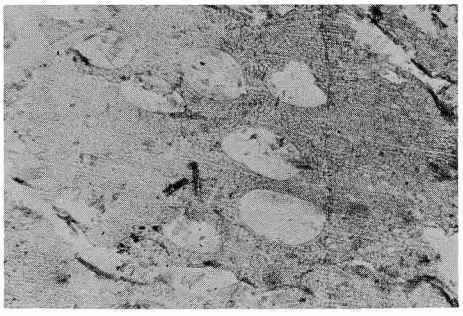
板目　115×

木口　32×

16

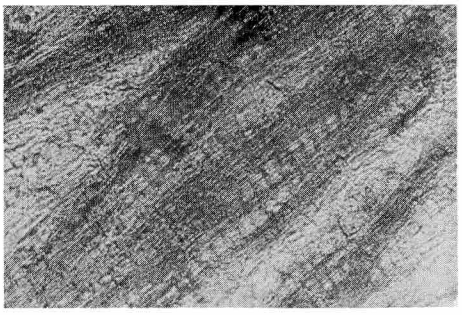


板目　115×

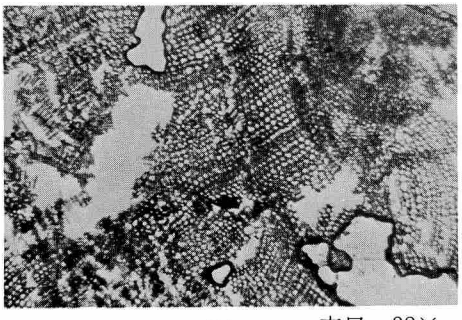


木口　32×

17

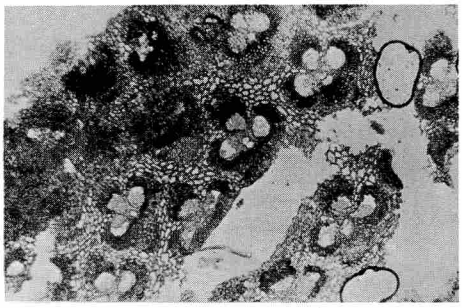


板目　115×

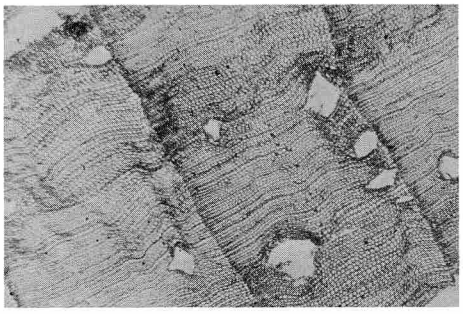


34　木口　32×

番号はＰ27の資料No.と同一

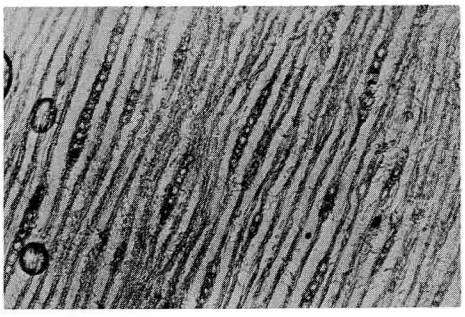


35　木口　32×

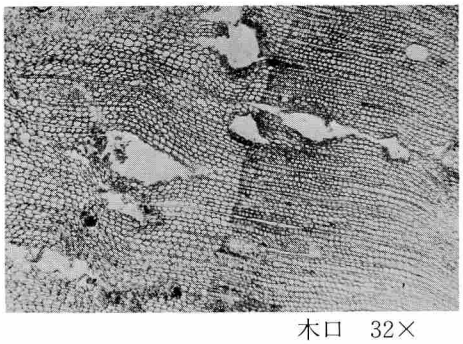


木口　32×

36

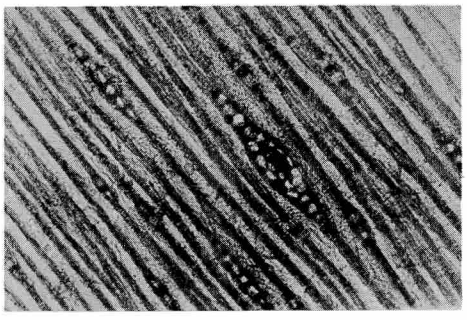


板目　115×

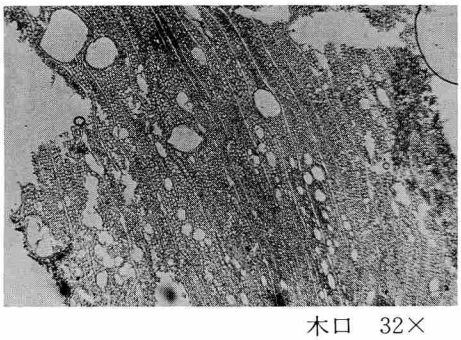


木口　32×

37

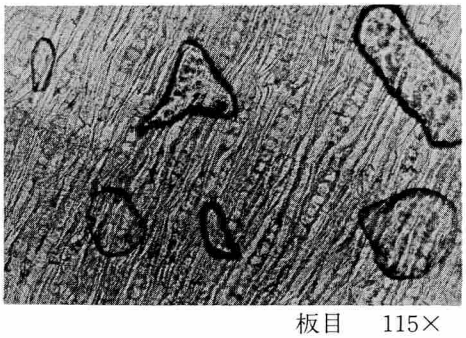


板目　115×



木口　32×

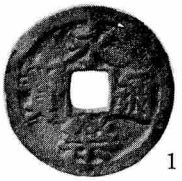
38

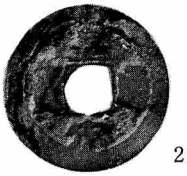


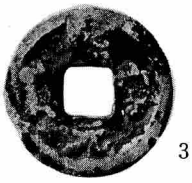
板目　115×

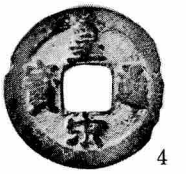
番号はＰ27の資料No.と同一

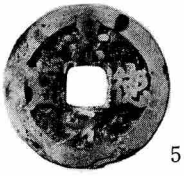
図版10　出土銭貨

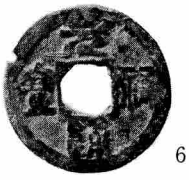

1

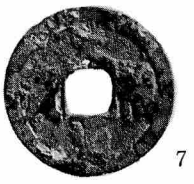

2

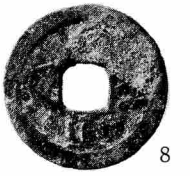

3

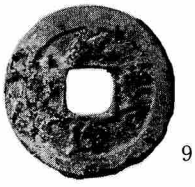

4

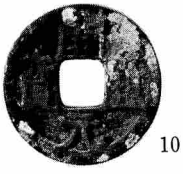

5

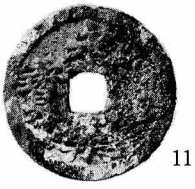

6

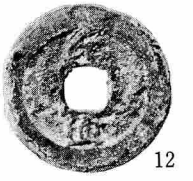

7

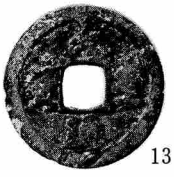

8

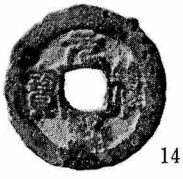

9

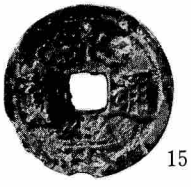

10


11

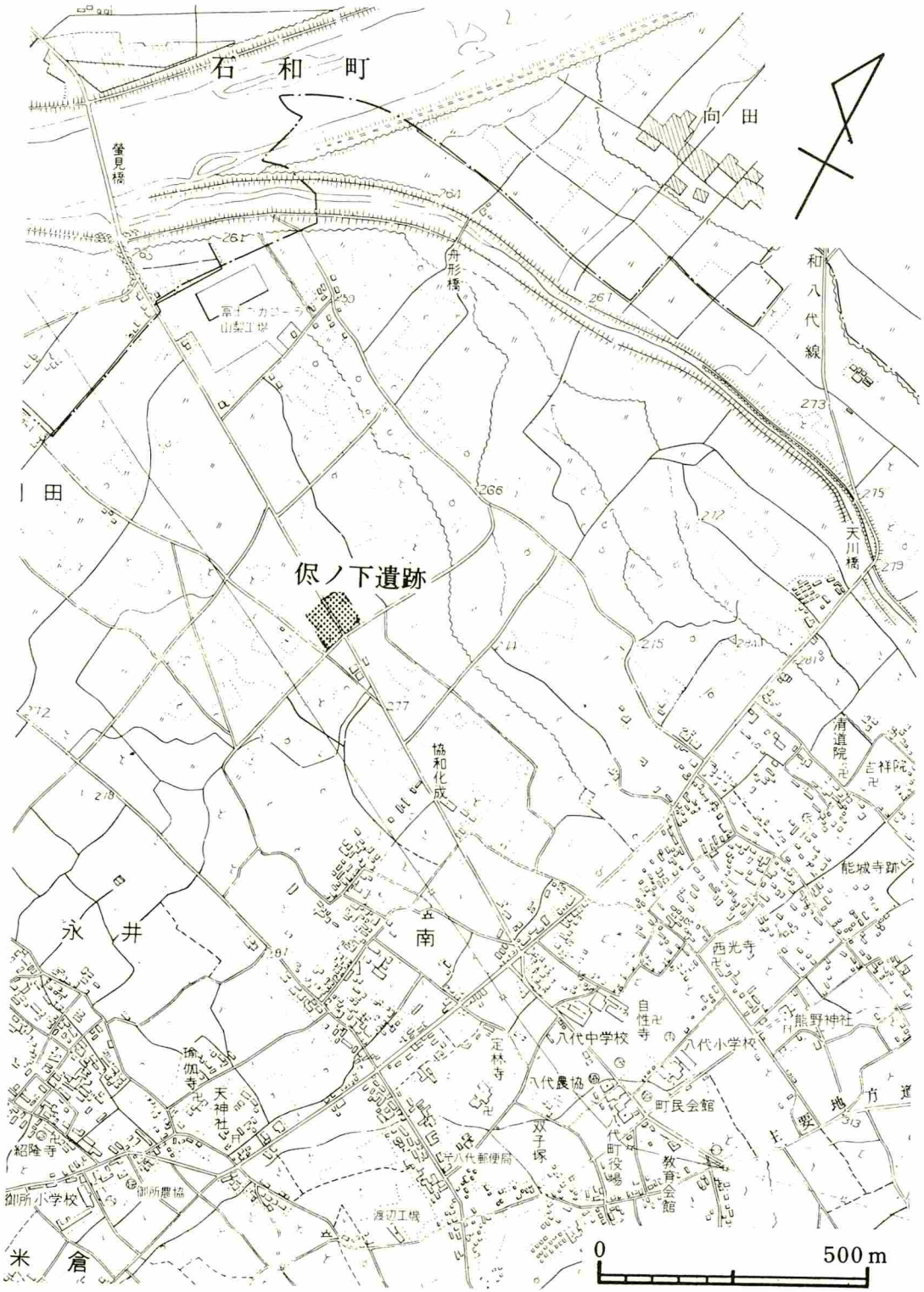

12


13


14


15

侭ノ下遺跡



第1図　尿ノ下遺跡付近図

III　侭ノ下遺跡

第1章　遺跡の位置と環境

第1節　位　　置

遺跡は東八代郡八代町南字渋田2717番地、2660番地とその周辺にあって、中央道中心杭S・T・A・№491の西と北に広がる。東経138度37分53秒、北緯35度36分26秒の位置にある。

相対的な位置は、甲府市から南東約8㎞にあって、県道上芦川甲府線に接している。東300ｍに南部落、北700ｍに笛吹川の支流である天川が西流し、西900ｍに笛吹川が南流している。また南1,200ｍの地点に蔵福遺跡がある。笛吹川は下流で釜無川と合流して、富士川となり太平洋に注いでいる。

晩秋から春にかけては、雪をいただいた雄大な八ケ岳を北西に、南アルプスを西に眺望出来、手前に甲府盆地の沖積地が続いている。

第2節　環　　境

イ、自　然　環　境

侭ノ下遺跡は甲府盆地南東部にある浅川扇状地の末端にある。

浅川は甲府盆地の東から南に連なる御坂山脈から流出している。御坂山麓は、八代町と境川村が接する付近で、地形が大きく2区分されている。すなわち、八代町南部から南西は曽根丘陵が市川大門町まで続き、境川村北部から北東は、勝沼町までいくつかの標式的な諸扇状地が続いている。浅川扇状地はこの中の最も発達したものの一つである。

『八代町誌』（地形と地質、桂田保、八代町、昭50）によると、浅川扇状地は門林を扇頂として約70度に開く扇型をした地形で、その先端は北、南、永井、米倉などの集落の密集した地域の北西側に小さな急斜面をつくっている付近までであるという。

この扇状地の上は、かつて浅川が洪水のたびに流路を自由に変えて流れ、山地から流れが急に緩やかになったため、その運搬量が衰えて多量の土砂を堆積した、とあり、さらに、侭ノ下遺跡付近で笛吹川の沖積層となるという。この沖積地では南区新浜、大間田、増利付近の低湿地で地下水位が高く各所に自然湧水も見られる。ここはかつては笛吹川の氾濫原であった地域であり、標高は255～280ｍで笛吹川の河床とほとんど同じ高さの地帯である。また沖積層については、増田のボーリング資料（井8）によると、地表より45ｍまで薄い砂礫層を挟む青色粘土層が存在する。これが笛吹川の沖積層であり、浅川の新扇状堆積層と交互に重りながら上部は扇状堆積層を被っている。浅川や天川の運んでくる砂礫が現在も沖積層の上に堆積を続けている。沖積層の形成は、ここ一万年くらいの期間であるという。

以上のように、保ノ下遺跡は浅川の新扇状地の末端か、これよりやゝ低い、笛吹川の沖積地上にあるといえる。

次に遺跡付近の微地形についてふれておく。

遺跡が位置する扇端の勾配は1000分の25（傾斜角1.4度）である。ここは直径300ｍくらいの扇形に張り出した微高地になっていて、遺跡はその中心線の最も高い場所に占地している。すなわち、南200ｍでは比高1.7ｍくらい低く、幅60ｍ程の谷になっていて、浅川の旧河道と思われる地形を呈する。北200ｍも比高２ｍくらい低くなり、そのまま北面傾斜となって、天川に続いている。この200ｍくらいの地点では日本武尊が東征した時通ったと言う伝説のある若彦路があり、ウスのシミズと言う古い伝承のある湧泉がある。この付近から西に向って、低い谷が形成されている。西50ｍ下は、等向線が平行する地形となり、スプリングラインがある。ここから下は笛吹川の現沖積地となるのであろうか。またここから南西（下）200ｍに、中心点をもつ直径100ｍの円形をなす湿地帯がある。この湿地帯は、保ノ下遺跡の時期である弥生時代から古墳時代にかけて、水田として開発され、集落の経済的基盤となった可能性もある地帯であり、また、この西方に広がる大間田部落の地名の起源になった場所であるかもしれない。（前掲『八代町誌』考古、森和敏）

ロ、歴史的環境

保ノ下遺跡出土の遺物は古式土師器、石器を主とするが、弥生式土器も少し含まれる。また、中世、近世の陶磁器類も出土しているが、ここでは、弥生時代から古墳時代にかけての時期に主点をおいて歴史的環境を概説する。

本県甲府盆地における弥生時代の遺跡は、過去の分布調査では、盆地の周辺部に多く分布しているように見られたのであるが、近年における発掘調査等の成果では、必ずしもそうではないと考えられる要素もわかってきた。すなわち、甲府盆地低地に一般的にみられる微高地や八ケ岳山麓の高地にも発見されてきたのである。保ノ下遺跡の場合は盆地周辺部にあたる遺跡と考えてよさそうである。

古墳時代前期の遺跡も10年くらい前までは、知見例が極めて少なかったのであるが、近年各地で発掘や発見が相次ぎ、激増する傾向にある。やはりその所在地は弥生時代遺跡のある自然環境と同様な場所にある。

一方、前期古墳は、甲府盆地東部に集中している。竪穴式石室を有する前期古墳のうち櫛形町上宮地所在の物見塚古墳を除いてはすべて盆地東部にあり、その数はおおよそ17基とみられている。

中道町に建設中の風土記の丘（曽根丘陵公園）で発見された弥生時代終末から古墳時代に比定出来る100基を越す方（円）形周溝墓から、順次同町米倉山にある小平沢古墳（前方後方墳）、風土記の丘地内の大丸山古墳（前方後円墳）、銚子塚古墳（前方後円墳）へと続くと考えられている。

以上のように、甲府盆地では東部が前期古墳の栄えたところであるので、それに比定され

る古墳時代初頭の五領式土器を出土する遺跡も多いと考えなければならない。

銚子塚古墳から北へ5㎞の地点にある本遺跡付近には、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺跡や、銚子塚古墳に続く時期のものとみられる古墳がある。

弥生時代後期遺跡では、本遺跡の1㎞以内に10か所を越える遺跡がある（ただし古式土師器出土遺跡も若干あるかもしれない）。

本遺跡も『八代町誌』にある分布に載っているものである。本遺跡の西200ｍの県道沿いから、弥生時代後期から古墳時代初頭頃の土器が出土しており、また20ｍ西からも同時期と思われる土器が出土している。これらは本遺跡に含まれるものであろう。また300ｍ西の笛吹川河床下8ｍからもほぼ同時期と思われる土器も出土している。（前掲『八代町誌』）。

また保ノ下遺跡の近くには前方後円墳である狐塚古墳、団栗塚古墳や岡銚子塚古墳などがある。

第2章　調査の経過

保ノ下遺跡の発掘調査は、昭和55年12月1日に開始し、同56年3月6日に終了した。日曜日と祭日を休み、延約4ケ月にわたって行なった。

発掘予定面積は約9,000㎡であったが、このうち遺構を検出した範囲は約1,500㎡である。

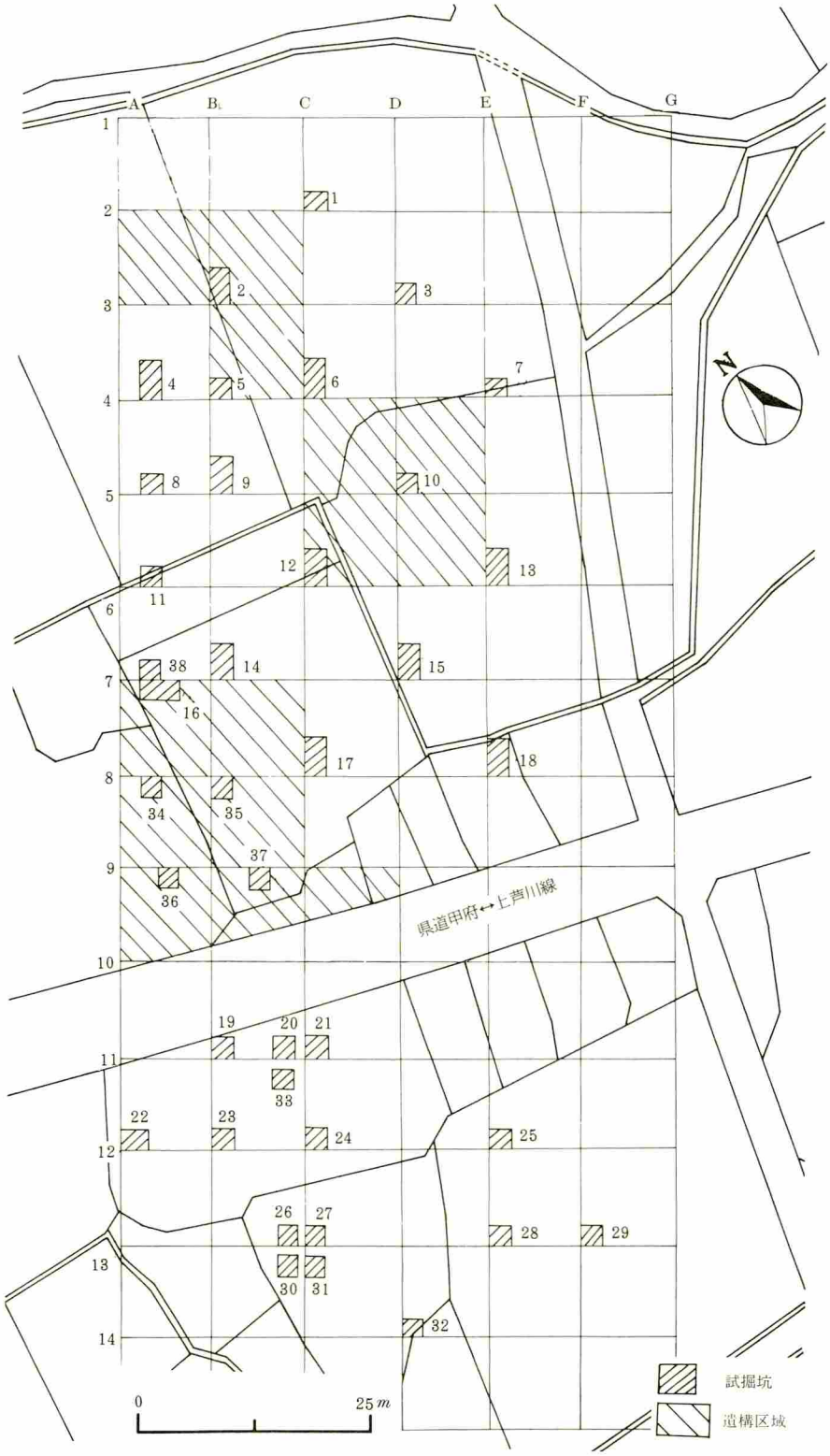
地区全域に、中央道の中心杭を基準としてグリッドを設定した。グリッドは10ｍ×10ｍの大グリッドをつくり、この中をさらに2ｍ×2ｍの小グリッドに分割した。その名称は図のとおりである。

11月にバックホーで数ケ所試掘をして、発掘計画を立案しておいたので、これを基本として進行した。7—Aグリッドの試掘で五領式土器が出土したので、まずここの表土を除去し、拡張していった。7・8・9—A・Bグリッドでは、弥生時代末期から古墳時代初頭に比定出来る土器片や石器が表土とその下層からかなり出土したが、遺構は1月下旬までほとんど検出出来なかった。県道南側は1月下旬から試掘を始めたが、若干の遺物が出土しただけで遺構はなかった。

主要遺構を検出した順に掲げると次のとおりである。

1号配石を12月下旬に発見し、その後拡張をした。これが遺構か否かを決定する充分な条件に欠けるが、後述するように一応遺構と見做しておきたい。この直上から石鏃が1点出土した。

2月5日に9—Bグリッドで、1号土壙を黒色土中から検出した。7・8・9—A・Bグリッドに集中して検出した古墳時代初頭の遺構を発見した最初のものであった。入れ越しになった台付甕や木片がここから出土した。この1号土壙に続く1号、2号、3号溝などを検出するとともに、土器や木片、炭化した草などが出土した。20日に3号土壙から、本県では始めての有頭木器が発見された。不規則な形状をした溝とこれに連がる土壙であって、浸透



第２図　侭ノ下遺跡グリッド配置図

水が出てきたため、順序よく発掘出来なかった。２月27日に五領Ⅰ式期の１号住居址を検出した。発掘開始以前に重機で行なった試掘でその一部が破壊されていたが、あまり記録上では支障をきたさなかったと思われる。３月４日に２号掘立柱建物址を検出した。柱穴の地層は泥炭層だけであった。

侭の下遺跡では、遺構を主に２～３月に検出した。甲府盆地では、１月下旬から２月上旬が最も寒く最低気温が零下10度に下ることもあり、２月から３月にかけては八ケ岳おろしといわれる身を切るような季節風が度々吹き、それが一日中吹き荒れる日もある。この中を水びたしになりながらの調査であったので、充分な記録が出来なかった。

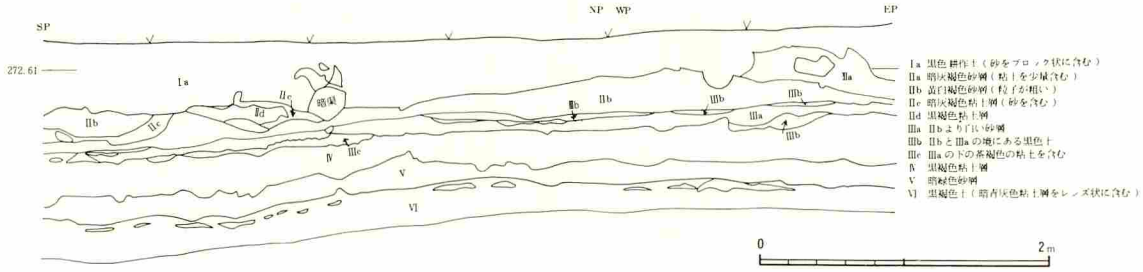
発掘調査速報「侭ノ下遺跡」を次のとおり発行した。

No.１　昭和56年１月31日

No.２　同　　６月23日

第３章　層　　序

侭ノ下遺跡付近は、平均1.4度くらい西に傾斜する。近年は桃畑などに作付転換されているが水田であったため段段畑となっている。地図上から見るとここは条里制遺構の中にあるので水田耕作の歴史は古いとみられる。これが地層に現われており、グリッドの区画線、Bライン・８ライン・９ラインベルトの水平になっている線が水田の床土面（水田面）であると考えられ、多い場所では現地表面を除いて３本あり、最下層では深さ50cmである。これらのベルトの地層はすべて地表から遺構直上までの間のもので、その下層はそれぞれの遺構に伴う地層図やエレベーション図で示した。試掘坑16では深く掘り１号住居址の包含層である第Ⅱ層より下まで示した。試掘坑14も深く掘ったが遺構包含層はどれに当るかわからない。



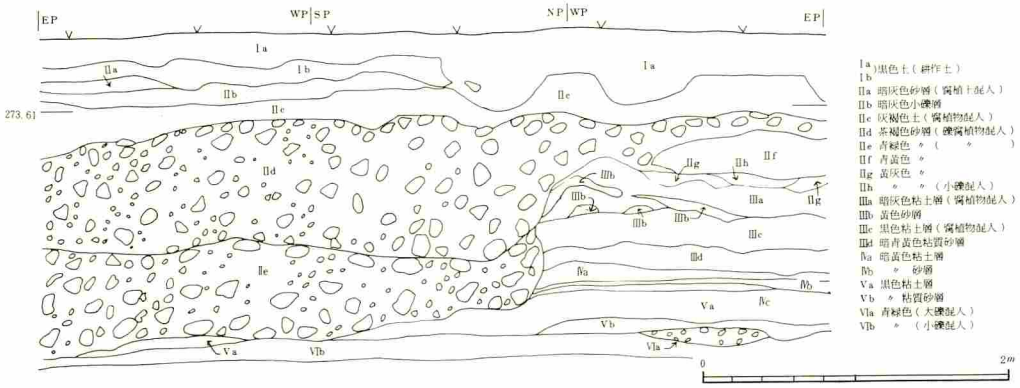
第３図　14号試掘坑地層図（1:50）

各地層図の番号は扇状地特有の乱れている地層であるため統一が出来ないので、必ずしも同一番号が同一地層ではないことを断っておく。

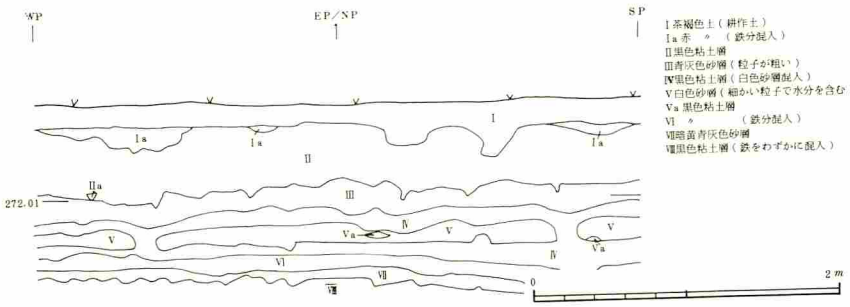
遺構面では、傾斜はおおよそ南東から北西に向っており、すなわち10Bグリッドから７Aグリッドに向って低くなっている。遺構のある地域から東方約30mでは、試掘坑18（第４

図）のように140cmに及ぶ氾濫層があることから、ここがかつては河道になっていたと考えられる。Ⅱf層の上に氾濫層が載っているので、ここに集落が営まれた4～5世紀に近い時期には浅川が流れていた可能性がある。

また遺構包含層やその上下には、所によって葦とみられる植物が著しく多く堆積していた。



第4図　18　号　試　掘　坑　地　層　図（1:50）

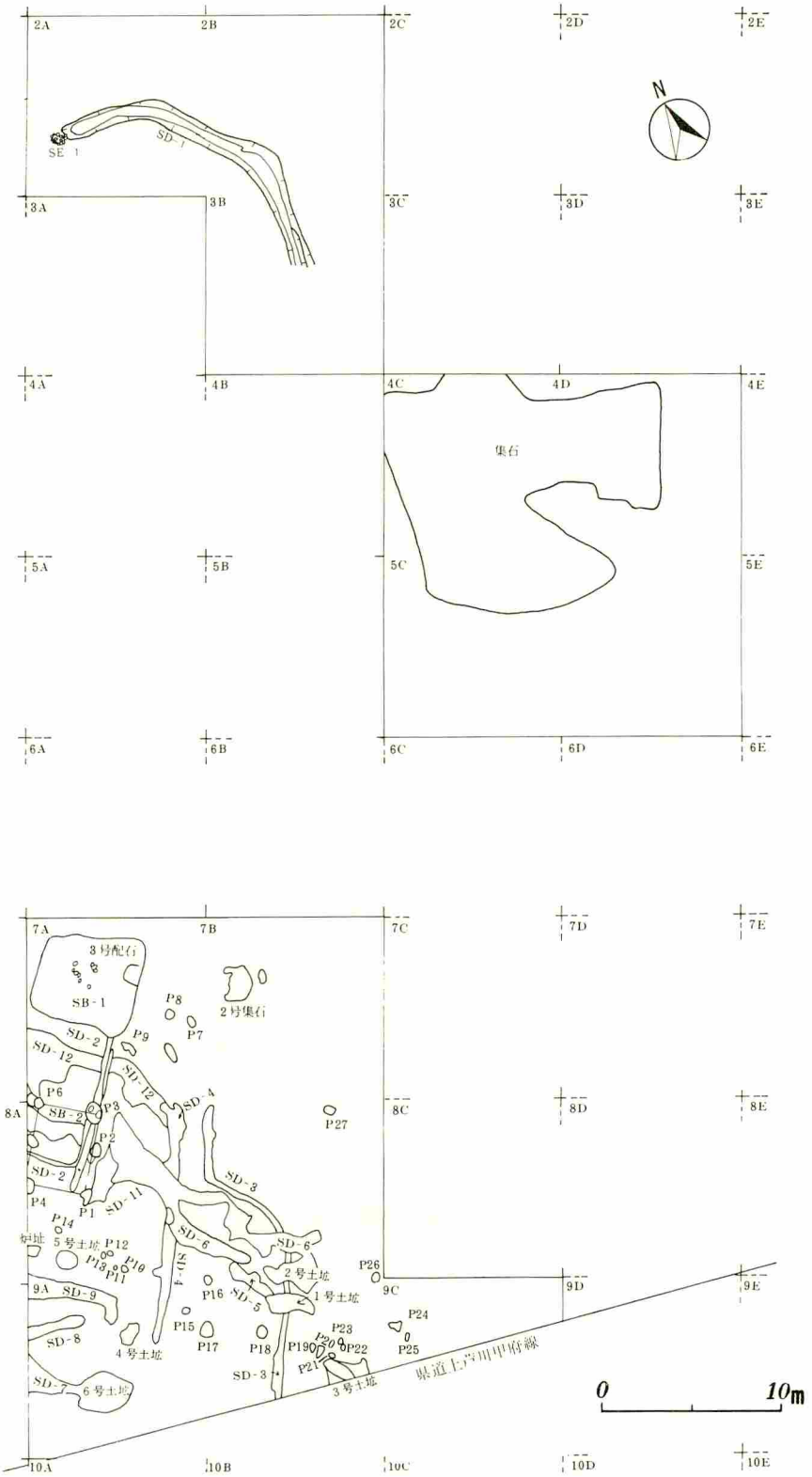


第5図　24　号　試　掘　坑　地　層　図（1:50）

第4章　遺構と遺物

弥生時代から古墳時代にかけての土器が出土しているが、この区分は五領式土器以後を古墳時代として取扱うこととする。また石器として使用されたと考えられる自然石が多量に出土した。これらはその出土状態や使用痕から石器として取扱った。

また弥生式土器が出土した遺構は1号土壙と6号溝だけであるが、これに続く溝や他の土壙等も同時期に掘られたものであると考えられる。しかし弥生式土器を伴出しなかったので、すべて古墳時代の項に入れて説明を進める。

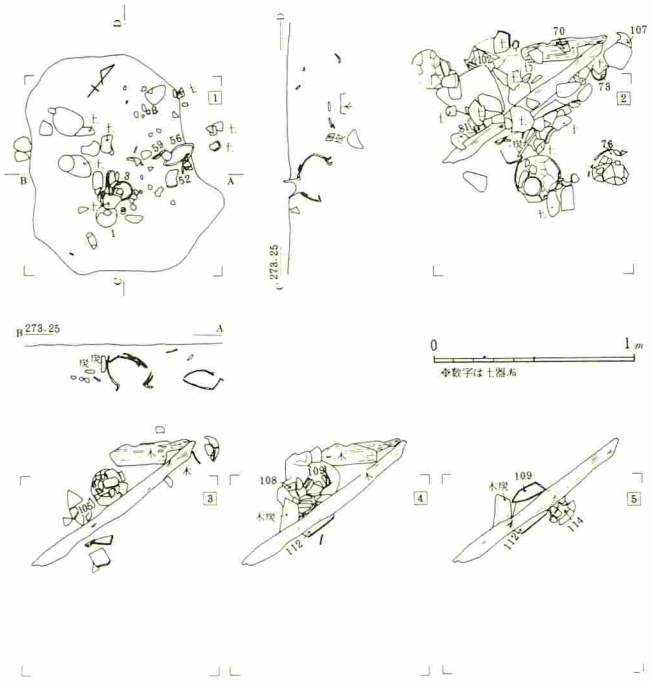


第6図　侭ノ下遺跡遺構全体図

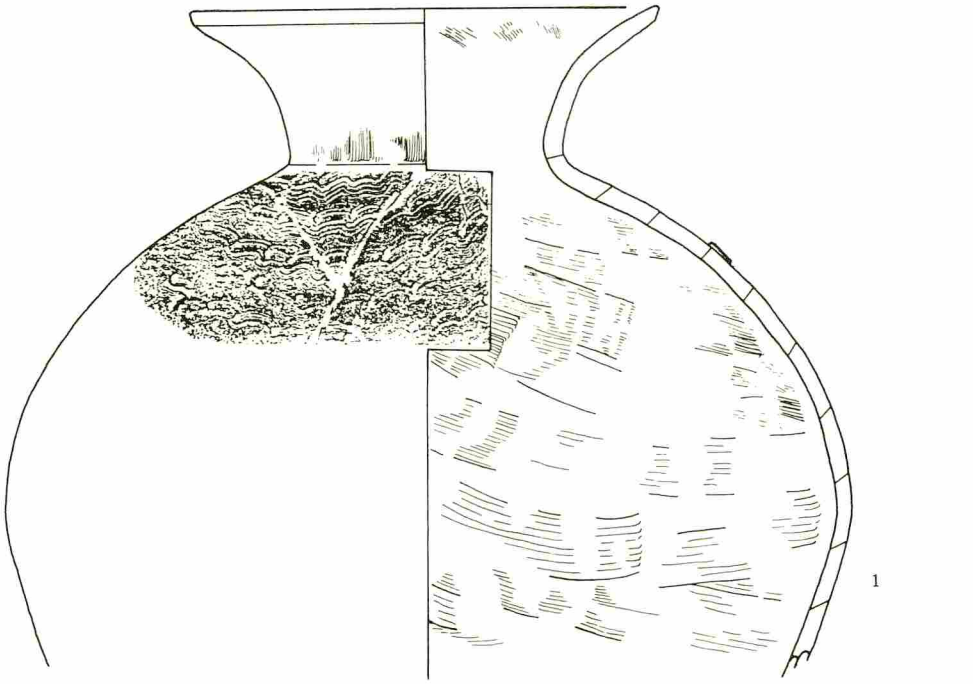
第１節　弥生時代の遺構と遺物

１号土壙

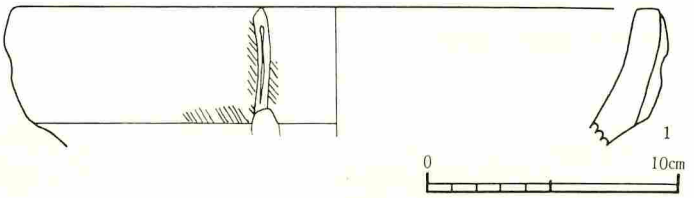
前述したように弥生式土器が出土した遺構はここと６号溝だけである。第７図のように土壙の底から木器（完全に腐食していたので取り上げ不可能であった）と第８図の壺の上半部が伴出した。壺は破片になっていて、櫛目痕を地文とし、肩部にボタン状浮文が２個ある弥生時代終末期のものである。木器は長さ約１ｍ、太さ約７cmの棒状で両側が削られている。この上層からは多量の五領式土器が出土しているから、引き続いて使用されていたと考えられる。



第７図　１号土壙発掘段階別実測図（1：40）



第８図　１号土壙出土遺物実測図



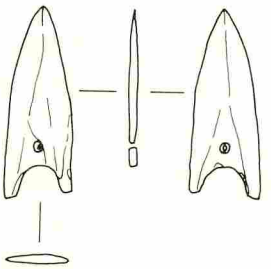
第９図　６号溝出土遺物実測図

６号溝

最も大きく、複雑で不規則な溝である。詳細は古墳時代の項で説明する。遺物は、棒状浮文のある土器口縁部破片が１片出土しただけである。

その他

集石の上層から石鏃が出土した。粘板岩製でよく研磨されていて、長さ５㎝、厚さ２㎜である。



第10図　石鏃実測図

第２節　古墳時代の遺構と遺物

遺構が、遺物の出土状況だけでは、弥生時代と古墳時代のどちらかに構築、使用されたのかは決定できなかった。また土壙と溝のつながっているものは、その形態で２者を区分するのに明確な根拠はなく、便宜上分けたものである。

遺物のうち土師器は、ほとんど古墳時代初期の五領式に属するものである。

石器はすべて自然石で、かなり同じ形状をしたものが多量にある。これらは生活面直上や覆土で出土し、使用痕とみられるものも多いので石器とみなした。

住居址と遺物

１号住居址　溝群の北端にあって、前述した溝と重複していないから、溝と同時期に存在していたことが考えられる。

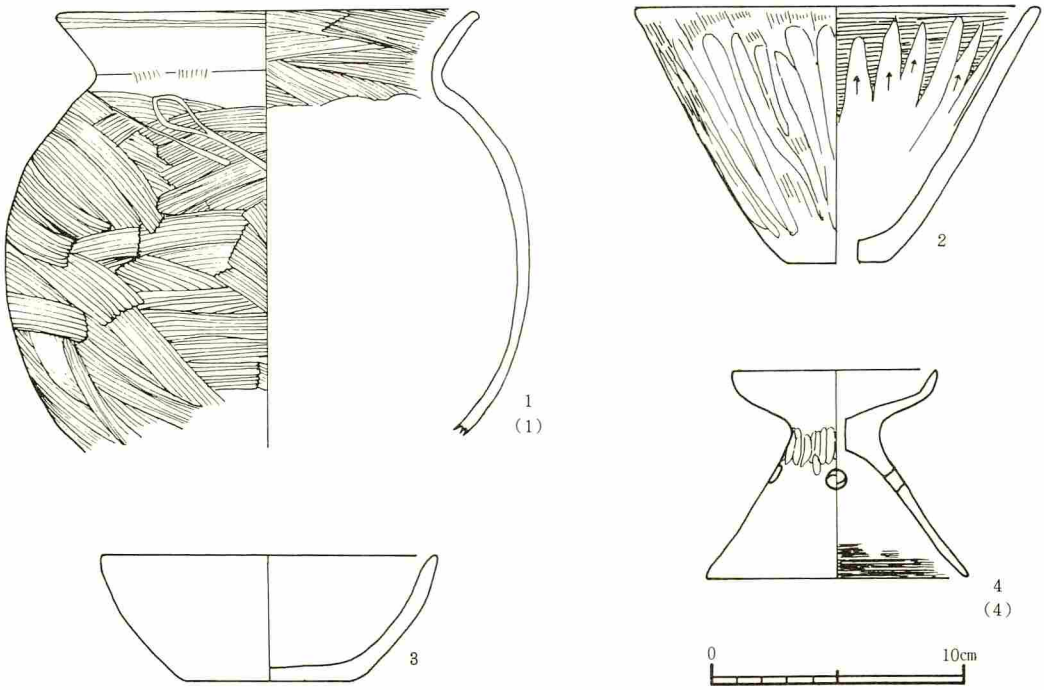
第33図16号試掘坑の地層にみられるように、第Ⅱ層黒色腐食土層を掘り込んで構築されていて、第Ⅲc、Ⅲd、Ⅲe層は掘込みであろう。

住居址の北側から西側に、壁から内側60㎝まで溝状に深さ約５㎝の掘り込みがあり、西側の２つの柱穴へと続いていて、南側には配石らしいものが伴う土壙がある。No.１、２、４の土器が出土している。西側中央部に、配石のような遺構があるのは、炉址であるかもしれない。しかし焼土は伴わない。西側では狭く浅い２号溝で切られているが、黒色土中の切合関係のため、その前後関係は判明できなかった。

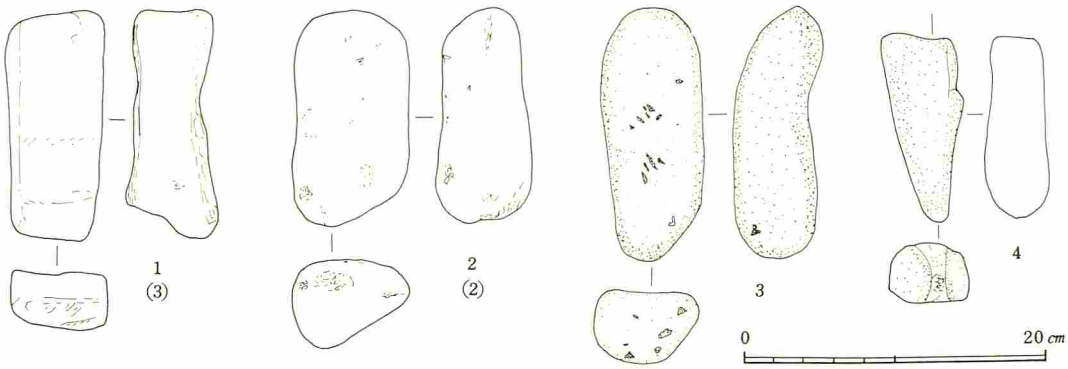
遺物　土器及び石器が出土している。このうち床面直上から出土したものは、　型土器№2と№1の石器だけで他は覆土から出土した。

甕の上半部№1は単純口縁で口縁の刷毛目は少ないので五領Ⅰ式くらいに比定出来る。甑、高坏、器台も五領式の初期に多い形態を有する。他に五領式台付甕の底部や壺の底部と考えられる破片も出土した。

石器は4個出土した。3個は手で握れるくらいの細長い大きさで、先端に使用痕と思われる摩耗した跡がみられる。№1は両面が研磨されている砥石である。



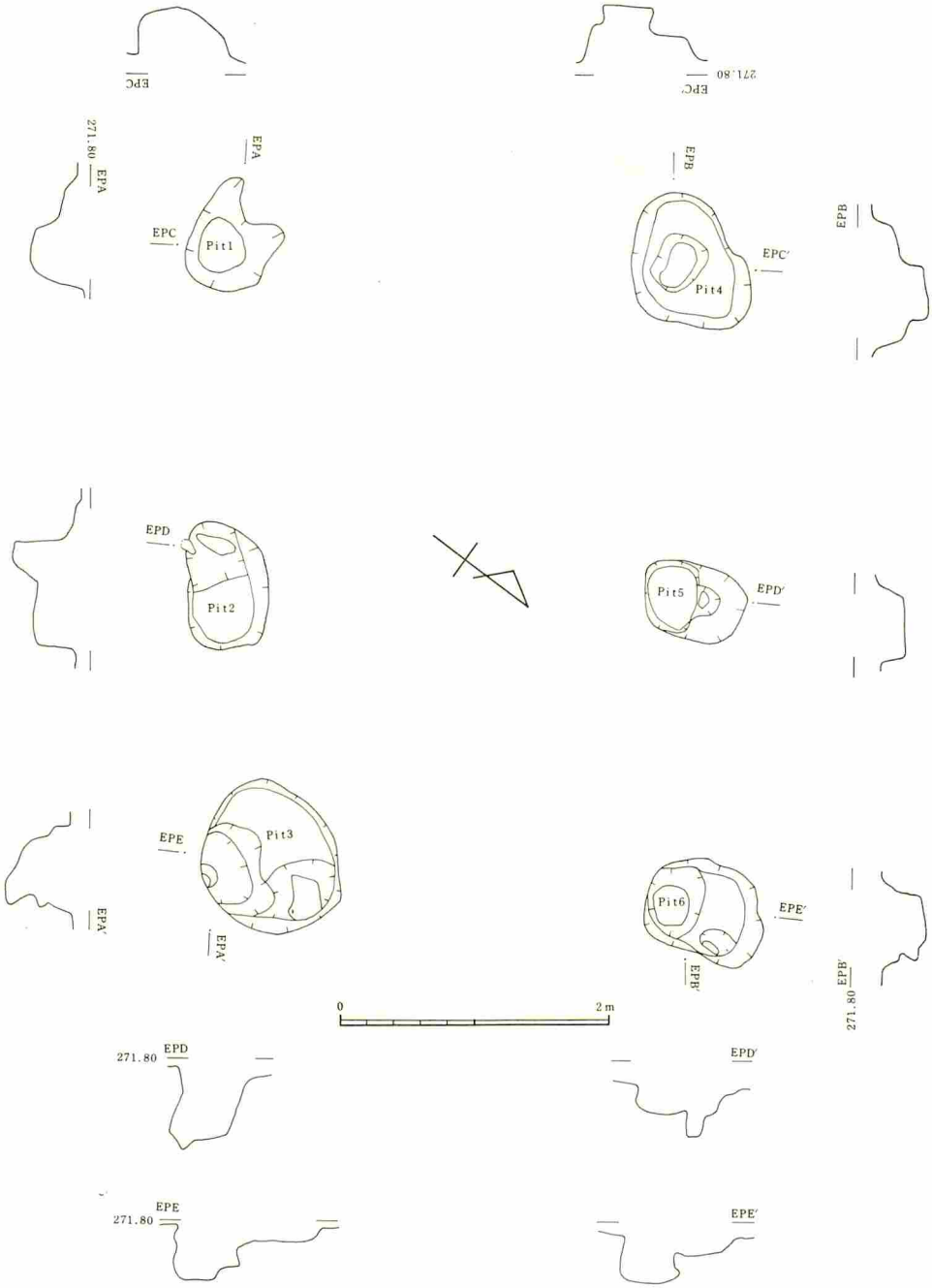
第11図　1号住居址出土遺物実測図（ただし3は上層出土）



第12図　1号住居址出土遺物実測図（1：5）

掘立柱建物址

2号掘立柱建物址　1号住居址と並んであり、溝と重複している。長軸は南―66°―西で、2柱間（4.67m）、1柱間（3.48m）でほぼ東西に長い、南向きの建物といえる。



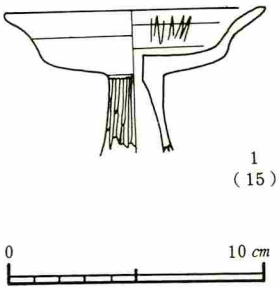
第13図　2号掘立柱建物址実測図

溝と遺物

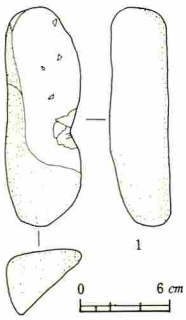
溝は形態上から二大別できる。その1は幅が狭くて浅い一定したもの、その2は幅が広くて深いが、変化が多く、土壙に続くものである。両者の前後関係は、黒色腐食土中で切合っていたため、平面上からも、地層でも見分け難く、決定出来なかった。また両者ともその機能も明らかに出来なかった。

遺物は2号溝からは、壺と思われるものの底が出土した。3号溝からは、小型丸底壺と思われる口縁部とS字状口縁をもつ台付甕が出土した。4号溝からは器台脚部、高坏坏部と、内・外面に赤色顔料が塗付された碗や石器が、また5号溝からはS字状口縁をもつ台付甕と壺の下半部や石器が、6号溝からは器台脚部と前述した弥生式土器の口縁部及び石器が、7号溝からは壺と思われるものの底部が、8号溝からは小型丸底壺と思われるものの口縁部が、10号溝からは壺と思われるものの底部がそれぞれ出土した。これらはすべて五領式期に比定されるものであろう。

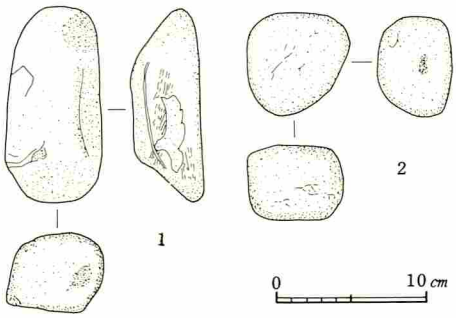
第14図　3号溝出土遺物実測図



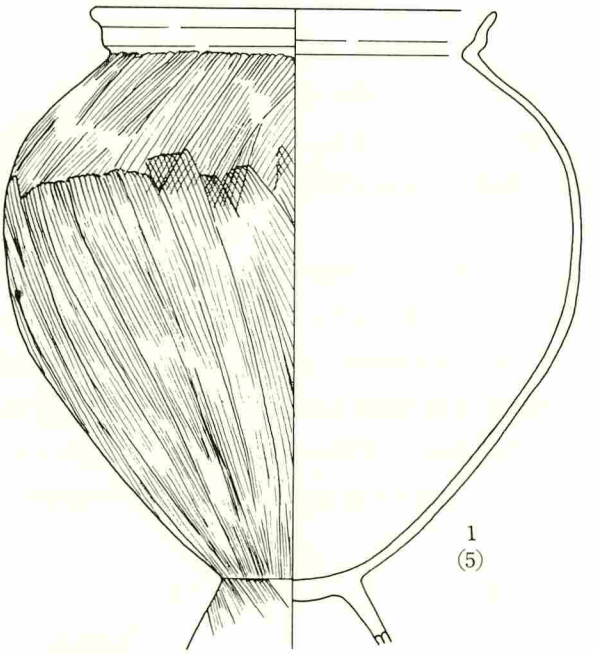
第15図
4号溝出土遺物実測図

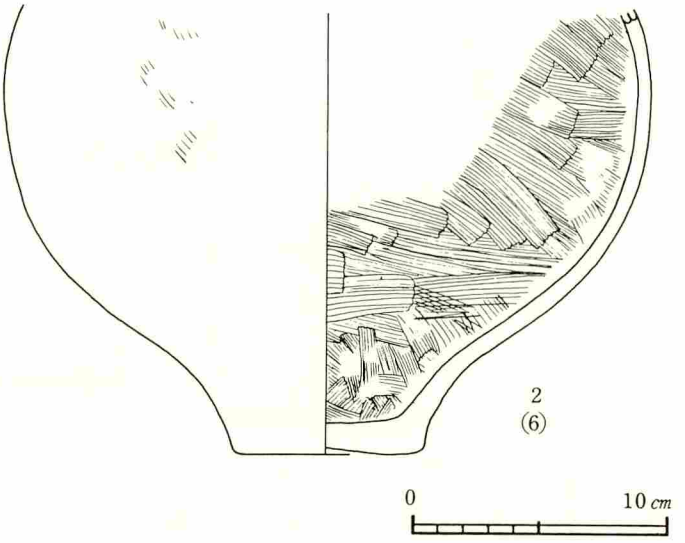


第16図
4号溝出土遺物実測図
（1：5）



第17図
6号溝出土遺物実測図（1：5）





第18図　5号溝出土遺物実測図

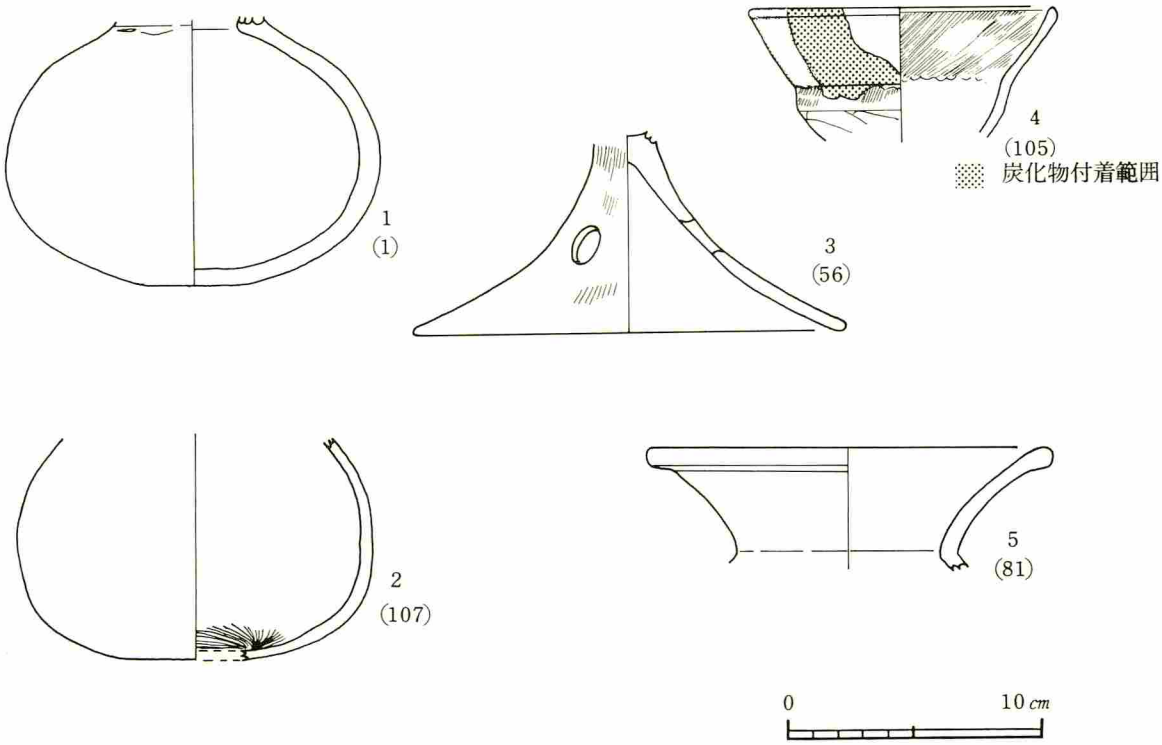
土壙と遺物

1号土壙　土器、石器が集中して出土した。特に土器が出土した土壙はここだけである。土器は、前述した弥生式土器口縁部をはじめ、S字状口縁をもつ台付甕が、完形品と破片で11個体分、小型丸底壺が2個体分、壺が1個体分、高坏が1個出土した。この内、第20図完形の台付甕№1の中に№3が入れ越しになっていたので、特殊な土壙に集中して遺物を捨てたものであろうか。

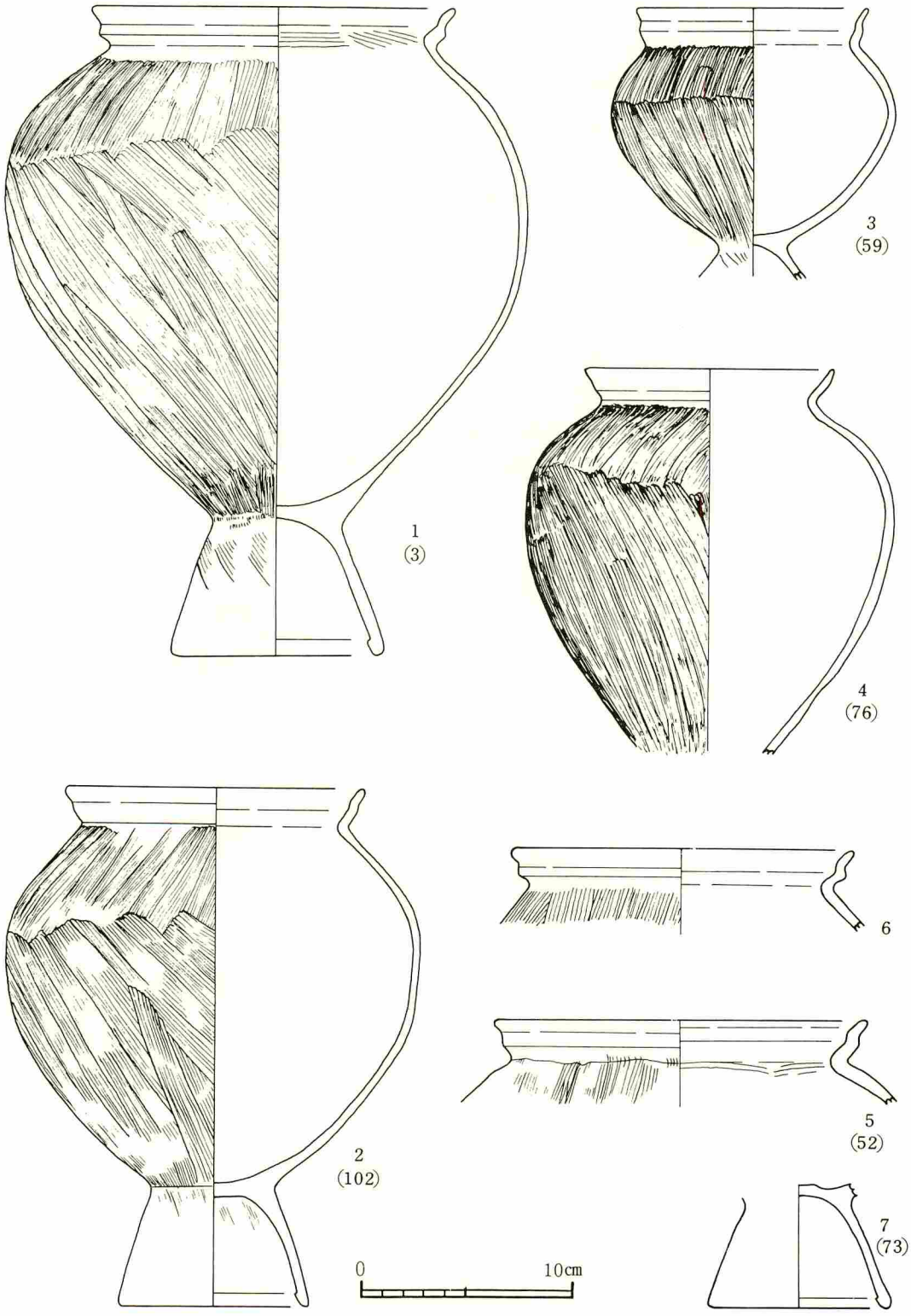
石器は最も多く出土している。すべて自然石をそのまま使用していて、そのうち7個は長円形を呈し、突端に打撃痕がある。石質は安山岩系と硬砂岩である。No.6は3面が研磨された砥石で安山岩系である。No.9は花崗岩の丸石である。また前述した棒状木器が伴出した。岩系のものである。No.117は花崗岩の丸石である。また前述した鍬の柄形木器が伴出した。

2号土壙　1号土壙の北に並びほぼ同大である。ここからは4個の石器が出土し、このうち2個は、1号土壙出土と同形の槌で石質は安山岩系である。No.2は1面がよく研磨された石器、No.4は破片である。

3号土壙　南端にあって、その1部は県道の下になっていたため調査不可能であった。ここからは2個の石器と一本の木器が出土した。No.2は前述したと同様な槌、No.3は両面がよく研磨された石器である。木器は片方に鋭利な刃物で造った頭があり、くびれ部を境に他は自然木のままで、他の一端は折損したらしい痕がある。現状97cmの有頭木器であり、同形のものが登呂遺跡から出土している。この木器はPEG含浸処理法によって保存処理をした。

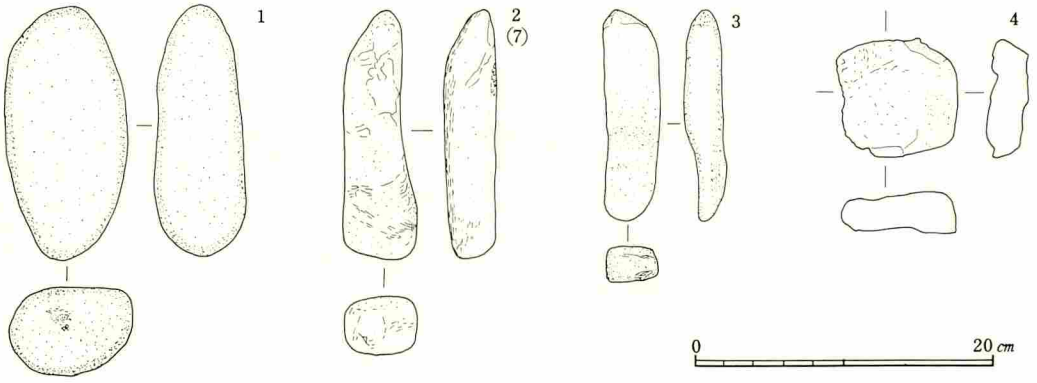


第19図　1号土壙出土遺物実測図

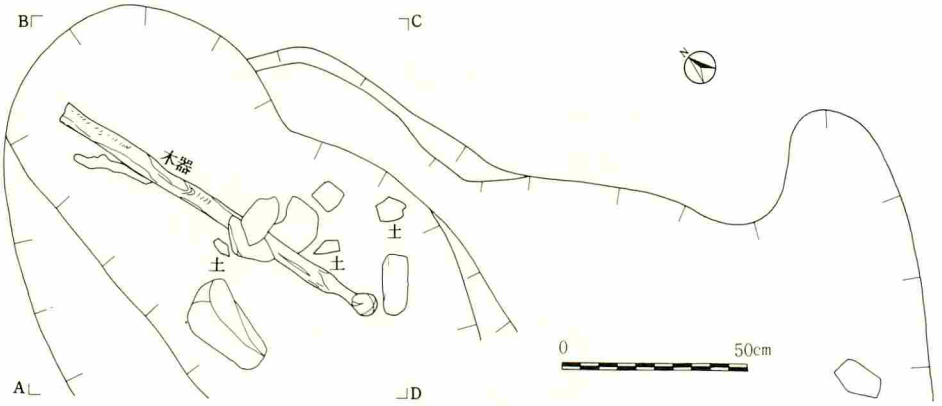


第20図　1号土壙出土遺物実測図（1：30）

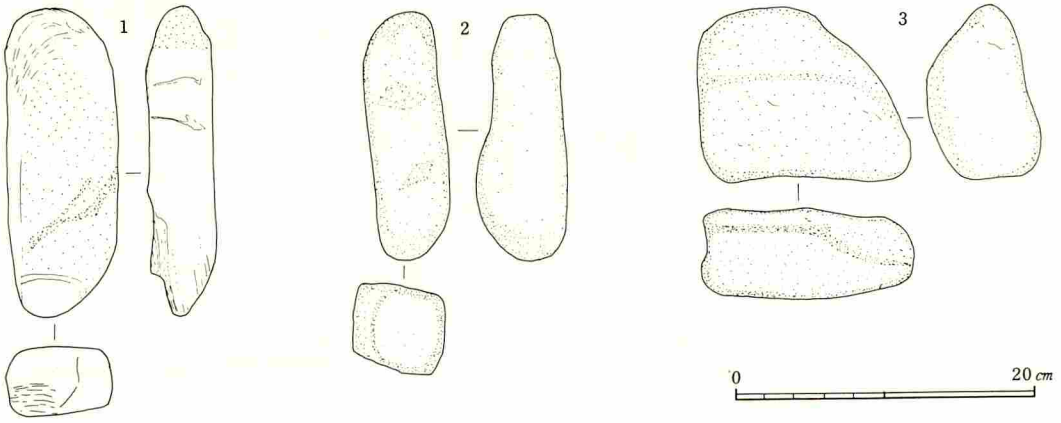
第21図　1号土壙出土遺物実測図



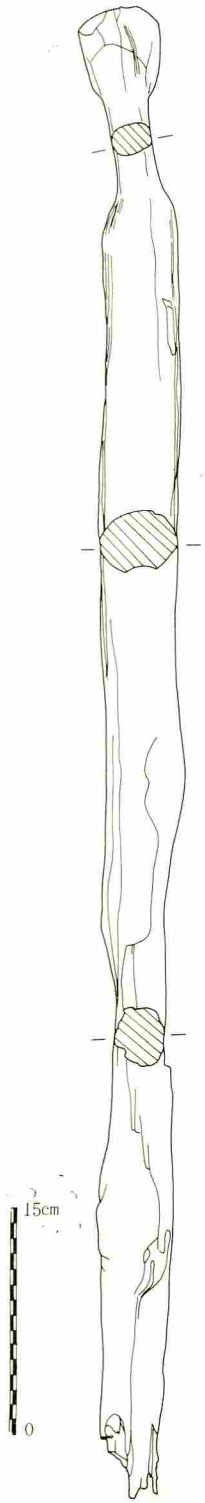
第22図　2号土壙出土遺物実測図（1：5）



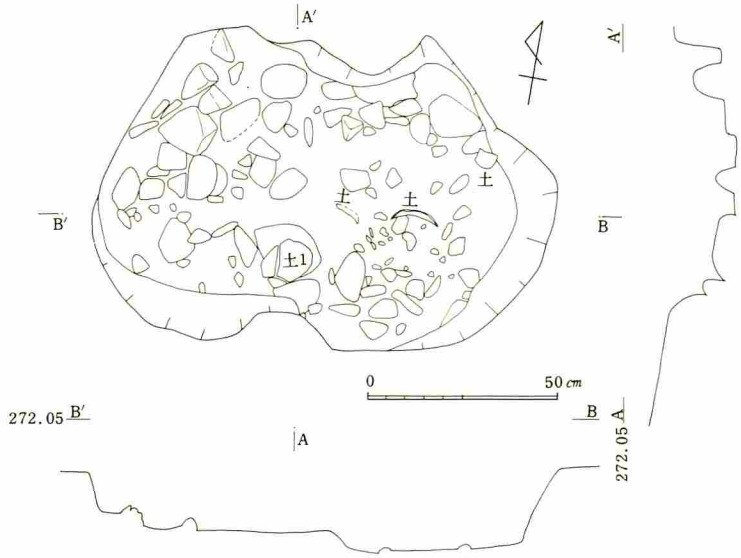
第23図　3 号 土 壙 実 測 図



第24図　3号土壙出土遺物実測図（1：5）

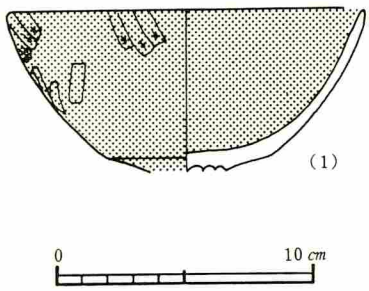


第25図　3号土壙出土木器実測図



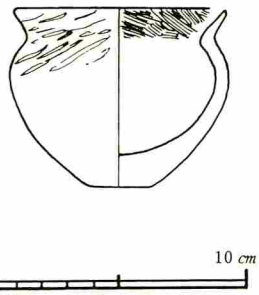
第26図　4号土壙実測図

4号土壙　遺跡南西部にあって、独立した土壙である。他に比較して浅く、不整形を呈する。ここから出土した高坏の坏部の破片は内・外面とも赤色顔料が塗付されている。五領式期のものであろう。



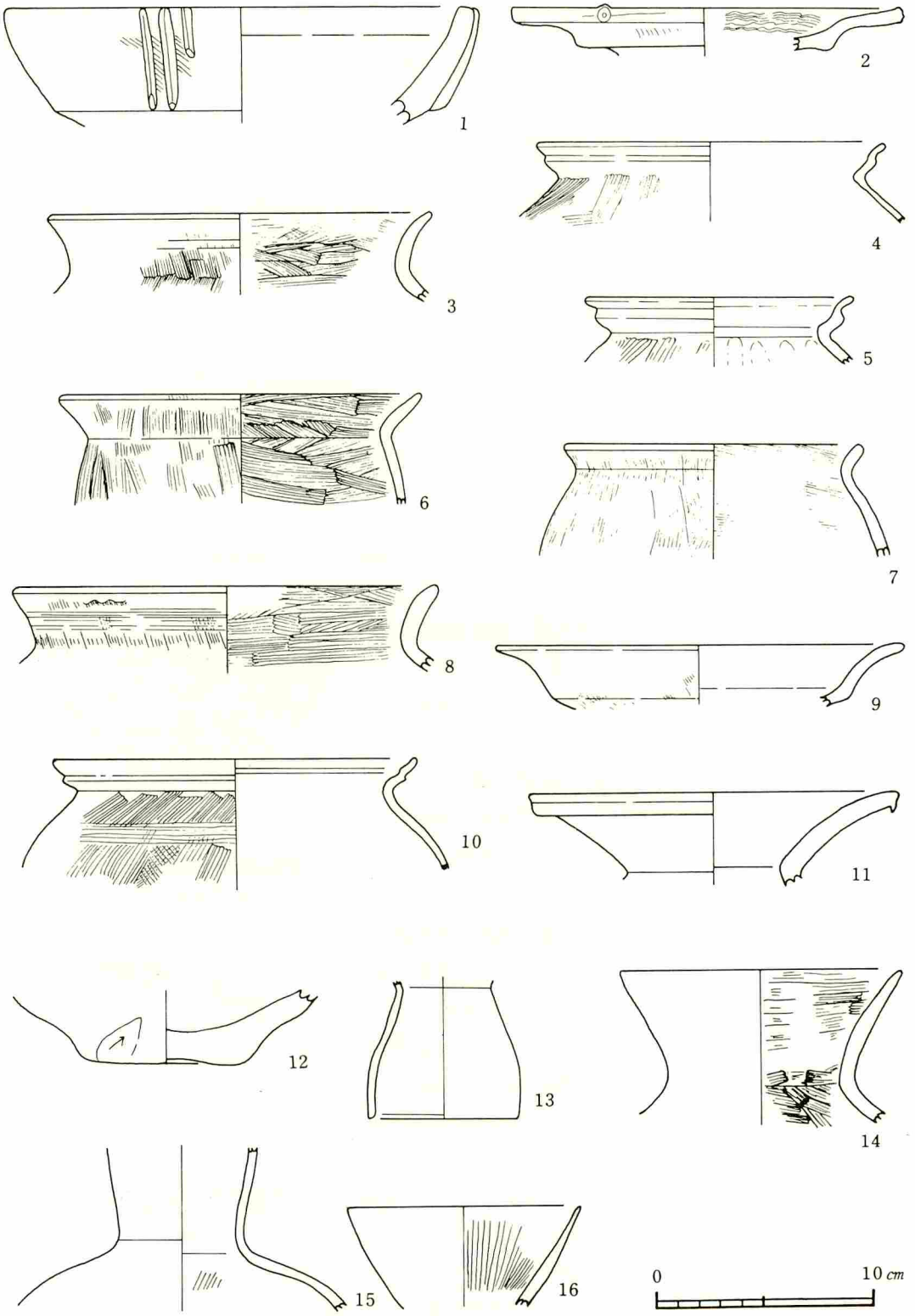
第27図　4号土壙出土遺物実測図

5号土壙　遺跡中央西部にあって、独立した土壙である。他に比較して浅く、円形を呈する。この底端から検出した土器群の中の一つが第28図の小型壺である。小さい底があるので五領期の後半に比定出来よう。



第28図　5号土壙出土遺物実測図

この他に27基の小ピットを検出した。これらは、弥生・古墳時代の遺構と掘込面は同一レベルである。中には柱穴らしい感じのものもあったが、その目的は明らかに出来なかった。



第29図　掘立柱建物址付近出土遺物実測図

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm)(口径/器高/底径)	調整 口縁	調整 外面	調整 内面	調整 底	胎土 色調 焼成	備考
第202図	1号土壙	土師	台付甕	14.0 23.7 9.0	S字形	口縁部横ナデ 胴部2段の刷毛目 脚部刷毛目	口縁部横ナデ 胴部ナデ、脚部指押え、刷毛目		砂粒を含む 暗褐色 良好	
〃3	1号土壙	〃	〃	10.8 — —	〃	〃	〃		砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃4	〃	〃	〃	12.6 —		〃	〃		〃	
〃5	〃	〃	〃	17.4 — —	S字形	口縁部横ナデ 胴部刷毛目	口縁部横ナデ 胴部ナデ		〃	
〃6	〃	〃	〃	16.0 — —	〃	〃	〃		砂粒を含む 白褐色 良好	
〃7	〃	〃	台付甕 脚部	— — 8.6		斜位刷毛目	指押え 刷毛目		砂粒を含む 赤褐色 良好	
第271図	4号土壙	〃	高坏 坏部	14.0 — —		横ナデ 篦磨き	口縁部横ナデ 横刷毛 ↓ 篦磨き		緻密 暗褐色 良好	赤色顔料一部剥落
第281図	5号土壙	〃	小型 丸底壺	8.3 6.8 2.6		篦削	斜位刷毛目 篦ナデ		砂粒を含む 赤褐色 良好	
第291図	8Aグリッド 2層	弥生	壺	22.0 — —	複合口縁	口頸部に棒状浮文が3本貼付 刷毛目	ナデ		砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃2	〃	〃	〃	18.0 — —		口縁部横ナデ6〜7㎜幅の凸状の飾りが貼付 頸部横刷毛篦ナデ	7条の波状文あり		砂粒を含む 黒褐色 良好	
〃3	〃	土師	台付甕	18.0 — —	薄長	口縁部横ナデ 縦刷毛目	交互の刷毛目		砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃4	8Aグリッド	〃	〃	16.2 — —	S字形	口頸部横ナデ 胴部横斜位刷毛目	篦ナデ		砂粒を含む 褐色 良好	
〃5	〃	〃	〃	17.0 — —	S字形	口頸部横ナデ 胴部縦刷毛目	横刷毛目		砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃6	8Aグリッド 2層	〃	〃	13.0 — —	薄長	口頸部横ナデ 胴部斜位刷毛目	指頭痕あり		砂粒を含む 褐色 良好	
〃7	〃	〃	〃	20.0 — —	〃	口縁部横ナデ 頸部から胴部に縦刷毛目	斜位刷毛目		〃	
〃8	〃	〃	〃	14.0 — —	〃	〃	横刷毛目		〃	
〃9	〃	〃	〃	17.0 — —	〃	口頸部横ナデ 胴部縦刷毛目、肩部に1条の刷毛目	口頸部横ナデ		砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃10	〃	〃	高坏	19.0 — —	S字形	口頸部横ナデ 刷毛目→ナデ	〃		砂粒を含む 褐色 良好	
〃11	〃	〃	壺	17.0 — —	折り返し	横ナデ ↓ 篦磨き	刷毛目 ↓ 篦磨き		砂粒を含む 黄褐色 良好	
〃12	〃	〃		— — 6.7		斜位篦削	剥落多し		緻密 褐色 良好	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(cm) 口径/器高/底径	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
第81図	1号土壙	弥生	壺	18.4 — —		口縁部横ナデ 頸部縦刷毛目 肩部に櫛歯状工具による波状文ありボタン状突起2ケ	口頸部刷毛目 篦削 胴部斜位刷毛後半スリケシ		砂粒を含む 褐色 良好	
第91図	6号溝	弥生	〃	26.0 — —	4.5cm長さの粘土貼隆帯が布	口縁部刷毛目 ↓ 篦ナデ	ナデ		〃	
第111図	SB—1	土師	台付甕	16.8 — —		口縁部横ナデ 胴部刷毛ナデ	口縁刷毛ナデ 篦削		緻密 茶褐色 良好	
〃2	〃	〃	甕	16.0 10.0 4.0		縦刷毛目 ↓ 篦刷	横刷毛目 ↓ 篦刷	中心に穴あり	細かい砂粒を含む黄灰褐色 良好	内、外面とも煤付着
〃3	SB—1 上層	〃	坏	13.4 4.8 7.2		篦磨	篦磨			
〃4	SB—1	〃	器台	8.0 8.1 10.2		坏部は横ナデ頸部篦削 脚部横ナデ	指頭掻痕		緻密 褐色 良好	脚部に4個の円孔を穿つ中央貫通孔
第141図	3号溝	〃	台付甕	11.4 21.0 7.8	S字形	口頸部横ナデ胴部2段の刷毛目 脚部刷毛目	口頸部横ナデ 胴部ナデ、脚部指ナデ、折り返し		砂粒を含む 褐色 良好	
〃2	〃	〃	〃	12.0 — —	〃	口頸部横ナデ 胴部刷毛目	口頸部横ナデ 篦磨		砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃3	〃	〃	〃	12.6 — —	〃	〃	〃		砂粒を含む 褐色 良好	
〃4	〃	〃	小型丸底壺	10.6 — —		ナデ	ナデ		緻密 褐色 良好	
第151図	4号溝	〃	器台	10.2 — —		横ナデ 脚部篦削	ナデ 放射状暗文 脚部指頭掻痕	中央部貫通孔	緻密 褐色 良好	
第181図	5号溝	〃	台付甕	16.0 — —	S字形	口頸部横ナデ 胴部2段刷毛目 脚部刷毛目	口頸部横ナデ 胴部篦ナデ		砂粒を含む 暗褐色 良好	
〃2	〃	〃	壺	— — 7.2		刷毛目 ↓ ナデ	刷毛 上・下部細目12本 / 中央部太目8本		砂粒を含む 褐色 良好	
第191図	1号土壙	〃	小型丸底壺	— — 4.0		刷毛目 ↓ 篦ナデ	ナデ		緻密 赤褐色 良好	赤色顔料？
〃2	〃	〃	〃	— — 4.9	斜位篦ナデ	上部斜位篦ナデ 下部斜位刷毛目	内面中心から斜位上に放射状に刷毛		〃	
〃3	1号土壙	〃	高坏脚部	— — 17.4		刷毛目 ↓ ナデ	横篦磨き		緻密 褐色 良好	胴部に3個の円孔を穿つ
〃4	〃	〃	小型丸底壺	12.1 — —		刷毛目 斜位篦削	口頸部斜位刷毛目 胴部放射状暗文 回転ナデ		〃	外面の一部に炭化物付着
〃5	〃	〃	壺	16.0 — —		口縁部横ナデ 篦磨	ナデ 横篦磨き		〃	
第201図	1号土壙	土師	台付甕	17.4 29.7 9.4	S字型	口縁部横ナデ 胴部2段の刷毛目 脚部刷毛目	口縁部横ナデ 胴部ナデ、脚部指押え、刷毛目		砂粒を含む 暗褐色 良好	

挿図番号	出土地点	種類	器形	法量(mm) 口径/器高/底径	調整 口縁	外面	内面	底	胎土 色調 焼成	備考
第2913図	8Aグリッド	土師	台付甕脚部か	7.0 — —		刷毛目→横篦磨き	横篦磨き		砂粒を含む 褐色 良好	
〃14	8Aグリッド	土師	壺	12.8 — —		縦刷毛目 ↓ ナデ	口頸部横刷毛目 胴部斜位刷毛目		砂粒を含む 黄褐色 良好	
〃15	〃	〃	〃	— — —		篦磨き	指圧痕あり ↓ 篦磨き		砂粒を含む 茶褐色 良好	
〃16	8Aグリッド 2層	〃	〃	11.0 — —		〃	放射状暗文		3㎜程の小石を含む 褐色 良好	

第2表　侭ノ下遺跡出土の種核

番号	種核名	遺物出土遺構またはグリッド	巾 Wide	長 Long	厚 Thick	L／W	備考
1	オニグルミ	TP—17	2.25	2.85	1.00	1.27	半分
2	モモ	TP—22	1.95	2.60	1.63	1.33	自生、側下部に傷がある
3	モモ	TP—22	1.95	2.17	1.48	1.11	自生、虫咬痕
4	モモ	TP—22					自生、炭化、欠損
5	モモ	TP—22	2.09	2.42	1.69	1.16	自生
6	ヒメグルミ	TP—22					自生、炭化、欠損
7	ヒメグルミ	TP—24	2.07	2.26	0.75	1.09	欠損
8	モモ	6AG　3層	2.12	2.44	1.70	1.15	自生
9	モモ	9BG　2層					自生、欠損
10	モモ	9BG　2層No.12	2.21	2.52	1.73	1.14	自生
11	モモ	9BG　2層	1.99	2.52	0.73	1.27	自生、半分
12	モモ	TP—19	2.09	2.33	1.76	1.11	21.
13	モモ	TP—19		2.42	1.26		半分、虫咬痕
14	クルミ	TP—19		3.37	1.30		半分、側面欠損
15	クルミ	TP—19	1.84		0.99		半分、底部欠損
16	ヒメグルミ	TP—19	2.21	2.80	0.77	1.27	半分
17	ヒメグルミ	TP—19	2.39	2.55	0.78	1.07	半分
18	モモ	TP—24	1.56	3.36	1.03	2.15	欠損
19	モモ	TP—24		3.30	0.87		欠損
20	クルミ	TP—30	2.43	2.84	1.09	1.17	半分
21	クルミ	TP—30	2.31	3.03	1.16	1.31	半分
22	クルミ	TP—30			1.08		半分、底部と側面が欠損
23	クルミ	TP—30		2.98	0.97		半分、欠損
24	クルミ	TP—30	2.40		1.27		半分、欠損、炭化
25	クルミ	TP—30		2.84			半分、欠損、炭化

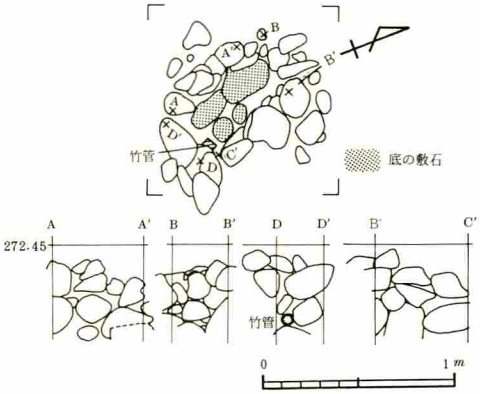
（注）1～11　市河三次教授鑑定

第３節　中・近世の遺構と遺物

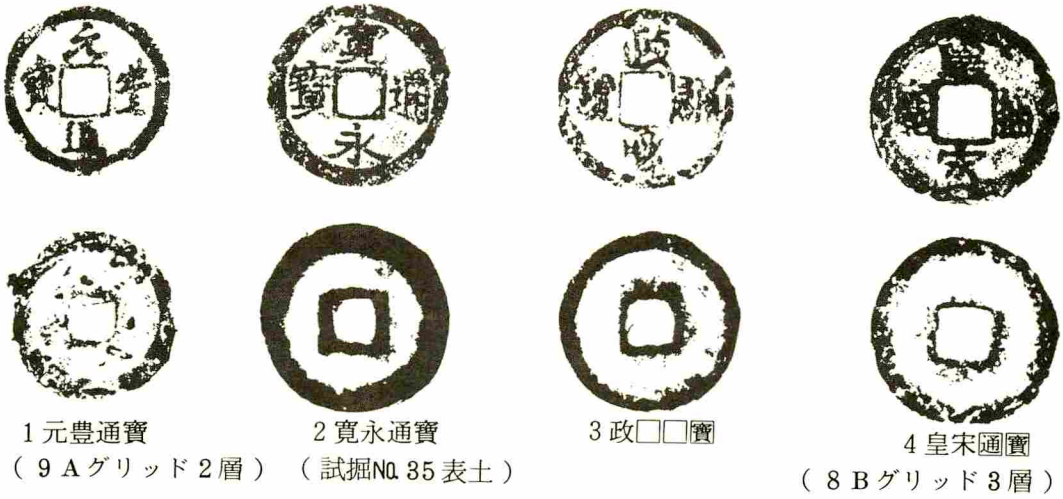
遺構から伴出した遺物は、染付の一口茶碗下半分が１個だけであったので、確実な時代判定は困難である。中世末から近世にかけての遺物と推定して取り扱うこととする。グリッドから出土した陶磁器もこの頃のものであろうか。

１号溝　発掘区の北端にあって１号井戸状遺構に連結している。溝の幅は広い所で180㎝、狭い所で80㎝で、深さは30㎝～40㎝である。その形態は、全体的にV字状で、中段があり、テラス状となっており、底にはすべて葦状の植物が束ねて入っており、中間に２か所杭と板で土留状の施設がある。１号井戸状遺構が下流となっていて、これと140㎝の竹筒で連結している。以上の状況から明渠であったと考えられ、１号井戸状遺構に水を流す施設とみられる。遺物は染付の底部破片が１個出土しただけであるが、これによって溝の使用時期を一応中世末から近世にかけてのものと推定した。

１号井戸状遺構　１号溝に連結する。自然石を井戸状に積み上げ、その深さは50㎝、南北50㎝、東西30㎝の長方形を呈し、底には石が敷いてある。機能は確定出来ないが、排水施設か貯水施設であろう。使用時期は１号溝と同じである。



第30図　１号井戸状遺構実測図（1：40）



１元豊通寶
（９Ａグリッド２層）

２寛永通寶
（試掘No.35表土）

３政□□寶

４皇宋通寶
（８Ｂグリッド３層）

第31図　銭　貨　拓　影

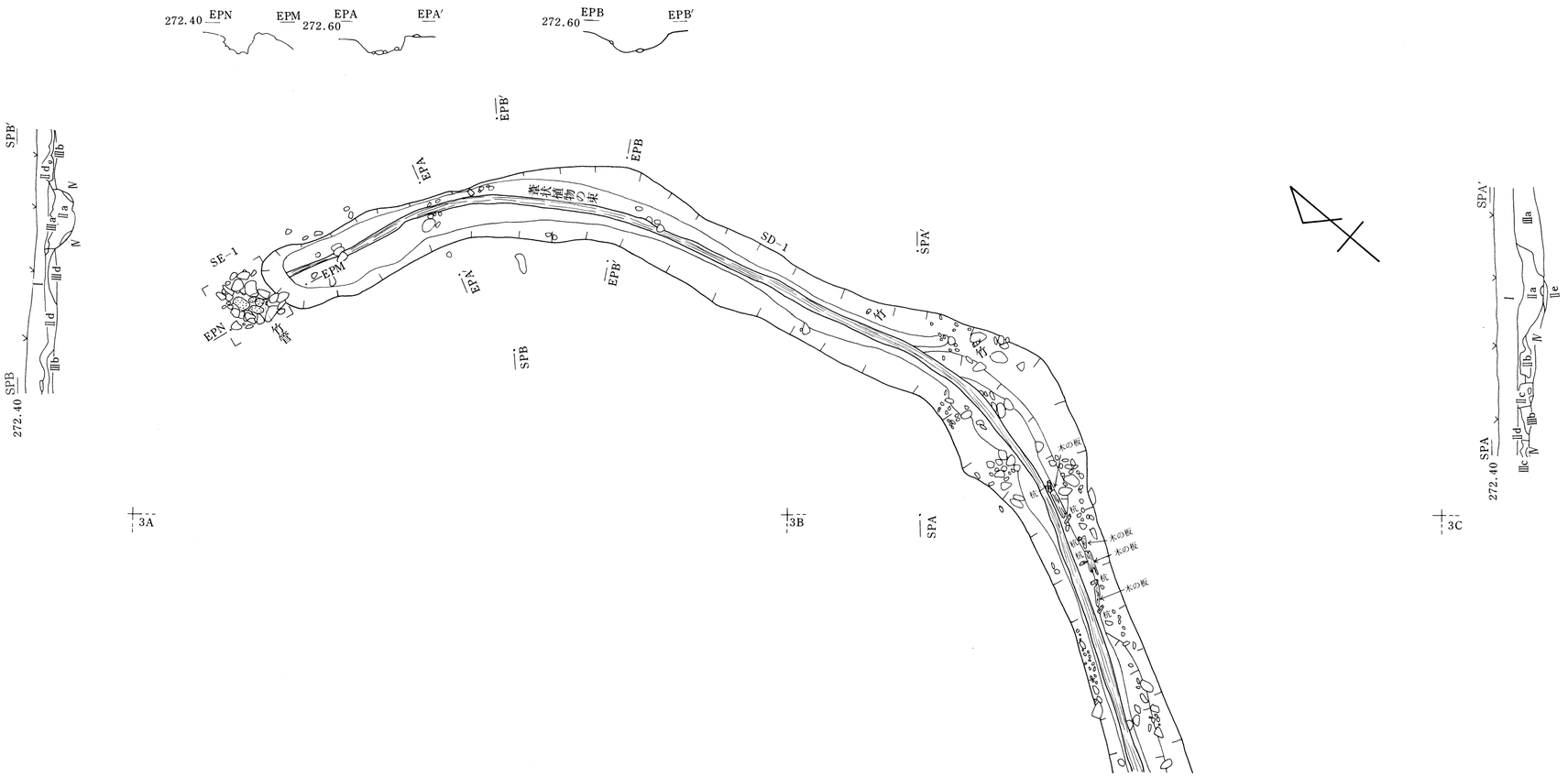
第5章　ま　と　め

沢の下遺跡は甲府盆地東部に広がる浅川扇状地扇端に営まれた本県弥生時代終末から古墳時代の初頭にかけての集落遺跡である。

遺構は主に竪穴住居址1軒、掘立柱建物址1棟や多数の土壙や溝などが検出され、ここから五領式土器のⅠ・Ⅱ型式と極めて少量の前野町式土器や多数の石器、登呂遺跡などで出土したものと同形の有頭木器が発見された。発掘区の西（下）方からは農耕中2ケ所から土器が出土したことがあり、また遺物も散布しているので、集落の中心は西にあると考えられ、範囲は地形等から推察すると、東西に長い自然堤防上100mくらいに広がっているであろうか。遺物について特記すると、土器形態は東海地方の影響が多く見られ、石器はほとんど自然石を利用していて、磨痕、たたき痕のあるものばかりで占め多量である。

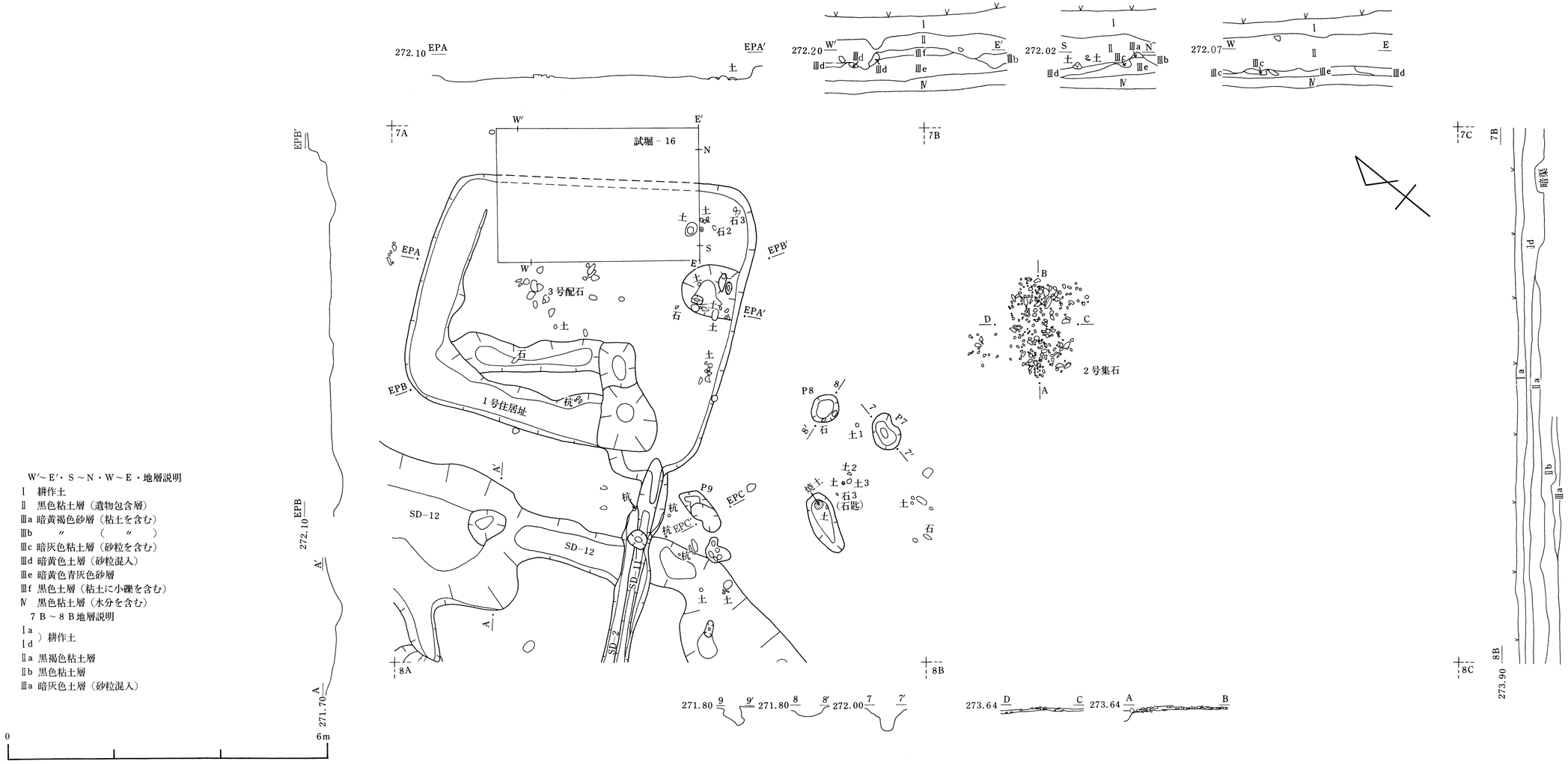
本県の弥生時代末期から古墳時代初期の遺跡は近年10指を数える程発掘され、古墳時代初期の五領式土器の編年はほぼ確立された。一方古墳の編年も一般化され、初現期の中道町小平沢古墳は4世紀台中葉といわれている。しかし五領式土器と古墳との年代関係、その絶対年代に関する資料は未だ充分整ったとはいえない。今後の課題となるところであろう。

第32図　保ノ下遺跡2A・2B・3Bグリッド平面図
（1:60）

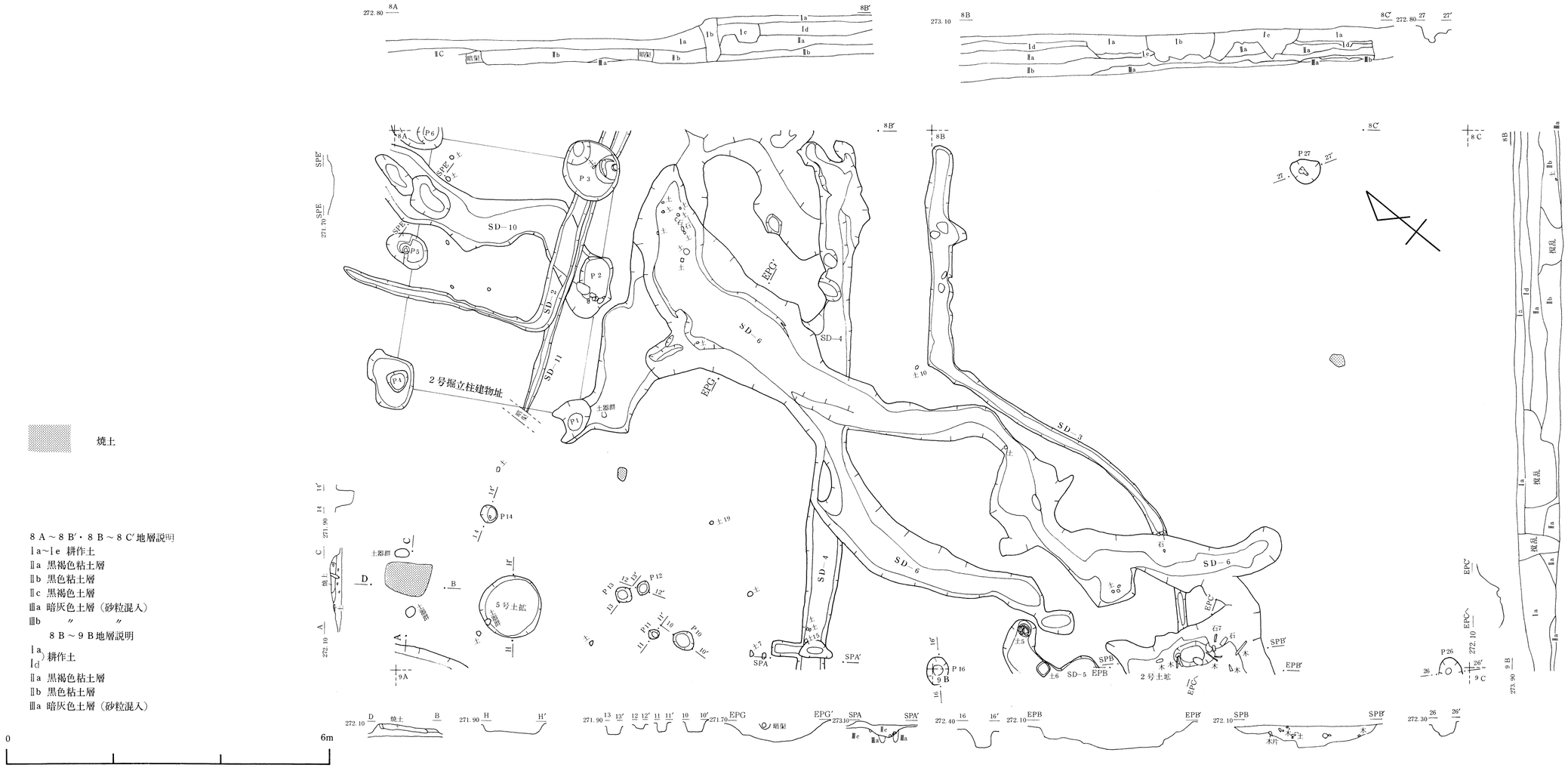


Ⅰ　耕作土
Ⅱa 灰褐色粘土層（砂・小石を含む）
Ⅱb 暗灰色土層（腐食土をブロック状に含む）
Ⅱc 灰黄黒色土層（暗渠の埋戻の土）
Ⅱd 黒褐色砂層（粒子が粗く，泥炭をブロック状に含む）
Ⅱe 灰褐色砂層
Ⅲa 黄灰色砂層（鉄分を含む）
Ⅲb　〃　（鉄分を含まない）
Ⅲc　〃　（粒子が粗い）
Ⅲd　〃　（粒子が細い）
Ⅳ　黒色泥炭層

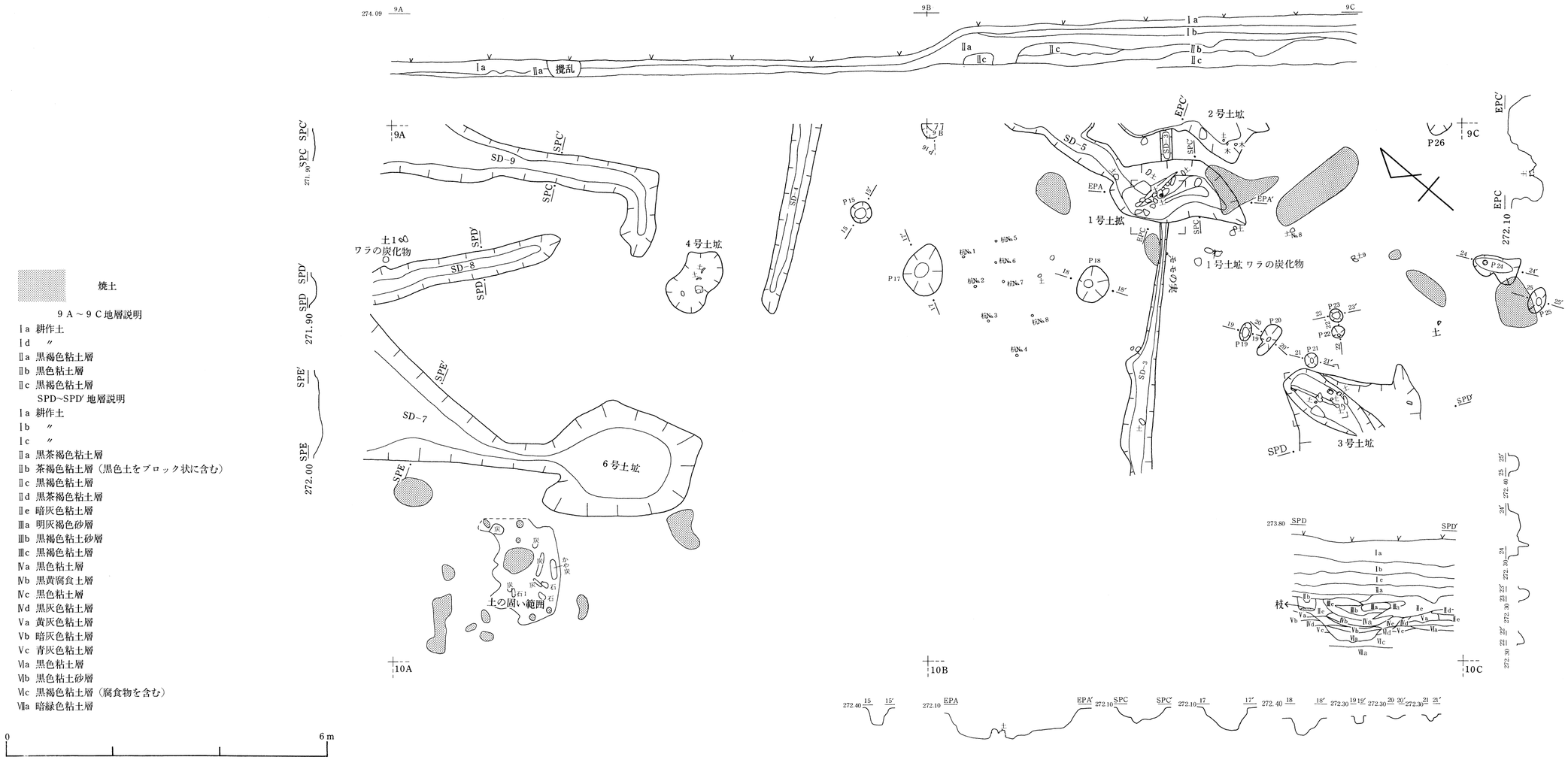
0　6m



第33図 侭ノ下遺跡7A・7Bグリッド平面図（1:60）



第34図 伊ノ下遺跡8A・8Bグリッド平面図（1：60



第35図 侭ノ下遺跡9A・9Bグリッド平面図（1:60）

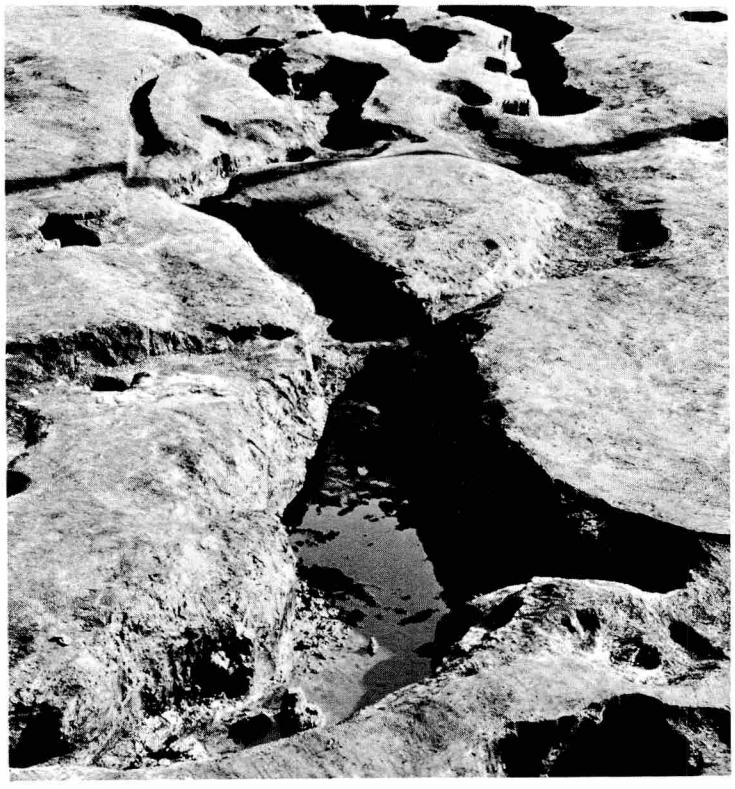
図　　版

図版 1

全　　景

1 号 住 居 址

2号掘立柱建物址



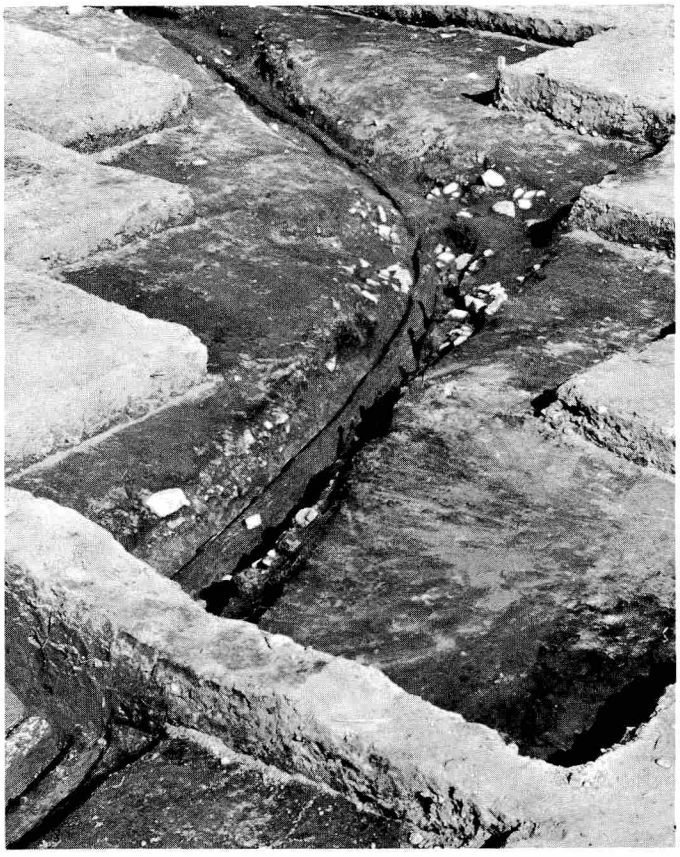
6　号　溝

1号土壙土器出土状況(1)

1号土壙土器出土状況(2)

1号土壙土器出土状況(3)

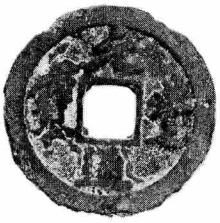
3号土壙遺物出土状況



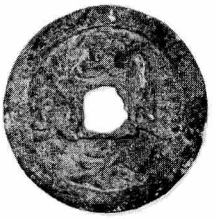
1　号　溝

1号井戸状遺溝

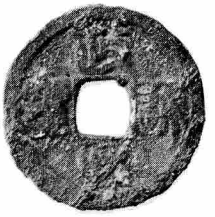
9 AG　炭化物をともなう焼土



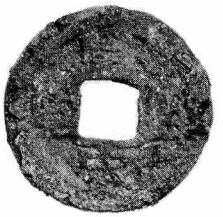
1



2



3



4

8

10

11

出土銭貨と種核

図版7　出土遺物

1

2

3

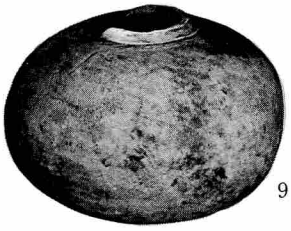
4

5

6

7

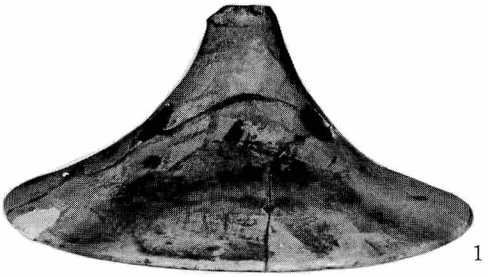
8


9

10

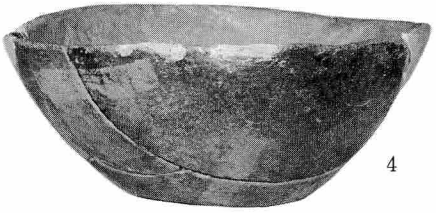
1号住居址(1～2)　3号溝(3)　5号溝(5)　1号土壙(6～10)

図版8　出土遺物

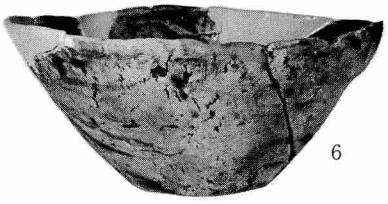

1

2

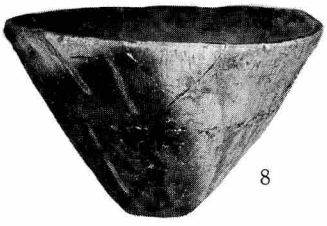
3

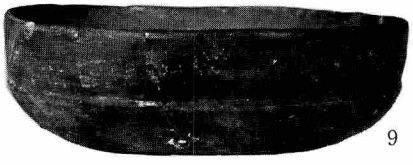

4

5


6

7


8


9

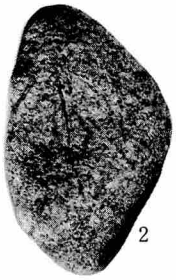
1号土壙(1～3)　4号土壙(4)　6Aグリッド(5)　7Aグリッド(6～8)　8Aグリョド(9)

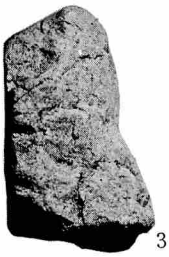
図版9　出土遺物

1号住居(1～4)　6号溝(5～6)　4号溝(7)　2号土壙(8～10)

図版10　一号土壙出土遺物

1


2


3

4

5

6

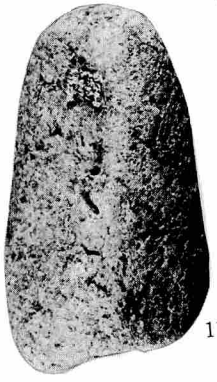
7

9

12

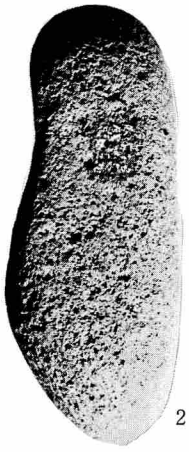
8

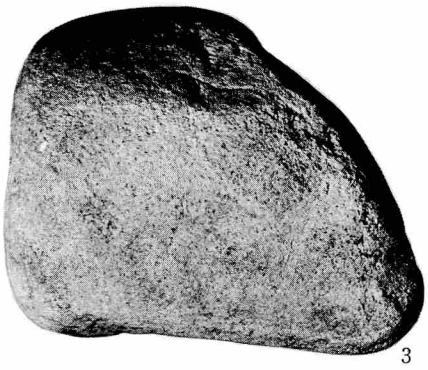
10


11

図版11　出土遺物

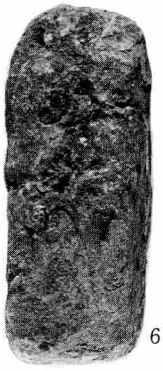
1


2

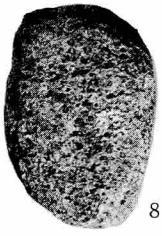

3

4

5


6

7

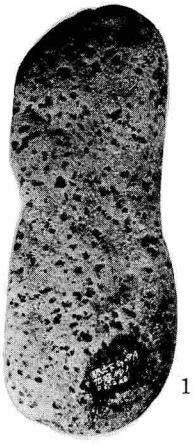

8

9

10

3号土壙(1〜3)　7Aグリッド(4〜5)　8Aグリッド(7、7、9、10)　9Aグリッド(8)

図版12　出土遺物


1

2

3

4

5

6

7

8

9Aグリッド(1〜2)　9Bグリッド(3、5、6)　13グリッド(4)　1号集石(7)　3号土壙（8）

昭和59年３月31日　印　刷
昭和59年３月31日　発　行

石橋条里制遺跡
蔵福遺跡
侭ノ下遺跡

山梨県中央自動車道
埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書

発行所　山梨県教育委員会
日本道路公団
印刷所　合資会社ヨネヤ印刷